
IS インフィニット・ストラトス～偽りの翼～

しるく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス〜偽りの翼〜

【Nコード】

N7556R

【作者名】

しるく

【あらすじ】

世界で唯一ISを動かせる男子織斑 一夏。
当然周りは女子だらけ。

織斑 一夏を中心に巻き起こる騒動の日々。

そんなIS学園にアメリカで発見されたもう一人のISを動かせる男子

アルデイ・サウスバードが転校してくる。

そんな彼は、嘘つきだった。

しかし、嘘は様々な真実を内包しながら

彼の運命を大きく変えていく・・・。

原作の強さとは何かを私しるくなりに考えて、

展開してアルディの成長を旨く書いて行ければと思っています！

感想などございましたらご自由にどうぞ！

くプロローグ

アメリカ合衆国。

世界のすべてに影響力を持つ世界の中枢とも呼べる自由の国。

日差しがまぶしく照りつける空港で、一人の少年が今まさに一人の女性に見送られ、

日本へ飛び立とうとしていた。

一人はショートヘアの金髪に蒼眼を持つ、まあまあ普通の顔立ちにサングラスをかけ、

白のパーカーとジーパンというラフな組み合わせ。そして大きなキヤスター付きの旅行鞆を携えている。

そしてもう一人は、金髪は同じだが綺麗なロングヘヤーに深い緑色の瞳をもち、紺色のスーツを着こなす綺麗な女性だ。

「アルディ、本当に忘れ物は無い？」

「姉さん、大丈夫だよ。それに、最悪パスポートさえあれば、入国は出来るしね」

彼の名前はアルディ・サウスバード。これから日本へと旅立つ少年。

そして、もう一人の見送りの女性は、ローラ・サウスバードだ。アメリカでは結構な有名人である。

ま、なぜかは追々。

「フフッ、あなたらしいわ、まあせいぜいがんばってらっしゃい」

「僕の苦手な事ベストスリーに入る事だねそれは」

アルディはククツツと笑うと、パーカーの前ポケットからフライト

チケットを取り出す。

それと同時に、空港内にアナウンスが響いた。

? I s t a r t 0 0 3 f l i g h t s o f A l l N i
p p o n A i r w a y s b o a r d i n g p r o c e d u r
e . T h e e m b a r k a t i o n p l a n n e d v i s
i t o r c o m e t o t h e t h i r d i n t e r n a
t i o n a l a i r l i n e g a t e . ?

(全日空003便搭乗手続きを開始いたします。ご搭乗予定のお客様は、国際線3番ゲートまでお越しくください。)

アルディはそのアナウンスとチケットの便名を照らしあわせる。

そしてローラに向かって、微笑んだ。

「そろそろ時間みたいだね」

「そうね、行ってらっしゃい」

「うん、行ってくるよ」

そう言い残し少年は、歩き出す。

これから始まる事に、不安と期待を抱きつつ。

少年は日本へ飛び立った。

「プロローグ」(後書き)

はじめまして、しるくと申します。

本日よりISの二次創作を書かせていただきます！

感想などありましたら、是非ともよろしくお願いします！

第1話　嘘つき転校生

日本へ到着し、その日はホテルに泊まった。

フライト時間約10時間。

流石に疲れていたのか、チェックインして部屋に着いた後の記憶が無かった。

そして時刻は現在午前6時30。

今日は、初登校の日だった。

僕は、壁に立てかけてあった旅行鞆の中から、手続きの書類の入った封筒を引っ張り出した。

確かその中に、IS学園までのアクセス方法が書いてあったはずだ。………うん、大体読める。

良かったよ、向こうで辞書引っ張り出してローマ字表記書いといて。漢字は苦手………というかはつきりってわかんないんだよね、まだ。

日本ってどうして、こう漢字、英語、カタカナ………こんなに複雑な表記をしてるんだろう。ややこしいなあ。

と、まあそんなことを考えている間にも、時間は過ぎていくわけで。流石にね………初日から遅刻はまずいよね？

僕は、手早く荷物をまとめ旅行鞆に押し込むと、ロビーへ急いだ。

チェックアウト後、最寄りの駅から電車に乗る。

日本の鉄道って言うのはほんと時間に正確だよな。

僕の住んでた所にも鉄道はあるけど、平気で遅れてくるもんね。何のための、時刻表なのかと何度も思ったことがあるけど。

電車に揺られてしばらく。

学園案内に書かれていた、駅名を確認し電車を降りる。

さて……………。

これが僕にとっての最大の難所乗り換えだ。最後に降りる駅は分かっているんだけどね。どっち方面なのかが分からない。

さて……………どうしたものか。

路線図なんて見ても分からないし……………。

このままだと、本当に遅刻の可能性が出てきたな……………。幸い日本語は流暢に話せるが……………。

つて、僕の馬鹿……………。

降りる駅名の名前にルビがふられていない。

つまり……………読めない。

さ、最悪だ。

言葉が話せても、これじゃあね。

いよいよ、厄介だ。

駅員はどうやらいましたがたの時間帯は、総出で電車に乗客を詰め込んでいる。

この時間帯はラッシュアワーなのだ。

とても聞いたような雰囲気じゃないねえ。

すると、ふとどこからか声をかけられる。

「どうかしましたか？」

声の主は、黒い髪に整った顔立ちをした背の高い男子だった。

年齢はまあ、僕と同じぐらいかね。

「いや、うちちょっと迷っちゃってね」

「どこ行きたいんです？」

「ココのモノレール乗り場なんだけど」

僕は、学園案内に書かれているモノレール乗り場を指さす。

それを見た男子は、気さくな笑顔で僕を見ると心強い一言を言ってくれた。

「おんなじ方向ですね、案内しますよ」

偶然でもなんでも、丁度いいね、こりゃ。

「それじゃ、頼もうかな」

僕は彼に連れられて、ようやく電車の乗り換えに成功した。

ただ……もうこの国のラッシュアワーには乗りたくは無くなっ
たね。

更に電車に揺られること20分余り。

ようやく目的地に到着し電車を降りる。

駅を出ると、すぐ目の前に、モノレールの軌道が見えた。

アメリカではモノレールを見たことが無かったから、一本のレール
にぶら下がってゴンドラが移動する

姿は少し……いやかなり異様な光景だった。

「ココで、良いんですか？」

「うん、大丈夫だよ。ありがとう」

「そうですか、まあ良かったですよ役に立てたなら。それじゃ俺ち
よっと急ぐんで！」

最後まで気さくな笑顔を絶やさぬ彼を見送った後、僕はモノレール
に乗り込む。

モノレールってこんな感じなのか。

モノレールは振動も少なく乗り心地は快適だった。

でも、やはり軌道が上で下にぶら下がっているというのは不思議な
浮遊感を覚える体験だった。

窓の外をぼんやりと眺めていると、海上にせり出す形で建築された、
大きな近未来的な施設が顔をのぞかせる。

(これがIS学園か)

優秀なIS操縦者を育成するために作られた国立機関。

ここに集まってくるのは各国のエリート達。

ああ、僕は違うよ。僕の場合は？ISを動かせる男？ってことで

姉にも進められたけど、それ以前に気が付けば転入の手続きが終わ
っていて

今日からIS学園に行くっていう事が結構知らない所で決められてたからね。

まあでも、僕は別段それに関して反対とか反抗はしなかった。大事なものは？なんとかなるでしょ？の精神だ。

何しても、今日からこの生徒になるわけだからね。楽しまないよ。

モノレールを降り、正門付近まで歩いていくと、その建物の大きさがよくわかる。

特に中央の特徴的なタワーは本当に高い。

何をする所なのか、何もしない所なのかはわからないけど、とにかく中に入らずともその大きさに

少なからず圧倒されてしまう。

ここまでくれば迷うこともないと思っていたが、この大きさは予想外だ。

受付を探すだけでも一苦労過ぎる。

なんとかたどり着いたは良いものの結局、場所はここの、生徒に聞いた。

「すみません、転入手続きお願いしたいんですけど……」

言いながら僕は、封筒の中身を受け付けの女性に渡す。

受付の女性は、書類を見ながら、PCを操作していく。

ピアノを弾いているかのようになめらかにキーをタイピングしている女性。

ほどなくして、生徒手帳の発行やこの学園の詳細な見取り図などを渡される。

「寮の部屋割なんですけど、決まり次第担任の方からお話があると思いますので」

「ああ、そうですね」

「それと……その格好は」

女性が少し、怪訝そうに僕を見てつぶやく。

そこで初めて僕が、制服ではなくいつも通りのパーカーにジーンズというラフな格好であることに気が付く。元々アメリカの学校では特に決まった制服なんてのは無い。

その感覚が抜けきらないまま、何の疑問も持たずこの学園に来てしまったという事も確かにあるが、これには根本的な理由がある。

「その……僕の住んでた所に制服届いてないんですけど」

「……あれ？」

女性は僕の返答を聞くと、受付の奥の棚から何やら伝票の束を持ってきてパラパラとめくっていく。

そして少し語気を強めて僕に言い返してくる。

「いえ、ちゃんと送ってますよここに伝票もありますし」

「でも来てないんですけど……」

「カリフォルニア州のロサンゼルス宛てにちゃんと発送されて……」

「」

「へ、ロス!？」

ちよつと待ってよ……ロサンゼルスになんて住んでないよ……

一体どこへ送ってるんですか……

「あの、僕サクラメントなんですけど」

「……ロサンゼルスって州都じゃないんですか？」

ここは本当に、エリート養成学校なんだろうか。

双方の都市の距離約600?。

なんで間違える!

「私州都って大抵人が一番多く住んでるところだと……」

「とりあえずその考えを改めましょう、って言うかなんでそんな間違いが……」

「あなたのお姉さんからの電話の際に、カリフォルニア州の州都の市役所へ送っておいてと言われて……」

「らしい説明です」

姉さん……説明不足さが、素晴らしいよ。

いやだとしても、州都を間違えるかね普通。

PCでサーチしても簡単に出てくるよ。

とりあえずだ、今それを嘆こうが制服が届くわけではない。

予鈴の時刻も迫っていたから、僕はその話を切り上げ、その女性に連れられ職員室へと案内される。

ガラツと、職員室の扉が開かれると、一斉に注目が集まる。

そりゃ珍しいんだろうけど・・・ここまで見られるのもなあ。

というかこの学園、男の教師少ないね・・・。

まあ仕方ないのかもしれないけど。

そして案内された先に黒いスーツで決めた、鋭い眼光を放つ女性が一人。

「織斑先生、転校生をお連れしました」

「ああ、ありがとう」

ん・・・織斑？どこかで聞いたような・・・。

それではと言い残し、僕と織斑先生を残し女性は去っていく。

「お前が、転校生か」

「はい、アルディ・サウスバードです」

「ん？サウスバード？」

何か引つかかったのか、少し怪訝そうな顔でこちらを見やる。

「あの、何か？」

「いや、何でもなし。それよりお前制服はどうした」

「事務員のミスで今頃ロスでひとり旅しています・・・」

はあつとため息をつきボソリとまたか・・・とつぶやく織斑先生。

あの人何度も同じミスしてるんだ・・・。

「まあ良い、制服の件は、今日中に何とかしてやる。とりあえず教室へ向かおう」

僕は織斑先生に連れられて、いまだに周囲の教師陣から異様な注目を集める職員室を足早に後にした。

「少し待っている」

織斑先生は僕を、廊下で待たせて一人教室へ入っていく。

騒がしかった教室内が一気に静かになり、中からかすかに織斑先生の声がする。

「おはよう、諸君。既に一部では盛り上がっているようだが、転校生を紹介する」

その発表で、中から女子生徒の声で

「やっぱりくるんだー！」

「なになに、うちのクラスなの!？」

という騒がしい声がする。

「ええい、やかましい、いちいち騒ぎ立てるな馬鹿どもが、まった
く。おい入ってこい」

さてと、行きますかね。

転校生ねえ。

また女子なのだろうか。

いやまあ十中八九女子だろうけど。

俺、織斑 一夏はそう思い顎をついた。

ただまあ、これ以上女子が一人増えても何も変わらない。

やまで！既に彼のHPはゼロよ！状態なんだ。

千冬姉……いや、織斑先生が呼ぶと同時に教室のドアが開かれ
転校生が現れる。

だがそれは、女子では無かった。

学園に不釣り合いな白いパーカーとジーパン傍らには大きな旅行鞆
を転がしている。

俺もだが、周囲の女子も唾然となっている。

っていうか、あいつ！

向こうもこちらに気が付いたらしい、少し驚いた顔でこちらを一瞬見たが気にせず自己紹介を始めた。

「アメリカ、カリフォルニア州出身、アルデイ・サウスバード。どうぞよろしく」

流暢な日本語ですらすらと、自己紹介をするアルデイ。

一通り、自己紹介を終えると再び女子達が声を上げた。

「アメリカ人！それに男の子だ！」

「織斑君とはまた違うタイプそうだよね！」

「でもなんで制服じゃないんだろっ・・・？」

「アメリカって私行ったことないんだ」

「・・・最後のほうなんだ、関係あるか？」

そしてお決まりと言えはお決まりだが、騒いだ女子を一人残らず出席簿でたたいていく千冬ね・・・

「織斑先生だ、少しは学習しろ」

「・・・すみません」

なんでこう俺の考えは漏れるかね。

「それと織斑、アルデイの面度を見てやれ、この学園に慣れていないしな、日本の生活にもだが」

「え・・・あ、はい。分かりました」

「よろしく頼むよ？」

ヒラヒラと手をこちらに手を振るアルデイ。

なんていうか、軽い奴だな。

「それでは、これでSHRは終わりだ！今日もしっかり勉学に励めよ、馬鹿ども！」

「あ、ちよつといいです？」

ビシッと締めた所に、言葉を挟むアルデイ。あいつは怖いもの知らずか。

織斑先生はそのアルデイを、顔を動かさずジロツと睨む。

そして、腕を組むと瞳を閉じ、何だ？と若干不機嫌そうに言う。

「僕の席が見当たらないんですが」

「ん？……」

「……あーしまったあー！！」

そう言えば昨日一つ机を運んどくように言われてたんだっただけだ……。

課題やらISSの事やらですっかり忘れていた……。

「織斑……」

千冬姉の鋭い眼光が俺を射抜く。名前だけ呼ばれたただけだが何を、言わんとしているかなどすぐに分かった。

「あ、あの……忘れてました」

スパアンツ！

当然の出席簿インパクト。あの出席簿ほんと鉄でも入ってるんじゃないか？

「はあ……机が無ければ話にならん！一時間目は……ふむ私の授業か」

千冬姉は、時間割を見やると、こちらに向き直りまた一つ大きなため息をついた。

「お前たち二人で、準備室から机をひとつ取ってこい」

「え！僕もですかっ！？」

ああ馬鹿！！

思ったが時すでに遅し……出席簿でたたかれるアルデイしかも2回。

「……分かったな？」

「……はい」

多分今のやり取りで、千冬姉の理不尽さはよく理解してくれたと思う。

俺は、立ち上がるとアルデイを連れて教室を後にした。

痛い・・・日本の教師って言うのはだれでもあんなに人をバシバシ叩くものなのかい？

・・・っていうか出席簿ってあんなに痛かったかなあ・・・。

僕もアメリカでは、昔先生に手でたたかれた事はあったけど、あれほど痛くは・・・。

「何にしても悪かったな、こんなことに付き合わしちまって」

織斑君が頭をかきながら気まずそうに謝罪の言葉を述べる。

「まあ、いいさなんとかなるんでしょ」

「そりゃそうだけどさあ」

「それより君、下の名前は？」

「え？ああ一夏だ」

イチカね。オリムラよりも呼びやすい。

「なら一夏と呼ばせてもらおう」

「ツフ、お好きなように」

少しおどける彼。

にしても偶然とは凄いものだね。

あの時駅であつた男子とこんなところで生徒として会えるなんて。

・・・そうだ思ひだした、織斑一夏・・・この前アメリカのニューヨークで、

トップニュースで取り上げられていた人物だ。

？世界で唯一ISを使える男子？ね。今となつては僕もいるから2人だけだ。

そして、あの担任織斑千冬・・・そうだ、どこかで聞いたと思つたら姉さんだ。

姉さんがしきりに千冬千冬言っていたのを思い出す。

あの時は、僕は「だれその人」状態だったけど・・・。

あの人が・・・。

「着いたぜ、こつから机を運び出すんだが……」

一夏の声に気が付き、考えをやめ顔を上げるとそこにはPCの機能やら何やらを丸ごと詰め込んだ

超が付く程重たそうな机が鎮座ましまししていた。

これを、教室まで運ぶのかい……。

僕は、今来た道を振り返る。

まあ教室は見えてはいるけど、目の前の机が見ただけで重いという事がわかるだけに、

この距離なら……という前向きな気分をへし折ってしまう。

「とりあえず運んじまおうぜ……遅いとまた千冬姉になんて言われるかわからん」

「そう言えば、織斑先生っていつもなんなの？」

「あんなっていうと？」

「うんいや、だからいつつもこんな感じで目釣り上げて、出席簿でたたくのかなと」

「ぶっ！アルディそれ目元似てたぞ！」

どうやら、僕のやった織斑先生の眼付の真似が似ていたらしい。

少し一夏のツボに入ったようだった。

……なるほど面白い。

「もっとやってあげようか？」

「くっくく……やめてくれ……笑いをこらえるのが大変なんだぞ……くくく」

「ほれほれ」

「や、やめー！」

「ほう、面白そうだな私にも見せてくれ」

「いいよ、ほらこう……」

この後2人とも回数忘れるぐらい出席簿でたたかれた。

なんだか色々、あつたけど初日って言うこともあり、

あつという間に授業は終わり放課後を迎える。

壇上では、織斑先生ともう一人、おっとりとしてどこかドジっ子そうな小柄な山田先生が立っている。

どうやら担任が織斑先生で、山田先生は副担任と言う立場らしい。織斑先生よりも、温和で近寄りやすい山田先生はすぐに女子たちと打ち解け楽しそうに話に参加している。

まあ織斑先生は、あのモンドグロツソの優勝者だもんねえ。

いくら担任とはいえ、気易く話しかけられないよね、呼ばれでもしない限り。」

「おい、サウスバード」

そんなことを、思ってるからか、呼ばれたよ。

僕は、これ以上出席簿でたたかれたくないので、素早くそれに反応した。

「なんででしょう?」

「お前の制服の件だ。一時間目の終わりにサイズを聞いただけだろう? あの後すぐに発注をかけた。今日の放課後には上がると言っていたからな、受付まで取りに行くように」

「わかりました、ありがとうございます」

「では、山田先生そろそろ」

女子と話の花を咲かせていた山田先生を呼び、教室を出ていく。

注目すべき対象が居なくなった女子達の眼は、必然的に転校生の僕に向くわけで。

不思議だったんだよね、今の今まで何も聞かれなかったことが逆に。まあ・・・聞いてほしくもないけど。

一瞬の静寂の後、ワツと一斉に僕を取り囲む。

「ねえねえ! アルディ君もES持ってるの?」

「そんなことより、あたしは趣味とかそっちのが聞きたいなあ」

「アメリカってどこ!？」

・・・ちよつと思っただけこのクラスに一人おかしな子がいるよ
うだ。

まあいいや、ふう。

「僕は持つてないよ、候補生でもないしね」

「持つてないの？織斑君は持つてるよ？ねえ、織斑君」

「ん？いやまだ来てないって」

苦笑いして女の子のパスを上手く受け流す。

来てないってことは、あれか。もうすぐ来るってことか。

ふうん。

で何だっけ。

「趣味はカラオケかな、と言っても邦楽ばかりだけど」

「え！？日本の曲歌えるの？」

「違うわよ、アルディ君から見て邦楽だから洋楽に決まってんでし

よ」

ああそっかと頭をかく女子。

まあよくありがちな間違いだろうか。

それで最後の質問は。

「アメリカは、海を挟んだ日本の隣の国だよ」

「おお！分かりやすい」

「ん？んん？隣？？海、ああ太平洋ね・・・隣って言うには離れ過

ぎてるような」

「でも隣でしょ」

「隣って言うならハワイとかじゃないの？」

「ハワイだって立派なアメリカの州の一つさ」

「そりゃそうだけど・・・？」

「いやだけど隣ってねえ」

「いいじゃん分かりやすけりゃ何でも！」

「・・・ふう、ま、こんな感じで良いかな。」

最後のあの抜けた質問のおかげで、その場を少し混乱させることに成功した僕は、

そんな彼女達を後目に教室を後にし、受付へ制服を取りに行った。

「……まさかここまで受付へ行くのがサバイバルとは思わなかった。」

それほど距離もないはずなのに、なんであんなに女子が……。僕はパンダ？

「いいえ、ケファイア……でもありません。」

「……これなんのCMだったかな。ま、いいや。」

僕は制服を持って一夏に教えてもらった、男子用のトイレで着替えを済ます。

割とサイズは適当に言ったんだけど、あながち間違っていないかったようだ。

「丁度いいサイズだね。」

着替えを制服の入っていた袋に入れ、教室に戻り片隅に置いてあった旅行鞆にしまう。

そして立ちあがって振り向くと、そこには綺麗な金色のロングヘアをたたえた

いかにも気品あふれる女子が立っていた。

「……あの、何か？」

「あなた、ひょっとしてあのローラ・サウスバードの弟ではありませんんこと？」

「ん？この人僕の姉を知ってるのか。」

まあそこは、嘘をつく必要もない、素直に肯定しよう。

「そうだけど」

「やっぱり」

その女子は、納得したようにうなずくとゆっくりとこちらを見やる。

「あの、いい加減自己紹介お願いできるかな……」

「……私を知りませんか？」

いきなりジト目でこちらを見てくる。

外見はお嬢様なのに、その目とのギャップが凄い。

「ああ、知らない」

「全くあの男といい、あなたといい私を知らないなんて、許されることではありませんわよ！」

「いや、そう言われても知らないものは・・・知らないし」

「あ、あなたねえ・・・」

ジト目を通り越して、目元が真っ暗で怒り心頭のオーラがあふれ出している。

そこまで自分を知ってなきや怒ることなのか？

「よろしいですか？ 私は入試主席にしてイギリスの代表候補生・・・」

「セシリア・オルコット？」

「そう、私はツ・・・!？」

「間違えたかな？」

多分僕は何も間違っていないと思うけど。

相手のハツとする顔が実に面白い。

そしてそのあと必ず決まって、なぜ知っているのかという顔になる。本当に楽しい。

「あなた、なぜ!？」

「いやだから、セシリアであってるんでしょ、名前」

「そう言うことではありません！あなた先ほど知らないと・・・
・・・嘘ですのね」

激昂を途中で区切り、一気に声のトーンが下がる。

怒りのボルテージも頂点を突破すると

誰でも、ドスの効いた低い声で相手を威圧するのはどこの国でも変わらないね。

僕はフツと口元を緩め、首をわざとらしく傾ける。

「やはり、あの人の弟だけありますわね」

「褒め言葉だね」

あの人とは、言わずもがな姉さんのローラ・サウスバードだ。

姉さんは担任の織斑千冬が優勝した第一回モンドグロッソで大会総

合二位に輝いている。

功績だけ見れば非常に輝かしいものだが、その闘い方から、地元アメリカのメディアは

実力を認めながらも、姉さんをこう揶揄した。

「Rolla of betrayal? (裏切りのローラ)? と。」

裏切りは言い過ぎだが、一言で言えば嘘つきなのだ。

言葉巧みに相手を、惑わせて時に卑怯とも撮れるような闘い方。それが姉のスタイルだった。

だからセシリアが、さっきああ言ったのは、何も間違っちゃいない。僕も同じようなものだからね。

「ふん、まあ良いでしょう。私は寛大ですから。名前を知っていただけでも許して差し上げましょう」

「別に怒られてないんだけどね、僕」

「……まだそんな事言いますの?」

「別に?」

「……良いですね。今度クラス代表を決めるために、あの男とアリーナで決闘しますの。あなたも参加なさい?」

「……なんで」

「そのふざけた態度叩き直して差し上げますわ」

「君、代表候補生でしょ?」

「それがどうしましたの?」

「残念だけど、やめとく」

だがその返答は予想していた、というよりもそう帰ってくるのが当然だと思っていたのか、

フンと鼻を鳴らし、腰に手を当てあたかもモデルのようなポーズで、嘲笑を含んだ笑みでこちらを見やる。その目は完全にこちらを見下していた。

「フフフ、まあそうでしょうね。少なくともこれであなたがあの男よりも、

利口だと言っ事は分かりましたわ。あの男私に向かってハンデはどうすると言ったんですのよ？」

あの男・・・十中八九一夏だな。

代表候補生相手にハンデか・・・。

流石に自殺行為だね。

「まあ良いですわ、今回の件は、不問として差し上げましょう。

観客席から、あの男がボロ雑巾になるのをとくところんなさい」

・・・今思っただけど、結構口が悪いね彼女。

にしてもそんな面白そうな事があるんだねえ。

「ま、とくと見学させてもらっさ」

僕はセシリアとの会話を切り上げ、受付で制服と一緒に貰った、部屋割表を見ながら寮へと足を進めた。

さて・・・これからどうするかね？

カタカタと、キーのタイプ音が響く薄暗い研究室。

ここはアメリカのカリフォルニア州にあるISの研究開発局。

「うん、そうねここはこのまま・・・こっちの数値をもっ少し何か出来ない？」

「分かりました、ちよつと考えてみます」

技術者に意見を求められ、それに的確なコメントを返す深緑の瞳の女性。

ローラ・サウスバード。

ローラはデスクに腰かけると、何も無い空中に目を泳がせる。

・・・あの子ちゃんとやってるかしら。

別に弟を信じていないわけではないが性格が、あたし似というのが気になる。

まあ自分の性格は一番誰よりも自分が知っているが、だからこそなのだ。

浮いてなきゃいいけど。

そんな事を考えていると、いきなり右頬を、冷たい感覚が襲う。

「きゃっ！」

「あら、意外に可愛い声出すのね、さすが鳥さんね」

あたしは声の方向を見やると、あたしと同じように綺麗な金髪の女性がコーヒを持って悪戯そうな笑みを浮かべていた。

「もう、ナターシャ・・・」

「アドバイザーがボケつとしてるからよ、ほらコーヒ」

あたしはナターシャに言われるがままに、コーヒを受け取る。

そのコーヒを、裏返してあったコーヒカップに移し、砂糖を入れる。

「ブラック飲めなかつたかしら？」

「あたしは、微糖派なのよ」

「・・・それも得意の嘘かしら？」

「あら、なんの事？」

あたしはおどけてみせたが、ナターシャにはお見通しの様だ。

「この前ブラック飲んでたじゃない。私がそれを見逃すとも？」

「フッフ、ISのテストパイロット様ともあるうお方がそれは無いわね」

互いに軽口を言いあい、少しの静寂の後ナターシャが、口を開いた。

「・・・気になつてるのかしら、アルの事」

「まあ、あの子の事だから大抵の事はスルスル蛇みたいに抜けるでしょうけれど、性格がねえ」

「ローラ、あなたがそれ言えるの？」

「それはそうだけど」

間髪いれず、ナターシャの突っ込みが入り苦笑いが止まらない。

そう言えば、ナターシャは昔からアルデイをアルと呼んで可愛がってくれていた。

ありがたいものだ。特にあたしがモンドグロツソで長期間アメリカを離れていた時には、

アルデイを預かって面倒を見てくれた。

「ふふ、にしてもあのアルが、もう高校生で更にISを動かせるとはねえ、やっぱり素質なのかしら」

「どうかしら、別にあたしはただの口が達者なだけのお姉さんだから」

「それも嘘ね」

フツとまた悪戯っぽい笑顔を残して、その場を去るナターシャ。なんだかんだいってアルデイを心配してくれているようだ。

ローラは目の前にある一機のISを見やる。

青色にオレンジのラインの入った非常に無骨なフォームに、大きな多用途リアススターが目を引きIS。

ほぼ完成段階に入っていて、現在は使用者のパーソナルデータなどをインストールしているため、多くのケーブルが接続されている。それを見て優しくローラは微笑むと、ゆっくりと瞳を閉じた。

……頑張りなさいよ、アルデイ。

あなたは、？世界第二位のお姉さんの弟？なんだからね。

第1話「嘘つき転校生」(後書き)

皆さましるくです。

ご覧頂いてありがとうございます。

ISって設定が細かいのが魅力なのですが、いざそれを二次創作してみると難しいものですね。

これからISの戦闘も始まるのに、大変です・・・

そう言えば、最近バイト先のスーパーでは水を初めとする防災用品が軒並み欠品状態です。

買いだめダメ絶対。

本当に必要な人へ回してあげないと！

三重県でこれですからね・・・

東京都とか大変らしいですね。当然被災地はもっと大変でしょうけど。

募金など出来ることで「PLAY for JAPAN」で頑張りましょう！

それでは第2話でまたお目にかかりましょう。それでは！

第2話〜アメリカからの贈り物〜

ええと・・・1029、1029と・・・あつたぞ。

僕は渡された部屋割表と照らし合わせ、番号と同じ扉をあける。

一夏から聞いた話では、2人部屋ってことらしいけど。

そうなることやっぱり僕は男同士一夏と相部屋なのだろう。

そう思い、扉を開くと・・・。

・・・狭っ！

どこからどう見てもコレ一人部屋じゃないか。

大体大きさは四畳半。そこに机とベッド、小型の冷蔵庫が押し込まれており、

実質動ける範囲はもつと狭い。一応シャワールームはあるようだね。同室者を気にしないでいい利点はあるにしても、まさかの一人部屋とは。

・・・でもこれはこれで気を使わなくてやっぱりいいか。

僕は、自室の片隅に旅行鞆を置くと、中からノートPCなどを取り出し机の上に置く。

電源を入れ確かめたが、どうやらネット環境は整っているようだ。よかったよかった。

ひとまず、それを確かめたかっただけなので電源は落としておく。シャツトダウンを確認すると僕はドサツとベッドへ仰向けに倒れこんだ。

IS学園か。

何にしても入学初日はあつという間に終わった。

慣れていないと言うのもやっぱりあつたんだろう。

それに今日、なんくせ付けられたあのイギリス代表候補生。

セシリア・オルコット。

姉さんを知っているみたいだったけど。

っていうか、僕自身彼女をどこかで見た気がするのは気のせいだろうか……。

わかんないなあ……思い出せない。

ただ、あの顔どこかで見たような見てないような……。
ま、いいか。

人生は楽に行かなきゃ楽しくない。

楽しいと言えば、今度あのセシリアと一夏がISで決闘をするらしい。

……これは面白そうだ。

やっぱり人生は楽しまないと損だな。

そう、楽しまないと……そ……ん。

流石に疲れたようで、急激な睡魔に襲われる。

僕はその睡魔にあらがうことなく身をゆだね、深いまどろみへ落ちて行った。

「そしてこのざまか、転校二日目にして早くも遅刻とはな、やってくれる」

「予鈴とほとんど、ギリギリで滑りこんだんですけどっ!？」

つつい返してしまうこの口を、今はとても恨みたい。

そのおかげで、僕は主席簿で頭を殴られる羽目になったのだから。

「今後気をつける、良いな?今度やってみろ、反省文を書かせるかならな」

「……気をつけます」

僕は叩かれた頭をさすりながら、自分の席へ着いた。

一夏の何とも言えない、目が凄く痛かった。

「さて、諸君それではS H Rは終わりだ、山田先生それでは授業の方を」

「はい、それではみなさん、前回の福州から始めましょうか」

山田先生がそう言うと、皆が一斉に教科書を開く。

僕もゆつくりと、教科書を開く。

教科書の内容をスキミングしていくと、一つの項目に目がとまる。篠ノ之 束……。

会ったことも見たこともないが、ISの開発者として名は広く知られている人物だ。

世の中には凄い天才もいたものだ。

たった一人でISのコアを開発してしまったのだから。

そういえば、篠ノ之っていう名字このクラスにいたような……。

「山田先生、質問です」

唐突に後ろの方の席から声が上がる。

「篠ノ之さんって、もしかして……」

その問いに答えたのは山田先生ではなく織斑先生だった。

「そうだ、篠ノ之は束の妹だ」

その返答に質問をした女子を含めた数名が、驚きの声を上げた。

「凄い凄い！このクラスに織斑君以外にも凄い人がお姉さんの人がいたよ！」

「そう言えば、篠ノ之博士っていま行方不明なんだよね？」

「篠ノ之さんどこにいるのか知ってるんじゃないの？」

次々に浴びせられる、予想だにしない質問の集中砲火。

確か彼女を一夏は篝と呼んでいた。

その集中砲火に対して篝は、鋭い声で一閃した。

「あの人と、私は……なんの関係もない、だから教えられる事など何もない！」

はつきり、そう言いきられてしまったのは、流石の女子も黙るしかない。

というよりも、発せられた言葉の鋭さに、言い返せなくなったというのが正しいのかな。

まあ……なんていうか、気の強そうな子だ。

そんな感じで、授業は進んでいった。

休み時間。

一夏と箒が、さっきの件で話をしていた。

「箒、さっきの言い方は流石に無いぞ？」

「別にかまわないだろう、私とあの人は本当に関係が無い。あんなことを聞かれるだけいい迷惑だ」

「でも姉じゃないか」

「だから、関係ないと言っている！」

また声を張り上げてる。思うに、いや確実に、箒は篠ノ之 束を嫌っているんだろう。

理由は分らないが。

「やあ、相変わらず大きい声だ」

気さくな声で話しかけたが、内容は箒の気分を害するには十分だったらしい。

キツと睨む目は、それだけで小動物なら死んでしまいそうだ。

「まあまあ、悪気あって言ってるんだから」

「余計にたちが悪いだろう、お前・・・アルディといったな馬鹿にしているのか！」

「いやいや、こういう性格なものでえッ！！！」

見るものを魅了する動き、全く無駄のない動きで、教科書が刀のごとく振り下ろされる。

僕はなんとかそれを寸でで避けることに成功したが、あの速度でしかも背表紙。

加えてISの教科書は僕の街の電話帳のごとく分厚い。出席簿アタツクよりも威力は高そうだ。

「あ、危ないなあ！」

「馬鹿もの、避けるやつがあるか！外れたじゃないか！」

「アメリカ人でも分かる、言葉のおかしさに気付こうね・・・！」
言葉のキャッチボールという言い方がある。

これはまあ、その名の通り言葉とは投げかけて相手に受け取ってもらって、またそれを返す、

事を繰り返すことから名づけられたものだが、今の会話はどっちか
って言うと言葉のドッチボールだ。

しかもアウトになっても外野から生還できないと言う、鬼ルール。
すなわち・・・死。

これで死んだら死因は教科書とかなんだろうなあ・・・体裁を気
にする人間ではないが、

それは流石に格好が悪すぎる・・・。

「まあまあ、箒落ち着けて。アルディもなんだかんだ言ってお前
の事を

気に掛けてくれてるんだからさ」

「むむう・・・」

「まあ、そう言う事に」

「ふん！」

腕を組みとドカツと腰を下ろす箒。

そう言えば気になると言えば、この二人の関係だ。
随分中がよさそうだけど。

「君たち、付き合ってるの？」

何気なく聞いてみた、これには悪気はない。サラツと。

本当にサラツと聞いたただけだ。だがその言葉に、箒の顔は真っ赤に
染まり、

周囲の女子は撒き餌に群がる魚のごとく集まってきた。

「ええええええ！！やっぱり織斑君と、篠ノ之さんってそういう関係
！？」

「やっぱり、怪しいと思ってたんだよねえ・・・入学初日も一緒に
どっか行っちゃったし」

「それに、篠ノ之さんも織斑君も、互いに親しみこめて下の名前で
呼び合ってるし・・・」

「これは決まりじゃないの・・・あたし新聞部の先輩に連絡して
くる！」

やいのやいの騒ぎ立てる女子。

「……これは予想できなかった……本当にごめん。箒も、さつき見たいに怒って集まった女子を散らすのかと思ったけど、

見るからに動揺を隠せない。

「べ、別に私は、そういう関係では……その」

「そうだぞ、お前ら俺と箒はただの幼馴染で、そういう関係じゃないからな」

「……むむう……ッ!!」

動揺から一変少し不機嫌な顔でそっぽを向く箒。

だが一夏がそれに気づくことはなく、必死に周囲をなだめ、

騒動を鎮静化させていく。

ううん……なるほど。

片思いつてやつなのかな。

僕も語るほど恋愛には詳しくないし、そもそも誰かを好きになったことが無いからよくわからないが

さつきの表情の変化からそれぐらいは素人の僕でも分かった。

というより普通の感性もってれば大体気が付くと思うのだが……。

ええと……なんていったかな。そういう人の事を。

と……とう……。

「トウボウヘン？」

「唐変木だ、馬鹿もの」

そうだそうだ、唐変木だ。

つて今の誰？

僕は声の方向を振り返る。

そこには、腕を組んで黒いスーツをビシッと着こなした織斑先生が立っていた。

「あ、どうも」

「早く席につけ」

僕は、出席簿がピクリと動くのを確認すると、身の危険を感じ足早に自分の席へ戻るのだった。

……日本では本で叩くのが習慣……いや流行りなのかな。

結局あの時叩かれなくても、授業で当てられて答えられずで1発貰った僕は、まだ痛みの残る頭を

気にしながらSHRで壇上で話す織斑先生を見ている。

「以上が、諸君への連絡事項と……ああそうだ。織斑とオルコットの試合の日程が決まった。

生でISの戦闘を見られるいい機会だ。これから諸君も同様の機会は増えるだろう。」

率先して見学するように」

「あの、織斑先生。俺の……そのISは……」

「前も言っただろう、専用機だけに時間がかかると安心しろ、試合までには間に合わせるさ」

その時、教室の後ろの席から嘲笑を含んだ声が飛んだ。

「あら、間に合わない方がよろしいのではなくて？みじめな姿を見られずに済むのですからラッキーではありません事？」

「負けるとはまだ、決まってるないだろ」

「決まってますわよ。何せ私は代表候補生、セシリア・オルコットのからです」

スツと立ち上がると腰に手を当てポーズを決める。

それが様になっているだけに、そして言うていることも間違っていないだけに、一夏も反論に窮してしまふ。

「静かにしろオルコット、候補生だけで偉そうな口を叩くな。あとお前も安い挑発に乗るな馬鹿ものが」

織斑先生にこう言われては、流石にセシリアも一夏も黙り込むしかない。

世界一の名は伊達じゃないってことだね。

「それでは以上だ。つまらんもめごとは起こすなよ」

言うが早いか織斑先生はさっさと壇上を降り教室を後にする。

それを追いかけるように、山田先生も続いていった。

放課後。

一夏と篤が、特訓をするというのでついていくことに。ここは剣道場か。

剣道はよくわからないけど、手合わせ10分足らずで一夏が一本負けしたのだけは分かった。

「弱すぎる！一夏、お前いつたいこれまで何をしていたんだ！！」

「じゅ、受験勉強！」

勤勉勤勉。勉強嫌いな僕からすれば関心するね。ただ、その答えは篤には納得できるものでは無かつたらしい。

「受験勉強なら私もしていたぞ！」

「勉強時間の差じゃないか？」

「ふざけるな！」

バシーンつと竹刀が床を叩く音が剣道場に響く。

「ええい、中学時代は何をしていたんだ！！」

「帰宅部だ。それでもエースだったんだぞ！」

それを聞きわなわなと、体を震わせる。

どうやらボルテージが突破したらしいね。

「軟弱者めがッ！！」

勢いよく振り下ろされる竹刀が防具をつけていない状態の一夏に振り下ろされる。

一夏はそれに素早く反応すると、竹刀でそれを受け止めた。

だが体制が悪い。

座っている一夏に対して、篤は上から両手で体重をかけているのだ。当然いくら腕力で勝る男といえど、片手で体重を乗せた一閃を受けきることは不可能だ。

プルプルと震える腕で踏ん張りつつ一夏が必至の形相で懇願する。

「頼む篤、俺はまだ死にたくないんだ！」

「一度死ねば、強くなって帰ってくるかも知れんぞ！！」

一夏はサ ヤ人か何かかい？

ちなみにどうでもいいけど、ドラゴンボールはアメリカでも人気の高い先品の一つだ。

「そんな超設定俺にはない！頼む筈今度何かおごるからさ！！」

「……ふんっ！これから放課後三時間必ず空けておけ、私がお前を叩き直してやる！！」

鼻を鳴らし、軽蔑のまなざしで一夏を一瞥すると剣道場を一人後にする筈。

大きく肩でため息をつく一夏に僕は、壁にもたれたままの体制で声をかけた。

「大丈夫かい？」

「そう見えたら、お前の眼一度眼科で見てもらった方が良いぞ？」

「ははッあいにくと目は良い方だよ。まあ色は分からないけどね」

「ん、どういうことだよ？」

「色盲なのさ。世界が毎日白黒映画なんだよ」

これは本当だ。

何でも数万人に一人という確率らしいが、見事僕はその一人にあたってしまったようだ。

個人差はあるらしいが、僕の場合は色が極端に言えば白と黒しか判別できない。

後はそれ濃淡で大体なに色かを判別するしかないのだ。慣れるまで凄く戸惑ったけどね。

まさに白黒状態。幸いにして視力は良いから日常生活で困ることはあまりない。

「あ、悪い……なんか変な事聞いちゃまって」

「ん？良いよ別に。僕も聞かれなかったし」

気まずそうに頭をかくが、僕は別に気にしていない。

こんなの言わなきゃ誰もわからないし。

そんな事よりもだ。今は彼の特訓の話。

「それはそうと、筈、三時間とか言ってた？」

「言ってたなあ……あいつ有言実行だから、みっちり本当に三

時間しごかれるに決まってる」

「昔からああいう性格なのかい彼女は？」

「ああ、まっすぐに芯の通った良いやつなんだけどな、まっすぐにぎて困るんだ」

融通が利かないってことかな？

「だけど、やっぱり凄いわ。剣道の全国大会で優勝した腕は流石の一言だったよ」

「優勝したんだ……」

それは確かに凄い。

僕は頭の中で、自分が何か一つでも優勝したり表彰されたりしたことが無かったか記憶を探るが、

全くこれっポツチも浮かんでこない。というよりそんな経験無い。樂觀的とかで賞貰えないのかな……。多分断トツなんだけど。

「まあでも、俺も男。女に負けっぱなしって言うのは納得できないしな」

「フツッ、ま頑張つてよ……。そうだまた見学しに来ても良いかな？」

「おう、良いぜいつでも見に来いよ」
気さくに笑いかける一夏を、流し眼で見つつ僕は、寮へと足を向けた。

その後1週間みっちり、本当に三時間、一夏は箒と特訓に打ち込んでいた。

そして代表決定戦の前夜。僕はいつも通り、一夏と箒の特訓を見届けて寮の部屋に帰ってきていた。

……ふいふ今日もつかれた。

手慣れた動作で習慣化していたPCを立ち上げる。

さてさて、何か情報は……。

僕はメールボックスを開いて、新着メールを確認する。

・・・うん、今日もメルマガとかばっかりだ。
ツツとスクロールバーを下げていくと、一通見慣れないアドレスからメールが入ってきていた。

(second place sister@...?)

セカンドプライスシスター・・・?

こんなメルアド知らないけ・・・あ。

まてよ直訳すると・・・2番目の・・・姉妹・・・いや姉!

分かった、姉さんだ。

メルアドの差出人が分かったところで、そのメールをさっそく開いてみる。

?親愛なる弟へ

元気にやっているかしら。あたしはいつもどおり元気にやってるわよ。

そうそう、ナターシャがあなたの事気にかけてたわ、今度連絡でもしてあげて?

連絡先はこのメールに添付しておくから。それはそうと、あなた以前、アメリカでパーソナルデータを取ったこと覚えているかしら。

あの時は、ISを動かせるからその研究材料としてって言う理由だったけど、本当は違うの。あれにはちゃんとした意味があるのよ?

この意味わかるかしら。フツツ楽しみにしていなさい。明日か遅くても明後日にはあなたの所に届くはずだから。何かは来てからのお

楽しみ

まあそうね、姉さんからの贈り物だと思いなさい、それじゃ頑張つて!?

・・・イマイチ、わかるかしらと言われても、分かんないとか。それに明日か明後日って、何が届くのさ・・・。

・・・まあ良いか。今考えても、何が来るかなんてわからない。

それにだ・・・このメール自体が嘘の可能性だってあるのだ。

はあ、我ながらややこしい姉さんを持ったなあ。そうも思ったがすぐにその考えを否定する。そうじゃない、僕も似たようなものなんだから。何にしても明日は一夏とセシリアの決闘の日か。それだけは変わらない。

セシリアは代表候補生だし、一夏が勝てる見込みはあるのだろうか。……っていうか、一夏ISの事簿から教えてもらってるのかな？ とたん嫌な考えが頭をよぎる。で、でも流石に、教えてもらってるよね。

僕は嫌な考えを振り払うかのように、布団にくるまった。

「簿……」

「なんだ」

「結局俺達、剣道場で打ち合っただけだったな」

「良いではないか。感覚も戻ってきたのではいか!？」

試合当日。

僕と簿そして一夏は、ピットに居た。

観客席でもよかったんだけど、せっかく特訓を見学したんだしお前も来いよとの一言でピットに案内されたのだ。

だが問題はそこでは無い、先ほどから一夏の質問に、わざとらしい大笑いなどで返答を誤魔化す簿。

そしてそれを見て、頭を抱える一夏。

どうやら、昨日の嫌な考えは当たったらしい。

一夏は、何も簿からは教わっていないようだ。だってそうだよな。

僕自身も、剣道場で打ち合ってる姿しか見たことなかったし。

「おいっ、どうしてくれるんだよ!!! ISの事全く知らないまま当日迎えちゃったじゃないか!!!」

「し、知るか!……そ、そうだお前が予想以上に弱かったのだ!

そのためスケジュールが狂ってだな」

「苦しい言い訳してるんじゃないよ!!」

ギヤーギヤーわめきあう二人と、それを静観する僕。

そこへ、織斑先生の鋭い声が飛ぶ。

「ピットでわめくな、やかましい!織斑!」

「ああ、は、はい!」

ビシッと姿勢を正して、その声に反応する。

そして続いて山田先生が口を開いた。

「織斑君、お待たせしました!織斑君のISが到着しました!」

一夏のISが到着した。その声に僕を含めた三人の目つきが変わる。そしてそれと同時に後ろのハッチが開き、一夏の専用機が姿を現した。

白い。

真っ白だ。

姿を現したISは本当に真っ白で、まぶしいぐらいだった。

それを見て一課が声を漏らす。

「これが・・・俺の・・・」

「はい!これが織斑君の専用機。その名も白式です!」

白式ね。名は体を表すと言うのが本当だと思う。

その名の通り、こんなにも白い。

「織斑、すぐに準備をしろ。アーリーナの使用時間は限られている、ぶつつけ本番でモノにして見せる」

「いやでも、俺ISの事・・・」

「急いでください織斑君!」

「お前も男だろう、覚悟を決めろ!」

「い、いやあの・・・」

「早く!!」

「はいっ!!」

三人にせかされて、一夏は準備を始める。

搭乗者がISに乗り込むと、一夏に合わせるように装甲が閉じ膨大なデータがすさまじい速度で処理されていく。

程なくフィッティングの初期段階が終了し、ハイパーセンサーが起動。

敵ISのデータが表示されている。

「ハイパーセンサーの起動は問題ないようだな。気分はどうだ一夏？」

「ああ……大丈夫行ける!!」
「やっぱり姉弟だねえ。」

一夏を名前で呼ぶ所をはじめてみた。

力強い返答に、一同が安堵の表情でそれを聞き。

篤が一夏に力強く声をかける。

「一夏……勝つてこい！」

「……ああ行つてくる!!」

言い残しカタパルトが一夏と白式を勢いよく打ちだした。

さてどうなる事やら。

僕はモニターが見える位置に移動するとモニターを見上げる。

なにやら二、三言葉を交わして先制攻撃を行ったのはセシリアだった。

主な武装は、大型の特殊ライフルだ。

さてどうなるか……と観戦を決め込む僕の首根っこを織斑先生が引つ張る。

「さてちよつと来い。お前に用事がある」

「え!?!いや、あの一夏の戦闘を……」

「お前に関係あることだからだ。山田先生後を頼む」

そのまま僕を引きずって、織斑先生は別のピットへ僕を連れてきた。別のピットとはいっても、解放されていないだけで別のアリーナというわけではない。

「今朝がた、空輸でIS学園に一機のISが届けられた」

「はあ」

「差出人は……これだ」

織斑先生は、伝票らしきものを僕に見せる。そこにあつた名前は……。

「姉さん」

「そうだ、ローラだ」

そう言えば姉さん昨日のメールで何か送るって言ってたけど……。

ま、まさかISS!?

「フツローラらしいと言えらしいな。朝からそれでちょっとした騒ぎになつてな」

「すみません」

「まあそれは良い。サウスバード、お前も感じているとは思うがこれはどうやらお前のISSのようだ」

「はい……多分そうでしょうね」

「今すぐフィッティング作業に入れ」

「え?」

「聞こえなかったのか、フィッティングを開始しろといったんだ」
「なんで?」

「今すぐに!」?

僕は今日別に戦わないし、保管して別の機会でも……。

「いつまでも搭乗者未登録のまま放置しておくわけにもいかんだろ
う!」!

「あ、なるほど」

「今からそのISSを出す。早く準備して来い。着替えはアリーナの
更衣室を使え今はだれもないからな」

僕は織斑先生から、ISS用のユニフォームを渡されと言われるまま
にアリーナの更衣室へ急いだ。

ISSスーツに身を包みピットへ戻ると、そこには大きなISSが折り
畳まれた状態で鎮座していた。

「あの……大きくないですか？」

先ほどみた一夏の白式と比べてもふた周りぐらい大きい。横に織斑先生がいるからその大きさがより分かりやすかった。

「このでかさも、騒ぎの要因の一つだ、ほら急げ」

僕は先ほど一夏がやったみたいに、ISへ体を預ける。

装甲が閉じ目の前のモニターには、様々な情報が処理され、その詳細が表示されていく。

そして、顔には大きなバイザーが取り付けられる。

「……これは！」

バイザーを通して見た世界は、これまで見たことのないほど鮮やかなものだった。

白黒映画から、一気に現代の3D映画に進化した気分だ。

バイザーのモニターの端には？Direct color adjustment?の表示。

直訳すると直接的色彩調整。

どうやらこのバイザーが、視覚に働きかけて欠落部分の色彩を補ってくれているらしい。

なるほど、確かにこれは僕専用のISの様だと今更になって実感する。

初期設定が終了し、ハイパーセンサーが起動する。

不思議な感覚だ360度見えていない所まで、何があるのかはつきりとわかる。

これが……IS。

まだ初期設定が済んでいないため、本来の形は分からない。だがどうやら使用者の登録は済んだようだ。

「どうやら機体の設定は終わったようだな、では待機状態に戻しておけ」

織斑先生の言葉に従い、ISを待機状態に戻す。鮮明だった世界が一瞬にして白黒へ。

……もう少し見ていたかったなあ。

僕は名残惜しいかったが、叩かれることを思えば、白黒でも見えた方が痛くないし良いや。

待機状態の僕のISはどうかやら銃弾のネックレスになるらしい。

ライフルの銃弾ぐらいの大きさで、その大きさに似合った重さがある。

こんなの首からぶら下げてたら、この国じゃ大問題なんだろうなあ。。。

注意しよ。

そして考えを切り替えると、頭のなかでもう一つの疑問が首をもたげた。

・・・そう言えばこのISの名前なんて言っただろう。

モニターには表示されなかったけど・・・

「何をしている？戻るぞ。あの馬鹿が心配だ」

「あああ、はい」

織斑先生に連れられ、ピットへと戻る。

その最中もずっと、名前やらなんやら色々な事を考えていた。

ピットへ戻ると、あれ？一夏のISの形が違う・・・。

「ファーストシフトだな、あれが本来の白式の形なんだ」

「先ほどから一夏は刀しか使っていないようですが、白式にはあれしか武装が無いのですか？」

「篤が織斑先生へ尋ねる。刀しかないっていうのは大変だけど、良いんじゃないの。」

「一夏って剣道の特訓してたし。」

「そうだ、白式にはあの刀・・・雪片しかない」

そしてセシリアのISがモニターへ映る。セシリアのISは見ただけでわかる射撃特化型のIS。

「そんなの相手にに刀一本で、戦っていたのか・・・。」

「だが、あれ一本あれば十分なのさ・・・あれには特殊な能力もあるしな」

言っている間にも戦闘は続く。

セシリアのビットを一夏が正確な一振りで破壊していく。そして一瞬のすきをついて肉薄。

「とりあえず、俺は千冬姉の名前を守るさ！」

モニターから聞こえた自信たっぷりの声に、誰もが勝利を確信した。だが……

『試合終了、勝者 セシリア・オルコット！』

試合終了の声とともに、頭を抱える織斑先生と、ポカンとした一夏をはじめとする面々がそこにいた。

「あそこまで言ったら普通は勝つだろう……」

「面目ない」

筈に呆れた声で言われ、情けなく頭を下げる一夏。

「でもさ、何で負けたの？」

僕の疑問は一夏をはじめとする皆の疑問だ。

それに織斑先生が答える。

「バリア無効化攻撃を使ったからだ。雪片の特殊能力がそれだ」

「でも一気に俺のシールドエネルギーがゼロになったんだけど」

「その特殊能力をお前は、何のの代価無しに使えらと思っっているのか？お気楽な奴め」

「なるほど、つまりその能力を行使するためには、自分のエネルギーを攻撃に転化する必要があると言っ事ですね？」

「算が得心したと言うようにうなずき、織斑先生もそれを肯定した。中々厄介な武器だな。もろ刃の剣じゃないかそれ……」

出しどころを間違えなければ、最強なんだろうけど。

「さて……馬鹿の自爆の所為で思いのほか時間が余ってしまったな」

「馬鹿って……というか、織斑先生一つ聞いていいですか？なんでアルディはISスーツにみを包んでいるんです？」

その問いに織斑先生は、チラリと僕を見て、ふむとうなずくと、再び一夏へ向き直った。

「丁度いいな・・・織斑、まだ行けるか？」

「え？体力は大丈夫ですけど」

「よし、すぐにエネルギーを補充しろ。これより予定外だがエキシビジョンマッチを行う！」

「「え？」」

そこに僕と一夏の抜けた声が響いた。

第2話〜アメリカからの贈り物〜（後書き）

こんにちはしるくです。

第2話ではセシリア、一夏の戦闘シーンを少し離れたピットから書いてみました。

そしてアメリカから届いた贈り物、アルディのISとはいかに？

にしてもまだまだ天候が安定しませんねえ。

さむかったり暖かかったり雪や雨・・・

いつになったら暖かくなるのか・・・

お体にはお気を付けくださいね！

それでは第3話でまたお会いしましょう！

第3話〜射撃の妖精とセシリア〜

え？

え！？

なにエキシビジョンマッチって・・・。

エキシビジョン：英語表記？ exhibition？

意味：公式記録に残らない、公開演技や模範試合

・・・って言葉の意味を考えても仕方がないじゃないか！！

そうじゃない、そうじゃないよ。

いきなりなんで？

「何をしている、サウスバード。織斑は既にエネルギーの補給に入
ったぞ。お前も準備しろ」

ちよっと一夏！なんで素直に従ってるんだい？

思わず一夏に詰め寄ろうとしたが、一夏の顔を見てそれをやめた。

一夏の顔が、？お前、また殴りたいのか？？という事を物語って
いたからだ。

うう・・・。

再度織斑先生を見る。

うわっ、箒の睨みなんて足元にも及びそうにないほどの、蛇睨み。

・・・はあ。

まだ初期設定しか済んでないのになあ。

僕は渋々、ISを起動させる。弾丸型のペンダントが光り一瞬で装
甲を展開。

一気に視点が高くなり、周囲に本来の色が塗られてゆく。

バイザーのモニターには、いまだに先ほどの段階では処理しきれな
かったデータが

次々に処理されていき、装甲やインターフェースのフィッティング

が行われていく。

「大きいな・・・」

ぼつりとこぼした筈の声も、ISのハイパーセンサーは拾ってくれる。

「僕も思うよ、一夏の白式に比べても明らかに大きいからね」

「でもそれ、まだファーストシフト前の形だろ？本当の形はどんなだろうな」

確かに一夏の言うとおりまだファーストシフトへ移行していない。モニターに残り時間が表示されているが、まだ少しかかりそうだ。そのため背部の大型スラスターも動きが怠慢で、多分今飛ばば機動力は皆無だろう。

「準備はできたのか織斑？」

「あ、はい終わりました」

「サウスバードは？」

「動けますけど、まだそこまで激しくは・・・」

「・・・そうか、織斑先に出ている、サウスバードは後どれくらいかかる？」

僕は再びモニターで確認する。インストールバーの下に予想終了時間が表示されている。

「ええと・・・あと3分ぐらいです」

「よし、織斑出ている、準備している間にこちらも終わるだろう」「分かりました」

待つてるぞと、言い残し一人ピットから飛び出す一夏。

はあ、ここまで来たら覚悟を決めよう。

自分が勝ったと言うのになどか釈然としないセシリアは、スポーツ

ドリンク片手に

汗をタオルでぬぐい、ロッカーのベンチに腰をおろしていた。この感覚が何なのかはわからない。

いつも勝った後にはこんな感覚は無かった。

あくなき勝利への渴望。

そして今回も、過程はどうあれ自分は勝利を収めた。

でも……その気持ちは沈んでいた。

だがそれは、一夏に対するものでは無かった。

アルデイ・サウスバード……。

私と戦っていないあの男。

でも過去に一度私たちは……

……忘れてしまったのかしら。

でも名前を覚えていてくださいましたし……。

セシリアはかぶりを振って考えを切り上げる。

このままこの考えをつづけたところで、気分が沈んでいくだけでプラスにはならない。

……ふう、まあ今はそれよりもシャワーですわ。

浴びてスッキリすればこの気持ちも晴れるでしょう。

そう思い立ち上がった時だった。ロッカールームにまで聞こえるほどの歓声上がる。

なんですか？

今日の試合はもう終わったはず。

いったい何が……。

気になったセシリアは、自分のピットへ急ぐ。

ここからならそちらの方が近いからだ。

ピットのハッチから、何を騒いでいるのかを確認する。

辺りを見渡すと、そこには織斑一夏のIS？白式？がいた。

……何をやっていますのしかも一人で？

間違いなく先ほどの歓声は、あの男が再び出てきたことだろうか、何をしに出てきたのだろうか。

勝ったなら凱旋で、再び出てきてもおかしくはないが、彼は負けた。だがその理由はすぐにわかることとなる。

あの男が出てきたピットから、もう一機見たことのないISが飛び立ったのだ。

なんですか、あの機体は!?

セシリアはブルー・ティアーズのモニターを起動させ、データを照合させるが結果は……。

? 該当データ無し?

一体あれは……。

? A format and a fitting were finished. Please push the Confirm button.?

(フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください)

「織斑先生終了しました!」

「よし、行け!」

勢いよくカタパルトが、僕とISを打ち出す。その最中ようやく戦闘用のOSが起動したようだ。

そして、モニターには次のような文字が躍る。

? Welcome to strike birdie!?

ストライクバーディ……それが名前。

良いじゃないか、良い名前だ!

射出されると同時に僕は、翼を広げた。

それと同時に光に包まれ、? ストライク・バーディ? は本当の姿へ

とその形を変える。

元々大きかったスラスタは長方形のおおきな物に姿を変え、更に外観が武骨さを増す。

そして色は鮮やかな青色に縁どりとしてオレンジのラインが走り、両手には大型の荷電粒子砲が握られている。

腰部には・・・これはプロペラントタンクだろうか、菱形の大きなエネルギータンクが取り付けられている。

これで、僕専用になったって言うわけか。

「派手だな、アルデイ！」

プライベートチャンネルを通じて、一夏の声がする。

「一夏の程じゃないよ。ただ大きいだけだしね」

あいさつ程度に、軽口を言いあい、互いに戦闘態勢を整える。

さて、行こうか！

アルデイのISのデータは、教師陣の、端末にも送られてきていた。

「ストライク・バーデイだと？」

「織斑先生ご存じなんですか？」

意味深につぶやいた、行動に疑問を感じた山田君が尋ねてくる。

「確か、記憶が正しければ、私がモンド・グロツソの決勝であいつの姉と戦ったときに使用していたISがそんな名前だった気がする」

「ええええ！じゃ、じゃあ、あれヴァルキリー機じゃないですか！

ローラさんって確か射撃部門で優勝してましたよね！？」

確かに、ローラは総合優勝こそ逃し、？ブリュンヒルデ？の称号は得られなかったが、射撃部門の部門別では優勝し？ヴァルキリー？の栄誉が与えられている。

だが、と私は思案する。

？ストライク・バーデイは果たしてあんな形だったか？と。

もっとシャープだった気がするし、あそこまでゴテゴテしていなか

つたはずだ。

それにあれはアルデイの専用機。ローラのとは……
ああ、ああ、そうか。そう言うことか。

「ふふ、山田君あれは確かにストライク・バーデイだが、当時のものとは違うよ。」

おそらくはあれを元にして、新しくISを組み上げたんだろう」

「え？」

何事でもそうだが、一からすべてを作るには莫大な予算と時間が必要だ。更に人手も。

だが、なにか既存の物がありそれをチューンなり、カスタムするのは、

一から作るよりも遥かに簡単だし時間も費用も下げられる。

「つまり、延長線上という事ですか？」

「そういう意味では、さっきいったヴァルキリー機というのは正しいかもしれないが、

まったく同じというわけではないさ。それに戦いはISで決まらな
い」

そうだISがいくら優れていようと、操るのは人間。

乗り手がヘボでは、性能を生かしきれないだろう。

フツッ、さて見せてもらおうか。

先制したのは一夏だった。

先のセシリアとの戦闘の際に学んだのか、直線的な動きではなくラ
ンダムに

飛行軸を変えて接近。ヒットアンドアウェイで正確に攻撃を当てて
くる。

当ててくるのだが……。

「ちょ、お前のIS固すぎるだろ!」

「見た目通りで・・・」
そうさつきからほとんど、一夏はシールドエネルギーを削り取れていないのだ。

だが、いずれにしてもこれでは攻撃に転じられない。

僕は、展開可能な武装一覧を呼びだし、一夏の攻撃を最小限避けつつそれに目を通す。

そこにあつたのは、三つ。

現在両手に構える、荷電粒子砲？ファイアーフライ？

背部火器内蔵スラスタ？ウエポンスクエア？

そして、特殊音響兵装？ハウリングエコー？

ん、火器内臓？

僕はアイ・タツチでウエポンスクエアを選択。

その詳細が表示される。

「こりゃあ・・・」

その内容に驚いた。

左右合わせて六門のミサイルポットに更に威力の高い、高圧荷電粒子砲とそして内臓の小型バルカン。

これに手持ちの？ファイアーフライ？を合わせた全砲門射撃まで可能とある。

・・・つまりこのISは機動力を全く考えていない、重装甲重砲撃戦仕様の特化タイプということか。

だとすると現在の状況はかなりまずい。

ただでさえ距離を取らなければいけないのに、機動力不足と特性把握の遅さから、一夏に接近を許してしまっている。

「余所見するとは、余裕じゃないか、アルディ！」

「余所見じゃない、理解してただけだよ、このISを！」

僕は、両手の？ファイアーフライ？を狙いもつけず無造作に放つ。別に狙っているわけじゃない。要は牽制だ。

「おっと！」

一夏が、身をひるがえして、その射撃を次々に回避する。

かかった。

僕は口元を緩め、射撃によって次第に動きを制限していく。自分の行動範囲が狭められているということは一夏も気づいたらしい。

ハイパーセンサーの映像からも焦りの色がうかがえる。

同時に、僕は？ウエポンスクエア？のミサイルポットを展開。

「lock-on」の表示が出るや、全弾を発射する。

「全部当たれば、流石に落ちるよね？」

ドガアアアアンツ！！！！

爆煙が、一夏と白式を飲み込んだ。

・・・やったかな？

ツ！？

いやまだだ！！

黒煙の中から、真っ白な機体が光を受けて輝く。

「避けたの！？」

「流石に同じ手はくわねえよ！」

同じ手とはおそらくセシリア戦の事だろう。

どうやったのかは見えなかったが、一夏のISに損傷らしい損傷は見受けられない。

つまり全弾回避されたという事。

っちい！

「今度は俺の番だ！」

一夏は今度は突っ込んでくるのではなく、僕の周囲を一定の距離を取って回る。

「お前のIS確かに、攻撃力と装甲は大したもんだけどさ、機動力では俺の方が上なんだよな！」

っく、てかはずきりってこのIS。大きいし、機動力もない。

単機運用を前提にしてないことない!?

それとも僕がまだ何か使いきれてないのか?

だが武装は大体見たし、機動性能だって……。
待てよ。

僕は背部の巨大なスラスターを見やる。

……これって結局、荷電粒子砲とか打つ時は前にせり出すんだ
よな。

つてことは……、これひょつとして……。

?360度どの角度にも動いたりする??

試してみる価値はありそうだ。

僕は一夏を見やる。

いや正確にはハイパーセンサーでその位置を見ると言った言い方の
方が正しい。

縦横無尽に動く一夏の位置を確認しながら、慎重にスラスター角を
イメージする。

そのイメージに従いスラスターが、任意の方向へ動き始める。

やっぱり思った通りだ。

そして、一夏がある方向で向きを変え一気に距離を詰めてくる。

「そこかあ!!」

その瞬間一気にスラスターに火がとまり、方向転換。

逆さになりながらも、一夏を素早く正面にとらえることに成功する。

「いい!」

「もらった!!」

今度は狙いをつけて、?ファイアーフライ?が放たれる。

真正面から受けてしまった一夏は、体勢を崩しながらも、その後の
追撃をなんとか回避したが、

もうこちらのターンだ。

そうか……だんだんわかってきた。

?ストライク・バーディ?の戦い方が!

この機体は、動いて狙い打つチャンスをつかがう戦法ではなく、

フレキシブルに動く巨大なスラスターを利用して、高度を固定し自分が素早く360度旋回しながら

狙いを定め、強大な火力に物を言わせて戦う戦法が有効なのだ。

万一攻撃を貰っても、堅牢な装甲がそれを守ってくれる。

言ってみれば、固定砲台か……。

同じ要領で、確実に正面に一夏をとらえ続け射撃を続ける。

回避もだんだん苦しくなってきたんじゃないかな？

僕は？ファイアーフライ？とミサイルで十分にタイムを稼ぐと、

？ウエポンスクエア？を全展開させる。

スラスターが前両肩の上か前にせり出し、それまでスラスターのサポートをしていた部分が更に前に突き出しマズルサポートの役割を果たす。

そしてスラスターのバーニア下部に取り付けられた高圧荷電粒子砲と小型バルカン、マズルサポートの上部に取り付けられたミサイルポットに加えて手持ちの、？ファイアーフライ？を加えた強大な火力が一気に放たれた。

全砲門一斉射撃？アヴァランチ？

そして雌雄は決した。

『試合終了、勝者アルディ・サウスバード！』

……あ、あはは。

これ使いどころ間違えると危ないかも。

使っておいて何だが、この一斉射撃。どうやら何度も使える代物ではなさそうだ。

気付くと、余裕だったエネルギーは底を尽きかけ、シールドエネルギーも半分ほど無くなっている。

つまり、これエネルギーとシールドエネルギーの両方を使うのかあ。恐らく、最低限飛行や本体維持に必要な余力分のエネルギーを残し

て、それでも尚足りない部分はシールドエネルギーで補うという方法で、この攻撃は行われるのだろう。

それにだ。一回使っただけで、？ウェポンスクエア？から嫌な音がする。

どうやら本体にも、かなり負担を強いる攻撃の様だ。

・・・って、はッ！！

一夏は！？

直撃だったけど・・・。

「一夏大丈夫かい？」

「踏んだり蹴ったりだぜ・・・」

わ、悪かったね、ほんと。

僕はせめてもの償いに、一夏をピットまでえい航した。

ピットで待っていたのは、箒と織斑先生、そしてセシリアだった。

僕と一夏がISを待機状態に戻すや否や、一夏には箒が、僕にはセシリアが詰め寄ってきた。

「あなた、やっぱり私に嘘をついていましたのね！」

「ええ？流石に僕が嘘つきって言うことは自覚していても、セシリアに何か嘘ついたかな・・・」

「つきましたわ！！あなた専用機はないと、おっしゃっていたではありませんか、それがこれはどういう事ですの！！！」

ああそのことか。

いやでもあの時点では本当に無かったし、それに？ストライク・バードイ？が届いたのだったって急すぎた。

少なくともあの時点では本当に、僕はISを持っていなかったのだ。そこへ織斑先生が助け舟を出してくれた。

「そう言うなオルコット。今日急に届いたんだ」

「む、むっう・・・」

それでも納得がいかない、セシリアだったが、織斑先生の言ったこととということもあり、

追求をやめる。・・・そうこの場では。

「ちよつと来てくださいな！」

「ま、また!？」

今度はセシリアに首根っこを捕まれピットを退場する羽目になった。

とりあえず着替えを済ましてからという僕の提案に、首を縦に振ったセシリアと分かれ僕は着替える。

ジャラ・・・。

弾丸のネックレス型をしている待機状態の愛機。

専用機か。

姉さんはどうして、僕にこれを届けたんだろうか。

何か理由があるのかな。

・・・まあいずれわかるだろう。

それよりも今はセシリアだ。

待たせて何を言われるかたまつたもんじゃない。

・・・まてよ。

セシリア・オルコット・・・？

なんかどこかで、その名前を。

・・・ええい、良いや。とにかく行こう。

僕はセシリアの待つ、アリーナのロビーへと急いだ。

「遅いですわよ？」

「はぁ・・・すみません」

「で、どういふつもりですか？」

どういふと言われても・・・。

セシリアの意図を測りかねる僕は、答えに窮する。

「あなた私に嘘をついていますわよね？」

「いやだからISの事は本当に・・・」

「違いますわッ！」

ひと際大きい声に、少し驚き後ずさってしまふ。

一体なんだって……。

「本当に思い出しませんの？」

「思い出す？」

「……嘘の事じゃなかったのか。」

嘘の事じゃ……ん？

待て待てさつきも、同じような考えが浮かんだが、あの時軽く流して軽口を言いあったが、

教室での会話には不審な点がいくつかある。

まずなんでセシリアは僕の姉さんを知っていたんだ？

そりゃ有名人だし、どこか雑誌か新聞で見たのか。

だがそこから、弟がいると言う事まで想像が及ぶだろうか？

そして何より？僕はなんで彼女を知っていたんだろう？

スツと口をついでてきた名前だったが……。

そしてさつきから、頭の隅に引っかかっているような気持ち悪さは？

……セシリア・オルコット。

オルコット……。

その時ひとつの単語がぼつりと口をついた。

「……セシリー」

その単語にセシリアの顔がはっとなる。

そして確信する。

セシリー……まさか

「セシリーなのか？」

「ふう、ようやくですの……」

「あ、いや……」

驚いた、そうか、そうだ。

僕たちは、子供のころ一度？会っている？

昔からアメリカで、ISの操縦者として抜きんでいた姉は、各国の企業が勧誘に訪れるほどの人材だった。

そしてあるとき、イギリスからIS関係の会社を経営しているので、是非ともわが社へ来てほしいという女性が現れ、その女性と共に訪

米したのが、セシリアだった。
交渉は意外に伸び、二週間近くその女性はアメリカで粘りの交渉を行っていた。

結局交渉は決裂に終わったが、その間色々カリフォルニアのサクラメントの地を案内して回った記憶がある。案内と言っても、裏路地や秘密基地チツクな所を連れまわしただけだったが、
彼女はとても楽しそうだった。

毎晩僕は、服を彼女は綺麗なドレスを汚しに汚しまくって帰っては怒られてたっけ。

確かその、初日に名前を言いあつたんだ。

「あなた、名前は何といますの？」

「僕？僕はアルディ。アルディ・サウスバード。君は？」

「セシリア・オルコットですわ」

「じゃあセシリーだね」

「ま、まあ良いですわ特別に許しましょう、ではあなたは、アルディ……そう、アルですわね」

こんな風に。

「そうか、すっかり頭から飛んでたなあ……」

「それもお得意の嘘ですの？」

「いや。ほんとに」

「ま、思い出しただけでも良しとしましょう」

さつきまでの雰囲気はどこへやら。

フツツと笑う。セシリーはいつも通り自信たつぷりの顔だった。

「あの時、あなたに戦いを吹っ掛けたのは、あなたが私の事を忘れていたからですわ。」

名前は覚えてらしたのに……。結局戦えませんでしたわが

「だから……悪かったよ」

「冗談ですわ、もう怒ってなどいませんわ」

またクスリと悪戯っぽい笑みを浮かべるセシリー。

……なんて言うか、見ないうちに綺麗になったよなあ。

まあ、会ったのはもうだいぶ前の事だし、それから互いに月日が流れた。

成長するのは当たり前か。

「あら、私に見とれてましたの？」

「違う……いや違うない……？」

「あら、あなたらしくない返答ですね、あいまいな返答を返した罰ですわ、

これから一緒にご飯を食べに参りましょう」

「それが罰なの？」

「もちろんおごりですよ？」

そ、それは、確かに罰だ……。

ふう……まあ良いか。

それじゃあと……ロビーの出口を見やる。

……そして絶句した。

そこに群がる女子女子女子女子……。
な、なんだこれ。

「あ、私達はお構いなく」

「良い感じだったよね今、しかもアルディ君セシリアの事セシリーとか呼んでたし！」

「これは何かあるよ、絶対……」

「米英二国間同盟だ」

中々旨いこと言うな……じゃなくて。

またこのパターンだ。

最悪だよ、さっきの全部見られた。

「ねえねえ、セシリア、アルディ君とどういう関係よ!？」

「まさかのまさかで……」

唐突な問いに、驚くかと思いきや、セシリーはにこやかに笑うと、女子たちに意味深な言葉を残した。

「さあ、どうでしょうね、それでは待っていますわよ、アル」

今ここでその名前で呼ぶのは、まず過ぎる……。

絶対わざとだ……。

そして当然その呼び方は、普通じゃない。

ごく親しい間柄であるという事を悟った女子群が先ほど以上に騒ぎ立てる。

「聞いた聞いた！？いまセシリア、アルって呼んでたよ！？」

「これは間違いないわ……間違いない！」

「専用機持ちのビックカップル……」

色々誤解があるようだ。

流石の僕もこの場を切り抜ける打開策が、口をついてでてこない。

今僕に出来ることと言えば……

「ああ……ええと……さよならッ！」

逃げることだけだった。

アルデイのISが起動したその日の夜。

アメリカではすでに朝日が昇り多くの労働者たちが仕事に励みだす。そしてローラも例外ではなく、？ストライク・バーデイ？の稼働データに目を通していた。

ローラが自動転送するようにプログラムを指示したもので、これは今後の研究開発に活かされていく。

「うん、初稼働にしては上出来だわ」

一人、つぶやいたのだが意外に大きかったらしい。

「朝っぱらから、うるせえなあ」

「それはあなたもでしょ、イーリ」

「あら、ナターシャもいたのね」

アメリカの国家代表IS操縦者イーリス・コーリングとナターシャが軽口をたたきながら研究室に入ってくる。

「もって、何よもって。私はおまけ？」

「ありがたく思えよな、あたしのおまけなんて光栄じゃねえか」

「十セントチョコのおまけぐらいかしら」

「てめえ、流石に安すぎだろそれ・・・」

「おまけの方が高くなっちゃったわね」

クスツとナターシャは笑うと、それを見てイーリスも口をとがらせてフンと鼻を鳴らす。

私はそれを横目で見つつ、データに再度データに目を落とす。

「フレキシブルターンは成功、あら、あの子？アヴァランチ？を・・・」

ブツクサ言う、ローラに興味を持ったイーリスとナターシャが、軽口をやめデータを覗き込んでくる。

丁度机に座っていたので、ナターシャは椅子越しに、イーリスはデスク越しにそれぞれデータを眺める。

「これ、ひよつとして例の機体の実戦データ？」

「例の機体？」

イーリスの頭に疑問符が浮かぶ。

それを見てナターシャが補足説明を続ける。

「ここで開発された、？ストライク・バーディ？の事よ。ほらアルの専用機で造ってたじゃない」

「アル？・・・ああ、ローラの弟か。にしてもストライク・バーディねえ。このデータを見る限り

原形無えじゃねえか」

「仕方ないわよ、そのまま使うにはクセがありすぎだし」

元々？ストライク・バーディ？は射撃特化型とはいえ、有り余るほど高い機動性能がウリの第二世代ISだった。だが、それがあまりにクセのある代物で、特に360度どの方向にも回る特徴的な、？フレキシブルスラスタ？は慣れるまでに相当な時間を有し、最悪の場合扱いきれないという事態になりかねないものだった。

そのため、アルディの専用機ベースとして本機が選ばれた時、初め

はこのスラストを外す方向で開発がすすめられたのだが、あまりの重装甲銃火砲の所為で機動性が確保できなくなった為に、急きよこのシステムを方向転換用に組み込むことになったのだ。

「第二世代つつても、火力だけ見たら第三世代に迫るんじゃない？」
「火力だけ見ればね。第二世代機の初期型のISとしてはトップクラスの火力だから」

おっかねえの。とイーリスは続け、黙ってまたデータを見やった。
……しっかり、あの子を守ってあげてね、？バーディ？
ローラは心の中でそう呟きながら、自分の仕事に移っていく。

今日も仕事に忙殺される日常が始まっていった。

第3話〜射撃の妖精とセシリア〜（後書き）

どうもしるくです！

第3話お読みくださいましてありがとうございます！

原作のストーリーをなぞりつつ、オリジナルに展開していることと思います！

もうすぐ鈴の登場ですねえ、さてどう絡ませていくか。

そう言えば最近思っただんですが、原発が危機を乗り切っても、あの原発使えませんかよね。

どうするのかなあ・・・

ではまた4話でお会いしましょう！
それでは！

第4話 転校生はチャイニーズ

授業でも、先日ISの実習が始まり、いよいよ皆がISの自主練に取り組み始めていた。

かく言う僕も、一夏は箒と僕はセシリーにそれぞれレクチャーを受けている。

受けているのだが……。

「だからこう、クイツと言っ感じだ！なぜわからん！」

「違いますわ！良いです事、アル。先ほどの機動では接近されたときにあまりに無防備。」

ロール角は三十五度を維持、そしてそのままピッチ角を……だから違いますって！」

僕と一夏は互いに顔を見合わせると、口をそろえてこういった。

「ごめん、わからん」

見事なハモリっぷりに二人の顔が引きつる。

「大体、箒そのクイツを感じってどんななんだよ……」

「セシリー、細かすぎる……」

さつきからレクチャーを受けているのだが、イマイチ分かりにくい。だがまだセシリーは具体的な数値を上げてくれるだけでも本当は感謝しないといけない。

箒に至っては……

「クイツで感じで動いて、ズガンと当てて、スパッと行く感じだ」
……

暗号だろうかこれは……。

「全く、よく見ている一夏！こうだな……こうして……クイツで感じた」

箒が？打鉄？を使って実演してみせる。

「おお、そのクイツで感じか、俺の想像とは違ったよ」

僕もそのクイツで感じだったのかと納得するが、今はそれどころじゃない。

こっちはこっちで・・・

「どこを見てらっしゃいますの！？ほらもう一度やりますわよ」

「ああ・・・はい」

渋々従うが、やっぱり分かりにくい・・・。

もう一度浮上して、スラスター角を細かく調整する。

バシユツバシユッと細かく姿勢制御をスラスターが行っているのが分かる。

はじめて使ったあの時は、一夏にまだ直線的な動きが混ざっていたからそれほど難しく感じなかったが、

セシリーを、仮想的としてやってみると、全く狙いが定まらなかった。

まあ、代表候補生相手だから当たり前と言えば当たり前だけど。

全方位特殊機動旋回。通称？フレキシブルターン？。

その機動をマスターしない限りこのISを使いこなしたとは言えないとセシリーにも言われたが、それはそうだと思う。

？ストライク・バーディ？は前も言ったが固定砲台色の強すぎるISだ。

そのためにも、回頭速度の向上は至上命題だった。

何が難しいかって、普通の砲台なら横に三六〇度で良いのだが、僕の場合は上下左右に三六〇度なのだ。

二次元から一つ次元が増えるだけでここまで難しくなるのか。

まあ、何にしてもやってみよう。代表候補生の言うことだ。

下手な事は言わないはずだからね。

「それでは行きますわよ、私の今から言う角度にISをあわせてくださいな」

「うん・・・」

しばしの沈黙の後、セシリーの声が響いた。

「ロール四五、ピッチマイナス十！」

聞こえた通りに、機体を制御する。

セシリーは僕が、角度を合わせるのを待たずに次々に角度を言い放つていく。

「次ロール十、ピッチプラス三五、続いてロール二四六、ピッチマインス七六！」

バシユツバシユンツ！

小刻みに角度と姿勢を制御し角度を合わせていく。

矢継ぎ早に発せられるセシリーの指示を、ひたすらに追う。

そして何十回それを繰り返し、セシリーがひと際大きな声を張り上げる。

「最後ですわ！ロール一五九、ピッチプラス八七！」

「つく！！！」

しまった、噴かし過ぎた！！

ここまで来て失敗したくはない。

僕は反動で行きすぎた機体を、小型バーニアの全噴射でなんとか止め、

最後は両スラスター全部で勢いを殺して、なんとか範囲内で機体を制御させる。

「くっはッ！どうかなッ!？」

バツとそのままセシリーを見やる。

セシリーは少し何かを考えている。

「ま、まさか、ダメ？」

「ま、及第点ですわね」

その言葉を待っていた……。

僕は、地上へおけるとEISを待機状態にしてそのまま地面に座り込む。

「はあはあッ……つかれた……」

「もう、このぐらいで、へこたれてしまわれても困るのですけれど……」

「そうは言うけどね……大きさを……はあッ、考えてよ……」

？ストライク・バーディ？はISにしては非常に大きな部類に入る。一夏の白式と比べても、その大きさは一回り半ぐらい・・・そのぐらい違う。

その分巨大なスラスタを備えて入るが、大きさの質量分はどうにもならない。

いくらPICで、操縦者への負担を軽減しているとはいえ、機体の重量分はごまかしようが無いのだ。

「それを使いこなしてこそ、一流ではなくて？」

「一流ね・・・」

「それぐらいになっていただきませんと、流石に不釣り合いですわ」

「不釣り合い・・・何に？」

「・・・い、いえ、何でもありませんけど・・・」

急にそっぽを向いてしまふセシリア。・・・なんだろうね。

「そ、それよりももうすぐお昼ですわ。食堂へ行きませんか？」

「あれ？もうそんな時間なんだ・・・そうだねおなかも減ってきたし」

「ん？飯か・・・箸、俺たちも切り上げて食に行こうぜ！」

「話を反らす・・・む、むうまあお前が行くというのなら・・・

仕方がないな行くでしょう」

素直に行くと言えばいいのになあ・・・

食堂は、今日は休みと言う事もあり、出掛けている生徒も多いのか、それほど混みあってもおらず、僕たち一行は奥のテーブルへ腰かける。

ちなみに、僕と一夏は日替わり定食。箸は和食御前Aそしてセシリアは・・・サンドイッチ？

「セシリー、流石にあれだけ動いてサンドイッチって言うのは少なすぎないかい？」

「い、良いのですわ、私は・・・その・・・そうエコな女なので

す！」

え、エコな女！？

初めてそんなフレーズを聞いたけど、具体的にはどんななんだ？

「大方無理なダイエットで、倒れるパターンだな」

「ちよ、ちよつと箒さん？変な事おっしやらないでくださいな」

「何がエコだ、言い訳としても苦しいな」

「食べた養分を全部胸に回してらっしゃる方に言われたくありませんわ！」

味噌汁をすすっていた箒が盛大に嘔く。そしてむせる。

「おいおい、箒、大丈夫か？」

一夏が心配そうにのぞきこむが、回復した箒はそれを気にも留めず、セシリーに詰め寄った。

「お前、言って良いことと悪いことがあるだろう！！」

「なんですの！本当の事ではありませんか？！」

「まあまあ、二人とも……」

「そうだってお前ら落ち着けて」

ワイワイ騒いで食べる事はいいことだと思う。

ただ流石に僕らを挟んで、睨みあうのはやめてほしい。

……その……だから。

色々……当たるところとかあるわけで。

「大体、箒さんは！」

「セシリアだって！」

バシン！バシン！バシン！！バシンッ！

「黙って食え」

「……はい」「」「」

織斑先生……。まさかいらしたとは。

ちなみに殴られた順に、箒、一夏、僕、セシリー、の順番だった。なぜだが一番強く殴られた。

昼食を平らげ、ラウンジでくつろいでいた時。

「そう言えば一夏、転校生の噂は聞いているか？」

篤が唐突に口を開いた。

転校生か。

まず間違いなく女子だろうが、はてさてどんな子なのか。

「・・・何か？」

「別に何でもありませんわ」

ジトーっとこちらを見ていたセシリアだったが、

言うや不機嫌そうにそっぽを向いてしまった。

いや、別に変な事は考えてないよ。

「転校生ねえ、でも珍しいな。篤が噂話に興味を示すなんて」

「別に興味があるわけではない、たださっき近くにいた生徒達が話をしてるのをたまたま、耳にしただけだ」

「それを興味あるっていうんだろ？」

「ふん、屁理屈をこねるな」

「だけど、この時期に転校生かあ、つい先日僕が来たばかりなのにね」

先日と言っても、もう数週間前だけど。

そんな、僕にセシリーが意見する。

「アル、確かにあなた came ばかりですけど、ここは IS 専門の育成機関なんですよ？」

今こうして私たちが、くつろいでいる間にも、各国では IS 学園入学のために代表候補生やそれを目指す操縦者が切磋琢磨しているはずです。

そう考えても、今回の転校生も間違いなく代表候補生が来ると思っ
て間違いなさそうですわね」

なるほどね。

確かにこの学園に IS 操縦者を入学させる意味は大きい。

この学園は日本に存在するが、原則どの国家機関にも分類されてい

ない。

そのため、新技術の開発・試験であったり、多くの国の代表候補生たちが集う学園なだけに、各国とのIS比較が容易に行え、かつ、操縦者は本国に関係なくこの学園で育成されていくので、

？入学した人数分のIS操縦者の育成費用が浮く？これは国にとっても大きいことだ。

ISだけでも国家予算の何割かを割いて行われる一大事業だし、当然国家代表、代表候補生の選出や育成にも、莫大な予算が必要となる。

だがこのIS学園に一度入れてしまえば、その心配はほとんどなくなり、国は技術の開発だけに専念できるのだ。

これほど使い勝手のいい？実験施設？は無い。

「まあ、今それを考えてもねえ、今日は休みだし入ってくるとしても明日でしょ？」

「そうだな、気にしても明日になればわかることだし」

「一夏は・・・その・・・気になるのか？」

「そうだな、まあ気にならないって言えば嘘になるけど」

「・・・そこは気にならないと言ってもらわないと・・・だな・・・その」

「箒も・・・大変だなあ。」

「一夏がここまでトウボクへ・・・ん？」

「唐変木ですわよ、アル、この前織斑先生に言われたばかりじゃありませんか」

「ああ、そうだそうだ。それぞれ。」

「・・・あなたも似たような、ものなんですけどね」

「ん？何か言ったかい？」

「ボソッと何かセシリーが言った気がしたけど気のせいかな？」

「セシリーは何でもありませんわと口をとがらせ、無造作にコップを差し出す。」

注いで来いつてか。

はいはい、いきますよ、お嬢さま。

僕はコップを受け取ると、サーバーまで足を運んだ。

そう言えば一夏達が何を飲むか聞いてこればよかったね。

・・・水でいいだろう。

筭は緑茶でよさそうだし。

セシリーは・・・。なんだろう。

紅茶かな？

僕は、セシリーからしか貰ってなかったコップに加えて、備え付けのコップ三つを取り、

それぞれの液体を注いでいく。

そして整理されていた、トレーを取ってその上に乗せる。

それを片手で器用にバランスを取りながら、もといた席に向かう。

途中すれ違った女子に「わッ、まるでウェイターだね」と言われたが・・・。そんな風に見えるのだろうか。

席に戻ると、そこでもやはり席の周りの女子から同じような事を言われた。

そうかな、と少し苦笑いしてそれぞれの前に、飲み物を置いていく。その姿をセシリアは、ほうっとした顔で見ている。

きっかけはさつき、誰かが言った？わあ、まるで給仕さん？いや執事さんみたいだねえ？という一言。

(アルの執事・・・悪くありませんわねえ・・・)

目の前には普通の制服姿のアルデイがいるのだが、セシリアの目にはフィルターが掛かり、その服装が制服から燕尾服へすり替わり、

「どうぞ、お嬢様」と幻聴まで聞こえていた。

(お嬢様・・・いい、良いですわ！)

そんな事を考えているとはつゆ知らず、アルデイがセシリアに声を

かける。

「あの、セシリー、今更だけど紅茶でよかったかな？」

「良いですわー!」

ガタツと勢いよく立ち、言い放つセシリアに対して、アルディは苦笑いで、「そ、そう・・・」と驚きを隠せずにいた。

その夜、僕と一夏はアリーナ使用ギリギリの時刻まで自主練に励んでいた。

コーチは変わらずセシリーと篝だったが、篝もセシリーも今回はより実践的にと篝は一夏と手合わせ。

僕はセシリーと、射撃訓練に勤しんでいた。

これがまた結構忙しい。昼間やっていた練習は角度をただ合わせるだけでよかったのだが、今回はそれに射撃が追加される。

自分で言うのもなんだが、射撃自体は苦手ではない。

姉も射撃部門で世界一に輝いているし、その姉からある程度の手ほどきは受けている。

だがそれでも、ハイパーセンサーによる瞬時捕捉、スラスター角調整、照準、射撃。

これだけの事を一度に行うのは至難の業だ。

だがそうは言っても、お手本と言ってセシリーは？フレキシブルスラスター？を持たない？ブルー・ティアーズ？で？フレキシブル・ターン？を行い見事にすべての的の中心を捉えていた。

セシリーによると

「私の？ブルー・ティアーズ？には？フレキシブル・スラスター？はありません、じゃあその機動は出来ないのかと言ったらそれは違う。

まったく同じことができないのなら、それに似たことのできる方法で、再現すればいいだけの話。

私が使ったのは、？アブソリュート・ターン？スラスター角を完璧に制御できるからこそ、可能な特殊旋回機動ですわ」

そう考えると、？ストライク・バーディ？にはこの？フレキシブル・スラスター？が付いている。

お手本を見せた相手が、いくら代表候補生とはいえ、こちらはその機動が確実に出来る機体なのだ。

僕は一通りの的に打ち終わると、体勢を立て直して、セシリアの横へ移動する。

成績は……これまた酷いな、ほとんどの外側じゃないか。そのデータを見てセシリーは何か少し考えている。

「ううん……ちょっと？ファイアーフライ？貸していただけます？」

「え、いいけど」

僕はそう言つて、右用の荷電粒子砲？ファイアーフライ？をセシリーに渡す。

受け取ったセシリーは、持ったり、構えたりして感触を確かめ、試しに表示されている的へ向かつて一発撃つ。

当たった的が衝撃音と共に弾け、手元のモニターにデータが表示された。

「……やっぱり」

そう言つて？ファイアーフライ？を僕に返し、顎に手を当てまた何やら考え始めるセシリー。

僕は意図を測りかね、その顔を覗き込む。

「何がやっぱり？」

「先ほどからの、射撃訓練を見て思っていたことですね。難しい角度なら仕方が無いにしても、簡単な角度射撃でも、的を外しかける初めは腕かとも思いましたが、そうかと思うと別も能的にはしっかり当てたりする。」

これはおかしいと思つて見ていましたが、先ほど一度撃つてみてその謎が解けましたの。

だから？やっぱり？なのですか」

「ええと・・・つまり？」

「簡単に言うと、あなたのISは細かな射撃には向いていないと言
う事ですわね。この？ファイアーフライ？も反動が大きすぎますし
・・・。

高火力で狙いもつけずに辺りに砲撃をまき散らす。広域せん滅型と
言えるでしょう」

確かに、あの時一夏に撃った？アヴァランチ？も一夏に直撃したも
の、多くが地面や、アリーナのシールドに当たり爆散していた。

正確に誘導できるミサイル以外は、細々しく狙いを定めて・・・と
いうISでは無いらしい。

・・・待てよ、じゃあこの訓練はもう・・・

「今、この訓練は無駄だからもう終わりで良いと考えませんでした
？それは違いますわ。そう言ったISだからこそ、このような訓練
が必要なのですわ、さあまだもう少し時間はありますし、私がその
・・・で、手取り足とり・・・その」

「また、何かボソッと・・・」

「な、何でもありませんわ！さ、再開しましょう！」

それからしばらく。セシリー教官の鬼のような訓練が続いた。

ああ～もう受付どこよッ！！

無駄に広いわねえ～～～ほんとに！！

電気の消えた通路を受付を探しさまよう少女が一人。

ツインテールで髪をまとめた小柄な少女は、小さなボストンバック
一つを持って見るからに、いらついている。

ついさつき、探せばいいんでしょ！と何も考えずに足を踏み入れた自分を呪いたい。

外見から想像した以上に中が広がったのだ。

ほんともおお〜〜ッ！あああああああ！！！！

わしゃわしゃと、自分の頭を両手で勢いよくかく。

こうなったらISで空から………。

とふと思ったが、その考えはまずい。

特にまだ受付も済ませていない状況で、ISを機動させれば国家問題に発展する。

本国政府の官僚たちが、？頼むから軽率な事はしないでくれ？と頭を下げられるのは気持ちよかったが、それ以前に、少女の中にも流石にまずいという考えはあるようだった。

すぐにその考えを、ゴミ箱へ放り投げ、ため息について足取り重くトボトボと歩きだした。

しばらくすると、どこからか声がする。

それは彼女にとって誰よりも聞きたい声だった。

「結局、お前の擬音講座だったじゃねえか……」

一夏だ！彼女はIS学園に編入が決まった時、確かに実力が認められたその嬉しさはあったが、

何よりその学園に彼がいたという事が何よりもうれしかった。

一年ちよつと会っていない彼としかもこんなところで再開できるなんて……。

これはもう運命だ。明日にでも式場の予約を入れなければ！

そこまで興奮しきった、彼女の頭を一人の女子の声が一気に冷やす。

「一夏の想像力の無さの問題だ！」

「想像力とかの次元じゃねえよ、宇宙人でも首かしげるぜ！………
つて聞いてんのか箒！！」

少女は、物陰に身を潜めさつきとは打って変わって冷めた目で男女を送る。

……今の誰？なんで？あたしの？一夏となれなれしく話してんの？

親しそうに一夏も話してるし。

少女はスクッと立つと、本来の目的であった受付を探す。程なく受け付けは見つかり、手続きも滞りなく済んだ。

「以上ですね。はいこれ生徒手帳です。ようこそIS学園へ、鳳鈴音さん！」

そんな明るい声も鈴音には届いていない。

バツと身を乗り出すと、事務員に詰め寄り一方的に質問を投げかけた。

「織斑一夏って何組かわかります？」

「え！？あ、織斑君ね。転校生にまで知られてるなんて有名人ねえ」

「それで、何組なんですか？」

「一組よ、あなたは二組だから、お隣ね。そう言えば彼、クラス代表になったらしいわ」

クラス代表・・・あ、そーだ！

鈴音の頭にピコーンと電球が灯る。

「二組のクラス代表って決まってますよね？」

「ええ、この時期ですからね・・・それが何か？」

「いえ、別に」

そう言つて、受付を離れた鈴音だったが、別にでは無い。

ちゃんと頭の中では考えている。

待ってなさいよ一夏・・・。

。あたし以外の女の子と、仲良くしてるツケは大きいからね・・・。

足取りは軽かったが、顔は反して引くぐらい怖かった。

いやあ、今日の昼にもここにいた気がする。いや、いたね。

チラツと、壁に掛けられた横断幕を見るそこにはこう書かれていた。
？織斑一夏クラス代表就任パーティ？

ここは寮の食堂で、セシリーの特訓後二人でアリーナのロビーにいたところを、

一組の女子に半ば拉致されて食堂まで連れてこられたのだ。

それにしても騒ぐのが好きだなあ・・・僕も嫌いじゃないけどネ！

「織斑君おめでとー！」

「一組の未来は君に任せた！」

などと、盛り上がっているが・・・。

「セシリー、君一夏に勝つたよね、なのになんで彼が？」

「そうだぞ、セシリア！俺は負けたのになんで代表になっているんだよ！」

僕の質問に便乗して、ガバツと、焦りの表情で迫る一夏にセシリーはさらりと答えた。

「辞退したからですわ、代表を」

「・・・どうして？」

思わず声が重なるが、一夏は納得できていない声だった。

「ど、どうしてと申されましても・・・その・・・そう！あの試合は確かに結果私の勝ちでしたが、内容はどう取っても私の負けでした、だからですわ！」

腕を組んで、フィツと違う方向へ顔を背けるセシリーに、女子が横から茶々を入れる。

「え〜。アルデイ君のためじゃないの〜？」

「セシリア、嘘は体に悪いのよ？」

「う、嘘ではありません！というかはじめて聞きましたわよ、そんな理論！！」

顔を真っ赤にして、大げさなアクションで否定するが、周りの女子のニヤニヤは止まらない。

「セシリアは愛くるしいなあ〜」

「可愛いなー可愛いなー」

「もうッ！やめてくださいな！！それにほら今日の主演は一夏さんでしょう！」

あーセシリアが怒ったくっつと最後まで茶化しながら、女子は一夏の方へと集まっていく。

まったくもう！と鼻を鳴らしながら着席すると、カップに入っていた紅茶を飲む。

「にしてもさ、本当にどうして辞退したんだい？あんなに自信满满だったじゃないか」

「先ほども言いましたでしょう、あれは私の負けだったと」

「本当にそれだけかい？」

「本当にそれだけです！……それにほ、本当の事など言えるはず無いではありませんか……」

「ん？」

セシリアは、何でもないですわとアルデイの追及を、そこで切らせると、昼間と同じようにアルデイへカップを差し出す。はぁ……とため息をつくアルデイだったが、受け取るとサーバーへ向かって歩いていく。

（ま、気を取り直して、お嬢様気分を味わうとしましょう）

セシリアの目には、また再び燕尾服のアルデイが映っているのだった。

翌日。

結構みんなグツタリとしていた。

それもそのはず。昨日のパーティーで騒ぎ過ぎたのだ。

だがそんな事を言っているのは、織斑先生にどやされるのは目に見える。

皆重たい身体をなんとか引きずって、表面上は明るくふるまっていた。

そんなクラスだったが、妙に皆ソワソワしている。

他でもない転校生の事だ。違うクラスだが、やはり気になるようだった。

「そう言えば今日か、転校生のくる日って」

「僕が来る時もこんな感じだったのかな？」

「ああ皆、騒いでいたな」

「私も、あの日は教室に入ってから、その話を幾度となく聞きましたもの」

僕と一夏の周りには、セシリーと箒のいつものメンバーが立っている。

「何でも、中国の代表候補生らしいね」

「へえ、中国人か」

「そう言えば二組のクラス代表は代表候補生では無かったな」

「でも、もう一度決まってしまったものを、覆せないでしょ？」

時期が時期だしね。僕は、箒にサラツと意見を述べる。

流石に転校生が代表候補生でも、決まってしまったものを……。にしても中国ねえ。

いい時だけ先進国、途上国を使い分けるあの国に、正直言って良いイメージはしないかなあ

なんてのを考えていたら、唐突に大きな声が一組を揺らした。

見るとそこには、全身から活発そうなオーラを放ったツインテールの女子が立っていた。

「覆せるんだなあ〜これが！」

効果音をつけるなら、？ドーン！？と言うのが正しい。

腕を組んで仁王立ちするその少女は、自信たっぷりの笑みをもらし、一夏を指さす。

「あたし、今日から二組の代表になったんだからね。一夏、今度のクラス対抗戦覚悟なさい！」

どうやらその口ぶりから、一夏の知り合いの様だ。

そして対する一夏も、彼女を見て気さくに笑う。

「お前・・・鈴、鈴なのか？久しぶりだなあ、にしても何やってるんだ、全然似合わないぞ？」

それを見て、篝の顔が一瞬曇ったのは内緒だ。

「あ、あんたねえ、もうちよつと言つ事考えなさいよ！」

「おい・・・」

その声に、クラス中の顔が引きつった。だが怒り心頭の鈴にはその変化に気づけない。

「大体、あたしがせつかく来てあげてるのに、喜びそれだけ！？」

「おい！」

「こつちが、どれだけびつくりしたと思つてんのよ！TVつけたらあんたがニュースになってんのよ！」

「おい！！！」

「あゝもうさつきから誰よ、うっさいわっねっ！?!?!？」

振り返りざまに鋭い出席簿アタックが顔面にクリーンヒット。当然、織斑先生だ。

手加減などするはずもない。その衝撃でようやく鈴も我に帰り、自分のやらかした事に顔をひきつらせ冷や汗をダラダラ流す。

「ち、千冬さつぷ！！！」

「織斑先生だ、馬鹿ものが・・・邪魔だ、とつと自分のクラスに戻れ」

「つく、一夏！卑怯よ、織斑先生を呼ぶなんて！！！」

「私はこの担任だ、もう一発食らいたいのか！」

鋭い声に、鈴の戦意も粉々に砕け散つたようで、「逃げないですよ」と捨て台詞を吐いて、ようやく嵐は去つた。

それを見送って、織斑先生は鼻を鳴らす。

「・・・ふん、朝から元気のいいことだ。それに引き換えお前は」

どうやら、織斑先生には何でもお見通しの様だ。

「騒ぐなどは言わん、時にはな必要だからな。だがそれを翌日にまで引つ張るな。」

「……丁度いい今日は、一時間目からIS実習だぞ」

織斑先生の口元が緩む。だがそれを決して優しさにとらえている生徒はこのクラスにはいない。

「叩き直してやろう、五分で用意し第五アリーナへ集合しろ良いな？」

「うげっ！？第五アリーナあ！？」

しかも五分の制限時間付き。っていつかここからアリーナまでが大體全速力で走っても五分ぐらいかかる。

「ああ、そうだ言い忘れていた……遅れたらその分数×アリーナ十週の褒美を出してやろう」

それは褒美じゃない。

僕が辞書を開いて調べた時そういうのは罰って言うって書いてあった。

完全に鬼だよ……。

「って、こうしてる場合じゃない！！」

「い、一夏！急ごう！！」

「ああ、そっか、俺たちは更衣室が別だから遠いんだった！！」

僕たちに続いて、女子群もバタバタと教室を後にしてアリーナへ急ぐ。

それを織斑 千冬は実に楽しそうに笑うのだった。

第4話〜転校生はチャイニーズ〜（後書き）

セシリアが可愛すぎて生きるのがつらい。

とか何とか言うのが流行ったような流行っていないような。どうも、しるくです。

流行ったと言えば、去年から現在に掛けて

? そんな装備で大丈夫か??

? 大丈夫だ、問題ない?と言うのが流行りましたね。

その汎用性の高さから。

ジムやザク並みに使い勝手が良かったのでしょう。

僕も使いましたしねw

と、言う所でお時間です。

それでは5話でお会いしましょう。さよならッ!

第5話 嵐のチャイニーズ・憂鬱のプリティッシュ

まったく・・・あの生徒を何だと思ってるんだろう・・・？
あの後結局間にあわなかった、僕と一夏と一部の女子はアリーナの
一番外側を三十周させられた。

ただ、なぜだろうか罰を受けているはずなのに、後ろの女子たちは
意外とにこやかだったのは。

そして、走り終えたらすぐにIS実習。

涙出てきた・・・。

まあ、いいや・・・もう終わったことだし。

どの道ようやくお昼なのだ。

疲れた体には食事、これ鉄則だね。

食堂に入ると、もう既に多くの生徒で、満席に近い状態だった。
食券を買って、食堂のおばさんに渡す。

今日は、趣向を変えて中華にしてみた。

ドーム型に盛られたチャーハン。野菜や細かく切った肉が、食欲を
そそる。

さて問題は・・・座るところが無いことだ。

うん・・・パンとかなら立って食べてもいいけど飯物だからな
あ。

下手にこぼしそうで怖い。

「あれ、アルディじゃないか、おいこっち開いてるぜ？」

あれこれ考えていると、奥のテーブルから一夏の声がする。

そこには今朝、織斑先生に顔面クリーンヒットを貰っていた、鈴の
姿もあった。

そしてソファを隔てて向こう側にセシリーと箒が、座っている。

セシリーも鈴の事が気になるようで、チラチラその様子を観察して
いたが、

箒は、完全にジト目で鈴を見ていた。

まあ今回は、一夏に呼ばれたし、一夏の方のテーブルに行こう。

「助かったよ、満席で困ってたんだ」

「チャーハンか・・・そう言えば、俺も鈴の家でよく食べたなあ」
その一言が引き金で、箒が勢いよく立ちあがると、パンツとテーブルを叩く。

セシリーも立ってきたが、それを後ろから静観している。

「一夏、いい加減説明したらどうだ!？」

「説明って言う・・・?」

「この転校生の事だ、知り合いなのか？」

ジロツと睨むが鈴もそれに、不敵な笑みを浮かべ、睨み返す。

「知り合いつて言うか、幼馴染だよ」

「それは私だろう!」

また大きくパンツとテーブルを叩く箒。

だいぶ苛立っているようだがそれに追い打ちをかける様に鈴が口を開く。

「どーも、一夏がお世話になってます」

「な、なな・・・ふざけるな!」

妙に?一夏が?を強調して言った鈴。

あたかも、自分の物と言いたげな鈴に箒が、怒鳴る。

だがそんな空気を、全く感じていないのか一夏は、笑いながら説明をつけたした。

「いや、箒が引越して、そのすぐ後に店越してきたのが鈴だよ、丁度入れ違いみたいな感じだな」

「ま、まあ幼馴染と言つのは、もうどうでもいい。その・・・食事をしたというのはどうということだ!」

「食事したつてそんなの、そう言うことじゃない。ねえ一夏」

「そうだぞ、箒。丁度鈴の家が中華料理屋で、よく食べに行つただけだ」

「・・・なるほど、店か、店なのだな。店なら、おかしくはないな」

「うん」

必死の形相から一転、安堵しうんうんと頷く筈。

一方鈴は、さっきまでと打って変わって、顔から余裕たっぷり笑みが消え、

そっぽを向いてブツブツつぶやいている。

「一夏の馬鹿・・・なんにも、そこまで正直に話さなくてもいいじゃない・・・」

「あん？おい鈴何言ってるんだよ」

「べ、別に何でもない何でも！」

その間も僕は黙々とチャーハンを口に運んでいく。

「あ、セシリー、水ありがとう」

「いえ、いつも運んでくださいますしね、お礼ですわ」

静観していて状況が少しかう着した時に、セシリーが水を汲んできてくれたようだ。

ありがたいありがたい。

目を再び一夏方面へ移すと今度は鈴が、一夏に訪ねていた。

「で、この子誰？」

「だ、誰だとツ！さっきから言ってるだろう、おさな・・・」

「もー、うるさいなあ、あんたには聞いてないの」

「こ、こらー！」

筈を片手で制すと、鈴は一夏を見やる。

「筈だよ、篠ノ之 筈って名前で俺の幼馴染。そうだなファースト幼馴染だな、で、お前がセカンド」

「ファースト・・・そうか・・・うんうん、そうだな、初めての幼馴染は私だしな」

そう言って納得したようにうなづく筈に対して、今度は一変鈴の顔が悔しさににじむ。

「ちよつと一夏！なんであたしがセカンドなのよ！！一・五ぐらいにしなさい！！」

「やめろって、鈴！苦しいだろ、それに何だよ、一・五幼馴染って

!？」

「お前！一夏から離れないか！！」

確かに謎だ。

まあ、セカンドよりは確かにファースト寄りだけど。

そんな中、何を思ったかセシリーが、いつも通りの腰に手を当てたポーズで箒たちの間に割り込む。

「まあまあ、箒さん落ち着きなさいな。」

よろしいではありませんかファーストなのですから。さて、鈴さんでしたわね。

何でも中国代表候補生だとか。箒さんなどは知らなくて当然ですけど、

私はご存知ですわよね？」

・・・あぁ、なるほど。

初めはどうしたのかと思っただが、そうかセシリーは自分の知名度を、知らしめるいいチャンスだと思っただのか。

相手は注目の転校生だし。

多分セシリーの中ではこんな感じのシナリオを描いているんだろう。
・
・

自分が登場

相手は転校生で代表候補生と注目の鈴

鈴が「知ってるわよ、あんた確かイギリスの代表候補生のセシリアでしょ」的な事を言う

自分は他国にも名の知れ渡った、代表候補生と言う事で株が上がる。と、まあこんな感じだろう。

セシリーが期待と自信に充ち溢れた顔で鈴の返答を待っている。

そして鈴から驚きの一言が！！

「誰あんた、あたし知らないよこんな金髪、そもそも何人？」
あ、固まった。
あまりのシヨックにそのままの表情で固まった。
そして数秒後、セシリーが涙目で帰ってきた。
よしよし、お兄さんが飴玉を上げようね。

……つと、むっ!?

ここ数週間で、発達した織斑先生レーダーが警鐘を鳴らしている。
どこだ!?

辺りを見渡すと、食券の列に並ぶ鋭い眼光を確認した。

横を見る。一夏達はまだ気づいていない。

ぎゃあぎゃあと言い争いの真っ最中だ。

皿を見る。僕の皿は既に完食。

そして前には意気消沈のセシリー。

ここから導き出される答えは!!

?救助できる人物セシリーを連れ、この場を緊急退避?

それからは早かった。

「行こう、セシリー!」

「え!?!、あ、アル?」

僕はセシリーを強引に引くと、そのまま食堂の出口に向かう。

その間にある返却口に皿を戻し、出口付近で織斑先生とすれ違った。

……命拾いしたな……?

あーあー何も聞こえませーん!!

なんとか食堂からの退避に成功した僕とセシリーはそのままふりかえらず教室方面へと走った。

その直後、鉄拳制裁と思われる、鈍い音が三つ、食堂の方から響いた。

はあっはあはあ……ここまでくれば大丈夫だろう。

僕は、教室のドア付近で立ち止まると、振り返りセシリーを見る。

「ごめんね、食後に走らせちゃって・・・」

「い、いえ・・・そのそれはよろしいのですが・・・その・・・えっと」

ん、よく見るとセシリーの顔が心なしか赤い気がする。

息切れ・・・ではない。肩で息もしていないみたいだし。

「その・・・手を・・・」

「手？」

僕は視線を落とすと、そこにはしっかりと僕の手がセシリーのか細い手を握っていた。

一気に僕の顔が熱くなっていくのが分かる。

「わああ、ご、ごめん!」

「・・・あ」

あわてて手を離す。セシリーが何かをつぶやいたようだったが、それはよく聞き取れなかった。

・・・しばしの沈黙の後。

互いに顔を見合う。

僕もそしてセシリーも顔が真っ赤だった。

僕はそれを誤魔化すように、視線を下に向ける。

そこには、さっきまでセシリーの手を握っていた僕の手があった。

その手には、まだ微かにだが、セシリーの手の温もりが残っていた。

わわわわ・・・アルったら、いきなり手を!

セシリアの頭の中は、パニック寸前だった。

だが、食堂で意気消沈していた自分の手を、いきなり取られ、

状況を把握した段階では既に頭がオーバーヒート状態

だったのだから、それを思うと今の状態は、これでも落ち着いた方

なのかもしれない。

でも……あの時手を……と言った自分を今さらになつて少し悔やむ。

もう少し繋いでいればよかつたと。

それにセシリアは、どこか懐かしいものを感じていた。

確か……そう、あれはアルとサクラメントの、アルの地元を一緒に走り回っていたあの頃。

アルはあの時も、今日みたいに私の手を握ってくださいさっていましたわね。

「この路地に入るんですの？」

きよとんとした顔でアルデイに言うセシリア。

お互いにあどけなさの残る、幼いあの頃。

「そうだよ、この先に階段があつてね、その上から見る景色が綺麗なんだ」

気さくに笑う。その笑顔がセシリアは好きだった。

彼が笑うたびに、自分の心臓がドキンと跳ねあがるのが分かるくらいだ。

「ですけど……せ、狭いですわね」

「大丈夫さ、セシリアは小さいから」

「全く、レデイに対して細いとおっしゃるならまだしも、小さいというのは、失礼では無くて？」

「ははっ、僕は別に何が小さいとまでは言つてないよ」

「な、そう言う事を言ってるんじゃないやありません！」

ポツと赤くなる顔だったが、それは彼に対してなのか、彼の言ったことに対してなのか。

「ほら、行こう！」

またセシリアの手を取って路地の奥へ進んでいく。路地の壁に擦れて汚れていくドレス。

だがセシリアにはそんな事気になど、ならなかった。

セシリアの気を引いていたのは、自分の手を握っている一人の少年だったのだから。

しばらく路地を、進むと彼の言った通り、階段が目の前に現れた。それを一段一段登っていく。

かなり長い階段だ。

「もう、息切れ？」

「まだ・・・大丈夫ですわ！」

彼なりの励ましもあって、二人はようやく屋上へ辿り着く。

彼が住んでいたのはサクラメント市内でも結構山寄りの小さな街だった。

そしてそこは、簡単に言えば低所得者の暮らす一昔前のNYのハーレムの様な場所だ。

そして、この場所は、その中でもまあまあ高い、建物の屋上。

今思い出してみると、多分それは高いと言っても、すべてが一望できるほどの高さは無かった。

自分の住んでいたお屋敷の屋上の方が高かったぐらいだ。

でもその景色は、それよりも低かったのに、とてもきれいだった。

既に傾き始めていた、太陽が遠くに見えるサクラメント中心部の摩天楼を美しく照らし出し、

サクラメント川に、夕日が映えるその光景は今でも鮮明に思い出せる。

「綺麗でしょ」

「ええ・・・本当に」

「君と、どっちが綺麗かな」

「ちょっと、くさすぎですわよ」

「アメリカでは、意外とまだ主流なんだけどなあ」

そう言っ頭をかく彼を、私は優しく見る。

そして今度はまた、もと来た道を彼に手を引かれ帰るのだ。

帰れば、私は用意された部屋に通されて、彼とは別々になってしま

本気でいつそのまま帰らなかつたらどうなるのだろうと考えたこともあった。

だから少しでもその手を、握っていたくて帰りは決まってゆっくり歩いて帰った。

遅くなつて、母親に怒られようともそれはそれで、よかった。

母親の仕事を心配しつつも、反対に交渉がもつと長引いてくれることを望んでいた。

懐かしいですわね。

本当に懐かしい。

いまだに、昨日の事を思い出しているのかと錯覚するぐらい鮮明なその記憶に思いをはせながら、

セシリアは、アルデイと繋がっていた方の手を、もう片方の手でそっと包む。

そこには微かにアルデイの温かさが残っていた。

ど、どうしよう。

セシリーが、何が引き金かわからないがトリップしてしまった。

時折、頬を染めて体をくねらせたり、そうかと思うとどこか懐かしそうな目で宙を見ていたり……。

流星に声がかげづらい。

そして、何より周囲の目が痛い。

……これどうしよう。

いつも気丈にふるまうお嬢さんも、今はただの扱いに困る危険人物になり下がっている。

つて、もうすぐ予鈴が鳴る時間じゃないか！

と、とにかくセシリーを教室の中に入れよう。そうだ、そうしよう。僕はセシリーをとりあえず教室の中へ入れるべく後ろから押す。

その間も、お構いなしに色々考え事をしているようで、微妙に動くセシリー。

ちよっと、動くのだけはやめてほしいなあ。

こっちもバランスを取るのが難かし……!?!?
突然バランスが崩れる。

何が!?

一瞬足元を見ると、そこにはドアスライドの溝が。

……嘘でしょ。

「え!? あ、アル、あなた何をつて、きゃああああ!!!」

「うわつと!!!」

ようやく我に返ったセシリーがこちらを振り向くが、それで体勢が立て直せるわけもなく、

そのまま一緒に盛大に倒れてしまった。

一瞬の衝撃の後、痛みと一緒に、何か手の下に柔らかい感触が……。

ん? 床にしては……あまりに……。

焦点がまだぼやけているが、セシリーに怪我は無いようだ。

少なくとも顔には。

……さつきから何を、搦んで?

「わあ……アルディ君大胆……」

だい……何?

そりゃダイナミックに転んだけど。

そしてようやく、焦点が合って来た時、僕はその意味を理解する。
……こりゃあ。

柔らかいわけだ。

僕の右手は丁度セシリーの胸を……。

そして目の前のセシリーは、ワン、ツー、スライ、フォー……
少なくとも四つ以上額に、血管が浮き出ている。

「あ……」

ニコッ

ドガンッ!

笑顔とほぼ同時に、ブルー・ティアーズを部分展開した右腕がさく裂。

僕は人生初体験の、天井にめり込むという貴重な体験をした。

「さて、それではSHRを始める……。どうしたサウスバードその怪我は」

「……何とかというか、自業自得です……はい」

昼からの授業も終わり、今は織斑先生のSHRの時間だ。

これが終われば、みんな大好き放課後が始まるのだが、どうもセシリーがあの場合で、ご立腹なようで……。

何度か話しかけてみたのだが、すべて追い返されてしまった。

「ふむ……まあいい。それよりも来月……まあもう残すところ数週間と言ったところだが、

いよいよクラス対抗戦が始まる。このクラスの代表は織斑お前だな

「はい」

「しっかり準備して、挑めよ。私のクラスにいるという意味を、よく考えてな」

つまり勝ってることが。

姉とはいえ、もの凄いプレッシャーをかけるな、織斑先生も。

「それから、サウスバードもな」

「はい!？」

「うむ、言い返事だ」

声が裏返ったのに、何が良い返事だ!

って言うか僕が何?

「あの、先生……僕がなんですか?」

「喜べサウスバード、お前はクラス代表選の補欠候補に選ばれたぞ」

選ばれた、じゃなくて選んだんでしょ！

「いや、そんないきなり、僕はそんな話聞いてませんよ!？」

「ヨカッタナア、イヤアホントウニヨカッタ!」

一夏・・・君か!!!

「何考えてるんだよ君は、代表らしく堂々と一人で挑みたまえよ!」

「だって、お前俺は素人だぞ!？」

「そんなの、僕だってそうだよ!!」

「まあそう、言うなサウスバード。私が許可したんだ。

織斑の場合練習中にも下手なミスを犯しそうだからな。それでもし
もその事があれば一組は不戦敗だ。そんな情けない結果を出せると思
うか?」

出せばいいじゃないかあ。

見栄は張ると下手見るんだよ?

だが相手は織斑先生だ。

何を言っても、これが覆るなんて言うことは無いだろう。

「一夏・・・怪我したら、本気で怒るからね」

諦めて、念だけは押しておいたが・・・。

まあ、そうそう滅多な事は怒らないだろう。

放課後。

今日は、他の誰ともつるむことなく、一人部屋に帰ってきていた。

放課後すぐにセシリーを探したが、既にいなかったし、一夏は一夏
で篝との自主練があるとのことで、アリーナへ行ってしまっし。

つてかよくよく考えたら、僕友達少ないねえ・・・。

椅子に座りながら、考え事。

色々考えることが多すぎる。

ISの操縦もそうだし、今回のクラス対抗戦そしてセシリーの事も
だ。

優先順位をつけるなら・・・

一：セシリー

二：I Sの操縦

三：クラス対抗戦

と言ったところだが、最優先しなくちゃいけないセシリーが取り付く島もないのでは。

どうしたもんか・・・。

その時、部屋にノック音が響いた。
ん、誰??

再び、響くノック音。

次第に音が大きくなってような・・・。

つたく・・・わかった、わかりましたよ!

もう、誰だよ。

そして、僕がドアノブに手をかけた次の瞬間
バンツ!!

勢いよく開かれた、ドアが僕の顔面に直撃する。

「いったああああ!!!!」

「ノックしたらすぐに出なさいよね、全く!!!!」

その悪びれる様子もない、気丈で勝気な声・・・

「や、やあ鈴・・・」

「やあ、じゃないわよ!ちょっと来て」

「なんで?」

「いいから!」

無理やり僕の首根っこをつかむとそのまま部屋から引きずり出される。

この学園の女性は、首根っこを掴んで男子を引きずるのがトレンドらしい。

初めて知った。

鈴に引きずられ、連れてこられたのはアリーナだった。

放課後と言う事もあり、自主練に励む生徒たちが見受けられる。その中に白い専用機？白式？を展開する一夏の姿もあった。

「準備してきなさい！」

「だから、なんで！」

「な、なんでって……そ、それは」

「それは？」

鈴は無言で、僕の頭をつかむと、一夏の方向へ顔を向けさせる。

「あそこに誰がいる？」

「一夏と箒だけど……」

「そーよね、そう。あの女と一夏がいるわよね」

「それが僕と何の関係が……」

全くわからない。

箒と一夏が自主練しようが、彼らの勝手だと思っただけ。

「どうして、一夏が、あの箒ってこと一緒に居るのかしら」

「自主練でしょ」

「あたしは何も聞いてないわよ！」

言う必要が無いだろう。って突っ込んだら、何されるかわからん。

「だから手伝いなさい」

「……はい？」

「だから、手伝ってって言うてんの！」

何を手伝えと。この状況で僕が手伝わなきゃいけないことが、これまでの会話であっただろうか。

「あーもう、分かんないやつね。一夏とあいつが、

自主練してる所にあたし一人乗りこんだら、あたしががつついてると思われちゃうじゃない！」

「……ああ、そうか。そう言うことか。

つまり鈴も。

「一夏が好きなのか」

「ばっ！声がでかいのよ！！なんでアメリカ人はそう言う事をズバツと言うかな！！！」

真っ赤になつて、詰め寄る鈴。

どうやら凶星っぽい。

いいねえ、一夏モテモテだ。

要は鈴が言いたいのはこういうことだろう。

篤と一夏が自主練習しているのが気に入らない。でも、一人で出ていくと、なんだか一夏に、がつついていようで恥ずかしい。

だから僕と一緒にあたかも？自主練習しに来ました？という事を装つて一夏に近づきたい。

多分そう言うことだ。

あの唐変木の一夏の事だ。

どれほどあからさまに近づこうと、自主練習で、たまたま出会ったという意見は通りやすい。

だけど・・・

なんだか、面白くない。

「なんか、それ僕にメリットでもあるの？」

「多分無いわよ」

「じゃあ、やだ」

「あんたねえ・・・立場わかってるのかしら、初めからあんたに・・・」

さつきとは比べ物にならないほどの剣幕・・・。

そうだ、さっきのトレンドに追加しておこう。

この学園では、蛇睨みも最近流行りのトレンドなんだな。めつきり流行には疎いから知らなかったよ。

そして、僕が聞きたくないセリフが、容赦なく放たれた。

「拒否権なんて無いのよ」

・・・まあ、あれは事故・・・みたいなものでしたし。

流石にあれば、やり過ぎたでしょうか……。

セシリアは教室に戻って、先ほどアルデイに自分が取った行動を考
えていた。

い、いやでも、あれぐらいは、危機感を持たせるには丁度いいの
も。

アルデイは、自分では気が付いていないだろうが

一夏程では無いにしても、唐変木である。

まあ、察しが良い分下手な事を言わないが、逆にそれがどこかさみ
しい時もある。

そうですね、これぐらいなら大丈夫ですわよ！

きつと、しばらくすれば向こうの方から、またアクションがあるは
ずですし！

グツと拳を握って二度ほど頷くセシリアの耳に、少し気になる話し
声が聞こえた。

「ねえねえ、専用機持ちがアリーナで自主練してるんだって！」

「マジで！？専用機って言うത്……」

「何でも、うちのクラスの子と、転校生と一緒に自主練してるらし
いよ」

え？

このクラスの？

一組の専用気持ちと言えば、一夏とアルそして自分だ。

初めは一夏が鈴と自主練をしているのかと思ったセシリアだったが、
一夏は今日も簿と……。

ま、まさか！

嫌な予感がする。

そう思うが早いかセシリアは、アリーナへ向かって走り出していた。

ああ・・・もう。

何だってこんなことに・・・。

アリーナへ入ると、ぶつかり合う音や掛け声の迫力に圧倒される。

「何ボケっと、突っ立ってんのよ」

声の方を見ると、ピンクのISスーツに身を包んだ鈴がそこにいた。そして腕を組んで自信たつぷりな笑みを、浮かべている。

「ふふん、あそこに一夏達がいるのね」

渋々見やると、一夏達はアリーナの奥の方で打ち合っていた。

「良い自然に、近付くわよ」

「はあ・・・」

「あんたも、男ならここまで来たら、諦めなさい」

「諦めるの・・・？」

「とつととISを展開しろお!!」

鈴にせかさされ僕は？ストライク・バーデイ？を起動する。

いつも通り銃弾型のネックレスが光、一瞬の内に装甲が展開される。

「あ、あんたねえ」

「今度は何!？」

ISを展開しろって言うから展開したのに、怒られる筋合いなど無い。

「なんでそんなに大きいのよ!!」

「そこは、僕の所為じゃないよ、アメリカに文句言って!」

やっぱりみんな言うことは同じ。

?大きい?

もう言われ慣れたが、こんな理不尽な言われ方は初めてで、ちょっと斬新・・・。

「もう、良いわよ。ほら行くわよ!」

鈴もISを展開する。

鈴のISは、赤みがかった黒色で、?ストライク・バーデイ?ほどごつくはないものの、

アンロック・ユニットを持ち、肩には大型のスパイクアーマーが取

り付けられている。

ストライク・バーディにその詳細が表示される。

「?甲龍?・・・だめだ漢字は弱い」

続いてローマ字表記が記されてようやく読むことのできた僕だったが・・・。

こ、これは・・・。
どうするかな。

「これなんて呼べばいい?」

「シエンロンでもコウリユウでも、どっちでもいいわよ」

こつりゆうか・・・うんそれでいい。」

「で、どうするのさ、展開はしたけど」

「んゝそうね。すぐに行ってもいいんだけど・・・せつかくだし・

・・・」

「せつかくだし?」

また嫌な予感がするぞ。

「模擬戦しよう!」

やっぱり・・・、ほんと戦うのが好きだな・・・。

だけど、これはこれでいい経験かもしれない。これまでセシリーにばかり、頼って技術を教えてもらったけど、実際その技術がどれほど身についているのかまでは分からなかったし。

それに相手は、見た目からわかる近接型。

一夏の初陣では、接近を許しちゃったしなあ。

それにISは戦い方や戦闘経験から学んで、自己発達していくものらしい。

こういう経験を積んでいくことは、デメリットにはならないはずだ。

「・・・ふう、分かった」

「それじゃあ、準備しなさい」

鈴が一気に浮上する。だが僕はそれを追うことはしない。

このISの基本戦法は、?フレキシブル・ターンを使った固定砲台?なのだから。

しばしの沈黙の後、鈴が一気に間合いを詰めてくる。

「ハアアアアッ!!」

僕は、落ち着いてセシリーの教えを、思い出す。

「?あなたのISは細かな射撃には向いていないと言う事ですわね?

僕は、?ファイアーフライ?を構えると、狙いなど定めずその方向へ連射する。

荷電粒子砲は連射には向かないが、一発あたりの攻撃力は高い。

発射間隔があるとはいえ、直撃すれば大きなダメージを避けられない鈴は、一気に高度を下げ、

今度は、ほぼ真下から、こっちに接近する。

「威力は高いの揃ってるみたいでも、やっぱりその大きさ!早さは無いみたいねッ!」

それはどうか

ハイパーセンサーで位置を瞬時に把握し、?フレキシブル・スラスト?が稼働。

素早く鈴を正面にとらえ同様に弾膜を張っていく。

「つく!なるほど、そう言う戦い方か!!」

「近づかれたら、手も足もでないんだよ!」

また再び、距離を取る鈴。一定の距離を取って言ったん動きを止める。

そしてこちらに、今までで初めて、笑顔を見せた。

「やるじゃない!」

「それはどうも」

と言っても、僕がここまで代表候補生とやりあえているのは、紛れもなくセシリーのおかげだ。

まあ相手は本機の半分も出してないんだらうけど、それでも、何もレクチャーを受けなかったら、

恐らくはこの攻防などなく、一瞬で終わっていた。

僕は着実に、セシリーの教えが身についていることに喜びを覚えつつ、鈴との模擬戦に再び身を投じた。

アリーナの観客席からセシリアは二人を見ていた。アルと、あの鈴という転校生が模擬戦をしている。やはり、予想は的中していた。

・・・はあ、私馬鹿ですわね。

そう自分を自嘲する。

アルデイは、私の態度に見切りをつけて、あの鈴との模擬戦の方を優先したのだ。

そう、自分によりメリットがあるから。

フツ・・・。

今まで浮かれていた自分が馬鹿らしい。

何が危機感だ。

アルデイには初めから私の事などどうでもよかったのだ。

あの笑顔を見てもわかる。あんな笑顔私の中には見せたことなど無かった。

きっと教えを受けられれば誰でもいい。

ほんと、馬鹿ですわね・・・。

フラフラする足取りで、アリーナを出ていくセシリア。

その後、アルデイが鈴によって撃墜されたが、それはもっとうでもいいことだった。

そう・・・

もう、どうでもいい。

第5話〜嵐のチャイニーズ・憂鬱のプリティッシュ〜（後書き）

デレリアさんが可愛くて（以下略

こんちゃ！しるくです。

お読みいただきありがとうございます

次回ぐらいで鈴と一夏のクラス対抗戦をかければいなあ・・・
そう言えば、明日からバイトですが、いまだに水とかは入ってこない模様。

それに原発は廃炉でしょうね、
間違いなく。

海水も入っちゃいましたしね・・・

そんな中でプロ野球とか・・・セ・リーグ舐めすぎだよね・・・

そんな感じ。では皆さま6話でまたお会いしましょう！

第6話 くどん底アメリカン・不敵なアンノウン

全く、踏んだり蹴ったりだ・・・

あれ、この言いだし似たようなのを前回も・・・まあいいや。

踏んだり蹴ったりとは鈴の事である。

ドアパンチされて拉致された後、流れて模擬戦に突入。

結局最後は、鈴の？双天牙月？という青龍刀の餌食になって、地面に叩きつけられてしまった。

大型の？ストライク・バーディ？をいとも簡単に・・・。
なんてパワーだ。

一夏のそれが、スピードだとすれば、鈴のそれは、近接は近接でもかなりのパワータイプだろうか。

アリーナの更衣室を出て、ロビーまで出ると、フラフラと歩くセシリーを見つける。

ん？

な、なんだろう、凄く危なっかしいな。

そう思っていた矢先、段差につまづいて転ぶ。

ああ、もうなにやっつてんだか・・・。

「セシリー大丈夫・・・!？」

セシリーは差し出した手を乱暴にはらうと、これまでにないほどきつい拒絶のまなざしで僕を射抜いた。

とっさの事に、少し茫然としてしまった僕だったが、その態度が気になって既に一人で立ち上がりさっさと歩きはじめていたセシリーを追う。

「ちよ、ちよつとセシリー！」

僕は腕をつかむ。だがそれをセシリーはまたも振り払った。

「触らないでくださいな」

「ひよつとして、怒ってる・・・よね」

当然のことと思いつつ、そんな言葉しか出てこない僕のボキャブラリーの無さに呆れてしまう。

「怒る、何に対してでしょう？私、別に怒ってなどおりませんけど」

「いや、あの……」

明らかに怒ってるじゃないか……。

この上ないほどに。

やっぱり、あの教室での事を……

「あの事でしたら、別にもう何とも」

僕が今想像しようとしたことを先読みされて否定される。

あれ？じゃあ何をそんなに。

「もう良いですわ」

話を切つて、再びスタスタと歩いていくセシリー。

待て待て、全然意味がわからないぞ！

「セシリー、一体何なのさ！言ってくれなきゃ分からない！！」

「言ってみましたわよ、これまでも！」

「え！？い、言っていないだろ、何がだい？はっきり言わないなんてセシリーらしく……ッ！」

言いかけた刹那、僕の右頬に鋭い痛みが走っていた。

状況はすぐにわかった。

セシリーが僕の頬を叩いたのだ。

流石に叩かれることを予想していなかった僕は、困惑のまなざしでセシリーを見る。

え、泣いて……。

「私らしい！？何も知らない、何も気づいて無い、あなたにそんなこと言われる、筋合いありませんわ！！」

ブロンドの髪を振り乱しながら、かぶりを振ってヒステリックに叫ぶとそのまま背を向け走り去る。

「あ……」

僕はなぜか、セシリーの名を呼ぶことも、追いかけることも出来ない

かった。

僕は部屋に戻ると、いまだにジンジンする頬をさすりながら、PCの電源を入れる。

「……はあ、一体何をしたって言うんだろ。」

セシリーは、教室での一件は、どうでもいいって言ってた。

「じゃあ、他に何が？」

全く訳がわから……ん？

PCの電源を入れると同時に、画面端に、ネット通話の着信通知が来ていた。

アドレスは……姉さんだ。

着信時刻は、もうほんの数分前。

僕はすぐに折り返し発信の準備をする。

僕のPCには既にカメラとマイクが内蔵されているので、周辺機器は必要ない。

数秒の呼び出しの後、画面に姉さんが映し出された。

「アル、少し……待って」

ヘッドホンの調子を確認する姉さんそして、最初少しノイズがかつた声が次第に鮮明になっていく。

「あーあー……聞こえてるわね？」

「うん、大丈夫だよ、それで何の用？」

「酷い言い方ねえ、遠く離れた異国での生活に心を痛めてないか、心配で連絡してるのに」

「……嘘だね、大方ISの事でしょ」

「ソフツツ、ま、それぐらい察し付くわね……ってその頬どうしたの？」

僕はとつさに右頬を隠す。だが時すでに遅し。

入学一ヶ月で、女の子にひっぱたかれましたなんて、恥ずかしくて言えるわけがない。

「ま、まあ・・・こ、転んじやってね」

『・・・嘘ね、姉さんに嘘を吐こうなんて、百年早いわよ』

流石は？裏切りのローラ？なんておっかない二つ名をつけられただけの事はある。

嘘やはったりで、姉の右に出る日は、おそらく姉生きている限り無いだろう。

「ああ・・・うん」

『何があったのか、姉さんに話してみなさい、解決にはならないかもしれないけど、』

糸口ぐらいなら見つけられるかもよ？』

「・・・実は」

僕は今日、あったことをありのまま話す。

包み隠さずだ。隠してもしょうがない。どうせ見透かされるのだから。

「・・・と、言うわけなんだ」

『セシリア・・・セシリア・・・どこかで聞いたような名前ねえ』

姉さんも、セシリーの事を微かにだが覚えているようだ。

だが、中々名前と顔が一致しないのか、首をかしげて考えている。

「ほら、昔姉さんを、勧誘に来た女性実業家の人がいたでしょ。あの人と一緒に来た女の子だよ、ブロンド髪の綺麗な・・・」

それでようやく思い出したらしい。ポンっと手を打ち、笑顔になる姉さん。

『ああ、居たわねえ。あの子か・・・それで、あなた本当に心当たりないの？』

「教室での一件以外、怒る要素が分からなくて・・・」

『ふむむ・・・いい、アルディ。女の子って言うのは意外と小さいこと、自分が何気にやってることでも気になって、嫉妬とかしちやうもんなのよ』

「嫉妬って・・・それは、好きな人にやるもんでしょ」

『・・・アルディそれあなた、本気で言ってるの？』

姉さんの顔がい一気にジト目へと変貌する。本気も何もないんだけどな……。

だって事実だし。

『はぁ……もう少し物分かりが良いと思ってたけれど……』

「どういう意味さ」

『まあいいわ、そうね……。もう一度よく、これまでの自分の行動そして相手の行動や言ったことの意味をしっかりと考えなさい。絶対その中に答えは有るはずだから』

言い聞かせるように僕に言う姉さん。

よく考えろって言ったって……。うん……。

『女の子は、いつでも本当の事を言われると弱いものなのよ。』

あなたも嘘ばかり言っていないで本当の事言ってみたら？』

最近嘘は言っていないし、言う暇もないに等しいんだけどなあ。

だって最近セシリーとの訓練に忙し……。訓練？

なんだろう、何か引っかけ……。』

『後は自分で考えなさい。……。ハイツこの話はここまで！本題に移るわよ』

パンツとてを叩いて話題を切り替える姉さん。

その後ISの事を色々聞かれたが、僕の頭は？そんな事？など全く考えていなかった。

我ながら馬鹿だと思う。

まさか戦いに夢中になって本来の目的を忘れるとは……

鈴は意気消沈していた。

そう、鈴の？自然に一夏接近作戦？は失敗したのだ。

「はあっ!!」

「しまっ!?!」

鈴はアルディの射撃の一瞬の隙に間合いに入ると、軽快なフットワークを駆使して?ファイアーフライ?を左右に蹴り飛ばす。

そして無防備になった胴体に蹴りの回転そのままに青龍刀?双天牙月?を叩きこむ。

元々重い?ストライク・バーディ?だったが鈴の突貫の移動エネルギーも相まって威力は充分。

そのまま、地面にたたきつけられた。

「ふんっ!舐めんじやないわよ、こう見えてもあたしは中国の代表候補生なんだからね!」

高笑いをして、アルディを見下す鈴に、唐突に声が掛かる。

「おお、鈴じゃないか、相変わらずやるのが派手だなあ
しまった……」

この時、鈴の顔は多分誰にも見せられないほどに?しまったあああああっ?という顔になっていたに違いない。

鈴の頭の中で、小さな鈴たちが自分をパカパカ叩いているのが分かる。

あたしの馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿!!

本来の予定では、アルディのISが長距離戦仕様と言う話は聞いていたので、わざとらしく攻め手にかかるふりをして、距離を離し

「あら、一夏自主練?」

「鈴もか、精がでるな」

「クラス対抗戦負けないわよ!」

「俺だって!」

となつて、模擬戦を中断するはずだったのだ。

それが、夢中になった拳句、トドメまで……

当然周囲からも注目されるし、気付かれずに一夏に近づくことも出来なくなつてしまつたのだ。

今回は、一夏から声をかけてくれたからよかったが、かけてくれな

ければ完全に詰んでいただろう。

だが、何にしてもだ一夏に声をかけられたことには変わりない。意気消沈するのは、いつでもできるが、一夏と話せるのはこの機会しかないのだ。

そう考えを改め、鈴は更衣室へ消える一夏ともう一人・・・（名前忘れた）を追いかけて行った。

「ふう・・・」

一夏達が更衣室へ戻った少し後をつけて鈴が、更衣室へ入る。

あの女も一緒だ。

あの女は既に、着替えを終わっていたが、一夏はまだ着替えておらず、額には汗が滲んでいる。

ふっふっふ・・・鈴は、自分のロッカーから持ってきた、

スポーツドリンクとタオルを手に不敵に笑う。

そしてタイミングを見計らって、飛び出した。

「一夏、お疲れ」

出来るだけ、スマートに。一夏と話せる喜びを押し殺して鈴はあたかも、さらりと言う。

そして持っていたスポーツドリンクとタオルを、一夏に投げ渡した。

「お、っと・・・サンキュー鈴、丁度喉が渴いてたんだ」

「いいわよ、別に」

いい、良いねあたし！超自然じゃん！初めっから、こうすればよかったかのかも。

「ぶはッやっぱり、運動した後のスポーツドリンクは格別だな、そういうえば鈴お前自分のは無いのか？」

「え！？」

そうだった、一夏にあげることしか考えていなかったから、一本しか用意しなかったが、よく考えれば当然の疑問だ。

ど、どうしよう・・・何か・・・何か言わないと・・・。

だがその時、鈴にとってそして後ろで、ジト目睨みをしていた筈にとつても爆弾発言が一夏から発せられる。

「・・・じゃあこれ飲むか、お前も喉乾いてるだろ？」

「え!?!」

待つて待つて・・・これって・・・これって・・・間接キスなんじゃ・・・!!

当然鈴に断る理由など無い。むしろ早く欲しいくらいだ。

だが、それを無言で済ませる筈では無い。

「ば、馬鹿もの!!そ、そんな事が許されると思っているのか!!」

「ちよつと、何勝手なこと言つてんのよ、えーつと・・・なんとかさん。一夏はあたしにくれるつて言つたんじゃない、一夏の許可があるんだから、あなたには関係ないでしょ!!」

「なんとかさん!?!」

筈は名前すら覚えてももらえていないことに、そして鈴のあまりの態度に、いつもの怒りボルテージが二倍早く上がっていくのが自分でもわかった。

それを鋭く察すると、鈴はまた言葉を続ける。

「もー、いい加減引つこんでよ、そこ通行の邪魔だよ」

「き、貴様いい加減にしろ!!」

筈は声を張り上げ、一夏の手からスポーツドリンクをかつさらうと、鈴の見上げる先で、

スポーツドリンクを一気に飲み干す。

それを見て今度は鈴の怒りが一瞬で沸点に達した。

「あああ、あなたね何やつてくれてんのよ、あたしのよ、それ!!」

「ふんつ、そうだ一夏、今から代わりに何か買ってきてやるう」

鈴の夢も希望もすべてを打ち砕いた筈が、勝ち誇った顔で更衣室を出ていく。

それを、悔しさで歪む目で、睨む鈴だった。

・・・くつそあ・・・あの女~~~~

戻ってきたら覚えて・・・ん?戻ってきたら・・・。

鈴は、急激に冷めていく頭で辺りを見回す。

「……あたしと、一夏だけじゃん！」

そう、さっきのやり取りの間に、ほとんどの利用者は更衣室を去り今は一課と鈴しかいない。

あのバカ女、やったことは許せないけど、いいタイミングで出て行ってくれたじゃない。

「全く、箒も……悪いな鈴。あいつも悪い奴じゃないんだけど、ちよつと色々不器用なんだよ」

「別いいわよ、そんなに喉乾いて無かったし」

「でも、結構、欲しそうな……」

「大丈夫よ！……それより……さ」

急に打って変わってもじもじと、しおらしくなる鈴。

それに一夏はほんの少しだけ、心を揺さぶり一夏の頬を少し赤く染めていた。

い、一夏が、その赤くなってる……。

一夏が少しなりとあたしを女友達ではなく、

女の子として見てくれているという事が、分かったただけでも鈴はうれしかった。

だが、鈴はあえて、それよりも少し踏みこんで質問をする。

「その、一夏は……あたしが居なくなつて、さみしかった？」

「そ、そりゃ、遊び相手がいなくなつたわけだしな」

うん、でもこういう所はやっぱり鈍感だ。まあそういう所も含めて好きなわけだが。

「そうじゃなくてさあ……なんて言ったらいいのかなあ」

聞き方に困っていると、足早にスポーツドリンクを買いに行った箒が帰ってくる。

「……っち、こいつ早い……」

箒はダンッと、ベンチにスポーツドリンクを叩きつけるように置くと、チラッと鈴を見て余裕の笑みでこう言った。

「今日は、シャワーは先に使って構わん、ではまた後でな」

それだけを言い残して帰って言ったのだが、鈴には気が気では無いし、シャワー!?なに、あの子とどういう関係なの!?

そんな気も知らず一夏は、明るく助かるぜと、手を振っていた。

「い、一夏!?!あの子と・・・シャワーって何の話!?!」

「え?何のつて、シャワーの先か後を決めて・・・」

ええい、そう言うことじゃないのよ、この朴念仁!!

「だからなんであの子と、どういう関係よ!?!」

首をゆさゆさゆすつて、問い詰める鈴に一夏は、

ようやく意味を理解した一夏は、鈴を諭し落ち着かせると説明した。

「箒とは、部屋が一緒なんだよ。それでシャワーの順番とか言ってたわけ」

「一緒!?!じゃああの子と、寝食を共にしてるってわけ?」

「まあな、でも箒で良かったよ、幼馴染だし気心も知れてるからな」

そうか・・・なるほど・・・。

ふーん・・・じゃあ

「幼馴染なら良いのね・・・フッフ・・・幼馴染ならいーんだ・・・フッフッフ」

「り、鈴・・・お前怖いぞ・・・」

あの女見てなさいよ!!--!

鈴は不敵な笑みを絶やさず、一夏の不安を余所に次なる作戦を考えていた。

うーん・・・わからん。

あれからずっと、セシリーの怒った理由を考えていたけどさっぱりだ。

姉さんは、これまでの事を全部考えてみるって言ってたけど、考え
ても糸口すらつかめない。

あ~~~~もう……。

僕は、何か飲み物を飲もうと冷蔵庫を漁る。

「あれ？」

あいにく冷蔵庫には飲み物は全く入っていないかった。

入っていたのは、食べかけのスナック菓子とゼリーののみ。

……そう言えばこの前、全部飲んじゃったんだっけ。

仕方がない、購買に行こう。

僕は財布と、カギを持って部屋を後にした。

丁度、階段を降りる直前だったかに、誰かのどなり声がある。

……この鋭い声は……筭？

気になった僕は、その声がした部屋を探そうと思ったが……すぐ
に見つかった。

なにせドアの前が黒山の人だかりだったのだ。嫌でもわかる。

僕は手近な生徒に声をかけた。

「何の騒ぎだい？」

「あ、アルデイ君、よくわかんないけど篠ノ之さんと、今日転校し
てきた子が騒いでるっぽいよ」

ふむ……よくわからないシュチエーションだな……。

僕は女の子の間を縫って、部屋にたどり着く。

その間、色々当たるものがあつたが、邪神よ去れ、信ずる者は救わ
れるのだから精神で乗りきった。

ドアの前に立つと、扉に耳を当てて中をうかがう女子三名と目が合
う。

「アルデイ君、中々面白いことになってるよ！」

「……君たちもまあまあ、面白いと思うけど」

「まあね」

褒めてないっていうのに。

「で、何が起きてるの?」

「それがね、あの鈴って子が篠ノ之さんに部屋変わってって言いに来たみたいなのよ!」

あゝなるほど・・・。

そりゃそうだよなあ、一夏を好きなわけだし自分以外の女の事相部屋なんて聞いたら黙ってられないよね。

僕も、習って耳を当ててみる。

「アルディ君だってやってるじゃん」

「・・・いいの」

耳を澄ませ中の音を聞く。

どうやら鈴と箒が激しく言いあっているようだけど・・・。

一夏は?

・・・ああ、聞こえた。

箒と鈴から選択肢を突き付けられているみたいだ。

・・・ある意味究極の選択だよな。

と、突然

バツシーン!!!

耳をつんざくような衝撃音が中から。

流石の女子たちも、驚きを隠せない。

僕だってそうだ。

急いで部屋のドアを開ける。

幸い鍵は開いているみたいだ。

「今の音、大丈夫!？」

バツと勢いよく中に入ると、そこには?甲龍?を部分展開した鈴が、箒の一閃を受け止めているという、中々ハードなシーンが展開されていた。

「今の、普通の人相手だったら本当に危ないよ・・・」

真剣なまなざしで、鈴にそう告げられる箒。

確か箒は全国大会で優勝したと、一夏は言っていた。

そんな箒の一閃だ。鈴の言うとおり普通の人相手ならまさに凶器

だろう。

そしてそのことを、指摘されて気まずい顔で竹刀を収める筈。なんとかなったみたい。

「……っていうか、僕は言った意味無いね。

まあ、開けてどうするつもりでもなかったけどさ。

筈を退けた鈴は、一夏に詰め寄る。

そう言えばさつき、ドア越しの会話では約束がどうたらこうたら言ってたな。

「で、鈴……約束の事なんだが……」

ああ、やっぱり今からその話なんだな。

「うん、一夏！覚えてるよね！！」

期待に満ちた笑顔で一夏の返答を待つ鈴。

そして一夏がゆっくりと、その内容を口にする。

「えーっと……確か、鈴の料理の腕が上がったら……」

「そうそう！」

「毎日酢豚を　　おごってくれる……だったか？」

「……え？」

鈴の顔が固まる。

どうやら違う見たいっばいけど……？

「だから、料理の腕が上がったら毎日酢豚をごちそうしてくれるっ

て約束だろ？」

腕を組んで、確信の顔でうなづく一夏。

目をつむっているから多分、鈴の変化に気が付いていない。

鈴はわなわなと体を震わせ、その瞳には涙も見える。

「……なんだかデジャヴだなあ。

そんな事を思っていた直後……。

パァンッ！

乾いた音が、部屋に響く。

僕も、そして筈も、もちろん叩かれた一夏本人も。

みなが啞然とする中、鈴の怒号だけがその場を支配する。

「最つつ低!!!女の事の約束一つ覚えてられないなんて、男の、いや人間の風上にも置けないやつねッ!!!今度のクラス対抗戦、覚えてなさいよ……」
冷たく一夏を睨む鈴。そしてボソツとそれでいて背筋の凍るような声で言い放つ。

「殺す……」

僕に言われたわけじゃないのに、この迫力……。

鈴はそれから足元にあった、ポストンバックを乱暴に肩にかけると、目を覆って出口へと走る。

……ん?出口。

こつち!?

普段ならすぐに気付くだらう。当然だ。

目で見えるからね。

でも、いま鈴は、涙を一夏や周りの生徒に見せまいと目をふせている。

僕の予想通り、鈴は僕に気付かず、そのまま突っ込んでくる。

「わっ!?!」

「とっ!」

僕もそんな事、考えていたのが悪かった。

避けるのが遅れて、鈴に押し倒されてしまう。

「いったあ……あんたねえ、ボケっと突っ立てんじやないわよ!

!」

「そんなこと言ったって、そつちだって突っ込んできたじゃないか・

……」

ていうかちよつと鈴、暴れないで!

て言うかむしろ早く立って!!

ドアも開いてるし何より、状況が状況だ。

こんなところ、セシリーにでもみられたら、ますます状況が……。

「全く何を騒いでいらっしやいますの?」

……うそ……。

今一番聞きたくない声が、後ろからする。

・・・終わった。

そして、セシリーが姿を現した。

「・・・・・・・・・・」

「あ・・・・・・・・・・」

それしか、声が出なかった。

向こうは、そんな声すら出ないらしい。

一瞬だがセシリーの顔が、苦虫をかみつぶしたように歪んだのを僕は見逃さなかった。

だが次の瞬間には、いつも通りの調子で、鈴に手を差し伸べ鈴を立てせる。

「何があつたのかは知りませんが、お気をつけなさいな」

「うう・・・・まあ、ありがと」

それだけ言い残し、セシリーはすました顔でドアの視界から消えた。だめだ、追いかけないと。

でも追いかけて何を言えば・・・

ええい、そんなの後で良い！

「セシリーッ！」

大声でセシリーを呼ぶ。

そのまま行ってしまうかと思つたが、意外にも足を止めてくれた。

「何でしょう？」

「あ、いやその・・・・」

だがその次が出てこない。

頭が真っ白になるっていう言い方は、あながち間違っていないようだ。

「何も無いのなら、呼ばないでくださいまし。？アルディさん？」

「え・・・・・・・・・・!?」

ああ・・・・・・・・・・くそ・・・・。

アルではなくアルディさんと呼んだ。

それはつまり・・・・そう言うことだ。

完璧な拒絶。

・・・これは、大変な事になった。
話するとかしないとかの次元じゃないぞ・・・。

結局、セシリーと話すことができないままクラス対抗戦を迎えてしまった。

「バイパス安定。どう調子は？」
薄暗い部屋。

PCのモニターが発する光だけが、人の表情をかるうじて映し出す。映し出された表情や、体の形状から判断するに、声の主は女性の様だ。

「大丈夫です・・・ちょっとまだ重いですけど」

「大丈夫、すぐになれるわ。もうすぐ、システムも着床するところだから」

女性の声に、少年の苦笑をはらんだ声が反応する。

闇に浮かぶシルエットは鋭角的で、バックパックに四つの砲をラックしている。

一見するとISの様だが、その姿はどこことなく工業的で、ISの様なスタイリッシュさは見受けられない。

「フフ、これを見たら、なんて言うかしらね。皆やっぱりISだって言うのかしら」

「外見そつですもんね」

「でもこれは、そんなものじゃないわ・・・。

篠ノ之束・・・。世界を馬鹿にしたツケは大きいわよ・・・私たちが見せてあげるわ・・・その大きさを・・・」

女性は、いったん言葉を区切り不敵に笑う。

「IJOHS・Nでね」

第6話〜どん底アメリカン・不敵なアンノウン〜（後書き）

「あーあーあー聞こえないーい」っていう、いじめがアメリカにはあるそうです。

噂ですがw

どうもしるくです、こんにちは。

お読みいただきましてありがとうございます。

前回は、鈴の戦闘シーンまで行けたら〜とか何がやねんッ！！

次回はまあ確実に行くと思いますよw

それではまだ7話でお目にかかりましょう！

さよならっ！

第7話くあのサクラメントの夕日く

クラス対抗戦だけに、アリーナの観客席は満員御礼だった。そりゃ当然だろう。

今日戦うのは、中国の代表候補生の鈴と、世界で二人だけISを動かせる男の一夏なのだ。

否が応でも、注目が集まる。

一応リザーブで待機しておけと言われ、ISスーツに着替えて、ピットで待機しているものの、

今日、出番はないだろうね。

僕の祈りが通じたのか、一夏は大きなミスもなく無傷で今日までたどり着いたのだから。

・・・それに今僕はそんな事を心配してる場合じゃないんだよなあ・・・。

僕は、セシリーの事を思い浮かべる。

今思っても、タイミングの悪さと、運の悪さの二つに頭が痛くなる。

・・・まるでドラマ見たいじゃないか。

流星はセシリー狙いは外さないってか？

・・・冗談じゃないよ。

そんな狙いは外してほしかったなあ・・・。

僕は、ため息交じりにチラッと時計を見やる。

もうそろそろ、来てもいいことなんだろうけど・・・。。。。
と思っていた矢先。

「あれ、アルデイ準備早いな」

選手がピットへご到着だ。

「まあ僕の場合、ただISスーツ着て待つてるだけでいいからね、

一夏みたく出場選手じゃない僕は気楽でいいよ」

「自分で言うな」

ははっとなんか笑いがあがるが、全然気持ちが晴れません!!

「一夏は早速、？白式？を展開し、準備を始める。」

「一夏、お前以前アリーナで鈴のISを見ただろう？」

「一緒にいた筈が、一夏に聞く。」

「ああ、あの赤っぽい奴だろ、見た見た」

「今回は、どうやら接近戦になりそうだな、セシリアの時とは違って。」

「だな、流石に俺も、毎日お前に鍛えてもらってるんだ。」

「代表候補生相手とはいえ、女に遅れはとらねえよ！」

「力強い返答に、筈も満足そうにうなずく。」

「でも、一夏気を付けなよ。鈴のISのパワーは本物だからね」

「そっぴい、お前吹っ飛ばされてたな」

「地味に恥ずかしい……。」

「と、とにかく、僕の？ストライク・バーディ？を一撃であの高さからたたき落としたんだ、注意するにこしたことはないだろう？」

「まあな……」

「パワータイプは、組み付かれると振りほどけない。」

「僕のはまだ重さや装甲分の厚さがあつたから、ほぼ無傷（痛みはか
なりあつたけど）で済んだけど、あれが？白式？だったら、流石に
無傷とは行かないだろう。」

「更に鈴には、それなりのスピードがある。」

「それにあれは、全然本気じゃなかった。」

「それを思うとやはり代表候補生と、そうでない人との、
実力差は月とすっぽん並みに離れているのかもしれない。」

「言うまでもなく厄介な相手だ。」

『聞こえているか織斑？』

「スピーカーから織斑先生の声がする。」

「一夏はそれに、ISのオープンチャンネルで答えた。」

「はい、聞こえています」

『そろそろ、時間だ。準備は良いな？』

「……大丈夫です」

『よし、サウスバード、篠ノ之お前たちは、管制室に來い。特別に特等席から見せてやる』

特等席だつてさ。

まあ、立ち見やピットのリアルタイムモニターよりは、鮮明に見えるだろう。

「一夏……」

「なんだよ、箒。その顔は」

「前にも行言つたが、負けるなよ？」

「ああ！」

一夏の力強い肯定の声が聞こえたと同じぐらいのタイミングで、ピットの通路ハッチは閉じられた。

「まあ、大丈夫だつて」

「……ふん、し、心配などして……ないぞ!？」

今さら、言い訳しても遅いよ。

セシリアは、多くの観客が詰めかけた客席の最上段から、アリーナを見降ろしていた。

ただ、そこに明確な理由はない。

ただ、なんとなく。

本当になんとなくそこにいた。

あの時見た光景。

誰がどう見ても、彼は被害者だつた。

彼は悪くない。

ただの事故なのだから。

でも、どうしてもセシリアは、その状況を見て事故だから仕方ないと割り切ることができなかつた。

相手が鈴だつたから？

自分じゃ無かつたから？

分からない。
何度考えても……。
もう、そんなこと考えても仕方がないというのに。
彼は……。そう……。もう私を必要としていない。
初めから誰でもよかったのだ。
でなければ、鈴との模擬戦の時もあんな楽しそうな顔はしない。
自分の時には、あんな顔見せたこと無かったのに。
セシリアは焦点の定まらない目でボーっと、アリーナを見ている。
何も、感じず。
何も考えずに。

「逃げずに来たじゃない！」
鈴の自信と余裕の音が、ISのチャンネルから聞こえてくる。
「誰が逃げるかよ、誰が！」
「覚悟なさい。今日のあたしは、初めっから何もかもが振り切れちゃってるんだから！」
どうやらその言葉に嘘は無いらしい。
目の色が違うし、何より手に持っている、？双天牙月？が今にもへし折れそうだ。
一夏は、若干冷や汗をかきながらも気合を入れ直す。
目の前にいるのは、代表候補生なんだ。
鈴とはいえそれは変わらない。
「鈴！俺が勝ったら、約束の事説明してもらおうからな！！」
「大丈夫よ、その必要はないわ。だって……」
鈴は大きく両手の？双天牙月？を振り回すとそれを柄の部分で連結させて一本にする。
そしてそれを大きく振りかぶって、こちらへ投擲してきた。
「あたしが勝つから！！」

高らかな勝利宣言と共に、試合開始のブザーが鳴る。

鈴の攻撃は若干早かったが、到達がブザー後だったため有効だ。

「鈴！頭に血が上って、血迷ったのか？自分の武器放り投げて・・・丸腰だっ！！」

一夏は一気に間合いを詰めると、丸腰の鈴に切りかかる。

「もらった！」

「あなた、馬鹿ね・・・あたしは代表候補生よ！！」

その時、一夏が衝撃音と共にアリーナの側壁へ吹き飛ばされる。かろうじて、体勢を持ち直せたものの、アリーナ側壁への直撃。痛いでは済まない激痛が体を走る。

い、一体なんだ！？

一夏が吹き飛んだ映像は、管制室のモニターでも確認できた。

「なんだあれは！」

箒が思わず叫ぶ。そりゃそうだ僕も何が起きたのか分からない。

すぐに、鈴のISのデータを閲覧し山田先生が、答えた。

「？衝撃砲？ですね・・・空間圧縮兵器の一つです」

「空間圧縮・・・？」

聞き返した僕に答えたのは、織斑先生だった。

「空間に圧縮をかけ砲を形成し、その余波で生じる衝撃波を砲弾変わりに打ち出す、第三世代兵器だ。」

ウェイトがある分、即対応時の射撃には向かんが・・・」

一度目をつむり、そして勢いよく目を開く。

「その砲弾は目に見えない」

目に見えない、砲撃・・・。

そんなもの積んでいたのか。

やっぱりあの模擬戦、ただ遊ばれただけだったんだ、僕は。

チラツと箒を見やると、手をきつくグツと握っている。

これが安全の考慮された、命の危険の無い模擬戦であつてもやつぱり、心配なんだろうね。

「それに、あの？衝撃砲？には砲身傾斜の制限が全くありません・
」

つまり、見えない砲撃を三六〇度制限なく撃てるということか。

・・・本当に厄介な相手だ。

と、急に一夏の飛び方が変わる。

何かするつもりなのか？

初めの、間合いを詰める方法から一転、鈴から距離を取り始める一夏、

一夏に射撃武器はないし・・・離れて良い事なんて・・・。

「？イグニツション・ブースト？を使うつもりだな・・・私が教えた」

「イグニツション・ブースト？」

また聞き慣れない単語が出てきたぞ。

それに人差し指を建てて山田先生が、説明する。

「慣性エネルギーを使用した、特殊加速技術ですね、外部エネルギーを一度取りこんで圧縮。

それを一気に放出する事で、一瞬でトップスピードに到達するテクニクです」

「あの馬鹿でも、出どころさえ間違わなければ、代表候補生と互角に渡り合えるテクニクだが・・・チャンスは一度きりだ」

一度・・・。

代表候補相手にたった一度の少なすぎるチャンス。

もの出来るのか・・・。

モニターを見上げる僕の手も筭同様、グッと握られ手汗で、びっしよりだった。

距離を取るんだ。

チャンスは必ずある……。

いくら、砲身傾斜が無制限って言ったって、打ち出す所は一つしかないんだ。

ランダム機動を繰り返せば、必ず追いきれない角度ってやつが出てくる。

一夏は、ひたすらその機会を待つ。

鈴の衝撃砲？龍砲？は今も確実に自分をとらえている。

だが、どうやらそれを鈴はオートにしているようだ。

狙いだけ定めてタイミングだけ鈴が指示している。

それなら！

機械は正確だ、驚くほどに。

だがその正確さがアダになることがある。

一夏は方向転換から？イグニッションブースト？の移行を、絶え間ない訓練の成果で完璧にこなす。

一瞬、本当に一瞬だが、？龍砲？が一夏をとらえきれず砲身が一夏からそれた。

今だ！！

それと同時に、圧縮されたエネルギーは一瞬で？白式？を、一夏を、トップスピードまで押し上げる。

「ぜああああああ！！！！」

「ッ！？」

刃がもう一步で鈴に届く、その時だ。

アリーナは、轟音と巨大なクレーター、そして砂煙に包まれた。

何だ！？

モニターから一夏達が見えなくなっ、次に見えた時には何やらク

レーターを中心に機械的な？何か？がいた。

「試合中止！織斑、凰！すぐにピットへ避難しろ！」

織斑先生の、切迫した声が緊急事態だという事を、否が応でも認識させる。

「IS・・・なのか？」

「アリーナにはシールドがある。それを突き破ってきたんだ。少なくとも通常兵器じゃないね」

冷静そうに言う僕だけど、前以上に手汗は凄いいし、冷や汗だって止まらない。

その時、耳を疑いたくなるような言葉が一夏の口から飛び出した。

『いや・・・俺達でなんとか抑えよう』

何だって!？

そう思ったのは箒も同じだったようだ、山田先生のインカムをひittaくると声を張り上げる。

「一夏！もうすぐ、教師陣が到着する！早くピットへ戻るんだ！」

『箒・・・でも、それにはまだ時間がかかるんだろ？』

「そうだな・・・今年年の精鋭がシステムクラックを実行中だがすぐと言うわけにはいかん」

腕を組んだまま、淡々と述べる織斑先生。

それを聞き、だったらと続けた一夏。

『少なくとも、その時間分稼いでみる・・・大丈夫さ、こっちは代表候補生もいるしな』

そう言つて鈴を見る一夏。

鈴の顔も、今までと比べ物にならないほど真剣だ。

でも・・・相手が相手だし・・・。

「・・・分かった。その代わり無茶はするな。少しでも身の危険や命の危険を感じたら、すぐにピットに戻れ、良いな？」

『・・・はい』

力強くうなずいて、通信が切れる。

沈黙の訪れた管制室に、次に響いたのは山田先生の声だった。

「織斑先生！」

「大丈夫だ・・・本人たちがやれると言っているんだ・・・任せ
てみようじゃないか」

全く弟も、弟なら姉も姉か・・・。

あれ・・・それはひよつとして、僕が言えない？

そして再びモニターが開くと、そこには一夏・鈴のペアが、アン
ウンと戦っている姿があった。

アンノウンは、上半身と下半身のバランスが明らかにとれていない、
奇妙な形をしていた。

頭部には複数のカメラが動き、動きもどこか？人工的？だった。

それでも、一夏の？一撃必殺？のザンゲキはことごとくかわされ、
隙を縫って攻勢に転じる姿は確かに人間っぽい動きのようにも見え
る。

・・・なんだろう、この変な感じ。

僕はその違和感の正体をいまだつかめていなかった。

そうこうしているうちに、一夏達が追い込まれていく。

アンノウンの放ったレーザーが、よけきれなかった一夏のスラスト
ーに当たり、体勢を崩す。

それが絶望的な隙を生む。

その時誰もが思った。

・・・まずいと！

しかし、またもアリーナは、轟音に包まれてしまった。

二度あることは三度あるとはよく言うが、これは一度あることは二
度あるだ。

砂煙が晴れると、一夏とアンノウンの間に、入るようにして一機の
黒いISが立っていた・・・。

なんだ、何か起こったんだ!?

それに、コイツは一体。

俺の目の前に立つ? ソレ? 工業的な角ばったフォルムに、

バックパックに二門の荷電粒子砲を背負っている。

顔はバイザーで覆われており表情を確認する事は出来ないが、男と言ふ事だけは分かった。

「お、お前は……」

「……」

無言でこちらを、一瞥したあと、両手に構える荷電粒子砲がアンノウンに向けて放たれる。

その威力はすさまじく、? 龍砲? の直撃にも耐えたアンノウンが、いとも簡単に吹き飛ばされる。

体勢を立て直す暇さえ与えず、? ソレ? はアンノウンに砲撃を浴びせていく。

それはどれも正確で無駄が無い。

もはやそれは、戦闘ではなかった。

あれだけ俺達を苦しめたアンノウンがただの動物的になり下がっている。

両腕を吹き飛ばされても尚、攻撃姿勢を取るアンノウン。

だが、両手に多くの兵器を集中させていたアンノウンは、ほとんど丸腰に近い状態だ。

それに対しても、なんの躊躇なくトリガーを引いていく。

程なく、すべての武装をつぶされただ立っているだけになったアンノウンに、とどめの一撃が放たれる。

「……鉄クスですね」

冷たくつぶやき、頭部・胴体・脚部のすべてに一瞬で荷電粒子砲の雨が降り注ぎ、大爆発を起こして吹き飛ばアンノウン。

そこで一夏はハツとする。

「お前！操縦者は！」

「……大丈夫です、これは無人のISですから……それよ
り……」

？無人のIS??

そんなものがあるのか？

普通ISは人間が乗りこまないと動かない。

ISとはそういうものだ。

だがこれは無人……。

呆然とする俺に、？ソレ？が近寄ってくる。

助けてくれたはずの相手に対して、嫌な汗が流れる……。

コイツは……コイツは!!!

「君も、鉄クズにしてあげます……」

敵だ!!!

「一夏下がって!!!」

「っ!!」

鈴が？龍砲で牽制すると、予想外の攻撃だったのか一瞬隙が生まれる。

スラスターがうまく稼働しない？白式？に鞭打ち、無理やり浮上して、追撃の荷電粒子砲を回避する。

まずい……これはまずい……。

シールドエネルギーは、ほぼ底を尽きかけ、鈴も、アンノウンに片側の？龍砲？を破壊され、

満足に火力を発揮できない状態だ。

そんな中で、あれだけの火力を持つISを相手になど出来るわけもない。

……どうする!!!

ぼうつとしていたセシリアだったが、この非常時にまで呆けているような人間では無い。

それでも、腐つても候補生なのだ。

すぐに頭を切り替え、情報を整理する。

進入してきたISは一機……。

装備はあの四門の荷電粒子砲ですわね……。

荷電粒子砲は、一発単価は高火力だが、その反動の大きさや狙いのつけにくさ、連射速度などは

以前アルデイの？ファイアーフライ？を撃った時に分かっていた。

先ほどの戦闘で、セシリアの目は、あの正体不明機が射撃の際に砲身がブレ、わずかに

狙ったところへ撃てなかったことがあったのを見逃していなかった。

一方こちらの装備は、反動の少ないレーザーライフルに自立機動のビット？ブルーティーズ？がある。

大丈夫だ。やれる。

そこまで考えて、こんな事を考えられたのはアルデイのおかげだ、と言う事に気が付く。

アル……。

あんなに拒絶反応を見せていたセシリアだったが、正直彼に会うのが怖かった。

本当に今度こそ、彼の口から？もういいよ？と言われてしまうのではないかと。

自分はまた、失ってしまうのか大切なものを……。

って、いけませんわ……今は集中しないと……！！

かぶりを振って沈みそうになった気持ちを切り替え、セシリアは？ブルー・ティーズ？を起動し、

さっきあのISが撃ち抜いたアリーナのシールド破損部へ機体を躍らせた。

一体何なんだ、あいつは……。
目の前で信じられないものを見ている。

僕は、あのISの介入と同時にロックが解除されたピットへ来ていた。

当然、ロックが解除され田と言う事は教師陣ら制圧部隊も駆けつけるということだ。

ようやく、終わった。そう安堵しかけたが、どうだ？

国家の代表や、代表候補だったこの学園の教師陣が八工のごとく叩き落とされてくる。

既にアリーナの地面には、何十体という？打鋼？が行動不能状態で墜落している。

……まずい。

あれは本当に。

「織斑先生！」

「無理だ……もう機体が無い……」

苦虫をかみつぶしたような顔で、告げる織斑先生。

一夏達も、なんとか逃げ回っているが、もう機体も人間も限界だ。

僕も出ていきたいが、あの実力差では……。

諦めかけたその時アリーナの上空で何かが、きらめいた。

それは鋭角的なデザインを持つ、イギリスの専用機。

？ブルー・ティアーズ？……セシリー！！

程なく、ブルー・ティアーズの攻撃が始まる。

流星の黒いISも、エネルギーを使い過ぎたのか、攻勢に転じるごとなくその攻撃の回避に専念している。

その間に一夏達も距離を取って一番近いピットへ避難する。

一夏達の無事に安堵しながら、セシリーの攻撃をことごとく回避する黒いISに恐怖と戦慄を覚えた。

凄い……一発も当たらない。

エネルギーが無いにしても、あの機動力は……。だがそのエネルギーが無いのだからという考えは、黒いISの取った次の行動で疑問に変わる。

黒いISが、地上でまだ動けるISが構えた、銃に向かって荷電粒子砲を撃つたのだ。

なぜだ……？

今のは別に撃たなくてもよかったはずだ。

反応できていたのだから……。

まさか！！

僕は、ISを展開して一気に飛ぶ。

セシリーが……セシリーが危ない！！

ハイパーセンサーが射撃に集中するセシリーの後ろから急速に接近する紫色のISをとらえる。

頼む！！間にあってくれ！！！！

必至で重い機体を加速させる。

スラスタも悲鳴を上げるが知ったことじゃない！

むしろ馬鹿でかいんだから、もっと加速しなよ！！

そのISは、手に槍を持っている。

それを構え、今まさにセシリーに切りかかるようにしている。

やめろおおおおおっ！！！！！！

そして槍は振り下ろされた。

あ、当たらない……！

この私を遊んでいらっしやいますの……？

黒いISは、セシリアの攻撃を、あれよあれよと回避し、エルロンロールやインメルマントーンなど？曲芸飛行？まで入れるほどの余裕ぶりを見せつける。

それは、プライドの高いセシリアにとって耐え難い屈辱だった。

ライフルを持つ手が、怒りで一層強くなる。

絶対に当てる見せますわ……！

ビットのけん制で動きを制限しつつ、ライフルの照準を合わせる。

ハイパーセンサーによる補正で敵ISの操縦者の顔まではつきりと見える。

当てる……！

そう強く念じ、狙いを定めトリガーを引こうとした時、相手がこれまでにないぐらい不敵に笑った。

「……ッ……！」

ハイパーセンサーの警告音と共に顔を上げる。

そしてそこでようやく後方からくるISに気が付いた。

完全に致命的なミス。

？射撃時における周囲の安全確認不良？

こんなところで終わりですの……。

セシリアはそう思った。

せめて彼と、仲直りだけはしたかったですわね……。

ゆっくりと目を閉じる。

……だが、身を切り裂くような痛みも、何も感じなくなるといふ死の感覚も、何も訪れない。

セシリアは、疑問に思っただけ目をあける。

そこには、仲直りしたいとたっただけ思った少年がいた。

「あ、アル……」

「諦めるなんて……らしくない……こっぴつ言い方するとまた、叩かれる？」

ハハッと笑う彼だったが、その顔は苦痛にゆがんでいる。

見ると相手の槍が、深く腕のアーマーに突き刺さっていた。

ISは、より操縦者が扱いやすいように手で持った感覚。つまり柔らかいや固いとかそう言った感覚をフィードバックする。そしてそれは痛覚も例外ではない。

恐らく今、彼は気が飛びそうなほどの激痛に耐えている。

そう、拒絶を示した、あんなにふうに言ってしまった自分を守ってその彼が、苦しみながらも声を出した。

「せ、セシリー……正直言っただけはまだ、どうしてセシリーが怒ってるのか……」

はあっ、見当もつかない。でも……でもね……これだけは言えるんだ。

君は僕にとって必要な存在だから……。

怒らせといて、都合のいいこと言ってるかも知れないけど、

これからもさ……色々教えてほしいこといっぱいあるんだ」

ああ……自分は本当に馬鹿だ。

あの時もそう思ったが、あのとき以上に自分は大馬鹿ものだ。

初めは変な嫉妬心からだったのかもしれない。

アルが鈴と笑顔で模擬戦をしている所見て、なんで自分じゃないのかと思った。

そして一方的に拒絶して、気付いてくれないことにいら立って、彼を叩いて。

そのまま自分で勝手に、もう私は必要ないんだと決めつけて……。

彼も自分を残してどこかへ行ってしまうのだと。

でも、それは違った。

彼はどこへも行っただけじゃない。

彼はそこにいる。

「物分かりの悪い僕だから……何言っても一回じゃ、よく覚えられない僕だから……」

だからその度に、セシリー、君が……はあはあっくう……君がその度に僕に言っただけ……

いつも見たいに笑ってさ、怒ってさ……ね……」
そう彼は、ここにいる。

私の目の前に……!

セシリアは先程までの動揺など毛ほども見せずに、目にも止まらぬ速さでビットをコントロールして、紫色のISに攻撃を加える。

「てめえッ……!」

女性の乱暴な口調が聞こえるがセシリアはそんな事気にも留めずにいつもの気丈な声で言い返す。

「よくも人の殿方に、手を出してくださいましたわね……その代償は大きいですよ……!」

ビットの攻撃に、気を取られた一瞬の隙を突いて、セシリアのレーザーライフル? スターライトMk?? が火を噴く。

「ちいっ……! この……!」

その閃光は、またたく間に紫色のISを切り刻む。
主兵装であろう、槍も貫かれて爆散した。

味方の危機を察して、離脱する紫色のISを援護するために黒いISが救援に駆けつけるがそれには、体勢を立て直したアルデイのISが迎え撃つ。

「君の火力と、僕の火力……どっちが上だろうね?」
息をなんとか整え、いつもの口調で話すアルデイにセシリアは安堵した。

あの黒いISの圧倒的な实力を見ても、セシリアにはアルデイが、負けることなど想像できなかった。

それは、アルデイを信じているから。

それは、アルデイを認めているから。

そして何より、

アルデイが好きだからである。

「まいりますわよ、アル……!」

「蹴散らそう……!」

互いに自信たっぷりな顔で、黒いIS目掛けてトリガーを引いた。

よかった。

本当に……。

間にあつて。

そして何より、セシリーと仲直りできて。

アルと呼ばれた時、それがたまらなくうれしくて、そして心強かった。

負けるわけにはいかない！

いや違う。

セシリーがいるのだ。

負けるわけがない。

黒いISは一旦距離を取ると、背面にラックしていた荷電粒子砲に持ちかえ、

再び狙いを定めて撃ってくる。

ケーブルが見えていることから、どうやら荷電粒子砲は充電式のようだ。

とすると、再充電されると厄介だな。

「セシリー！」

「即攻ですわねッ！」

？ブルー・ティアーズ？のビットが舞い、黒いISの周りにレーザーの花を咲かせる。

「つく、悪あがきを……！」

言いながらも、的確な操縦でレーザーを避けるのは流石だが、ならこれはどうかな。

僕は？ウエポンスクエア？のミサイルハッチを開き小型ミサイルを発射させる。

そのミサイルを神業とも言うべき、タイミングとコントロールでセシリーのビットが不規則に

爆破させていく。

「これは!?!」

不規則な爆発に対応しきれずに、思わず攻撃と機動をやめる黒いISS。

その隙を待つてたんだ!

背部の?ウエポンスクエア?が前にせり出し、小型スラスターが高度を維持する。

爆煙が晴れた時、相手が見たものは、自分の方へ向けられた絶望的な火力だった。

「Power is justice!...アメリカ人に喧嘩売ったこと後悔するんだね」

「つく、させるかあ!!」

相手は素早く、機体を立て直し一気に間合いを詰めてくる。

.....かかったね。

黒いISSの射線上に鮮やかな青色のISSが躍り出る。

「なっ!?!」

「ファイナーですわ!」

セシリアのビットが僕の行動に気を取られ、完全に無防備となった黒いISSの真後ろから

スラスター部を正確に攻撃する。

制御を失った、ISSはセシリアの上を通過。そして補助スラスターの点火と

PICのおかげでようやくその動きを止めることに成功し、僕の高圧荷電粒子砲に耐えるべく?頭部を中心に防御する?。

「見かけにだまされちゃだめだよ?」

「何といたしても彼は.....」

「嘘つきだからね」

ズガアアアアアアアンツ!!!!!!

「ぐあああつ!!」

敵にとどめを刺したのは、腹部への荷電粒子砲の一撃だった。

この作戦はこんな感じだ。

まずミサイルとセシリアのビットで弾膜と煙幕を貼り、視界を遮った後

僕は？アヴァランチ？の準備をしてセシリアはその影へ。

そして、相手が隙のでかいこの？アヴァランチ？を阻止すべく突貫してくる。

そこでセシリーのビット攻撃が役に立つ。

周囲に気を配れるだけの実力があっても、それは常にと言うわけではない。

追い込まればそんな余裕など、どこかへ消し飛んでしまうものだ。そうして、ビットでスラスターを破壊した後は、ご覧のとおりである。

僕は小型スラスターだけで、ゆっくりと旋回。

見た目で大きいのが来ると思わせておいての、ハツタリ攻撃だ。

いやあにしても、面白いくらいに旨くいったね。

墜落していく黒いISを紫のISが、再び降下して素早く回収していく姿を見ながら、僕は満足げに笑う。

ふう………。

色々あったけど、本当に仲直りできてよかった……。

ほんと、記念に花火でも打ちあげたいぐらいだよ。

ボンッ！

そうそう、そんな感じの音でさ。

バンッ！ボンボンッ！

ん？なんだかやけに近いな。

バゴオオオッ！！

ひと際大きな音にびっくりするのもつかの間、スラスターが炎を吹いて自壊する。

「うえうそっ！？」

多分あの時だ。

セシリーを助けるために、無理な加速を行ったあの時。

悲鳴上げてたもんなあ……ってそんな事言ってる場合じゃない！
この高さから落ちたら死ぬ！！

って、あれ！

IS自体も限界だったらしい。エネルギー切れでリミット・ダウン
が始まる。

いよいよまずい！！

僕は、目をつむるが、いつまでたっても地表に叩きつけられないし
落下感も無い。

むしろ何か、暖かいものに包まれているような感覚を覚えた。

ゆっくりと目をあけると、僕はセシリーに優しく抱きかかえられて
いた。

しかも……その……。お、お姫様だつこで……助けてもら
って言うのもなんだけど、

もの凄く恥ずかしい……。

顔を真っ赤にする僕に、セシリーは悪戯っぽく肩目を閉じて微笑み
かける。

「全く、女性にエスコートさせるのはマナー違反でしょ？」

「き、緊急時はOKってことにしよう」

「ま、仕方ありませんわね」

満面の笑みで笑いかけられ、更に僕の顔は熱くそして赤くなつたま
ま、地上へと降りて行くのだった。

ピットへ降り立つと、そこには織斑先生と山田先生そして、先にピ
ットへ避難した一夏達が僕たちを出迎える。

「アルデイ！怪我大丈夫なのか！？」

怪我？……あ。

今さらになつて痛みが、よみがえってくる。

右腕に走つた激痛に再び顔をゆがませる。

みると、アーマーを突き抜けた敵の槍は肘のあたりを、深く切り、血で真っ赤に染まっていた。

うわぁ……こんなのでさっき、僕は荷電粒子砲を撃つたのか。

「サウスバード、先に治療して来い……変に細菌でも入ったら厄介だ」

織斑先生がしれっと、言い放つ。

……もう少し心配してくれてもいいのに……。

トボトボとセシリーに促されて、治療室へ向かう。

それに一夏達も追隨した。

ピットのハツチをでる時、背を向けてだが織斑先生がぶつきらぼつに言い放った。

「まあ……なんにしても、全員無事でよかった」

それを見て、クスクス笑う山田先生が印象的だ。

それにつられて、皆の顔も笑う。

チラツとこちらを一瞥した、織斑先生の顔は照れて少し赤くなっていた。

「はい、これでよし！」

包帯を巻き、患部をポンと叩く保健室の先生。

「いつつ……」

た、叩かないでくださいよ……。

痛みで体が、ビクツと反応する。

「これぐらい我慢なさい、男の子でしょう？」

これくらいいつて……こつち切られてるんですけど。

はぁ……。

僕は礼を言つて、保健室を後にする。

保健室の前のベンチには、皆が待っていた。

「それで、怪我はどうだったんだ？」

「腕を数針ね……ま、逆にそれだけですんだんだから、運が良かったよ」

「あんだ意外と頑丈なのね、また吹っ飛ばしてあげようか？」

鈴が前と変わらず、だが前よりもどこか柔らかい言い方で、冗談交じりに言う。

冗談でも怖いよ……。

いまやられたら、それこそ体がバキバキになりどうだ……。

目に見えた外傷はこの腕だけだったけど、見えない所のダメージも結構あるらしい。

保健の先生にも、しばらくは無茶は絶対にだめだと言われた。

……できて無茶なんてしたくないよ。

「そうか、よかったな……。あぁ……なんか安心したら、急に腹が減ってきた……。着替えて食堂でも行かないか？」

一夏、君って……。

本当にずぶとい神経の持ち主だね……。

まあ僕もお腹は減ってたし行こうかな……。

僕も行くと言いかけた時、これまで一度もセシリーが口を開いていないことに気が付く。

見るとセシリーはどことなく、申し訳なさそうな、でも怪我が大したことなく安心してしているような、そんな複雑な表情を浮かべていた。

……ふう。

「一夏、ちよつと用事があるから？僕たち？は遠慮するよ」

それを聞き自然に、そうか、それなら仕方無いと流す一夏と、ニヤニヤした目で見る鈴と、

そして、やれやれといった顔をする篤。

三者三様の顔で、僕たちを残して更衣室へと消える。

「セシリー、着替えたら……。シャワー浴びた後でもいいけど、ロビーで待ってるからね」

「え、あの……。アル……」

そう言い残し、僕も更衣室へ消えた。

制服に着替えドカツと、更衣室の椅子に腰を下ろす。

「・・・今日のあれは何だったんだろっ。」

「・・・うまく撃退できたものの、実力は目に見えて違ったよな。もっと、強くないとな。」

「ストライク・バーディ？だってまだ完全に使いこなせていない現状で勝てたのは、

やはりセシリーがいたからだろう。」

誰かを守るって柄じゃないし、セシリーよりも弱い僕がそんな事思ってもしょうがないんだろっけど、何時か、何かを守るぐらいには強くなるっ。」

いつしか、僕の中にはそんな気持ちが芽生え始めていた。

「・・・ってわッ！」

意外に時間が経つちゃってたのか！！

遅れたら、セシリーに悪いし、急ごっ。」

僕は手早く荷物をまとめると、足早にロビーへと向かった。

夕焼けが世界を橙色に染め上げる。

僕が、ロビーに着くとそこには既にセシリーが立っていた。

橙色の光に照らされるセシリー。

ブロンズの綺麗な髪を、白い肌を、夕焼けが染め上げる。

「・・・綺麗だ・・・。」

何か映画の一部分でも切り取ったかのような光景に心を奪われる。

「どうかしましたの？」

「え、あ・・・あは・・・。」

セシリーが不思議そうに、訪ねてくる。

笑ってごまかしたが、セシリーにはどうやらお見通しだったようだ。フフフッと笑って、悪戯っぽく手を差し出してくる。

「それで、私をどちらへエスコートしてくださいますの？」

「・・・こちらですよ、お嬢様」

僕はその手を取ると、ある場所へ向かって歩き出した。そこは、僕が偶然見つけた、穴場のスポットだ。見つかりそうで見つからない。

僕は校舎の上へ、どんどん階段を昇っていく。

そして到着したのは、屋上だった。

「ここが、連れてきたかった場所ですか？」

「違うよ、ここからもう一個上るの」

これ以上どこへ登ると言うのか。

疑問符を頭に浮かべたセシリーを、？ストライク・バーディ？の腕部のみを

部分展開させヒョイツと抱き上げる。

「ちよ、ちよつと!？」

「あーはいはい、暴れないでね・・・」

まるで赤子をあやすように、言いながら、セシリーを屋上の出入口の上に乗せる。

それに続いて僕もフェンスを使って、そこへよじ登る。

「・・・ちよつと汚れてるけど、ここ座って」

セシリーは促されるままにそこへ座る。

背中には給水塔があるが、それが丁度いい背もたれになる。

「セシリーあつちを見て・・・」

僕の指さす方向へ、セシリーが目を向ける。

それでも、イマイチ、ピンと来ていないセシリーに僕は指で枠を作ると、セシリーの目の前に置いた。

「あ・・・」

「綺麗でしょ・・・まるでサクラメントみたいに・・・」

セシリーが見たものは、まさしくあの時見せた、サクラメントの光景だったに違いないと、

僕は確信する。

遠くに見える街並みと、眼前に広がる海と山。

それを、こうして指の棒で切り取ってやると、不思議なもので海は川に、

山は川岸に、そして市街地はサクラメントの摩天楼に見えてくる。

セシリーも僕が手をどけた後も、指で棒を作って、それを懐かしそうに眺めたいた。

「本当に・・・綺麗ですわね・・・」

「君と、どっちが綺麗かな？」

「・・・クスツ、そうですね、今は私ですわ」

「くさいって言わないんだね」

「だって、それアメリカでは、まだ、主流なのでしょう？」

あ、あはは・・・。

これは、取られちゃったな。

二人が眺めるその先で、？あのサクラメントの夕日？はゆっくりと沈んでいくのだった。

「・・・どうだ、山田君、解析の方は」

「ダメですね・・・無人機と言うことぐらいしか・・・こうまで破壊されては・・・」

織斑千冬と、山田真耶は薄暗い部屋の中で今日回収された、

無人ISと襲撃した二機のISの解析に追われていた。

だが無人機の方は、コアの損傷も激しく、あの黒いISが粉々にしてくれたおかげで、

解析は難航していた。

しかし無人機とは穏やかな話では無い。

現在も、無人機の開発は行われているものの、どの国も開発に成功

したという話も聞かないし、ましてやそれがスタンド・アロンで戦うなど想像も出来ない。

ふむ……。

「あの二機のISはどうだ？」

「アレについての方が、まだ情報はつかめてます」

片方ですけど……と続け真耶や千冬に端末を渡す。

そこには、交戦する紫色のISが移っていた。

「紫香楽……か」

紫香楽家《しがらき》。つい最近自前のISを一機試作したという、元々武芸の名家だ。

ISを製造するには、莫大な資金や設備が必要だ。

いくら名家とはいえ、単独でそれを実現するのは難しいはずだ。

「しかもこのISは、しっかり国籍を持っています。登録されたコアをもとにして製作された

正規のISですね……」

真耶が端末を操作すると、その情報が千冬にも転送される。

……？紫燕《しえん》？か。

黙り込んで、思考する千冬に真耶が声をかける。

「あの……織斑先生？」

「まあ、何にせよ……面倒な連中が出てきた事は確かだろう……」
そう言う千冬の目は、かつて世界一の座に君臨した時の、鋭い眼光だった。

第7話〜あのサクラメントの夕日〜（後書き）

作者はアメリカ好きですが、行ったことないです。
どうもこんにちは、しるくです。

何か見る人によっては甘ったるかったりそうじゃ無かったりする第
7話になってしまいましたw

あれ？

この話の主演は鈴たちじゃ・・・

・・・しらね！w

それでは8話でまたお目にかかりましょう！

さよならッ！

第8話〜天使のフレンチ・悪魔のジャーマン〜

あの一件以来、余計に学園内で目立つ存在になってしまったこの僕。だが目立つのは嫌いでは無い。

別にそれはどうでもいい。

問題は、あのセシリーへ言った必死の告白が、ISのオープン・チャンネルを通じて

この学園内ほぼすべてに筒抜けだったことだ……。

あの時はもう、言葉さえ聞こえれば何でもいいと思って

チャンネルの切り替えなんてやってる暇なかったし、敵の目の前だったから、やってる余裕もなかった。

文字通り必死である。

だが、今になって考えてみると、これは非常に恥ずかしい……。

お姫様だつこでの地上帰還なんて、生易しいものだ。

あーくそう……。

すっごいやばい……。

顔から火が出そうとはまさにこのことである。

更衣室前での鈴のあの笑顔はそういう意味だったのかと、今更ながらに理解する。

僕は、火照る顔を隠そうとつつむきながら、教室へ入った。

「君は僕にとって必要な存在だから……」

「きやーん、あたしも言われてみたいなあ〜」

「あたしだったら、それ聞けただけで昇天しちゃいそう……」

女子が昨日の一件を、ものまねして騒いでいる。

くあ……。

やっぱり胴体切断覚悟で、プライベートチャンネルを開けばよかったかな。

……死ぬけど。

にしても、本当に朝から皆その話で持ちきりである。

僕がいる、いない関わらずその話だ。

初めその話を聞いた時はもう、窓から飛び降りようかと思った。

僕で、こんなんだから、セシリーもさぞうんざりしているだろうと思っただが・・・

「ねえねえ！どんな気分だった!？」

「そうですねえ、覆っていたモヤが一気に晴れ、暖かな太陽が私を包み込むような・・・そんな暖かい心持でしたわねえ」

「いいないいなあ・・・」

「そうですねえ、そうですねえ」

「・・・うんざりどころか、今にもくるくる回りだしそんな雰囲気だった。」

二年生の薫子っていう、新聞部のこまで来てたなあ。

大方、良いネタを見つけたから記事にしようとしてるんだらうけど、それじゃただのワイドショーじゃないかな・・・。

「よう、俺にもばつちり聞こえてたぞ」

ニツと歯を見せて笑う一夏。

その前歯を全部折ってやりたい。

そう・・・

「バキボキに・・・」

「なんだ、どうかしたのか？」

つい本音が口に出てしまったようだ。

別にと手を左右に振って、合図する。

「面白い奴だなあ・・・まあ、元気出せって！別に悪い噂じゃないんだからさ」

「恥ずかしさって意味では、史上最悪だよ・・・全僕が涙するくらいね・・・」

現に今にも僕は泣き崩れそうだよ。

必死に小さな僕が、折れそうな心を支えてくれてるから良いけど、その噂を耳にするたびに、一人ずつ

その、ミニアルディが事故死していくのが分かる。

あ、作業場の足が・・・また一人か。

こんな具合で、僕のテンションは、朝からアメリカ空軍のアクロバットチームも

真っ青なほど超低空飛行だ。

ああ・・・もう何か障害物があっても避けずに突っ込もう。

砕けた方が、はっちゃけて面白い事になれそうだ。

ランナーズハイじゃないけどさ・・・。

「諸君、楽しい授業の時間だ、用意しろ」

ガラツと、教室の扉が開き、織斑先生が登場する。

すると騒がしかった、教室は一瞬にして静寂に包まれた。

今日だけは、この人が僕の救世主に思えた。

・・・もう末期だろうか。

この授業中、五回は叩かれた。

織斑先生はあまり救世主では無かった。

授業が終わり、前の席の一夏が笑いをこらえながら、こちらに顔を向けた。

「くつくくう・・・お前・・・あの間違いはないだろ・・・ツク・・・」

「し、仕方がないだろ！漢字は苦手だ・・・」

不覚だった・・・。

テンションダウンでボケーっとしていた僕に、織斑先生は問題を出した。

それはごく普通のIS関係でも何でも無い単語。

？一夏？

答え：ひとなつ

僕の回頭：いちか

言うまでもなく、一夏は嘖きだし、クラスにクスクス笑いが広がっていった。

そして、織斑先生には「もう少し日本語を覚えろ」ということと「ボケつとするな」という意味を込めて二発の出席簿が僕の頭を襲った。

っていうか、織斑先生もあんな質問出すかね、普通。

もつと他の単語でもよか・・・くないか。

他の単語なら最悪、読めないっていうのがあるし。

「だいたい日本が、漢字もひらがなもカタカナも使う変な言語だからいけないんだよ！」

「そんなお前に、良い言葉を教えてやろう。？郷に入らば郷に従え？その土地に行ったらその土地の習慣や風土には合わせた方がいい、という意味のことわざだ。やはり昔の人は旨い事を言うな」

気付けば箒が、横で腕を組みながら、日本のことわざとやらを教えてください。

「郷？ごうつてなんだい？」

僕は聞き慣れない日本語に、箒に聞き返す。

「郷とはふる里とか集落とかそういう意味だぞ」

・・・集落？ああ村の事か。

村に入れば村に従えってことか。

「それなら、君たちにも教えてあげるよ。When in Rome, do as the Romans do.この意味わかる？」

お、考えてる考えてる。

一課も箒も、首をひねって色々考えているようだ。

でも・・・そろそろ。

「時間切れー」

「え！おい早いぜ」

「も、もう少し時間をくれ」

「ダメダメ、これはアメリカのことわざでね・・・」

「ローマにいる時はローマ人のする様にしろ・・・ま、郷に入らばのいわば英語版ですわね。厳密に言えばそのまま同じような意味

と言つわけでもないようですが」

僕の説明よりも先にセシリーが人差し指を立て、腰に手を当てながら得意げに説明する。

まあセシリーは知ってて当然か。イギリスとアメリカ。発音やスペルに多少の違いはあれど同じ言語を使っていることに変わりはないわけだし。

「ところで、皆さん。いつまでこうして、いらっしやるおつもりですの？」

「どういうことだよ、セシリア」

「いえ、もうお昼ですわよ。早く食堂に行かないと席が無くなってしまうすわよ」

見ると時計の針はもうすぐ正午になるうとしていた。

確かに、それで以前一夏に救われたことを考えても、早く行った方が良いね。

今回は、席が無くても助けに来てくれそうな人はいなさそうだし。

僕達は立ち上がると、食堂へ向け足を進めた。

あ、そう言えば鈴がいた。

食堂に到着して、思った通り席が無い状態の僕たちを、鈴が助けてくれた時ばかりは、鈴の存在を思い出した。

クラスも違うし、今日はもうあの地獄のような噂の所為で、すっかり存在を忘れてしまっていた。

そんな事を言えば何をされるかわかったもんじゃない僕は下手に口を開かず、ありがとうと礼の言葉だけ鈴に告げて、着席する。

僕のすぐ横にセシリーが座って、そこまではスムーズだった。

だが一夏が座る席で少し今もめている。

「なにやってんのよ。早く座んなさいよあたしの？横？あいてるんだから」

「一夏、出入りしやすいようにお前は一番外側に座るんだ、うんそ

れが良い」

「ちよつと、何勝手なこと言ってるのよ！」

「一夏には・・・そうだ、水汲みという大事な役目があるんだ、ゆえに一位番外側で良いのだ！」

こんな具合だ。

水汲みって・・・ここが、水も出ないような場所なら確かに重要だけださ・・・。

ここは食堂だ。水はサーバーで簡単に出る・・・。箒流石に苦し
いよ。

とりあえず、今の状況を簡単に整理すると・・・

「ソファの端」セシリー・僕・鈴・ 「ソファの端」

この のところでもめている形だ。

もう、どうでもいいじゃないか・・・。

この場で織斑先生が来よう物なら逃げようがないな。

まあまだ僕の織斑先生リーダーに反応はないし大丈夫だろうけど。

・・・時々誤作動を起こすけどね。

まあ、感覚なんてそんなもんだろう。

結局一夏は、箒に押し切られ、ソファの端に自分のトレーを置き、それを鈴がもの凄い目で見っていた。

ようやく皆が落ち着いて、ご飯を食べ始めた頃。周囲から何やら噂
声が聞こえる。

ほんと、女子って噂が好きだねえ。

大方今朝の延長線上だろうと思っていたが、聞き耳をたてるとどう
も違う。

・・・ん？一夏がどうたらって言ってないか。

「一夏、君、何か噂になるようなことでも？」

「そりゃ、お前だろ」

その返し、今日はダメだ・・・。

何気ないその一言が凶器になったりするんだよ・・・。

僕は、グサツと刃物が突き刺さった心を必死に支えつつ、一夏に言葉を返した。

ここで折れたら、ダメだ。本当に今日終わっちゃう。

「で、でも、噂になってるのは、現状では君みただけど？」

僕はクイツと声のする方向を指さす。

その方向を一夏が見やると確かに、そこでは身をひそめてヒソヒソ話す女子のグループがいた。

そのグループはまだ指を差されたという事を知らず、会話を続けていた。

「……でね、……らしいのよお」

「それ、ほんとなの、あの織斑君が？」

「ほんとだって、あたしの友達が直接聞いたんだから！」

「……本当だな、俺の名前が聞こえた」

「だから言ったじゃない……おや、どうかしたのかい篤？」

内容のつかめない、一夏に対して篤は明らかに目が泳いで動揺している。

キヨロキヨロと辺りを見渡したり、その噂が聞こえる度に顔が赤くなっているのが分かった。

「……怪しいですわね……」

セシリーもその様子を見て疑問に思ったようだ。

食事の手を止め、ナプキンで口を拭きながら言う。

「そうだね……篤だけがあの噂で動揺するっていうのはおかしい話だし……」

あ、セシリー頬に、まだ付いてる……動かないでね……うん取れたよ」

「ど、どうも……」

頬を、箸と同じぐらい赤く染めるセシリー。

……頬についてたのが恥ずかしかったのかな。

まあそれは良いとして。

「多分これ、箒と一夏がらみの噂だね……。なるほど一夏鈍感だからなあ」

「……………あなたもですわよ」

え？

「何か言った？」

「別に……………」

ボソツと言うからよく聞き取れなかったけど、こういうのがダメなんだらうなあ。

ちゃんと聞くんて言っただけなのに。

「セシリー、本当になんて言ったの？」

その追求はセシリーにとつてあまりに予想外だったようで、そっぽ向いて水を口にしていたセシリーが、盛大にむせた。

「ゴホツ……………ケホケホツ」

「ああ……………大丈夫かい……………」

トントンと優しくセシリーの背中を叩いてやる。

トントントントントントン……………

……………やけに長いな。

トントントントン……………まだ？

トントントントントントン

「あー、アルディ。それ演技よ演技。とっくに咳止まってるってへ？

「鈴さん……………余計な事を……………!!」

なんで咳の演技なんてしてたのか、分からないけど、とりあえず止まってよかったね。

で、止まったところ早速で悪いんだけど。

「で、さっきなんて言っただの？」

「ケホケホツ!!」

「あんたも、相当なもんだわ……………」

鈴のため息がやけに大きく響いた。

・・・なぜだ。

なぜこんなことに、なってしまったのだ。

篤は、あの女子たちの噂が、昨日、自分が一夏に言った「トーナメントで優勝したら付き合ってもらおう」という宣言の事だと言う事にすぐ気が付いた。

さっきキョロキョロ辺りを見回してみたが、アルデイの噂にまじって、この噂をしている女子たちが意外に多いことに驚いた。

つく、勝つても付き合えるのは私だけに決まっているだろう！

私は・・・その幼馴染だしな！

鈴はどうあれ、私の方が早いのだ。ファーストだからな。

そんなわけのわからない自信が篤を、奮い立たせる。

要は勝てばよいのだ。

それで万事うまくいく！

いつものように、自己完結するとうんうんと何度もうなずきながら、篤はご飯を口に運んだ。

さて・・・時は過ぎて放課後。

今日からは、鈴も一夏の特訓に参加することになった。

まあ、おおよそ鈴側から無理やりねじ込んだらうけど。

でも幼馴染とはいえ鈴は代表候補生だ。

流星に篤ほど、抽象的な表現はしないだろうと、一夏も期待を寄せていたのだが・・・。

「だからさつきから言ってるでしょ。なんで分かんないのよもー、気合よ気合ー！」

余計に酷かったようだ。

これならまだ、クイツとか言って実演して見せてくれる筈の方が分かりやすい。

「鈴……気合いだっっていうのは説明じゃないだろ……」

「何言ってるのよ一夏！これほど簡単な説明ないじゃない！！」
「簡単だよ、そりゃ。」

何でもかんでも、気合で説明が付くんだから。

あ、ちなみに今日は僕は見学者だ。

なぜなら……。

「はい？」

「だから、あなたのISはしばらく使えません」

「どうして？」

僕は、昨日セシリーと分かれた後、既に夜になっていたが

？ウエポンスクエア？の爆散によってダメージを受けた

？ストライク・バーディ？の簡易検査を山田先生にお願いしていたのだ。

その結果は今朝明らかになったのだが……。

「ダメージレベルがCを上回っていますからね。使用は許可できません」

ISは良くも悪くも成長する。その過程で多くの経験を積んで進化していくわけだが、当然その間の損傷時稼働もその経験内容に含まれる。

さっき先生の言ったダメージレベルCと言うのは、ISのダメージとしては相当のもので、そのまま無理に使用を続ければ、不安定なエネルギーバイパスを構築してしまい、後々重大な欠損を生む可能性があるのだ。

でも……。

「ただ、リアスラスターが爆発しただけですよ、それだけで堅牢な僕のISがレベルCの損傷ですか！？」

「はあ、サウスバードくん。あなたのリアスラスターには何がありますか？」

「・・・あ。」

「そうだった。」

「ストライク・バーディ？のリアスラスターの正式名称は？フレキシブル・スラスター？だが兵器名は？ウエポンスクエア？多くの火器を搭載したいわば？ストライク・バーディ？の武器庫だ。」

「そんなものが、爆発したら確かに流石の？ストライク・バーディ？も耐えられないよね。」

「どうやら、引き金はスラスターの高付加によるオーバーブローの様ですが、」

「それが、他の火器の誘爆を引き起こしてしまったようですね」「だめじゃないっすか・・・。」

「って言う事があったのだ。」

「そのため、僕だけ一夏達から少し距離を取って、見学しているというわけだ。」

「なぜ、一夏達の声が聞こえるかと言うとセシリーのおかげだ。」

「僕が見学と知ると、なぜかセシリーまで見学と言いだしたのだ。」

「まあだがそのおかげで、こうして？ブルー・ティアーズ？のモニターで一夏達の話し声を聞いたり、」

「こちらから話しかけたりできるわけだから、感謝しないとイケない。」

「にしても、本当によかったのかな、セシリー」

「何がですか？」

「いや、一夏達と訓練しなくて、良いのかなって。それに最近、全然自分の訓練とかできてないんじゃないの？」

「そう言うことは、一度でも私に当ててから言いなさいな。」

「一発も当てられていないアルが、心配なさることではありませんわ」「うう、まあそれは本当なんだけど・・・。」

事実、様になってきたというだけで、セシリーには今日まで一発の？い？の字すら当てた試しがない。

それを言われると、言い返せないんだよなあ。

「とにかく、今日は私も見学しますの！」

強く言いきると、フンツと鼻を鳴らすセシリー。

僕はそれを見て、少し笑みがこぼれた。

アリーナの中で縦横無尽に飛び回る一夏達を見て、体がウズウズしながらも、

まあ見学もまんざらじゃないかなと、思う僕だった。

翌日、人のうわさも七十五日とか日本では言うらしい。

意味は、世間のうわさも一時の事で、時が過ぎれば忘れられていくものと言う意味だそうだ。

なのに、昨日の噂はどこへやら。

今日の噂の対象はすっかり一夏へと移っていた。

対象になった人物は、昨日の僕と同じように机に突っ伏している。

言っちゃあ悪いけど、ざまあ見るだ。

昨日は、散々それで僕に精神的ダメージを与えてくれたんだ、今日は僕の番だよ……。

「一夏、噂になってるねえ〜」

ニヤニヤしながら、一夏に言う。

だが返答が無い。

ほほう。

返事すらできないほど衰弱しているのか。

これは面し……面白いな。

「一夏聞いているのかな？皆君の噂してるよ」
それでも返事が無い。

……ん？

「一夏？」

僕が呼びかけた時、ようやく一科が体を起こした。伸びをしながら。

「ふああああっ・・・あ、おはようアルディ」

「・・・寝てたの」

「ああ、ちよつと寝不足だな」

「・・・そうだった。」

一夏は超が付くほど自分の事に鈍感で、ずぶとい神経の持ち主だった・・・。

「ところでさ、アルディ。箒どうかしたのか？」

え？

指さす方を見ると、箒が机に突っ伏していた。

どうやら僕の攻撃は、一夏へ行かず、ブーメランのように戻って箒に当たっていたようだ。

「・・・ごめん、悪気はないんだ。」

少なくとも君には。

「諸君、今日も元気が良いな。結構結構。それではSHRを始める。いつもと同じように、織斑先生が山田先生と共に教室部屋やってくる。」

今日もいつもの日常が繰り返される。

「さて、山田先生からの話の前に私から一つ言っておくことがある。本日よりISの実習もから授業は本格的な実践訓練に入っていく、各人使用するのは、専用気持ち以外は訓練機だが、ISはISだ。」

しっかりと気を引き締める様に。ここまで言っただけでも私は知らんぞ。泣きついてくるなよ」

「・・・教師とは思えないね。いやまあこれまでだって、教師？って思うぐらい理不尽だったけど、教師って思うぐらい身の危険を感じただけ・・・。」

「ああ、あとISスーツの申し込みも忘れずにやっておくようにな、それでは私からは以上。では山田先生、後は頼もつ」

「はい」

「シャルル・デュノアです。フランスからきました。よろしくお願
いしますね」

フランス人の貴公子は、ブロンドの髪を後ろで束ね、天使のような
微笑みで、教室の女子たちに自己紹介する。

その笑顔は、僕たち男子でも、見とれるぐらいのものだったからそ
の破壊力は相当なものだ。

「男の子男の子男の子男の子男の子男の子男の子男の子……」

「やばい……やばいよお……あの笑顔は反則だつて……」

「織斑君やサウスバード君とはまた違うタイプだよね！」

なんだ……男の子男の子唱えてる女子がいるが……。

なにかの発作なのか。

そんな騒ぎ立てる生徒たちを余所にもう一人の転校生は、瞳を閉じ
静かに佇んでいる。

……雰囲気が。

明らかに一線を画するその少女は、左目に黒い眼帯をした、白銀の
長い髪の毛をたたえている。

軍人……？

姉が元々アメリカ軍関係もあって、昔その仕事を見せてもらったこ
とがあつたのだが、

その時基地で見た軍人の鋭い刃物のような、触れたら切れてしまい
そうな雰囲気。

彼女がまどつていたものはまさしくそれだった。

「黙り込むな、お前の番だラウラ」

「はい、教官」

……教官か……。

間違いないあの子は軍人だ。

どんな経緯で織斑先生を教官と呼んでいるのかはわからないが、雰
囲気そして今の口調。

僕の中で、仮説が確信へと姿を変えた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

・・・以上？

「それだけですか？」

言った山田先生は、中々勇敢だと思つ。

ラウラは、山田先生を一睨みする。

その鋭い眼光に、委縮する山田先生だったが、流石のラウラも教師にたてつくことはしない。

「以上だ」

そう言つて、なにやら辺りを見回す、ラウラ。そして一人の人物に視線を合わせた。

それは・・・

「貴様が・・・」

「え!？」

一夏だ。

僕は、ひそひそと一夏に声をかけた。

「何？あの子と知り合いのかい、あんなきつつい子と」

「知らねえよ・・・千冬姉を教官つて読んでたからドイツ人つて事は、

なんとなく想像はできるんだけどさ」

「うん？織斑先生ドイツで何かやってたのかい？」

「昔、向こうで教官やってたんだ・・・色々あって・・・」

ふむ・・・なるほど。その時に何かしら関係のあった人物と言つてとか。

僕と声をひそめていた、一夏の前に立つラウラ。

明らかに友好的な目じゃないよね。

ラウラに気が付き一夏も、前を向く。

そして手を振り上げて・・・

パソコンッ!

ペットボトルが直撃した。

一夏にはないラウラにだ。

「……貴様、どういつつもりだ」

「ごめんね、手が滑っちゃったみたい」

投げたのは僕なんだけどね。

あのまま行けば一夏殴られてたし。

投げたペットボトルは僕が今朝、購買で買ったものだ。

丁度取り出しやすい位置にあって助かった。

「ふざけるなよ……」

「わあ、ほんとごめんね。いや実はペットボトルがちょっと濡れてね、

仕方ないじゃない……不慮の事故だよ」

「くうツ!!!」

ガツと胸倉をつかむラウラに僕は笑って言う。

「だから、謝ったじゃないか」

「どうやら、痛い目を見んと分からんらしいな」

「凄んでも無駄だよ……僕は、君を舐めてる」

「貴様!!!!」

「いい加減にしろ、ラウラ、サウスバード!」

そこへ織斑先生が来て、ラウラを引っぺがす。

「きよ、教官!これは正当防衛で!!!」

「いつまで軍人気分だ、貴様は今日から私の生徒だ、黙って従え、
不服でも従えいいな」

「しかし!」

「初日から問題を起こすな!」

ピシヤリと言い放つ織斑先生に、ラウラは尚も不服そうな顔をする
が、渋々それに従う。

ふう、作戦成功。

作戦と言つかまあ、ただ騒ぎを起こせば織斑先生が必ず止めに入る
だろうから

それを狙って騒いだけなんだけど。

「サウスバード」

「はい？」

「教師をコマとして扱うとは、お前もいい度胸だ」

「い、いやですねえ・・・こ、コマだなんて」

その後、問答無用で一発を貰った。

「はあ・・・ガキはこれだから・・・まあ良い、織斑。

早速だがデュノアの面倒を見てやれ、これから実習だからな、まだ右も左も分からんだろう」

「はい、わかりました」

「では、各人はISスーツに着替えてアリーナに集合！今日は二組とお合同で模擬戦闘を行う、急いで準備しろ！」

今日は合同なのか・・・。

・・・つて。

「ボサつとしてる場合じゃなかった！」

「そうだった、シャルル！急ぐぞ」

「え、どうしたの？」

いまだに、要領のつかめないシャルルは、少し戸惑っているが、その手を一夏が引つ張る。

「一時間目、お前も聞いてただろ。これから織斑先生の授業なんだ、遅れたら何やらされるかわかったもんじゃないッ！」

「確かこの間は、遅れた分数×アリーナ十周だったねえ」

あんな思いはしたくない。

「「悪いけど、慣れて！」」

僕と一夏の声が重なる。

それほどまでに、織斑先生と言うのは恐ろしいのだ。

そんな僕たちを見て、シャルルはクスツと笑うのだった。

にしても、ラウラにシャルルね・・・。

ま、何にしたって人生は楽しくなきゃいけない。

ここ最近は何シーリーの件もあって下降気味だったが、その件もなんとかが収まったし、
これからは、色々楽しくなるよね。
僕はそんな事を考えながら、女子包囲網をかくぐってアリーナへと向かうのだった。

つちい!!

とある場所の遙か上空で、二機のISが火花を散らしていた。

「貰った!」

「まだだ!!」

その二機のISはほとんど形状は変わらない。
背部に計四門の荷電粒子砲を背負う。

それはまさしく、あの日IS学園を襲撃したISだった。
操縦者も声も背丈も全く一緒。

しかし色だけが違う。

片方は黒だったが、もう片方は真っ白だった。
互いに、砲を打ち合いそして動きが止まる。

「はあはあ・・・君は・・・君は!!」

「僕が、僕であるために・・・はあ・・・」

その時、白い機体のセンサーが上空から飛来するISの反応をとらえた。

「つな!!」

「下がりやがれえッ!!!!」

それは紫色のIS?紫煙?だ。

高速強襲型の機動力と近接での高い戦闘能力を備えた紫香楽製のI

S。

「っう・・・!!」

「触んじゃねえよ・・・」

？紫煙？の操縦者はワインレッドの髪を風になびかせながら、怒り狂ったように赤目で相手の白いISを睨む。

「・・・っ！姉さん、何で分からないの、それは僕じゃない!!」

「うるせえッ偽物!!総也の顔でぬりいこと言ってんじゃねえぞ・・・」

総也と呼ばれた少年は、バイザーで覆われた顔をゆがませる。

「Nの技術を奪ってまで、することが本当に正しいの!!」

「そのための技術だろうが!!」

一気に？紫煙？は距離を詰めると、戦槍？大蛇？で切りかかる。

それを手に持つ荷電粒子砲でなんとか受け止める。

そして動きが止まったところで、黒いISの援護射撃が入り、その一発は確実に総也をとらえた。

「ぐはっ!!!!」

その一瞬のすきを突いて、？紫煙？は黒いISを回収し、超高速で離脱する。

次に総也が目を開けた時には、何もなただ青い空が広がっているだけだった。

「ああ、くそっ!!!!!!」

やりきれない悔しさが彼を包む。

その時通信が入った。

そこには白衣の女性が写っている。

「すみません、逃げられました・・・」

『仕方ないわ、二対一ですもの』

「また追わないといけませんね」

『もう、やみくもに探しても時間の無駄ね・・・。こつも逃げられ
ては』

自分の失態だ・・・。

くそつ、せめてあの黒いほうだけでも落とせれば……っ。

『だから、方法を変えましょう。実はあの二機が最近とある施設を襲撃したの』

「え!？」

『その施設名はIS学園』

IS学園……。

『でね、あなたにはそこへ行ってもらいます!』

「え?」

いきなり何を言って……行く?

誰が??

「僕ですか!？」

『あたしに、ヒラヒラのミニスカートが似合うとでも?』

「それはそうですけど」

『否定しなさい馬鹿!』

性能のいいISの通信機器でもハウリングする程の声で怒鳴られ、頭がキーンとする。

『まあすぐにじゃないから、それなりに準備つてもものもあるし』

「いやでも!」

反論しようとしたがとにかく、これは決定事項よ!

とだけ告げられ一方的に通信を切られてしまった。

「……IS学園か」

ボソツとつぶやき。総也はひとまず、帰還の途へついた。

……これからどうなるんだろう、ただただ不安だけが総也の心に積っていった。

第8話〜天使のフレンチ・悪魔のジャーマン〜（後書き）

シャルロット党って言うのがあるみたいですが、僕はオルコツ党です。その総裁自負してます。どうも、しるくです。

この回を書くにあたって色々アメリカのことわざを調べたんですが結構色々あって面白いですね。

Barking dogs seldom bite

弱い犬ほどよく吠えると言う意味だそうです。

biteは噛むとか言う意味なので。

直訳はほえる犬ほど噛まぬって言うようですね。

……だから何だっと思って感じですが。

それでは皆様第9話でお目にかかりましょう！

さよならっ！！

第9話　思い、君と共に

「それでは本日より、格闘と射撃を含めた実践訓練を開始する」

結局、色々あって間にあいませんでした。

一夏は更衣室でシャルルと、物理の問題を出したりしていたが、何やってたんだろ。

ちなみに僕の場合は、完璧にルートミスだった・・・。

あの角をまっすぐ来たのがダメだったんだよなあ。

あそこで、包囲網に見つかるの覚悟で曲がっておけば、後は直角だったのに・・・。

で、予想通り、罰はアリーナランニングだったが、遅れた分数「アリーナ外周という慈悲深いお情けのおかげで、前ほど酷いことにはならず、なんとか皆が準備し終えるまでには合流できた。

なぜか箒と鈴が叩かれてたけど。

「さて・・・そうだな。模擬戦闘でもやってもらうか・・・。

サウスバード、凰、前に出ろ」

名前を呼ばれた鈴は渋々前に出ていくが、あいにく僕のISは使用禁止だ。

僕は拳手して、織斑先生に報告する。

「先生、僕IS、無いです」

「・・・あ、そうだったな、ではオルコット出てこい」

「わ、私ですの・・・」

これまた渋々と言った感じで前に出ていく。

前にセシリーが言っていたが、こういう授業などでの実演はあまり好きじゃないそうだ。

パンダみたいっていう理由らしい。

別に人気取りってわけじゃなさそうなんだが・・・。

「お前らもう少しやる気つてものは出せんのか」

「いや・・・」

「そう申されましても」

「・・・なんなら、私がお前らにやる気を出させてやるつか・・・
そうだな何発が良い？」

その発言に鈴とセシリーの顔が引きつる。

「何発!？」

「既に複数形ですよ!？」

ひきつる両名に、対して、ジリッジリッと近づいていく織斑先生。

「最低は五発からだ。最高はそうだな時間の許す限りでどうだ？」

「で、出た出た!あたし今、すっごいやる気出てます!！」

「わ、私もなんだか、凄くやる気が湧いてきましたわ、何せ代表候補生ですものね私たち!」

り、理不尽だな・・・。

流石は織斑先生だ。

半ば無理やりやる気の出された(?)二人は早速ISを起動する。

セシリーのはなんとなく青っぽいっていうのは色の濃淡でわかるけど、鈴のは完全に黒だな・・・。

色盲の目では、鮮やかなカラーリングもこの通りだ。

慣れたからこそ、これ赤だねとか青だねとか言えるけど、一度バイザーの色彩調整を目にしてしまうと、一気にこれまで、それがすべてだった白黒映像が味気なくなってしまう。

「それで、私たち誰と戦えばいいんですの？」

「なんなら、あたしとあなたでやる? まあ結果は目に見えてるけど」

「そうですね、私の勝ちと言う事は、誰の目から見ても明らかですわ」

そう言えばこの二人って、妙に張り合うよね。

あれか、プライドが高い者同士だからか?

「はぁ・・・やる気を出してくれたのは結構だが、そう張りきられてもな。」

まあ落ち着け。お前たちの相手は……ん？」

織斑先生が少しとぼけたような顔になる。

これは珍しい……。いつつもその表情で固定なんじゃないかと思うぐらい表情が変わらないのに。

織斑先生は、上を見上げて何かを探しているが、一向に見つからないようで、辺りをきよきよしている。

「……む、織斑そこ危ないぞ」

「え？」

一夏を名指しで、注意喚起。

その時風を切り裂くキイインと言う音と共に何かが、一夏へ向かって墜落してくる。

「は？え！？ええええええええつ！！！！！！」

叫ぶ暇があれば、少しでも避けたら……。ああ。遅かった。

墜落した何かは一夏を巻き込みおおきなクレーターを作って砂煙を巻き上げる。

そのクレーターを、囲むようにして女子が見守る中徐々に砂煙が晴れていき……

そこには、一夏とISを展開した山田先生が転がっていた。なるほど……。

落ちてきたのは山田先生に様だ。

で、一夏はというと。

おおう、一夏……。

アメリカのスラム街も真つ青だよ。

流石に彼らもだね、人目に付かない所でそういう行為をするからね。

一夏は白昼堂々、山田先生の放漫なバストを揉みしだいていた。

「一夏……君、多分スラム街でも力強く生きていけるよ」

「な、何言つてやがる……。これは……。事故だ！！」

「一夏！あ、あんたねえ。事後ですつてえつ……。なあに言ってるのよ……！！！！」

ISを展開していない一夏に向かって、色々切れた鈴が？双天牙月

?を投げつける。

直撃したら・・死ぬだろうね。

だがそれは一夏に到達することなく、撃ち落とされる。

一夏を助けたのは、さっき墜落した山田先生だった。

いつもとは全く雰囲気が違う山田先生に僕だけではなくこの場にいる誰もが、驚いている。

構えていたライフル?レッドバレット?を下ろすと、山田先生はまたいつものほやっとした顔で

一夏に、笑いかけた。

「大丈夫ですか、織斑君?」

・・・ああこの顔は山田先生だ。
なぜだろうか、ほっとする。

「山田先生は、代表候補生だったからな。このぐらいの射撃造作もないさ」

織斑先生が、自慢げに話す。

そりゃまあ、世界一の担任を補佐する副担任だからタダものじゃないだろうなとは予想していたいが、

まさか代表候補生だったとは・・・。

つくづく、この学園は恐ろしい。

そう言えば、あの時事態の収拾に駆けつけた、学園の教師陣も、そのほとんどが代表や代表候補生の人たちだった。

・・・でも・・・。

あの黒いISは、そんな人たち相手に、全く引けを取らなかった。

いや、圧勝だった。

・・・何をしに来たんだろう。

一夏達を狙いに?

でもそれなら、あの無人機の攻撃から、一夏を救ったのはなぜなんだ。

・・・わからない。

「おい見学者!」

そんな事を考えていると、いや考えていたからかな。

声と共に出席簿が頭を叩いた。

「ボケつとするな、見学者なら使える奴らを見てもっと学べ」

僕はその一撃で考えを切り替え、早速始まったセシリー・鈴ペア対山田先生の

模擬戦に目を移した。

まあ・・・今考えても答えは出ないだろうし。

授業に集中しよう。

・・・結局この後セシリーと鈴は山田先生にコテンパンに倒された。

今日の授業も、このSHRを乗り越えれば終わり。

放課後つて言ってもなあ、僕はISを使えないし、訓練つて言っても見学だからなあ。

その後山田先生から聞いた話によると、なんとか一週間ぐらいでISの起動制限は解除されるらしい。

ただ、解除されると言っても、すぐには全部のシステムや武装を使えるわけじゃないらしいけど。

要は人間と同じく、徐々に体を戻していくことが必要なわけだね。

「・・・これで、以上か。それでは今日はここまでだ。何か用事があるものは職員室へ直接会いに来い」

織斑先生が、いつもの調子で、切り上げそれに続く山田先生。

日常が繰り返され、そしてそれは放課後がやって来る事も例外ではない。

さていよいよ本当に、終わってしまった。

後ろの席では女子たちが、今から訓練機を借りに行こうとか、部活なんだとかそういう話をしている。

・・・何しよう。

IS学園在籍なのにISが使えない。
笑えるね……。

ふと後ろを見ると、セシリーもいない。

流石に、昨日僕が言ったことを気にして自主練にでも行ったのか。
まあ……うん。

そうなら、言った甲斐があったというものだろう。

どこか手持無沙汰だった、僕を救ったのはシャルルだった。
いや正確にはシャルルと一夏かな。

「アルディって、IS持っていないの？」

「持っていないわけじゃないさ、ただ使えないだけでね」

「使えない？」

「コイツのIS、ダメージレベルがCを超えて起動制限かけられて
るんだって。お前が転校してくる前にちよつとあつてな」

「ああ、なるほど」

一夏が捕捉を入れて、一応納得したそぶりを見せたシャルル。

「ま、そう言うことだよ」

僕は両手を開いて、おどけて見せる。

それを見てクスツと笑うシャルル。

……本当に、なんて言うか同じ男かね。

最近日本じゃ、男の娘って言うジャンルがあるみたいだけど、その
類に放り込んだら

賞の一つや二つ取れそう……いや、賞を総なめに出来そうだよな。

「で、何か用？」

「用ってわけじゃないんだけど、今から時間あるかな？」

「俺達、今から一緒に訓練するんだけどどうだ、お前も」

「だからね、僕はISが使えないの」

僕の話聞いてた？

僕が言えたことじゃないけど、ひよつとして鈍感なだけじゃなく物
分かりも悪い方？

「見学ぐらいできるじゃないか、今日丁度、射撃武器についてシャ

ルルに聞こうと思っただけだ。

剣ならともかく、射撃武器ならお前もセシリアに習ってるし、それに元々結構知ってるらしいじゃんか」

「まあ、姉さんに色々習ってたからね、基本的なところは」

「そう言えば、お前の姉さんって、あのローラ・サウスバードなんだから」

「ローラさんって言えば、モンド・グロツソの射撃部門一位のヴァルキリーだよ、

そんな人がお姉さんなんだったら、射撃の知識は僕よりあるかも」

「ハハっ、買いかぶりすぎだよ」

習ったと言っても、本当に構え方とか、打ち方だけで、それ以降はずっと独学だったし。

それに僕も、別に旨くなりたいたっていう向上心というより、姉さんがせつかく教えてくれたものだから、

このままやめてしまうのも、もったいない・・・
ぐらいのあいまいな理由で、やってきたから、別段射撃の腕が良いってわけでもないし、

知識が多分にあるっていうわけでもないのだ。

言ってみれば人より少し旨い程度って言うのが今の立ち位置だろう。旨いアドバイスも出来ないんじゃないや邪魔になるだけだし、断ろうかとも思ったが、じゃあ逆に何するかって話になってくる。

・・・はあ・・・今日も見学か。

「まあ、何も気の利いた事なんて言えないよ、それも良いかい？」

「ああ、気が利くか利かないかはともかく、アドバイス貰えるのはうれしいしな」

そう言っただけは、やたら重く感じる腰を上げた。

アリーナに着くと、早速一夏とシャルルがISを起動する。

一夏のISは、もう何度となく見ているが、シャルルのISを間近

で見るのはこれが初めてだ。

授業中は、ずっと一夏の手伝いだったしね。

シャルルのISは。授業で山田先生が使っていた？ラファール・リヴァイヴ？のカスタム機らしい。

確かに、ベース機の面影が随所にみられる。

だがそこは専用機。ちゃんと汎用機との区別のためにパーソナルカラーにペイントされている。

「シャルルのIS・・・赤？」

「え？なに冗談言ってるの、オレンジだよ」

「ああ、オレンジか・・・ごめんね色盲で色が分かんないんだ」

「あ・・・そのごめん」

「いや・・・なんで謝るかな・・・」

一夏の時もそうだったが、なんで謝るんだろう。

別にこれは、一夏やシャルルの所為でこうなったわけじゃない。

生まれつきの事だから、誰を責めるわけにもいかないし、

前にも言ったが幸い視力は良いのだ。生活に何の支障もない。

「まあ、そんなことより、始めないの？」

「そう・・・だね！」

既に一夏はスタンバイOKの様だ。

シャルルは一夏に自分の武装を手渡す。

あれは・・・？ヴェント？か。

あれと同じようなライフルを、アメリカで見た気がする。

姉さん関係なのは間違いないが、どこで見たのかまでは思い出せない。

・・・思い出す必要なんてないけど。

確かあれはアサルトライフルだったよね。

アサルトライフルは単発・連続射撃の切り替えができる小型軽量の自動小銃の総称だ。

有名どころで言うと、カラシニコフの愛称で有名なAK-47がそ

れだ。
有効な間合いは、中近距離で、あまり長距離戦には向かないが、威力も高く扱いやすいから各国の軍も、多く配備している。

一夏は、？ヴェント？をシャルルに手ほどきを受けながらしっかりと構える。

そして、シャルルが一夏から離れると、バンツ！という射撃音と共に、

弾丸が発射され、撃たれた弾は的の外側に当たった。

「うおっ！すげえ音！」

そうだろうねえ、僕も始めて撃った時そんな感想を持ったよ。

ただ僕の場合は、ISではなく実際にこの手で拳銃を持ったけどね。あの時の、もの凄い反動は今でも忘れられないよ。

そして、あの姉さんの顔も。

何が、軽く手を叩くぐらいの衝撃だ。

まだ、小さかった僕には、腕がちぎれるかと思うぐらいの反動だったよ。

「それで、どうだった、初めて撃った感想は？」

「なんて言うか、射撃すげえよ。音もそうだけど、何より滅茶苦茶速いんだな、弾丸って」

一夏・今さら？

君、射撃武器持った相手と何回かやりあったことあるよね。

抜けたことを言う一夏に、僕は遠巻きに話しかけた。

距離はあったが叫ぶ必要はない。

？白式？のハイパーセンサーが全部僕の声を拾ってくれるからね。

「速いって、当たり前でしょ、拳銃でも亜音速なのに」

「いや、でもすげえぞコレ。バンバーンって・・・」

初めての体験は誰だって興奮する。

それは一夏とて例外ではない。

確かにバンバーンって音したけど・・・。

「シャルル。これももう少し撃つてもいいか？」

「いいよ、マガジン使いきっちゃって」

持ち主の許可も降り、再び射撃を開始する。

初めて構えるにしては、一夏はうまい。

ほとんど、的の端だがそれでも今まで一発も的からはそれていないからだ。

僕でも、初めのうちは的に当たってるのだって苦労した。

あ、その事はISじゃないよ。

中々、射撃の筋も良いようだ。

バンツバンツと、乾いた音が響くアリーナ。

しばらく撃つと、ようやくマガジンが空になったようで一夏がシャルルに？ヴェント？を返した。

「射撃ってこんな感覚なのか、サンキュな」

「うん、どういたしまして。まあでも全部が全部こんな感覚じゃないよ」

？ヴェント？を粒子化しながらシャルルが話す。

そうなのかと、自分でも色々考えることがあるのであろう一夏は、

？白式？を待機状態へ戻すと

あごに手を当てて、色々考えているようだった。

それにならってシャルルも待機状態に戻す。

「そう言えば、話は変わるけど？白式？って、イコライザーが無いんだって？」

射撃について思考中だった一夏だったが、急な話の方向転換にもしつかり反応する。

「ああ、この前見てもらったんだけどパススロットが開いてないんだと。だからインストールも無理らしいぜ」

「それって多分ワンオフ・アビリティに要領を割いてるからじゃないかな、

？白式？って初めから使えるんでしょ？」

ワンオフ・アビリティー。

各ISが操縦者と最高状態になったときにのみ自動発生する能力の事で、絶対にその能力はかぶらない。

だからワンオフってわけ。

一夏で言うところか？零落白夜？がそれに当たるらしい。僕は見たことないけど、対象のエネルギーを消滅させることのできる能力だそうだ。

・・・怖いね。

「なるほどなあ・・・そういえばアルディ。お前はどつなんだよそこらへん」

「僕？ あははっ、？ストライク・バーディ？の性能の半分も使いきってないのに、

そんな話飛びすぎだよ」

「扱いきれるっていうのとも、少し違うんだけどなあ」

シャルルがうくと、腕を組む。

だが、言われてみればそうだ。

僕のワンオフ・アビリティーねえ。

使える日が来るんだろうか、僕にも。

聞けば、ワンオフアビリティーは、発動するよりもしないことの方が圧倒的に多いらしい。

・・・だけどもあ、使えたら使えただ、使えなかったら使えなかったで、別にどうでもいいや。

どの道、今は？ストライク・バーディ？が使えない。

早く、慣れないといけないのになあ。

稼働時間も全然足りないし、実戦経験だっただけ皆無だ。

焦っても仕方が無いとはいえね。

やることはやったしそろそろと思っていると、急にざわめきだす場内。

・・・何かあったの？

「あれ・・・ドイツの・・・」

「第三世代機じゃないアレ」

「うそ、あれってまだトリアル段階だって聞いたけど・・・」
ドイツそこから連想させるのは、あの人物しかいなかった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

一夏がつぶやく。

今朝僕がペットボトルを投げちゃったからね、その報復かな？

だがラウラが次に発した言葉は、僕の想像を容易く崩す。

「織斑 一夏・・・私と戦え」

「・・・なんでだよ」

「御託はいい、ISを展開しろ」

有無を言わさぬ声で、命令するラウラ。

その目は完全にこちらを見下している。

「やだね、理由が無い」

「理由だと？」

「ああ、そうだ俺にはお前と戦う理由が無い。だから俺は戦わない」
「・・・そうか」

ラウラは、そう言ってゆっくりとこちらを向く。

・・・なんだか嫌な予感・・・。

「ならば、理由を作ってやろう!!」

「うあああああっ!!」

言うが早いか僕に向かって何の躊躇もなく、肩の大型カノンを撃つ。
流石に直撃は相手も避けたようだが、僕は爆風で何度か地面に打ち
付けられながら

アリーナの側壁まで吹き飛ばされた。

その衝撃からか右腕から血が流れ出す。

どうやら完治していないあの傷口が、今でまた少し開いてしまっ
たらしい。

だが今はそれよりも、全身の痛みが凄い。

動かすだけでいるんところが痛む。

すぐにはまともにも立てそうもない。

「てめえ、何してんだ！！あいつは今ISを展開できないんだぞ！？」

「理由を作ってやったまでだ、貴様が必要だと言ったのでな」あたかも、当然のことをしたかのように言ラウラ。

キツと睨む一夏だが、次のラウラの一言で完璧に切れた。

「それに展開も出来ない雑魚だ、吹き飛ばさただけでも役割ができて良かったじゃないか」

「ふざけんな！！！！」

怒鳴ったのは一夏だったが先に攻撃したのは、シャルルだった。

さっきのアサルトライフルとはまた違う？ガラム？を展開してラウラへ向かい引き金を引く。

目つきも先ほどまでの、優しさはなく、まさに激昂だった。

「ドイツ人って言うのは、やっていいこととやっちゃいけないことの区別が出来ないほど低レベルなんだね！」

「・・・フランスのアンティークか・・・。話にならん」

「いまだ量産のめどすら立たない、そんな試作武装だらけのモルモットよりはましなんじゃない？」

睨みあう両者。

そしてしばしの時が流れ、一夏が急に声を上げた。

「お前、なんでそんなに俺に突つかかるんだ！？」

「・・・貴様があのお教官の弟だからだ！」

「何！？」

「貴様、昔ドイツで誘拐事件にあったそうだな。その際教官は貴様を助けに行き、モンド・グロツソ二連覇という偉業を達成できなかった！」

「それは・・・」

「貴様がいなければ、教官よりも劣る低レベルな出場者だ。二連覇出来たことは容易に想像が付く・・・」

・・・待て・・・待てよ・・・。

今なんて言っただい彼女・・・。

低レベル？

織斑先生が勝つことは容易に想像できる！？

・・・舐めるなよ・・・。

気が付けば僕は、痛みすら忘れて叫んでいた。

「ふざけるんじゃない！低レベル？容易に想像がつく！？

いい加減な事ぬかすなよ、君に何が分かるっていうんだ！！

確かに織斑 千冬は強いさ、でも無敵じゃない。最強なだけだろう！

僕の姉さんをなめるな！！！」

今のは姉さんを侮辱されたに等しい。

姉さんは、あんなおちゃらけた性格だが、日々努力や鍛錬を怠らなかつた。

モンド・グロツソ第一回大会で、織斑先生に負けた後、表彰台では笑顔だった姉さんが、

僕の前で笑い続けていた姉さんが、僕の前で初めて泣いた。いや泣き崩れた！

なんで勝てなかったんだと、これまでの努力は何だったんだと。

結局、ああ言う理由で織斑先生が辞退したことで、姉は第二回大会の総合優勝？ブリュンヒルデ？の栄冠に輝いたが、その顔は全然うれしそうではなかつたし、

何より姉はその称号を自モンド・グロツソの委員会へ返納している。プライドが許さなかつたのだろう。

だからこそさっきの発言は許せなかつた。

何も知らない、彼女が姉さんを侮辱するなど。

「そう言えば、貴様の姉もモンド・グロツソに出場していたのか。大方、無様に負けたのだろう。そんな負け犬の弟に何を言われようとな・・・。」

「流石の僕も、切れたよ・・・。」

「ほう、だったら何だと言っただ？」

・・・彼女は・・・彼女だけは許せない。

「トーナメントだ、学年別トーナメントが今度ある。僕のISもそ

れには間に合うはずだからそこで決着をつけようじゃないか・・・」
「・・・ふん、決着か。私はその男にしか興味が無いが・・・
まあ良いだろう。作業が一人増えるだけだからな」
そう言うと、ラウラはISを待機状態に戻し、すたすたとピットの奥へ引っ込んで行ってしまった。

ラウラの退場で、スツと頭の冷えた僕は、また激しい痛みに襲われる。

僕は顔をゆがませながら一夏に謝った。

怒ったとはいえ、彼の姉さんを悪く言ってしまったのだ。

「・・・一夏ごめん・・・カツとなつて。織斑先生の事・・・」

「へっ、気にすんなよ、誰だって自分の身内を馬鹿にされたら怒るだろ?」

「・・・あ、でも僕はそれをしたんだけど」

「時と場合によるってな」

どうやら怒ってはいないようで、安心したが、痛みだけは安心できるレベルじゃない。

「いっつつ・・・」

一度は立ったものの、痛みでよろける僕をシャルルが支えてくれた。

「ああ・・・大丈夫?とりあえず、保健室行こう」

「うん、面目ない・・・」

僕はシャルルの肩を借りながら、一夏と一緒に保健室へ向かった。

・・・保健室の先生に?また来たの!???って顔で見られたのは内緒だ・・・。

アルデイが怪我を負ったという話は、すぐに自主練習のため

アリーナに来ていたセシリアと鈴にも伝わった。

アルが怪我を！？

すぐに訓練を中断して、鈴と共に着替えもそこそこに保険室へと急ぐ。

いつもなら、すぐについてしまうのにこんな時にはその道のりが長く感じられてしまう。

ようやく、保険室に到着すると、ノックもせずにその扉を勢いよく開ける。

そこには、今まさに先生の診察が終わったアルデイがいた。

「アル！」

「やあ、セシリー」

こちらの気もしらないで、何ともまあ軽い挨拶を・

「先生、大丈夫なんですか！？」

「そうね。アリーナの側壁に叩きつけられたときにだいぶ上半身を強く打ってるみたいだから、しばらくISの実習も自粛した方が良いとは思うわ、その他は特に異常は見られないから大丈夫だと思うけど」

「………そうですの」

「……あの女やつてくれるじゃない」

鈴が憎々しげに言う。

鈴は素直には言わないがそれなりに、アルの事を心配してくれているようだ。

「まあ、逆に生身でISの攻撃を受けて、これだけで済んだわけだし運が良かったんだね」

「アル！楽観的なのも大概にしておきませんか、後々大けがしますわよ！」

本当に、少しはこっちの身になってほしいものだ。

大体の事を「まあ、いいや」で済ましてしまうのが彼だが、自分の体の事までそれで済まされては、たまったものではない。

彼に万が一の事があつたら、自分はどうすればいいのだ……。

「にしても、一夏に……えーと……」

「ああ、シャルル。シャルル・デュノア」

「そう、デュノアがいてなんてザマなの？」

確かにそれはセシリアも思う。

それに、デュノアは、代表候補生だ。

もう少し、周囲に気を配ってくれば、アルがこんな怪我をせずに済んだかもしれない。

悪いのはあのラウラという女だと言う事は分かっているのに、セシリアは、アルデイの身を案じるあまりそんな事を思ってしまう。

「わ、悪い……」

「僕も流石に、生身の人間に向かって攻撃するなんて思わなかったから……」

一夏とシャルルが弁解をするが、セシリアの心は一向に晴れなかった。

そしてその、もやもやはやがて、一つの形に集束する。

ISは、今や世界最強の兵器である。

たった一機で一国の軍隊とやりあって勝てるほどのすさまじい力だ。そんなものを、生身の人間に向かって撃てばどうなるかなど、幼稚園でもわかる。

……ラウラ・ボーデヴィツヒ……許しませんわよ、私は。

そう、ラウラへの怒りだ。

だが静かに闘志を燃やしていた、セシリアにアルデイが声をかける。

「セシリー、分かっていると思うけど……馬鹿な真似しちやだめだよ」

「馬鹿な真似？何のことですの」

セシリアには、アルデイが何を言わんとしているのか分かっていたが、内にその怒りを押し込め、勤めてクールにふるまう。

「……手、ずっと握りっぱなしだよ」

「あ……」

あわてて、グツと握っていた手解く。それと同時にアルデイのため息も聞こえた。

「セシリー……彼女とは僕が、決着をつけるよ」

「え？」

「僕にも色々、譲れない物はある」

譲れないもの？

それは一体……。

「彼女は僕の姉さんを馬鹿にした……何も知らない癖に負け犬呼ばわりまでして……」

一瞬だがセシリアの心にズキンツと痛みが走る。

ローラはアルデイのお姉さんで、そのお姉さんを悪く言われてアルデイが怒るのは当然の事だ。

だがセシリアはほんの少しだけ、それが自分だったら……. 思ってしまった。

要はその姉に対する嫉妬心である。

誰よりも、彼の近くにいたいと思うセシリアの正直な気持ちだったが、すぐにその考えを振り払う。

私は何を考えているんですの！

前もそんな嫉妬心から大変な事になったばかりだと言うのに……. ましてや、アルの実の姉に嫉妬するなど失礼極まりないではありませんか！

だがそうは言っても……. 何時か。

お姉さんよりもなんてことは言わない。

ただそれと同じくらい近くで彼を見守ってあげたいと思わずにはいられない複雑な心境のセシリアだった。

セシリアはアルデイを見やる。

そのセシリアを見返すように、アルデイもまた決意のこもった眼でこちらを見ていた。

「アル……」

「僕は彼女を許さないし、許せない……. 誰が何と言おうと彼女

は僕が「・・・残念だけどそれは無理ねえ」・・・え？」
アルデイの発言を遮ってまで発せられた保健の先生の一言に一齐に
注目が集まる。

「何が無理なんですか？」

鈴が答えをせかすように、誰よりも早く質問を返した。

それに保健の先生は腕を組みながらこう告げる。

「学年別トーナメントまで、そんなに日は無かったわよね・・・二
週間あるかないかぐらい」

先生は、白衣のポケットからスケジュール帳を取りだして日程を確
認しながら話を続ける。

「で、今日あなたがその怪我をして・・・完治にこれぐらいだか
ら・・・うん無理ね」

何か一人で納得して、勝手に無理と結論づけた。

いまいち、内容のつかめないセシリアたちは、首をかしげるばかり
だった。

その様子を見て、先生が苦笑してようやく説明らしい説明をしてく
れた。

「ああ、ごめんなさいね。無理って言うのは彼のトーナメント出場
の事よ」

「ええ!？」

誰よりも一番大きな声を上げたのはアルデイだった。

それはそうだろう。あれだけ意気込んでいたのだから。

「普通なら、何の問題もなくエントリー出来るんだけどね。」

ただあなたも時期が悪かったわ。この学園には、操縦者の健康や身
の安全を確保するために、

大きな行事・・・今回で言えば個人戦トーナメントがそれに当た
るんだけど、

そういったイベント前に大きな怪我をした生徒は原則、私や医師の
診断書が必要なの」

「え、じゃあ・・・」

「ええ、あなたの怪我からみて完治はトーナメントの直前ってこと。それに今回は外側からじゃ分かりにくい怪我だから、なおさらね。そんな状態の生徒に診断書は書けないわ・・・残念だけど出場は諦めて」

「そんなんっ！」

グツと拳を握りしめて、やりきれない思いをどうしたらいいのかわからない様子のアルディ。

先ほどの話を聞いていただけに、その悔しさはこの場に居る誰もが共有していた。

皆、なんと声をかけたらいいのかわからず、沈黙が部屋に訪れる。

だがセシリアだけは違った。

セシリアは椅子に座るアルディに視線を合わせる様にかがむと、優しい声で言った。

「アル・・・私にお任せくださいな。彼女とは、私がその思いと共に闘いますわ」

「セシリー・・・でも、彼女は・・・僕の・・・」

「ですから、お姉さんへのその思いを私に預けてください」

彼が自分を助けてくれたように、今度は自分が彼を助ける番だ。

悔しさの、にじむ目からはうつすらと涙も見える。

本当に・・・本当に忸怩たる思いなのだろう。

こんな表情のアルディを見たことが無かった。

彼が楽しむのなら、自分もそれを楽しもう。

だが、彼が苦しむのなら、自分は進んで苦しみの中へ飛び込もう。

そして、その苦しみを共に分け合おう。

それで、少しでも彼の苦しみが和らぐのならば。

「彼女は、一夏さんを目の敵にしているようですが、

そんなの知ったことではありませんわ。私が勝って、証明してみせます」

「・・・セシリー」

アルディが急に自分を呼ぶ。

そしてなにもいわずに、セシリアの首に？銃弾のネックレス？をかけた。

それは、現在使用できないアルデイの？ストライク・バーデイ？の待機状態のものだ。

「アル？」

「やっぱりこんな顔は僕には似合わない。僕は年がら年中笑っていたい人間だからね」

アルデイは、打って変わって明るいつもの調子で言うと、椅子から勢いよく立ちあがり、

保健室の扉の前へ歩いていく。

そしてドアノブに手をかけて、静かにこう言った。

「……君に預けるよ、僕と姉さんの思い。無茶しろなんて言わないけど……一言だけ言わせて」

セシリアは、首に掛けられたネックレスをギュツと握りしめる。

「……勝つて！」

そう言い残し足早に、保健室を後にするアルデイ。

残された面々は、その背中をただじつと見送った。

セシリアは預けられたネックレスを首から外すと、それを両手で持つ。

「……重い。」

元々重量のあるネックレスだが、これにはアルデイとその姉のローラの思いが詰まっている。

今のセシリアには、そのネックレスの重量がとてつもなく重く大きいものを感じられていた。

それと同時に、セシリアの中で決意も固まる。

「……こりゃ、負けられなくなったな、セシリア」

「あんた、へマしたら今度こそ捨てられちゃうかもね」

「彼女も大変だね。こんなところで最高の操縦者が生まれたんだから」

三者三様の言葉を投げかけてくる彼らに、セシリアはふりかえると

改めて決意のこもった眼で宣言した。

「この思いと共に、勝ってみせますわ！！」

言いきったセシリアの表情は、いつも以上に自信に充ち溢れていた。

第9話〜思い、君と共に〜（後書き）

今日、オルコツ党総裁の私とシャルロツ党党首との間で会談を行いました。

内容は、y o o o u t u b e でご覧いただけません

どうもしるくです。

原作ならこの後セシリアと鈴がやられて出場できないのですが、そこはほら。

原作通りになんてねえ。

いかないわけですよ、中々（爆

そういえば今日、会談した場所は滋賀県の豊郷小学校です。

寒かった〜・・・雪とか降ってましたからね。

3月の末やつちゅーのw

そんなこんなで。

それでは10話でまた！

さよならっ！

第10話 僕が嘘をつく理由、彼が彼女である理由

トーナメント出場禁止が宣告されたその日の夜。

僕は自室で、ボーッとPCを眺めていた。

何か特別な意味はない。

画面には世界各国の情勢や事柄が、表示されている。

僕はそれを、特に何の考えもなくカチカチとクリックして開いては閉じまた開いては閉じるを繰り返していた。

あの時、感じていたやり場のない憤りが、全く無くなったと言えば嘘になるが、もうあれはセシリーに任せただ。自分自らが選んで彼女ならやってくれると思ったから。

だから、僕はもう特に深く考えるのをやめた。

勤めて僕らしくあるうとしたのだ。

深く考えるよりも気楽に事を構えていたい。

それが自分だから。

楽観的は自分の専売特許だと思う。それ以外に、特にこれといった特技もないしね。

「……別に良いんだけどなあ」

何が良いのかもわからないが、呟いてみる。

一人部屋だ。返事は当然ない。

……はあ。

だが、そうは言ってもやはり悔しい。

出場できないことが。

姉さんを馬鹿にしたラウラが。

そして何より、セシリーに思いを託すしか選択できなかった自分自信が。

はあ。

また一つため息が漏れる。

ダメだ。ネットサーフィンしてたら気も紛れるかと思ったけど……

。

頭に全然内容が入って来ない。

・・・ふう、一度外に出よう。

夜風に当たれば、少しは気分転換になるだろう。

丁度僕が、寮の玄関を出る辺りで、シャルルとすれ違った。

「あ、アルデイ・・・大丈夫？」

「まあ、なんとかね」

「大丈夫だよ、セシリアさんすつごく良い顔してたから」

「そう・・・そういえば一夏は？」

「うん、なんか用事だって。山田先生と一緒に書類書きに行ってるよ」

「ふうん」

「それじゃ、僕もシャワー浴びたいから」

「ああ、じゃあ」

少しの間言葉を交わして、シャルルと分かれる。

心配してくれていることは、何にしてもうれしい事だった。

しつかりしろ！アルデイ・サウスバード。

落ち込んで、皆のモチベーションまで下げる気か！

自分に自分で渴をいれ、夜風心地いい、満点の星空のもと近くのベ
ンチに腰を下ろした。

・・・星空かあ・・・。

これまで、こうやって見上げたこともなかったなあ・・・。

だって、よく見えないし、真っ黒で。

・・・どんななんだろうね。

？ストライク・バーデイ？のバイザー越しにみた青空はそれは綺麗
だった。

皆こんなきれいなものを見てるのかって、羨ましくなっただぐらいだ。

ふう……。

本当に情けない。

こんなことならもう少し、鍛えとくんだったかなあ。

自慢じゃないが、僕は銃器の扱いには人よりはまあまあ上手くできるが、それだけだ。

運動は……まあ嫌いじゃないけど。

一夏や篭みたいに剣道のような、武術を習っていたわけじゃない。

僕のはあくまで趣味の範囲内だ。

そんなこと言ったら、姉さんは怒るかな。

……。

弱っちいなあ、僕。

僕にあるものと言えば……。

しいて言うならこの口か。

子供のころ、今もだが僕はそれはそれは弱かった。

いじめられっ子って言うのかな。

その時姉さんが教えてくれたのが嘘だった。

いつだったかな、いつも見たいにポコポコにされて帰ってきたんだっけ。

そしたら姉さんにこう言われたんだ。

「アルデイ……やり返せとは言わないけど言い返すぐらいしたらどうなの？」

「……だつて、言い返すとまた叩かれちゃうし」

「じゃあ、あなたは相手が飽きるまで、叩かれていたいの？」

「いやだよ……痛いのも、怖いのも」

多分あの時僕は、半べそ状態だったかな、今思い出すと笑っちゃっただ。

そんな僕に、姉さんは目線を合わせると、頭をなでながらこう言ったんだ。

「アルデイ、そんなあなたにいいことを教えてあげる。嘘吐きなさ

い、なんでもいい嘘を吐くの」

「え?でも・・・」

「他の大人たちは、色々言ってくるかもしれないけどそんなの気にしちゃダメ。」

この世にはね、吐いていい嘘と吐いちゃダメな嘘があるの、わかる?」

僕はよく言葉の意味が理解できなかったから、首を横に振った。

そんな僕に姉さんは、また優しく笑いながら言う。

「ダメな嘘って言うのは、その場に居ない誰かを傷つけてしまう嘘。これは絶対にだめよ。どんなことがあってもそれはダメ。」

反対に良い嘘って言うのは、自分が傷つく嘘の事。

変な言い方かもしれないけれどね」

そう言うと姉さんは第一回大会のモンド・グロツソでの新聞を僕に見せた。

そこには、二位という成績を片方で称賛しながら、もう片方では?

R o l a o f b e t r a y a l ?

(裏切りのローラ)という文字が一面を飾っていた。

「丁度この記事が良い例だわ、姉さん嘘つきでしょ。」

それが招いた記事の見出しなんだけど・・・

アルディはこんな姉さん誇りに思えない?」

それもノーだ。

僕はさつきと同じように首を横に振る。

どんな理由であれ、姉さんが世界第二位という事実には変わらない。

そしてそんな姉さんを僕は誇りに思っている。

「でしょ、だからそう言う事。たとえ自分の名前や自分自身が傷ついても、

それで誰かに信じてもらえるなら、誰かを助けられるのなら嘘をついても良いの」

「・・・本当に?」

「あら、姉さんを信じられない?あたしは、世界第二位のお姉さん

よ。

それに私はそう言うのを嘘って言わないと思う」

「でも、僕が嘘言ったら、姉さんも悪く言われちゃうよ?」

「フツ姉さんは良いの、特別よ。姉さんはあなたのためなら喜んで傷ついてあげる」

「・・・姉さんは強いんだね」

「強くなんて無いわ、そうね格好悪く言えば、ずるがしこい、格好良くえば確かに強いのかも...」

私はこう思うの、嘘って言うのは、あたしにとってそれこそが強さなんじゃないかって。

ただ扱いには結構苦労するけどね」

強さ・・・。

僕にもそれがあればいいのかな。

そう言って笑う姉さんの後ろ姿を見てそう思った僕は、その日以来よく姉さんの真似をするようになった。

真似っていつても、何だろう。

身近な物で色々嘘言ったりするだけなんだけど、これがやってみると結構難しかった。

まず、嘘って言うのは結構周到にやらなければ、ばれてしまうものだ。

そのことを姉さんに言ったら

「そりゃそうよ、そんなに簡単に出来たら、あたし、何のためにあんな事まで言ったの?」

だそうだ。

そしてそれから今まで、ずっと。

最近でこそ、それほど嘘吐いてないけど、要所要所で色々吐いてることは吐いてるよね。

にしても、懐かしいなあ。

こんなにも鮮明に思い出せるのは、今の人格形成に多大な影響を及

ぼしたきっかけだからなのか、それとも何かまた別の事なのか。だが、何にしても少しは気分転換になった気がする。

僕は、ゆっくり立ちあがって、深呼吸を一回。

そして、もと来た道を戻り始めた。

僕が寮の玄関を入ったあたりで今度は一夏に出会う。

一夏も寮に帰って来た様子で、自然と横並びになって会話が始まった。

「アルデイじゃないか、今帰りか？」

「いいや、ちよつとそこら辺を」

「徘徊してたのか？」

「言い方・・・まあ似たようなもんだけど」

ふうつ、息を吐くと丁度一夏が何か袋を抱えているのが見えた。

「一夏、それ何？」

「ん、ああこれが、茶っ葉だよ。良いのをネットで見つけてさ、でも距離が遠かったから今着いたんだ」

「アレ？シャルルは書類をかきに行ったって・・・」

「だからその後だよ・・・そうだ、お前もどうだ一杯。これは美味いぜ！」

・・・そもそも、その年でお茶っ葉をネットショッピングするのは。

中々、一夏って珍しいよね。

でも、せつかくのお誘いだ。

どうせ部屋に帰っても、やる事なんて特に無かったし。

「じゃあ、いただこうかな」

そう言っ僕は、行先を変更し一夏の部屋へと足を向けることにした。

「たっただいまー」

一夏の能天気な声が響くが、返答はない。

そう言えば、今はシャルルと相部屋だっけね。

ふと、今の一夏の行動が僕の日常の寮へ帰宅する風景に重なる。
……時々僕も、誰もいないのにこう言う事言ってるけど……
やめよう。

甚だしく馬鹿らしい……。

「あれ、シャルルが……ん、ああシャワー浴びてんのか」
確かにシャワールームからはシャアアアツツという水の音がしている。

いつまでもドア付近に突っ立っていた僕に、一夏が席へと促す。

「あ、適当に座っててくれよ、今からお茶入れるから」

僕は、適当な椅子に腰かけ、少し辺りを見回す。

……広いね、当たり前だけど。

よくよく考えてみたら、二人部屋でこれだけの広さがあるのに、どうして一人部屋になるとあそこまで小さくなってしまふのだろうか
普通に考えれば、これの半分でしょ……。

そんな事を考えている間にも、一夏は手早く急須にお茶つ葉を入れてポットのお湯をそそいでいる。

と、急に一夏があつと声を漏らした。

「そう言えば、ボデイソープ切れてたんだっけ……悪い、ちょっとシャルルにボデイソープだけ渡してくる」

「ああそれくらいなら僕がしよう。丁度手持無沙汰だったんだ」
僕は一夏がクローゼットから、取りだしたボデイソープを受け取る
とシャワールームへ。

ガチャリとドアを開けると、中に滞留していた湯けむりが一気に流れ出した。

うつすらとだが奥にシャルルが見える。

「シャルル、一夏から。ボデイソープが切れてるんだ……
……
……
……」

「え！？あ、アルデイ、なんでどうして!？」

……あれ？

シャルルって男の子……だよな？

それとも何、お湯かぶると女の子になっちゃうとか？

そこでは、平均的な胸のふくらみをもった、明らかな女子がシャワーを浴びていた。

「おい、何あけつぱなしにしてるん……だ？」

一夏の僕と同じ反応だったが……多分今は固まっている場合じゃない気がする。

僕は、ボディソープをシャルルの、近くに置くと一夏に飛びかかる形でシャワールームから飛び出した。

「おわッ！おまえいきなり飛んでくるなよ！」

「緊急事態だろう！これぐらい我慢したまえ！」

僕は、一夏寄りかかる形で、先ほど飛び出したシャワールームを振り返る。

ど、どう言う事なんだ？

……これは。

しばらくして、シャルルがシャワールームから出てきた。

格好は、オレンジと紺色の入ったジャージ姿だったが、明らかに胸が膨らんでいる。

そ子に居たのはシャルル君ではなく、シャルルさんだった。

「あ……えっと」

「……」

一夏は何か話題を切りだそうとするが、中々口を開けない。

シャルルもそれは同様なようで、椅子に座ってからもずつとつむいたままだ。

ほんと、こう言う時自分が軽くて、楽観的主義でよかったと思う。

内心は焦ってはいるものの、平気で嘘がつける人間だ。

なんとか外見は平静を保てるし、何より頭が働いた、まささっきよりは。

「とりあえず……お茶でも淹れたら？」

「そう、だな……ちよつと待っててくれ」

一夏が立ち上がり、少しの間シャルルと僕の二人がその場に残された。

シャルルは、うつむきながらもぼつりつつぶやいた。

「・・・驚いた、よね」

「まあ、そりゃ」

むしろこの場で驚かない人間がいたら見てみたい。

・・・姉さんは楽しみそうな気はするけど。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

再び訪れる沈黙。

流石に僕も、二人きりに慣れると何を言っているのか困るね。

一夏は数分後に戻ってきたが、その間が僕にはとても長く感じられた。

一夏は、湯呑をシャルル、僕、自分の順番で置いて席に戻った。

シャルルは出されたお茶に、まっ先に口をつけた。

あたかも、自分を落ち着けるかのように。

一夏はシャルル同様に少し口に含んだ後、ふうつと息を一回ついて口を開いた。

「その、なんで男のフリなんかしてたんだ？」

「実家の命令なんだ」

実家・・・デュノア。

・・・ああ、デュノア。

フランスの大手IS企業じゃないか。

なるほど、そこのお嬢様だったのか。

「命令？どうしてそんな・・・」

一夏がさらなる疑問を投げかける。

だがシャルルはチラチラと先ほどから僕の方を見てまた黙り込んでしまった。

・・・どうやら、複雑な話の様で。

ガタツと僕は立ちあがる。

その行動に、二人とも驚いていたが、僕は構わず言う。

「はあ、まあいいや」

それだけ言っただけはきびすを返した。

「おい、まあいいやってなんだよ、真剣な話してるのに」

当然一夏は僕の行動が癪にさわって、肩を掴んでくる。

だがそれを僕は振り払うと、ふりかえって睨み返した。

「確かに、真剣な話の様だけど、僕はそんな昔話に付き合うつもりはないんだ」

「何!？」

「これからどうせ、お涙ちょうだいな昔話が始まるんでしょ、そう言うの僕は好きじゃないんだ」

「お前! いい加減にしろよ、シャルルはお前の事心配してくれてたじゃないか!!」

「それとこれとは話が別さ、それに僕は心配してなんて頼んだかな?」

「出てけ・・・今すぐに!」

「言われなくてもそうするさ」

僕は、吐き捨てるように言う。と乱暴にドアを開けそして、思い切り締めた。

中からは一夏の気にするなよシャルル・・・って声が聞こえる。

・・・さて、それじゃ改めて聞かせてもらおうかな。

僕はポケットから、受信機付きのイヤホンを取り出すと、片方の耳に取り付ける。

フフフっ、一夏達には後でちゃんと謝らないとね

僕はほくそ笑むと、イヤホンから聞こえる?一夏とシャルルの会話?に耳を傾けた。

「あいつの事なんか気にすんなよ、あんな薄情なやつだとは思わな

「かつたぜ・・・」

「・・・うん、まあそれは良いんだけど・・・さっきの話の続き」
「続き・・・その言葉に急速に冷えていく一夏の頭。」

「一夏は椅子に座り直すと、シャルルの言葉を待った。」

「僕ね、愛人の子なんだよ」

「え・・・」

つまり、父親と本当に母親の子供じゃないってこと・・・。

「二年前に実家に引き取られてね・・・。色々検査していく内にISの適性が高いことが分かって、非公式ではあるけどデュノア社でテストパイロットをしてたんだ」

「一言一言語られていく真実に、一夏は心が締め付けられる思いだった。」

特に真実を語っているシャルルはもつとだろう。

「一度だけ、本邸に呼ばれたんだけど・・・本妻の人に殴られちゃったよ。あれはびっくりしたかな」

びっくりしたなんて、生易しいものでは無かっただろうと一夏は思う。

それと同時に、怒りがこみ上げてくるのが自分自身でもわかった。手は知らず知らずのうちに、グツと握られ震えるほど力が入っている。

「・・・まあそれは僕の事で、それから数年後、デュノア社は第三世代IS開発の遅れから経営危機に陥ったんだ・・・。もともと遅れていた上に時間も無くて、最終的に今度の政府のトライアルで選ばれなかったら、予算全面カットの上でISの開発許可もはく奪されるって話になって・・・」

確かに、デュノア社が大変だと言う事は分かった。だが・・・それがどうして。

「でも、そこからどう男装につながるんだ？、聞いた限りじゃ何も繋がりが見えないんだが」

その問いにシャルルは、乾いた声で少し笑った後、苛立ちを含んで

言った。

「ISは男の人には使えないって言うのが一般常識でしょ。そんな中でフランスで男のIS操縦者が見つかったってことになれば、広告塔にもなるしその子がIS学園に入学したって何も不思議じゃない・・・それに」

シャルルは、うつむくと声のトーンを落とす。

「それに、そこでなら日本で発見された特異ケース・・・一夏に接触しやすいでしょ」

そこでようやく合点が言った。

つまり、そう言うことだ。

白式のデータは、一応公開されているもののその奥が謎のまま。

そのISのデータがあれば、デュノア社は再びそれを元に第三世代ISの開発に着手できる。

仮に予算が下りなくても、？白式と特異ケースを含むデータ？を交渉材料に出来る。

一夏は、中々考えたものだと思ったが、それ以上に怒りが沸点を迎えそうだった。

「でも、一夏にもアルデイにもばれちゃったし・・・僕は本国に強制帰国させられて・・・

会社はどうなるのか分からないけど、僕にとってはどっちみち良い選択肢はなさそうだね」

一夏はもう我慢が出来なかった。

親なら、何をしてもいいのか？

むしろ親と呼べるのかそんなものが！？

「お前は良いのかよ!？」

気が付けば、シャルルの両肩をつかんでいた。

一瞬の事で驚いたシャルルはグツと身体をこわばらせる。

「い、一夏?」

「確かに親がいなきゃ、子はできないし生まれないさ!だからっていつて、そんな事が許されるのかよ?親なら、何をしてもい言っ

道理は通らねえよ！」

なりふり構わず、叫ぶ一夏をシャルルがとりあえずなだめようと、肩をつかむ手に自分の手を重ねる。

それにハツとした一夏は、肩を離すと息を整える。

「・・・大丈夫・・・何か変だよ」

「・・・いや、その・・・俺と千冬姉は両親に捨てられて・・・それでお前の親があまりに身勝手に・・・なんか重なってさ」

シャルルも一夏に両親が居ないと言う事は知っていた様で、顔を伏せると小声でごめんと謝った。

「なんで、謝るんだよ・・・今更会いたいなんて思わないし・・・良いんだよ。それより今はお前の事だ」

そうだ、そんな事はどうでもいい。

自分が勝手に重ねて変に熱くなっちゃっただけなのだから。

「僕の事？」

「ああ、お前はそれでいいのかよ」

「良いも悪いもないよ・・・僕には選択肢が無いんだから」
再び顔を下に向けてしまうシャルル。

それを見た一夏は生徒手帳をめくりながら、ある記載を探す。
今のこの状況を、打開できうる策がそこにあるのだから。

・・・さてねえ。

僕はここまで聞いてなんだけど、気持ちは軽く沈んでいた。
シャルルもだけど一夏もなのか・・・。

全く、重たい過去だねえ。ほんと。

ふと自分の両親が頭の中によみがえる。

・・・父さんと母さんか。

・・・ま、ころ合いもいい頃だしそろそろ良いかな。
一発は覚悟しよう。

僕はイヤホンを耳から外すと、一夏の部屋の扉を勢いよく開けた。
「シャルル、アメリカは自由の国だ」

そして僕は、いきなりそんな事を高らかにのたまった。
当然一夏は、僕の登場を歓迎してなどいない。

「お前、何しに来たんだよ、出てけっつっつたろう!!」
そりゃそうなるよね。

僕は半ばあきらめながら、一夏に胸倉をつかまれる。

そして、それでもニヤつく僕を問答無用で、殴り飛ばした。

「いつつう・・・一夏ねえ、僕はこれでもけが人だよ？」

「知るか！俺はお前が許せねえだけだ、人の悩みを真剣に聞こうと
もせず鼻で笑ったお前が！」

おやおや・・・。

一夏君は大事な事を忘れてる。

僕は、殴られて切れたのであるう口から流れ出た血を、右手でぬぐ
うと座りこんだ体勢のままいつもの調子で言った。

「一夏・・・僕は嘘つきだよ？」

「それがどうしたっていうんだ？大体嘘吐きなんて最低以外の何物
でもないじゃないか」

「それは、昔から延々と言われ続けていることだからねもう慣れたよ」
僕は、怒る一夏を尻目にシャルルに近づぐ。

「さて・・・ちよつと失礼」

僕はテーブル下をまさぐる。そしてそこから出てきたものは・・・

「あ、ICレコーダー!？」

シャルルが素っ頓狂な声を上げ、一夏が更に睨む。

「コレ、録音した音声を電波で飛ばせるんだ、これ受信機ね」

「お前、ほんといい加減にしるよ、どこまで人を馬鹿にしたら気が
済むんだ!？」

声を荒げる一夏を、僕は睨む。

「だったら、僕がいてシャルルは正直に全部話したかな？」

「・・・何だと？」

「あの時、シャルルは明らかに僕を警戒してたんだ。チラチラこっちを見てたしね。」

「あいにく信用されなさには自信があってね、おんなじような目で見
る人間はごまんといた」

それは本当だ。

この性格。

確かに嘘の強みはあるが、逆にそのことがあらかじめ情報として知
れ渡っていたりすると、

総じて僕や姉さんを避けたり、警戒したりする。

「だけど、流石に露骨に話しづらそうだからって出ていくと、余計
に気を使わせちゃうと思ってるね」

「そのための演技だったの？」

「君ほど上手くは無かったけどね、ま一発は覚悟の上でだから。あ、
それと僕のは演技じゃなくて嘘ね

そこ重要だから」

「な、何だよ！お前そんなの・・・もつと早く言えって、殴っちま
ったじゃないか！」

僕の考えを聞いて、急にあわてる一夏。

「いやあ、こういう姿を見られるから、嘘をつくのって癖になるんだ。
」だから、一発は覚悟の上だって言ったでしょ。それより今はほら

シャルルの事だよ」

僕は、混乱する一夏に道を示してやる。

「ああそうかと、我に返ると一夏は生徒手帳をめくっていく。
そして一夏は目当てのページを見つけたようだ。」

「これだ」

そのページを開いて、こちらに見せてくる一夏。

「ふむ・・・なになに特記事項第二一。確かこれは学園の生徒に関する
記載事項だ。」

ええと・・・在学中の生徒はありとあらゆる国家・組織に帰属せず・・・なんだっけ・・・
・・・ああそうだそうだ。

本人の同意が無ければ、それらの外的介入を一切認めないってやつだ。

全く・・・なんでこんなに条例文と違ってやつは難しい日本語を使うんだ。

もう簡単に、生徒はどの組織にも属しませんでいいじゃないか。

「・・・よくそんなの見つけたね」

「ふん、俺は勤勉なんだよ」

「織斑先生に頭叩かれる回数一番多いのに？」

「う、うるさいアルデイは黙ってる、お前だつて同じぐらいだろ！それに何より今、俺格好良くまとまったじゃないか！」

「一夏も嘘が旨くなつたね」

自分でまとまったとか言うのって、大抵外れだよな。

その様子を見て、フツツと笑つとシャルル。

「・・・その条項が当てはまったとして、僕に選べるのかな」

「シャルル、そう言えばさっきの話だけど。アメリカは自由の国なんだ。そこでは誰もが自由。

まあ法の名のもとにだけどね」

「自由・・・」

「そう、自由。そこでは誰もがみな平等にチャンスを与えられている。それに気が付けないだけで」

そう、シャルルも気が付いていなかったただけだ。

これまでもそのチャンスは絶対にあつたはずだ。

「そのチャンスに気が付けた者だけが、そこでようやく選択肢を与えられる。そして気が付くんだ。

選ぶのは他でもない自分だつて言う事に」

「僕が・・・」

「そう、そして君はたった今チャンスに気が付いたじゃないか。そ

して一夏が選択肢を与えてくれた」

何が言いたいのか、シャルルにはもう分かっているはずだろうね。彼女頭良いし。

「そう、だね・・・これまで僕はそのチャンスをただ無理だって自分から放棄してたのかも・・・僕考えてみるよ、これからの事・・・今度は誰でもない自分で、しつかりと」

その声にはさつき、の様な不安や苦しさは消えていた。もう、大丈夫だね。

そう思うと、ホツとしたのか急に力が抜けて僕と一夏は椅子にドサツと腰を落とした。

「あゝそれにしても・・・覚悟したとはいえ痛い・・・全身も悲鳴あげてるし」

「そんな事言ったってお前仕方ないだろ。あの状況でそんな事どうやって分かって言うんだよ」

そりゃそうだけど、やっぱり織斑先生の弟の事だけはある。いや本当に痛い。

弟でこれだから、織斑先生の鉄拳制裁はくらっちゃだめだ。

多分、一撃で即死の可能性がある。

「アハハ、でも僕もびっくりしたよ。確かに警戒はしてたけどあんな事言いだすなんて思わなくて」

「ったく、お前の嘘は姉さん譲りだっけ？はあ・・・お前の両親も見てみたいよ」

ボソツと言った何気ない一言。

両親。

両親か・・・。

「そうだね、会いたいね・・・僕も」

言い方が意味深だっただけに、一夏とシャルルは頭に疑問符を浮かべ首をかしげた。

「僕も？」

「どう言う事？」

僕は、少ししまったと思う。

余計な僕もなんて言葉、言わなきゃよかった。
だが聞かれてしまったものは仕方がない。
僕は諦めたように笑うと、こう続けた。

「……死んだんだ、海難事故だね」

第10話　僕が嘘をつく理由、彼が彼女である理由（後書き）

最近この小説を書いているせいか一夏に嫉妬します。
どうもしるくです。

今日バイト先のセールだったんですが、チラシが
玉ねぎの所に馬鈴薯、馬鈴薯の所に玉ねぎと記載されていました。
まさかのミス。
値段はあってたんでよかったですけどね。

まだ品名？店長？はありませんでした。

それではまた11話でお会いしましょう！
さよならっ！

第11話 水と油

もう何年前になるのか。

僕は、父さんと母さん、そしてようやく休みの取れた姉さんの四人で旅行に出掛けたんだ。

それは船旅だった。

初めて乗る大きな船に、そして海に、僕の心は躍っていた。

はしゃぐ僕を父さんも母さんもそして、姉さんも笑顔で見守ってくれた。

青空のもと海風気持ちの良い中、客船は出港。

だがそれから数日後、いきなり大しけに見舞われてしまう。

船は揺れ、立っているのも無理なぐらいだった。

しばらくはなんとか、船首を波に垂直に向け乗りきっていた船だったが、ついに最悪の事態が訪れる。

突如、真横から予想だにしない大波にのまれたのだ。

船の窓ガラスは水圧で吹き飛び、一瞬にしてすべての電気が消える。

そして、それからは覚えてない。

気が付いたら僕は病院のベッドの上で、泣きながら姉さんが僕を見つめているだけだったから。

「そうだったんだ」

「・・・ああ、別にこんな空気にするつもりは無かったんだけど」シャルルと一夏そして僕の間流れる、重たい空気。

さっきまでも相当重たい空気だったのに、それにまた僕の話が上乘せしてしまったようだ。

確かに、両親が居ないっていうさみしさが無いと言えば嘘になる。

でもだからといって、同情してほしいとかかわいそうだとか、そう思っただけじゃない。

こちらからすれば、そうなんだで終わるような話だと思ってたのに・・・。

「……なあ、アルデイ。お前は両親の事好きだったのか？」

「当然だね、僕は一夏やシャルルみたいに重い過去なんて無いし・
・ああ、別に悪く言ってるわけじゃないよ」

「そうか」

一夏は親に捨てられ、シャルルは少し複雑で……。
でも、それでも生きてる。

一夏の親は分からないけど、シャルルの両親は生きてるし。

「一夏、シャルル。僕がこんなこと言うのおかしいけど……ど
んなに嫌でも、きらいでも……
生きてるなら、両親を恨んじゃ駄目だと思う」

「別に俺は、もう何とも思っちゃないけど……」
だがそう言う一夏の顔にも少し動揺が見える。

どんなことをしたって、親なのだ。

完全に振りきれないわけがない。

いや、それを振りきっちゃいけないんだ。

血のつながりは、どこまで行っても途切れる事は無いのだから。
僕はパンパンツと織斑先生のように手を叩くと話を切り上げた。

このままもつと空気が重くなっても困る。

いつも言ってるけど、人生は楽しくなくちゃ。

「あ、そういえばさっきの話なんだけど。対象がなんで俺だけだっ
たんだ、アルデイも男だろ？」

一夏がそれを悟ったのか、話題を少し方向転換させる。

こういう気づかいはできるのに、どうして鈍感なんだろう……。

「ああ、それは優先順位の問題だよ」

「優先順位って言う……ああ、僕と一夏ならだれでも一夏を
選ぶね、正直だし優しいし」

そう言うとシャルルが少し頬を赤らめて、わざとらしく声を張り上
げた。

「そ、そう言うことじゃないよ！た、確かに一夏は優しいし正直だ
けど……ってそうじゃなくて……」

ひよつとして、この子自爆大好き？

頭がいいのと、性格が抜ける抜けていないっていうのとはどうやらイコールではないらしい。

「もう、アルデイ冗談が過ぎるよ・・・で、優先順位って言うのはそのままの意味だよ。？白式？の性能や、一夏のバツクグラウンド、そして？ブリュンヒルデ？織斑 千冬・・・これらに勝るものが一つもアルデイには無いんだ」

少し傷つく言い方だけど、しょうがない本当の事だ。

？白式？に対して僕の？ストライク・バーデイ？は姉さんのお下がりの改良品だし、僕のバツクグラウンド？・・・嘘つきになったそれだけ。そして姉さんは織斑先生ほど影響力も無ければ有名でもない。

おまけに、性格でも負け負け。

・・・最後のはいらなかつたかな・・・自虐で傷つくのなんて久しぶりだ。

「それらの事を統合的に考えた結果、一夏だけが対象になったんだ。下手に対象を増やすより確実だと思って・・・でも見つかったやつたけど」

そこで一夏はようやくしまつたつて顔をした。

そう、話題を変えたつもりだったんだろけど、これ戻っただけだよね。

またズーンと暗くなるシャルル。

「この馬鹿、なに話しぶり返してるのさ・・・」

「す、すまん・・・いま俺は自分のリカバリー能力の無さを嘆いている所だ」

声をひそめて一夏の脇をコック。

あの時ほんの少しでも感心した僕の心を返してもらいたいね。

「・・・やっぱり、僕」

だが、次の行動を見て僕はやっぱり一夏は凄いと思った。

僕はあそこまではつきりと、面と向かって言う自信は無いよ流石に・

・・嘘でもない限りね。

「さつき、選ぶって言っただろ、もう覆しちまうのかよ？」

それでも、それでも・・・選べないっていつのんら俺が言ってる
！」

一夏は立ち上がると叫んだ。さつきまでの静かな雰囲気の中からいきなり大声を出すから、

僕は少し驚いてしまう。それはシャルルも同様だったようで、びっくりした顔で一夏の顔を、見上げるシャルル。

「いち・・か？」

不安がまたシャルルを包み込んでいく。

声は先ほどまでとは違い、僕がイヤホンで耳にしていた不安一色のか細いものだった。

だが一夏はその暗雲を一言で、吹き飛ばして見せた。

「ここにいろよ！それで解決だろ！？」

「え・・・」

呆けた顔だったが、僕にはそれがどこか、嬉しそうにも見えた。

恐らくそんな事、初めて言われたんだろうね・・・。

僕は、興奮気味にまだ何か言葉を探す一夏を諭した。

「一夏、それ以上先はさつきも言ったでしょ、彼女が考えることだよ・・・ね」

僕はシャルルに笑いかける。

シャルルはまだどこか、不安そうな顔はしていたがうつむいてはいない。

「・・・ほんと僕って駄目だなあ、二回目だね言われるの」

「僕は三回四回言われても、覚えられないけどね」

「自慢じゃねえだろ・・・」

「自慢とは言ってないけど」

ハハハッと笑いあう。

そうさ、こうじゃなきゃ人生は。

僕は、その後の事を一夏に任せて部屋を後にする。

部屋のドアを閉めると、ふと懐かしい話をしちやっとなと思う。

これまでもまあ数えるぐらいは、した気がするけど最近はずっと自分の事なんて話したこと無かった。

それに聞かれなかったしね……。

僕は、足を自分の部屋に向ける。

そこで、腹の虫が鳴いていることに気が付いた。

……あ、ご飯まだだったな。

急遽方向転換。

今日はこういう突発的な行き先変更が多いね。

僕は、その足を部屋から食堂へと向き直した。

階段を下りていた時、声をかけられる。

ん？んん？

声はすれど姿は……

「ここですわよ！」

声のした方向を見やると、ようやく見えた。

階段の手すりの所為で僕側からはその姿が見えていなかったようだ。

「セシリー？」

「セシリー？じゃありませんわ全く……それでその、大丈夫で

すの……？」

「ああ、うん。まだ完璧に整理が付いたわけじゃないけどね」

ああ言ったものの不思議なもので、さつきシャルルたちと話しただけで僕の心は

驚くほど整理が付いていた。

姉さんや両親の事を、順序立てて色々話したからかもしれない。

「そうですね……あ、ところでこれから一緒に夕食でもいかがかしら？」

おお、丁度いい。

……向こうにとつても丁度いい。

「……はあ、アル。私そんなにあなたに奢らせてばかりだったでしょうか」

頭を押さえながら、ため息をつくセシリィ。

・・・僕も、読まれやすくなったものだ。

「アル、あなた初めて会ったときから、意外と考えダダ漏れですわよ」

「嘘!？」

それは心外だ・・・。

僕はさらりと嘘を言っただけのクールな嘘つきを目指しているのに。「はあ、もういいですわ、どうですの?ま、無理と言っても無理やり連れて行きますけど」

そう言っただけで腕を僕の腕にまわしてくるセシリィ。

・・・やれやれ、こうなつては断れない。

まあ断る気なんてハナから無かつただけ。

「それじゃあ、行きましようかお嬢様?」

「フフフ、苦しゅうない」

僕は、?お嬢様?を食堂という名の、パーティ会場へエスコートした。

・・・流石に言い過ぎかな?

・・・なんですのこれ。

アルが出られなくなったことが分かった日から一週間半が経った。

今セシリィの目の前には申込書が一枚。

その申込書には、『今月開催の学年別トーナメントは二人一組での参加を必須とする』という旨の緊急告知文が書き込まれていた。

な、なんてタイミングの悪い・・・。

二人一組ということは当然ペアを探さなければならぬ。

セシリィは、ペアを組むならアル以外考えられなかった。

だがアルはご承知のとおりである。

・・・不味いことになりましたわ。

相手が、専用機持ちでなければ正直いって、セシリアは単機でもどうにか相手に出来る算段はあったのだが、この告知文にあるとおりペアは必須だし、何より勝ち進んでいけば必ずどこかで専用気持ちに当たる。

そうなると、いくらまだ実力が伯仲している一年生といえども、打鉄？や？ラファール・リヴァイヴ？で専用機を相手にするのはあまりにも酷だ。

・・・勝てるペアがいますわね。

一夏さんは・・・デュノアさんとでしたわね。

篤さんは剣の腕は立ちますが、専用機を持っていない。

ラウラ・ボーデヴィツヒは論外・・・

消去法で消していくと・・・。

一人しか残らなかった。

「・・・なんであたしなのよ」

セシリアは、残った一人に会うべく二組を訪れていた。

鈴は腕を組んで、渋い顔をしている。

「仕方が無いでしょう、勝てるペアが必要なのです」

「勝てるペアをアテにして来たのは良いけど、仕方がないっていうのやめなさいよ」

仕方が無いものは仕方が無いのだ。

実際鈴とは、初対面での？知らない発言？から犬猿の仲であり好きな男子が違うから、

その事でもめごとは起きないが、それでもその他の些細な事で意地を張り合ったする仲だ。

その鈴が、自分の申し出を素直に受け入れるとは考えにくいし、そんな事思ってもいない。

だから、少し交渉を試してみようとセシリアは初めから色々考えてこ

の場に足を運んでいる。

「鈴さんは、もう誰かと？」

「いや、ただただどさぁ……」

鈴は口をとがらせる。

恐らく一夏とペアになれなかったことが、相当尾を引いているようだ。

セシリアはそのことを察すると、不敵な笑みを浮かべる。

「そんなに一夏さんと一緒によろしかったのでしょうか？」

「だ、誰が！？そんな事一言も言っていないじゃないのよ」

誰に目から見ても明らかに動揺する鈴。

これはもう少しですわね。

「そうですね、いつもアピールしているのに一向に振り向いてくれない一夏さん。そのお気持ち分かりますわ、本当に悔しいですわね」

「う、うう」

図星をバンバン言い当てられて、気まずそうに小さくなる鈴。

「ですが……あのデュノアさんがいなければ、一夏さんは鈴さんに振りむいてくれたかもしれない」

流星に苦しかったかと肩目を開いて、鈴の様子を伺うがどうやら、気まずさとモチベーションの低下から、先ほどの言葉の不自然さには気が付いていないようだった。

ふう、危ない……。

デュノアさんは男の子でしたわね。

下手言つて、ここであればたら鈴とペアが組めなくなって不利になつてしまう。

それだけは避けなければ。

「トーナメントで優秀な成績を残せば、一夏さんはきっと鈴さんに振り向いてくれますわよ！」

「……一夏が振り向いてくれる……振り向いてくれる……デュノア邪魔……デュノア邪魔……」

しばらくして、うつろな目でそのフレーズだけを繰り返し始める鈴。流石に吹っ掛けたセシリアも引くぐらいのシユールさだったが、セシリアはその鈴にとりあえずペンを持たせ、申込書にサインさせると足早に二組を後にした。

何にせよこれで、セシリアと鈴というある意味、最強のそれでいて、磁石の同じ極同士のデコボココンビが誕生した。

ふう、ISを持っていなくても、意外と日って言うのは早く過ぎるものなんだなあ。

僕はアリーナの更衣室からピットへと続く通路のモニターに映し出される観客席の様子を見ていた。

各国の要人やIS関係者、あ、アメリカの技術者までいるね。

僕は出場できないけど、こんな人たちの目の前で戦うのかあ。

・・・いいなあ、目立てるし。

身体の痛みは消えていたが、まだ腕の刺し傷の包帯は取れていなかった。

でもまあ、セシリーに僕は任せただ。

今日はそれを信じて応援するしかない。

「お待たせいたしましたわ」

「・・・うん・・・なんであたしオーケーしたんだろ？」

後ろから、セシリーの自信たっぷりな声と鈴の納得出来ないような声の二つが通路に響いた。

既に二人とも、ISスーツに身を包んでいる。

「何をウダウダ言っていますの、鈴さん！ここまで来たら覚悟をお決めなさいな」

「ウダウダってねえ・・・良いように人を丸めこんどいてあんたが

それ言う?」

少なくとも鈴には、丸めこまれたっていう感覚はあるらしい。だったら素直に納得すればいいのに。

「それに、別に覚悟決めたとか決めてないとか言うつもりないし。始まったら代表候補生としてその実力を発揮するだけよ」

「その意気ですわ、鈴さん」

どうやらセシリーは、鈴になるだけ逆らわずに持ち上げて、丸め込まれたっていう事で生じるモチベーション低下を最小限に食い止めようとしているようだ。

「はあ、わざとらしいのよあんた!」

「せっかく、人が褒めているのですから、少しは素直に受け取ったらどうですか!?!」

「……どうやらそうでもないらしい。

鈴ははあっと、ため息をつくと僕に質問する。

「まあ良いわ、で、あたしらの対戦相手ってもう決まったの?」

「今、抽選会やってるんじゃないのかな、もうすぐ出ると……つてええ!?!」

タイミング良く表示される、トーナメント表。

それを見て僕だけじゃなく鈴やセシリーも同様に驚きの声を上げていた。

セシリーと鈴はAブロックに振り分けられている。

そしてその一組目がセシリーと鈴だったのだ。

だが驚くべきはそこじゃない。

「一夏さんと、デュノアさんのペアが……初戦ですね」

「順当にいけばラウラと二回戦で当たる……」

ラウラと……第がペアになったのか。

あの二人、絶対に気なんて会わうわけ無いよなあ。

……でも。

ラウラ・ボーデヴィツヒは、平気で生身の人間に向かって攻撃ができるほどの冷徹さを持つ人物だ。

そして、彼女はドイツの軍人。

並の操縦者など一蹴してしまうだろう。

そう考えると、セシリー達は一回戦を落としてしまうと、仮に三位決定戦に回れてもラウラと戦えないことになる。

答えは簡単だ。

単純にラウラが強いからである。

「セシリー……」

「大丈夫ですわ、アル……ほら」

「あんたそれ首にぶら下げて戦うつもり？」

セシリーは首にぶら下げていた？ストライク・バーディ？を掲げて見せる。

そしてそれをギュツと握った。

「アルと、お姉さんの思いは私が必ず証明してみせます」

「……ま、良いわ。あたしも友達やられて黙ってられるほど人間出来ちゃないし、あの女の顔面に一発入れてやるためにも、一夏達なんて瞬殺よ！」

セシリーに引っ張られる形で、鈴もどうやらモチベーションが復活してきたようだ。

二人とも、自信に満ち溢れた良い表情をしている。

？これよりAブロック第一回戦を開始します。参加ペアはピットにて準備を行ってください。繰り返します……？

場内アナウンスが聞こえ、セシリーと鈴の顔に緊張が走る。

出場しない僕でさえ、ピリピリした雰囲気当てられて少し身体がこわばってしまうぐらいなのだ。

当の本人たちのそれは、ちょっと僕じゃ計り知れないだろう。

でも、だからこそ。こういう時だからこそ、楽観的に事を構えるのも必要なのだ。

「セシリー、鈴。スマイルスマイル。肩の力入りっぱなしじゃない戦いは出来ないよ」

僕は言いながら、両者の肩を軽く揉む。

初めはやはり、身体が緊張していたが揉んであげるとすぐにほぐれてきた。

「あ、アル・・・私はその・・・大丈夫ですわ！」

「あんたねえ、あたしを誰だと思ってるのよ！」

頬を赤く染めるセシリーと、その手を振りほどこうとする鈴。

そうそう、そうやっていつも通りにね。

僕は肩から手を離すと、笑顔で彼女たちを見送った。

「一組目から強敵だね」

「まさか、つぶし合いになるとはなあ」

一夏は頭をポリポリ書きながら、トーナメント表を見つめていた。確かに、こうなることの可能性は一夏も考えてはいたが、まさか本当になってしまうとは。

ベストだったのは、ストレートにラウラと戦う事だったのだが仕方がない。

「・・・シャルル、勝とうぜ」

「そうだね、あの二人には悪いけど本気で行こう」

一夏は真剣勝負で手を抜いたり手を抜かれたりすることを極端に嫌う。

だからこそ、こうなってしまうても一夏は手を抜こうとは思わなかった。

正々堂々・・・真正面からぶつかってやる。

一夏とシャルルは強い決意と共に、ピットへ向かい歩き出した。

ふん・・・初戦に雑魚とのつまらん戦闘が入ってしまったが、まあ良い。

私のすべきことに、変わりはない。

織斑一夏を完膚なきまでに倒すところこそが、私のすべきことだ。

他ににも必要無い。

それだけを完遂すればいい。

教官に汚点を残したあの男さえ排除すればな。

ラウラは腕を組みながらチラツとペアになった箒を一瞥する。

「貴様、何やら張り切っているようだが、邪魔だけはするなよ」

「ふん、それはこちらのセリフだ。お前こそ油断して足元をすくわれないように注意しろ」

箒は、いつもの調子でだが少し威圧的にラウラに言い返す。

だがラウラはそれを鼻で笑う。

「はッ、笑わせてくれる。雑魚は雑魚らしくピットでボサッとして居ればいい。私がすべてやる」

「なんだと!!」

ラウラに詰め寄った箒だったが、逆にラウラによって足を払われると無駄のない動きで箒の胸倉をつかんだ。

「・・・調子にのるなよ？邪魔をするなと言ったらするな。それが出来ないのなら撃つだけだ。貴様ごとな」

ラウラは箒をまるでごみを放るかのように払い捨てると、一人ピットの扉へ消えた。

「・・・私は・・・あんな暴力の塊のようなヤツと、本当に失敗を犯さず。もう間違えずに力を振るえるのだろうか。」

箒は以前束の開発したISの所為で、家族と別々にされ執拗な監視と事情聴取。

かろうじて続けていた剣道も、本来心身を究め力の本質を見誤らぬ事が剣の道であったにもかかわらずそれを、ただの憂さ晴らしの道

具として考えてしまった時期があった。

今回のトーナメントでは、その間違いを犯さないように自分で自分をしっかりとコントロールするつもりだったが。

だがペアがアレである。

筈はラウラを見た時、昔の自分とどこか重なる所を感じていた。

・・・駄目だ駄目だ！考えるな。大丈夫・・・大丈夫だ。

筈は自己暗示のように繰り返しながら立ち上がると、ゆっくりとピットへと足を進めた。

・・・そう、私は絶対に間違わない！

ワアアアアアアアツと歓声の響く中、両ピットからそれぞれのISが計四機飛び出してくる。

初戦から専用機持ち同士の対戦とあり、否が応でも注目が集まっていることは容易に想像ができた。

両者が互いに所定の位置へ、ISを移動させる。

対峙するは一夏・シャルルペアとセシリア・鈴ペアだ。

「よく、お前たちが組む気になったな。水と油みたいなのに」

「誰が水よ！！」

「鈴さん、私が油ですよ！？」

「アハハ、からかつちゃダメだよ一夏」

四人とも軽口を言いあう。

互いに緊張は程良くほぐれているみたいだった。

・・・絶対に、負けられませんわ。

この思いと共に・・・絶対。

セシリアは瞳を閉じて、またそのネックレスを強く握る。

すると一瞬、本当に一瞬だが何かそのネックレスが光った気がした。

(・・・なんですよ、今のは)

セシリアは先ほどの感覚を考えようとしたが、試合開始のブザーがそれを遮った。

？Aブロック第一回戦・・・始め!!!？

セシリアは頭を切り替え、飛ぶ。

？ブルー・ティーズ？は射撃特化の支援に適した長距離戦ISだ。セシリアは、鈴が孤立しないように距離を取りながらもビットを巧みに使いながら

一夏達を牽制する。

「僕も忘れてもらっちゃ、困るな」

そこへ、早々に鈴を一夏に任せたシャルルが両手にアサルトライフルを展開してセシリアへ迫る。

「忘れてなどおりませんわ、むしろ一夏さんよりもあなたの方が厄介ですものね！」

セシリアは四機中二機を一夏側に振り分け、残りの二機と？スターライトMK??でシャルルを狙う。

ビットの弱点は、一夏に指摘された通り。

？このビットは毎回自分が指示をしないと動かず、更に一番感覚の遠いところを狙う？

これが相手に読まれた弱点だった。

だが・・・それなら。

仮に一度の事をいっぺんに考えることができるのならどうだろうか？

すべてのビットを、隙なく動かし尚且つ自分もしっかりと攻撃と機動、防御を行えたら？

・・・そして、今の自分にはそれができる。

今日の今日まで、じつくりと時間をかけて反復練習を重ねてきた。練習はうそをつかない。

それにこれぐらいできて当然だ。何せ自分はセシリア・オルコットなのだから。

「なッ！くッ!？動きが・・・一夏から聞いてたのと違う!？」

「私は代表候補生ですよ！立ち止まってなど居られませんの！」
ビットと？スターライトMK??の驟雨がシャルルを襲う。
だがシャルルは笑っていた。

「・・・なんてね、そのぐらいの事は予測済みだよ」
シャルルは的確な操縦でその攻撃をかわす。

先ほどまでの焦りも、当たりそうな感覚も無くなる。
つまりシャルルは？わざと？焦ったふりをしていたのだ。

という事は、シャルルの実力はセシリアが考えていた以上に高いと
言う事になる。

(・・・まいりましたわね)

セシリアに向かって今度は、シャルルがアサルトライフルを撃つ。

つく、私はこんなところで・・・負けられませんのに!!!

やがて、勢いを殺されたセシリアはシャルルに押され始める。

必死に回避と、隙あらば攻撃を繰り返すセシリアは、焦りながらも
程良く冷えた頭で

打開策を考えていた。

必ず勝たねばならない。

自分のためにも。

そして何よりアルのためにも！

セシリアは駆る。

降り注ぐ銃弾の先にある勝利を目指して。

気付けば鈴は、旨く一夏に分断されてしまった事に気が付く。
つく、このあたしが！

そしてそのことは、代表制ペアよりも相手のペアの方がコンビネー
ションに長けていると言う事でもある。

「鈴！いつかのリターンマッチになっちまったな！」

「ふん、一夏のくせに偉そうね！あの時見たいにイグニッションブーストで、奇襲するつもりなら無駄よ、二度も同じ手は食わないわ！！」

確かに鈴はあの時、一夏に完全に勝っていた。それは事実だ。

だが最後の最後、油断から招いた一瞬の隙を突かれ、乱入騒動が無ければ負けていたのも事実。

その苦い経験から、鈴は脅威である？イグニッション・ブースト？には細心の注意を払っていた。

流石の鈴のISでも、？イグニッション・ブースト？で迫られてはとっさに避けようがない。

だが、鈴はさらなる懸念事項に襲われた。

（一夏の飛び方が・・・デュノアね！）

そう、あの時とは明らかに飛び方が違う。

ベースは直線的なのだが、所々でスピードに強弱をつけたり高低差を利用したりと、変化が見られた。

恐らく、この日までにデュノアと特訓に励んだのだらうと思われる。でも・・・

「そのぐらいで勝てるなんて思わないことね！！」

鈴は？双天牙月？を振り上げ、突っ込んでくる一夏の？雪片？を正面から受け止める。

腕の振りに加えて、移動エネルギーも加わっていたのだが、それをもしっかりと受け止めきれだけのパワーが？甲龍？には備わっていない。

「くそッ！やつぱパワーじゃ勝てないか！？」

「しっかりとしなさいよ、男の子！」

鈴は、瞬間ほんの少し高度を上げ一夏を、？双天牙月？で下方へ払うと？龍砲？で

一気に地面にたたきつけようとする。

「食らいなさい、流石に避けられないでしょ！！」

しかし鈴の？龍砲？は不発に終わる。

いや、不発というよりは鈴は吹き飛ばされたのだ。

鈴が見やるとそこには、いつのまにかセシリアを振り切り、こちらへ銃を向けるデュノアの姿があった。

(なっ、セシリアは!?)

鈴は素早くハイパーセンサーでセシリアを探す。

まさか、あのセシリアをもう落としたというのか？

「鈴さん勝手に、殺さないでください！」

声のした方を見やると豆粒サイズのセシリアが。

「・・・あんだこの距離をどうやって飛んできたの？」

「どうって、？イグニッション・ブースト？だけど」

さらりと言つてのけるが、鈴やセシリアは事前に出場者の目ぼしいデータには目を通している。

だが、デュノアが？イグニッション・ブースト？を使用できるといふデータはどこにもなかった。

この状況で鈴はようやく理解した。

(この子、ヤバイ)

正直、一夏を先に自分が倒せると思っていた鈴は。考えを改める。

無理だ。

一人でこのコンビネーションを抜けるのは。

鈴は、周囲に構わず？龍砲？を振りまくとその隙を縫って、セシリアの元へ移動する。

「体勢を立て直した方がいいわね」

「・・・舐めておりましたわ。ですが・・・負けるわけにはまいりません」

一瞬の険しい顔の後、すぐに自信たっぷりな笑みをこちらへ返すセシリア。

だがそれは、鈴も同じだ。

こんなところで負けるわけにはいかない。

鈴はもう一度セシリアを見る。

「・・・セシリアあんだ、これ出来る？」

鈴は手早く、アイ・タッチでデータを？ブルー・ティアーズ？へ転送する。

「これは……」

「出来るの？」

セシリアは、一瞬目を見開いて少し考える。

「……」

「あのコンビネーション。あたしから見ても大したもんだわ。特にあのデュノアが厄介。」

一夏も、前に比べれば動きも良い。一人で個別撃破は難しいしリスクもデカイ。

でもこれなら二人が負うリスクは半々よ？」

「私、博打は好きではありませんが……良いですわ、やりましよう」

鈴はその返答を待っていたとばかりに、ニヤツと笑う。

「ハマるんじゃないわよ、これはスピードとタイミングが命なんだから！」

「誰に言っていますの、私は……セシリア・オルコットですよ！」

鈴とセシリアが一気に敵へ加速する。

その行動にシャルルと一夏が身構える。

その様子を確認した鈴とセシリアは、不敵に笑いそして同時に高らかに叫んだ。

「タクティクス？レイ！？」

第11話 水と油 (後書き)

日を増すことに復興しようとする東北地方と、日を増すことにはばさを増す原発……

どうもしるくです。

最近は若干暖かくなってきましたね。

僕は3月の頭ぐらいに、スタッドレスを外しましたが、夏タイヤがセミスリック状態というなんともまあ、dynamicな状況で、雨降ったら高速で車浮くんじゃねとか思ったり。

今では安いアジアンでもそこそこの、クオリティがあるので安心ですね。

それでは第12話でお会いしましょう。

さよならっ！

第12話 暖かい世界

モニターで戦闘の様子を見ていた、千冬と真耶は鈴とセシリアの動きが変わった事にすぐに気が付いた。

「何か、するつもりでしょうか・・・」

「この機動は・・・？レイ？だな」

つぶやいた言葉に真耶が首を傾げる。

「レイ？」

「中国語で雷という意味を持つ、マニユーバタクティクスの事だ」
機動戦術？雷？。

これは中国IS軍による機動戦術で、主に二機以上の僚機で行われる機動戦術だ。

高い機動技術と、射撃そして格闘戦闘が求められる高度な戦術だ。

「この戦術には、近接戦闘の技術も必要なんだがな」

「オルコットさんは、苦手としてますね・・・」

「・・・何か考えがあるのか・・・まあ見せてもらおうじゃないか」

千冬はそう言うと、台の上にあったインスタントコーヒーを取り出しコーヒーを淹れ始める。

粉を入れ、ポットからお湯をカップへそそぐ。

「でも、織斑君たちのコンビネーションも結構な完成度ですよね。」

鳳さん達の作戦がうまくいっても落としかれるんでしょうか？

千冬はコーヒーを淹れる作業を中断してモニターを見やった後、麻耶に向き直る。

「山田君、確かにデュノアと織斑は動きは良いが、これがそのまま実戦で使えるかと言えばノーだ。」

あくまでこれは、トーナメント用に作った付け焼刃みたいなものだろう。

だが？レイ？は違う。元々実戦の中で考え出された、戦術なのだよ。だからこの一戦・・・？レイ？を完璧にあの二人がこなせば、織

斑たちは負ける」

そこまで言い切ると千冬は、コーヒーを作る作業へ戻る。
ええと・・・そうだ砂糖を・・・。

「・・・でもそこまで言っても、やっぱり織斑君の事心配してるんですよね！やっぱりお姉さんだなあ」

そうだ、塩を入れよう。

千冬は塩を？適量？コーヒーの中へ落とす。

そしていつも以上に笑顔で麻耶に近づいていった。

そこでようやく麻耶は自分の、失言に気が付いた。

千冬が身内の事で弄られる事を嫌っていたのをすっかり忘れていたのだ。

青ざめる麻耶だが、もう遅い。

「山田君、君の好きな塩入りコーヒーだ。ちゃんと適量測って淹れたぞ？」

「い、いや・・・その塩適量って言うのは・・・それに私そんな好物」
「飲みたまえ」

「あ、いや、でもあの織斑先生がお飲みになられたら・・・わざわざ手を煩わせるのも・・・ッ」

「・・・飲め」

「はい」

麻耶は苦みと辛みが混在する、おおよそコーヒーとは呼べない代物を涙目ですすった。

「鈴、突っ込んでくるなんてヤケにでもなったのか！」

「一夏、あんた油断しているとマジで怪我するよ？」

さっきまでと明らかに、雰囲気の違い鈴の声を聞き一夏は、身体に

緊張が走る。

鈴はそのままこちらへ突っ込んできていた。

一夏はそれを受け止めるために、？雪片？を構え、シャルルはそれを迎撃すべくコンビネーション機動を開始する。

「鳳さん、何をするつもりかは知らないけどやらせない！」

シャルルは瞬時に武装をリアルタイムで変更する。

その速さから鈴にはすぐにあれがシャルルの？ラピッドスイッチ？という特技である事に気が付く。

(・・・なるほどね、ほんと器用だわ・・・でも)

鈴はそのまま？双天牙月？を一本に連結させ一夏に突っ込む。

一夏はそれをなんとか受け止めると、やすやすと後ろを取ったシャルルがそれを狙う。

だがそこへセシリアのビットの一斉射撃が降り注いだ。

「おっと」

シャルルはそれをヒョイツとかわすが次にシャルルが見たものは、一夏を？龍砲？で吹き飛ばした鈴が自分の真正面にいる光景だった。

鈴は再び？双天牙月？を使いシャルルに切りかかる。

「うつつくっ！」

シャルルは手に持っていたライフルでなんとか受け止めたが、いかんせんパワーが違う。

鈴はさつきと同じ要領で？龍砲？を発射しシャルルを吹き飛ばすと、また今度は一夏の方へとその衝撃をも加速に使って一気に肉薄。追うシャルルをセシリアのビットが襲う。

マニユーバタクティクス？レイ？は、このように、同じ動作同じ攻撃を寸分たがわぬタイミングで行う機動戦略である。

？敵陣を光のごとく駆け抜ける姿、まさに雷のごとく？という事から？レイ？と名付けられた本戦術は、本来なら、一撃離脱のできるISの方がより効果的である。

だがこの場合、セシリアはのISは機動力は一般的だし近接武器をほとんど持つておらず、また苦手としているし、鈴のISもそこま

で高いとは言えない。

だから動き回る約を買って出た鈴はそれを？龍砲？の発射衝撃を反動にして、言ってみれば疑似的なブーストで補っているのだった。そして援護側にまわったセシリアは、寸分たがわず性格無比な射撃で動きを制限し、こちらもちちらで疑似的な一対一の構図を作り上げていく。

セシリアは縦横無尽に動き回る鈴を見て、改めて感嘆の声を漏らす。
「鈴さん……中々やるではありませんか。代表候補生はやはり伊達ではありませんのね」

鈴の動きは非常に速くしかも、正確に相手を旨く払える位置に？双天牙月？を撃ちこんでいる。

これにはシャルルも、手をこまねいて見ているしかなく、かといって攻撃の隙があっても動き回る鈴を旨くとらえきれず、セシリアはセシリアで必ず相手の上、出来るだけ太陽を背負いながら射撃を行ってくる。

いくらハイパーセンサーがあるとはいえ、逆光で正確に射撃を当てるだけの技術はまだ流石のシャルルに備わっていなかった。

「このままじゃ！」

「ああ、やべえ！！！」

始めて二人の口から、焦りの言葉を聞いたセシリアと鈴はたたみかける。

「鈴さん！」

「あなた、あわせなさいよ！！！」

鈴は再び一夏へとその進路を取る。

だが今回はセシリアの援護が無い。

そこへなぜ援護が無いのか、疑問に思いながらも、シャルルが割って入った。

「やらせない！」

それを見て口元を緩めた鈴。

鈴は一気に高度を上げる。そして背後から現れたのは？ブルー・テ
イアーズ？の一極集中射撃だった。

そう、鈴はギリギリまでセシリアの放った射撃を隠していたのだ。

「しまった!？」

避けるすべなく、その攻撃に直撃するシャルル。

そしてシャルルに一瞬気を取られた一夏に？双天牙月？と？龍砲？
そしてビットの一斉射撃が襲う。

反応して防御でもされれば火力不足だっただろうが、ろくに反応も
出来ず一斉掃射を浴びた後、トドメの一撃が鈴によって再度振り下
るされた。

「ぐあああつ!！」

激しく地面にたたきつけられる？白式？と三枚のマルチ・スラスト
Iを欠きマルチウエポソラックは、誘爆を起こしたのか吹き飛んで
いる??ラファール・リヴァイヴ・カスタム?を尻目に、

悠々とアリーナへと降り立つ二人に、勝利を告げるアナウンスが流
れた。

?試合終了! Aブロック第一回戦勝者セシリア・オルコット、凰鈴
音ペア!!!?

鈴はセシリアの方を向くと、右手を挙げる。

始めはきよとんとしていたセシリアだったが、すぐにその意味を理
解したのか同じように手を挙げた。

「ま、中々だったじゃない」

「そちらこそ、まずまずですわね

軽口を言っ互いにニツと笑う。

そして・・・ガシャアッ!

人間で言う所のパアソツという、IS同士の無機質な、だがどこか
心地のいいハイタツ音のアリーナにひと際大きく響いた。

まさに、水と油の融合ってところかな。

僕は通路のリアルタイムモニターで、観戦してそんな感想を持った。程なくして、ピットからセシリーと鈴が帰ってくる。

「お疲れ様」

僕は勝つておいたスポーツドリンクを二人に手渡す。

「アル、助かりますわ」

「ん、サンキュ」

二人は、ゴクゴクツとスポーツドリンクを口にすする。

そしてセシリーは上品に、口を飲み物から離し口周りに付いた水分をタオルで拭き取る。

一方の鈴は、飲むとくあくやくやっぱ、動いた後はスポーツドリンクよねえ〜！と言いなながら、こぼれるのも気にせず、勢いよく口から離した。

飲み物一つ飲む動作でもこれほど違う二人が、さっきまで寸分たがわないコンビネーションで

相手を圧倒したのだから、面白い。

「あ、そういえばあいつ・・・ラウラはどうなったの？」

鈴の質問のセシリーも頷きながら、こちらに無言で質問を投げかけてくる。

気になるよね、やっぱり。

「まさか、負けたとかはありませんわよね」

「そうだね、終わったよ。さっきスタッフの人・・・まあ教員なんだけど、その人に聞いた」

「で、どうなったのよ!？」

じれったいなあと言わんばかりに鈴が、こちらに詰め寄ってくる。それをセシリーが、鈴の首根っこを引っ張って、無理やり引き離れた。

「近いですわよ!!!」

「うっさいなあ、気になるでしょうが。それにあたしはね、あんたみたいに邪な考え持ってないの」

「よ、よよ、よこしまですって!?!」

やっぱりこの二人は水と油だ。

仲良く笑いあえる日は来るのだろうかと心配してしまいが、いくらなんでもここで騒ぐのはまずい。

「まあまあ、二人とも。ここで騒ぐのは、ね。結果は言うからさ」
鈴はボソツと早く言いなさいよと言い、セシリーとの言い争いを切り上げる。

セシリーは、その後も少しジト目で鈴を見ていたが鼻を鳴らして、そっぽを向く。

・・・大丈夫かなあ。

また色々考えてしまう僕に鈴がまた迫る。

「だから早く言えっての!?!」

「分かった分かったよ! ラウラの試合は箒の出番なく終了。相手の二人は保健室送りだつてさ」

僕は聞いた事を一言一句間違えずに伝える。

そして、結果を聞き鈴とセシリーは首をかしげた。

「あの箒って子が手を出さなかったの?・・・あんな性格の強い子が?」

「確かに妙ですわね・・・。箒さんは言われても脅されても絶対それに従うような性格ではありませんし・・・」

「ああ、違う違うそうじゃなくて、箒は試合開始早々、ラウラに敵ごと吹っ飛ばされたんだよそれで壁に打ちつけられて、駆動部を破損した?打鉄?を交換しに行ってる間に終わってたらしいんだ」

「・・・何よそれ」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・何と言う事を」

二人とも絶句するしかなかった。
だがそれが真実なのだ。

これで二人にも、ラウラの冷徹で非常識だつてことは理解してもらえたと思う。

「で、落ち込んでる所悪いけど、策はあるのかい?正攻法で行って

勝てる相手じゃ・・・」

言いかけた僕を、鈴が遮った。

「ふふんツ、あんたねあたしたちをなんだと思ってるの?」

「私たちも、代表候補生。彼女に劣っているとは思っておりませんわ」

「でも・・・」

「あーもう、あんたは黙って勝つこと祈ってなさい!」

鈴は、大声で早口にまくしたてると、更衣室へと消える。

それを見送り、僕はトーナメント表に目を落とす。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

・・・相手を保健室送りに。

一瞬だがセシリーと鈴が、そうなる映像が頭をよぎりそれをかぶりを振って、かき消す。

だが、そうは言っても心配だ。

「・・・大丈夫ですわよ。私も鈴さんも」

唐突にセシリーがつぶやいた。

「え?」

「だから大丈夫ですわよ、私たちは。それに私に至っては、これがありますもの」

セシリーはそう言って笑いながら、?ストライク・バーディ?を首から外す。

「私は一人で戦ってなどいません。鈴さんもいますし、ここに二人も私を後押ししてくれる人がいる。だから大丈夫ですわ。必ず次も勝ってまいります」

「セシリー・・・」

それだけを言い残し、鈴同様に更衣室へと姿を消すセシリー。
・・・そうだ、

僕は信じて応援するしかない。

心配しても仕方ないんだ。

僕はここで、二人が勝つのをただただ祈る。

それが今僕に出来る唯一の事だから。

その時、ほんの一瞬意識が遠のきかける。

「わわわッ!?!」

力の抜けた足がバランスを崩させ、僕はなんとか壁の手すりにつかまって転倒だけは回避する。

「……な、何だ今の？」

僕は、その症状の正体をつかめぬまま、きょとんとした顔でまるで答えでも探すかのようにキョロキョロと辺りを見回していた。

「お前ッ!?!?!」

箒はピットでラウラの胸倉をつかんでいた。

だが掴まれているラウラの目は冷めきっている。

怒っている自分が馬鹿らしく思えるほどに。

「味方ごと吹き飛ばすなど、何を考えているッ!」

「言っただけだ、私は邪魔をするなと」

「邪魔だと!?!相手の動きを抑えていたのだ、それが邪魔だと言っ
のか?」

「誰もそんな事、頼んでなどいないだろう」

さらりとそんな事を言われて、更に逆上する箒。

「いいか、お前と私は今はペアだ! お前一人で戦っているつもり
か!?!」

「……あ、いつでもそうだが」

箒は絶句する。

それと同時に、するっと手の力が抜けラウラが箒の元を離れる。

「……こんな、ここまで。」

箒はラウラを睨むが、既にその姿は消えようとしていた。

そこへ、次の対戦相手の情報が届く。

箒は、息を整えると口を開く。

「おい、次の対戦相手が決まった様だぞ」

「そんなもの、私の方にも届いている」

「……良かったな、一夏ではなくて」

箒の意味深な言い方に、ラウラは目じりを若干上げながら戻ってきた。

「どういうことだ？それはつまり私が、あの男に負けると言いたいのか？」

箒は、ペアを組んで恐らく初めてではないかと思うラウラの苛立つ声を聞いた。

だがそれに臆することなく箒は、はっきりと言う。

「ああ、そうだ。お前は一夏には勝てない」

「なんだとッ！」

今度はラウラが箒の胸倉をつかむ。

その目は、鋭く刃物のようだった。

「貴様……何を根拠にそんな事を言う？」

「根拠だと、笑わせる。そんな事も分からずに一夏に勝とうとしていたのか。そんな事ではセシリア達にすら勝つことはできない」

ラウラにはその意味が理解できない。
なぜだ？

ISの性能も、実力も、そして力も。どれ一つとして自分はその代表候補生コンビ？に劣ってなどいない。もちろんあの男にだってなになぜそんな、出任せが言える！？

「分からないのか、本当に？」

箒の少し憐みの入った声をラウラは鼻を鳴らして反論する。

「……ふん、そんなもの分かる必要はない」

そうだ、分かる必要などない。

要は勝てばいい。圧勝だ。

それ以外必要はない。

あの男が負けてしまったから、？合法にあの男を始末する手段？は無くなってしまうが、

それでもチャンスはいくらでもある。

ラウラは考えを切り替えると、箒をら手を離し、無言でその場を後にした。

それを箒は、どこかさみしそうな目で見送るのだった。

予定時刻になり、両ペアがアリーナに姿を現す。だがそこに第一線の様な、和やかな会話は無い。

「……やはりあの男は雑魚だったか」

ラウラは誰に言うでもなく吐き捨てる。

それに鈴が噛みついた。

「少なくとも、あんたよりは強いわよ、一夏は」

「ほう、だがあの男はお前たちに負けたようだが？」

「別に私たちは、一夏さんに勝った負けたという話をするつもりはありませんわ。だってあなたは既に一夏さんに戦う前から負けているのですから」

セシリアの言葉にラウラは目を細めた。

「またその話か、あの女にも同じことを言われたが、お前たちはよほど現実と言う物が見えていないようだな」

「はん……どつちが」

「………はあ」

鈴はそれを鼻で笑い、セシリアは呆れてものも言えなかった。試合開始のカウントダウンが始まる。

しばらくの沈黙の後、試合開始のブザーが響いた。

「はあああッ！」

鈴は、ラウラへ一気に距離を詰める。

だがラウラはそれを微動だにせず待っている。

そして、？双天牙月？をラウラの首元へ一気に付きつける……が。
「なッ！！」

「……ふん、こんなものだろう」

？双天牙月？はラウラに到達することなく、見えない何かによって遮られそれから先へは全く動かない。

ラウラは余裕の笑みで鈴を受け止めると、ワイヤーブレードを射出し、鈴の足にそれを巻きつける。

「しまっ！！」

「落ちろ」

冷たく言うと同時に鈴を襲ったのは、全身へのすさまじい衝撃だった。

意識が飛びそうになるのを何とか繋ぎとめ、鈴はすぐさま体勢を立て直し一旦下がる。

「あれは……」

「A I C……アクティブ・イナーシャル・キャンセラー……これほどは」

A I Cは理論上鈴の空間圧縮砲撃？龍砲？の空間圧作用にたエネルギーで運用されていると考えられた。

そうだとするなら、同じ圧縮攻撃の鈴の？龍砲？はあのA I Cとなり相性が悪い事になる。

セシリアにもそのことは分かったようで鈴へ叫ぶ。

「鈴さん！先に篤さんを無効化しましょう、ラウラさんは私が引きつけますわ！！」

鈴には中近距離の武装しかない。

A I Cがある以上、近づくのは得策ではないだろう。

だがこちらには遠距離用の武装が数多く搭載されている。

仕留めきれなくても、牽制で行くばか時間はつなげるはずだ。

「分かった。あんた……気をつけなさいよ」

「ええ、そちらこそ」

それに二つに分けたのにはもう一つ理由がある。

それはこの手の相手には、？レイ？は使えないからだ。

？レイ？は相手が僚機の危機に救援に訪れ、お互いのISの距離が近くなることで

初めて発動できる戦術だ。

だが、今回の相手は、箒はともかくラウラは箒を助けることはしないだろう。

そうなるとうしても中で動く距離が増えてしまい、

？レイ？の真髓である？素早い攻撃？が間延びしてしまう。

「ふん、イギリスの第三世代機か……。だがいくらISが良からうと乗り手がクスでは意味が無い！」

ラウラは、腕部からプラズマ手刀を出現させこちらに急接近してくる。

（安い挑発に乗っては命取りですわ……。しっかりと距離を取る事が最優先ですわね）

セシリアは冷静に判断し、ラウラと一定の距離を保ちながらビットや？スターライトMK??で牽制しながら、チャンスをつかがう。

どうやら、単純な機動力は相手の？シュヴァルツエア・レーゲン？よりも？ブルー・ティアーズ？の方が高いらしい。

セシリアはチラッと、鈴と箒を見やる。

箒は？打鉄？で、なんとか鈴の攻撃をやり過ごしてはいるようだが、それでも、もうしばらくすれば決着は付くだろう。

それまで、自分はこの化け物を引きつけないといけないのだ。

セシリアはラウラに視線を戻すと、ラウラのほぼ死角に待機させていたビットに発射の指示を送る。

この角度ならば、いくらハイパーセンサーがあるとはいえ！

……。だがラウラはそれを難なく回避したばかりかビットをそのプラズマ手刀で切り刻む。

「くう、やりますわね……」

「つまらんな……。この程度で第三世代とは」

一言一言がセシリアの神経を逆なでする。だがここで熱くなつては

ダメだとセシリアは

自分に必死で言い聞かせながら、三機のビットと射撃を繰り返す。だがそのどれもが、難なく回避される。

「……もういい、終わりにしよう」

セシリアの顔に嫌な汗が流れる。

ラウラは、先ほどまでとは全く違う機動で飛び、気が付いた時には目の前にいた。

「まさか……！」

「私が初めから本気でやっているつもりでも思ったか、お気楽な頭だな」ラウラはセシリアのビットをまたたく間に、プラズマ手刀で破壊すると、ワイヤーとAICによって動きを止められたセシリアに向かって肩の大型レールカノンを向け間髪いれずにそれを発射した。

ドカアアアアアッ！！

爆風が、熱波がセシリアを覆う。

そしてすぐに、地面にアリーナの側壁に何度も叩きつけられる。

そうして、何度か振り回した後、ラウラは意識の遠のくセシリアにプラズマ手刀を付きたてた。

「……死ね」

そう言えばセシリアはこれに似た感覚を既にどこかで味わっていた気がした。

どこだったかと、記憶を探る。

そう、あれは……黒いISと戦った時だ。

自分のミスで、もうあの時は命は無いと思った。

……でもその時彼が……嘘つきな彼が助けてくれたのだ。

そうだ……助けられたのだ。

自分は彼に……。

そして今度は……自分の番だ。そう彼に言ったではないか！！こんなところで終わってはいけない！！

終われない！！

セシリアの強い思いが、飛びそうな意識を何とか繋ぎとめる。

セシリアは足に絡みついたワイヤーブレードをビットの攻撃で切り、なんとか脱出する。

「はあっはあ・・・ダメージは・・・」

セシリアは一息ついたところで、シールドエネルギーや各部の損傷チェックを手早く行う。

シールドエネルギーはまだ余裕はあるがそれでもイエローゾーン。

武装はビット四機中二機が大破。

残りも中波と中々のボロボロ加減だ。

手持ちの？スターライトMK??はまだ大丈夫だが、これだけでは火力が圧倒的に足りない。

(・・・きついですが・・・やるしかありませんわね)

セシリアはグツとネックレスをつかもうとして・・・。

「あ、あら・・・な、無い!?!」

セシリアは何度も見直すがどこにも、アルから託されたネックレスが見当たらない。

そんな、一体どこへ!?!

セシリアがキョロキョロとしていると、ラウラが上から声をかけた。

「貴様が探しているのは、ひょっとしてこれか?」

ラウラは右手をかざす。

そこには確かに?銃弾のネックレス?があった。

「なんでそれをあなたが!」

「さあな、さつき飛んで来たのだ・・・大事な物の様だな?」

ラウラはそれを、ヒョイツと上に投げると

プラズマ手刀で真っ二つに切り裂いた。

「すまん、手が滑ってしまった」

真っ二つになって落ちていく、思い　意志。

そしてその瞬間セシリアの中で何かが振り切れた。

「あなたは・・・あなたはあッ!!!!!!!」

もうシールドエネルギーや武装の破損状況などどうでもよかった。ただ、あの女を、自分のそしてアルの、ローラのその意志を軽々しく放り投げ、切り、笑ったあの女をセシリアは許せなかった。

「あああああああああつ!!!!!!!!!!」

セシリアは？スターライトMK??を撃ちまくりながらラウラへ突撃する。

だがそんな攻撃もラウラには簡単に避けられてしまった。

そしてラウラはすれ違いざまに、残っていた武装とスラストアームを破壊した。

大きな爆煙に包まれた？ブルー・ティアーズ？が落ちていく。

先ほどなんとか繋ぎとめた意識も、もう限界だった。

・・・私、こんな・・・

終ってしまった。

あつけなく。

薄れゆく意識の中でセシリアは後悔の念にさいなまれていた。

結局何も・・・出来なかった。

無力な自分に涙が出てくる。

セシリアは次に包まれるであろう地面への冷たい衝撃を覚悟する。

だが、次にセシリアを包み込んだのは冷たさではなく、暖かさだった。

身体の奥から、心の奥から、暖かいものに包まれていく感覚。

そしてどこからか声がする。

『セシリー大丈夫だよ』

その声は、とても優しくして。

『僕が、ついてる』

その声は、とても暖かくて。

『あはは、酷い顔だなあ・・・そんな顔似合わないよ』

その声は、とても明るくて。

『ほら笑って』

その声は、とても

『うん、その顔がやっぱり一番あってる』
心強かった。

そして次第にその声の主が姿を現す。

彼は自分に対して手を差し伸べていた。

彼はニコツと笑うと、セシリアに向かって優しくささやいた。

「行こう、セシリー」

あれ？

僕は……それにここは？

確か僕は、通路でモニタリングしてたはずなのに……

僕はキョロキョロと辺りを見渡すが、そこは綺麗な光の世界だった。
そう、光だ。

僕の目は色盲のはずなのに、それが鮮明に見える。

そこは、心地いい暖かさと、優しさに包まれたような世界だった。

……一体ここは。

「あは、来ちゃったね、来ちゃったね、ね、ね、ね？」

唐突にその空間に、底抜けに明るい女の子の声が響く。

その女の子は、ブロンドの髪を後ろで束ねて青いパーカーに

オレンジのラインの走ったジーパンというラフな格好。

更に顔にはスポーッタイプofサングラスをかけていた。

身長は……僕よりも少し低いかな？

「あの、ここは……」

「んん？分からずに来ちゃったパターン？うぬぬ……これは予想が
くい」

その女の子は、小さな身体をめいっばい使って、とび跳ねたりし
やがんだり……とにかく動き回る子だった。

「分からずについて言うか、気が付けばって感じかなあ」

「ふん．．．まあいいや」
いいんだ。

「で、ここは何処なんだい？」

「うん．．．天国」

「はあっ!？」

「えへへうっそ」

うっ．．．なんだこのキャラは。僕にそっくりじゃないか．．．。特に嘘を付くところなんて特に。

少女は腕を頭の後ろで組み、ニカッと笑う。

「まあ、細かいことは気にしない。それより心配はあの、ですわ姉ちゃんだよねえ」
「ですわ姉ちゃん？」

「．．．あ、そうだセシリー！」

「セシリーはどうなったの？確かラウラに．．．ああ、もうッ！」

「まあまあ、落ち着きんしゃししゃいボーイ」

「これが落ち着いてられるって言うの!？」

僕は思わず少女に詰め寄ってしまうが、少女は笑みを絶やさず僕にこう告げた。

「大丈夫だよ、彼女は」

「．．．本当に？」

「うん、これは本当」

「でも．．．」

それでも心配な顔をする僕を、少女は優しくなでた。

「大丈夫大丈夫、ちゃんと君は彼女の力になってるよん」

「え、力に？」

「そう、時に思いや意志は世界の理を覆すのさあ!！」

少女はバツと手を勢いよく上にかざした。

それで何が起きるわけでもないのだが。

「ま、大丈夫だよ彼女には？君？が付いてるからね」

「僕？」

「そう、僕。だから大丈夫」

・・・意味はよく理解できないが、だかそれでも感覚では、なんとなくわかってきているようにも思える不思議な感覚が僕を支配していた。

少女はくるりと僕にきびすを返し、「一、二、三歩あるいたところでこちらをニヤツとした顔で振り返る。

「君ってさ、あの子の事好きなの？」

「んなっ！」

いきなりの質問に顔が真っ赤になる。

それを見て少女はまた大きな声で笑うと、最後にこう言った。

「今度は答えを持ってきてね」

その答えというのが一体何を指すのか、考えるひまさえ与えられず
急激に僕の意識はホワイトアウトしていく。

そして僕の意識は心地の良い風と暖かな世界に優しく包まれていった。

第12話「暖かい世界」(後書き)

明日名古屋に出来たりニア鉄道館へ行つてきます。

何気に趣味は車だったりします、しるくです。

最近はやたら家の周りの開発が進んでいるのか整地やら家を建てるやらで、トラックが行き来しており、正直家から出にくいですw
そのおかげでセルフヒッキーに(爆w

まあ、そんな感じ・・・

では13話でお会いしましょう！

さよならっ！

第13話 強さと一夏とラウラ・ボーデウィット

アリーナでは、鈴が、箒が、観客が、そしてラウラが、信じられない現象を目の当たりにしていた。

ラウラはセシリアを撃破したと思い、その姿を追わなかった。だが、次の瞬間ラウラを強い衝撃が襲う。

その衝撃は思いのほか強く、ラウラはアリーナの隅の方まで飛ばされてしまった。

初めは、油断していたところへ鈴の？龍砲？が当たってしまっただけかと思っただがそれにしては？あきらかに火力が違い過ぎた。？

少なくともラウラが事前に目を通した？甲龍？のデータでは、確かに？龍砲？の威力は高かったものの、この？シュヴァルツエア・レージェン？をここまで吹き飛ばす威力は無かったはずだ。

では・・・何が？

とラウラは、センサーで攻撃が来た位置を割り出す。

そして目にした光景に今こうして、驚いているのだ。

「・・・なんなのだ、それは！？」

そして叫んだ声に呼応するように鈴と箒もそれにつられて視線を移動させ、同じように驚く。

観客も同様だ。

なぜならそこには、先ほどラウラが完膚なきまでに破壊した？ブルー・ティアーズ？がいたからである。

いや、厳密には？ブルー・ティアーズ？がそのままの形でいたわけではない。

かろうじて稼働できるビットが一機に、砲身が切られ短くなった？スターライトMK？と満身創痍ではあったがたったひとつ、異なる点があった。それは？ブルー・ティアーズ？には無かった、長方形型の大きな火器内臓スラストアターが？あたかも、初めからそこに付いていたかのように思えるほど、自然に背部に搭載？されている事

だ。

そしてそれはまさにアルディの？ ストライク・バーディ？ の？ ウエ
ポンスクエア？ そのものであった。

「貴様……つく、イギリスの第三世代にこんな隠し玉があった
とはな」

「隠し玉……ええまあそうですね……」

ですがそんな考えではやはり私達にはあなたは勝てない」

苦々しく言い放つラウラに、セシリアはニヤツと笑い意味ありげな
口調で言い返す。

セシリアは、先ほど拾った？ ストライク・バーディ？ のネックレス
をかざした。

それはラウラに真つ二つにされ痛々しい切断痕をその身に刻みなが
らも、ほんのりと温かく光っていた。

更にその光に、共鳴吸うかのように？ ブルー・ティアーズ？ も同じ
ような温かい光を放って……。

いや……。

その光に、包まれていた。

温かい黄金色の光に。

セシリアは、自分の身に何が起こったのか、理屈ではなく感覚で分
かっていた。

理屈では説明が付かないと言う事も。

あの時間こえた優しい声も、温かさも。

そして、今この自分のISの姿も。

そして、自分には？ 彼が付いていてくれる？ ということも。

セシリアは、胸の奥にこの上ない温かさや優しさを感じながらラウ
ラと対峙する。

「……あなた、先ほどまでの考えで飛び込んできますと……」

セシリアは、自信に充ちた表情でラウラを睨むと高らかに告げた。

「負けますわよ！」

「黙れ、死に損ないがッ！！」

ラウラは再びセシリアへ急接近する。手には先ほどと同じようにプラズマ手刀を起動させている。

しかし、もうセシリアに焦りは無かった。

セシリアは先ほど撃った？ウエボンスクエア？の高圧荷電粒子砲を格納するとラウラを正面でとらえ、？スターライトMK??を構える。

砲身長が短くなっている分、威力は半減しまた狙いも定まらない。

「そんなもので！」

ラウラも、一瞬でそのことは見抜いたようで避ける必要もないと言わんばかりに直線コースでセシリアへ突撃してくる。

だがセシリアは構わずにトリガーを引いた。

？スターライトMK??がマズルフラッシュと共にレーザーを発射する。

だがやはり砲身長の足りなさで、初速が足りずラウラに到達するまでに意地限界を超え霧散するレーザーも少なくなかった。

しかし、それでも尚セシリアは焦りの表情一つ見せない。

「ふう・・・やっぱりそのままではまともに射撃ができませんわ」

余裕たつぷりに？スターライトMK??を持ち直しそんな軽口までたたいた。

ラウラはその行動が癪に障ったのか、更に激昂してセシリアに切りかかる。

気付けばラウラはセシリアの目の前まで接近していた。

「叩き潰してやろう！」

「その前に・・・私を捕まえてごらんさないな！」

ラウラがプラズマ手刀を振った瞬間、目の前から黄金色の粒子を舞い散らせながらセシリアが消えた。

むなしく空を切る自分の攻撃に、一瞬なにか起きたのか分からない。ラウラはセシリアと対照的に焦りの表情を浮かべる。

「馬鹿な、今の攻撃に反応しただと！データ上では？ブルー・テイーズ？にあんな機動性は!？」

キヨロキヨロと辺りを見回すラウラに真上から？ウエポンスクエア？の高圧荷電粒子砲を再展開したセシリアが笑って声をかける。

「データ、データですわねさつきから！」

「なっ！？」

気が付いた時には、ラウラは地面にたたきつけられていた。

高圧荷電粒子砲。別名？ヘヴィハンマー？。ウエポンスクエア？の中でも最も高火力な二門の直撃を受けラウラは肩のレールガンが爆散していた。

先ほどセシリアがなぜ、ラウラの攻撃を避けられたのか。

それはこの？ウエポンスクエア？の強大な推進力のためものだ。元々重量級の？ストライク・バーディ？用のスラスターだけにそれよりも軽く軽量な？ブルー・ティアーズ？がそれを使用すれば、ラウラがデータで見た機動力を凌駕することなど簡単な事だった。もちろん既にこれが、データで推し量れない事ではあるのだが。そしてこの？ウエポンスクエア？はただ機動力のためだけにあるのではない。

「本来は、立つまで待つのがマナーなのでしょうけれど」

セシリアは再び狙いを定める。

「その前に、あなたのマナー違反を正して差し上げますわ！！」

それから降り注ぐ？ヘヴィハンマー？の雨あられ。

ラウラは防御で手いっぱいになってしまう。

「ぐうっ・・・がはっ！！！」

やがてその攻撃に、他の？ウエポンスクエア？の武装である小型バルカン？ファイアスピード？そして小型ミサイルポット？トーンイド？もその攻撃に加わる。

そしてラウラに、防御シールドを抜けた攻撃が通り始め、苦しむ声が聞こえる。

しかしセシリアは撃つ事をやめない。

当然チャンスだと言う事はある。

だがそれ以上にセシリアは許せなかった。

教官のレベルに対して明らかにこの生徒たちはレベルが低すぎる、次元が違う！」

「だから、私がここで教師をするのは間違っている？」

「そうです、教官！お願いです、もう一度ドイツでご指導を！」

千冬は肩目を閉じたまま、ラウラを睨み黙ってラウラの言い分を聞いている。

だが次にラウラが言った一言が千冬の逆鱗に触れる。

「大体、こんなところで何を……あ、織斑一夏……ですか？」

「何？」

「そうなのですね、やはり……あの男が教官を

ッ！？」

千冬はラウラの胸倉をつかむと、近場の気に押し付ける。

千冬の鋭い眼光にあてられ、ラウラは今までの勢いを失い小刻みに震えはじめた。

「いいか、小娘。いくらお前が激昂していようと云っていいことと、言ってはならん事がある。

それに私は別にあの馬鹿な弟のためにここで教鞭を振るっているわけじゃない……わかるな？」

「で、ですがッ……！」

「いい加減にしる小娘。世の中何でもかんでも思い通りになるとでも思っているのか！？」

見ないうちに随分増長したな」

千冬は胸倉を持つ手をパツと離すと、冷たいまなざしでラウラを射抜く。

「げぼげぼっけほ……」

「とにかく私は、ドイツへは帰らんし指導もしない。分かったらとつとと寮にでも戻れ」

千冬はそれだけ言い残すとラウラを置いて、歩いていってしまふ。

ラウラは、それをいまだにせき込んで苦しい身体で見送ることしかできなかった。

だがそこでラウラは気が付く。
そうだ、そうなのだ。

教官は私を試しているのだと。
そうに決まっている。

私がどれほど、成長したのかを確かめようとしているのだと。
それにきくと、教官の事だ。

凶星を言い当てられて、照れ隠しにでもあんな事を言ったに違いない。

どこまでも、千冬に憧れるラウラにとって先ほどの千冬は態度は、
そう写ってしまっていた。

そして、やはり自分が睨んだ通り、教官は弟である織斑一夏を疎ん
じているのだ。

・・・それならば。

・・・私がやってみせる。

織斑一夏を完膚なきまでに叩きつぶせば、きっと教官は喜んでドイ
ツへきてくれるはずだ。

・・・そう、はずだ。

それなのに・・・

それなのに・・・!!!

ラウラは一機に現実へと引き戻される。

愛機である？ シュヴァルツエア・レーゲン？ はシールドエネルギー
はおるか武装すらほとんどが使えない状態。

しかも、それをやられたのが織斑一夏なら、まだ負けを受け入れや
すかった。

だが自分をこんなにしたのは、あのイギリスの妙なISだ。

あの女に・・・!!

あの女が!!!

すべてが狂ってしまった。

あの女がああ男を倒したから、自分はいく男と戦う事が出来なくな

ってしまった。

あの女も邪魔だ。

そう邪魔だ・・・邪魔なんだ。

私は・・・そうだ、私は邪魔な物を倒して、あの男つぶして教官とドイツへ帰るのだ!!!

そうだ・・・そのための力だISは。

お前たちとは何もかもが違う!

覚悟も、誇りも、意志も!!!

ラウラは身体を動かそうとするが、ISからバチバチと火花が飛び力が入らない。

ええい!なにをしているのだ!!!

力なら力らしく、私の欲する力を与えないか!!!

その時ラウラの中でドクンツと何かがはじけた。

その直後ラウラの身体へ、すさまじい力の奔流が駆け巡る。

・・・なんだあるのではないか。

そうだ、それでいい!!!

力こそが強さだ!!!

そうさ、私は!

私は教官と一緒にドイツへ帰るのだ。

力だ、力!!!

力を私によこせ!!!

絶対的な力を、私によこすんだ!!!

D a m a g e l e v e l D o v e r
M i n d C o n d i t i o n U p l i f t
C e r t i f i c a t i o n c l e a r

《Valkyrie Trace System》 boot

「ああああああああああああああッ!!!!!!!!!!」

ラウラの咆哮ともいうべき声のアリーナに響き、ゆっくりと立ち上がった？ シュヴァルツェア・レーゲン？ の周囲を火花とも電撃ともとれる閃光が包む。

「な、なにあれ・・・」

いつしか箒との戦闘を早々に切り上げ、箒と共に近くに、来ていた鈴がつぶやく。

だがセシリアにも答えが見つからない。

次第に？ シュヴァルツェア・レーゲン？ は黒いドロツとした塊となつてラウラを包んでゆく。

セシリアの時は、ISの武装展開と同じように？ ウェポン・スクエア？ が光に包まれて現れたがそれとは全く違うラウラのISの？ 異変？。

やがてその黒い何かは、ラウラを包み一つの形へと固定されていく。顔は、今まで無かったバイザーで覆われ、あれほど無骨な外観は全体的にシャープになり、その手には得物である一つの刀が握られている。

そしてその刀は、色こそ真っ黒だったが、どこかで見たとことがあるフォルムだった。

「あれは・・・」

「雪・・・片よね」

嫌な汗がセシリアにも、鈴にもそして箒にも流れる。

あれが本当に雪片なら・・・相手は？ 零落白夜？ を使えると言うのか。

仮にそうだったら、これは最悪だ。

セシリアは先ほどのラッシュで、シールドエネルギーまで？ ウェポンスクエア？ に持って行かれほぼ空。

鈴も箒も、激しく打ち合っていたため残っているといても、セシ

リアよりも少し残っているかいないかといった程度だった。

そんな心もとなない状態で、あんな化け物と戦うなど自殺行為だ。だが、そんなこちらの気など関係ないと言わんばかりに、

形成を終えた？ソレ？は一瞬でセシリアたちの前に飛び込んできた。

「え！？」

「馬鹿な！」

「ちょ、あんだ速すぎ！！！」

箒と鈴を？ソレ？はなぎ払うと中腰に刀を構え、必中の間合いから鋭く放たれる一閃。

セシリアは、かるうじてそれを回避するものの、攻勢に転じよう？へヴィハンマー？を展開し終える前に？ウエボンスクエア？ごと武装を真つ二つにされてしまう。

なんとか残った片方のスラスタで間合いは取ったものの、このままでは負ける・・・いや殺される。

だが、やるしかない。

鈴や箒も立ち上がって、？ソレ？と対峙している。

しかし、そうはいつでも皆限界だった。

ことセシリアに至っては自機のほぼすべての武装が満足に展開できないばかりか、

もう後一度接近のためにバーニアでも噴かそうものなら、その時点でエネルギーが底を尽きる。

それでも相手は止まらない。

箒が切りかかりそれを鈴が？龍砲？で援護する。

箒は相手の刀を旨く下にはらい隙を作ると、そこへ鈴が一本にした？双天牙月？を叩きこむ。

今しかない。

セシリアは、現在残っているエネルギーを？へヴィハンマー？に回すと最大出力で発射した。

ズガアアアアッ！！

やはり、出力不足か・・・。

先ほどと同じく舞う砂煙。

それと同時に、リミット・ダウン。

セシリアのISは光となって消滅した。

でも……

「直撃したはず……はあっはあ……流石に落ちたでしょ」

当たる瞬間に箒を引つ張つて離脱した鈴が、腰に手を当て言う。

「……流石にあれで経つていられるはずが……」

箒も、勝利を薄々感じてはいた。

だが、次の瞬間、我が目を疑いたくなるような光景が目飛び込んでくる。

砂煙の中から勢いよく？ソレ？が飛び出して来たのだ。

「そんな!!」

誰が叫んだか、三人も分からなかったがそれはどうでもいい。

二人は満身創痍で一人はISを展開すらできない状態。

……すなわち……絶望。

そしてそんな三人に向かって、死の太刀は振り下ろされた。

皆が、目をつむる。

そんな事をして、助かるはずなど無いと分かっているのに。

しかし、次に三人が聞いたのは身を割く生々しい音ではなくガツ!

!という鉄と鉄がぶつかり合う音だった。

「てめえ、やらせねえよ!!」

バツと顔を上げた先にいたのは半壊状態の？白式？を駆る一夏だった。

「一夏、あんた何やってんのよ!」

「お前どこから入ってきたんだ!？」

「お身体は大丈夫なんですか!？」

三者三様に叫ぶ中、一夏はのんきに返す。

「大丈夫だって、白式のダメージレベルはB。起動制限も掛けられてないしな!!」

一夏は敵の刀をはじくと、セシリアを小脇に抱え距離を取る。

そして一定の距離を確認するとセシリアをアリーナの隅へと下ろした。

「一夏さん？」

「お前に何かあったら、アルディになんて言われるか分かんねえかな。じつとしてるよ」

一夏の言葉にボツと顔が赤くなるセシリア。

「な、何を言ってますの、全く！！」

「ハハハツ・・・それよりもありや一体何なんだ？」

冗談めいた笑みから一転、鋭い顔になる一夏。

キツと敵を睨む眼光は、やはり千冬の弟なのだという事を思わせた。

「・・・わかりませんわ、ただ急に叫んで気が付けば」

「・・・そうか」

一夏はチャキリツと雪片を持つ手に力を入れる。

そして一気に敵との間合いを詰める。

「はっ！」

一夏が切りかかるが、？ソレ？は瞬時にスラスターを噴かし距離を取ると再びセシリアを襲ったあの一閃を繰り返す。一夏は構えた？雪片式型？を弾かれると更に敵は上段の構えへと移る。

一夏はそれをなんとか、かわすが一夏の顔はさっきまでとは違っていた。

かわせて良かったという、安堵の表情では無い。

一夏の顔には、激しい怒りが渦巻いていた。

「お前・・・！！お前えええ！！！！」

頭に血が上ったのか、何の考えもなくただ突っ込んでいく一夏。

その一夏を前の戦闘で、愛機が破壊されたシャルルが？打鉄？を装備して止める。

「一夏！ダメだよッ！！」

「離せ、シャルル！あいつは・・・あいつはあッ！！！！」

更にそこへ箒も加わる。

「落ちて着け一夏！一体何だと言うのだ！！」

「幕まで！いいから離せよ、邪魔するなら幕もシャルルも
ッ！？」

パツシーーン！

一夏の頬を強い衝撃が襲う。

それと同時に頭が冷えていくのが分かる。

「ほう・・・き？」

「私もなんだ？ 落ち着け一夏！どういふことなのだ！」

「・・・あれは・・・あの太刀筋はあいつが使った太刀筋は、千
冬姉のものなんだ！！」

ここはどこだ？

さっきの力の奔流を感じた後、その間は更に暗くなった用を感じる。
ぼんやりとだが、何かが見える。

これは私の視界か？

白いISが黒いIS二機と何かを言い争っている。

あれは敵だろうか。

・・・敵だな。

そうだ敵だ。

倒さないよ。

倒さないよと教官と一緒に帰れない。

そうだあれは？織斑一夏？だ。

そうに決まっている。

視界が急激に速くなる。

どうやら私は、白いISに接近しているようだ。

倒せ、倒せ、倒せ、倒せ。

そればかりが頭の夏で響く。

だが、次の瞬間白い閃光が私を包んでいった。

そして瞬時に理解する。

私は・・・アレに負けたのだと。

笑ってしまいうぐらいにあっけない。

・・・なぜだ。

私は強くなつたはずだ。

この力を経て。

なぜなんだ!!!

「なぜ!!!」

そう叫ぶ私に誰かが話しかけてくる。

『お前は強くなってなんていない』

「誰だ？」

『お前が一番よく知ってるだろ』

「織斑一夏・・・」

『ああ、そうだ。お前さつきなんですって叫んでたよな』

「・・・」

『その力はお前の力だったのか？』

「なに？」

私の・・・力？

そうではないのか、だって私はその力で・・・

「私はその力で、強く・・・」

強くなつたのではないのか？

『・・・強さつてのは、そんなもんじゃない』

私の疑問をあつさりそいつは否定する。

『強さつてのは、心の在処。拠り所。自分がどうありたいのかを常

に思うことじゃないかって思う』

「　　そう・・・なの・・・か？」

『少なくとも、俺はな』

「おれ……は？」

『みんな違うと思うぜ、そんなの』

私はこれまで、たったひとつの物だけが強さだと思ってきた。

それこそ？ 織斑 千冬？ であり、その強さの具現である彼女の汚点であるこの男を、

この弱い男をつぶせばいいと思っていた。

だが違う……。

この男は……

「お前は強いのだな」

『強くないさ』

「いいや、強い」

『そうか……まあそうだとすれば』

「だとすれば、何だ？」

『強くなりたいから強いのだ』

ああそうか。

『それにやってみたい事もある』

これが強さか。

『誰かを守ってみたいんだ』

これが力か。

『だから、お前も守ってやるよ、ラウラ・ボーデヴィット』

これが織斑一夏か。

確か昔、教官が言っていた。

この男と対峙する時は気をしっかり持てと。

出なければ惚れてしまうと。

なるほど。

その意味がわかった。

これは確かに……

惚れてしまいそうだ。

「うつくう……」

まだ頭が少し痛い。

ゆっくりと辺りを見渡す。

ここは……。
保健室？

「目覚めたが、サウスバード」

織斑先生の声がする。

ぼんやりとだが、黒いスーツの輪郭が見える。

僕はその方向へ顔を向けようとして身体を起こそうとするが、それを織斑先生が制する。

「やめておけ、まだ満足に歩けるような状態でもないだろう」

言われてそう言えばと思い、身体を戻す。

いまだに視界は回復してはいなかった。

ただ、そんな中でもなぜか頭は冴えている。

「……僕は、どうなっただんですか？」

「気になるか？」

「はい」

そりゃそうだろう。

だって急に倒れて、気が付けば白い世界に居てまた意識を失って、次に気が付けば夕暮れの保健室だ。

気にならない人間がいたら見てみたいよ。

「お前、トランスという言葉聞いた事があるか？」

「いえ、ありませんけど」

「別名、感応覚醒というが、まあ知らなくて当然だろうな、私も初めて見た」

「はあ」

腕を組み、淡々と話す織斑先生に僕は生返事で返す。

僕が倒れたそれが、？トランス？ってやつなんだろうか。

「昔、束に聞いた事がある。ISは人の強い思いや意志をもくみ取って成長するものだ。」

そしてその意志が強いと、たまに何かをきっかけにして親しい人間のISと同調する事があるそうだ。まあIS自体完成されていない技術だからな、定かではないが」

織斑先生は語尾を濁したが、つまり僕の思いがその？トランス？を引き起こしたってことでいいのかな。

「具体的に、どんな感じになるんです？」

「ふむ、見てもらった方が早いかもしれんな、もうそろそろ視界もはつきりしてきたころだろう？」

頷く僕に、織斑先生は、端末を取りだすと僕に映像を見せる。

そこには？ウエポン・スクエア？を駆使して戦うセシリーの姿が映し出されていた。

「な、なんですかこれ……」

「見ての通りだ。さっきの説明通りならば、オルコットのISとお前のISが感応しあった結果、
と言う事になる」

言うつと織斑先生は、真つ二つになったネックレスを僕に手渡した。

うわあ……こりゃ酷い。

ちゃんと起動できるのかなこれ……。

「オルコットから預かった。お前これをオルコットに預けていたそうだな」

「はい……」

「多分そのせいだ。オルコットはこれを首から下げて試合に臨んだらしい。その時何かしら作用して？トランス？が起きたようだな」

「………そうですか」

何かしら作用してか………。

ひよっとしたら、あの時。

僕はラウラに完膚なきまでに負けたセシリーを見て、居てもたっても居られなかった。

心配だったのだ。

でも何もできない。

待つことしかできない自分が腹立たしかったし、セシリーは傷だらけで。

その後だ。

僕が意識を失ったのは。

……強い思いと意志か。

なるほどね、なんとなくそう考えると納得できたかも。

「さて、納得できた所でお前には色々聞かねばならん事があるなぎくうッ!!」

僕は一瞬で背筋が凍るのが分かった。

「まず一つ目だが、聞いた話ではボーデヴィツヒと、このトーナメントで戦う約束をしていたようだな」

……あ、なんだそのことか。

「はい」

「なぜだ？お前は自ら喧嘩を吹っ掛けるようなヤツでは無いだろう」

「姉さんを……馬鹿にされたから」

「……ローラをか」

織斑先生は言うため息をついた。

その顔からはやれやれと言う感情が読みとれる。

なんだか、また馬鹿にされてるのかな。

ムスツとする僕に織斑先生は、少しあわてた様子で弁解した。

「いや、悪いな、別にローラを馬鹿にしているわけじゃない。

ボーデヴィツヒの事だ。あいつはドイツからの縁でな。

私になついてくれるのはありがたいが、それが行きすぎてしまうこ

ともしばしばなのだ。

そう悪く思わないでやってくれ」

「・・・まあ、もういいですけど」

僕はそこまで根に持つタイプじゃないし。

「それと、もう一つ。お前自分のISを他人に預けることが何を意味するのか分かっているんだろっな」

やっぱりねえ。

言われるよねそれ。

僕は今までの良い感じで、ゆったりと流れていた空気が一転するのが分かる。

「その顔は、分かっているという顔だな。なら話が早い。明後日までに反省文とレポートを提出しろ」

織斑先生は、持ってきていた紙袋をベッドの横の台に置く。

ズドン！

・・・何が入ってるんだろっね。

なんだか凄くいやな音が・・・って言うかあれは紙の音か!?

「ではな、私はボーデヴィツヒの様子も見ねばならん」

織斑先生は、きびすを返すといきなりドアに向かって歩き出す。

そして、ドアノブに手をかけ・・・一気に開いた。

「ちょ、つとつと・・・きゃんッ!」

ドシーンつと何かが倒れ込む。

顔から床に打ちつけられてピクピクと痙攣していたのは・・・

「せ、セシリー・・・」

「ろ、ろふほ・・・」

鼻がしらをさすりながらるれつの回らない声で、挨拶をするセシリー
それを見て織斑先生は、フツと笑って部屋を後にした。

「大丈夫?」

「急に開くと思いませんでしたわ・・・」

セシリーはまだ鼻がしらをさすっていたが、るれつは回るようになってきたらしい。

「って言うか……」

「ドアの前で何してたの？」

「い、いやそれはツ……その……。先生方にアルが倒れたと聞いて……心配で」

なるほど心配してくれていたのか……。

ダメだなあ、僕が心配されちゃうなんてね。

本来ならベッドで寝てなきゃいけないのはセシリーのはずだろうに、いつも通りの制服を着てはいるが、その下は包帯だらけだろう。

その証拠にさつきこちらへ歩いてくる時も足を少し引きずってたし。

「アハハ、大丈夫だよ。僕は……それよりセシリーは良いの？」

「私は、大丈夫ですわこのてい……つつつ……」

気丈にガッツポーズを作ろうとしたらしいが、それは激痛によって阻害されてしまったようだ。

苦痛で歪む顔を、ベッドから上半身を起こした状態でなんとか覗き込もうとする。

だが、セシリーは更にうつむいてしまい、顔を伺う事が出来ない。よほど痛かったのだろうか。

「あの……セシリー？」

「大丈夫ですわ、大丈夫……だからその……顔がその近くで」
言われてハツと気が付く。

僕が覗き込もうと躍起になって、セシリーの顔に急接近していた事に。

「あ、ご、ごめん」

「いえ、その嫌だったというわけではありませんのよ……ただ……こちらにも準備と言う物が……」

最後らへんゴニョゴニョ言って聞こえなかったけど、何にしても大丈夫だったらしい。

ただ、それから少し変に意識してしまい両者無言の時間がしばらく

続く。

な、何か前にもこんなあった気がするけど、やっぱりこう言うの
気まずいよなあ。

とはいえ、だからと言って言葉が出てくるわけもなく、更に黙りこ
くってしまっ。

どうしようか・・・ええつと、何か話題・・・話題・・・ああそ
うだ。

「その、ごめんね。必死で戦ってくれてたのに僕だけなんかこんな
・・・横になっちゃってみたいで・・・応援すら出来なくて・・・」
ひねり出した話題が、結局トーナメントの事だとは・・・。

僕ってひよつとして、ボキャブラリーやコミュニケーション能力が
実は低いんじゃないかな。

だが僕のそんな急場しのぎ的な話題に意外にも、セシリーは優しく
笑ってこう言った。

「いえ、アルあなたは私と、戦っていましたわ」

「え？」

「声が・・・聞こえましたの。？僕がついてる？って。

その声が私にどれほど勇気を与えてくれたか・・・。

たとえばあれが幻だったとしても、私は信じます」

そう言えば織斑先生はこう言っていた。

？オルコットはこれを首から下げて試合に臨んだらしい。

その時何かしら作用して？トランス？が起きたようだな？

と。

当然だが、僕には、セシリーに試合中に声をかけたなんて記憶は無
い。

だがセシリーは声が聞こえたと言っていた。

・・・これが？トランス？・・・。

なかなか神秘的な現象じゃないか。

僕は優しくそれでいて、どこか照れくさい笑みを浮かべるセシリー
を見る。

「・・・そう、じゃあ僕は役に立てたんだ？」

「それはもう、温かいものに包まれるような。そんな心地のいい感覚でしたわ」

貢献度から言えばペアの鈴さん以上ですわね」

「それ、鈴が聞いたら怒りそうだね」

「フフフっそうですね」

二人で夕暮れの中笑いあう。

とりあえず、何が起きたかは良いや。

今はこの時間を楽しもう。そうだ、それが良い。

「ううッ・・・」

「お前も目が覚めたらしいな」

ラウラが気付いた事を察し千冬は声をかけた。

「教官・・・？」

千冬は、まだ焦点の合わないラウラに質問する。

「寝起きのところ悪いが、ラウラ。VTシステムの事は知っているか？」

ゆっくり千冬の顔を見るラウラ。

その目はまだどこか、怯えているように千冬には写った。

「・・・怒っているわけではない。まあその顔を見る限り認識はしているようだ。そのシステムが巧妙に隠されお前のISに積まれている」

ラウラは下を向く。

どうやら、どこまで言っても自分はその国にとって実験動物ではないらしい。

その事が更にラウラを苦しめる。

「・・・ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「はいッ!？」

いきなり名を叫ばれ、ラウラはビクツとなりながらぼんやりする頭を叩き起こすとベッドの上で背筋を伸ばした。

「お前は誰だ？」

「わ、わた・・・しは・・・」

誰だ。

私は、ラウラ・ボーデヴィツヒで・・・ドイツ人で。

たったそれだけの事が出てこない。

「・・・お前はラウラ・ボーデヴィツヒではないのか？」

「い、いえあの・・・私は・・・」

「ボーデヴィツヒ。私は転校初日にこう言ったな？貴様は今日から私の生徒だ?・・・と」

ラウラは記憶を漁る。

確かに言われた。

確かあれはアルディとかいうアメリカ人にペットボトルを投げつけられた時だ。

「私にとってお前は、どうあれ大事な生徒だ。それは変わらん。では自分ではどうだ？」

「自分・・・」

「・・・それが分からんのなら丁度いい。今日からお前はIS学園の一生徒、ラウラ・ボーデヴィツヒとして新しい自分を始めてみる」

「新しい・・・自分」

そんな事考えたことも無かった。

そんな事言われるなんて考えたことも無かった。

新しい自分を始められるなど。

これまでもこれから、ずっと一人で暗い中を歩いていくんだと思いい込んでいたラウラには、まさに青天の霹靂だった。

「出来るでしょうか・・・」

「出来る出来ないは、今考えることじゃない。それにな、出来るか出来ないかではない。これはお前自身が絶対にやらなくてはならないことだ」

「……出来る出来ないでは無い。」

「……やらなくてはならないこと。」

「まあ、とことん悩め。小娘」

千冬は言い残し、部屋を後にしようとする。

だが、二歩三歩歩いたところで立ち止まる。

疑問に思ったラウラに千冬が、口を開く。

「そう言えば、サウスバードといざこざを起こしたそうだな」

「サウス・あの男ですか」

「何でもあいつの姉を馬鹿にしたと聞いたが」

そこでようやくラウラはピンつときた。

アリーナで言いあつたあの男だ。

「私は話の前後を知らんからな。下手な事は言えんが……ローラは強いぞ。」

口は軽いし、嘘つきだがな。それに……」

ラウラは言葉を黙って聞く。

千冬が？ローラは強いぞ？と言った時、ラウラは自責の念と恥ずかしさでいっぱいになった。

あの時は、織斑千冬がすべてだった。

だからあんな事も軽々しく言えた。

しかし、私が馬鹿にした相手は私の恩師も認めるほどの人間だった。そして逆に私がそれを言われる立場だったら、どうなっていたのだろうか。

私がああ男の立場なら。

大人しくトーナメント出場を辞退しただろうか。

そんな事を考えてしまう。

……謝らないと……な。

ラウラは、再び千冬の話に耳を傾ける。
そして驚愕の一言を聞いた。

「あいつは、私に一度勝っている」

第13話「強さと一夏とラウラ・ボーデウィック」(後書き)

ISの痛車ってこれから増えるのかな。一台も見ないけど。

どうもしるくです。

今回は少しダラダラと書きすぎたような・・・
そんな気がします。

そう言えば、今日ネットニュースで見たんですが水の生産が追い付いていないそうですね・・・。
そりゃそうでしょうねえ。

こちらの方にまわってくるには、まだまだ時間がかかりそうです。

・・・そうそう、どこのTV局では震災レポートに言ったレポートがマイクやカメラ入っていないと勘違いして「オモシレー」とか言っちゃったみたいです。

馬鹿ですねえ・・・。人間性疑います。

・・・そんな感じ。

ではまた14話でお目にかかりましょう。

さよならっ！

このあつついキスだ。

アメリカでもまあ、中学生辺りはもうしてたよ。

僕は経験ないけど。

もう一分はこうしてる。

そしてようやく口を一夏から離すとラウラは、叫んだ。

「織斑一夏！お前を今日から私の嫁とする、異論は認めん！……！」
それは朝っぱらから、地獄の宣告だったよ。

修羅場のSHRが終わり。

・・・今日はすべての一組と二組の授業が自習になった。
理由は簡単だ。

鈴が、箒が、ラウラがそして良識あると思っていたシャルロットまでが、教室を壊しに壊してしまっただからである。

さて・・・自習って言っても結局まるっと休みになったのと変わらないんだよなあ・・・。

ちなみに今僕はひとりだ。

他の人たちは、こつてりと織斑先生に絞られ、いま教室の修復作業を手伝っている。

それも人力でだ。

・・・良かった、僕に飛び火しなくて。

それだけでなく、レポートと反省文があるっていつのに。

「あら、アル」

「ああセシリー」

廊下でばったりと遭遇する僕たち。

偶然って言うのは、あれだね凄いね。

「どこへ行かれますの？」

「うん、いや別にぶらぶらしてただけだけど」

本当にぶらぶらしてただけなんだよね。

行くあてもないとはこのことだ。

だからと言って教室には戻れないし、部屋に行っても……部屋？

「セシリーは？どこか行く予定あるのかい？」

「いいえ、私も暇を持て余していたところですよ」

ふむ、だつたら丁度いいね。

「セシリー僕の部屋に来るかい？」

「はいいいッ！？」

声を裏返しながら叫ぶ。

そんな驚かなくても……。

ん、驚いたのかな。

セシリーの顔がなんかゆでダコ見たいんだけど。

「あの、セシリー？」

「あ、いや、でもほら、何事にも順序と言う物がですね、あつて。

だからその……」

どんだんなんでかパニックになっていくセシリー！

どこに、パニックになる要素があったのだろうか。

そうして何秒か、矢継ぎ早に言葉を発した後、セシリーの頭がオー

バーヒートしたようだった。

「きゅっ~~~~」

ボンっと言う音が聞こえてきそうなほど真っ赤になった顔でその場

で気を失うセシリー！

うわッ！

僕は倒れるセシリーの身体を支える。

……と、とりあえず。

保健室……はあ……。

……あの目で見られるのか。

急にあの保健の先生の目が思い浮かぶ。

あの目はいやだなあ……。

よし、部屋に運ぼう。

僕は、セシリーをお姫様だっこで持ち上げると部屋まで急いだ。

途中、何人かの女子に「あー！ー！ー！ー！！！」って言われたけど、今はそれどころじゃないんだ！

あ、ううん……。

額に何か冷たい物がのっけている感覚がある。
ゆっくりと、目をあける。

まだ視界はぼやけているが、どうやらどこかのベッドらしい。
そう言えば私は……。

アルに部屋に来るかと言われた後の記憶が無い。

ええと……私は……一体。

「あ、目が覚めたセシリー」

この声は……アル？

・え！……アル！？

急速に覚醒していく頭。

それと同時に頭が多くの情報や記憶を整理していく。

……まさかここは……！！

ガバツと身を起こす。

それと同時にまた頭がクラツとした。

「ああ、いきなり起きあがっちゃだめだよ。血が頭までしっかり回らないから貧血症状が出るよ？」

「ああ、あの私は……その」

セシリアは、ポスツとベッドに横になるとアルディが布団をかけながらセシリアの疑問に答えた。

「びっくりしたよ、急に倒れちゃうんだから。放置するわけにもいかなかったし部屋まで運んだんだ」

「そ、そうですの」

平静を装ってはいるが、はっきりってまた頭の中はパニックだった。

運んだ!?

私・・・重くなかったかしら・・・じゃなくて!!

ええと、そのだから・・・はあ。

にしても、なんて言うことでしょうか・・・

まさかそんな失態を・・・。

セシリアは恥ずかしさのあまり布団を両手で上に引っ張り、顔半分うずくまる。

ふう、でも部屋まで運んで・・・部屋？

・・・あれ？

「アル・・・よく私の部屋が分かりましたわね、鍵開いてました？」

「何言ってるさ、よく見てごらんよ。ここは僕の部屋だよ。」

セシリアの部屋に無断で入るわけにいかないでしょ、相部屋の人もいるわけだし」

「なっ!？」

で、ではここに、これはあ、アルの・・・ふ・・・布団!？」

セシリアはまた顔が真っ赤になる。

今うずくまっている、この布団がアルの布団・・・。

そう思うと、セシリアは急に恥ずかしさですぐに出なければと思う気持ちと、でももう少しアルの布団にくるまっていたいという気持ちとがせめぎ合う。

「まあ、体調がすぐれるまで横なつてよ、別に今日は二人とも用事ないわけだしね」

その言葉が、セシリアの後者の気持ちを後押しし、セシリアは結局その後しばらくアルディのベッドで布団にくるまり続けることになった。

セシリーがまだ起きないけど、仕方がない。

準備だけは先にやっておこう。

・・・準備って言ってもね。

繋ぐだけなんだけど。

僕はPCを起動させる。

そしてネット通話を起動する呼びだすのは姉さんだ。

程なくして姉さんにつながる・・・って、おい。

映し出された画面では姉さんが・・・寝ていた。

・・・いくら今日が休みだって言っただって、気を抜き過ぎじゃ

ないかなあ・・・。

僕が言えないけど。

そこに写っていたのは、おおそ世界二位の座をつかんだISのパ

イロットとは、

思えないあられもない姿の姉さんだ。

映像の壁紙からして自宅でこれは寝室だろう。

姉さんは、昔から下着姿で寝る。

今回もその例にもれず下着姿でしかも、かぶっていたんであろう布

団をまあ見事に蹴飛ばしていた。

姉さん・・・。

これは何が何でも起こさねばならない。

少なくとも、起きたてのセシリーが見たら僕は間違いなくまた吹っ

飛ばされる。

「・・・ね、姉さん!」

とりあえず出来る限り大声で姉さんと呼ぶ。

反応が無い。

ええい、クソ!

「姉さん!!」

今度は少し大きな声。

『ううん・・・うあ・・・?』

あ、少し反応した。

よし、もう少し……。

「起きてよ、姉さんってば！」

『うぬゆう……もう少し……』

うぬゆうって何!?

いいからもう起きてよ!!

「姉さん、起きてっつて!!」

くっそー！起きない……!!!!

画面越しだから、何もできないが目の前にいたら叩いてるところだ。流石にイライラして来た僕は、思わず大声で叫んでしまった。

「起きろー！ー！ー！っ！！！！！！！！」

「何をしてますの?」

「いやだから、起きなく……せ、セシリー」

しまった……。

あまりに起きないから、セシリーが立っている事に気が付かなかった。

そしてセシリーがモニターを確認する。

……うわぁ……良い笑顔。

その血管さえなければ、見とれてたところだ。

スッパアアアッ!!!!

……案の定叩かれた。

『あはは、あなたも大変ねえ』

誰の所為だい!?

っつてか、起きてたのか・騙された。

「信じられませんか、私が寝ている間に、そ、そのアルがそのような映像を！」

セシリーは腕を組み、ムスツとした顔で椅子に座っている。

「だから、これには深いわけがあるんだ」

「どんな理由がおりですか?」

うう……こ、怖い。

下手な事言っちゃだめだな。

って言うか、別に隠すことじゃないよね。

「……はあ、セシリー。これ僕の姉さんなんだ」

「……え？」

一瞬できよとした顔になるセシリー。

そして、画面に向かって問いかける。

「お姉さんなんですの？」

『違うわよ』

「……アルウ……!?」

何言ってるんだよ!!この状況でその嘘はいらないんだってば!!

僕はあわてて、セシリーにフォローする。

「違う違う!本当に姉さんなんだってば!!!」

『私、こんな人、知らない』

知ってるでしょう!!

更に眼光鋭くなるセシリーに半分涙目の僕を見てようやく姉さんが
本当の事を言ってくれた。

『ウフフツ、面白いわねやっぱり。弟弄りつて癖になりそう』

「え、じゃあやっぱりあなたは……」

『ええ、私はローラ・サウスバード。アルデイの姉のね』

ようやく納得したようなセシリーを見て、僕はホッと息をつき、
ナヘナと部屋の床に座り込む。

全く、何だってこんなに疲れなきやいけないんだ……。

っていうか姉さん……頼むから上の服ぐらい着てよ。

そんな事を考えいるうちに、察しのいいセシリーが気付いたようだ。

「あの、アル?私を連れてきた理由ってひょっとして……」

そう、彼女を僕の部屋に招待したのは、姉さんと会わせるため。

まあ連れてきた方法はともかくね。

前にセシリーの話をした時、言われたんだよね。今度紹介してくれ
って。

『あたしがあなたに会いたって言ったのよ。それであなたがセシ

リアちゃんね』

「は、はい」

『ふうん……』

姉さんはまじまじとセシリーの顔を見ている。

実のところ姉さんは、セシリーがあの女性実業家についてきた少女と云うことぐらいしか覚えていないらしい。

それも幼いころだから、今の成長したセシリーは初めてみるのだ。

「あ、あの……」

『綺麗ね、アルデイもそう思わない？』

「え!？」

いきなり話を振られてびっくりしてしまう。

完全に油断していた……。

『アルデイ、失礼よ』

「ご、ごめんなさい……」

姉さんはセシリーの方を向くと、なぜかしみじみとした顔で腕を組んだ。

『あなたも、苦勞するわね……』

「……ええ、それはもう」

なんで？

なんであの二人は、そんなところで共感しちゃってるの？

互いにうんうんと頷きながら、話はまたセシリーの事へと戻っていき。

『そう言えば、セシリアちゃんアルデイのISコーチしてくれているそうね、どうかしら弟は』

「そうですね……」

これは僕も興味あるね。

顎に手を当ててしばらく考えているセシリーの横顔を僕は、ジッと見つめる。

そしてセシリーコーチの短評が始まった。

「アルは基礎的な事、つまり射撃に対する適正は高いと思いますわ。

ただ、ISの特徴をつかんだり、何かを感じ取ったりという感覚的な部分はまだまだ未熟と言わざるを得ないかと・・・まあ、このあたりは経験を積んでいくしかないと思いますけど」

「つまり

『応用の効かない鈍感男ってことかしら』

「・・・ま、まあ簡単言ってしまうば・・・そう・・・ですわね」
姉さんのド直球な物言いに若干濁すセシリー。

あのね、僕だつて傷つくんだよ。

『でもまあ、基礎がそこそこしっかりしているのなら、まあ良しとしましょう』

一応姉さんから及第点のコメントは出たが、次の発言が僕を焦らせる。

『それと、アルディ。最近？ストライク・バーディ？からデータが送られてこないんだけど・・・』

何かあったのかしら？』

これにはセシリーも僕同様にビクツと身体が反応した。

「あ、いやあ・・・その」

「ええと・・・」

僕はセシリーと、一旦姉さんのモニタリング出来ない位置へサツと移動すると、声をひそめる。

「どうしよう、セシリー・・・僕のこんななんだけど」

「そうした責任は私にありますけど・・・さ、流星に開発者に見せる・・・勇気が出ませんわね・・・」

こんなのとはそう、ラウラによって真つ二つにされているのだ。実際まだ起動できるかさえ、教師陣でさえわからない状況だ。

確かに開発者の姉さんに見せれば、何かしら分かるかもしれないが、かと言ってこの愛機の惨状を見せるのも気が引ける。

『アルディ、セシリアちゃん？どうしたのかしら。あ、ひよっとしてメンテナランス中とかだった？』

一瞬これは使えるとも思ったが、ダメだ相手はあの姉さん。下手な嘘は簡単にバレるに決まっている。

でも、見せるには……。

ああ……

はあ……ふう……。

くそ。

僕は観念して姉さんに、？ストライク・バーディ？をかざしてみせる。

それを見て姉さんは、やはり驚いていた。

『アルディ、それ……真つ二つなのはなぜ？』

「あ、いやこれは……その、ちよつとした事故で……ねえ」

「え、ええそうですね……事故でその……おほほほッ」

一気に怪訝そうな顔になる姉さんだったが、僕は次の言葉を言われる前にと、

ほとんど間髪いれずに姉さんに尋ねた。

「姉さんこれ、使えるかな？」

一瞬ジト目で睨むが、姉さんはすぐに頭を切り替え少し考えた後、予想通り難色を示した。

『はつきり言つて、分からないっていうのが実際のところね。まあ下手に起動しないっていうが一番安全でしょうけど』

要するに、どうなるのかは分からないが、出来れば安静に置いておいた方がいいってことか……。

『はあ……にしてもねえ……。これは予想外だったわ』

「僕だつてそうだよ……」

「申し訳ありませんわ」

実際ISが待機状態で破壊されると言うのはかなり稀なケースらしい。

そりゃそうだろう。

たいてい戦闘ぐらいでしか破壊されない代物だ。

それが展開もせず、真つ二つ。

見た感じ姉さんも、このケースは初めてっばいね。

』とにかく、そっちで一度見てもらってこっちにもう一度連絡ちょうだい。対策は考えておくから』

「うん、ありがとう姉さん」

「お願いしますわ」

』さて・・・と。アルデイ、あなたはちょっとどこか行ってなさい』急にそんな事を言い出す姉さん。
どこかって・・・。

「あの僕の部屋なんだけど・・・」

』良いから、ここからはちょっと、女の子同士の話よ』

女の子って・・・。姉さんもうすぐ・・・

』ん？』

・・・何でも無いです。

凄い笑顔でこっち見られた。

やめようトラウマになりそうだ。

』ほらほら、変な話はしないから、ね』

姉さんは更に僕をせかす。

こりゃ出てかいかないとアレか。

言いあっても、時間の無駄だね。

僕は渋々立ち上がると、部屋を後にするのだった。

』さて・・・邪魔者が出いたところぞ』

邪魔者って・・・とセシリアは思う。

どちらかと言えば、自分が部屋にお邪魔してるのだから、その言葉

は自分に当てはまるのではないだろうか。

だがそんな事気にも留めずにローラは言葉を続ける。

『さて・・・ふんズバリ聞いわね』

「は、はい・・・」

セシリアは少し緊張する。

部屋の主を追い出してまで自分に話とは一体何なのだろうか。

『あなた、アルディの事好きなの？』

「ええっ!?!?!」

思わず大きな声を上げてしまい、すぐに両手で口元を押さえる。

『ウフフツ、どうやら図星っぽいわね』

「うう・・・は、はい」

セシリアはゆっくりと、頷くと恥ずかしさのあまりうつむいてしまった。

『あなたって、本当に可愛いわね。外見とのギャップが特に』

外見との？

そんな事初めて言われた。

それにローラは、女性が見ても見とれてしまうぐらい魅力的な女性だ。

そんな女性に可愛いと言われて、嬉しくないはずはないがセシリアの顔はますます赤くなってしまった。

『まあ・・・好きなのはわかったけど。お姉さん気になるのはあの子のどこが好きなのってことなのよね』

「はあ」

『その人を好きになるってことは、少なくともどこかに魅力を感じたからだと思わない?』

「それは、確かに」

会話しながらセシリアはふと考える。

今まで考えたこともなかった。

アルディのどこが好きなのか・・・。

・・・ぜ、全部という答えはアリなのでしょう・・・。

はっ、いやでもそう答えると節操のない女と思われるかもしれないわね……。

実際セシリアはアルディのここの部分と言う物に惹かれたわけではない。

会った時は忘れていて少しショックだったがすぐに昔の事も思い出してくれて、そしてふたを開けてみれば、彼は昔から何一つ変わっていないかったという事がたまらなくうれしかった。

彼の声、彼のちょっと嘘つきな性格、彼の笑顔、彼が手を握ってくれた時の温もり。

そのすべてがセシリアにとってはアルディ・サウスバードであり、彼女が好きな男の子なのだ。

だからどこか……と言われても中々困ってしまう。

『うーん答えられない？……魅力ないのかしらあの子』

「い、いえ違います、そうではありません！」

答えに窮していたセシリアにローラがわざとらしくせかした。

セシリアも釣られてしまったと思いつつも、それを必死で否定する。

顔を真っ赤にして声を張り上げる、セシリアの様子を見てローラは笑っていた。

『フフフツ、やっぱりあなた可愛いわ』

「……あう」

セシリアは少しはしたなかつたかなと自問自答する。

だが、そんなセシリアの考えとは裏腹にローラは優しく言葉を投げかけた。

『ちゃんとわかってるわ。あの子をちゃんと見てくれてありがとう。』

「……」

「……いえ」

『あの子、あたしの影響とはいえ結構難儀な性格してるでしょ。それが少し心配ではあったのよね』

「大丈夫ですわ。アルは意外と人気者ですよ」

それが少し、悔しかったりする。

本当なら独り占めしていたいのだが。

『あなたも大変ね、あの子鈍感だし。振り向かせるのは骨が折れるかもよ?』

「大丈夫ですわ、私こう見えて我慢強いんでしてよ」

セシリアは自信ありげにはっきりと言う。

ローラはそれを黙って、それでいて優しそうな目で見つめていた。

ああーあ。

部屋を出されたはいいけど・・・
どうしよう。

部屋の前で立つてるのもなんか変だし。

かといってセシリアを置き去りにどこか行くのもなあ。

僕は若干手持無沙汰に、寮の廊下を歩いていく。

文字通りあてのない旅である。

・・・ふう。購買でも行こうかな。

商品を見るだけでも時間はつぶせるだろうし。

と、言う事で僕は行先を購買に決めた。

「いらっしやいませ」

こちらの学園の購買は、しっかりとしたチェーンがテナントとして入っているのが特徴だ。

そこら辺は作画は国立だろう。

僕は中をぶらぶら見て回る。

そうだ、ジュースでも買おう。

僕はスツと、冷蔵ケースの取っ手に手を伸ばす。

すると、丁度そこへもう一人の手が重なった。

「おっ？」

「む？」

僕はその手の持ち主を、目で追う。

するとそこには、銀髪、眼帯の少女が一人。

「ラウラ？」

「アルデイか。すまない、先に開けてくれていいぞ」

その口調に、初めて会った時の刺々しさは無い。

何があったかは知らないが……いやって言うかどんな心境の変化なのだろう。

あんなに、嫌っていた一夏に口づけまでして……。

でもまあ……いいや。

フレンドリーに接してくれてるのに、こちらからそれを壊すこともないだろう。

「そりゃ、どうも……」

僕は一番上の柵から百パーセントのオレンジジュースをセシリアの分も合わせて二本取ると、

ラウラに場所を譲った。

さて、お会計お会計。

レジへ行く途中でチラツとラウラを振り返る。

すると……

「ん~~~~ツ~~~~んん~~~~!!!!」

ラウラは背伸びをして一番高い柵に手を伸ばすが、後少しの所で届かない。

……まあ小さいからね。

最初はまあ頑張つてとそのままレジへ足を運びかけたが、後ろからするラウラの声に後ろ髪を引かれてしまう。

ああ……つとに……。

僕は何度か迷った挙句、ジュースコーナーに戻るとラウラに尋ねた。

「何が取れないんだい？」

「べ、別に取れないと言うわけではないぞ……その少し高いだけ

で」

「それが取れないっていうんでしょ。ほらこれでいいの？」
僕はヒョイツとリンゴジュースを取るとラウラに手渡した。

「あ、ああ・・・すまない」

ラウラはそれを戸惑いながら受け取ると、礼を言う。
ほんと、どんな心境の変化だろうね。

また同じような疑問が頭をよぎるが、こんなところで聞くわけにも
いかない。

それに、ま、何にせよ大人しくなったならそれでいいじゃないか。

僕は今度こそ、レジへ足を運ぶ。

そしてお金を支払って、購買が出る直前。

「お、おい！待て」

ラウラに呼びとめられた。

僕はふりかえる。

するとそこにはリンゴジュースをこちらに向けてポーズを決めるラ
ウラがいた。

ポーズだけ見れば、結構面白いが顔は真剣そのものだ。

「お前に話がある。今日のそうだな・・・二〇時頃に寮の中庭まで来
てくれ」

・・・これは何？

・・・やっぱりあのペットボトルの件許してませんよって遠まわし
なアピール？

・・・でも、あの真剣な顔は。

僕は少し考えた後、ラウラに答えを返した。

「二〇時だね」

「ああ」

「分かったよ」

互いに短く答え、その場を後にした。

・・・にしても、話ねえ。

ラウラからの話か・・・。

まあなんか良い話じゃなさそうだよな。
僕は嫌な予感にかられつつ、セシリーの下へと急いだ。
流石にもう、話終わってるだろうし。

ガチャツ

部屋を開けるとそこには、まだ会話を続けるセシリーと姉さんがいた。

「……本当に女の人ってよく喋るなあ。」

「って僕、アメリカから画面越しに出てけって言われたんだっけ？
今考えるとえらい遠距離から言われたんだね。」

「とりあえず僕は、入ってしまったものは仕方がないから、？二人？
におずおずと聞いてみる。」

「あの、もう大丈夫だよな？」

「あら、アル、いつ帰ってきましたの？」

『話に夢中になっちゃったわね』

「どうやら二人とも、そもそも僕に気が付いていなかったようだ。」

「……なんか、凹むなあ……。」

「それで、話はもう済んだの？」

「ええ、ほとんど」

『アルデイ、セシリアちゃんの事大事にしなきゃだめよ？』

「……え？」

「あああッ、それは以上はあ〜〜!!」

「あわてて姉さんの口をふさごうとするセシリー。」

「ただまあ、モニター越したから、姉さんは喋れちゃうけどね。」

「だが、姉さんも姉さんで、話せるのにニコニコ笑ってそれ以上口を
はさまない。」

「……何なんだ？」

『ああ、そう言えばアルデイ』

「ん、なに？」

僕はセシリーに場所を変わってもらってPCの前に座る。

画面越しの姉さんの顔はいつになく真剣で、一体どんな話が飛び出すのか分からないぶん、変に背筋が伸びてしまう。

『……あなた……もうすぐ臨海学校ですってね』

「え、あ、あぁうん」

そう言えばそんな事書いてあったなあ。

貰ってからはほとんど確認してない、年間計画表をなんとか頭に思い浮かべる。

……なんとなく……書いてあった気がする、うん多分。

『もう、色々買い物には行ったの？』

「買い物？特に必要なものは……それに色々旅行鞆に詰め込んできたからだいじょうぶ……」

『甘いわ!!!』

うわ、びっくりした！

多分イヤホンしてたら、鼓膜破れてたね多分。

姉さんは、腕を組んで頭を左右に振って今にも？やれやれ？と言う声が聞こえてきそうだった。

『やれやれ……我が弟ながら情けない』

ほら聞こえた。

って言うか、何か必要なものがあつたかなあ。

水着は……別に良いし……。

日焼け止め？

僕そんなの気にしないし。

「別に欲しいものなんて何も」

「……でも、セシリアちゃんはあるわよね？」

唐突に話をセシリーに振る姉さん。

一瞬の戸惑いの後、何かを感じ取ったのかセシリーは勢いよく首を縦に振った。

「はい、はいッ、それはもう！買う物が多すぎて、どなたかの手を借りたいぐらいですわ！」

そ、そんなに・・・!?

女の子って、色々準備が凄いつて聞いてたけど臨海学校行くだけでもそんなに買い物するものなのか。

『あらら、それは大変ね』

「はい、大変ですの」

なんとなくわざとらしく感じるのは気のせいだろうか。

まあ、考えすぎも良くないか。

『と、いう事よ』

「・・・はあ、荷物持ち?」

『まあ、当たらずとも遠からずよ』

姉さんはウインクすると、そろそろ切るわと言って一方的に電話を切ってしまう。

・・・よくよく考えれば、なんだか色々凄く強引に決まったような決まっではないような・・・。

僕は、チラッとセシリーの顔を見る。

その顔は、買い物へ行くことへの楽しさからか、凄くニコニコしている。

まあ、荷物持ちでも何でも・・・。

僕は覚悟を決めると、机の片隅に置いてあったスケジュール帳を取り出す。

「ええと・・・今週末が良いかな?」

「あ、あの、本当に一緒に行ってくれるんですの?」

さっきのニコニコから一転なぜか、微妙に不安そうな顔でこちらを見る。

女心と秋の空って言う言葉が日本にはあるらしいけど、それはそれでとてもうまい例えだと思う。

あ、ちなみにセシリーの母国イギリスでは? A woman's mind and winter wind change of ten? 女心と冬の風って言うんだって。

まあそれはさておき。

「何言ってるのさ、さつき誰かの手も借りたと言ってたばかりじゃないか、まあ僕はそんなに力持ちじゃないけど、荷物持ちぐらいなら出来るさ」

「アル………。フツそれじゃ、お願いしますわ。」

日程ですが先ほどので大丈夫です。それと集合は何時にしましょう？」

「ん〜。どうせ街に行くんなら、他のところも見て回りたいよね……。じゃあ十時ぐらいに部屋に迎えに行くよ」

「ええ、それではお持ちしておりますわ」

セシリーは立ち上がるとドアノブに手をかける。

「あれ、もう行っちゃうのかい？」

「え、ええ。その……ちょっと用事を思い出しましたの」

「あれ、暇を持って余していたんじゃない？」

「と、とにかく、買い物楽しみしておりますわッ！」

セシリーは叫ぶように言うと、足早に部屋を後にした。
……うん。

やっぱり女の子って？ A woman、s mind and winter wind change often? だね……。

こ、これって……デート……ですわよね！！

セシリアは表面上いつも通り上品な足取りで部屋に向かっていたが、今にもうれしさで、叫びたい衝動にかられていた。

ローラさんがせっかく作ってくださったチャンスですもの、必ずモノにしなればッ！

セシリアはその衝動をなんとか抑え込み、

心の中で大声チャンピオンも真つ青なほどの声で叫んでいた。

あ~~~~、でもどうしましょう！そ、その、そうですわね。

人生何があるか分かりませんものね・・・じゅ、準備はちゃんとして行かないと！

セシリアは自分の部屋に戻るとベッドの上に滑りこむ、

どうやら相部屋の女子はいないようで部屋には自分ひとり。

それを確認すると、セシリアはさっきまで我慢していた喜びを爆発させる。

「あ~~~~もうどうしましょう！！これは間違いなくデートですわ！！

アルから、誘われたわけではないのがちょっと残念ですが、でもこれは絶好の機会ではありませんか！！」

もうはたから見れば救急車を呼ばれかねない。

だがセシリアはそんな事お構いなしで、右へ左へベッド上を転がる。

「うまく行けば、あんなことや・・・こんな事まで・・・キヤー！ーアルそれはダメですわー！！」

その時だった。

ガチャッ！

っは！！

セシリアは我に返る。

どうやら相部屋の女子が帰ってきたようだ。

セシリアは周囲を見渡す。

さっきまでの自分の行動の所為で、きちんとベッドメイクされた自慢のシーツはしわくちゃになり、

掛け布団もずれ落ちかかっている。

仮に平静を装っても、このベッドの乱れ具合は明らかにおかしい。

「と、とにかくすぐに直しませんと・・・ってきやあッ！」

セシリアは、あわてて起きあがるうとするが、

足にシーツが絡んでそのままベッドから転げ落ちてしまった。

それに引っ張られてシーツが自分の上に覆いかぶさる。

「・・・何やってんの？」

そして丁度そこを相部屋の女子に見られてしまった。

「いえ・・・特に意味はありませんわ」

その女子はシートから返ってくる返答に、どうしたらいいのかわからずしばらく互いに無言の時間を過ごした。

時刻は二〇時。ラウラとの約束の時間だ。

僕は中庭まで流れてくる海の風に心地よさを感じながらラウラを待つ。

しばらくして無音の中庭にドアの開く音が響いた。

「すまないな、遅れた」

「いいや、僕も今来たところだから」

二人とも形式的なあいさつを交わす。

そしてまた沈黙。

・・・にしてもラウラの話ってなんだろう。

やっぱり、あのペットボトル？

・・・だとすれば、相当根に持つタイプだなあ。

「・・・その、今日はお前に謝らなければと思っただんな？

僕は想像していたのと違う答えに思わずキョトンとしてしまう。

どうやら本当に僕は姉さんがセシリーの言うように、想像力とかの感性が欠如してるのかもしれない。

「謝る、なんで？君何か僕にしたかな」

「お前の姉の事だ」

それedyouやくピンと来たぞ。

そうだ、ラウラは姉さんの事を馬鹿にしたんだ。

もう踏ん切りもついて、自分の中じゃ片付いた事だっただけに思い出すのに時間が要ったけど。

「本当に、すまなかった」

まっすぐに、素直にラウラは頭を下げる。

その思いに嘘偽りは無い。それはいくら鈍感な僕でもすぐにわかった。

「きょうか・・・織斑先生から聞いたのだ。お前の姉の事を」

「織斑先生から？」

思いがけない経路だな。

確かに姉さんの事は知っていて当然だとは思うけど、織斑先生が自ら姉さんの事を話すとは意外だった。

「織斑先生も認めるほどの人物だったのだな」

「・・・そうなんだ」

「ん、お前は何も聞いていないのか？」

「まあ、聞いてはいたけど、そういう肯定的な意見は久しぶりかな。ほら織斑先生って凄く人気もあるし、聞く事聞く事ほとんどが良い意見ばかりじゃない。でも、僕の姉さんの事聞くと、大抵は知らなかったり知っていても悪評がほとんどだったから少し驚いちゃってね」

この学園に入ってからと言うものの、織斑先生の凄さや人気は目を見張るものがある。

前にも行ったが、この学園の教師陣は、ちょっとは名の知れた元国家代表なんてごまんといえるのだ。

だがその中でも、飛びぬけて高い実力と人気を持ち合わせているのが、織斑先生だった。

まあ、他国の代表なんて優勝でもしない本国以外じゃ、注目されないだろうけどそれでももう少しは知ってるかと思ってた。

僕たちは話しながら、中庭にベンチに腰掛ける。

「そうか、でもお前はそんな姉が好きなのだろう？」

「まあね」「だとしたら、やっぱり私はお前に悪い事をしてしまった」

「もう良いけど、確かにあの時はカツと来たけど・・・もう終わった事だしね。」

フフツ、僕は根に持つタイプじゃないんだ」

僕は背もたれと肘かけに身体を預け、ラウラに半身の体勢になる。リラックスした体勢でラウラに微笑みかけるがラウラの顔は晴れない。

「・・・織斑先生から他にも色々と聞いたんだ。お前があのイギリス人に自分の思いを託してトーナメントを欠場したと言う事も・・・」

「そうなんだ」

「そして、その事を私なりに色々考えてみたんだ。でも、答えはいつも同じだ。私ならトーナメントにも無理やり出場していただろうし、ましてや自分の思いを他人に預けるなんて事出来なかった」

ラウラはうつむきながら、一つ一つ言葉を選んで紡いでいく。これがあの、初日に騒動を起こした少女だとは到底思えない変わりつぶりだ。

ラウラは僕の方を向き直ると、困惑したような表情を浮かべる。

「なあ、教えてくれないか？ お前は どうして、そんな事が出来たんだ？」

「どうして・・・か。うん・・・強いて言えば信じていたから・・・かな」

僕は自分の思いを意志をセシリーに預けた。

セシリーを信じていたから。

ひよっとしたら、それが出来たから僕は、今ラウラとこうして話せているのかも知れない。

思いを人に預けるのって一見すると無責任な事かも知れないけど、相手を信じなきゃ出来ない、意外と大変なことだと思う。

任せた方も。

そして任された方も。

「信じる・・・」

「そう、信じる。まあ嘘つきな僕が言っても説得力は無いけどね」

「ではそれが、お前の強さなのか？」

「どうだろ・・・強さとは違うかなあ」

うん・・・強さとは違う気がする。

これはただ単に、ぼくがセシリーを信じていただけだし、僕の力でも何でもない。

「・・・お前は強くないのか？」

唐突にラウラがそんな事を聞いてくる。

僕はそれを全力で否定した。

「強くなってるよ、多分主要なメンバーの中じゃ一番弱いんじゃないかな」

実際これまでだって、なんとか戦えてきたのは？ ストライク・バーデイ？ の性能によるところが大きい。

多分イコールコンディションでやりあえば、僕なんて瞬殺だろう。

「そうか」

「っていうか大体なんでそんな話に・・・。さっきの質問はどこに飛んでったのさ」

「いや、実は話したかった事と言うのは、これが本題なのだ」

「え？」

「実は、あのトーナメントの時・・・」

・・・はあくになるほどねえ。

不思議な事もあるもんだ。

ラウラが言うには、どこか暗い空間で一夏と話をしたらしい。

そしてそこで一夏が言った強さの理由。

それがラウラには気になって仕方が無いらしいのだ。

「一夏は、他にも強さは色々あると言っていたのだ。

だからとりあえず・・・謝らねばならんとも思っていたから、丁度いいと思って・・・お前に」

だんだん最後の方は、声がしぼんでいってしまったラウラ。

だが主要な部分は聞き取れたし、大丈夫だ。

「ふうん・・・そつか。強さねえ」

僕もそんな事、考えるのは初めてかもしれない。

何を持って強さと言うんだろう。

力？

意志？

仲間？

それとももつとほかの何かだろうか？

よくわからないが、とりあえず言葉にまとめてみた。

「僕は、強さって言うのはその人自身だと思うな」

人自身？

「うん、そう。結局強さって言うのは力を使わないといけないですよ。

でも力は力じゃない？ でもそこへ使う人が出てきて初めて力は強さになるんだと思う」

「よくわからないな」

「わからなくていいのさ、そんなの」

開き直ったような僕の声にラウラは驚いたような顔になる。

「わからなくて・・・いい？」

「ああ・・・えつとだから・・・やっぱり人それぞれな訳だし。答えは無数にあるわけだね・・・

なんて言ったらいいのかなあ・・・アハハ、ごめんね一夏みたいに旨く説明できないや」

やっぱりそれをしつかり、考えられている一夏は強いんだろうな。

僕は頭をかきながら笑う。

多分僕にも、強さって言うのはこれだ！っていえる時は来るんだろうけど。

それがいつなのか・・・。

ふむ、まあ来る時には来るでしょ。

ラウラは僕の話に耳を傾けた後、ゆっくりと立ち上がり、二歩三歩

歩いたところで止まる。

「そうか・・・そういう考え方もあるのか」

「それに、うだうだ考えていたってね。やっぱりほら、人生は楽しくなくちゃいけないでしょ。たった一度の人生なんだからさ」

「・・・楽しく・・・そうか・・・そうだな」

ラウラは振り返らない。

表情はうかがい知ることには出来ないが、声色でなんとなく落ち込んではないかと言う事はわかる。

するとラウラは、そのまま上を見上げ言った。

「フツッ、お前と話せて良かった。そうか、やっぱり一夏の言ったように色々あるのだな・・・」

私はもっと知らねばなんのかもしれないな

「この手の問題に、答えなんてある意味、一つもないんじゃないかな」

「そうかもしれん・・・。おお、そういうば、お前も専用機持ちだと聞いたぞ。

今度暇を見つけて模擬戦でもどうだ？」

模擬戦・・・ああ・・・。

模擬戦ねえ。

僕は、真っ二つの愛機を思い浮かべて、さっきまでとは一転肩を落とす。

・・・そう言えば、これ直るのかな・・・。

「ん？どうした、都合でも悪いのか？」

「いや、都合って言うより・・・その・・・」

どうしようか・・・本人に直接言ってもいいものか・・・。

僕が迷っていると、ラウラが近づいてきて僕がポケットに隠している物を興味深そうに見つめる。

「何を持っている？」

「あ、いや別に・・・何を持ってほどのもんじゃ・・・」

「見せる」

「いやだから・・・」

ラウラは半ば強引に僕の腕を引っ張る。

すると僕の手握られた？ストライク・バーデイ？が姿を現した。

「これは・・・」

ラウラはそのネックレスに見覚えがあるようだった。

てかむしろ、見覚えがあつてもらわないと困るのも確かなのだが。

「あーえと・・・これが僕のIS・・・見事に真つ二つでしょ」

僕は観念して、気まずい気分で告げる。

何で僕が気まずい気分かつて？

決まってる。

壊した張本人が無理やり引っ張り出した物が、その張本人が壊した物だったら、

誰だつて互いに気まずくなるでしょ。

少なくとも僕はなる。

「あ、ああ・・・かさねがさね・・・すまない」

「まあ・・・良いけど」

ラウラは若干顔をひきつらせながら、謝罪する。

まあ、確かに気まずいっちゃ気まずいけど、もうそれは良い。

終った事だしね。

僕はあまり根に持つタイプじゃないってのは言ったでしょ。

つまりそう言う事。

だがラウラにとってはそうでは無かつたらしい。

ラウラは再び僕の横に腰かけると、しゅんつとなつてしまった。

「それにしても、お前のだったのか・・・しかもISだったとは」

「そんなに気にしないでって、もうやっちゃったもんは仕方ないよ」

「だが・・・」

「さつきも言ったでしょ、人生は楽しくなきゃ。

まあIS学園でISが使えないっていうのは笑えないけど、

別にそれだからどうだっていうのもないしね、逆に変に気を使われる方が僕はいやだな」

「そうか・・・そう言ってもらえると助かるが」
さてと・・・良い感じかな？

僕は携帯の時計を確認するともう二時を回っていた。
ラウラとの会話も一区切りついたし。

「それじゃ、そろそろ部屋に戻るのかな」

「ああ、そうだな・・・わざわざ呼び出してすまなかった」

「さつきから、謝ってばっかだね」

「フッフ、元々そのつもりで呼び出したのだ」

僕らは軽く二言三言話して互いに分かれる。

僕は部屋に向かう道中少し考えた。

・・・ラウラ・ボーデヴィツヒ。

初対面での、イメージは最悪だったけど・・・。

このIS学園にまた一人。

個性的な生徒が？本当の意味？でクラスの仲間になったのは確かだ
ろうね。

さてさて、どうなる事やら・・・。

主に一夏が。

何にせよ、人生は楽しまなきゃね。

誰もいない廊下。

そこに僕の足音だけが軽快に、そしてどこか楽しげに響いていた。

第14話 姉さんとセシリー＝買い物？（後書き）

今日ちょっと、バイトの上司に切れかけました。

・・・切れてもゴマするしくクオリティ。

どうもしるくです。

まだまだ、水は入ってこないようです。

ヨーグルトやガスボンベは入ってきました。

あとベトナムから怪しいクラッカーも入荷です。

明らかに怪しいですが、売れ行きは好調です（え

そんな感じ。

ではまた15話で！

さよならっ！！

第15話 疑惑のジャパニーズと白き鳥

「……………はあ。」

やっぱり断ればよかったのでしょうか……。

いやいや、もうここまで来たわけですし……。

朝日がIS学園を照らす。まだ時間も早い関係で誰もいない校門前で、

一人の少年はIS学園の制服に身を包み一歩足を出しては、その足を引っこめる。

そしてその後、また何かを考えるとという行動を繰り返していた。

これが普通の学校なら、警察を呼ばれても良いレベルの怪しさだった。

それにしても……なんでこんな事。

少年は頭の中でひとりごちる。

だがそれで何が変わると言うわけでもない。

少年は息を深く吸い込むと、ゆっくりと吐く。

さて……行きますか。

少年は意を決した顔で、IS学園の門をくぐるのだった。

「ねえねえ、また転校生らしいよ?」

僕はもうその話を聞いても何も驚かないぞ。

だってラウラ以上の転校生なんてそうそう居ない。

それにだ、転校してくると言っても今回は僕たちのクラスじゃない。

それでも……

「どんな子だろうね?」

「また代表候補生かなあ」

「絶対そうだって、どこの国の子かな！」
これだ。

本当に噂話が好きだねえ。

って言うか毎度思うんだけど、女の子の情報網って言うのは一体どれほどのものなんだろう。

ひょっとしたら、一国家機関の情報網に匹敵するくらいあるんだろうか………

それは言い過ぎ？

いやでも、ねえ。

「お前、さつきから何ブツブツ言ってるんだ？」

「え？ 声に出ってた？」

一夏に言われてハツとする。

自分じゃ分からないもんだねえ。

「いやね、転校生の話」

「お前も気になるのか、やっぱり？」

「もう誰が来たって言っても驚かないよ、大体ラウラであの騒ぎでしよ。慣れたよ」

本当に、あれ以上の転校生騒ぎがあつてたまるもんか。

……まあ僕からペットボトル投げただけど。

「私がどうかしたのか？」

そこへラウラがやってくる。

どうやら聞こえていたらしい。

「いや、一夏がね。ラウラ可愛いって」

「なっ！！お前そんな事一言も………ッほ、ほつき」

この手の会話にはすぐに飛んでくる筈。

僕はそれをニヤニヤしながら見つめる。

あ、ちなみに今の筈の顔は、真正面から見ると子犬なら死んでしま
いそうなくらい怖い。

「お前………」

「シャルロットあんた抜け駆けしたの!!」

「あああ! そう言えば二人ともしばらく同じ部屋だったし……」
「そ、そんなあ〜」

皆口々にシャルロットを責め立てる。

これには流石のシャルロットもあわてていた。

何せ自分の失言からの暴動だ。

気持ちは分からなくもないけど……。

「あ、その……キスって言うか……そのうう……なんて言ったらいいのかな」

「む、シャルロット。言い淀むほど凄いキスだったのか?」

その上で更にラウラが火をそそぐ。

今気が付いたけどこの子って戦闘時は恐ろしいけど、普段はこんなにも空気が読めない困ったちゃんだったんだね……。

こりゃ一夏は大変だ……。

「お前今、他人事みたいに言わなかったか……ってこら、箒引つ張るな!」

「ええい、黙れ!! 大体なぜ私が最初ではないのだ!!」

「色々意味がおかしい事に気づけ!!」

「離さんか! 先に誰が何をしようとするの男は私の嫁だッ!」あ

あ……平和って良いね。

今の状況はこんな感じだ。

僕の右側で、シャルロットに詰め寄る女子たち。

そして僕のすぐ目の前で箒、ラウラの主要メンバーを筆頭に一夏を残りの女子たちが取り囲む。

そしてその中で唯一、僕とセシリーがいる所だけばかり平和な空間が開いている。

ほんと……平和って良いなあ。

「悪いが、その平和はもう終わりそうだ」
へ?

刹那、僕の頭は出席簿の餌食となった。

「朝から元気なのは良いが、クラス全体で何を騒いでいる！とっと席につけS H Rを始めるぞ」

織斑先生の声を聞くと、さっきまでの喧騒がうそのように静まり返る。

そしてものの数秒で皆が席についた。

それを確認して何事も無かったかのようにS H Rを始めようとする織斑先生。

「ハイ、質問があります」

「なんだ、サウスバード」

「どうして僕は叩かれたんでしょうか？」

「……分らないのか？」

「……すいませんでした」

あー下手な質問はするもんじゃない。

「以上だ。それでは今日もしっかりとな」

今日も特にこれと言った連絡はなし……

まあ、臨海学校について二、三あったけど、そんなに覚えておくような事柄でもなかった。

荷物を手早くまとめると教壇をおりていく。

だがその織斑先生を女子が呼びとめた。

「あの、山田先生は今日どうされたんですか？」

「ん、ああ。山田先生は臨海学校の下見で現地へ飛んでいる。

なに心配するな、今日一日山田先生の仕事は私が担当する。

自習だと思って喜んだやつは……覚悟しておけ」

一瞬喜びかけた女子のかをがみるみるしぼんでいく。

……にしても臨海学校か。

つてことは、やっぱり海があるんだよね。

……あんまり海には良い思い出が無いけど。

まあ、ここから海を見ても大丈夫だし。

海に入らなかつたら、大丈夫だよな。
こうして、今日も一日平凡で変わり映えのない一組の日常が始まっ
た。

・・・始まらなかった。

昼休み。

一組に飛んできた鈴が言った一言がちよつとした問題を起こす。

鈴は僕たち主要なメンバーを集めると声をひそめる。

「ここだけの話んだけどさ、今朝うちのクラスに転校生が来たん
だ」

「どんな方ですか？やっぱり代表候補生でしょうか？」

「いやさ、代表候補生うんぬんよりも・・・男子なのよ」

男子？

はあ〜それでよく今まで騒ぎにならなかったものだ。

・・・流石に慣れたのかな。

だが、その疑問はすぐに晴れた。

鈴が聞かなくても答えてくれたのだ。

「ま、うちのクラス全員で口裏合わせたしね・・・」

「夏やアルデイの時みたいになるのはウチの先生も恐れたみたい」

・・・そりゃそうだよな・・・あ、でも。

「もうばれてるんじゃないの？」

「・・・昼休みは、どうしようもないじゃない」

ああそこら辺は、もう割り切ってるんだね。

だがそうは言っても、男子は男子。

その事について、箒が腕を組んだ。

「しかし、男子か・・・。女にしか扱えないISを扱える男子が三人
も・・・」

「まあ特異なケースと言うのは、あながち少ないのかもしれない

な

「でも、ねえ」

確かにラウラの言うとおり、ひよっとしたら世界にはもっと居るんじゃないんだろうか。

って言うかISもなんか、そこらへん適当だなあ……。

「でね、問題はここからのよ」

騒ぎにならなかっただけで、意外と男子の転校って言うのは重大な問題だと思っただけ。それをシャルロットも感じたようで、鈴に尋ねる。

「まだ何かあるの？」

「あいつの使ってたISが、あたしたちを襲撃したのにそっくりなのよ……」

「……え!?!?!」

一夏と僕、そして篤とセシリーの声が重なる。

一方シャルロットとラウラは、あの時は居なかったから、何について話しているのかよく分かっていないようだった。

「ねえ一夏、何の話なの？」

「ああ、鈴が転校してきた時にな、ちよっとした事件があって……その話なんだけど」

「まあ詳しい事は大方、かん口令がしかれているのであろう。私たちも詳しくは聞くまいが……」

ラウラの意見にシャルロットも賛成のようで、それ以上一夏に聞こうとしなかった。

……でも。

どういう事だ？

仮に襲撃者だったら……わざわざ自らこの学園に入ってくる事なんて。

「ねえ、鈴。本当にそっくりなの？」

「ええ、まあ色は真っ白だったけどね」

「それだと私たちが見たものと、違うな」

「ラウラ。お前ドイツ軍に居たんだろ？ ISの塗装とかつて簡単に塗り替えられるもんなのか？」

軍ではよく、パーソナルカラーなどで隊長機を塗り分けたりするし、作戦によって頻繁にカラーリングを変えることもしばしばだ。

ラウラは軍人。その辺の事には詳しいはずだ。

「ふむ、そうだな。まあ難しくは無いぞ。極端な話、

作戦行動中に手持ちの油性ペンキやスプレーで塗装する事もあるぐらいだからな。

以前も、僚機をアグレッサーカラーにして偵察任務をこなした事がある」

なるほど。

体験者は語るじゃないけど、流石は現役軍人……。

具体例まで挙げて実に分かりやすい説明だよ。

ふむ……。

「鈴、彼に会えるかな？」

「会えるけど……会ってどうするの？」

「確かめたい事があるんだ」

鈴は一瞬怪訝そうな顔をするが、何も言わずに居場所を教えてください。

ありがとう、鈴。

さて……それじゃ噂の彼に会いに行くとしよう。

僕は二組のドアの影からひょっこり顔を出して、転校生君を見る。

その転校生は、黒髪に青色の目を持つ少年で恐らく日本人だろうか。

噂の彼は、ごく普通に二組でISの教科書に目を通していた。

そう、ごく普通に。

彼だけ。

多分彼自身意識しないようにはしてるんだろうか。

いくらなんでも、ねえ……。

だってさ。

僕は辺りを見渡す。

そこはもう黒山の人だかりだった。

もちろん女子で、その目的は噂の彼を一目見ようである。

僕は再び視線を彼に戻す。

・・・ふむ。

まあ、遠巻きに見てても仕方がない。

僕はスツとドアの陰から立ち上がると、噂の彼のもとへ。

少し・・・いやかなり目立ってしまうがしょうがないね。

「どうも」

気さくに声をかける。

すると相手も若干ぎこちなく、それなりに気さくに応じてくれた。

「ええと、こんにちは」

「ああ、そんなに固くならないで。とりあえず自己紹介をしよう」

僕は開いていた、椅子を引いて彼の向かいにこしかける。

「僕は、アルディ・サウスバード。君と同じ男のIS操縦者ね」

「はじめまして、アルディ。僕は一条 聡也。よろしく願いしま

すね」

「聡也か。良い名前だね」

僕は自己紹介を済ませると、聡也を一組へ呼ぶ。

すると今度はクラス前の軍団が一組へ移り、元々一組にいた女子た

ちも急な転校生の登場に湧きかえる。

「あれが、転校生!？」

「え、なに!？ 男の子だったの?」

「だからみんな見に行ってたんじゃない。気づいてなかったの!？」

「一気にざわつく教室の女子たちを、聡也は不思議そうに見つめる。

「皆、何をしてるんですかね?」

「・・・あれ? 気が付いていたんじゃないの?」

「そう言えば、廊下にも人がたくさん・・・」

なんだろう、同じ臭いがする。

親近感を覚えると言うか。

「あなたほど、鈍感では無いと思いますが・・・」

唐突ににセシリーの声がある。

あれえ、僕口に出したかな？

「だから、前にも申したでしょう・・・わかりやすいと」

どうやら、ちよつと本気でポーカークフェイスを学びに行ったほうが良い気がしてきた。

・・・通信教育でも出来るのかな。

「で、そいつが二組の転校生か」

僕がそんな、ばかばかしい事を考えていると転校生に興味を持ったラウラが口を開く。

ラウラってさ、刺々しさは抜けたけどそれでも言葉遣いが・・・。
もう少しフレンドリーにした方が・・・。

「はい、二組の一条 聡也です、その・・・よろしくお願いします」

「ああ、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。そしてコイツは織斑 一夏。
私の嫁だ、覚えておけ」

サラッと結構凄い事をのたまうラウラに寡たちが噛みつく。

「また、お前は！ 別にそれは必要ないだろう！！ それに一夏はお前の嫁では無いッ」

「そーよ、あんなねちよつと美味しい思いしたからってつけ上がり
ないでよね！ 一夏は私のなんだから！」

「ちよ、ちよつと鈴！？ 勝手に私物化しないで！」

「・・・どうでもいいが俺は・・・その嫁なのか？」

一夏の疑問は最もだろう。

普通なら婿だね。

アメリカ人の僕でもわかる簡単な日本語な気がするんだけど。
また騒ぎを始める彼らを余所に、今度はセシリーが自己紹介。

「私は、セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。ど
うぞよろしく」

「ラウラに・・・セシリアですね。で・・・彼女たちは・・・」
指さし確認で名前を繰り返す聡也。

だがまだまだ収まる気配を見せない、騒動に聡也は少し戸惑ってしまふ。

そこで僕が残りの四人に代わって名前を挙げていく。

「ええと、まず彼女が篠ノ之 篤」

「よろしく頼む・・・ああ、だから何度言えばっ」

「で、その横が 凰 鈴音」

「って、あたしは知ってんでしようが！！・・・だからさあ一夏はあたしの幼馴染でえ！！」

「そして、そのブロンド髪が、シャルロット・デュノア」

「あはは、よろしくね・・・んもう、いい加減にしてっば！」

そして最後に、なぜか騒動の原因の一つであるにも関わらず蚊帳の外状態の彼・・・。

ほんと、気苦労が絶えないねえ。

「んでもって、彼が僕たちと同じISを使える男子、織斑 一夏」

「よろしくな、聡也」

一夏は、喧騒どこ吹く風で聡也に手を差し出す。

そして聡也もその手をしっかりと握り返した。

「あなたの事はよく知ってますよ。ニュースで見ました」

「あ・・・やっぱりか。大体のやつに言われるんだ」

世界で初めてISを動かせた男子、織斑一夏。

それにあの織斑先生の弟って言う事もあって、結構大々的に報じられたらしい。

何せアメリカでもやってたぐらいだしね。日本人の彼が知らないわけはないだろう。

さて・・・。

とりあえず全員の自己紹介が済んだところで。

「ところでさ、君今日放課後は開いてるかい？」

「え？ 放課後、うん大丈夫ですよ」

「なら放課後さ、アリーナに行かないかい？」

「アリーナですか、良いですけど。何かあるんですか？」

そこへ一夏が、説明に入る。

「実はさ、今放課後、みんなで合同練習してるんだよ。

アルディはちよつとISが今は使えないんだけどな」

そう言えば・・・僕のIS一度見てもらわないとなあ・・・。

早くなんとかしないと、実戦経験も口々に詰めやしない。

・・・つと、今はそんなこと言ってる場合じゃなかった。

「ま、確かに僕は見学だけだよ。ほらセシリーとか代表候補生だしラウラに至っては軍人。

学べることは多いと思うよ?」

「そうですわね、まあ私の理路整然とした完璧な説明があれば、どんな操縦者も一瞬で代表候補ですわ」

凄い自信だけど、正直いつて僕はすぐに理解できなかつたけど・・・。

そんなセシリーの自信に押されたかどうか分からないが、聡也は少し考えてやがて申し出を受け入れた。

「・・・まあ、確かにそうですね。良いですよ、じゃあ放課後楽しみにしてます」

聡也はチラツと時計に目をやると、それだけを言い残して自分のクラスへと戻っていく。

ありやりや・・・もうこんな時間か。

さて次の授業の用意をしないとな。

僕はまだまだ終わりそうにない、四人を尻目に次の授業の用意を靴から取り出す。

あゝあ・・・知らないぞ。

次の授業は織斑先生なのになあ。

そして案の定、織斑先生に一発づつ出席簿アタックを貰った四人。だから、言ったのに・・・。

いや、言っていないか。

ちなみにだが、放課後その四人から僕は理不尽なげんこつを一発づつ貰う羽目になった。

言ってくればってねえ……。
理不尽すぎでしょ。

さてさて放課後。

僕たちは、アリーナに来ていた。

既に皆ISスーツに身を包んでいる。

僕はISを使えないから、制服のままだけど。

「さて、今日も始めるか」

一夏の掛け声に、ピクッと四人が反応する。

「そうだな、よし一夏今日も軽く打ち合いから始めよう」

「そうね、早速中近の総合機動を始めるわよ」

「一夏、今日はこれを撃ってみようか」

「良い心がけだ。お前にはどうも高度な機動戦術が足りていないよ
うだからな。」

わたしがみっちり教えてやるう」

一度に四人が全く別々のメニューを提示する。

そしてその誰もが、？当然自分とやるよね？という無言のメッセージが感じとれるから断りにくい。

差し出される四通りのメニューに一夏が恐る恐る、聞き返す。

「ちなみに……誰か一人選んだら怒る……よな？」

「……当然！」「」「」

「どうしろってんだよー！」

あはは、流石に同情するよ一夏。

ま、向こうは一夏に任せてこっちはこっちで始めちゃおう。

「さて、聡也。こっちはこっちで始めようか」

「はい。それで……何をしましょうか？」

「そうですね、まずあなたのレベルを見たいですわ」

「レベルですか……はあ、まあ良いですけど」

セシリーいわく、教える側としても現状でどのぐらいのレベルにあ

るのか

知っておくことは重要なことなのだそうだ。

それを知らない事には、どうやって何を教えればいいのかさえ組めないらしい。

既に鈴からの情報で自分のISを持っているという事を知っていた僕たちは、

セシリーが先に？ブルー・ティアーズ？を展開して聡也にもISの展開を促す。

「さ、まいりましょう」

「分かりました、少し待ってくださいね」

聡也は、鉄製の白いカードにキーシリンダーが付いたものを取りだす。

どうやらあれがISの待機状態らしい。

そのシリンダーに聡也がキーを差し込む。

するとキーが霧散して、それと同時に光に包まれ真っ白いISがすがたを現した。

……確かに。

確かにそれはあの時見た黒いISに酷似しているデザインだ。

工業的で角ばったシルエツトに、バックパックには四門の砲。

そして顔にはバイザーが備わっている。

だが、色は白い。

黒じゃない。

さっきまで言い争っていた一夏達も、そのISに釘付けになっていた。

聡也はゆっくりとセシリーの高さまで浮上する。

「さて、準備は良いですよ、いつもどうぞー」

聡也はバックパックから二門の砲を選びそれを手に取り構える。

「……では、行きますわよ」

こうして、セシリーと聡也の模擬戦がスタートした。

あのIS……。

どうやら色は違いますが、基本的な装備はあの黒いISとほぼ同じ様ですわね。

セシリアは一人心の夏でつぶやきながら、こちらへ砲を構える聡也を見やる。

さつき？ブルー・ティアーズ？のライブラリを参照したがあのISに関する情報は登録されていなかった。

原則この学園には新技術の情報開示義務は無いとはいえ、IS本体のデータまで無いと言うのは少し疑問だった。

アルデイの？ストライク・バーデイ？も見たすぐ後に検索をかけたから、

まだ識別番号が有効になっておらずデータを見ることはできなかった。

しかしその後再び検索をかけたらそのデータはしっかりと登録されていた。

つまり、ISを起動してそれが有効になった時点で各関係部署や各ISにそのデータが送られるはずなのだ。

だがあの白いISだけはどうしてかそれが出来ない。とにかく……妙なISですが……。

今は頭を切り替えましょう。

セシリアは一つ息を吐くとビットを展開。更にそこへ？スターライトMK??の精密射撃を加える。それを聡也は、スラスター角を調整しながら巧みに避けていく。

この前も確かこのような感じで避けられましたわね。ふとセシリアの頭にあの黒いISの機動がよみがえる。

確かに聡也の機動はそれに類似してはいるが、それでもどこかが違

っていた。

この違和感は・・・何でしょうか。

セシリアは頭の片隅で違和感を覚えながら、距離を取りつつ攻撃を続けた。

「始まったわね」

「ああ・・・」

「機動自体は何となく似ている所もあるが、変な違和感があるな...」
地上から見守る僕達は独り言のように、つぶやいていた。

聡也の動きは、確かにあの黒いISににている。だが筈の言うように何か違和感を感じてしまう。

「ふむ・・・あれが襲撃したISに酷似した機体か・・・私には別段おかしな所は見受けられんが」

「僕もだよ。やっぱり元々の黒いISを見てないからかな？」

そしてどうやらシャルロットとラウラには、特に違和感なく見えて
いるらしい。

・・・とするならこの違和感はその時、黒いISを見た人間に
しか分からないようなことなのか。

僕は再び聡也を見上げる。

聡也の戦い方は距離の素早い切り替えと上下機動を組合せた耐狙撃
機動ベース。

そこに自分の砲撃を組合せた比較的変則的なスタイルだった。

そしてその機動になってから、セシリーの手数が目に見えて減少す
る。

セシリーは紛いなりにも代表候補生、半端な機動や技術は通用しな
い。

つまりそのセシリーが攻撃の手数を減らしてまで狙わねばならないほどに、

聡也の実力は高いということになる。

さすがに実際戦っていないから正確な実力はわからないがそれでもあの黒いISに肉薄するほどの実力に加えて、似たようなIS、似たような戦術……。

細かく見れば疑うべき余地はいくらでもある。

「ねえ一夏。君はどう思う?」

「……確かに、変な違和感はあるんだけど。でもさよく考えてみれば俺たちを襲撃した犯人が本当にあいつだったとして、のこのこと転校なんてしてくるか?」

「それはねえ……引つかかかってるんだ僕も……」
そう。

そんなリスクなことを冒してまで、何かを手に入れたいのなら別だが

これまで少し会話を交わした感じではそんな感じは見受けられないし。

……考えすぎなんだろうか。

何度も言うが、似ているだけで全く同じではない。

「まあ、仮にそうだったらそんなときゃそんな時だろ? はなから疑ってかかるのはもうやめないか?」

「一夏……最近あんたアルディ化してきたわね」

失礼な鈴。

僕はこんなに神経図太くないよ。

「そうか? 俺は別に金髪じゃないぞ」

「……そういうことじゃないよ、一夏」

さすがのシャルロットも呆れて苦笑いしている。

その奥では、箒とラウラも腕を組んでため息を漏らしていた。

ただ一人、その意味を分かっている一夏だけがきよんとした顔でキョロキョロと周囲の顔を見まわっていた。

ええと……。

聡也は、セシリアと撃ちあいながら少し困惑していた。なぜなら、下の皆は気が付いていないようだがアリーナに人が集まり始めていたからだ。

なんで、こんなに人が集まってくるんだろうか。

その理由がいまいちピンとこない聡也。

と、一瞬気を逸らした聡也をセシリアのビットが襲う。

「つとと！」

聡也はそれを、宙返りで避けると手持ちの荷電粒子砲をお返しとばかりに撃ち返す。

セシリアもそれは予期していた行動のようで、難なく避けた。

「私相手に、余所見とは。随分と余裕なんですのね!!」

セシリアは一度体勢を立て直して、再びビットとレーザーライフルでこちらに迫る。

ダメだダメだ！今は集中しないと。

聡也は、頭を切り替え一気にそのビットとレーザーの雨に飛び込む。

「なっ!?!? あなた、正気ですの」

「まあ、もう大体分かりましたから」

その言葉。聡也に悪気は無い。

だが聡也には本当に分かったのだ。

セシリアの戦術が。

攻撃パターンが。

おおよその実力が。

それらが分かってからの聡也は速かった。

聡也はセシリアに肉薄すると、至近距離から左右の荷電粒子砲を二

発。

そしてそれで吹き飛んだセシリアを、真上から蹴り飛ばす。

「つく、この速さッ!!」

「さて、仕上げと行きましょう」

聡也は一度両手に持っていた荷電粒子砲を背部へ戻す。

そして同時に四門の砲のロックが解除され、聡也はそのまま勢いよく宙を回る。

ロックが外れ自由になった四門の方がくるくると宙を舞う。

「な、何を」

セシリアはようやく体勢を立て直そうかという所で、聡也の行動が目に入る。

セシリアが見たものは、くるくると回りながら綺麗に横一列に並ぶ四門の砲だった。

そして次の瞬間、セシリアへほぼ同時に四発の砲撃が直撃する。

「ああっ!!」

激しい衝撃を受けながら、アリーナへ叩きつけられるセシリア。

この瞬間、聡也の勝利が決定した。

・・・ま、負けちゃった。

僕は信じられない物を見ている気分だった。

?ブルー・ティアーズ?はセシリーが地面にたたきつけられてからすぐに霧散する。

セシリーは、?ブルー・ティアーズ?が衝撃の大半を受け止めてくれたようで大きな怪我もなく、

すぐに立ち上がった。

僕たちは、セシリーのもとへ急ぐ。

「セシリー大丈夫!?」

「え、ええ・・・少し腕を強く打ちましたが、問題ありませんわ」
「そう、良かった」

僕は、怪我が無いようだという憶測が、怪我が無いと言う確証に変わった事に安堵の表情を浮かべる。

そこへ、ISを待機状態に戻して不安そうな顔で聡也もやってきた。

「あの・・・大丈夫でしたか・・・?」

「ええ、何ともありません。にしてもまさか私が敗れるとは・・・不覚でしたわ」

「油断するからよ、あんたって大体相手を甘く見て負けるタイプよね」

「それを言うなら鈴さんだって、一夏さんと初めてのクラス代表戦では危なかったようですけど?」

「ばっ、馬鹿言つてんじゃないわよ・・・あれは・・・そう、あそこから始まるあたしのターンだったのよ!」

セシリーの嫌みたっぷりな口調に、顔を真っ赤にして怒る鈴。

だが、他のメンバーはそんな彼女たちよりも聡也のISが気になるようだった。

「でも、すげえよ聡也。セシリアに勝つちまうんだからな」

「いえ・・・そんな事は」

一夏の若干興奮気味な声に対して聡也は謙虚に振る舞う。

だがそこへ更にラウラが賞賛した。

「謙遜することはない。練習といえども、勝ちも勝ちだ。胸を張ればいい。」

そしてセシリアはもっと精進すればいい。ただそれだけの事だろう。ラウラは鈴と言い争うセシリーを横目で見て、ため息混じりに言った。

それを見て苦笑する聡也。次に口を開いたのは篤だった。

「そう言えばお前のアレは、どこ製のISなんだ?」

どうもどこの国のISにも似つかんフォルムだが」

「専用機だからじゃないの？」

「だがシャルロット。お前のリヴァイヴのカスタム機だって原型を止めていないだろう？」

そう考えるとコレもどこかの量産ISのカスタム機ではないのか？」

箒の疑問は当然だった。黒いISもそうだが、明らかにISと言
うには

メカメカしく工業製品のような無骨さがある。

全てのISがそうだとは言わないが、異質な外観であるのは事実だ
った。

聡也はあたかも、そんな質問を予期していたかのように何の言葉の
詰まり無く饒舌に答えた。

「僕のは“ホワイトアウル”」

「世界でたった“二機”の、ISではないISです」

第15話 疑惑のジャパニーズと白き鳥 (後書き)

三重ではまだまだ桜が咲いてないのに、名古屋とかもう見頃ですもんね。

どうもしるくです。

今回初めて途中執筆を携帯から行ったので、少し文章がおかしかったりするかもしれませんがご愛嬌で。

さて、次はちょっとブレイクで短編を書くつもりです。楽しみな方そうじゃない方も、お楽しみに(え

では16話が短編か。

どっちかでお会いしましょう！

さよならッ!!

少し執筆してみてわかったんですが、次は普通に16話で行きます。

短編はまたどこかで

第16話〜似て非なるもの〜

一号機：起動失敗

二号機：起動失敗

三号機：起動成功も、定格出力で安定せず廃棄

四号機：同様のトラブルにて廃棄

五号機：初の定格出力運用に成功。機動試験中に空中分解。搭乗者意識不明の重体

六号機：上記のテストを踏まえ安全性を考慮しすべての問題をクリア。

以後本機を

甲式と命名

七号機：同様に成功乙式と命名。

これより以降の試作機の開発の計画は無し。

〜中略〜

試験運用期間終了。以後両機登録名を

甲式：ホワイトアウル

乙式：ブラックアウル

と命名し、両機を専門研究機関のあるアメリカへ委譲するものとする。

以上、疑似ISプロジェクト『N-Development Technology』pp45-47より抜粋。

「ISでは……無い？」 篤が怪訝そうにつぶやく。いや篤だけではない。

この場にいる誰もが同じ様な顔をしていた。当然だ。

だってこの世でISに対抗するのはISだけであり、現にさつきセシリーを撃墜して見せた。

そんな物がISではないと言われて、はいそうですか……と言うわけにはいかない。

「ああ、いや、厳密に言えば全く異なるってわけじゃないんですよ。ただ……そう、似て非なる物というかなんというか」

聡也も聡也で、一斉に怪訝な目を向けられて困惑しているようすで語尾を濁しながら弁解する。

「似て非なるもの……か。だがそんな物ドイツに居るときにも聞いたことがないが……」

「まあ、開発自体が表には出ませんでしたからね」

「んん？ でも、ならそれをこんな所で話しちゃって良いの？」

シャルロットの質問に聡也は苦笑いを浮かべ、頭をかいた。

「あはは、もう言っちゃいましたし、それに別にコレはもう隠すような事柄じゃありませんから」

どういう事だろう。

通常どの国のISも機密情報って言うのは一つ二つあるもので、詳細は開発した人間や操縦者以外には原則伝えられない。

だが聡也のニュアンスだと、まるで“ホワイトアウル”に

何の機密情報も秘匿性も無いって聞こえてしまう。

「確かに、全くないと言えば嘘になりますけど、

Nの技術自体もうこれ以上の進展は望めませんからね。

そんな事を隠した所で何の得もないんですよ」

「あ、ちよつと待って聡也。聞き慣れない言葉が飛び出した。

そのNの技術っていうのは何だい？」

「ああ、確かにISでは使いませんよね。

Nの技術っていうのはいわゆる“ホワイトアウル”の技術”ってことです。

僕のは、ISに似てる物ってことでIS・Nっていうんです」

「IS・N？何だよ、そのNってのは」

「NearのNですよ」

一夏の質問にサラッと答える聡也。

なるほどね。

近いって意味でNか。

僕も含めて皆ようやく納得した様子で何度か頷くが、

それを聞いて心中穏やかじゃないのもまた事実だった。

「ねえ、ちよつと待ちなさいよ。聡也、そのIS・Nってのは誰でも使えるわけ？」

今までだんまりだった鈴が少し声のトーンを落として口を開いた。

「基本的には、操縦者登録をすれば大抵の人には。ISに近いと言っても駆動システムやそもそも使われている技術が大きく異なりま

すからね」

「では・・・やはり」

セシリーもそれを聞いて、呟きながら考え込む。

「ん？ 皆さんどうかしましたか？」

その様子に疑問を感じ、今度は聡也が怪訝な顔になる。

多分、鈴もセシリーも考えていることは同じだろう。

「聡也、あたし達ね。多分そのもう一機のIS・Nと戦ったことあるわよ」

「え!？」

「そのもう一機というのは、黒い同型機ではありません?」

「一気に顔つきが険しくなる聡也。」

「恐らく凶星なのだろう。」

「だが特に、言葉を発することなく聡也は黙って耳を傾ける。」

「あたし達、代表候補生でさえ手こずった無人機を、ものの数分で再起不能にまで、追い込んだ。」

「その後も? 打鉄? を何十機と先頭不能にしてたし。」

「信じられない戦闘能力と実力だったわ」

「ええ・・・調子が悪かったとはいえ私の攻撃が一度も当たりませんでしたものね。」

「まあ・・・今回ですけど」

「声が最後になるにつれてしぼんでいくことから、ショックは相当大きかったようだ。」

「セシリー・・・まだ引きずっていたんだ・・・。」

「二人の意見を聞いた聡也は、しばらくあごに手を当てて考え込む。」

「この様子からも、もう間違いなく聡也は何かを知っているとみて間違いないだろう。」

「むしろ、そのために転校してきたとも考えられるし。」

「うーん・・・おかしいですね」

「何がおかしいって言うの?」

「本当にその黒いISは、無人機を撃墜した後何十機というIS相手に大立ち回りを演じたんですか?」

「聡也の疑いに対して、鈴とセシリアが心外の声を上げた。」

「何よ、あたしたちの言ってることが信じられないって言うの?」

「そうですね! 私たちの言っていることにうそ偽りは無くてよ!」

「セシリーは目で一夏と僕に同意を求めてくる。」

「僕たちはそれにうなずくと、鈴もそれを確認してほら見なさいよという顔で聡也をにらみつけた。」

「い、いや別に信じて、ないってわけじゃないんですよ・・・ただ・・・」

「ただ・・・何よ？」

「普通に考えて、IS-Nのスペックは最大稼動時でもせいぜい通常のISの能力の半分以下ぐらいの出力した出せないはずなんです・・・。」

それなのに、いくら日本の量産機とはいってもそんな何十機を相手になんて」

「ちょ、ちよつと、それ本当なんですの!？」

これには僕やセシリーたちあの場にいた人物だけじゃない。

その場にいなかったラウラやシャルロット間でもが驚いていた。

なぜならその事実は、その操縦者がとてつもなく実力が高い人物であるということ

暗に示していたからだった。

・・・そう思うと僕たちよくあれに勝てたよね。

「少し良いか？」

驚きのあまり少しの間、沈黙が流れた後

それまで腕を組んで、ただ聞いているだけだった箒がズイッと前に出た。

「ええ、何ですか？」

「とりあえず、その黒いISのことはなんとなくわかった。

だが忘れてはいないか？ あの時ISはもう一機いたことを」

あ、そういえば。

確か紫色の戦槍持ったISだったはずだ。

IS-Nの話が、結構大きなことだっただけにポンツと頭の中から飛んでしまっていた。

「それ、紫色のISじゃなかったですか？」

「・・・ということを知っているんだな」

箒の、尋問のような鋭い声に聡也はゆっくりと頷く。

「あのISは、紫香楽製近接強襲型IS？紫燕？。操縦者は・・・
・・・」聡也は一呼吸おいて、息を整えると意を決して言った。

「僕の姉さんです……」

とある部屋の入室で、青い制服に身を包んだワインレッドの髪に赤い目を持つ少女が椅子に座って暇そうにぐるぐると回っていた。

そしてあくびをひとつ。
「……やるのがなさ過ぎて暇でしょうがないときはいつだってある。」

だがそうは言っても、？しなければならぬ仕事？は山積みだ。

「……大体試験運用のデータを送れって言っただけで、んでこんなにレポートが必要なんだよ」

少女は、傍らの紙の束を見て吐き捨てるようにつぶやくとまた大きな、ため息を吐いた。

ガチャリ…

不意に後ろのドアが開く。

そこには、同じ青い制服に身を包んだ少年が立っていた。

その少年を見るや、少女の顔がパツと明るくなる。

「聡也！」

ガタツと勢いよく立ち上がる。

椅子が倒れるのも少女は気にしない。

少女は少年に駆け寄り、肩に手を置くと優しく笑いかけた。

「大丈夫だよ、姉さん。ただの検査なんだからさ」

「い、いや……けどよお」

検査という言葉に少女の顔が曇る。

「あたしは、お前が心配だ……」

あいつら・・・特にあの女、時々訳わかんねえ事しやがるし」

「大丈夫だって、博士を信じようよ」

少年は屈託のない笑みを少女に向ける。

そんな笑顔を見せられたら、さすがに心配そうな顔は見せられなかった。

「まあ、何があっても大丈夫だって。

聡也の事はあたしが守るからよ！　この紫香楽　聡華がな」

少女は高らかに宣言して、ニカツと笑う。

それを見た少年も同じ様に笑顔で答えた。

「うん　頼りにしてるよ・・・姉さん」

最後の一瞬だけその笑みが、不適なものだと言うことに、少女は気がつかなかった。

衝撃の告白が、たくさんあったアリーナから場所を移して、僕たちは食堂へと来ていた。

つてか最近、ここに集まること多いよね。

聡也だけは、機体の整備があるとまだピットにいるが、主要メンバーはそろっている。

「・・・つてかさあ、何か疲れたわあたし。つていうか自主練どころじゃなかったし」

「実質、IS起動したのセシリーだけだもんねえ。ああ、あと聡也か」

「起動したといつても、まあ無様だったがな」

篝のジト目と嫌味たっぷりな声が、セシリーを貫く。

声は発しなかったが、おそらく今の発言でセシリーは心の中で

「ぐはっ！」的なことは叫んでいたと思う。

「ほらほら、箒もセシリアを、いじめないいじめない」

「じゃ、シャルロットさんだけが私の味方ですね・・・」

「だが事実だぞ？」

「ま・・・まあ、そりゃそうだったけどさ・・・」

「裏切られましたわっ！！」

ラウラの意見に同調したシャルロットを見てセシリーがさらに凹んでしまう。

まあ仕方ないよね、若干持ち上げて落とされた感じだから。

「アア〜ルウ〜」

最後の手で僕に涙目で、同意を求めてくるセシリー。

その頭をやさしくなでてあげる。

「よしよし・・・お兄さんが飴をあげようね」

「うう・・・ありがとうございます〜」

包み紙を破り、ポイントと口の中に飴を放り込むセシリー。

それを見て箒が、呆れた目でこちらを見やる。

「おい、アルディ。あんまり甘やかすな。」

失敗をうやむやにしてしまっただけは、セシリアのためにもならんぞ？」

「甘やかされてなどおりませんわ！ アルは、味方のいない私を

かわいそうに思って手を差し伸べてくださっただけのこと。

どこぞの誰かみたいに、同じミスをチクチクつつくような方に言わ

れたくありませんわ！」

「・・・そういうことらしいよ」

「ふん」

「まあまあ、箒そんな怒るなって。シワになるぞ？」

そして一夏には問答無用で箒のチョップが直撃した。

「そういえば・・・その、アルディ」

ラウラが少し気まずそうにうつむきながら名前を呼んでくる。

「何？」

「お前の・・・ISだが。どうなのだ？」

「ラウラさん、あなたどの顔でそのような」僕は、あの件に関してまだ納得のいっていないセシリーを片手で制する。

不服な顔を向けるセシリーだったが、すぐにそっぽを向いて座りなおした。

それを確認してから僕はラウラへと向き直る。

「それがまだ、何も」

「見てもらってもいないのか？」

「一応姉さんには見せたんだけどね、こういう破損ケースはすぐく希らしくてわからないっていわれちゃったよ」

「・・・そうか」

「まあ、あの時も言ったけどもう気にしてないんだから、そんなに気を使わなくて良いんだって」

まだラウラは少し顔を伏せている。

多分、ラウラ本人もこのことに対してどうしたら良いのかわからないのだろう。

自分ではどうにか責任を取りたいのだが、その方法が解らない。

加えて僕もこんなスタンスだから余計に。

だけど、前にも言ったが僕は本当にもう何とも思っていない。

やっちゃったことを、責めてもそれで何が変わるわけでもないし何より、自分も不愉快だからね。

と、急に肩を掴まれる。

振り返るとそこには、凄く笑顔の（怒った）セシリーがいた。

ええと・・・。

何で怒ってるのかな。

「アル？」

「は、はい・・・」

「あの時とは、いつでしょう？」

「あの時？ あ、ああ。姉さんと話した夜にラウラに呼び出されてね」

「何故、何も私に教えて下さらなかったのでしょうか・・・私、寂し

いですわ、ああ寂しい寂しい・・・」

ぎゆうううっ！

い、痛い痛いッ！！

めり込んで、セシリーゆ、指がめり込んでるッ！！

「セシリー！ 何をそんなに怒ってるのさ！！」

「まだ分かりませんの！！」

何でかな。

・・・今肩からボギユッって音がした気がする。

あゝ、えらい目にあつた。

僕は、皆と別れて織斑先生の下を訪れていた。

と言つても、織斑先生は会議中だから職員室前で待ちぼうけだけど。

ジャラッ。

僕は真つ二つの“ストライク・バーディ”を見やる。

本当に大丈夫なんだろうか。

姉さんでも、現状ではコメントを避けていた。

つまりそれは下手なことは言えない問題が起こり得る可能性があると言つことでもある。

にしても、自爆で使えなくて、ようやくと思つたら身体がアウト。

で、これだ。

実戦経験どころか、満身にISを起動させた時間が短すぎて不安になつてくる。

なるようにしかならないとは言え、時たまそう言つ考えが首をもたげるのも事実な訳だね。

そんなことを考えていると、多くの先生たちが職員室へ帰ってくる。どうやら、会議は終わつたらしい。

そして当然その中には織斑先生の姿もあつた。

「織斑先生」

「ん？ 私に用事か？ すまないな待たせてしまった」
「いえ」

僕は織斑先生に促されて、職員室へ入る。

そして織斑先生は、自分の椅子に腰掛けるとすらりと伸びた足を組んで冷めたコーヒースをすすする。

「で、何の用だ？」

「このことで・・・」

僕は織斑先生に？ ストライク・バーデイ？ を差し出す。

織斑先生はそれを受け取ると、渋い顔で目の前で掲げた。

「もう、ローラには連絡したのか？」

「はい、一応」

「で、あいつはなんと言っていた？」

「先に、こつちで調べてもらえって言っていました。その結果をまた連絡してほしいと」

織斑先生は大きいため息をつくとき、ジト目で何も無い宙を睨んだ。

おそらくそこには、姉さんでも見えているのだろう。

「まったく・・・、面倒事は学園側に全部丸投げか」

アメリカらしいというかローラらしいというか」

その点はアメリカ人の僕も、何も言い返せません。

何気にこのIS学園の設立の際にもまあ、圧力を掛け捲ったという噂もあるし。

まあ・・・それを、貫いて作らせちゃうあたりがさすがわが母国だとは思っけど。

「あの・・・それで・・・」

「ああ、まあ調べるだけ調べてみよう。簡易検査なら明日には結果が出ると思う」

「そうですね」

とりあえず結果待ちか。

僕は、もう一度頭を下げ職員室を後にした。

今日も白衣の研究者たちがせわしなく動き回るアメリカの研究開発局。

あるものはキーを軽やかにタイプしまたあるものは研究データ片手に、

ほかの研究者と言葉を交わしている。

そして、アルデイの姉であるローラ・サウスバードも

また例に漏れずカカタとキーをタイピングしていた。

傍らには？ strike birdie All predict

ive assumption results list？

(ストライクバーデイ予測想定結果表)

と書かれた資料が置かれている。

これは、ストライクバーデイに不測の事態が発生したときを想定してあらかじめ作っておいたマニュアルのような物なのだが、

それをもつてもローラは現状の？ストライク・バーデイ？を把握しきれずにいた。

解析を妨げているのは何よりデータ量の少なさと、加えて壊れ方が異質であること、

そして仮に起動できてもその後の重大な欠損につながる可能性などを考えていくとシミュレーションを

かけても、そのつど違った答えが出る。

今は、？ストライク・バーデイ？が最後に送って来たダメージデータを元にして

そこから、現状のダメージデータを予想して数値を変えながらシミュレートしているところだった。

そして、出た結果は・・・。

? Expected damage level C

Conclusion in the start tolerance level?

「予想ダメージレベルC、起動許容範囲内と断定・・・ね」

ふうっとため息を吐いた後ゆっくりとプラスチックマグカップを口につけると

いきなりダンツと乱暴にたたきつけた。

「さつきから、どうしてこうバラけるのよ、腹立つわねっ!!」

ローラは、数値のメモ書きをクシャクシャに丸めると、ゴミ箱へ放り投げた。

紙のボールとなったそれはきれいな放物線を描いて、ゴミ箱に吸い込まれていく。

「ナイスシュートね、鳥さん?」

茶化すような声に、ジロツとローラが反応するとそこにはきれいな金髪をたたえた女性が

ココアを手にたたずんでいた。

「・・・ナターシャ」

「そんな目しないでよ」

ナターシャは近くの開いていた椅子を引っ張ってくるそこに腰掛ける。

「荒れてるわねえ・・・。何をやってたのかしら?」

「なんでもないわ、用がないなら何処か行きなさいよ」

ローラは額を押さえながら、左手でシツシと追い払う。

しかしナターシャはそれに気を悪くすることなく、ニコニコ笑ってローラを見ていた。

「何よ・・・?」

「そんなに邪険にすることないじゃない。大方アルのことで頭悩ませてるんでしょ?」

「わかつてたんなら・・・聞くとあんなあ」

ローラはナターシャの髪をワシヤワシヤとかき乱す。

「ちよ、ちよっと・・・ローラやめて〜」

「こうなったら、ナターシャでストレス発散してやる」

「ちょ、ちょっと痛い痛いつ!!」

「このこの〜!!」

その後しばらく、それは続いてナターシャの髪は見るも無残にボツサボサになってしまった。

「もー・・・どうしてくれるのこれ・・・」

「クシあるわよ」

ローラは再び、PCに数値を入力しながらナターシャにクシを手渡す。

ナターシャはそれを受け取ると髪をとかし始めた。

「ちょっとお・・・絡んじゃってるじゃない、痛んだらどうするつもり・・・」

「いちいちセツトするなんて、あたしには理解できないけどね」

「あなた、セツトしてないの？」

「そうね、暇があればやってるけど、基本寝起きのままね」

ローラはあごをつきながら、面倒くさそうにポチポチと入力している。

そして、エンターを押して結果画面を見るたびに

目に見えてイライラが募っていくのがナターシャにはわかった。

「ローラ・・・シワが増えるわよ?」

「朝からずっと、画面とにらめっこしてたらそんな心配どっかに飛ぶわ」

「・・・ローラに憧れてる子も少なくないんだから自覚がほしい所だけだね」

「あなたほど人気じゃないわよ」

「そう言えば、あなた今度試験があるんですってね」

「ハワイ沖だね。まあ普通の試験稼働だから・・・楽に終わると思うけど」

「あたしも、楽に終わりたいわ・・・」
ローラは、ギシツと背もたれに寄りかかると大きく体を伸ばした。
そんなローラを見ながらナターシャはクシを置いてズズツとココア
をすすする。
解決策はわからないが、ローラのほしい答えは、
まだまだ出そうにないということだけは分かった。

カチャカチャと工具の音がピットに響く。
聡也はまだピットで整備をしていた。

服だけは制服だと汚れる可能性があったので、体操服に着替えてい
る。

（右側のスラスターの出力値が安定しない・・・）

聡也は工具片手に？ホワイトアウル？のスラスターのサービスハッ
チへ顔を突っ込んでいた。

顔には汗をぬぐったときに付いた黒いオイルの後が滲む。

いくら空調の効いたピットとはいえ、顔を突っ込んでいる個所は
さつきまで噴かしに噴かしたスラスターの中だ。

汗をかかずには居られない。

聡也はデータスキャナで？ホワイトアウル？の出力値とにらめっこ
していた。

（なんでだろう・・・一応許容値ではあるんですが）

スラスター出力が安定しないと言う事はそのまま機動力の低下につ
ながってしまっただけに、

いくら許容値であるとは言っても、油断が出来ない。

ただでさえ、ISに性能面で多分に劣るIS-Nなのだ。

訓練や実習で壊れる程度なら笑ってすむが、実戦ともなればそれは

命取りだ。

(ふう・・・そう言えば、これオーバーホールの時期でしたっけ) 聡也はこれ以上どうにもならないと判断して、

ため息交じりにボタンとハッチを閉めIS-Nを待機状態に戻した。そこでふと聡也は思い出した。

懸念事項はこれだけではないと言う事に。

(そう言えば・・・今日一回起動させたから・・・キーはあと五本ぐらいですね)

IS-NはもともとISのように自在にオープンやクローズを行う能力を持たない。

待機状態のシリンダーカードに専用のキーを差し込むことで初めて起動する。

ISに比べるときわめて限定的なパワースーツということになるだろう。

そしてそのキーは一度使うと霧散してしまうので、回数も限られる。少なくなれば博士のほうからキーが送られてくるようになっていた。だがまあそれもこちらから連絡しないといけないのだが。

(残り二本切っただけからまあ大丈夫でしょうけど)

聡也は、少し考えてから使っていた工具や器具を所定の位置へ戻す。基本的に？ホワイトアウル？の整備は出来るだけ聡也がやる事になっていた。

博士いわく、？私が居ない時に壊れたら手も足も出ないじゃIS-Nの操縦者としては失格？だそうだ。

実際、今回セシリアに勝てたのはそれも大きい。

自分で整備するからこそ今日は調子がどうなのか、悪いのかそれとも良いのか。

良かったらどこが良いのか。悪いならどこをカバーすればいいのかまで

理解するのではなく身体で感じる事が出来る。

だからピットへ帰ってきてすぐに右側のスラスターの異常に気づけ

ただ。

ISに比べて性能の劣るIS-Nで、ISに勝つと言つ事はそう言った見えない所で勝負するしかないのである。

(・・・まあ、おかげで色々知識も増えて良かったと言えば良かったんだけど)

そう言えば、まだ先の話だが二年生になると整備科というのがあったらしい。

実のところ、聡也は戦闘での実力は高がIS-Nの操縦よりも機械の整備の方が好きである。

何より、自分で調整したところが結果となって現れる事が何より楽しい。

二年になったらそつちの道へ進むのも悪くない。

そんな事を考えているうちに機材の片づけが終わる。

すると、ピットのハッチが開き数人の女子が話をしながら入ってきた。

(おっと、そろそろ出よう。邪魔になってもいけませんし)

聡也は足早にピットを去ろうとする。

だが・・・。

入ってきた女子の一人の顔を見てその動きが止まった。

(・・・。。。。え)

相手はこちらを見向きもしなかったが、聡也にとってその女子は衝撃を受けるには充分な人物だった。

(ワインレッドの髪に・・・赤い眼・・・?)

絶対にそれは間違えることは無い。

(それに・・・少し聞こえたあの声・・・)

いや間違えられるはずがない。

(どうして・・・なんで!)

聡也は既にパニックを起こしていると言っても過言では無かった。

どうして、なぜ? そればかりが聡也の頭を支配する。

あの人はここに居てはいけない。

いやそもそも居るはずがない・・・。

聡也はバツと振り返ってその名を叫んだ。

「姉さん!!」

その声に雑談していた女子全員が振り返った。

その中には確かに、赤い瞳を持つ目じりのつりあがった

女子がこちらを怪訝そうに見つめている姿があった。

そしてその女子はそのまま眉ひとつ動かさずこう言った。

「はあ、姉さん？ 誰だよお前？」

第16話〜似て非なるもの〜（後書き）

短編書いてたら行き詰ったなんて口が避けてもいえない。
どうもお久しぶりです。
しるくです。

ここからちよくちよくオリジナル設定が食い込めますね。
・・・え？

元々食い込んで立って？

・・・しらねww

そう言えば、本当に関係ないんですが、親父が僕のバイト先の面接
を受けるそうです。

。。。びっくりしました・・・本当に。

さてさて・・・それでは。

17話でお会いしましょう。

さよならっ！

第17話　もう一人の聡華もう一つの紫燕

その言葉の意味を聡也は理解できなかった。
誰って？

何を言ってるんだ・・・だって僕は・・・。

「誰と勘違いしてんのか分かんねえけど、あたしに弟はいねえぞ？」
その荒っぽい口調だつて・・・。

「勘違いで変な事言うんじゃないか？」

僕の姉さんそのものじゃないか。

聡也は、冷たくあしらわれても尚も食い下がった。

「でも、あなたは僕の

「いい加減にしろつての！」

いきなりの怒号にビクツと身体が震え立つ。

その女子は、僕の胸倉をつかむと睨みをきかせ、語気を強めた。

「てめえ、あたしの言ってる事が分からねえのか？　あたしに弟はいねえ！」

分かつたらこれ以上話しかけんな、いいな？」

吐き捨てるように言つと女子は、そのまま僕の胸倉を乱暴にはらつ。

それがあまりに乱暴で、僕は尻もちをついてしまった。

そんな僕を見て、一緒に来た女子が手を貸してくれた。

「大丈夫・・・？」

「あ、はい・・・ありがとうございます」

僕はその手をつかんで、立ち上がり礼を言う。

「にしても、君も命知らずだね」

「え、どういう事ですか？」

「彼女、今日はこんなぐらいで済んであたしたちもホツとしてるけど、

あんな事言つたら、酷いと殴られちゃうよ」

「はあ・・・」

女子は苦笑交じりにちらりと、？姉さん？を一瞥する。
本当に・・・姉さんじゃないのか？だがあまりにも共通点が多すぎて、

すぐにそんな疑問など消えてなくなってしまう。

でも、また聞けば今度こそ殴られる。

間違いなく。

だから僕は、とりあえず目の前の人に名前を聞く事にした。

「・・・あの、あの人。名前はなんて言うんですか」

「あれ、知らずに声かけてたの？ お姉さんって呼ぶから知ってるものかと」

「はあ・・・まあ、その似てるんで・・・」

僕はあいまいな返事を返す。

と言うより、そんな返事しかできなかつた。

いまだに頭が混乱しているのだ。

仕方がない。

女子は少し驚いた顔を見せたが、すぐに頭を切りかえて名前を教えてください。

「彼女は、鳥越 聡華。IS学園二年一組の風紀委員よ」

「とり・・・こし・・・そうか・・・名前と同じ・・・」

僕はその名前をゆっくりとつぶやく。

それを不思議そうに見つめながらも、「じゃっ」と軽い挨拶を残して女子は聡華のもとへ走っていく。

・・・あ、そう言えばあの人も先輩だったんだ。

今さらながらそんな事を思うほど、僕は混乱していた。

どうすればいいのかわからないが、だがそれでも呆けているわけにもいかない。

アリーナへと消えた先輩達の後を僕は追いかけていった。

そっだ、確認すべき事はもう一つある。

追いかける僕の手には、シリンドーカードとキーが握られていた。

そう言えば・・・。

今週末、セシリーと買い物に行くのは良い。

だが問題が一つある。

僕はセシリーには色々見て回りたいよねと言ったが、具体的に何を
見て回ろうか。

この街の事なんて僕、ほとんど知らないよ・・・？

言ってしまったって今さらだが、自分のノープランさに呆れてしまう。

一人トボトボ歩いていると、丁度目の前に書店があった。

購買に併設される形で作られた小さなものだけど・・・。

まあ、観光マップぐらいはあるよね。

僕は書店に入ると、ガイドマップコーナーへ一直線。

ここ周辺の情報がまとめられた本を一冊手に取る。

表紙には？イチオシデートスポット情報満載！？とでかどかどか書か
れている。

デートスポットねえ・・・そんなんでも、ないんだろうけど。だって
荷物持ちだしなあ

パラパラと、雑誌をめくっていく。

っていうか、女子生徒徒しかいないのにデートもくそもないよね。

あ、そういうアレ、趣味？

・・・まあ、いいや。

何気なしに見ていたが、とあるページで手が止まる。

ん？これは・・・。

そのページには？篠ノ之神社で凜とした空気に触れよう！？とあつ
た。

篠ノ之なんて珍しい名字は幕以外に考えられない。

・・・へえ、実家は神社なのか。

写真で見ても境内などとても立派な作りで、建物だけでも名家を思わせる。

そして、そこには剣道の道場もあるらしい。
なるほどね、そりゃ強いわけだ。

実家が剣道の道場ってことは、父親が師範かな。

・・・ふうん。

僕はまたパラパラとめくっていく。

どうせなら射撃場とか無いのかな・・・無いよね。

自分で思いながら、それをすぐに否定する。

だいたい、銃や刀の取り扱いが特に厳しいこの国でそんなものがあるのも問題だ。

あってもせいぜいこの学園ぐらいだろう。

本当にそう思うと、この学園って滅茶苦茶だよな。

どこの国の法にも触れないから、原則この学園内では高校生が何の許可や免許もなく銃器や真剣を扱える。
ある意味色々危ない。

あ、でもESの方が強いから、いくら銃器で暴れまわっても無駄か。すぐに鎮圧されるだろうし。って、そんなのはどうでもいい。

今は、どこを回るかだ。

ふむ。

再びパラパラとめくっていくと、見開き四ページも使って特集の組まれたページを発見する。

？買った物ならここで決まり、好きなあの人と共鳴しちゃおう!？

駅前大型ショッピングモール？レゾナンス?か・・・。

特集を見るとそこは、かなり大きくまた駅と繋がっているため利便性も高い。

何よりその品数の豊富さは、アメリカ人のアルデイでさえ驚くほどだった。

アメリカにもメガスーパーと呼ばれる広大な敷地面積を持つスーパーが存在する。

だが？レゾナンス？のそれは、メガスーパーに負けずとも劣らないものだった。

いや品質だけなら、？レゾナンス？の圧勝だろう。

確かにここで決まりだな。

・・・っていうかこれは結構役に立つのではないだろうか。

何気に最後のページには鉄道の路線図なんかも掲載されている。

裏表紙を見て値段を確認すると、そんなに値段も高くないし。

よし、買おう。

僕はそれを、レジに持っていく。

レジの人がやたらニヤニヤしてたけど、一体何だったんだろう。

僕は寮の部屋に帰って、雑誌の表紙を見てようやく分かった。

・・・なるほど、デートね・・・。

僕は苦笑いしながら、さつき立ち読みで見つけたスポットをメモに列挙し始めた。

「ねえ、聡華。ほんとに知らない子だったの？」

一緒にいた女子の一人が声をかけてくる。

内容はさっきの訳の分からねえ一年坊主の事だった。

聡華は、面倒くさそうに頭をかきながらそれに答える。

「ああ、知らねえよあんな奴。大体よあたしが一人っ子だったのは皆知ってんだろうが」

「それはそうだけどさあ・・・あの子結構必死だったし・・・」

「必死だったら、何でも許されんなら風紀委員なんていらねえわな」

聡華はまだ口をとがらせる同級生を軽くあしらうと準備を始める。

起動させる前に、ISの状態をステータス上で確認する。

こう言うのは安全上とても大事なことだ。

いざ起動してみても、ダメでしたじゃ笑いごとにもなりやしねえ。それに風紀委員が事故つても更に笑えねえよな。

聡華はステータス画面で異常が無い事を確認すると、紫色の丸いキーホルダーを取り出す。

これが自分のISの待機状態である。

さて、始めっか！

ISを起動すると聡華は光に包まれそして一瞬で装甲が展開する。紫を基調とした、そのISは腕や足そして背部に至るまで所せましとスラスターが搭載されている。

それでいて、気品を漂わせる流麗なフォルム。

これが鳥越 聡華の専用機。高機動強襲型IS？紫燕？である。

そして、すべての準備が整い早速自主練と思っていた時、聡華をかすめるようにして高エネルギーの閃光が走った。

反射的に身構える聡華と同級生たち。

聡華が見上げるその先には、白いISが荷電粒子砲を構える姿があった。

「……………てめえ、やってくれんじゃねえか」

「……………確かめたい事があります」

「確かめてえ事だと？」

聡華は目を細める。

聡華は姉ではないと、はっきりと言った。

これ以上他に何を確かめたいと言うのか。

怪訝な顔をする聡華に聡也はまた静かに言う。

「あなたの実力ですよ」

「あんだと？」

「僕の姉さんじゃないと仰るならそれはそれで良いです。

ただ僕はまだ納得まではしていません」

聡也はまるで、何か台本があるかのように冗舌に言葉を紡いでいく。それを聡華は、所々相槌を打ちながら聞いていたが、その何かを演

じているかのような

話し方はことごとく聡華の神経を逆なでた。

「だから、実力を知りたいんですよ。

僕の姉さんなら・・・僕なんてひとたまりもありませんからね。

僕の姉さんじゃないのなら、良い勝負ができるかもしれませんよ?」

そこでようやく聡華は聡也の言っている本当の意味を理解し、

そして見かけによらず考える事が、えげつないと言う事に更に腹が立った。

つまりだ。

自分が勝ってしまったらその時点で自分自ら?姉である?と言う事を宣言したと同じ。

それが嫌なら、無様に自分に倒されると言う事を遠まわしに言っているのだ。

(・・・やるお、いい度胸してやがんじゃないかねえかほんとに・・・ッ！！)

だが、聡華はその考えに気が付いたところで冷静に事を判断するよ
うな人間では無い。

相手の策だと言う事が分かっているても、この人物は自らその中へ突
っ込んでいく。

そしてそれを、内側から何もかもをぶち壊す。

それが風紀委員である、鳥越 聡華と言う生徒だった。

「へっ・・・上等だ。その減らず口・・・黙らせてやる」

「良いんですか? 僕を倒しちゃうと、姉さんってことになっちゃ
いますよ?」

「ならねえよ」

「・・・?」

聡華は、しれつと言り返す。

そして疑問符を浮かべる聡也に対して、名乗りを上げる様に高らかに
言い放った。

「あたしがそれすらも・・・ぶっ壊す!!!」

聡也は、この策に乗ってきたという事が少し意外だった。

こんなの誰が見ても、罠だと言う事は目に見えている。

と言うよりも、自分でそう言っているようなものだ。

なのに、聡華は乗ってきた。

ちなみにだが、あれほど大口をたたいたものの聡也に聡華を傷つけるつもりは無かった。

確かに本人確認もしたところだったが優先度がより高かったのは、紫香楽 聡華のISと瓜二つのあのIS？紫燕？の戦闘データである。

聡也が博士から聞いていた情報では紫香楽製のISは？たった一機？しか作られていないと言う事だった。

その情報が正しいと仮定するのなら、？どちらかが偽物である？

という事を証明するための後々の検証材料にもなる。

聡也は、一直線に向かって飛んでくる聡華に荷電粒子砲を連続で浴びせ続ける。

だが聡華も、それは予測済みのようで、速度を落とさず最低限の動きでそれをかわす。

「おらああああッ!!!」

聡華は戦槍？大蛇？を思い切り突き出す。

聡也はその攻撃を、横に避けると至近距離から荷電粒子砲を撃つた。だが、当たったと思った攻撃はアーリーナの側壁のシールドに当たって霧散する。

「なッ!!!」

「ほら、遅せえ遅せえ!!!」

聡華は、？大蛇？で聡也の二門の砲を弾くと無防備に開いた胴体に

蹴りを入れる。

衝撃で吹き飛んだ聡也が体勢を立て直す前に再び？大蛇？の一撃が襲う。

「ぐあつ！！」

今度は完璧に入った？大蛇？の衝撃がシールドを貫いて聡也に激痛を与える。

そして立て続けに二回三回と“大蛇”を振り回して攻撃を加える聡華。

繰り返し訪れる痛みを顔がまげながら、

聡也はなんとか頭の中で打開策を模索する。

この状況、別に聡也が遅いというわけではない。

聡也の想像に反して、そしてあの紫香楽 聡華の？紫燕？に対して、この鳥越 聡華の？紫燕？が速すぎるのである。

？ホワイトアウル？には通常のISの平均的な速度を出せるだけの推力はある。しかしそれは、あくまで？打鉄？の様な汎用機を

相手にする事を前提に組まれた出力であり

このような高い機動力をもつISが相手だと、明らかな出力不足だった。

・・・このままじゃ、クロスレンジは一方向的になる・・・距離を開けないと！！

聡也は？大蛇？の振りかぶるタイミングを見計らって、？ホワイトアウル？の

全スラスターに最大推力での後退を命じる。

それと同時に、砲を荷電粒子砲から、

バックパックにラックされたもう二門の砲に持ち変えた。

それは荷電粒子砲ではなく、荷電粒子砲よりは連射の効くレールガンだった。聡也はその二門のレールガンで牽制しながら距離を取ると、再び荷電粒子砲に持ちかえて

一撃必殺の威力で聡華を狙う。

だが距離を取られた聡華は、焦り一つ見せずむしろ

こちらを小馬鹿にしているような顔をしていた。

聡也の攻撃をひよいひよいとかわして、ニヤツと口元を釣り上げる。

「なあ、お前距離を取れば勝てるのか思ったのか？」

そして届く不気味なほどに自信に満ち溢れた聡華の声。

一瞬の疑問の後、聡也は自分が最悪の隙を相手に与えてしまった事に気が付く。

そもそもの間違いは、一方的になると踏んで

とっさに開けたこの約三十メートルという？死の間合い《デッドライン》？

聡也の考えに、このスペック表に、そして何より目の前のISSが？

紫燕？であると言う事に。

そのすべてに間違いが無ければ。

(不味い！ アレが来る！！)

「しまっ！！！」

その声が漏れたのは、？大蛇？が振り下ろされる前だったか後だったかは分からない。

だが、？大蛇？が振り下ろされる直前に聡華は聡也の耳元でこう囁いた。

「あたしに、逆らうな」

その直後聡也は、アリーナの地面にたたきつけられていた。

・・・聡也の完敗である。

聡也はISS-Nを待機状態に戻して身体を引きずりながらピットへ戻ると、

そこには聡華が仁王立ちで待っていた。

既に他の女子はいない。

聡華が先に行かせたのか、どうかは定かではないがとにかく今はピットに聡華と聡也の二人だけがいる。

聡華はジツと聡也の顔を睨んでいる。

対して聡也も聡也で、若干混乱していたとはいえ、やっぱり無理やりすぎたかと

気まずそうな顔を聡華に返した。

「気まずそうな顔するってことは、少なからずやっちゃった観はあるわけだ」

「・・・ええ・・・それは」

「まあ、今回はその顔に免じて許してやる」

聡華は不機嫌そうにつぶやく。

聡也はただうつむくことしかできない。

そんな聡也に聡華は一枚の紙を手渡した。

それは名刺ぐらいのサイズで表に名前、裏にはIS学園の校章が印刷されていた。

「それは、あたしが？風紀委員？として関わった事を

証明するための、まあ証明書みたいなもんだな」

「どうしてそれを僕に？」

「言っただろうが、許してやるからだよ。一応さっきのは私闘に当たるからな。」

仮に教師に何か聞かれたら、そいつを渡しな。にしてもなあ。

大体あの・・・誰だったっけか。ほらあのドイツ人・・・」

聡華は思い出せない名前に首をひねる。

ドイツ人、ドイツ人・・・。

とりあえず、聡也は自分の知っている名前を挙げてみた。

「ラウラですか？」

「どうやらそれは正解だったようで聡華はバツとそれに食いついてくる。」

「おお、そっだそっだ。そいつ。」

そいつがさ入学当初っからやらかしてけが人まで出しちまってな。

別段、教員の間じゃよくあるもめごとの延長線アップってことで

さほど大きな問題にはならなかったんだが」

ポリポリと頭をかく聡華。

それを見て聡也は少し、姉の面影を重ね合わせていた。

「……きつと、僕のそばに姉さんがいたらこんな表情するんだろ
うな

聡也には、そもそもなぜか姉であるという事を特定できても、
姉との思い出や記憶を思い出せないでいた。

それがなぜなのかは分からない。

ただ本当に過去の事を思い出そうとすると、その度に変な頭痛に襲
われるのだ。

だから聡也には、きつと姉さんなら……という想像しかできない。

聡也にはその想像がたまらなく楽しい半面たまらなく切なかった。

しかし今回はその姉に瓜二つな人物が目の前にいる。

その思いも更に強いものだった。

だが、そうは言っても今は聡華の会話中。

当然想像に浸っていても聞き逃してしまふ。

そして案の定……。

「聞いてんのかッ！」

「……すいません」

余計な一発を貰う。

聡也はその一発で我に返るともう一度聞き直す。

「で、ええと……なんでしたっけ？」

「はぁ……お前強かなのか馬鹿なのかどっちなんだよ」

流石の聡華もあきれ顔だったが、気を取り直して説明し直す。

「だから、あのラウラって言うドイツ人の暴走を止められなかった
っていうんで、

教師陣とも掛けあつて風紀委員が独自に私闘に関する規則を設けた
んだよ」

「規則ですか？」

「そこでこの名刺だ」

聡華はピツと名刺を指で挟んで掲げる。

「こいつはな、その私闘に風紀委員が立ち会ったっていう証明なんだ。

仮にアリーナでなんかあって教師に聴取されても、そいつ見せれば後は、それを回収した教師から個別に連絡が来るようになってんだ」
言つと、聡華は小型の通信端末を指さす。

それは片耳に装着した状態で使用するハンスフリーの様な物だった。
なるほど。

中々考えられている。

特に私闘のみに規制をかけているのがいやらしい。

この方法だと、模擬戦をしていたという言い訳が通用しづらい。

逆に本当だった時は少し問題がある気もするが。

どっちにしてもこの方式を考えた人は頭のいい人だろう。

得心いった顔の聡也を見て、少し笑うと聡華はきびすを返す。

「じゃ、これ以上面倒事起こすんじゃないぞ」

そう言う聡華の背中にやはり自分の姉を重ねてしまう聡也だった。

よし、こんなもんかな。

僕はペンを置き書き終えたメモを見やる。

そこには、目印やそのスポットへ行くための道筋などが書かれている。
る。

非常に簡単なものだったが、所詮メモ。

わざわざ、ややこしくする必要もない。

(後はコレを当日までに頭に叩き込んでおくだけか)

何事もそうなのだが、僕は暗記が大の苦手である。

だが苦手とは言え、セシリーとの買物だ。失敗して変な空気にな

りたくない。
そうして必死にメモの内容を頭に入れていくうちに、気がつけば夜になっていた。

夕飯がまだだった事に、気づいた僕は食堂に来ていた。
時間ももう少しで食堂も閉まると言い事もあり、閑散としている。
僕は食券を渡して今日の日替わり定食を受け取る。
タイの塩焼きと幾つかの惣菜。それに味ご飯がついている。
お盆を持って座る席を探していると、奥の方に一人僕と同じく遅めの夕食を食べる鈴を見つけた。

「や、鈴。隣良いかな？」

「ん？ 別に良いけど」

鈴に許可を貰って隣に腰掛ける。

鈴はどこか上の空で、何度かため息を繰り返していた。

鈴のこういふ姿は珍しい。いつも人を嵐のごとく巻き込んでワガママを連発するのに。

「あんたねえ・・・はあ、まあいいわよ」

また考えを読まれてしまったらしい。

よし、今度ポーカーフェイスの通信教材カタログを取り寄せよう。
にしても本当に様子が変だな。

「ねえ、鈴何かあったの？」

「何かあったから、こんなにテンションがた落ちなんでしょうが・・・」

また鈴は大きなため息を吐く。

うん・・・やりにくいなあ。

ふむ、仕方無い元気付けてあげよう。

「あ、ひよっとして恋煩い、一夏に対する？」

「馬鹿言つてんじゃないわよ!! 何であたしがあいつのことで気を病まなきゃいけないのっ!」

「いや、だつて好きなんですよ?」

「アメリカ人死ねっ!!」

おおっ……。

何時もの鈴に戻つた(?) ようだがいきなり、アメリカ人に死刑宣告が。

鈴を元気付けようと思つただけだつたんだけど。

「そんなもんで元気付くかっ!!」

パツコーンっ!

またも読まれて今度はお盆で僕の頭を叩いた。

どうやら鈴は、体調不良でお盆を武器か何かと勘違いしているようだ。

「鈴、お盆は殴るものじゃないよ」

「そんな真顔で言うなっ、そこまで重傷じゃないわよ!」

鈴は、お盆を乱暴に置く鼻を鳴らしてテーブルに肘をついた。

「ごめん、ごめん。ちよつとしたジョークじゃないか。それで、一体何をそんなに落ち込んでるのさ」

僕は鈴にわざとらしく目の前で手を合わせてオーバーアクションの謝罪を行う。

まあ鈴もそこら辺のことは分かっていたらしく、まあ良いけどと言つてまたまたため息を漏らした。

「で、あたしがこんなにテンションダウンしてんのは聡也の事よ、そーやの」

聡也の事?

珍しいな。鈴つて自分の興味ない事には全く関わろうとしないタイプだよ。

その証拠に初対面ではセシリーの事、全く知らなかったし興味すら持つてなかった。

まあ、聡也について鈴に全く興味がないかと言えばウソになるが、それでも直接的に鈴がテンションダウンする理由が見つからない。

「聡也がどうかしたの？」

「あいつね、何したかわかる！？　　こともあろうに風紀委員に喧嘩売ったのよ！！」

まああたしも詳しくいろいろ聞いたわけじゃないけど、なに馬鹿やっつけてくれてんのよ・・・」

鈴は、フンツと鼻を鳴らすと足を組んで何も無い空間を睨む。

聡也が？

あんなにまじめで、優等生っぽい聡也が喧嘩を？

しかも風紀委員に？

「ちょ、ちょっと待って。どういうことさ！？　　本当に聡也がやったの！？」

「あたしだつてびつくりしたわよ！　あいつまだ会って間もないけどぱつと見おとなしそうだし」

「・・・ああ、でもなんで聡也がそんな事を

引き起こしたからっていつて鈴が落ち込まなきゃいけないのさ？」

「あいつの所為で、風紀委員に二組が目をつけられたからよ。

本当に迷惑だわ！！　　これですますます動きにくくなっちゃったじゃない。

もう、どーしてくれんのよっ！！」

鈴は言うどゴンツ大きな音が出るほどの勢いで机に突っ伏した。

「・・・いや、でもあの聡也が。

「・・・何かありそうだね。

彼、セシリーとの戦闘の時にも思ったけど慎重っぽいし、何の考えもなくそんな行動をとるとは思えない。

フフっ、これはちょっと面白そうだね。

とにかく、明日の放課後いろいろ情報を集めてみよう。何かわかるかもしれないし。

「・・・って言うか鈴さっき動きにくくって言ったけど。

「やっぱり動きにくくなって一夏のこと？」

「はあ？ そうに決まって・・・」
なるほど。

やっぱりね。

確かに今織斑先生だけでも大きな障害だもんねえ。

うんうんとうなずく僕の頭にお盆がクリーンヒットし

その音が閑散とした食堂に響いていた。

ふう。

お決まりと予想通りの答えをありがとう。

ローラは心の中でつぶやいてPCから顔を離して伸びをする。

ローラはあれからずっと、データの打ち込みに追われそのたびに表示される

欲しくもない答えにイラつくという作業を繰り返していた。

そしてそれを家に持ち帰ってまで続けていたのだが、

もう今となつてはイライラする気さえ起こらない。

期待もしなければ返ってくる答えに落胆する事もなくなる。

完璧に作業である。

ローラは立ち上がると、傍らの缶コーヒーに口をつける。

一息つくが正直言つてローラは、ほぼ半日を割いて作業をしたというのに

？ストライクバーディ？の現状をまったくといっていいほど把握できていなかった。

ローラはチラリと欲しくない答えを表示するPCに目をやる。

・・・こんな事初めてだわ・・・。やっぱりあのISは、？普通じゃない？のかしら？

ローラはあの？ストライク・バーディ？をモンド・グロッソで使用

していた時も

何度か不思議な体験を経験していた。

言っても誰も信用してくれなかったがローラは、いやローラもまたあの？少女？と邂逅の経験を持つ人物だった。ローラにはアルデイがその経験をしたかどうかまではわからなかったが、

当時のローラは何か得体の知れない物を内包する自分の愛機に若干の怖さと、

それでいてなぜか守られているような不思議な気持ちを感じていた。しかし、そうはいつでも結局はIS。

あの当時だって半日も使えば欲しい答えや、それに到達するための手がかりは見つかったものだ。

だが今回はそれがまったくと言っていいほど見つからないのである。

あのISは、あたしが一番よく知っているISだから・・・不測の事態に陥っても、あたしなら何とかかなると思って

あの子に預けたんだけど・・・甘かったわね。

今更なにをと思いつながらもローラは自分の考えの甘さに少し後悔する。

今回は、その事でアルデイが怪我をしたというわけでもないが、いずれにしてもその可能性は捨てきれない。

それにだ。

あの“N”が出てきている以上最悪のケースも考えるなければならず、ローラは一瞬寒気を覚えた。

そしてローラの中で、とある考えが首をもたげる。

今までは、こちらでの事もあるし責任のある立場だからと敬遠していたその考えだったが

自分の対応の遅れで、アルデイを危険にさらす可能性がある以上迷っている場合ではなかった。

ふう・・・姉馬鹿とか言われるかしらね。でもこうなったら仕方がないわ

行きましようか、日本へ！

世界第二位は動き出す。

ただただ弟のために。

第17話ももう一人の聡華も一つの紫燕（後書き）

桜が散り始めている、花見もまだなのに・・・
どうもしくです。

今回はオリジナルストーリーであまりキャラクターが出てきません
でしたね。

僕のはとにかく時々こつという回が有るのですよ

つぎからはしっかり出して行くつもりでるよ

ではでは18話でお会いしましょう。

さよならっ！

第18話 転校生は見かけによらず

二組的には結構な騒動に発展した一日が終わり、再び平穏な日々がやってくる。

教壇では、IS史の授業とあつて一組の担任である織斑先生が教鞭を振るっている。

「以上のことから諸君等にもISにおいて、いかにその歴史を知るといふ事が大切かと言つことが理解できたと思う。」

次に、ISを軍事転用の視点から本来の開発目的を見ていく」

別に歴史なんてどうでもいいじゃん。

鈴は千冬の授業を、表面上ビシツと内面気だるく受けていた。

内なる鈴はあくびまでする体たらくだ。

もちろん、それは外には見せない。

見せよう物ならそれこそ出席簿か、最悪小型端末が飛んでくる。

あゝあ、早く終わんないかなあ……。

この後は丁度お昼休み。

鈴は最近一夏と戦つてばかりでまともに食事をしていないことを気にして、お弁当を作ってきていた。

メニューは勿論、酢豚である。

フフンツ、授業が終わつたら速攻よ速攻！

箸もシャルロットモラウラムも、誰にも邪魔なんてさせないんだから！

先ほどまであくびをしていた内なる鈴だったが、

今はグツと拳を握つてその背後にはメラメラと闘志がたぎっていた。んでもってえ、一夏にあたしが食べさせてあげるんだもんね。

で、で、あたしの料理を食べた一夏が……。

『おい、鈴も食べてみるよ』

『い、いいわよ、あたしは』

『いいからほら』

『な、何くわえてんのよ?』

『この方が鈴を近くに感じられるだろ・・・』

『一夏・・・』

『鈴・・・』

『あん?』

的なことになっちゃってえ!!

恋する乙女の妄想は止まらない。

たとえそれが千冬の授業中であっても。

「そうだな・・・凰、

このアメリカ製のISについてその特徴を述べてみる」

「真っ白い塔の上に大きな鐘が特徴のチャペルで・・・」

次の瞬間鈴の顔面に小型端末の角がめり込んだ。

「痛ったあゝ・・・」

鈴は授業後も顔を押しさえて、涙目だった。

ちなみに言っておくと、鈴は小型端末で殴られたわけではない。

文字通り飛んで来たのだ。

すさまじい勢いで。

多分、妄想の世界へトリップしていなくても鈴は反応できなかった
だろう。

そして、そのせいで完全に鈴は出遅れた。

顔をさすりながらも、足早に一組に入ると既に一夏は
箒、シャルロット、ラウラという三匹の野良猫（鈴主観）に囲まれ
た状態だった。

鈴は、身体の後ろにお弁当の入った小袋を隠しながら一夏に近づく。

「お、鈴も来たのか」

「なによ、？も？つて！」

あたしは何かのおまけかっつての！

ついつい、いつもの調子で返してしまう。

おっといけない。

今日は一夏をお昼に誘わなければいけない。

いつもの調子では当然同じ事の繰り返しだ。

「んんツ！ ねえ一夏」

「なんだよ、鈴」

鈴は少し声を整えて名前を呼ぶと、二カツと笑う。

「ねえ、お昼行こ！」

うわツ、今のめっちゃ良い感じじゃん！

いいね、あたし超自然体！

鈴は心の中で自画自賛を繰り返す。

そして、自然体で言えた事が功を奏したか、

一夏はそれに二つ返事で返した。

「ああ、良いぜ」

その返事を聞けて、鈴の中では小さな鈴がガッツポーズを繰り返している。

心の中はお祭り状態だ。

なんだ、初めっからこうすればよかったじゃん。

早速一夏を連れだそうとする鈴に当然と言えば当然だが、残りの野良猫が邪魔をする。

「おい、ちよつと待て鈴。一夏は今日私と昼食をともする事になっ
ているのだが？」

「ふん、何を勝手な事を。私の嫁なのだから、私と共に食事をする

のが自然・・・いや当然であろう」

「ちよつと、何二人とも勝手に決めてるの！ この前僕も約束してたんだから僕とだよ」

だがこの反撃は鈴にとつて予想の範囲内だった。

何せこちらには最終兵器？愛情弁当の酢豚？という最終兵器がある。鈴は余裕の笑みで三匹の野良猫を見やると鼻を鳴らす。

「ふふん、残念でした。一夏は？あたし？と一緒にご飯を食べるの。だつてさつき良いつて一夏本人が言ったじゃない？」

「貴様、拡大解釈をするな！ 一夏はお前の昼食に行こうという提案に賛同しただけだ！」

「でも肯定は肯定じゃない！」

両者一歩も譲らない。

いや譲れない。

ここを譲ってしまったら、双方ともに一歩リードを許してしまう事になるからだ。

それはラウラムもシャルロットも同じ事。

だが、あまりがつついて言い返すのも一夏の心証を悪くすると思ひ、両者幕への賛同と言う形で、自分の意見をぶつける。

「いい加減にしる、大体二組の貴様がなぜ優先的に一夏を連れて行けるのだ？」

幕の言うとおり一夏は、昼食に行くと言う事に賛同しただけだろう」

「そうだよ、鈴。無理やりすぎるのは嫌われるしね」

それでも鈴は余裕を崩さない。

しばらく三人の意見を聞き流していたが、

ここだつと言うタイミングで最終兵器を持ち出す。

「そう言えば一夏さあ、酢豚食べたいつて言ってたじゃない？」

今日ね、本当に偶然朝作ったのが余つてて持ってきてるんだあ」

「・・・なッ！！」

三人の顔が引きつる。

唐変木の一夏は、おおそうなのかと酢豚の登場に喜ぶが、他の三人

は、
いや恐らく一夏以外の全員は、それは鈴が一夏のために用意したも
のだと言う事を直観する。

鈴は勝ち誇ったような顔で三人を見下す。

勝った！

やった！！

あたしの独り占め！！

鈴は飛び跳ねて喜びたい衝動を抑えて、改めて一夏を一組から連れ
だそうとする。

だがそこで、鈴にも予想していなかったところが一夏の口から飛
び出した。

「なあ、筈たちも来いよ！　鈴の所の酢豚って滅茶苦茶旨いんだぜ
？」

なあッ！！

余裕の笑みが一転、焦りに変わり今度は三人にざまあみろという視
線が注がれる。

鈴もどうやら、一夏の唐変木発言まで完璧に予測する事は不可能だ
った。

「んんッ、そうだな。では相伴にあずかるとしよう、うん。鈴の料
理か、？是非？参考にしよう」

「そうだな、私も中国の料理には？興味？がある」

「僕もすつごく？楽しみ？だよ」

三人の嫌みたつぷりの言葉に鈴は自分の敗北を悟った。

「……………鈴、策士、策におぼれたね」

「うるさい」

一部始終を見ていたアルデイに肩を叩かれる。

鈴はそれに力なく返すのが精いっぱいだった。

その後ろでは呆れた様子でセシリアがため息をついていた。

あたしが吐きたいわよ、ため息……………。

とりあえず僕は、鈴を立たせて皆で屋上へ向かった。
天気もいいし屋上では一夏の提案だったが、
なるほど確かに気持ちいい良い風が頬をなげる。
と言っか、少し暑い。

そう言えばもうすぐ夏だね。

ちなみに、策におぼれた鈴は皆が輪になって座ってからもブツブツと
文句を言っていたがシャルロットになだめられてなんとか気分を持
ち直していた。

「さて、それじゃあいただくとするか！」

鈴が中央に置いたタツパーにまつ先に一夏が端を伸ばした。
豚肉をつまむとひよいと口に放り込む。

「うん、旨いぞ鈴！ 本当に料理上手くなっただんな！」

「ほう、そんなに上手いのかでは私も食べるとしよう」

「ふむ、確かに程良いとろみがあつて口触りも良い。確かに上手い
な」

ラウラと箒が端を上手く使つて、酢豚に舌鼓をうつ。

しかしシャルロットだけは、もじもじと手を出してはひっこめるを
繰り返していた。

それを不思議に思った、一夏がシャルロットに尋ねた。

「どうしたんだ、シャル？」

「あ、うん・・・いや何でも」

「食わないのか、これ美味しいぞ？」

「その・・・えっと・・・僕、まだ上手く・・・お箸使えないんだ・・・」

ああ、なるほど。

つまり恥ずかしかったんだね。

確かに箸って、アジア圏中心の文化だよな。

最近ではアメリカでもつかわれるけど

棒二本で挟んで食べるっていうのが中々やってみると出来ないんだよなあ。

それに、作法で箸の身を使って食事をする文化が確立しているのは日本だけでも言われているらしい。

それぐらい、文化に根づいているのは分かるがそれでも難しいものは難しい。

僕も姉さんに教わってやっとできたぐらいだし。

「まあ、私もこの箸と言う物は苦手ですわね」

セシリーが少し困った顔で酢豚を見つめる。

確かにイギリスも、基本的にお箸は使わない文化だもんね。

僕は、ヒヨイツと箸で豚肉を取るとセシリーの口元に持っていく。

「はい、食べる？」

「え!？」

少し顔が赤いけど……。

「ああ、ごめん。やっぱり恥ずかしいよね」

僕はスツと、箸を下げようとするセシリーがあ、ああと名残惜しそうに

その箸を追いかけてくる。

「何？ あ、やっぱり食べたかった？」

「あ、いや……そ、そうですね……せっかくですしいただきましようか」

僕はセシリーの口元にもう一度箸を近づける。

するとセシリーは更に頬を赤らめながらも上品にゆっくり小さく口を開く。

「良い？ セシリーあ〜ん……」

「……んむ」

そしてゆっくり味わうように何度も咀嚼しながら酢豚を味わう。

「ね、美味しいでしょ？」

「・・・ええ、とても！」

セシリーは満面の笑みを浮かべてうれしそうに答える。

そんなに酢豚が食べたかったんだね。

それは良かった。

と、そこで皆の注目が集まっている事に気が付く。

そしてそれを見ていたシャルロットがハッと何かに気が付き

一夏に懇願のまなざしを送った。

「ね、ねえ一夏！ 僕も・・・その食べたいなあ〜」

「ん？ 酢豚か？ いいぜ」

一夏が酢豚へ箸を伸ばしかけてようやく残りの三人は

シャルロットがしようとしている事に気が付きそれを必死に阻止しようとする。

「しゃ、シャルロットあなたにはね、あたしが食べさせてあげるわよー！」

「よし、鈴そのまま抑えている！」

「酢豚の確保成功。続いてシャルロットへの投下を開始する！」

「わわわわわッー！！」

ほんと、こういうときのチームプレーは凄いと思う。

「ねえ、セシリー。こういうときの連携って凄いよね・・・ってセシリー？」

「・・・アルにあ〜ん・・・アルにあ〜ん・・・」

・・・呪文？

そんな感じで昼休みは過ぎて行った。

ええと・・・二年一組・・・二年一組。

聡也は、名刺を持って二年一組に足を進めていた。

目的は言うまでもなく、鳥越 聡華である。
ええと・・・ここか。

当然だが、二年生に男子は居ない。

全員女子だらけの中に、ポツンと聡也が現れた事で

一気静かになり、女子の注目が否応なしに聡也に集まる。

ただ一人を除いては。

聡也は、これ以上の騒ぎになる事を警戒してあえて名字で聡華を呼ぶ。

「鳥越・・・先輩」

名前をつぶやくと今度は女子の注目が聡華に集まった。

聡華は、ため息について面倒くさそうにこちらを睨むとガタツと立ち上がる。

そして、ズンズンと近づいてきてすれ違いざまに首根っこを引つ張った。

「ちよつと来い」

「わ、つちよ！」

そのまま聡華は、聡也を階段の踊り場まで引つ張っていく。

そして他の生徒の目が、亡くなった事を確認してから声を荒げた。

「てめえな、何しにきたんだ!？」

「い、いやその・・・用ってほどでもないんですけど」

「あのなあ、お前は目立ちすぎるんだよ。」

大体あなる事ってのは想像できたろ」

聡華は聡也の頭をコンコンと二、三回軽くコツク。

「それはそうですけど・・・」

「用が無いなら来るな、分かったな。こっちも迷惑なんだよ、色々騒がれると」

聡華はそれだけを言い残して聡也のもとを去ろうとする。

実のところ聡也の行動に明確な意図はない。

ただ、聡華に会いたかったそれだけだった。

あの、姉に瓜二つの聡華に。

でも確かに、聡華の言うとおり。

自分は男子で、良く目立ってしまう。

用が無いのにうるちよろされれば確かに迷惑になる。

だが……。

ふと、聡也に一つのアイデアがひらめいた。

そうだ。

用があればいいんだ。

聡也は聡華の後ろ姿を見やる。

そして声を張り上げた。

「用があれば、本当に良いんですね!？」

それに聡華はこちらを振り返り、怪訝そうな顔を向けたが

いつもの調子でぶっきらぼうに答えた。

「……ああ、用があればな」

フフフっ、なるほど。

用があればいいんだ……用が!

心の中でつぶやくが早いか、聡也は自分の教室へ向かって走り始め

た。

作ってやるうじやないか!

ちゃんとした理由を!

聡也は、二組に戻るなりこのクラスの風紀委員である

代表候補生のロツソ・ミオネッティに話しかけた

ロツソは綺麗な赤い髪を持ち、半眼の一見やる気のないような目が特徴の少し無口なイタリア人だ。

「ロツソさん」

「……何？」

ロツソはそっけなく返事をする。

ロツソは特に何をしているでもなく、

空中投影型のディスプレイに表示されている
自分のISのものであるう情報に目を通していた。
そんなロッソの机をわざとバンッと叩く。
ゆっくりと目を細め睨むロッソに聡也は言った。

「風紀委員を僕に譲ってください」

「君・・・何言ってるの？」

当たり前と言えば当たり前前の返答だ。

既に決まっている委員会を代われと言っているのだから。

ロッソは冷めた目で聡也を一瞥してから、

何事も無かったかのようにディスプレイに目を戻した。

聡也のアイデア。

それはずばり、風紀委員になることであった。

それなら聡華に会うのに用も何も関係ない。

同じ委員会なのだから、用が有ろうが無かるうが嫌でも顔を合わせられる。

そのためにも聡也には軽くあしらわれた程度で、

引き下がるわけにはいかないし何よりも聡也には考えがあった。

「ちよつと話を聞いて下さいよ、ロッソさん」

「だから・・・聞いてるじゃない。」

それについて・・・返答もしたわ。

これ以上何か必要？」

ロッソは既に目線すら動かさそうとしない。

だが聡也は構わず言葉を続けていく。

「僕は、風紀委員を譲ってくれって言ったんです」

「・・・だから、何故？」

「僕がやりたいだけです。わかりやすいでしょう」

「・・・いや」

来た！

その言葉を待っていたんだ。

明確な拒否。

それがあってようやく聡也の策は動き出すのだ。

「そこを、何とかお願いしますよ。それに風紀委員って結構物騒な連中も相手にしないといけませんし」

「・・・大丈夫。私、こう見えても代表候補生。」

「僕は、心配してあげているんですよ？」

少し挑発的な台詞でロツソを煽る。

ここまでこれば、もうロツソの無視は来ない。

なぜならその口から“代表候補生”と言う言葉が飛び出したからだ。少なくともロツソは今少しずつ苛立ち始めているはずである。

代表候補生が、いくらISを使えるとはいえ男に心配されるというのは女尊男卑のご時世。

プライドが許さないだろう。

「・・・あなたいちいち、感に障るわ」

「そうですかね？ でも本当に心配しているんですよ」

「・・・余計な心配はいらない」

あともう一押しだろうか。

何にしてもロツソは、初めのポーカーフェイスから今では、こちらを再び睨みつけて目に見えて怒っているのは分かる。

「でも、本当に僕風紀委員がやりたいんですよ。大体僕にだって選択権があると思いませんか？」

「・・・選択権？」

「そう。元々転校生の僕は、皆さんが委員会役員を決めた時期には居られなかった。

いくら女尊男卑と言っても学生生活ぐらい平等にチャンスがあっても良いと思いませんか？」

ロツソはしばらく考えて、コクンと頷いた。

「・・・それはそうね」

「だから・・・あ、そうですね。良いことを思いつきましたよ」

聡也はあたかも今思いついたかのような素振りで、

ロツソに話すが当然これは初めから聡也が考えていた事だ。

それは・・・

「わかりやすく、模擬戦で白黒つけましようよ」

「・・・良いの？ あなた無様に地面に這い蹲ることになるよ」

「それは、どうでしょうね？」

「・・・ッ！！」

この場合ロツソが聡也を挑発するより、聡也がロツソを挑発した方がより効果的だ。

聡也は、今だけは女尊男卑の社会に感謝したいと思った。

「・・・その言葉忘れないでね」

ロツソはガタツと立ち上がると、足早にその場を後にしようとする。

その後ろ姿へ聡也は、大事な確認事である日時を尋ねた。

「試合は何時にしますか？」

「・・・いつでも良い」

「では、早速なのですが今日の放課後でどうです？」

聡也の提案に無言で頭を縦に振り、聡也もそれに頭を振り替えた。

そしてロツソは今度こそ本当に教室を後にする。

その後ろ姿を見送りながら聡也の頭にふと疑問が浮かんだ。

・・・はて、彼女どこへ行ったんでしようか。

もうすぐ授業なんですけどね。

そして、少し考えてサーツと青ざめた。

しまった、次は実習じゃないか！

聡也はロツソの後を追いかけるように教室を飛び出す。

聡也とロツソ。

二人の内に秘める闘志を現すかのように、頭上にはもうすぐ夏の訪れを

予感させる暑い太陽がこうこうと照りつけていた。

さて、今日の授業も残すところこのHRだけとなった。

前では織斑先生が、連絡事項を話している。

「先ほど、諸君に配ったプリントに臨海学校に最低限必要な持ち物が書かれている。

当日忘れ物をして泣きついてきても知らんぞ。

その時は一人さみしく部屋で勉強でもしている」

相変わらず辛辣なお言葉。

では以上と話を区切り、教室を後にする織斑先生。

そしてようやく放課後だ。

僕は、昨日予定していたように聡也がなぜ風紀委員ともめごとを起こしたのかを調べるべく、

とりあえず僕のクラスの風紀委員に話を聞いた。

「え？ 一条君と風紀委員の事？」

「そそ、何か知らないかな？」

ん〜っと、女子は顎を指でトントンと叩きながら、視線を宙に泳がせる。

「確かに、二組の一条君が風紀委員ともめごとを起こしたって言う話は聞いたけど・・・」

「誰ともめごとを起こしたとか、分かんない？」

「誰・・・あ、名前は分かんないけど上の学年だっという話は聞いたよ」

なるほど、上級生か。

う〜ん・・・同級生ならまだ探りやすかったんだけど。

僕は礼を言っつてその場を離れる。

さて、上級生か。

・・・ふむ。

理由は全くわからなかったが、どうやら聡也がもめごとを起こしたのは

一年生以外だと言う事は確定した。

それでもまだ二年か三年か。

そこが問題だよね。

「何をしていますの？」

聡也の事についてあれこれ顎に手を当て考えていると、それを不思議に思ったセシリーが声をかけてきた。

「いや、ちよつとね」

「ちよつと、なんですの？」

流石に今回は二人だと動きにくいから、旨くかわしたいところなんだけど・・・。

「だから、ちよつと」

「むむ・・・なんだか怪しいですわね」

「あ、怪しくないよ」

なんでこういうときだけ変に疑り深いんのさ。

僕は苦笑いを浮かべながら、何か良い言い訳は無いものかと頭をひねる。

しかし、僕もこう言う時に限っていい案が浮かんでこなかった。

「ああ・・・ええと」

「何か隠していますわね」

「いや、隠してと言うか人を探して・・・」

あ。

言っちゃった。

「人探しですか？」

なに口滑らせてるのさ僕。

そんな事言ったら確実にセシリーは・・・。

「なら、私もお手伝いしますわ」

・・・だよね。

ああ、もう。仕方ないや。

僕は諦めの表情でため息をつくとき、セシリーに人探しの内容を説明した。

「なるほど。聡也さんの・・・」

「まあね、聡也って真面目そうだし、何か問題を起こしそうには見えないからね。少し気になっちゃってさ」

「確かに、中々大人しそうな方ではありましたが・・・でもそういう方って案外そうでもないのかもしれないよ？」

まあ、誰にでも裏があるとは言っけど・・・。

あの聡也が？

僕は頭の中でオラオラと幅を利かせて、そこらじゅうに喧嘩を吹っ掛ける聡也を想像する。

そしてそれを苦笑いで否定した。

いや、ないない。

流石にそれは。

「ま、まあどつちにしても、気になるでしょ」

「確かに。でもまだまだ情報が少なすぎますわねえ」

「とにかく、他のクラスの人たちにも聞いてみようよ」

僕はそう言つと、二組へ向かう。

二組の風紀委員が聡也と面識があるかどうかは分からないが、多分、一組の風紀委員よりは情報を持っているだろう。

ガラッ

二組の教室のドアを開け、中に入る。

僕はグルッと、教室内を見渡した後、手近にいた子に声をかけた。

「ねえ、このクラスの風紀委員の子どこにいるかしらない？」

「え？ あ、ロッソ。え〜っと・・・あれ、居ない」

「いませんの？」

「おかしいな、さっきまで座ってたんだけど」

ポリポリと頭をかいて首をひねる女子。

僕はその子に、このクラスの風紀委員の子の特徴を聞いて二組を

後にする。

その特徴って言うのが。

・赤い髪

・イタリア人

・無口

・・・どうしろって言うんだいこれ・・・。

これでどう人物を特定しろと？

聞く人間違えたかな。

ふう、とりあえず他のクラスも回ってみよう。

僕たちは、次の教室に足を進める事にした。

一通りクラスを回り終え自分のクラスに戻ってきた僕たちだったが、結局分かったのは、「上級生」「風紀委員」というたったのこれだけ。

しかも二組の風紀委員に至ってはまだ見つかっていない。

「はあ・・・中々人探して大変だねえ」

「これだけ人数のいる学園ですし・・・

まあ、そこまで簡単に行くとは思っていませんでしたけれど」

セシリーも腕を組んでうーんと唸る。

せめて二組の風紀委員の子が見つければ何か分かると思うんだけどなあ・・・。

二人して頭を悩ませていると、不意に教室の扉が開いてさっき二組で僕たちにロツソという風紀委員の子を教えてくれた女子が駆け込んできた。

「ねえねえ、大変大変！」

息を荒げて声を張り上げるその様子に、

ただならぬ事態を予想した僕たちに一瞬緊張がはしる。

僕たちの近くにいた別の女子になだめられながら、

その子は言葉をまくしたてた。

「ロツソと一条君が・・・！」

「「え！？」」

思わず声が重なる。

聡也が！？

それにロツソ！？

「お、落ちつてください。一体何がありましたの？」

「一条君とロツソが・・・第三アリーナで！」

僕とセシリーは顔を見合わせると、弾かれたように教室を飛び出した。

まさか、あの聡也が本当に？

何のために。

それに相手はまた風紀委員。

・・・なんで風紀委員にこだわってるんだ？

僕はぐるぐると頭の中で、答えの出ない同じ事を考えながら第三アリーナへ急いだ。

僕たちが第三アリーナへ到着すると既に多くの人だかりができていた。

人ごみを掻き分け、アリーナの中が見える位置まで移動する。

今いる場所は観客席ではなく、強化ガラスで守られた通路の一角。

そこからアリーナを見下ろすとアリーナの中央で対峙する

聡也とロツソの姿があった。

まだ両者共にISを起動させていなかったが、二人からは窓越しにも分かるぐらい

凄い闘志がビリビリ伝わってくる。

一体全体何があつてこんなに睨みあつてるんだ？

あまりの両者の雰囲気若干、気おされていると聞きなれた声が聞こえる。

「あーーーーー！ あいつまた何騒ぎ起こしてくれてんのよ！！！！」

鈴……。

しかもかなりご立腹のご様子。

そりゃそうか。

二組が目つけられたってあれほど怒ってたもんね。

「鈴、まあまあ落ち着いて……」

「アルデイ、それに……えーっと」

「鈴さんわざとやってますでしょ……」

「アセロラだっけ？」

「セシリアですわッ!!」

すごい！ 文字数しかあつてないミスなんで初めてだ。

でも、アセロラか……ふむ。

そう言えば最近セシリー肌荒れがどうとかって……。

「アールウゥゥ、何かおかしなこと考えていませんか？」

セシリーにジト目で睨まれ、僕はすぐさま考えを切り上げる。

……全く本当に読まれやすいね、僕。

頼んだポーカーフェイスのテキスト全然届かないし……。

「あんたらねえ……いちゃつくのは良いけど今それどころじゃな

いっつーの!!」

「別に、いちゃついては無いでしょ!」

「あ、……そうですわね」

ん？

セシリーがなんだか不満そうに……。

つて、確かに鈴の言うとおり今はそれどころじゃない。

僕は視線を聡也たちに向ける。

二人はまだ全然動いていない。

……聡也。

本当に、どうしたって言うんだい？

その問いかけを心の中で叫びつつ、

僕たちは両者をジッと見守った。

「……逃げずに来たのは良いけど……後悔するよ」

「だから、それはやってみないと分かりませんよ」

聡也はロツソの挑発的な発言に、更に挑発しかえした。

少しムツとするが、すぐにいつも通りの無表情に戻る。

そうそう、もつと怒って貰わないといけませんね。

ただでさえ、性能の劣るIS-Nなのだ。

必死に短い時間で情報収集したとはいえ未知の相手。

揺さぶらなきや確実に勝てないでしょ。

それにここまで来たんだ。

策士策におぼれるなんてバカな事は許されない。

「……ほんと、癪に障る男」

「それは、失礼しました」

「……いいわ、その自信砕いてあげる」

ロツソの目つきが変わる。

ロツソは左手をゆっくりと顔の前に持つていくと

ISを起動させる。

「あなたに、本当の夏を教えてあげる」

「おあいにくさま……僕は春が一番好きなんですよッ!」

聡也も言い返すと、シリィンダーカードにキーを差し込みIS-Nを展開。

光に包まれ一瞬で真っ白い装甲が展開され? ホワイトアウル? が姿を現した。

そして少し遅れて、ロツソのイタリア製IS? ペルフェッド・エスダーテ? もその姿を晒す。

真つ赤な鋭角的なフォームに、右手に蛇腹剣。
そして左手には武装とシールドバリア発生装置が
組み込まれた攻防複合兵装防盾を備えている。

あれが・・・ロツソさんの。

データ上では見ていたが、やはり実物はいつ見ても迫力が違う。

そのISを注意深く観察していた聡也だったが、ふとロツソの様子
がおかしい事に気が付く。

ISを展開したと言うのに、だらりと腕を垂らして下を向いている。
・・・なんだ？

・・・早速何か仕掛けてくるつもりか？

聡也は警戒しながらも観察を続ける。

すると突然、不敵な笑い声が聞こえた。

「フ、フツ・・・フフツ・・・ハハッ！　ハハハハハハッハア
ッ！！」

それは、紛れもなくロツソのISから聞こえてきたものだ。

でも・・・明らかにロツソさんが出すよな声じゃ・・・。

声に焦る聡也を尻目にロツソがゆっくりと顔を上げる。

その顔を見て聡也は驚いた。

無表情だった顔は、不敵にニヤツと笑う口元に

目じりはつり上がって、その瞳には確固とした意志が見える。

「あ、あなたは・・・!?」

「へえお前、楽にあたしを倒せるんだってなあ・・・ええ？」

あまりの豹変ぶりに聡也の顔に冷や汗が流れる。

それでもなんとか睨み返すが、いやな汗が止まらない。

「お前も焼いてやるよ・・・情熱の炎で・・・たっぷりとなあ！
！！」

その声が合図だったのかは分からないが、

風紀委員の座をかけた、真剣勝負の火ぶたが切って落とされたのは
間違いなかった。

第18話〈転校生は見かけによらず〉（後書き）

今日桜見てきました。

もう満開だったので・・・

雨でも降ったらこっちも散りそうです。

どうもしるくです。

おかしいですね。

最近セシリーの出番が減りつつあるような・・・。

オルコツ党としては、なんとか無い知恵絞りたいんですけどね・・・。

あ、無い知恵は絞れないですね（爆

それでは19話でまた！

失礼します。

さよならッ！

第19話〜それがお前の強さだな？〜

聡也とロツソの騒ぎを聞きつけた教師陣が、緊急で正式な模擬戦と定めたため

先ほどの様な混乱は解消し生徒も皆アリーナの観客席に座って観戦している。

そして僕とセシリー、鈴の三人は織斑先生に無理を言っつて管制室に入れてもらった。

管制室では山田先生の代わりに、榊原先生がコンソールの前に座ってヘッドギアをつけている。

織斑先生は相変わらず、腕を組んで仁王立ちだ。

「・・・全く、やっぱりガギの扱いは疲れる」

「まあまあ、織斑先生ぼやかないぼやかない」

それに、一条君とロツソさんのISの稼働データも取れるじゃないですか」

榊原先生は、カタカタと送られてくるデータを処理しながら織斑先生をなだめる。

織斑先生はフンつと鼻を鳴らすとモニターに目をやる。

それにつられるように僕たちもモニターに目を移した。

そこには激しい攻防を繰り返す二機のISの姿。

・・・あ、片方はISじゃないんだっけ。

織斑先生は聡也を目を細めてじっくりと見た後、僕たちに声をかけた。

「お前たち」

「はい？」

代表するかのよう僕が答える。

セシリーも鈴も急に呼ばれた事に少し驚いたのかキョトンとした顔をしている。

「一条のIS・・・似ているな」

流石は織斑先生。

すぐに分かちやっただね。

僕はそれに静かに首を縦に振る。

「何かあいつから、あのISについて聞いているか？」

「……」

一同気まずく下を向く。

いくら織斑先生にとはいっても、IS・Nの事をすんなり話す気になれなかった。

確かにまだ聡也を疑っていないかと言われればそれはNOだ。

多少なりとまだ警戒している部分はある。

それに今回の事だっただけである。

何の理由で風紀委員ともめごとを起こしているのかもわからない。

？はなから疑ってかかるのはもうやめないか？一夏の声が頭の中で響く。

……

だから僕はまだこの事を話すときじゃないと判断して、勤めて明るく織斑先生に答えを返した。

「あはは、それが僕たちは何も。それに聡也のISだっただけ初めてみましたし」

「……ん、そうか」

織斑先生は一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに視線をモニターに戻した。
……なんとかあったかな。

チラツとセシリーと鈴を見やると、二人揃って小さくグツと指を立てていた。

うん……なんて見事なポーズの一致。

「ねえセシリー、鈴。前の大会の時にふと思っただけだけど君たちって仲良いの？」

「何を言いますの、それはつまりこの私の事を知らないような無知な方と同じレベルに見られてるってことですよ！？」

「そーよ、こんな腹黒いのと一緒にしないでよねッ！」

「黙って見てろ!!」
二人同時に殴られて、二人同時に頭を抱える。
・・・仲良いじゃん。

つく、予想以上に!

聡也は汗とそして冷や汗を一緒にかきながら、必死にロツソの攻撃を避け続けていた。

ロツソのISは？ペルフェッド・エスダーテ？。

日本語訳は？完璧な夏？

その名の通り、一撃は軽いものの総合的な火力という面では中々のものだ。

搭載火砲はさほどでもないが連射力が半端じゃない。

それに加えて、伸縮自在の蛇腹剣？テンポラーレ？の不規則かつ変則的な攻撃に

聡也は攻めあぐねていた。

？ホワイトアウル？の搭載されている武装はすべてが射撃武器。

近接戦闘では？打鉄？にすら勝てない出力では使えない近接武器を搭載するよりも

使える射撃武器をといた考えだが、いかんせん連射力に圧倒的な差があった。

構える前に、左腕に搭載された攻防複合兵装防盾？パーチエ・ディフェーサ？の

内臓バルカンによって荷電粒子砲が反らされてしまう。

「ほらほらあ、もっとあたしを興奮させてくれよ!!」

ロツソの？テンポラーレ？が聡也を襲う。

蛇腹剣は、通常の剣とは違いその機動がきわめて不規則。言ってみれば鞭に刃が取り付けられているようなものだ。

・でも、いくら蛇腹って言ったって、振り下ろしてくる方向だけは絶対に一方だ。
しっかり見切れば！

聡也は刃の動きを凝視し、それをなんとかかわすがロツソはニヤリと笑うとその方向へ
？テンポラーレ？を払う。

「何！？」

「甘めえよ、プロセッコより甘々だぜ！！」

「っと、うわっ！　ぶ、プロセッコは特に甘いお菓子じゃないでしょ！」

ちなみにプロセッコとはイタリアの伝統的な菓子パン、パネトーネの一種。

生地練り込む干しブドウを「プロセッコ」というワインに漬けたんだ風味豊かな逸品だ。

ちなみに、パネトーネとはイタリア語で？大きなパン？って意味らしい。

って、そんな事言ってる場合じゃなかった！

ロツソの払った？テンポラーレ？は、腕の動きに機敏に反応して向きを変える。

その動きはまさに、獲物の喉に食らいつく獰猛な蛇そのものだ。

とっさの事に反応しきれず、完全に避ける事の出来ない聡也は？テンポラーレ？が

直撃する瞬間、荷電粒子砲を自分の前に付きだす。

突き出した荷電粒子砲を？テンポラーレ？が切り刻み残っていたエネルギーが大きな爆発を起こす。

そして爆風で一瞬両者が見えなくなった。

「あんだと！？」

聡也はその、素っ頓狂な声を聞き洩らさなかった。

素早くバツクパツクからレールガンを取り出すと、
声のした方向へ迷わず引き金を引く。

「ちっ！」

「離すのが好きなのは良いですけど、おしゃべりしすぎるのも考え
ものですね！」

反撃らしい反撃には出れたものの依然として、距離がある。

本来なら射撃武器オンリーの？ホワイトアウル？は、

このぐらいの間合いが一番戦いやすいのだが・・・。
思った以上にあの蛇腹剣が厄介ですね。

しかも長さの割に、かなり手元の操作に機敏に反応してくる・・・。

まさか振り下ろした後に軌道を変えられるとは。

それに・・・。

聡也は撃ちながらチラツとバツクパツクを見やる。

とっさの判断でなんとか直撃は待逃れたが、

一番威力のある武器の一つを失った事は痛い損失でもある。

仕方がない・・・。

下手に間合いを取って蛇腹剣に苦戦するぐらいなら、こっちから間
合いを詰めてやる！

聡也は、レールガンをそのまま撃ちながら、一気に間合いを詰める。

しかし、それをさせまいとロツソはバルカン砲を掃射し、聡也を牽
制する。

「おしゃべりがなんだってえッ！」

「こんなもので！」

「ッはあ！ 良いね良いね、その面あ、ゾクゾクしちまうだろうが
あー！！！」

ロツソは頬を赤く染めながら興奮気味に、バルカン砲と小型の荷電
粒子砲を撃ち続ける。

聡也は、削られていくシールドエネルギーとにらめっこしながら、
最適なルートで被弾を最小限にとどめ、間合いを詰めながらチャン
スをうかがう。

・・・流石に今の火力じゃ落とすきれないけど・・・。
至近距離の一撃なら追撃の足がかりにはなるはず。
それには、あの蛇腹剣を相手に振らせる必要がある。
距離が離れているから、動きが読みづらいんだ。
近くならその動きもまだ単調なはず。
そしてロツソが蛇腹剣を振り下ろしたその時
聡也にとって最大のチャンスが訪れるのだ。
「ほらあ、次はコイツだぜ!!」
よし、貰った!

ロツソは？テンポラーレ？を振りかぶるとそれを素早く振り下ろす。
聡也はその刃に沿うように飛び、一気に正面に躍り出た。
その流れでロツソにレールガンと荷電粒子砲を向ける。

「この距離ならはずしませんよ?」

「てめっ!?!」

未だに？テンポラーレ？を振り切った状態です。つさに反応できずに、
ロツソは焦りの声を挙げる。

・・・わざと。

ロツソは口角を釣り上げ不気味に笑う。

「・・・なんてなあッ!蛇腹剣つてのは、

こういうこともできんだよ、馬鹿がッ!!」

叫び、手を素早く払うと先ほどまで伸びていた？テンポラーレ？が
瞬時に収縮し

、日本刀程のサイズに変わる。

このサイズなら、敵が至近距離に居ようと関係ない。

いやむしろその距離こそ間合良かった。

聡也は、無理やり右側のスラスタを噴かして

機体を正面から逸らそうとするがそれよりも、ロツソの？テンポラ
ーレ？の方が早かった。

「ぐっッ!」

ほぼ真正面から、？テンポラーレ？を食らった聡也は衝撃で真下へ

飛ばされる。

そこへ再び、蛇と化した？テンポラーレ？が襲いかかる。体勢すらままならない聡也はまともに反応することすら出来ず、蛇の猛攻に捕らわれてしまった。

繰り返し訪れる身を切り刻む痛み。

衝撃に耐えられない？ホワイトアウル？の装甲が次々に破壊されていく。

こ、このままじゃ、負ける！

負けたら意味がない。

ここで負けたら、全てが水の泡だ。

勝たなきゃ。

・・・勝つんだ！！

聡也は、？テンポラーレ？で弾かれたボロボロの機体を次に襲い来る？テンポラーレ？の軌道に合わせて反転させる。

「はッ！ だから無駄なんだって、こいつの反応速度はもう見て知ってたんだろーが！」

ロツソは聡也に合わせて“？テンポラーレ？の軌道を修正する。

「こんな物お！！」

聡也は当たること覚悟で？テンポラーレ？へ向かって跳躍する。

そこは本来なら直撃コースだったが、？ロツソが軌道を変えたおかげでできた？一瞬だけ開く突破口。

聡也は右足の先を持っていかれながら、そこから脱出して持っている砲を一度バツクパツクへ戻す。

・・・砲は三門。

しかも機体はパワーアシストが弱まってきてる。

？アレ？の直撃後に装弾数全部を当てできれば・・・ギリギリ何とかなるか！？

聡也はバツクパツクのロツクをリリースし、軋みを上げる機体と身体で宙を回る。

フリーになった砲が全てバツクパツクを離れて、くるくると宙を舞

う。

それを見て何かを感じたロツソが今度こそ本当に焦りの声を上げた。

「な、何しようって・・・!?」

「すいませんね。少し火力不足かもしれません」

「訳分からねえことを！」

何するか知らねえが、させつかよ！」

聡也は一度ゆっくりと瞳を閉じて、集中した後カッと目を見開いて叫んだ。

「獅哮閃！」

ロツソは？ テンポラーレ？ を振るうが、

それが聡也に直撃する前に身体に強烈な痛みが走った。

？獅哮閃《しこうせん》？

本来は？ ホワイトアウル？ の四門の砲を使って行う

瞬時多目的射撃《マルチロツクシュート》で、最大八機まで一度に攻撃ができる。

バックパツクのロツクを全て解除し、

ラックしていた砲を急速な旋回によって目標方向へリリース。

それを聡也が落下する前に“アブソリュート・ターン？”を

駆使して全ての引き金を引くという曲芸のような技だ。

ちなみに目標の数によって旋回の仕方は異なるが、

目標が一つの場合は一般的に宙返りを行う。

セシリアの時のように。

いくら、万全の状態では無いとはいえ三門でも威力は低くない。

直撃を受けたロツソはこの試合初めて、後方へ吹き飛ばされた。

「くっそ、このー！」

「まだまだいきますよー！！」

そこからはもう聡也のターンだった。

レールガンと荷電粒子砲の残弾数すべてをロツソに向かって撃ちまくる。

ロツソは、すばやく反応して？ パーチエ・ディフェーサ？ のシール

ドを展開するがそれよりも早く

聡也のレールガンが、展開装置ごと？バーチエ・ディフェーサ？を切り刻む。

それと同時に？バーチエ・ディフェーサ？が装着されていた左腕が爆散した。

「うあッー!!」

苦悶に表情をゆがませるロツソ。

だがそれでも聡也は射撃をやめない。

ガキンッ!

レールガンから残弾の尽きた音がすると聡也はレールガンを投げ捨てもう一門のレールガンに取替えまたトリガーを引く。

それからすぐに荷電粒子砲のエネルギーが底をつくと、

レールガンを乱射しながらロツソに肉薄する。

その一発一発がロツソの機体の、腕を、脚を、スラスターをそして武装を、

そのすべてを破壊していく。

そして聡也が肉薄したところには、すでに？ペルフエッド・エスターテ？は

戦闘はおろかP I Cで空中に浮かんでいることすらままならないほどボロボロになっていた。

「これで、終わりです!!」

「う・・・あつ・・・」

勢いの死んだ虚ろな目でこちらを見やるロツソに向かって聡也は、肩を一発レールガンで弾き仰向けになった所へ、残っている左足の踵を振り下ろした。

ズガアアアアッ!!

大きな砂煙を巻き上げ、アリーナの地面へ叩き落されるロツソと？ペルフエット・エスターテ？。

ロツソはまだ、かすかに残る意識で地に伏したまま片手を伸ばすが、すぐに力なくその腕を地にたらしした。

それを確認して聡也は、勝利を確信してホッと胸をなでおろす。

しかし、次の瞬間先ほどとは比べ物にならないほどの大きな砂煙と共にアリーナが揺れた。

管制室へも、アリーナの異常はすぐに伝わった。

何が起こったのかわからず啞然として砂煙で一時ブラックアウトしたモニターを見つめる僕たちと

対照的に織斑先生は、険しい表情で榊原先生に指示を飛ばしている。

「何だ、何があった？」

「まだ、モニターが回復してませんからわかりませんよ！」

そこへ、真っ先にわれに帰ったセシリーが声を挟んだ。

「ここら辺の頭の切り替えの早さはやはり代表候補生だろう。」

「生徒の、避難状況はどうなっていますの!？」

「それは大丈夫みたい、今のところシステムへのハッキングは無し。ロックも何もかけられていないわ」

「よし、榊原先生。現場の教師陣に生徒の避難誘導の指示を！」

「わかりました」

織斑先生は言い終わるとチラッとセシリーと鈴を見やる。

「鳳、オルコット。事と次第によってはお前たちに、

対処に当たってもらうことになるかもしれん。ピットへ行って準備しておけ」

「はい！」

「わかりましたわ！」

力強くうなずいて管制室を後にするセシリーと鈴。

僕は、自分自身が出て行けない悔しさと不安を押し殺しながらセシリーを呼び止める。

「セシリー・・・その」

「大丈夫ですわ、こっに見えて私・・・」

「強いですのよ？だっけ」

僕は、茶化すように言う。

それにつられてセシリーの顔にも笑みが浮かぶ。

「ウフフツツ、ええ私は代表候補生ですもの」

「ああそうだね・・・。。。。本当は、

僕も・・・出られれば良いんだけどね」

そんなセシリーの笑顔を見ていると思わずポロツと本音が零れ落ちてしまう。

あの時みたいに、セシリーを信じていればいいだけなのに。

それがたまらなくもどかしい。

それに何より、ラウラの時セシリーは勝ちはしたがボロボロになった。

そしてもしかしたら今回も。

そんな不安が頭を離れない。

どうやら、みんなが言うように僕にはポーカーフェイスは無理らしい。

だっつついさつき、悔しさと不安を押し殺そうって決めただけなのに、

もう恐らく表情に表れてしまっている。

「・・・フツツ、アル？」

「ん？」

名前を呼ばれて、顔を上げると指をピストル型にしたセシリーの人差し指が

僕の眉間に狙いを定めていた。

「バーン！」

「え？ せ、セシリー？」

セシリーの行動の意味を理解できず、頭に疑問符を浮かべる僕にセシリーは優しく語りかけた。

「今ので、アルは死にましたわ」

「はい？」

「だから、今ので不安そうなアルを殺したんですわ。

だから今、目の前にはいつもどおりのアルが居る。私を信じてくださるアルが・・・」

一瞬きよとんとしてしまいが、その後すぐになぜだか笑いがこみ上げてきた。

「何を笑っていますの！ け、結構その・・・本気でやりましたのに」

「いやいや、あはは、なるほどセシリーからそんな言葉が飛び出すと思わなかったから」

「もう、失礼ですわね！」

プイツと顔を背けて足早に部屋を出て伊湖とするセシリーをあわてて呼び止めた。

「ああ、ごめんごめん。いや・・・そのちょっと驚いちゃって・・・。

でもありがとう。そうだね、僕にこんな顔は似合わない」

セシリーはこちらを振り返ってクスリと笑う。

「ええ、そうですね。あなたは笑っていませんと・・・ね？」

ハハハッ、セシリーに励まされるとは思わなかったなあ。

・・・そう、そうだ。

人生は楽しくなくちゃいけない。

変に不安がるのは楽しんでるとはいえないしね。

フフツツと笑うセシリーを織斑先生がせかし、セシリーは今度こそ管制室を後にする。

僕はその後姿を、信頼のまなざしで見つめていた。

その後ろでは、織斑先生と榊原先生がヒソヒソと声をひそめて話をしてた。

「・・・まったく、行けといったらすばやく行かんか。ばか者が」

「織斑先生、まあまあ。おかげでいいもの見れたじゃないですか」「ガキ共のノロケを良いものというのか、榊原先生？」

「本当は、織斑先生も織斑君にああいうこと、したいんじゃないんですか？」

ニヤニヤと笑う榊原先生に、織斑先生は無言でコーヒーを淹れ始める。

もちろん塩を大匙で三杯ほど入れた、ある意味スペシャルブレンドだ。

それを榊原先生の前にこれまた無言で置く。

山田先生なら引きつっていただろうが、榊原先生は別段いやな顔ひとつせず受け取り

静かに黒い液体に目を落とす。

そして。

「ほっ！」

「むぐっ!？」

おお、すばやい手つきで織斑先生の口にコーヒーを流し込んだ!？

・・・この人、すごい。

その後榊原先生が、正当な理由で織斑先生に殴られたのは言うまでもなかった。

砂煙が時間と共に晴れていく。

聡也は、ボロボロのハイパーセンサーで砂煙の奥を凝視する。

なんだ・・・。一体何が降りて・・・!？

聡也は、ハイパーセンサーが送ってきたその映像を

見なければよかったと後悔し、そしてその状況に絶望した。

そこにいたものは・・・。

「・・・・・・・・失礼します」

聡也と？ホワイトアウル？とほぼ同じ形スペックを誇る黒い翼。

「ブラック・・・・・・・・アウル・・・・・・・・」

驚きに呆然としながらも、聡也は静かにその名を口走る。

？ブラックアウル？はこちらに砲を向けバイザーで隠され目は見えなかったが

口元は不気味に笑っていた。

「・・・・・・・・何をしに來たんです？」

聡也は、声のトーンを落としてたずねる。

？ブラックアウル？は砲をおろさずにその問いに答えた。

「・・・・・・・・ちよつと、鉄くずを作りに・・・・・・・・ですかね？」

その瞬間、？ブラックアウル？の荷電粒子砲が火を噴いた。

聡也は、それをスラスターを噴かして回避するが、

はつきり言つてただ飛び上がるだけでもかなり厳しい。

PICがかるうじて生きているとはいえ、右足を失つてバランスをとるのが困難だ。

それに今、スラスターを噴かしてわかつたことがある。

それは感覚的なものだったが、次にモニターに表示された文字が感覚という不確かなものに、証拠という確かなものを上乘せる。

「右スラスターの内圧弁制御不良！・・・・・・・・・・あのときのか！」

そこは聡也が、前に修理していたところだった。

結局直しきれずに、そのままにしていた箇所がこんな時に泣きを入れてきたのだ。

故障箇所は内圧弁。

つまり今右スラスターは、全開か停止そのどちらかしかできない。細かな調整が不可能ということ。

「これぐらいなら通常飛行に問題はないけど・・・・・・・・もつと最悪なのは・・・・・・・・」

聡也は自分の背後のバックパックを一瞥して舌打ちをする。

そう、いまの聡也には武装が何ひとつ残っていないのである。

さらに全ての火力を最大稼働の状態で打ち続けたため、シールドエネルギーよりも

本体のエネルギーは残っていない。

こうして逃げ続けてはいるがいつまで耐つかは、正直わからない。ただ、どっちにしても長くは持たないだろう。

「フフツツ、今の君はもうすでに鉄くず同然だから・・・スクラップのほうが似合ってるかな!」

? ブラックアウル? の砲はは正確に聡也を捕らえ、そのうちの一発が聡也のメインスラスタを直撃する。

大きな黒煙を上げ、爆散するスラスタユニット。

推力を失い、そしてその衝撃で完全にP I Cが死に、アリーナへ墜落する。

ドシヤアアアアツ!!

「うわあああつ!!」

「・・・もう少し抵抗があれば、よかったですけどね」

うつぶせに、アリーナの地面に横たわる白き翼を黒き翼が狙う。

? ブラックアウル? はすでに勝ち誇ったような口元の笑みを浮かべていた。

もう、パワーアシストすら切れ身体に? ホワイトアウル? の装甲の重さが

あたかも今、身に降りかかっている絶望のようになにかかっている。

? ブラックアウル? が今まさに、トリガーを引こうとしたとき、

不意に何かに気がついてある方向を振り返る。

「そんなに抵抗してほしいなら、あたしたちがしてあげるわよっ!

!」一本に連結した? 双天牙月? が? ブラックアウル? を襲い、それを下へかわしたところに

? ブルー・ティアーズ? のビットと? スターライトmk?? が狙う。

「弱いものいじめは関心いたしませんわね・・・。あ、すいません。

今私たちがやっていることでしたわッ！」

セシリアは軽口をたたいて？スターライトMK？？

で荷電粒子砲を弾くと続けざまにビットで追撃する。

「セ、セシリア、それに鈴・・・」

何とか重い身体を引き起こし、二人を見上げる聡也へ両者が語気を強めた。

「あんだねえ、ボケツとしてないでとつとと避難しなさいよ！」

「あのISのお相手は私達が引き受けますわ！」

聡也はそれを聞いて、軋む機体を引きずりながら立ち上がる。

どうやら、クローズ機構まで壊れたようでこの場で待機状態に戻すことは不可能のようだった。

キシキシと軋む音が、身体なのか機体なのか分からないが聡也はとりあえずアリーナのビットの死角へ移動することにした。

移動しながら空を見上げると、“ブラックアウル？がセシリアと鈴を相手に大立ち回りを演じている。

・・・せめてもう少し、僕に実力があれば。

そんな後悔が頭をよぎる。

でもまあ大丈夫だろう。

直に増援もやってくるだろうし、それまでセシリアや鈴が落とされるところは考えにくい。

そう大丈夫・・・え！？

安堵し、セシリア達から視線を逸らしかけた時、

？ブラックアウル？の片方の砲が明らかにセシリア達とは違う方向を向いていることに気がつく。

そしてその先を、目で追うとそこには未だに気を失って倒れているロツソがいた。

まだ？ペルフェット・エスターテ？を展開しては居るが、

聡也の攻撃によってシールドエネルギーはゼロだ。

あんな無防備な状態で、？ブラックアウル？の荷電粒子砲を食らったら本当に不味い！

『あ・・ね！ 笑って・・ザツザザ・余裕じゃ・・い！』
ギリギリ生きているオープンチャネルから、ノイズ混じりに鈴の聲が聞こえる。

どうやら笑っているらしかった。

これは、いよいよ不味い！

聡也の目が？ブラックアウル？の荷電粒子砲に光が集まるのを確認する。

このままでは、目の前でロツソが！！

聡也は、機体のステータスをモニターで確認する。

モニターもノイズ混じりで見にくかったが、たった一度分のスラストー噴射は可能のようだ。

だがそれをしてしまうと、いくらロツソの前に入れてもシールドすら展開できない。

しかし聡也はそんな考えをかぶりを振って消し去ると、迷い無くスラストーに火を入れた。

僕の都合で巻き込んで、僕の都合で怪我をさせて、そして今度は僕の所為で死ぬなんて絶対にダメだ！！

聡也がロツソの前に両手を広げて躍り出たのと、？ブラックアウル？が砲を撃つたのはほぼ同時。

「しまった！？ ってあんだ何してんのよッ！！」

「下がりなさい！ 無茶ですわ！！」

鈴とセシリアの叫び声が聞こえたすぐ後に、聡也は光と超高温の粒子にその体を包まれていった。

唐突ではあるが、ロツソ・ミオネッティとはどんな人物なのだろうか。

イタリア生まれ。

代表候補生。

性格は無関心。

無表情で無口。

ISを展開すると性格が変貌する。

・・・本当にそうだろうか？

ロツソは、イタリアの小さな町の出身だ。

幼いころから非常にISとの敵性が高かった彼女は、

早くから親と引き離され、次期代表候補生として

政府の保護観察のもとに置かれていた。

そのため、これと言った友人もおらず、

来る日も来る日も監視と検査の日々。

そんな生活の所為でロツソはどんどんふさぎこんでいてしまい

日常生活では、ほとんど話さなくなってしまったのだ。

そんな彼女が唯一自分を表現出来る場だったのが、ISを操縦している時であった。

そう、聡也との戦いのおきに見せた気性の荒さこそ本来の彼女の姿なのである。

だが当時の政府はそれを精神異常と断定して次期候補から外し、

友人の居ない彼女を一方的に地元の学校へ強制編入させてしまう。

ISを使っていない時の彼女は、無口であるため結局卒業時までまったく友人ができなかった。

彼女にとって友人が出来ない事は既にもう苦ではなくなっていたが

自分の本当の姿を表現できるISをどうしても諦める事が出来ず、

彼女はその年にイタリアで行われたトーナメント形式の

代表候補選抜試験を受ける事にした。

結果は、断トツで優勝。

しかも中には専用気持ちも含まれていたにも関わらず、当時のイタリア量産機テンペスタ？型を使用したの圧勝。そのニュースはその日のうちにイタリア全土を駆け巡った。

政府もこの結果を受けて精神異常の断定を取り消し、彼女を正式に次期代表候補として認定した。

そこからは、日常生活や交友関係に若干の問題を残しつつもISの成績は負け知らず。

それなりに順風満帆な生活を送っていた。

だが、ふと彼女は思う。

・・・つまらないと。

いつもいつも、自分は勝つてしまう。

既に当時のイタリアには彼女以上に強いIS操縦者は、候補生の中にいない状況だったのだ。

だからこそ知りたい。

自分より強い相手を。

自分をより高めてくれる存在を！

彼女はそんな人物に憧れた。

そしてそのモヤモヤした気持ちを抱えながら

IS学園に、ほぼ強制的に入学させられる。

しかし彼女にとっては都合がいいことだらけだった。

周りにはごまんと、世界各国のIS操縦者がいた。

・・・だが。

そのどれもが、期待はずれだった。

またも彼女は、つまらなさにその身をうずめる。

一体どこにいると言うのか。

自分よりも強い者は。

あたしはそれまで勝ち続けなければならない。

そう・・・勝ち続けなければ。

だってあたしは、強いからだから。

誰よりも。

それが……このザマとはね。

ロツソは、焦点の合わない目をゆっくりと開く。
身体が重たい。

へへっ、パワーアシスト切れ、おまけにシールドエネルギー切れで
ガスも無えとは……。
情けねえ。

本当に情けねえ。

しかも負けたの男だぜ？

ロツソは動かない身体で、上空の景色を眼だけ動かしてチラッと見
やる。

あれ、なんで誰か闘ってやがんだ？

良く見えないが上空で三機ISが闘っているようだ。

その時一機のISが、こちらに向かって何かを撃った。

なんだ……何を撃って。

視覚ではとらえきれずとも、撃ったと言う事は何かしら
こちらに攻撃を仕掛けてきたという事だ。

対処したいが、どの道身体は動かない。

くっそ……こんな終わり方ってあるか？

ははっ、せつかく自分より強いかもしれないうツ……見つけられ
たと思つたのにな。

ロツソが諦めて、力なく笑つた時、目の前に真っ白い何かが躍り出
た。

ドオオオオオオオオオオソツ!!!

地に伏していたロツソにはそれが、まるで地震のように感じた。

その大きな音と、同時に顔に何か生温かい液体がかかる。

ん？ なんだこれ……。オイル？

ロツソはそれを手でぬぐい視線を向ける。

顔にかかった液体は、生温かくそして……赤かった。

その色が感覚が、一気にロツソの頭を起こしていく。

同時に視力も回復して、ロツソはようやく状況を理解した。

「お前！ 何やってんだ!？」

彼女が見たもの、それは彼女の前に立ちふさがって

迫りくる閃光から自分を守る一条 聡也の姿だった。

見ると、聡也のISはもう原形をとどめていない。

特徴的な四門の砲をラック出来るバックパックや、手、足、そして顔のバイザーまで

ほとんどが吹き飛びながら、彼はロツソを守っていたのだ。

「……なんで、お前」

なんで、あたしを守ってるんだ？

今日知り合ったばかりで、物の数十分模擬戦鹿してない相手を。

なんでお前は、守れるんだよ！

「僕の都合で……すいません……」

聡也は全身の痛みに耐えながら力ない笑みを浮かべる。

「なんだよ、お前の都合って」

「それ、全部話してると……流星にきつ……いつ……」

でもっ、一つだけ言えるとすれば……」

すぐに聡也からその笑みが消え、苦痛に顔がゆがむ。

どうして……。

なんで。

ふと、その時。

その答えが分かった気がした。

ああ、そうか。

そうなんだ。

?コイツは、あたしよりも強いんだ?

それが、答えだった。

見つけられたとか、強いかもじゃない。

そして予想は、聡也のたった一言で確信に変わった。

「僕にはっ……くうッ……責任があります……からっ
……責任ね。」

そいつがお前の強さってわけかな。

ハハハ、オーケオーケ。

上等だ。

ロツソは、ゆっくりと痛みをこらえて身体を起こす。

そして、言う。

「少し、気張ってる……。お前は死んじやいけねえ」

そう、コイツは死なせるわけにいかない。

やっと見つけた、自分よりも強いやつだ。

それに、ロツソはなぜだかわからないが

それ以外にも彼を守りたいとおもう気持ちが芽生え始めていた。

……なんなんだ、この気持ち。

なんか……初めて感じる。

不思議な感じだな、なんか妙に暖けえし……。

……あーもう！

今はそれどこじゃねえだろ！

ロツソは、一時その気持ちを考えるのをやめ、ズタボロの愛機に視線を落とす。

息をひとつ吐くと、ロツソは心の中で愛機に語りかけた。

さあて……もう少し頑張ってもらっぜ、？ エスダーテ？？

「

モード？ スファイダ？ 起

動！」

第19話〜それがお前の強さだな?〜（後書き）

あーあーあーあー。

ちよつと、アンケートってわけでもないのですが、お伺いしたいんですけど。

皆さんはやっぱりセシリーとか鈴とか一夏とかが活躍するような二次創作が良いですかね。

いやまあ変な事聞いているとは思ってますけど、僕ってどうもオリキヤラ大好きな性分です。

物語が滅茶苦茶にならない程度に入れていきたいと思んですが、どうでしょうか？

今後の参考にしたいので、よろしかったらご感想の砲でご意見いただければ幸いです。

……まあ結構もう出しちゃってるんですが（爆

それでは、おお、次はいよいよ20話なんですね。

それでは20話でお会いしましょう！

さよならッ！

第20話 情熱の赤き闘士？ ロッソ・ミオネッティ？

モード・スフィード。

ロッソが叫んだその声は管制室にも届いていた。ただそれが何なのか分からず僕は首をひねった。

「スフィード・・・？」

イタリア語だろうか。

意味は分からないけど。

つぶやいた声を織斑先生が拾い、腕を組みながら説明してくれた。

「スフィード。挑戦を意味するイタリア語だ」

「挑戦？」

何に挑戦するって・・・。

そこへ榊原先生がコンソールに“ペルフェット・エスターテ”のスペック表を表示させながら会話に入ってくる。

「どうやら、スフィードとはオーバードライブシステムの一種のようですね。」

織斑先生、サウスバード君これを」

榊原先生は、画面を指差して僕たちをコンソール前に呼ぶ。

各種兵装一覧の中に、特殊兵装のタグをつけられて分類される？ スフィード？の文字を見つける。

更に続けて、榊原先生がコンソールのキーを操作するとそのシステムの詳細が表示される。

「イタリアは、このシステムを情報開示してるんですね」

原則、IS学園には新技術の情報開示義務は無い。

だがイタリア製のこのISはご丁寧にも、機構まで図入りで説明がなされている。

気持ち良いぐらいの潔さだ。

それは織斑先生も同じ考えだったようで少し怪訝そうな顔を浮かべる。

「ふむ・・・隠す必要がないのか、それとも他に隠したいシステムがあるのか・・・」

まあいずれにしても今はこのシステムだな」

「はい、コレによると“スフィード”はシールドエネルギー、そして本体のエネルギーの二つの残量がゼロになって初めて起動できるシステムのようなですね」

「ああ、通常のエネルギー回路とは別にもうひとつ独立したエネルギー回路を持つようだな」

織斑先生は言いながら、画面に表示される？ペルフェット・エスダーテ？の

左右スカート部に取り付けられた円柱状のパーツを指さす。

話の流れからして、おそらくそれが？ペルフェット・エスダーテ？の予備タンクなのだろう。

そしてそれを証拠づけるかのように、アリーナを映すモニターにはその左右のタンクを

スカート内部へ格納する姿が映っていた。

そしてその後すぐに、脚部や腕部ユニットの装甲の一部がはじけ飛び、

？ペルフェット・エスダーテ？から凄まじい量の排熱煙が上がる。

「そして・・・あの熱量はおそらく・・・」

「ふむ、機体の限界値を一時的に高めているためにおこる各部の熱暴走を

ああして強制冷却しているんだろう」

なるほど。

そういうシステムなのか。限界を超えて動けなくなったところでさらにその限界を引き上げて無理やり稼働させるシステム。

確かにその名の通り、自分の限界への？挑戦《スフィード》？ってわけね。

最後の切り札というわけか。

「……でも。」

僕はふと不安になる。

あの黒いIS。

前のときもそうだったように、紫色のIS？紫燕？と行動を共にしているはず。

なら今回も、タイミングを見計らって介入してくる可能性は大いにありうる。

いくらセシリーと鈴がいるとはいえ、切り札を今切ることに少し危なさを感じた。

まあたぶんロッソの方は、そういう情報を知らないだけなのだろうけど。

僕はその旨を織斑先生に伝える。

そして織斑先生は頷くとそれをセシリーと鈴に伝えた。

「オルコット、凰」

「はい」

「なんででしょう？」

「前回のようにな？紫燕？の介入も予想される事態だ。」

周辺警戒を怠らずに事態に当たれ。いいな？」

鋭い声にセシリーと鈴が、そろって了解と返す。

僕はその声を聞きながら、モニターを睨みつけていた。

「……まだ動けたんですね」

？ブラックアウル？は冷たく言い放つ。

聡也は、ようやく終わった砲撃に

そしてロッソを守れたことに安堵しロッソの目の前で倒れている。

ロッソはやさしく聡也を抱きかかえると、そっとアリーナの側壁へ

もたれ掛けさせた。

「……あながとよ。おかげで助かったぜ、少し待っててくれよな。ロツソは聡也に向かって心の中でつぶやくと、？ブラックアウル？をゆっくりと睨みつける。」

そして表情を変えず答えた。

「まあな……」

「まあ……いいですけどね。どうせ鉄クズどうぞ……」

「ッ！！」
？ブラックアウル？が、言葉を言い終わる前に、何かに吹き飛ばされる。

「な、何、今の！？」

「ハイパーセンサーですら捕らえきれない攻撃なんて……」

鈴とセシリアもいまいまいち何が起こったのかを、理解できていない。

何せ弾丸の軌道ですら、確認できるハイパーセンサーで何が起きたのか確認できなかったのだ。

とっさに何が起きたのかを理解しろというほうが難しい。

皆が困惑するなか、たった一人。

その攻撃を行ったロツソだけが、不適に笑っている。

ロツソの手には、蛇腹剣“テンポラーレ”が握られていた。

それを見た？ブラックアウル？が苛立ちの混ざった声でロツソに叫んだ。

「くうッ……それか！」

でも、どうして反応がッ！？」

ロツソは？ブラックアウル？と同じ高度に飛び上がると言い返す。

「何をしたかをわかる必要は無えぜ……四分後てめえはアリーナの地に伏してやがるからなあ！！！」

「つく！」

ロツソは一瞬で間合いをつめると、ブラックアウルに拳を突き出す。

その拳を？ブラックアウル？は何とか受け止め一瞬安堵するが、

刹那機体もろとも吹き飛ばされてしまう。

「ありや、言つてなかつたか？ スファイダにはスファイダ専用の武器とかがあるんだよ！」

？ブラックアウル？を吹き飛ばしたものは、左手に内蔵されている？ウラガーノ？と呼ばれる

圧縮した空気を一気に打ち出す近接戦闘用の武装。

ちなみに名前は日本語で暴風を意味するイタリア語である。

急激なGと真正面からの強烈な衝撃に顔をゆがませながら、体勢を立て直そうとするがそこへさらに

ロツソが？テンポラーレ？で追い討ちをかける。

？テンポラーレ？は？ブラックアウル？のバツクパツクを砲ごと切り裂くとさらに返しの刀で

左側のスラストーをもぎ取る。

「馬鹿な！？」

信じられないという顔と声を上げロツソを見やるが、ロツソは追撃をやめない。

スラストーをもぎ取られ、バランスを崩した？ブラックアウル？を？テンポラーレ？で払い上げ

一瞬機体が浮いたところへ、回転の遠心力を利用した強烈な回し蹴りが襲う。

「おいおい、齒ごたえなくて困っちゃうぜ！！」

こうして軽口をたたいているロツソだが、

その目はしっかり？スファイダ？の残り稼働時間を確認している。

このシステムは、一時的に機体の限界値を無理やり引き上げ、

通常よりもはるかに高い機動力とパワーを引き出しているため

各部に尋常ではない負荷がかかっている。

つまり最大稼働時の、さらに上の出力を多くのパーツに負荷をかけながら

搾り出しているということだ。

そのため、最大稼働時間は戦い方にもよるが四分。

それを過ぎると本当の意味で活動限界を向かえ、今度こそ動けなく

なる。

つまりその時間内にこのISを倒さないと、必然的に負ける。相手が少しでも動けてもだめだ。

完膚なきまでに叩き潰す！

タイムリミットはあと百二十秒余。

まだ少し余裕はあるが、だからといって悠長に構えている時間はない。

「・・・ふざけるなっ！！！」

？ブラックアウル？もやられっぱなしというのは気分が悪いようで、まだ残っている両手の荷電粒子砲でロツソを狙うが

トリガー引く直前思わぬ方向から砲を真っ二つに切断されてしまう。驚愕の表情で、刃が振り下ろされた方向を見やるとそこには？双天牙月？を構えた鈴がいた。

「あたしたちも忘れてもらっちゃ困るわ！」

「この、お前も！！！」

自信たっぷりと言う鈴に神経を逆なでされて、いよいよ頭に血が上った？ブラックアウル？が

鈴のほうへ、もう片方の荷電粒子砲を向けようとする。

だがそれは、与えてはならない隙を敵に与えてしまう行為でもあった。

「もらいましたわ！」

正確な二発の射撃が、構えかけた荷電粒子砲と残っていたスラストを吹き飛ばす。

それに重ねるように四機のビットが？ブラックアウル？に驟雨のごとく射撃を浴びせ続ける。

「へえ・・・やるじゃねえか。どこの誰だかは知らねえがね」

思わず感嘆の声を上げるロツソ。

どうやらその声は、二人に聞こえていたらしく

耳がキーンとなるほどおおきな声で通信が飛び込んできた。

「あんたね、あたしを知らないっての！！！」

「そうですね！！鈴さんなどは知らなくても、よろしいですけど私ぐらいいは知っていますよ、お話になりませんわよ！！！」

「なんですってー！」

「なんですよ！」

鈴とセシリアは、互いに罵り合いながらも？ブラックアウル？に攻撃を加えていく。

まあなんとも、器用だなとロツソは苦笑いする。

そして残り時間がいつの間にか三十秒を切っていることに気がついた。

「そろそろ、決めるか・・・！」

ロツソは？テンポラーレ？を元の一本の剣に戻す。

そして、？外部に放出したエネルギーを内部へ取り込みなおした？。

・・・そう。

これは？イグニッション・ブースト？の手順だ。

ロツソは体勢を低くして、？テンポラーレ？を構え、

内部で圧縮されたエネルギーを一気に後方へ打ち出した。

ドンッ！！

何かが炸裂したかのような大きな音の後、

爆発的なエネルギーは？ペルフェット・エスダーテ？を

一気にトップスピードまで持っていく。

？ブラックアウル？に肉薄したとき、ISのパラメータ画面が残り時間を告げた。

Liquida dieci secondi .

Io comincio a contare .

9 8 7 6 . . .

(残り10秒)

カウントを開始します。

9 8 7 6 . . .)

Liquida cinque secondi (残り五秒)

「はあああああつ!!!」

ロツソは？テンポラーレ？を？ブラックアウル？の腕部にたたきつける。

手に鋼鉄を切る確かな手ごたえが伝わってきた。

その後ロツソは“ブラックアウル”を宙返りしながら蹴り飛ばす。回転しながら吹き飛ばす先に鈴が？双天牙月？をもつて待ち構えていた。

Liquid a quattro secondi (残り四秒)

「カモン」

鈴は？双天牙月？を両手に構え？ブラックアウル？の背面に一撃。回転と逆方向への衝撃で回転の止まった？ブラックアウル？にもう片方の刃で別方向へ弾き飛ばす。

「セシリアッ！」

Liquid a tre secondi (残り三秒)

「お任せくださいな！」

セシリアは弾き飛ばされた？ブラックアウル？へ正確無比な射撃をビットで行う。

「人に挨拶するときは、被り物は脱ぐのがマナーですよ！」

セシリアはビットの攻撃で正面を向いた、

？ブラックアウル？のバイザーを？スターライトMK??で吹き飛ばす。

バイザーの片方を失った？ブラックアウル？の目にはまだ微かに、反抗の意思を感じる。

Liquid a due secondi (残り二秒)

生きているスラスタで何とか体勢を立て直そうとする？ブラックアウル。

だがそこへ、両手で？テンポラーレ？を構えた？ペルフェット・エ

スダーテ？が突っ込む。

何とか片腕でその突撃を防ぐ？ブラックアウル？だったが推力が違いすぎた。

赤き弾丸と化した？ペルフエット・エスダーテ？に？ブラックアウル？は

なすすべなく押し返されていく。

「おおおおおおおおおおおッ！！！！！」

「ぐうッ！！！」

そのままロツソは？ブラックアウル？の腕をつかむと急降下して地面を引きずりながらアリーナの側壁へ一直線に加速していく。

Liquida un secondo (残り一秒)

そして、側壁へブラックアウルを叩きつけると至近距離から？ウラガーノ？を

時間の許す限り撃ちまくる。

周囲は砂煙で何も見えなくなっていくがそんなことは気にしない。

「これで、終わりだあッ！！！」

ロツソは一度？ウラガーノ？に空気を収縮させてから左手を振り上げると、

一気に腹部めがけて振り下ろす。

バガアアンッ！！！！！！！！！！

地鳴りのような音。それが決着の合図だった。

？ブラックアウル？はすでにピクリとも動かない。

そして・・・

Contando ? esagerato

Iosposto ad unamania di fer
matada un

sistemadoporaframmento ur
gente .

Una funzione di Perfetta・Estate completamente le fermate.
(カウントオーバー!。緊急冷却後システムを停止モードへ移行。
ペルフエット・エスターテ機能を完全停止します。)

機能停止と共に一気にやってくる疲労感と、完全にパワーアシストの?死んだ?ISのズシリと重さ。

ロツソは勝利を確信してISの装甲の重さに任せてゴロンツと、仰向けに倒れこむ。

へへっ……やっぱあたしは強え!

それに……あいつも守れた……よな?

ロツソは頭だけを動かして聡也の方向を見やる。

聡也はまだアリーナの側壁にもたれかかったまま気を失っていた。

機体も身体もボロボロだったが、さっき抱き上げたときに

確認した外傷以外真新しい怪我は見られなかった。

よかった……無事だ。

にしてもなんで、あたしはこんなに嬉しいんだろう……。

……あたし……。

ロツソは聡也から目をそらすと、ふと顔が赤くなっていることに気がついた。

うわわわわッ! なんで顔赤くなってるんだよ!?

何で顔が赤いのかはわからなかったが、誰が見ているわけでもないのに

とっさに顔を隠したくなった。

なんで?

……なぜだろう?

……あいつに……見られたくないから?

……なんで?

そんな考えがグルグルと頭の中で回っているが、当然急な眠気に襲われる。

実際、極度の緊張状態の中、オーバードライブシステムを使用した無茶の影響で、既にロツソは限界を超えていた。

・・・ああ、まだ・・・答え、出てな・・・。

ゆっくりと薄れていく意識の中。

ロツソは、守りきれたという達成感と

不思議でわけがわからないが、それでいて何処か

あたたかい気持ちを抱きながら深いまどろみの中へ落ちていくのであった。

ここに？完璧な夏？と言う名を与えられた情熱の赤き闘士の勝利が確定した。

「敵機完全に沈黙！」

「よし、鳳、オルコット。先に一条とミオネットィを回収しろ！」

織斑先生が素早く榊原先生に指示を送る。

・・・終わったのか？

僕は少し拍子抜けしてしまった。

何故なら、何時“紫燕”が介入してくるのか分からなかったからだ。しかし紫燕は来なかった。

タイミングを逃したのか？いや、入ろうと思えばいくらでも隙はあったはず・・・。

何か、介入できない理由があったのだろうか。

そういえば、彼らとの初邂逅の時。

結局何をしにきたんだろうか。

その時ふと、無人機が存在が頭を過ぎった。

まてよ。

ひょっとして、あの二機はあの無人機を追いかけてきたんじゃ。

確か無人機はこの学園が回収したと言っていた。

ッは！！

「織斑先生！！！」

管制室に榊原先生の悲鳴のような声が響く。

「どうした？」

コンソールを覗き込んだ織斑先生の顔が途端に険しくなる。

「第三アリーナへ、急速接近する反応がッ！六・三秒後来ます！！！」

もう何が接近しているのか、織斑先生には分かっているようだ。

勿論僕もね・・・。

「凰、オルコット、何処でも良い。ピットへ飛び込めッ！！！」

織斑先生が怒鳴るように言う。

声に戸惑いながらもセシリーと鈴は一番近いピットへ飛び込んだ。

「榊原先生、第三ピットメインゲートを閉鎖！」

続いてセシリー達が飛び込んだピットのゲートが閉じられる。

これでとりあえず、聡也達を連れたセシリー達の安全は確保された。

「織斑先生！ 第三ピットへ行ってきました」

「あ、おい！！！」

僕は織斑先生の返事を待たずに、管制室を飛び出した。

第三ピットでは既にストレッチャーに乗せられて

聡也とロッソが今まさに運び出されていく所だった。

僕はそれを通路わきに避けて見送ると、二人の元へ急ぐ。

「セシリー」

「アル」

「へへん、どーよ。あたしの華麗な活躍は」

セシリーはほっとしたように笑い、鈴は自慢げに笑う。

ほんと、二人とも全く違う性格なのに、どうしてこうコンビネーションとかが旨く行くんだろうね。

「ああ、僕が心配する事なんて何もなかったね」

「いえ、そのお気持ちだけでうれしいですわ」

「ってか、何よあんた心配なんてしてたの？」

ほんつと・・・どうしてねえ。

僕は二人の性格の違いに少し苦笑いを浮かべつつ、

僕は話を先ほどの戦闘の事に切り替えた。

「いや、まあね。で、さっきの戦闘の事なんだけど」

「ああ、って言うかなんであたしたち怒鳴られたわけ？」

「そうですね、別段ハイパーセンサーにも反応はありませんでしたけれど」

・・・え？

いやいやいや、何を言ってるんだい。

管制室のレーダーだって捉えてたんだよ。

それが更に高性能なISのハイパーセンサーでとらえられないわけではないじゃないか。

「まさか、何か来てたとか？」

「それなら、反応があるはずですよ」

キョトンとした顔で、会話を続ける二人。

ああ、なるほど。

多分これは、余裕を見せつけるために僕を引っかけようとしてるんだね。

やっぱり、仲良いじゃないか。

「もう、冗談はやめてよ。管制室は大変なんだよ、今」

「だから、何の話だったの！」

「あ、アル、本当に私たちのセンサーには何も・・・」

鈴とセシリーの困惑する様子を見て、僕は嫌な汗が流れる。

・・・本当に反応が無かったのか！？

でも、榊原先生はあと六・三秒でって・・・。

その時爆発音とともに大きく建物が揺れた。

「きゃっ！」

「うわつと!」

「セシリー、鈴!」

バランスを崩した二人を抱きとめる。

揺れはすぐに収まったが、今の爆発音は一体……。まさか……。

やっぱりどこかに無人機関係のパーツが保管されて。考え込む僕に、抱きとめた二人から声をかけられる。

「ちよつ、ちよつと……。いい加減……」

「そ、そのアル……。ええと……」

ん?
そこでようやく二人を抱きかかえるようにしている自分の姿に気がついてあわてて手を離れた。

「あああ、ご、ごめん!」

「ふん、ま、礼ぐらい言つといてあげるわよ」

「いや……。私は……。そのもう少し……」

「え? セシリー何か……」

「いえいえいえ、な、何でもありませんわ!」顔を真っ赤にして、大きなアクションで手を振るセシリー。

なんたる、今何か言ったような……。

「あんたたちねえ、二人して見つめあつてる場合じゃないでしょうが!」

「別に見つめあつてなんて無いよ!?!」

「そ、そうですね、いやですわねえ鈴さん!?!」

そ、そうだ。

確かにそうだね。

いまだに状況がつかめない僕たちへ、織斑先生から通信が入る。その通信を受けたのは鈴だった。

『そこに全員居るか?』

「はい。セシリアとアルデイも」

織斑先生がチラツと僕たちを一瞥し、それにこたえる様に僕たちは

頷き返した。

「先ほどの爆発は一体なんですか？」

『ふむ・・・少々厄介な事態になった』

「というところ」

『保管してあった、無人機のコアを盗まれた』

「やっぱり・・・」

目的は無人機だった。

でも、じゃあさっきの反応は一体・・・

デマ情報だとしても、何が目的でそんな事。

織斑先生は頭を数回かきながら、いつも通り淡々とした口調で話す。

『まあ幸い盗まれたとは言っても、あのコアは既に束でも

直せないぐらい壊れていたから、まあ盗られてどうだと言っわけ

はないが・・・』

「とにかく私たちも、もう一度出ますわ！ 場所はどこですか！？」

『いや、その必要はない』

言葉をまくしたてるセシリーに織斑先生はピシヤリと言った。

その言葉は、鈴にも意外だったようで眼を見開く。

「必要無いってどういう意味ですか！？」

『そう、熱くなるな』

「いやでも！」

『なら鳳、聞くがお前のISはすぐに出られるのか？』

「うぐっ」

鈴は思わず口ごもる。

セシリーも同様に下を向いてしまった。

『燃料の補給、各部損傷のチェック、オルコットも

あれだけビットを使った後だ。身体への負担もある』

「で、ですが！」

『それに・・・』

織斑先生は、今の空気に少し不釣り合いな笑みをこぼす。

意図が分からない僕たちに構わず、織斑先生は言葉をつづけた。

『もう、別動隊が対処に当たっている』

「別動隊!？」

鈴が素つ頓狂な声を挙げるが、それは仕方のない事だ。そんなのいつの間に関に組織したんだろ。

気になった僕は織斑先生に尋ねる。

「その、別動隊って言うのは……」

尋ねた直後、別枠でウィンドウが表示される。

そこには、白式を駆る一夏の姿があった。

他にもラウラとシャルロット達もいる。

その映像に、一同がようやく納得した。

モニター越しの織斑先生も肩目をつむり、こういうことだと言わんばかりの顔をしている。

まあ、確かにこれならセシリーと鈴が行く必要はなさそうだ。

それはセシリー達も分かったようで、何度か頷いて一息を吐いていた。

『お前たちは、お前たちで出来る事をしろ、分かったな』

それだけを言い残し一方的に通信を着る織斑先生。

……やれることね。

僕たちが今やれることは、一つしかない。

「それじゃ、聡也達を見に行こうか」

「ま、仕方ないわ」

「ですわね」

二人の賛同を得られたところで、僕たちは早速医務室へ足を進めた。

まだまだ、今回の事は謎だらけだけど。

それを考えるのは今の僕たちの仕事じゃない。

僕は頭を切り替え、二人と共に足早にピットを後にした。

さて……。

向こうが本当の紫燕と言うわけか。

千冬は、顎に手を当てて考えていた。

紫燕は、無人機が保管されていた、学園の地下施設付近から姿を現した。

恐らく、今回あの黒いISを助けに来なかったのはあちらを優先していたからだろう。

……なら。

先ほどの反応は一体なんだと言う？

ISのハイパーセンサーに引っかからず、

こちらのセンサーだけに反応したと言うのもおかしい話だ。

無人機が狙いで、戦力を二分させた事は理解できるが、
どうにも先ほどの反応が腑に落ちない。

その時一夏から、通信が入った。

『織斑先生！』

「どうした、何かあったのか？」

『いや、何も……無いんですけど』

「何！？」

「確かに、煙は上がって建物とか

一部壊れてるところはありますがISの姿は……
どういう事だ。

先ほどモニターに入ってきた映像はなんだと。

しまった、そうか！

くそッ！ また出し抜かれたと言うのか！！

「織斑！第三アリーナへ向かえ！ デュノアとボーデヴィツヒもだ
！」

『え！？ あ、千冬姉！？』

『ほら、行こう一夏！』

『教官、了解しました！』

シャルロットとラウラがが困惑する一夏を、引っ張って第三アリー

ナへ向かう。

千冬はその映像を切ると、ダンツと机をたたいた。
やってくれる。

つまりこう言う事だ。

まずはじめに、？ブラックアウル？が第三アリーナを襲撃。

それと同時に、学園地下へ紫燕のパイロットが向かう。

そう間違いなく地下施設には入られたのだ。

あの時、センサーに移ったISの影は偽物。フェイク。

あのタイミングで第三アリーナへISが向かっているとと言う嘘の事実を作るための。

そして無人機のコア奪取後いまだに周囲の目が向く第三アリーナから眼をそらすために、地下施設周辺で爆弾が何かで爆発を起こす。

周囲の眼が今度はそちらに向く隙を狙って、本当の？紫燕？が第三アリーナへ

進入すると言うわけだ。

管制室に届いた、あの？紫燕？と一夏達の戦闘シーンも恐らくは巧妙に作られた合成映像だろう。

それにしてもなんて回りくどい手を使うんだ。

千冬は舌打ちをする。

だがそんな回りくどい手にまんまと載せられた自分にも腹が立った。
とにかくだ。

もう相手は逃げるだけなので、これ以上回りくどい策を取る必要もないだろう。

今度こそ。大丈夫だ。

大丈夫・・・だな？

千冬は、これまでに見た事のが無い、何とも自信の無いしぐさでうんうんと頷くのだった。

ふん。

こうなってるのね。

鳥越 聡華はつまらなさそうに、？ブラック・アウル？の破片をつまみ上げると、まじまじと見た後ぽいつと後ろへ放る。

後ろでガシャンッと音がして装甲が砕ける音がするが気にしない。

聡華は今、風紀委員として正式に事後処理をしている所。

人手が足りないってもな……。

普通生徒一人で行かせるかっての……

心の夏中でごちりながら、聡華は目ぼしいものを探す。

ちなみに現在このアリーナには人っ子ひとりいない。

一応千冬達教師陣は監視しているらしいがアリーナ上は聡華一人である。

聡華はまた一つ残骸を拾い上げようとして視線を動かすと、視界の端に何か動く物を発見する。

その人物は誰かに肩を貸して、今まさにアリーナを出ていこうとする所だった。

あん？……けが人……？

聡華はその人物を不審になって呼びとめる。

けが人は全員既に医務室へ運ばれたという情報を事前に聞いていたからだ。

「おい、けが人か？」

聡華の呼び掛けに、一瞬ピクリと反応すると顔を少し動かしてこちらを一瞥する。

顔は見えないが目つきは相当鋭いようだ。

聡華は頭をポリポリとかくと、そんなに睨まなくていいだろとぼやいて二人に近づいていく。

「あゝまあ、睨むのは良いけどな？ 医務室はそっちじゃね……
……ツク！？」

気だるそうな聡華の目つきが変わる。

肩を貸していた方の人物が、いきなり飛びかかって来たのだ。

「てめえ……！！？」

聡華は難なく？紫燕？の右腕を部分展開させそれを防ぐ。だが聡華は驚愕していた。

相手もISを部分展開して飛びかかって来たのだが

相手が部分展開した装甲の形状や色が聡華のソレと全く一緒だったからだ。

しかし、それは相手にとっても同じ事だったようで疑問と苛立ちのまじった声が返ってくる。

「……何もんだお前？」

「そりゃこつちが聞きたいね、いきなり何しやがる」

聡華側からは逆光で顔が良く見えないが、

相手からは自分の顔が確認できているだろう。

聡華は目を凝らすまでもその顔を確認する事は出来ない。

ただ、自分以上に驚いた顔をしていると言う事はなんとなくわかった。

「聡也に手え出そうってんなら容赦はしねえぞ……」

ん、聡也？

聡華は、チラッとアリーナの隅で壁に身体を預けている人影を見る。

聡也ってのか……。

そういえば、さっきの模擬戦。

一年のヤツが騒いでたな……。

確か聡也とロツソが……って。

聡也。

聡華の頭の中に、先ほど戦闘を繰り広げていた白いISの操縦者が思い浮かぶ。

あいつも聡也って言うのか。

名前の同意に違和感を覚えながら聡華はキッと相手を睨み返す。

しばらく無言のらみ合いが続いたが、不意に太陽の光が何かにさえぎられる。

「そこまでだ！」

「大人しくした方がよいよ。いくらなんでも三対一……いや四対一は分が悪いでしょ」

「お前、その人から手を離せ！」

「どうやら、噂の織斑 一夏ご一行のようだ。」

まあ、でも光を遮ってくれたおかげで、ようやく顔を拝め………

……え？

聡華はどうして、相手が自分よりも驚いていたのかその意味をようやく知った。

ワインレッドに赤くつり上がった眼。

眼の前には、無然とした顔の自分自信が立っていた。

第20話 情熱の赤き闘士？ ロッソ・ミオネッティ？ (後書き)

イタリア語って分からないけど、発音は格好いい。

どもしるくです。

感想くださった方ありがとうございました。
少し考えて、話の筋を再考してみます。

あー、でもなんでオリキャラの女の子ってこんな口悪いんでしょうw
ボーイツシュなのは好きですが、これは既に男勝りなような気もし
なくもないですね。

では21話でお会いしましょう！
さよならっ！

第21話 傷だらけの二人

「っち！」

聡華は舌打ちをして、相手の攻撃を回避する。

一夏たちの到着によって、相手の顔が見れた事は良かったが、なし崩し的に戦闘に発展してしまった事態は聡華自身ただけなかった。

・・・やべえな。

下手に攻撃してめばしい物を破壊してしまっても最悪だが、だからといってこのまま手を出さなければ、こちらが落とされる。それでは元も子もない。

それに相手は、あの乱入してきたISの関係者であることは間違いないのだ。

ISの残骸を破壊せずに確保出来れば言う事は無いのだが、言うは易し行うは難しという言葉通り

そこまで中々旨くいくものではない。

聡華は目の前に迫り来る？紫燕？の？大蛇？をかわしながら考える。それになんであたしと同じ顔、同じ声、で同じISなんだ？

ドッペルゲンガーってのは最近じゃISで襲い掛かってくる物なのか？混乱する頭を、少しずつ整理しようと思うのだが次々に沸き起こる疑問に

自分の頭の中で書類整理している小さな自分が次々に忙殺されていくのが分かる。

ああ、くそっ！

今は切り替える、出ないと落とされる

っ！？

聡華がかぶりを振って、頭を切り変えようとしたその一瞬の隙に相手の？紫燕？が？大蛇？を振りおろす。

それに反応して聡華もとっさに？大蛇？を前に出すがワントンが遅れ？大蛇？を抑えられると、腹部に強烈な蹴りを入れられ後ろに大き

くはじかれてしまった。

「ぐあつ!!」

「今しかねえっ」

敵の？聡華？は焦った風につぶやくと、全スラスターを噴かして側壁に

もたれかかっていた聡也をすばやく回収して離脱を試みる。

聡華が体勢を立て直したところには既に、相手のISのスラスターには完全に火がともった状態だった。

今は一夏達が頭を抑えてはいるが、一本でも直線コースで抜けられる道があれば

？紫燕？は抜けられる。

自分と同じISということはできることも同じ。

特徴は良く分かっていた。

やっべ、逃げられる！

聡華は焦りを覚えながら、リアスラスター全部からエネルギーを放出する。

その量は一夏の？白式？の比ではない。

そして放出したエネルギーを全スラスター内部に取り込み、一気に爆発させた。「一年坊主共・・・道を開けるおツ!!!」

聡華の声が一夏に耳に届いた時には、聡華は敵のISの正面で？大蛇？を構えていた。

「何!？」

「これは・・・？イグニッション・ブースト？・・・なのか？」

ラウラと一夏が急に目の前に現れた聡華に驚きを隠せない中、シャルロットだけがなるほどとうなずいている。

「・・・てめえ」

一方いけると思った道を、つぶされた敵の？聡華？は聡華を睨む。

聡華が行ったのは、？イグニッション・ブースト？の

ひとつの究極体である？バニッシング・ブースト？と呼ばれるもので

原理は同じだが圧縮するエネルギーの量が桁違いに多い。

また所狭しと設置されたスラスタの推力も相まって

その速さはハイパーセンサーが？まったく反応できない領域？の速さを生み出す。

最低三十メートルの距離を必要とするが、間合いをつめるなどの行為に限定すれば

ほぼ最強レベルの瞬発加速技術である。

なので相手からすれば聡華があたかも、消えたかのような錯覚に陥ってしまう。

そう、聡華がああ聡也戦の時に見せたトドメへの足がかりはこの技だったのだ。

「自分の使ってるISだ、何ができるのかくらいお前にだって分かるはずだろうが。ええ？」

聡華は、高圧的に相手を威嚇する。

敵の？聡華？は見るからに焦っているが、それでも冷静に打開策を考えようとしている様だった。

「とにかく、そいつを医務室へ運べ。話はそれからだろ」

聡華は構えを解くと、ゆっくりと？紫燕？に近づき手を差し伸べる。そしてもう少しで、気を失っているであろう聡也に手が触れるところまで近づいた瞬間。

ピクリと聡也が反応した。

聡也は、気を失っていたとは思えない状況判断の早さで手にポロポロの荷電粒子砲を呼び出す。

「何！？」

「先輩！」

何の躊躇なく打たれる荷電粒子砲の一撃。

本来なら直撃コースだったが、そこへシャルロットが飛びつき間一髪直撃を間逃れる。

しかしそれでシャルロットが守っていたラインが崩れ？紫燕？が消えた。

？バニツシング・ブースト？か……くそ！

聡華はシャルロットに、抱えられながらハイパーセンサーで消えた？紫燕？の航跡をたどろうとする。

だが次にハイパーセンサーが反応を感知したときには既にアリーナからは離れすぎており

追跡は不可能となっていた。

「あああつ、くそつたれ！！」

聡華の吐き捨てた言葉が、一際大きくアリーナに響いていた。

『すみません……逃げられました』

聡華の報告を聞き、千冬は大きく息をついた。

「お前、は何について残念がっている。お前は戦うために出て行ったのか？」

『それは……そうですね』

「怪我は無いのか？」

『ああ、はい残りの一年も全員無事です』

聡華はカメラアングルを切り替えて一夏たちを写す。

映像には、怪我也傷も無くピンピンしている一夏達が写っていた。

「そうか……鳥越は引き続き事後処理を続ける」

『俺たちはどうしたら……？』

「お前たちも、鳥越の指示で事後処理を手伝ってやれ。難しいことは無理でも

残骸処理ぐらいはできるだろう」

千冬は了解の声を聞き、通信をきる。

にしても、問題が次から次へと……。

本当に頭が痛くなる。

せめて臨海学校ぐらいは、静かに普通に過ごせることを願わずには
いられない。

「ため息つくと、幸せが逃げますよ？」

「お前みたいに、分かりやすい不幸に自ら飛び込んでいくよりはまし
じゃないか？」

「ひどいですよ、それ！ 私だって本気なのに・・・」

「はあ・・・本気だったらもう少し男を見る目を養え」

「その年になって、彼氏の一人もない織斑先生には言われたくな
いですよ・・・」

・・・ほう。

なかなか言ってくれる。

「だいたい私だって、あの馬鹿な弟の気苦労さえなければすぐにでも
・・・な。」

まあ特に誰かいるわけではないが、私だって女だ。

収まる場所に収まるだろう。
・・・多分。

千冬はまた大きなため息をつくと、ゆっくりと菜月の横にあるコー
ヒーを

塩入のコーヒーに入れ替える。

「それにですね、織斑先生は・・・ずずっ」

その後盛大にコーヒーを吹く菜月を、少しいたずらっぽい笑みで千
冬は見つめていた。

太陽の光が届かない海の中を、一頭の鋼鉄の鯨が優雅に泳ぐ。

その鋼鉄の鯨は黒い船体の側面に大きく行書体の白文字で「戦おのの？と

書かれており、潜舵翼は艦橋側面に持つセイル・プレーン方式、

そして船尾は水中での機動力向上のためにX型の操舵翼を持っている。

さらに特徴的なのは艦橋の前に大きくせり出した格納ブロック。そこには一基のカタパルトが設置されていた。

非常に大きな船体を持つこの潜水艦は内部も、かなり広く作られており

そこでは技術者達がせわしなくデータ取りを行っていた。

その中に、少し小柄で黒髪ショートヘアに綺麗な緑眼を持つメガネをかけた白衣の女性がいた。

彼女の名前は一条 いちじょう 希 のぞみ。

このなりで、この潜水空母？戦？の実質的な艦長兼IS-N技術責任者である。

希は送られてきたデータに目を通して、大きくため息をつき天を仰いだ。

と言つてもあるのは、鋼鉄の天井なのだが。

「はぁ・・・まーさーか・・・ここまで逝くとは・・・」

希が見ていたもの、それは聡也の？ホワイトアウル？の最後に送られてきた破損状況だ。

幸いコアは無事で予備パーツさえあればすぐに組み直せるが、

そのためには？予備パーツをIS学園まで輸送しなければならぬ？

この？戦？は最大速力こそ二十四ノットとまあ潜水艦ではそこそこの速さを誇るが、

それは機関最大をした場合の話で通常航行はその半分以下の速度での移動となる。

燃料電池式のAIP機構を持つため、いちいち浮上する必要は無いがその時間を差し引いても

あまりに時間がかかってしまうのは確実。

更に言えば、学園に潜水艦で乗り付けるなど前代未聞。

さすがの希も気が引ける。

そこへ、別の女性技術者が声をかける。

彼女は、きれいな黒髪だったが碧眼を持つアメリカ人。名前をリリス・カールストンという。

ちなみに、この技術者はその多くが女性である。

操舵など一部は男性が行っているが基本女性が多い。

それは希がこのプロジェクトであるプロジェクトNを立ち上げる際に優秀なIS技術者を引き抜いたから。

「まあまあ、彼も好きでそうしたわけじゃないですし」

「当たり前よ・・・あの子、好きでやってたらもうイグニッションキ―を送ってあげないんだから」

希は額に手を当て、渋い顔をする。

そんな希を見て、リリスはクスツと笑うと希の横にあった“ホワイトアウル”のデータに目を通す。

「なんだ、そんなに言うほどひどく無いじゃないですか」

「・・・前面装甲は粉々、火砲は四門中一門が破損消失。残りの三門も銃身の焼き付きでオーバーホール必須でスラスタ―は右側が内圧弁不良に加えて、メインスラスタ―へのエネルギーバイパスは完全に沈黙」

「あ、いや・・・その」

「PIC再設定に、ファイアリングロックの調整と各種フィードバックシステムの再構築それに・・・」

「わーッ！ わかりましたわかりましたあッ！ 私が悪かったですう〜」

まくし立てるような希の現状列挙を、リリスは涙目で遮る。

リリスにとつて、放っておくと淡々とした口調で延々と続きかねない希の話は苦痛でしかなかった。

まあ、この場合はリリスが適当な事を言ったのがそもそも悪いのだ

か。

「はあく、下手なことは言うもんじゃないなあ」

「ため息はこつちがつきたいわ・・・予備パーツを運ばなきゃいけないのにその方法が見つからないんですもの」

「え？ 乗り付けたらいいじゃないですか」

先ほどと打って変わりあつけらんかんとたまうリリス。

喜怒哀楽の変わりやすさに呆れながらも、希は言い返す。

「あのねえ、何処の世界に学園へ潜水艦で乗り付ける馬鹿が居るのよ」

「でも届けなきゃいけないんですよね」

「まあ、それはそうだけど・・・」

あく、誰か持って行ってくれないかしらねえ・・・

持つて行くと言う単語にリリスがピクツと反応する。

そして少し考えてから、ニツと笑う。

「主任、良い手が有りますよ」

「え、ホントに！？ どんな方法かしら？」

「文字通り、予備パーツを運んで貰いましょう」

「・・・？」

希はよく内容がつかめず怪訝な顔をするがリリスは構わない。

「だから運んで貰うんですよ」

「・・・誰に？」

リリスはコホンと一つ咳払いを入れてピンツと人差し指を立てる。

「世界第二位の先輩です」

「本当にすまないわね・・・乗せてもらっちゃって」
どこまで続く大海原。

その青い世界を白波を立てて進む一隻の空母の姿があった。
アメリカ海軍ミニッツ級原子力空母？スタン・フレイリー？
最大艦載機搭載数九十機。

三機の蒸気カタパルトを持ち、着艦用に計四本のアレステイングワイヤーを備えている。

名前の由来は、アメリカ軍増強に尽力したとある議員の名前らしいが詳しくは知らない。

その飛行甲板で、ローラはナターシャと海風に髪をなびかせていた。「いいわ、別に。今日は下見だもの」

「それでもねえ・・・一応作戦行動でしょう」

「別にいいじゃない、ハワイ近海までは行くんだから
そこから飛行機で日本に飛べば」

「そういう問題かしら」

ローラは苦笑いでナターシャに返すとナターシャはフツツと笑って海を見る。

ローラもそれに釣られて海を見るが、どうも素直にきれいだと言えない。

両親の死が海だったからだ。

今でも時々思い出してしまふ。

両親が目の前で波にさらわれていく所が。

これでもローラは、ましになったほうである。

当時はもう海など見るのもいやだった。

だがそういつていては、ISの操縦者は務まらない。
カウンセリングなどの心のケアもあいまって今では、
？それなり？には海を間近で見られるようになった。
だが、アルディは・・・。

「ほぐら、なに暗い顔してるの」

ナターシャにいわれ、ハツとして顔を上げる。

どうもこの手の考えは、どれだけ年月が過ぎようと心に暗い影を落とすようだった。

ローラは取り繕うように、笑顔を浮かべてナターシャに返す。

「いや、なんでもないわ、なんでも」

「……まあ、わからなくもないけどね。」

余計なお節介かもしれないけど、アルの前でその顔しちゃだめよ」

「ええ、わかってるわ、大丈夫」

ナターシャは軽く息を漏らすと、再び海へと目を戻す。

すると海の中からニヨキつと黒いもやしが生えているのを見つけた。

「ねえ、ローラ。海からもやしが生えてるんだけど」

「……ナターシャいきなり何？ 熱にやられた？」

「いやだってあれ……」

「なんだ、潜望鏡じゃない」

ローラはさらつと言った後、両者にしばしの沈黙が流れて……。

「「潜望鏡!?!?!」」

きれいにハモツた。

「よっしや、つつかまえたー」

リリースのお気楽な声が響く艦内。

それを聞いて希は、操舵士に指示を飛ばす。

「ソナーは？ この上に何かいる？」

「反応なし、本艦上部艦影ありません」

「よし、浮上よ！ バラストタンクの排水開始」

「了解！」

各座に着いた操舵士のクルーが機器を操作して、浮上体制を整える。

どこの国とも知れない潜水艦だったら、何をしてくるかわかったものではない。

そしてローラとナターシャは、いやこの空母にいる誰もがこれが敵でないということを感じていた。

潜水艦の最大の長所は隠密行動にある。

本気でこの空母を落とす気ならわざわざ、真横に隙だらけで浮上してきたりはしない。

いつの間にか集まってきた空母のクルーが怪訝そうに見つめる中、ゆっくりと艦橋のハッチが開く。

ガゴンツ！

「……ふええ……酔ったあ……」

「あなたね、何回浮上経験したら慣れるの？」

潜水艦の中から現れた白衣の女性二人を、クルーはいよいよ理解が追いつかなくなり

一同啞然としてその潜水艦を注視するのだった。

「はじめまして、私一条 希と申します、で、こちらが」

「せーんーぱーい」

「きゃっちよと……とつと……！」

いきなりもう一人に抱きつかれて、押し倒されてしまうローラ。

倒れた衝撃と何が起きたのかスツと理解出来ずに背中をさすりながら呆気にとられるローラ。

「痛たた……。一体何が」

しかし抱きついてきた人物を見て、顔をひきつらせた。

「り、リリス……」

「お久しぶりですねえ、先輩！」

「あら、ローラ。知り合いなの？」

ナターシャが、キョトンとした顔でローラに尋ねる。

ローラはチラツとリリスの顔を一瞥した後苦笑いを浮かべた。

「知り合いも何も、訓練校の後輩よ・・・技術者への道を選んだとは聞いていたけど」

「はい！だからこのとおりです」

リリスは立ち上がるとくるくると回る。

その回転にあわせて、白衣の裾がフワリと舞った。

「彼女には、主にあの“戦”で運用されている機体のデータを整理してデータベース化してもらっています。結構優秀ですよ」

希が誉めると、リリスは更にくるくると回りだした。

「わー、誉められたあゝ」

「ま、まあとても外見そうは見えないでしょうけどね・・・」

希はやれやれという眼差しを向ける。

それはローラも同じだった。

リリスは訓練校時代から何一つ変わっていない。

・・・あたしはどうかしら。
変わった？

「少なくとも、あなたは変わってないわよ。・・・まあ訓練校時代は知らないけどね」

あら、読まれちゃった。

私ってそんなに顔に出やすいのかなあ。

ローラはグニグニと両頬を両手でこねる。

「あ、先輩！何やってるんですか!？」

すると、いつの間にか回るのを止めたリリスがローラの行動を不思議に思い近づいてくる。

「んゝ・・・あ、わかりました。マッサージですか？マッサージですね？マッサージですよね！」

リリス変な三段活用をしながら唐突にローラの両頬を両手でグニツと掴んだ。

「ひよっ、ひよっほお!？」

「私、良いマッサージ知ってるんですよ。たゞてたて、よゝこよこ、丸描いて・・・チョンっと!」

リリスは最後勢いよくローラの頬を引つ張り上げて離す。もちろんだがこれはマツサージではない。

ローラ自身も聞いたことのある、じゃんけんの罰ゲームみたいなやつだ。

「えへへ。気持ちよかったですかあ？」

「・・・リリス、それマツサージじゃないわよ」

希の静かな突っ込みのすぐ後に、リリスはローラの鉄拳制裁をもらう。

それを見て、希は大きなため息を吐くのだった。

艦長に事の次第を説明して、？スタン・フレイリー？内の応接室に通された希とリリス。

そして希は、腰掛けるなり単刀直入にローラへ切り出した。

「日本のIS学園にIS・Nの予備パーツを運んでもらいたいです」

言うとき希は、一枚のメモリーカードを差し出した。

何の変哲もない、SDカードのような物だが、中には？ホワイトアウル？の

予備パーツが量子化されて収められている。

ローラとナターシャはそれを受け取ってまじまじと見た後、ナターシャが少しムツとして言い返す。

「つまりあなたたちは、アメリカ軍人に宅配便みたいなことをしろって言うの？」

「はい、簡単に言ってしまうば」

何の臆面もなく、希はナターシャをまっすぐ見据え言い返す。

「我々の？戦？では速度に限界があります。どれだけ急いでも数日はかかってしまう。

でもそれでは、間に合わないんですよ」

「間に合わないって言う・・・？」

「IS学園の授業にです。まだ明日は平常授業ですから、実習もある」

「だからって……ねえローラ？」

急に話題を振られたローラだったが、焦ることもなく逆に静かに何かを考える。

そして、フツと笑うと口を開いた。

「わかったわ……持っていけばいいのね」

「ローラ！」

「まあまあ、ナターシャ落ち着いて……」

ナターシャを片手で制してローラは希方を向き直る。

希のほうも、意外にあっさり承諾されたことに若干惑っているようだった。

そんな希を尻目に、ローラはメモリーカードを懐にしまう。

「それで、受取人さまのお名前は？」

「え、ああ一条 聡也よ。私の息子なの」

ローラはその言葉を聞いてさらにクスツと笑う。

要はこの人も私と同じだ。

まあ弟と息子という違いはあるが、その子が心配でしょうがない。

その気持ちはローラにはよくわかる。

自分だって、ナターシャに無理を言って乗艦させて貰っているのだから。

そう、弟のために。

……でも。

と、そこでローラはふと思う。

どうしてこの人はあたしがこの艦に乗っているってことを知っていたのかしら。

……別にあたしはこのことを誰にも……あ。

考えている途中にチラツと視界にリリスが写った。

そしてピンツときた。

そうか、コイツか。

「リリース……今言ったら鉄拳制裁一発で許してあげる」

「は、え！？ いやいやいや、何言ってるんですか先輩！？」

「言わないの？」

「だから何のことだか……」

「次は船尾からスクリューに向かって投げろわよ」

「プライベートネットワークにハッキングしました」

「バッチーン！」

リリースの顔面を張り手が襲う。

それを見て思わずナターシャがつぶやいた。

「……あなたグーで殴るんじゃないの？」

「あら、あたしは嘘つきなのよ？」

ローラは髪をかき上げながら答え、ふきゅゅと伸びるリリースを一瞥した。

リリースはこう見えて情報のスペシャリストで高いハッキング技術を持ち合わせる。

つまり、ローラ個人のスケジュールなど、リリースにとっては簡単に把握できてしまうということだ。

そしてスケジュールを確認した後、乗艦名簿にハッキングして搭乗艦を特定し

あとはGPSでここまで追ってきたのだろう。

はぁ……もつとその技術を全体の有益なことに使えばいいのに……。

ローラはため息とともに頭を抱えるのだった。

う、ううん……。

ゆっくりと目を開けるとそこには白い天井が見えた。

すでに夕暮れ時に橙色に部屋が照らされている。

ゆっくりと体を起こそうとした聡也にアルデイが声をかけた。

「ああ、まだ寝てなきゃだめだよ。君相当ボロボロだからね？」

「あ、・・・うん」

聡也は再びベッドに身を預けようとして、

ハツと思い出したかのように痛みに耐えながらガバツと

アルデイの肩をつかんだ。

「ロツソは！？ 彼女は大丈夫なんですか！？」

「ちよつちよつと、声が大きいよ！」

そこでようやく聡也はここが医務室だということを再認識して声を潜める。

「で、その・・・彼女は・・・」

「今はセシリー達が見てるよ。大丈夫気を失ってるだけみたいだから」

アルデイはカーテンで仕切られた後ろのベッドを親指で指差しながら答えた。

アルデイの言った事実には聡也はホッと肩をなでおろす。

よかった、守れたんだ。

責任は・・・果たせたかな。

懸念事項が消え、また全身を激痛が襲う。

顔をゆがませる聡也にアルデイが、手を貸しベッドへ横たわらせる。

「ま、ゆっくりお休みよ」

いつもどおり気さくな声でさらりとアルデイが言った後、

鈴とセシリアがカーテンを開けてこちらに入ってくる。

二人とももうすでに制服姿だった。

「ロツソが目を覚ましたわよ」

「うん・・・ですけどロツソさんってあんな方でしたかしら。

戦闘中もつと言葉使いが荒つぽかった気がするのですけれど」

「ああ、あの子は二重人格みたいなもんだからね。IS使ってないと根暗よ、根暗」

鈴の何気ない一言にムツときた聡也が、横になったまま語気を強め

た。

「根暗ってそんな言い方しなくてもいいでしょ！」

「うえ、な、なんであんたが怒るのよ!？」

「え!?!?・・・あ、えと」

鈴に言われて気がつく。

なんで僕怒ったんだろう。

ただ唐突に、彼女を悪く言った鈴に力チンツときて。

・・・あれれ?

なんでかな。

「はーん・・・わかったわかった・・・あーそう。そういう好み

なんだあ」

「フフフツ、なかなか玄人好みですわね。聡也さんは」

いまだなぜだが理解できていない聡也をジト目の鈴と、

いたずらっぽい笑みを浮かべたセシリアが茶化すように言う。

「あ、あの・・・どういう意味です?」

「ま、あんたならすぐにわかるんじゃない?」

「そうですね、少なくともどこかのアメリカ人さんよりは・・・

ね

「ん? 僕がどうかしたのかい?」

・・・一体何の話をしてるんだ?

話の内容がわからない聡也とアルディは、きよとんとした顔を浮かべるだけだった。

「へえ、じゃあ後日取調べなんですな・・・」

「そうらしいよ。君が寝てる間に織斑先生が来てね。目が覚めたら言っておけてさ」

まあ、あたしたちもだけどねと鈴がそれに付け足した。

正直、聞かれることは大体予想がついていた。

襲撃した? ブラックアウル? と酷似するIS。そしてNの技術。さ

らにはあの？聡也？

聡也自身、あまりよくわかっていないのだ。

あれが一体何者なのか。

聡也はただ、相手が執拗に狙ってくるようになってやむなく相手をしてに過ぎない。

まあそれでも、Nの技術よっ作られた二機だ。

無視しようにもできるはずもないし、それにまだ聡華のこともある。今だって結構考え出すと混乱してくるほど複雑なのだ。

はあっとため息をつく聡也。

そこに痛む身体を引きずってロツソが姿を現した。

それを見て、何かを感じた鈴がわざとらしく声を張り上げる。

「それじゃあ、あたしたちはこの辺で失礼しようかしらねえ」

「え、鈴さんなにを……あ、ああそういうことですね。わかりましたわ。ほらアル？」

「もういくのかい？ せつかくだしもう少し……」

「アル！」

「……ハイ」

ものすごい剣幕でセシリアに押されて顔を引きつらせながら

アルデイは立ち上がると、最後カーテンを閉める前に、お大事にねつと残して部屋を後にした。

先ほどまでの騒がしい雰囲気が一転して一気に静かになる。

そこは聡也とロツソの二人だけ。

……な、なんだか気まずい。

初対面があれだっただけに、声をかけづらい。

とりあえず聡也はゆっくりと身体を起こすと目の前に椅子にロツソを促した。

コクリと、うなずいて椅子に座るロツソ。

見た感じ怪我は聡也と同じかそれよりは少ないぐらいだ。

また少し沈黙が続いた後ロツソのほうから先に口を開いた。

「……その……助かったわ……ありがとう」

「いや、あの時は・・・必死だったし・・・。
僕が巻き込んだ訳だし・・・ね。それに助かったといえ
ば僕のほうだよ」

「・・・私は・・・何もしてないよ」

「いやいや、だって敵を倒してくれたんでしょ・・・お恥ずかしい
話僕は気を失っちゃったから」

聡也は、恥ずかしそうに頭をかく。

敵の攻撃から身を挺して助けたとはいえ、

その後気を失ってしまふとはさすがに格好悪い。

「・・・でも、それで私は助かった」

「ああ、そういつてもらえると・・・ありがたいかな」

聡也はハハッと笑う。

その顔をロツソは少し頬を赤らめながら見つめた。

聡也、笑うとこんな顔なんだ。

ロツソは、聡也の笑顔に見とれてしまふ。

そしてそのたびに、胸の奥でチクチクと何かが痛む。

それと同時に、気を失う直前に感じた暖かい気持ち広がっていく
のがわかる。

・・・これは、何なの？

自問自答するがわからない。

初めての感覚なのだ。

痛い心地よいなどという感覚、今まで味わったこともない。
だが、聡也の顔を見ていると自然とそんな気持ち湧き上がって
くる。

そういえば、昔誰かが言っていた気がする。

ええと・・・なんだっけ。

誰だかは思い出せないが、おぼろげながらその言葉の一部を思い出

した。

？それが、人を好きになるってことだよ？

・・・好き？

私は、この人が好きなの？

その考えに至るや、急に聡也のいろいろな顔がフラッシュバックしてくる。

さっきの笑顔、戦闘中の真剣な眼差し、そして自分を守ってくれたときのあの優しい目。

ああ、そうなんだ。

私はこの人を好きになってしまったんだ。

初めての感覚に戸惑いながらも、考えがまとまったことでチクチクとした痛みも消え、暖かな心地よい気持ちだけが残る。でも・・・。

そこまで考えてロツソはふっと表情を曇らせた。

私・・・変だし。

変とは、言わずもがな二重人格のことだ。

ロツソはこの二重人格のせいで、本国では一度精神異常の烙印を押され

、戻った地元和学校でもいじめや差別を受けた経験がある。

自分の真実を話して、態度が豹変した知り合いを

嫌と言うほど見てきたロツソは、知らず知らずのうちに

コンプレックスみたいな物を抱いてしまっていたのだ。

多分、“元の私”なら気にせずズバツと言えたのだから、

今のこの自分ではそれがどうしても言い出しづらい。

ダメだなあ。

時々こっちの自分なんて消えてしまえと本気で思う。

こんなの・・・私じゃない。

こんなの嫌だ。

こんな二重人格が嫌だ。

真実を確かめるのが嫌だ。

こんな自分が嫌だ。

そして。

嫌われてしまうのが嫌だ。

これまで特に気にしてなどいなかったが……いや違う。気にしていない振りをしていたのだ。

これまでならそれでよかった。

でもその振りは今、目の前の少年の登場によって無視できない物となってロツソを襲う。

ロツソは顔を恐る恐る上げる。

そこには、ずっとうつつむきっぱなしだった自分を心配そうに見つめる聡也がいた。

聡也の顔を見ているうちにロツソの中で、一つの思いが生まれる。……多分、私ここで聞かないと……一生後悔するかもしれない。

自分が初めて人を好きになった。

その相手だからこそ聞きたい。

聞いてみたい。

もう、そのように思ったと気がついた時には、既に口に出してしまっていた。

「あ、あの……私……」

「はい？」

と、勢いで口を開いてしまったのは良いが後が続かない。

それでもロツソはなんとか言葉を紡ぎ出す。

「私……変じゃない……？」

「変……？」

「うん……その。IS使うと途端に……性格変わったやうし」

「ああ、その事ですか」

聡也は変わらない笑みを浮かべているが、ロツソにとつては心臓が張り裂けそうな、緊張感に包まれていた。もし変だとか言われたらどうしよう、避けられたら？ マイナスでネガティブなイメージばかりが頭を支配していく。しかしロツソのそんな考えを知らない聡也は、ロツソが心の準備を整える間も与えないくらい直ぐに、答えを返した。

「確かに少し驚きましたけど、それだけですよ」

「……驚いただけ？ 変とは思わなかったの？」

「変でしょうか？」

「え？」

「自分の中に別の自分が居ることが、そんなに変でしょうか？」
ロツソは固まってしまった。

これまでそんな風に考えたことなどなかった。

ただひたすらに、自分は変だからと思いつけてきた。

「良いじゃないですか。それを含めてロツソなんですよ。」

どっちがロツソでどっちが違つてそうじゃないですよね」

「そう……なのかな」

まだ、いまいち自信が持てない。

本当にそれで良いのだろうか？

だって自分は……自分は。

「それを含めて、イタリア代表候補生ロツソ・ミオネッティなんですよね？」

含めて……？

消えてなくなつてしまえと思った今の自分も、含めて……私。聡也はそつとロツソの頭に手を置いた。

そして自信なく縮こまつてしまったロツソの頭を優しく撫でた。

「だから、自分をもつと大事に考えて下さい。」

変だからって気にして、どちらかを嫌つちゃ絶対に駄目ですよ」

……言われてしまった。

こつもあつさり、言い当てられてしまった。

そして初めて好きになった人に初めてそんな事を言われた。自分を变だと思わずに真つすぐ見てくれて……。

そのままが良いと言ってくれた。

急に目の前がジワツと滲む。

「ふえ……ふつ……くつ……」

これまで数十年間ずっと我慢してきた思いが溢れ出す。

一度堰を切つて溢れ出した思いは、もう止まらない。

「ずっと耐えてきたんですね。ロツソ自身が気がつかなくなる程長い間」

聡也の言葉が引き金だった。

「うう……うわあああああああああッ!」

ロツソはその場に泣き崩れる。

それを聡也は痛みに耐えながら、優しく抱きしめた。

もうすぐ沈みきつてしまう窓からの夕日が、

傷だらけの二人をまるでスポットライトのように照らしていた。

第21話 傷だらけの二人 (後書き)

大学め。

中部電力に違約金払わされたとかで電力絞りやがったな。

どうもしるくです。

ここでようやく一段落。

次回あたりホントに短編でも入れたいと思います。

それでは短編 or 22話で (お お会いしましょう！

さよならッ！

IIIS 短編 偽りの羽根 そのいち…これは嘘でもなんでもない！

今日は休みだというのに、僕は職員室にいた。
何もしていないはずなのに織斑先生に呼び出されたのだ。

「あの、それで僕は何故呼ばれたのでしょうか？」

「……そんなに警戒するな。別に取って食おうなどと言うつもりはないんだからな」

じゃあ叩いて食べるつもりなんじゃ……。

「それにお前を食ったら、腹を壊しそうだ」

食われる事は嫌だが、そう言われるのもなんか嫌だな。

織斑先生は、一息を吐くとドンツと自分の机にダンボールの箱を置いた。

大きさは三〇センチ四方とまあまあな大きさだ。

「何です、コレ？」

「知らん。今朝ドカツと私の机の上に置いてあつたんだ」

知らんって……。

何でそんな得体の知れない物がピンポイントで織斑先生に……。
っていうか。

「それは分かりました。で、何で僕なんですか？」織斑先生は黙って、僕側からは見えないダンボール箱の側面をトントンと叩いた。

それを覗き込む。

それだけでもう何も説明は不要だった。

「これ、星条旗……」

「そういう事だ」

ははあ、なるほどなるほど。僕がアメリカ人だからアメリカから、来たであろうこの謎アイテムを僕に押しつけようと言う魂胆ね……。
全っ然納得できません！

「どうして、僕ですか！？ティナとかクラスにアメリカ人いるでしょう！」

「バカを言え、生徒が怪我をしたらどうする」

「お前は、怪我にも慣れてるだろう。既に保健室の常連だそうじゃないか」

うぐっ……は、反論できない。僕の頭にまたあの、保健の先生の目が浮かぶ。

また来たの！？という驚きの目と、怪我ばかりでかわいそうねえという憐れみの混ざったあの目……。

出来ればあんな目は見たくないんだけど。

「まあ、そういうことだ、これはお前に預ける。コレの正体がわかったら連絡しろ、いいな？」

「あ、いやでもっ！」

「い・い・な？」

「……………はい」

保健の先生の目も嫌だが、織斑先生の目も嫌だ。

さて。

貰ったのは（半ば押し付けられた）いいが……

これ何？

僕はそれを取りあえず寮の部屋まで運び、ノートPCをどけると机の上に置いた。

箱の側面には、アメリカの国旗が描かれ上蓋はガムテープ止めでその上に差出人不明の伝票が貼り付けられている。

うっん。

ひとまず箱からだそう。

僕は、ペン立てに入っていたカッターナイフでガムテープを切り上

蓋を開ける。

中を恐る恐るのぞき込むと、箱の中には衝撃緩和材の発泡スチロールに包まれた丸い球体が一つ。

ゴトリ。

箱からそれを取り出し再び机に置いた。

「ただのボールでした・・・っていうオチなら良いのに」

僕はごちりながら、改めて球体を観察する。

球体には、付属で足がついていてそれに固定する形で置いておく物のようだった。

そして球体の上部には、プロジェクターのようなレンズが埋め込まれ、その脇に怪しいスイッチがあった。

「押すとドガンとか無いよね・・・」

僕は球体を持ち上げたりまじまじと見つめたりしながら、正体を探る。

ふむ、やっぱりこのスイッチ押さないとダメなパターン、これってあんまり押したくないけど・・・。

でもなあ。

下手にビクつきすぎでもってそれはそれで、時間の無駄なような。

ゴクリ

僕は生唾を飲み込む。

大丈夫・・・大丈夫・・・。

自分を鼓舞するように心の中で唱えて、スイッチへゆっくりと指を伸ばす。

よ、よし・・・っ！

そして意を決して、思い切ってスイッチを押す。

キュイイイーン・・・

なにかの起動音の直後、部屋を一瞬で真っ白い光が包み込む。

僕はその光に包まれて、やがて意識を失った。

セシリーだけならなんとか頼みこんで、
口裏を合わせてもらえるっていう算段があったんだけど鈴は無理だ
よ……。

あの嵐みたいな性格でひつかきまわすにきまつてる。

ああ……絶体絶命ってやつでしょコレ……。

……まあでもいいや、セシリーと鈴ならまだなんとか……。

「ふん、大方寝ているのであろう。不規則そうだからなあいつは」
篤……

「全く、友としてはいささかその体たらくはいただけんな」

……ら、ラウラ……。

「まあ寝てるなら仕方が無いよ」
シャルロットまで。

「仕方が無いって言うてもなあ。あいつ来てないのに俺たちだけで
飯食うわけにもいかねえだろ？」

つて一夏!!!!

全員集合してるじゃないか!!

絶体絶命どころかピンチすぎる!

ま、まあ……鍵は……え!?

掛かってないい……!!!

そう言えばこの球体持つて入ったから鍵をかけたんだ。

完璧パニックな僕を余所に、ドアの向こうではどんだん話が進んで
いって……。

ガチャ

ドアノブの回る音がする。

「なんだ、鍵がかかって無いじゃん」

鈴……いつもながらその強引さ恨むよ。

鈴はそのままドアを開ける。

ええと……あ、そうだ。ベッド!!

僕は素早くベッドにもぐりこんで身を丸くする。

寮のベッドは元々ふかふかだから、

僕の今のサイズだったら変な膨らみも出ないから怪しまれないはず・・・。

布団越しに皆の足音が聞こえる。

「あん、誰もいないじゃないか」

「おかしいですわねえ、確かに部屋に入っていくのを見たんですけど」

セシリーに見られたのか・・・。

とと、ベッドに誰かが近づいてくる。

「ふむ、寝ているというわけでもなさそうだな」

「そうだね、布団も膨らんでないし」

「・・・」

「あれ？　どうかしたのラウラそんな難しそうな顔してどうやらラウラは、何かを考えているらしい。

何を考えているかは分からないが、正直言って怖い。

何せ彼女は現役軍人だ。

隠れている敵を見つけ出すなんて日常茶飯事だっただろうし、そう言った観察眼にも優れているはずだ。

「いや、不自然だと思っただけ」

「何が不自然なのよ」

「見る」

ラウラはベッドの端を指さす。

「なぜここだけこんなにシーツにシワが寄っている？」
「しまった！」

「そんなの、ただのベッドメイクの時に出来たヤツじゃないのか？」

「確かに、そうとも取れるが・・・特にここのシワ」

ラウラはかがみこむと、次にベッド側面の皺を指さした。

そこへ皆の注目が集まる。

「明らかに中へ引つ張られている。通常ベッドメイクと言う物はこう言った皺が出来ないようにマットの下へシーツを引つ張りこみ皺を伸ばすものだ」

敵が音を立てて崩れて・

「ふえ・」

「あー！ 一夏なに泣かせてんのよ！」

「そうですね、小さい子にはもつと優しくして差し上げませんと！」

「お前らな、これはアルディなのだぞ」

ラウラの正確な突っ込みが入る。

何だろう、今日はラウラが頼もしく見え・

「そう言えば日本の幼子には飴を挙げると喜ぶときいたな」

無かった。

うん大丈夫いつものラウラだ。

「まあでも・アルディってことを考えても考えなくても可愛

いよね」

ヒョイツとシャルロットに抱き上げられる僕。

真正面から満面の笑みを見せられたら、いくら女の子になっても僕

でも赤面してしまう。

「ええと・」

「あー、コホンんツんツ！ シャルロットさん？」

言葉に窮していた僕に、セシリーがわざとらしく咳払いをして入っ

てくる。

そしてシャルロットから素早く僕を、奪い取ると自分の膝の上に置

いた。

「あー、セシリアもう少しだけ抱っこさせてよ」

「ダメですわ。それにアルにはそんな事している余裕などありませ

んわよ。一刻も早く

元に戻る方法を考えませんと・

「とか何とか言ってえ・あなたが抱っこしたいだけでしょ？」

「な、り、鈴さん何を馬鹿な事を！」

あー、なるほどこれが珍獣扱いと言っやつね。

しかも特別な。

はあ・

「だが、その球体とやら中々厄介な代物のようだな。説明書も無いとは」

「うん、だから困っちゃってさ・・・」

「つてか、普通明らかに怪しげなボタンを押すかよ」

「夏君は何もわかってないよ・・・」

特にあの時の僕の覚悟その他諸々をね。

と言うか。

「大体ね、君のお姉さんが僕にこんな渡すからこうなってんだよ？　一夏も浴びせてあげようか!？」

一夏は織斑先生の事を出され流石に言葉に詰まったが、苦笑いでその後の事に答える。

「千冬姉の事は、まあ弟としては複雑だけど。」

流石に俺の女の子バージョンなんて変なだけだろ？」

ふと何気なく言ったその一言だったが、

他の四名の女子たちにはかなり魅力的に聞こえたようだ。

「一夏の・・・」

「女の子バージョンか・・・」

「あ、何かいいかも」

「僕も、少し興味あるなあ・・・」

「お、おい!？　お前ら変な事言うんじゃない!」

・・・これは使える。

とりあえず、部屋に居ても進展しないと云う事で、僕たちは食堂へ移動する事に。

出来れば外を出歩きたくなかったんだけどね・・・。

部屋にいるって言ったのにセシリーが無理やり抱き上げて僕を連れだしてしまっただ。

当然、いくら女子って言っても小さすぎる僕は注目の的だ。

食堂に着くまでに既に二桁の女子から質問攻めにあってその度にセシリーが、なんでか少し自慢げに

話すんだよねえ……。

まあその……旨く誤魔化してくれてるのはありがたいんだけど……。

「セシリー……その僕の歳の離れた妹って言うのはちょっと厳しくないかい？」

「そうかしら……？ まあ居ても良いじゃないですか。ばれたらお得意の嘘でしたーで、なんとかありますわよ」

「ハハハ……ほんと自分が嘘つきで良かったよ。」

僕はセシリーに抱っこされたまま食堂の席に座る。

正直恥ずかしさは最高点だが、セシリーの膝の上から下りると机に手が届かない。

……まあ、やむなしというやつだ。

そして僕の目の前には、定食セットが。

「ほら、アルくん……」

にこやかに、僕の口元にご飯を持ってきてくれるセシリー。

「せ、セシリー自分で食べられるから……」

「……なんかさセシリアって、

アルデイが女の子になってからやりたい放題やってない？」

「うむ、確かにそうだな……。流石にアルデイも

あの体躯ではセシリアを振りほどくのは難しいか」

「ひよっとして、今までやりたかった事、をやってるのかも？」

「まあ、その可能性はあるだろう」

セシリーと僕を尻目に声をひそめて何やら話す四人。

そして一斉に一夏を見て……。

「……はあ……」「」「」

大きなため息をついた。

「なんだなんだ？ ため息は幸せが逃げるぞ？」

自分に向かったため息が突かれている事にすら気がつかない唐変木がのんきに四人に向かって言う。

そこで試しにシャルロットが一夏に質問を試してみた。

「ねえ一夏、セシリアとアルディを見てどう思う?」「どうって、セシリアって子供好きなんだな。面倒見も良いし、良いお母さんになるんじゃないか?」

「げほツけほツ・・・お、お母さん!？」

セシリアが盛大にむせるのを横目で見ながらシャルロットはまた大きなため息を吐いてしまった。

ところ変わってアリーナ。

今日は休みってこともあって元々ISの自主トレを組んでいた。

・・・まあ、僕がこんなことになってなけりゃ参加できたんだけどね。

今、セシリアが鈴と模擬戦をしているのだが、なるほどなかなか迫力がある。

視線が低いと何もかもが巨大に見えてくるがISもその例にもれず相当の大きさだった。

しかも体が小さくなっているおかげで、セシリアが飛び立つ直後スラスターの

風圧で吹き飛ばされそうになってしまった。

その時はシャルロットが、支えてくれたけどたぶん誰もいなかったらアリーナの壁までコロコロと

転がってしまっていたことだろう。

ほえー・・・すごいね。

この迫力はちよつと元の身長じゃ味わえないだろうし・・・。いつそこのままでも・・・。

って、今何考えた僕!

何言ってるんだよく考えなよ自分!!

この身体のままだったら毎日毎日セシリアの膝の上でご飯食べたり、

抱っこされたりして恥ずかしさMAXで日々を過ごさなきゃいけないんだよ!?

それだけは勘弁だ勘弁ッ!

僕はかぶりを振って、邪な考えを振り払うと急に体がふわりと軽くなる。

「え?」

「ほら、高い高い」

「シャ、シャルロット!」

どうやら彼女が僕を抱き上げたらしい。

そして僕をヒヨヒヨイと放り投げる。

「ちょ、ちよつとシャルロット! やめてよ!」

「えー、いいでしょ〜これぐらい」

それからも二度三度、高い高いされてポストとシャルロットの腕の中に納まる。

「おい、シャルロット私にもやらせてくれ」

次に言い出したのはラウラだ。

ラウラも同様に、高い高いをするのだが……。

「……全然高くないんだけど」

あ、つい本音が。

ラウラはポストと、僕を抱き留める。

だがその眼は全くと言っていいほど笑っていないかった。

「ほ〜う……それはつまりあれか……。

私が小さいといたいのだな……?」

「あ、い、いや……別にそこまでは言って……」

「わかった……そうか高ければよいのだな」

ラウラはいきなり? シュヴァルツェア・レーゲン? を起動すると僕を思いつきり高く放り投げた。

もうそれは、高い高いのレベルじゃない。

言い表すならそれは……そう。

投擲だ投擲。

「うわわわわああああああッ!!!!」

両手をじたばたさせるが、そんなの無駄だ。

ISを起動しようにも、今の僕じゃ小さすぎるし……。

ああ……そうか……これが死ぬってことなんだね……。
なんてこんな死に方は嫌すぎる!

死因……投擲

こんなアホな死に方はさすがの僕でも御免こうむりたい。
すると、そこへちようど黒い影が横切り。

ポスンッ!

うまい具合に腋の間に挟まった。

「ちょ、あんたこんなところで何してんのよ!?!」

「や、やあ鈴……その投げられちゃって……」

「はあ!?!」

「り、鈴さん!!!」

そこへ血相を変えてセシリーが突っ込んでくる。

うわあ……ここでも修羅場な予感……。

「鈴さん、な、何をやっておりますの?」

「何って、こいつが勝手に飛び込んで……」

務めて冷静を装うとするセシリーに鈴はそこまで言っ言葉を区切ると

少し考えて、なにやら不敵な笑みをこぼした。

……まずい。

また何か企んでる……。

「そーね、ごめんなさいセシリア。アルディね、

どうやらあたしに抱っこされたいみたいで?わざわざ?ラウラにこ

こまで飛ばしてもらったんですって」

「なっ!?!」

「さすがラウラね……。ピッタリじゃない」

「ななッ!!!」

「ん、アルディったら初めからそうだって言ってくれればいいの

にい〜」

鈴がわざとらしく頬ずりする。

明らかに。

誰が見てもわざとだということが見え見えなのにセシリーはそれに気が付かない。

・・・違うね。

気が付かないんじゃないかと、気が付かないほど頭に血が上ってるんだよ。

・・・死ぬ。

「アーーーーールールーーーーーッ!!!!!!!!!!!!!!」

「!!!」

うわツ、ちよ今のはダメだって!!

ピンポイントで？僕？を狙ってたよ今!!?

「あら、た〜いへん。避けなきゃ避けなきゃ」

鈴は巧みなIS操作で、？僕にだけ攻撃が当たるように避けた？

「いだったっ!!」

「ちよ、ちよつと鈴!!」

「あああぶな〜い」

痛い!

それからしばらく、地獄は続いた。

自主トレが終わわり、みな思い思いに時間を過ごしていると気が付けば日は暮れていた。

僕は一度織斑先生の所へ行こうと、寮の廊下を歩いていると、セシリーに出会った。

「あら、アル」

「やあ」

「どこか行かれますの?」

「うん、ちょっと織斑先生の所にね」

セシリーは何やら考えるとヒョイツと僕を抱き上げる。

「セシリー？」

僕は上目で顔を見上げるとセシリーは笑っていた。

「フフフツ、こんな時間に子供が一人歩きは危険ですわよ？」

「セシリー、僕は君たちと同じ年だよ・・・」

少なくとも外見以外はね。

しかしセシリーはまるで子供をしかる母親のように頬を膨らませて怒った。

「ダメです。どうして行きたいのなら私も一緒に参りますわ」

いうが早いか、セシリーはスタスタと歩き出してしまふ。

振りほどこうにも、ギュツと両手でホールドされては動きようもない。

僕は、はあっと一つあきらめの溜息をつく

そのままセシリーに抱っこされて織斑先生を目指すのだった。

この時間になつても数人の教師はまだ学園内にいるようで職員室には明かりがともっている。

「失礼しますわ」

セシリーは言いながらゆっくりと扉を開ける。

扉が開くと皆が注目するというのは別に学生に限って言えるものではないらしく先生たちも

一斉にセシリーを見やる。そして固まる。
当然だ。

こんな時間に小さな子供を抱いて職員室に来たのだから。

注目が集まる中、セシリーは少しおどおどしながら織斑先生のもとへ。

「・・・なんだオルコット。その子供は」

「あのですね・・・えーっと」

「迷子か何かか？」

「ちよ、ちよつと来ていただけます？」

「お、おい!？」

セシリーは、怪訝な顔をする織斑先生を出席簿覚悟で強引に手を引き職員室から連れ出した。

「ここらへんなら大丈夫ですわね・・・」

「全く、なんだというのだ・・・」

「織斑先生・・・この子」

「だから、この子供は一体なんだ？」

「アルディです・・・織斑先生」

「なんだ、アルデ・・・何!？」

おお、織斑先生お驚いた顔を初めて見たかもしれない。

織斑先生はまじまじと僕の顔を見ると首をかしげながら問う。

「・・・本当なのか？」

「本当ですよ」

「何故こうなった」

「あの球体の所為です」

「ああ、アレか・・・」

織斑先生は再び思案する。

何を考えているのやら・・・。

にしても、本当にどうしようか・・・これ。

つてかあれはいったい何なの？

すると考え終わった織斑先生が、少し気まずそうな表情を浮かべる。

それに疑問を持ったセシリーが、尋ねる。

「どうかされましたの？」

「い、いや実はな・・・お前にあれを渡した後個人的にローラと話をしたんだ」

姉さんと？

まああの箱にはアメリカの国旗が描かれていたし・・・。

「あ、あのあのあああのさ、セセセセシリィ？ いったい何があったのかな？？」

「何って・・・私の部屋と一緒に寝ているだけですわよお？」

「だからなんで！？」

わけが分からないぞ？ どうして僕とセシリィと一緒に！？」

「フフフツ、子供が一人で部屋にいるのは危険ですから。こうしていれば安心でしょう？」

「いやだからって僕は、男で・・・」

「今は女の子じゃありませんこと？」

「それはそうだけど・・・」

「でしたら大丈夫ですわ」

むぎゆうツ！

セシリィがいつぱい僕を抱きしめる。

ちよつとセシリィ！！

「さ、お眠りなさいな」

ぱつと手を放して優しく頭を撫でるセシリィ。

実に情けない話だが、それが何とも言えない気持ちよさで僕は急激な睡魔に襲われる。

「セシ・・・リー？」

「フフツ、おやすみなさいアル・・・」

そうして僕の意識はゆっくりと落ちていく。

・・・これからどうしようか。

まるで、そんな漠然とした不安から逃げるかのように・・・。

こうして僕の少女としての生活が幕を開けた。

IEIS 短編 偽りの羽根〜そのいち…これは嘘でもなんでもない〜（後書き）

はいつてことで短編です。

しるくですごうも！

勢いで書きちゃったので誤字脱字もあるかと）お

ちなみにそのいちなのので、そのに、そのさんと少しづつ別次元で
進んでいきますのでよろしく願います年ね〜

では22話でお会いしましょう！

さよならッ！！

第22話　姉、突如として

さてと。

僕は勉強用具の入った鞆を担ぐと、寮を後にする。

時間はまだ余裕はあるが、だからといって油断すると織斑先生の出席簿アタックが怖い。

まあ最近は何かがなくなったよね？

…… ホントはたたかれない方が一番良いんだけどなあ。

部屋のドアの鍵を閉めて溜め息混じりに振り返ると、そこには一夏がいた。

「よっ！」

「ああ、おはよう」

「なあなあ、アルデイ」

「ん？」

一夏が挨拶もそこそこに僕の小脇をつつく。

「知ってるか？　なんか今滅茶苦茶、美人さんが職員室に居るらしいぜ」

「美人さん？　一夏興味有るの？」

「まあな、俺だって男だぜ？」

うんまあ。

逆に男の方が良いなんて言ったら、僕はどん引きだったけど。

「おはよう御座います、一夏、アルデイ」

そこへ聡也が合流してくる。

僕達はさっきと同じように軽く挨拶を交わすと、

聡也の影に隠れる様に歩くロッソを見つけた。

二人とも、制服でその多くは隠れているが

それでも身体のいたるところに包帯やガーゼが巻かれてとても痛々しい。

それでも、まあ登校してるし大丈夫なんだろう。

「や、おはよう」

「・・・誰？」

僕があいさつすると、ロツソは僕を一瞥してボソツと答えた。
あれ？

確か会ったことあるよね・・・保健室のベッドで。

あ、そうか名のつてないんだあの時は。

にしたって本当に、冷たい言い方。

僕は苦笑いを浮かべながら、自己紹介する。

「僕はアルデイ・サウスバードで、こつちが・・・」

「・・・そつちは、知ってる。一村織夏でしょ」
なに！？

こないだの鈴のアセロラ発言も驚いたけど、この間違いも聞いたこと無いぞ！？

この間違いには流石に聡也も同様に苦笑い。

「ち、違いますよ・・・ロツソ。織斑一夏です、

名前と名字が混ざっちゃってますから、それ」

「・・・あ、うん、間違えた」

「どんな間違いだよ。そりや・・・」

一夏も頭を抱えているが聡也が話題を振ったことで、一夏はすぐに頭を切り替える。

「で、何の話をしていたんです？」

「ああ、職員室になっえ美人さんが居るんだって」

「一夏は、その美人さんが気になるんだってさ」

僕がそういう終わった後、ゾクツと背筋に悪寒が走った。

な、なんだ！？

寮にいてまさかの命を狙われます展開が始まるのかい！？

僕はキョロキョロと当たりを見渡す。

そして、見つけたッ！！

そこかっ・・・ってうわッ！？

殺気がする方向をバツと振り返るとそこには・・・

「へえ〜・・・一夏、気になるんだあ・・・」
り、鈴・・・。

ケタケタと目に光なく笑うその顔は鬼というか、もうなんかの妖怪のようだ。

そしてズズズズツツと廊下の床に“双天牙月”を引きずりながら、ゆらあゆらあと近づいてくる。

アメリカのハリウッドホラーよりも数倍怖い。

まさに真正正銘のリアルホラーだった。

「ねえ、一夏あ〜あたしねえ、お話しがあるのぉ」

「り、りりり・・・鈴ッ!？おお、落ち着け、とりあえずその物騒な物をしまえ! なっなっ!？」

必死に鈴を説得しようとするが、鈴には何も聞こえていないようだった。

・・・まあ、うん仕方がないよ。

「一夏あ〜、土葬、鳥葬、放置、どれが良い〜？」

「全部ひどい!？」

「死ねえええ!!! あんたなんか放置で充分よ、この産業廃棄物いや、廃棄物め!!!」

「もう、それゴミじゃねえかって、ぎゃああああッ!!!」

はあ今日は一夏の断末魔が一日の始まりか・・・。
つて、ん？

僕はまた振り返ると、今度は聡也がロツソに制服の裾を掴まれていた。

「な、何？」

「・・・聡也も気になるの？ その美人」

「え、ま、まあ・・・全く興味が無いと言えば嘘になりますけど・・・

・・・」

「……………そう」

あ、聡也を引つ張って物陰に行っちゃったけど……………

「死ね、てめえこの野郎がッ!!」

「え、わ、あのちよっ、わああああああああッ!!!!」

一夏と聡也の断末魔二重奏《デュエット》か……………

ははは、朝から賑やかな事で……………

……………つてん?

僕はまたまた顔を動かす。

そして青ざめる。

「せ、セシリー……………」

「ウフフフフフツ……………」

わー良い笑顔……………

ごめんデュエットじゃなくてトリオだったみたい。

もはや隠れているとは言えないのかもしれないが・・・。

「はあ・・・」

「む、何よその生返事・・・。アルディ君は気にならないの?」

「まあ、気にならないわけじゃないですけど・・・。」

「なんだか、連れないなあ」

「いやまあ・・・だってね。」

「なんで僕まで一緒に隠れなきゃいけないのかな・・・?」

「それにさっき黛先輩は連れないと表現したが、それは違う。」

「どっちかと言えば、なんで隠れなきゃいけないのっていう」

「少しの困惑が先ほどの発言に入ってしまったからそういうふうに聞こえただけで。」

「むしろ僕は、その謎の美女っていうのには興味があるぐらいだ。」

「中々、面白そうだしね。」

「僕は、そーっと柱の影から、職員室の入り口を伺う。」

「どう?」

「後ろから声をひそめて黛先輩が、職員室前の状況を尋ねてくる。」

「それに僕は無言で首を左右に振りかけて・・・あ。」

「出てきましたよ」

「おおっ、シャッターチャンス!」

「黛先輩は覗き込む僕の頭の上にカメラを構えてシャッターボタンに」

「手をかける。」

「・・・この体勢意外ときついんですけど・・・。」

「職員室から現れた謎の美女は、綺麗なブロンドのロングヘアで整った顔立ち。」

「濃いめの青いスーツに身を包んでいる女性はまさに、美女と言った名」

「がふさわしい。」

「・・・うん。」

「ふさわしいんだけど。」

「おかしいな、凄くどこかで見ただ事がある顔だ。」

「全く、お前はなぜ連絡一つよこさない・・・。」

「全く、お前はなぜ連絡一つよこさない・・・。」

「全く、お前はなぜ連絡一つよこさない・・・。」

「あら、ここって予約制か何か？」

それにこの声も凄く聞き覚えがある。

「そう言う意味じゃない！」

「ま、良いけどね。あたしはあたしの好きなようにやるから」

間違いない・・・

これは。

つて、こつち来た！？

僕はあわてて、まだシャッターを切り続ける薫先輩を制しようと片手を伸ばす。

「ちょ、ちよつと薫先輩いい加減カメラ下ろしてくださいよ！」

「わわつと、急に動かさないでつてば！？」

「えっ、あ、体勢がくずれ　　ッ！？」

ドッシャーーンッ！

だがその伸ばした手がいけなかった。

僕たちは体勢を崩して盛大に倒れてしまう。

そして当然それは、織斑先生たちの前なわけで・・・

「あ・・・」

思わず声が重なる。

なぜなら織斑先生と目があってしまったから。

そして隣の美女は、ただただそれを見て満面の笑みを浮かべるだけだった。

・・・いや、そこは少し助けるとうれしいなあ・・・

姉さん。

さて、ここは教室現在HR中。

教壇に立つのは織斑先生と山田先生。

ここまではいいだろう。

うん、別に普通の光景だ。

しかし。

僕には教室の端で、腕を組む一人の女性
まあ姉さんなんだ
けど 目に言って仕方が無い。

なんで教室に居るのあの人・・・。
周囲の女子たちもいつもと違う、自分たちの全く知らない人物の登
場に少し浮足立っている。

何せ連絡事項を話す織斑先生の前で、声をひそめての噂話までする
始末だ。

当然出席簿で殴られていたが、要はそれだけ色々注目されている
んだろう。

聞き耳を立てると、まだどこからか数人の声が聞こえる。

「ねえねえ、あの女の人誰かな？」

「間違いなく転校生じゃないわよね・・・」

「あの髪さらさらして綺麗だなあ」
全く、命が惜しくないのかねえ。

織斑先生は一通り、連絡事項を言い終えるとチラツと姉さんを一瞥
する。

その視線を受けて姉さんが頷くと、織斑先生は僕たちに向き直る。

「さて、ひと段落ついたところで本日は諸君らに紹介しなければな
らん人物がいる」

まあ姉さんだけだ。

・・・ってか何し来たの？

「彼女が今日からこの学年のIS全般の技術・整備などにおいて諸
君らをサポートしてくれる、

まあアドバイザーみたいなものだ。では自己紹介を頼む」

姉さんは織斑先生にすれ違い様、軽く手を挙げ挨拶をかわすとス
ツと教壇に立つ。

一瞬こつちを見て微笑んだ後、口を開いた。

「どうも、初めまして。あー、ちなみだけど・・・」

あたしの事知ってるわって人、手あげてくれる？」

これは、挙げるべきか挙げざるべきか……。
って言うか普通に自己紹介しなよ。

しかし姉さんはそんな僕の気持をなどお構いなし。

自分のペースで自己紹介を進めていく。

「ん〜……誰もいないの？ ……ほんとに？」

わざとらしく顎に指を当ててん〜と怪訝そうな顔を浮かべる。
そして。

「例えば……その前から二列目の男の子！」

「は!？」

なんで僕を当てるんだよ!!

……って待てよ。

さっき微笑んだのってまさか。

僕がひきつった笑みで顔を上げると、姉さんの顔が悪戯っぽい笑み
に変わっている。

あー……くそう……。

僕は、諦めてゆっくりと立ち上がる。

「あー……えーっと、知りません」

「……本当に？」

「ほんとに」

「あらそう……じゃあ、そんなあなたに一つ問題を出します」
問題？

はあ……とことんひっかきまわしてくれるなあ。

ほら見てよ。

クラスの生徒目が点になっちゃてるじゃないか。

「問題モンドグロツソで総合二位に輝いた人物は誰でしょう？」

はあ、そんなの決まってるじゃないか。

僕は、ジト目で姉さんをにらみつつボソリと答えた。

「ローラ・サウスバード」

「ブツブツ間違い。答えはソニア・クレンディでした」

ソニア・クレンディ……って。

「それ、第二回大会の問題じゃないか！」

「だってあたし、第何回なんて言っていないわよ？」

「いや、だってこの流れなら第一回の問題を出すでしょ、姉さん……」

行つてから口を両手でふさぐが、もう遅い。

皆の注目が僕に集まる。

皆しつかりと聞いていたのだ。

さつき僕が思わず口を滑らせた？姉さん？という単語を。

しばしの沈黙の後……。

「ええええええええええええ！？ あの人アルデイ君のお姉さんなの！？」

「あ、思い出した！ あの人モンドグロツソで織斑先生と戦ったアメリカ代表だよ！」

「なになに、織斑先生に続いて世界第二位の人からも色々教えてもらえるなんて、あたしらの代超ラッキーじゃん！」
「なんだか、凄く懐かしいよ。」

恒例になりつつあるなんていつたら怒られるかな？

「あの、ローラ先生は基本的に何を教えてくださるんですか？」

「え？ 先生？」

一人の生徒が姉さんと呼ぶ。

それに対して姉さんは少し驚いた顔をした。

そりゃそうだ。

これまで先生なんて呼ばれた事無かったからね……。

そんな顔を見て女子は不思議そうに聞き返す。

「え？ 先生じゃないんですか？」

「いや、まあ立場的にはそうかもね。」

でもあたしは先生って柄じゃあないから普通にローラさんでいいわ」

「はあ……はい」

生返事を返す女子にニコツと笑いかけると、姉さんは更に言葉をつ

づけた。

「それで、さっきの質問の答えだけど。それはこれから分かるわ」
姉さんは言いながら、時間割を指さす。

そこには一時間目：IS実習の文字が躍る。

そして姉さんは、パンパンっと手を叩くと織斑先生のお株を奪うように号令をかけた。

「さ、一時間目はIS実習よ。皆第三アリーナへ集合！」

その声が合図となり、僕は女子たちが服を脱ぎ始める前に、一夏と一緒にアリーナの更衣室へ急いだ。

「なあ、アルディ」

「うん、なんだい？」

更衣室で着替えながら一夏が、僕に声をかける。

まあ、大方姉さんの事を聞いてくるんだろうなあ。

「お前の姉さんってさ、一体どんな人なんだ？」

「あれ？ 話した事無かったっけ？」

「ああ、お前から一度も聞いてないんだけど」

ああそっか、そう言えばそうだ。

あの時は自分の中だけで考えちゃってたからね。

確かに誰にも言っていないや。

「うん・・・そうだね。一言で言えば・・・嘘つき？」

「つまり、お前と一緒にすることか」

「ま、厳密に言えば姉さんと僕と一緒に言う事かな」

だって僕は姉さんを真似して今の自分があるわけだからね。

そこは間違っちゃいけないでしょ。流石に。

「それで、他には？」

「うん・・・まあ射撃は得意だね。一応モンドグロッソで優勝してるし」

「そうなのか！ 凄いじゃないか」

「織斑先生ほどじゃないよ」

結局、姉さんは決勝で織斑先生に負けた。

まあでも、凄い事には変わりないけど。

一夏は、素直に称賛してくれたけどはたして姉さんがそれを聞いてまあ表面上は素直に受け取るだろうけど、内心どうなのかは分からないね。

「さて、着替え終わり！ 先に言ってるぜアルデイ！」

「あ、ちよつと待ちなよ！ 元々君が話しかけるからってやっぱ、もうこんな時間！？」

僕は一夏から遅れる事数分、急いでアリーナへ走ったが、姉さんの目の前で久しぶりの主席簿アタックを貰った。

あゝあゝあゝ、全く姉さんに恥かかせてくれちゃって。

ローラは出席簿でたたかれる自分の弟を見て、やれやれと笑みを漏らす。

そう言えば、アルデイのISはどうなったのだろうか……。ま、後で聞いてみましょう。

生徒が整列した事を確認して千冬が授業を始める。

「これまでは主に近接戦闘に主眼を置いてやってきたが、今日行う実習は射撃訓練だ」

お、得意分野。

ローラは射撃と聞き、少し気分が高揚する。

何せ自分が一番誇れる分野なのだ。

高揚しない方が逆におかしいだろう。

「射撃と言っても色々あるが……」

そのあたりは私よりもローラの方が詳しい。ローラ頼む」

千冬が譲った場所へ立つとローラはコホンッと咳払いを挟んだ後、

今日の授業内容について話し始める。

「まず、大まかに射撃武器と言っても色々あるわね……。
ん……。織斑君だったかしら？　あなた、思いつく限り言ってみて」

ローラは指をさして一夏を指名する。

一夏は少し考えた後、ポツリポツリと武器名を挙げていく。

「ええと、荷電粒子砲、アサルトライフルに拳銃とかですか？」

「うん……。ま良いでしょ。さっき織斑君が挙げてくれた中に荷電粒子砲と言う物があったわね」

ローラは手元の端末に、アメリカ製の荷電粒子砲？　ヘヴィハンマー？　を表示させる。

これはアルデイのストライクバーデイの？　ウエポンスクエア？　に搭載されるような比較的

大型のもので、精密射撃には向かないが威力は非常に高い。

「これは少しおおきな部類だけど、これの用途をあなた言ってみて」
ローラは次々に生徒を指名して答えさせていく。

千冬とは少しスタイルの異なる説明に初めは戸惑っていた生徒たちだったが、

次第に慣れていき、最後辺りではかなりスツと、自然に答えられるようになっていた。

「……。と、言う具合に射撃武器というのは、

色々使う場面場面で適切に判断して使用する武器を選ぶ必要があるの。

そう言う意味では、ある意味近接武器よりも難しい兵器ともいえるわね」

ローラは、最後に旨くまとめると千冬へとバトンタッチする。

なるほど、中々優秀な生徒たちばかりね。

流石千冬の生徒だわ。

ローラは腕を組んで、うんうんと頷く。

千冬は相変わらずテキパキとした物言いだ。生徒たちに指示を飛ばし、

それに従って生徒も素早く動く。

やっぱり、あの子をこの学園に転校させたのは間違いじゃなかったみたいね。

ローラは横目で自分の弟を見ながら、優しく微笑んだ。

「よし！ そこまでだ。一度集合しろ」

射撃訓練を行っていた、生徒が手を休め織斑先生の所へ集まってくる。

もちろん専用機持ちはそれを待機状態にして、

一般の生徒は？ 打鉄？ や？ リヴァイヴ？ から降りての集合だ。

にしても少し早いな。

まだチャイムまでには時間があるし。

「さて、まあ今日は射撃武器に慣れるまでで充分だろう。感覚を忘れない事だな。

でだ、少し時間が余っていると思ってる者も多いだろうが、せっかくのローラの初授業。

いまだにローラがどんな人物なのかが分かっていない者もいると思う」

織斑先生は一度目を閉じ、そしてすぐに見開くと不敵に笑ってこう言った。

「お前たちに、国家代表の実力を見せてやろう、ローラいいな？」

「強引ね、面白いけど」

あれ、姉さん今ISなんて持ってたっけ……。

少なくとも僕は見た事が無い。

その疑問は僕以外の人間も同様のようで一夏が僕に声をひそめて聞いてくる。

「ローラさんのISってどんななんだ？」

「僕も、見たことないよ……。ってか持ってたかな」

ふくんと怪訝そうな顔をする一夏。

いやほんとに知らないんだってば……。

僕たちがそんな会話をしていても、話はどんどん進んでいく。

「で、誰があたしのお相手？」

「そう焦るな。これから名前を呼ぶものは前に出てこい。」

オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、そして織斑」

呼ばれた面々が前に出ていく。

これから、国家代表と戦うとあつて皆の顔つきも険しいが

特にラウラは呼ばれた時、一瞬だけ本当に鋭い目つきになった。

というかこれ、二組がいないからアレだけど、全員専用機持ちじゃないか。

「彼女たちが、お前の相手をする」

「あら、四対一？ それって流石に卑怯なんじゃないの？」

姉さんが冗談半分に言うが、セシリーはそれに同調した。

「確かに、四対一と言うのはいくら、お相手がローラさんでも……

「
だがそれを織斑先生は鼻で笑う。」

「オルコット、そういう心配はまだ早い。安心しろ気がつけば終わっているさ」

流石にそこまで言われてムツとならない専用機持ちのメンバーでは無い。

当然言われたセシリーに至っては、相当力チンと来たようだ。

まあ、プライド高いしなあ……。

その証拠にまだ、織斑先生が何も言っていないのにまっ先にISを起動させて空へと上がって行く。

それにつられるように、他の三人も自分のISを起動して空で姉さんを待つ。

姉さんはそれを見上げて、フツと笑うと右手の人差指にはめた指輪

にそつと口づけをした。
どうやらそれが起動のトリガーだったようで、姉さんが光に包まれる。

そして光が収まるとそこにはISをまとった姉さんの姿があった。
色は僕の？ストライクバーディ？同様に青を基調に縁どりにオレンジのライン。

全体的にシャープなフォルムで、左右一枚づつアンロックユニットのシールドを持っていた。

腰部にはスカートが伸び、そこに姿勢制御用の小型スラスタを複数備えている。

大きさは鈴の？甲龍？程だがそれに比べて背部の大型スラスタが目を引く。

かなりの高機動型のISか。

まあ姉さんらしいけど。

僕は飛び立つ姉さんを見上げながら、織斑先生の横に移動する。

「姉さんIS持ってたんですね」

「ああ、私も朝聞いた。ま、よくよく考えればローラ程の

腕のある操縦者を見すみす遊ばせておくほどアメリカも馬鹿じゃないと言っ事だろう」

「ははは、確かに……。それあのISは・・・」

「名前を？ストライクミラージュ？と言っらしい」

「？ストライク・ミラージュ？・・・」

僕はその名前を復唱する。

ストライクってついでるから、ひよつとして僕の？ストライクバーディ？の後継機か何かだろうか。

それとも名前が似ているだけか・・・。

どっちにしても、何か僕のISと関係はありそうな気がするけど。

「はあ・・・だが名前を聞いてまさかと思ったが。

また骨董品を引っ張り出してきたものだな」

「え？」

骨董品!?

僕は織斑先生のため息交じりの言動を聞き、バツと織斑先生の顔を見た。

あれは・・・そんなに古いのか?

でも見たところそんなに、古さは感じないけど・・・。

織斑先生は、僕のその反応を見てゆつくりと頷く。

「あれは、第一回大会でアメリカが持ち込んだ、予備機《リザーブ》だ」

「え!？」

さつきよりも大きな声で、驚く僕。

それは聞いていた他の生徒も同様で、目を丸くしている生徒もいた。だって当然だろう。

目の前にあるのは真正正銘、姉さんが?モンド・グロツソ?で使っていた機体なのだから。

「まあ、あくまで予備だからな。私も本戦で一、二回見た程度だったが・・・。

まさかそこから解体されずに残っていたとは」

・・・マジ?

つてことはあれ、コアがどうなってるのかは知らないけど

まるつきり第一世代型のISってことだよな。

・・・まあそれ言っちゃったら僕のISも大本は第一世代なんだよね。

さてさて、どうなることやら。

でも、気を付けなよ一夏達・・・。

姉さんは僕以上に嘘つきだよ?

僕は一つ息を吐きながら、空を舞う五機のISをジッと見つめていた。

ローラが皆に遅れて、空へ上がると既に臨戦態勢の四名がそれぞれ武器を構えていた。

ローラはそれを、一瞥しながら大げさなアクションで声を張り上げた。

「さて、それじゃ始めましょうか・・・そうね・・・どうする？」

一人づつ相手をしてあげても良いし全員でかかってきても良いけど・・・」

だがそれには誰も反応しない。

相手がアルデイの姉で嘘つきであると言う事は、ある程度予測がついていたし何より

彼女たちが今相手にしているのはアメリカの国家代表なのだ。

下手に誘いに乗ればそれだけで命取りになる。

誰も動かなかった事に対してローラがまたわざとらしく残念そうな表情で言う。

「あら、独り言になっちゃったわね・・・。

誰か反応してくれないとお姉さんさみしいわ」

ローラが言い終わって、フツツと笑った時だった。

突如シャルロットのスラスターが爆発した。

「何！？ 一体どこからの!？」

シャルロットは辺りを見回すが、周囲に機影は見られない。

シャルロットの身に起こった出来事に、周囲にも緊張が走る。

その時、ハイパーセンサーでいち早く長距離サーチを行っていたラウラが叫んだ。

「あそこだ！」

ラウラが指さした場所。

それは今いる場所から、一番離れたアリーナの屋根の上。

そこでローラは既に、その手にスナイパーライフルを構えこちらを狙っている。

さつき？リヴァイヴ？のスラスターを撃ち抜いたのはこの狙撃である。

「く、いつの間にあんな場所へ！ ですがこの距離ならばお任せを！」

素早くそれにセシリアが反応する。

「スターライトmk??の狙いを素早く付けると、ローラに向かってトリガーを引く。」

しかし、ローラはその一撃を避けると、対抗してスナイパーライフルを撃ち返した。

パリンツ！

ガラスが割れる音がしたと同時にセシリアの？スターライトmk??のスコープが吹き飛んだ。

「あの距離からしかも動きながら、スコープだけを!?!」

驚愕するセシリア。

この一連の攻防で、分かった事それはローラがとてつもなく強いと言う事実だった。

特に、こと射撃戦闘においては。

「にしても、いつの間にあんなところへ...!?!」

一夏が声を漏らす。

それをローラのハイパーセンサーが拾い、皆に聞こえる様にオープンチャネルで返答した。

その声は実に楽しそうで、表情も無邪気な悪戯っぽい笑みを浮かべている。

だが今の四人にはその無邪気な笑みが、一層不気味に映っていた。

「目に見えている物だけが、本物とは限らない...」

なぜこの機体に？ミラージユ??って付いているのか良く考えてみなさいな」

「つく、考えると言われて、のこの隙だらけで考えるやつがいるものか！」

ラウラは肩の大型レールカノンを放つ。

その攻撃に連動して、シャルロットが得意の？ラピッド・スイッチ？で素早く武装を

アサルトライフル？ガラム？に持ちかえ攻撃を開始した。

いまだに残りの二人に動きは無いが、織斑一夏には、少し警戒が必要だ。

・・・確か、彼シールドバリアを無効化できるのよね。全く、姉弟そろって面倒な・・・。

ローラは心の中でごちりながらもまず突っ込んできたシャルロットの相手をする。

当然だがラウラの撃った弾を避けるのも忘れない。

ローラは回避行動を取りつつ、シャルロットに接近して両腕に構えたライフルを足で払う。

「君、器用なんだってね」

「え？」

「確か？ラピッド・スイッチ？って言ったかしら？」

ローラはシャルロットを蹴ると、少し間合いの出来た所でスナイパーライフルを放つ。

本来の使い方とはかけ離れているものの、この距離でしかも

蹴った直後で、体勢の崩れている相手にならローラは目をつむつても当てられる。

「うっ！」

直撃した衝撃に顔をゆがませ、大きく体勢を崩しながらも

いち早く姿勢を安定させたその技術は、流石代表候補生だろう。

でも・・・いくら至近距離と言ったって、あんなに体勢が崩れるものじゃ・・・。

っは！

「はあああっ！！！」

ローラが何かに気が付き声のした方向を見やると、シャルロットの陰からラウラの

？シュヴァルツェア・レーゲン？がプラズマ手刀を振りかぶり踊り

出た。

そう、シャルロットがオーバーアクションなまでに体勢を崩したのは接近するラウラを自分の身体で隠すため。

中々やるじゃない！

ローラはその手刀を、宙返りしながら後退してかわすとシャルロットに顔だけ向けてウイंकした。

「ああでね、シャルロットちゃん、あたしも出来るのよ」

「出来るって、何をですか？」

「？ラピッド・スイッチ？」

言うとローラは、戦闘と同時進行で武装を呼びだす。

それはまさにシャルロットが得意としている

？ラピッド・スイッチ？そのものだった。

驚くシャルロットを尻目にローラは呼びだした

サブマシンガンとアサルトライフルでシャルロットとラウラを狙う。

だがそのまま撃たれてやるほどラウラも甘くは無い。

ラウラが比較的銃身の長いアサルトライフルを、懐に入り込み腕で払い

更にシャルロットを狙っていたサブマシンガンをもう片方の手で驚掴みしようとする。

だが、掴んだと思っただけの手はむなしく宙をかいだ。

「馬鹿な、しっかりとつかんだはずだ！？」

私がこの目で距離感を間違えるなど！」

ラウラは既に片方の眼帯を外している。

？ヴォーダン・オージェ？ラウラの左目に移植された疑似ハイパーセンサーで、

この目は裸眼でも数キロ先の標的も目視できるほどの視力を持つ。そんな眼を使っているながら、ほんの数センチ先のサブマシンガンをつかみ損ねるなど

ラウラだけでは無い、他のメンバーも驚きを隠せなかった。

「だから言ったでしょ、目に見える物だけが本物とは懷疑らないっ

てね！」

ローラはラウラを振りほどくと、アサルトライフルとサブマシンガンの一斉掃射を開始する。

サークルロンドを行いながら、ラウラに射撃を浴びせシャルロットへの警戒も怠らない。

こうまで完璧に相手の策にハマると、いくら外側に居るとはいえ

一夏達もラウラを下手に助けに行く事が出来ない。

だからと言って一夏はそれを黙って見ているような真似は出来ない性格だ。

一夏は、自分も被弾覚悟で？

イグニッション・ブースト？を使い無理やり

ラウラとローラの間に入るとそのまま？雪片式型？を振るう。

「おっと!？」

「つく、大丈夫かラウラ!？」

「ああ、大丈夫だ。数はくらったが

威力はさほどでもないらしい・・・それよりも・・・」

ラウラは、余裕の表情のローラを見上げる。

「思った以上に、強い、それに厄介だ」

二人が、会話をする所へセシリアシャルロットをかばいながら、

ビットでローラを牽制して、合流してくる。

ローラはそのビットを、あたかも作戦を練る時間を与えるかのごとく大きく後ろへ飛びのいた。

ふふん・・・さて、どんな作戦で来るのかしら？

ローラはその四人の姿を、不敵な笑みで見つめていた。

「ふん・・・あいつらしくない戦い方だな」

織斑先生はつぶやくと、姉さんをにらんだ。

そう言えば、織斑先生は姉さんの戦い肩をどう思っているんだろうか……。

気になるな。

「あの、織斑先生」

「ん、何だ」

「先生は、姉さんとモンド・グロツソで戦ったんですね」

「ああ、決勝戦でな……。自分で言うのも何だがな、

あの戦いは今でも思い出せるほど良い戦いだった」

へえ……。

良くアスリートの人って何月何日に何があっただかって聞かれるとパツと答えられるって話を聞いた事があるけど。

ふうん……。やっぱりいくら国家代表のIS操縦者と言っても

それはどこかアスリートと似たような部分があるのかもしれないね。

「先生はどう思いました、姉さんの戦い方を」

「どう……か」

織斑先生はふくむと静かに唸りながら顎に手をやる。

そしてゆっくりと姉さんを見上げて答えた。

「一言で言えば、やかましかったな」

「やかましい？」

はあ、なんだいそれ。

ああ、あれ。

宇宙飛行士とかがコメント求められたときにユーモアに富んだ発言をするっていうやつ？

となるとやかましいは何かにたとえて言ってるのかな。

そこへ、先ほどの織斑先生の発言を僕同様に疑問に思った他の生徒が僕より先に口をはさんだ。

「先生、そのやかましいっていうのは？」

「文字通りだ。うるさく仕方が無かった」

……なるほど隠語何でもなかった。

素直にうるさかったのか。

でもそれって何か答えになっただけのような・・・。

ほら何か。・・・例えば距離を取るのが旨いとか、アレが下手だとか・・・

僕はそう言う返しを期待していたんだけどなあ。

僕は、まだ頭に疑問符を浮かべながら織斑先生に尋ねる。

「まだ・・・よくわからないんですけど・・・」

「お前、あいつの戦闘を見た経験は？」

「訓練は何度か」

「訓練か・・・ああ、それにお前はISに触れたのがごく最近だったな

それなら、知らなくても仕方あるまい。

ローラはな戦闘の時ほとんどしゃべりっぱなしなんだ」

喋りっぱなし・・・？

戦闘で？

別に何かを教える状況でもないし・・・。

戦闘中に話すことと言ったら・・・。

・・・あ。

ひよつとして。

「錯乱戦術・・・」

「まあ、格好良く言えばな。それにだ、お前だってそうだろう」

ま、まあ・・・確かに口数は多い方だとは思っけど・・・。

ふん・・・やっぱり姉弟だね。

人に言われて改めて思うけど僕たちって本当に似てるなあ。

「ローラは特に、人の心理的な部分を突くのが旨い。それに嘘もな。更に言えばローラの情報を知れば知るほどに相手はその情報を信じられなくなる・・・。

要はローラ本人以上に情報への懐疑心が強くなってしまっただ」

そもそも、嘘つきが最大の長所な姉さんだ。

それを警戒するのは、戦う相手としては当然の事。

でもその警戒心が過敏になりすぎると今度は姉さんが公表している情報まで信じられなくなってしまう。

この情報は真実なのだろうか、でもこれは正式な情報だから大丈夫・・・。

いやでも相手はあのローラ・サウスバードだし・・・といった具合だ。

「ローラの実力は確かに本物だが、どちらかと言えばそう言う心理戦で勝っている要素も多い。それで私も少々苦しめられた」

織斑先生が、フツと苦笑交じりに下を向く。
苦しめられたか。

でも世界一ってことは、勝ったってことだよな。

どうにも僕には織斑先生が焦っている所など想像ができなかったがそう考えているうちに、一つの疑問がわいてくる。

それは、織斑先生は負けた事があるのかと言う事だ。

公式戦負けなしとはいえ、それ以外ではどうだったんだろう。

一度気になると、人間と言う物は確かめずにはいられない。

「あのすいません、ちょっと話は変わるんですけど」

「今度はなんだ」

「織斑先生って負けたことあるんですか？」

その僕の問いに他の生徒が笑って答える。

「アハハハハ、そんなのあるわけないよ。織斑先生に勝てる人なんてねえ？」

「そうそう、そんな事聞いたら織斑先生に失れ「ああ、ある」・・・

・・・え?」

ひと際大きな声に聞こえたその答えに、皆が固まる。

え、あるの？

注目を集める織斑先生は、あえてその注目を、
気にしないようにしてふうつとため息をひとつ吐く。

今、上空とは違う変な緊張感があたりを支配している。

そして織斑先生は、ボーデヴィツヒには言ったんだがなと前置きしてから、
いつもと同じように淡々とだが僕たちにとっては、驚愕の一言を發した。

「私は一度、あのローラ・サウスバードに負けている」

第22話、姉、突如として（後書き）

閉店時間ギリで、ランチとドライバーで文字通り、売台作ってました。

どうもしるくです。

ようやくお姉さんの愛機が姿を現しましたね。

さて、一度はサラッと流してしまった千冬がローラに前kた件。

これは次回以降今度は確実に触れていこうともういます。

さてさて、それでは23話でお会いしましょう

さよならッ！

第23話　姉の實力と憂鬱

千冬の周りの生徒が、固まるのをローラは上から眺めていた。あー、何を言ったのかしら……。

ローラは少し不思議に思うが直ぐに考えを切り替える。

まあ、そんなの後で良い。今はあの子達の相手が最優先だ。

ローラはふよふよと浮かびながら、ジツと一夏達を見据える。どうやら作戦はラウラが主導で立てているようだった。

確かあの子はドイツの現役軍人だったわね。

あの年で、あの實力そして作戦立案。

はあ〜末恐ろしいわね。

ローラは次にシャルロットを見る。

あの子は、フランスのデュノア社のご令嬢。

中々複雑なバックグラウンドがあるらしいけど、實力は多分ラウラちゃんの次ぐらいかしら。

で、あの子がセシリアちゃんね。

なるほど、確かに言われてみれば昔あたしの所へ交渉に来た女性が連れていた女の子だ。

セシリアの漂う気品の高さは、ローラにも覚えがあった。

そして、弟にご執心と。

フフツ、いい子そうじゃないの。

アルデイにはもったいないわね。

ローラはクスツと笑うと残った最後の一人へと目を向ける。

織斑一夏。あの織斑千冬の実弟。

さつきちよろつと交戦したがまだ色々荒削りながら

内包する強さは、他の誰よりも高く感じられた。

アルデイとは全く違うタイプね。

ローラは当然といえば当然の事を思う。

アルデイは良くも悪くもあたしの真似事で、ここまで生きてきた。

まあ、それはそれで良い。別に悪いことでは無いのだろう。弟が姉に似るのは、当たり前と言えば当たり前だ。だが、それは何処まで行っても“真似事”なのだ。ローラはアルデイに、嘘を吐く大切さを説いた後、アルデイがローラの真似をし始めたことを実際少し心配していた。

ローラ自身はアルデイにそのローラの持論を元に、自分らしさに気がついて成長していく事を僅かながら期待していたのだ。

しかし結果は、ローラにとっては少し残念な物だった。アルデイは、“姉のようになること”がイコール“自分にとっての力になる”

と考えてしまったのである。

まだそれを力と考え、使う自分が強さと思っている事が救いだ。それでもローラからすれば不十分だった。

でもあの織斑一夏は違う。

これはローラの個人的な考えだが、彼はすでに確固たる強さの考えを確立し始めている。

往々にしてそういう考えがしっかりしていればしているほど、人は強くなれる。

今全力でやりあったら、アルデイは彼に勝てない。

そう断言できた。

ローラは自分の弟が早く、本当の強さに気が付いてくれることを願いつつ

いまだに話し続ける一夏達を、注意深く観察するのだった。

ローラがわざと自分たちに時間をくれたということは、
ラウラにもそしてほかの皆にもわかっていた。
これが実戦だったらと思うと、ラウラにとっては癪に障るがそれ
も今回ばかりは

与えてくれた時間を有効に使うべく一夏達と議論を交わしていた。
それにラウラには、一つだけどうしても確かめたいことがある。

それは、依然千冬が言ったあの言葉

？あいつは、私に一度勝っている？

勝っている……か。

ラウラはじつとローラを見て少し考える。

確かにローラ・サウスバードは強い。

伊達にアメリカ代表を名乗っているわけでも

？モンド・グロツソ？で千冬に次ぐ世界第二位に輝いたわけでもな
いだろう。

……しかしだ。

ローラは千冬に負けたから世界第二位なわけだ。

ならいったいどこでどのように千冬に勝ったのか。

それがラウラには気になる。

千冬も一目置くあの、ローラ・サウスバードが……。

ラウラは再び、ローラを見ようとして一夏が自分を呼んでいること
によつやく気が付いた。

「おい、ラウラ聞いているのか！？」

「あ、ああなんだ、聞いているぞ。それで……何の話だったか……
？」

「もう、すっかりしてくださいな、あなたが今作戦立案を担ってい
るのですわよ！？」

セシリアに語気を強められ、ラウラはすまないと短く謝ると

一夏が改めてラウラに質問を繰り返した。

「だから、お前から見てローラさんはどうだったっていう話だよ」

「うん？ 私から見ただと？」

「ほら、ラウラは軍人でしょ。いくら代表候補性って言ったって僕たちとは目の付け所も受ける印象も違うはずだから、作戦の参考にしようと思ってさ」

なるほど、まあ確かに先ほどの数回の交戦で私なりにわかったこともある。

情報を共有するのは、作戦行動を共にする仲間にとって非常に重要なことだな。

「ふむ、まず彼女は火器全般に広くそして深い知識がある。さらにそれを扱う相応の技術もな」

「それに・・・？ラピッド・スイッチ？も、使われちゃったしね」シャルロットがぼそりつぶやくがラウラはそれを首を振って否定する。

「いや、あれは多分？ラピッド・スイッチ？ではない」

「え？だけどあれは完璧にシャルの技術だったじゃないか、なあ」

「うん、僕から見ても完璧な？ラピッド・スイッチ？だったけど・・・」

疑問顔の二人にセシリアが鋭い目つきで静かにつぶやいた。

「？スピード・リーダー？・・・」

ラウラは静かにそれに肯定すると？シユヴァルツェア・レーゲン？のモニターを切り替えてほかの面々に見せる。

そこには一つの小さなパーツが表示されている。

「何なんだよ、その？スピード・リーダー？っていうのは」

「ISの瞬間武装展開システムのいわば増幅装置のようなものだ。

これを使えば確かに、特殊な技能がなくても？ラピッド・スイッチ？をと同じことを再現できる・・・」

もともとこれはISの技能が未熟なルーキー用に、開発されたアメリカの補助システムである。

あらかじめ、次に呼び出したい武装をこのリーダーに設定しておくリーダー内部で実体化と量子化のギリギリのところまで武装が固定される。

そして使用時になるとすでにほぼ半実体化している武装なので、通常よりも早い速度で展開が可能となるわけだ。

しかしこのシステムは、本来多くの武装を持つISを想定してはいない。

なぜならリーダーの要領には限界あり、さらにISという限られたスペースを

有効活用しなければならぬ物にはせいぜい切り替えは一つのリーダーに二つが限界。

量産機ならそれでも十分だろうが国家代表の機体へ搭載するような代物ではないのだ。

しかしローラはおそらくこのシステムを積んでいる。

そう、相手をかく乱するためだけに。

「それじゃあ僕の目の前でやった、あの？ラピッド・スイッチ？は・・・」

「おそらくローラ・サウスバードはあそこでどちらかを完全に落としかつたのだろう。」

特にシャルロットお前はスラスターを負傷していたからな」

そこまで言い終わってラウラもそしてほかのメンバーも、改めてローラ・サウスバードの懐の大きさに驚かされた。

しかしだ、ここまでわかっているのなら対策は立てられるのではないか。

そう考えたのか一夏はラウラに、期待のまなざしを向けた。

「なあ、ラウラ。そこまでわかっているんなら俺達でもなんとかするんじゃないのか？」

「いや、一概にそうとも言えない。むしろ今となっても私たちにほぼ勝つチャンスはない」

「そうですね・・・。何しろ我々が得た情報も多いですけどそれと同じだけ・・・いやそれ以上にわたくしたちがローラさんに与えた情報も大きいですわ」

二人に否定されては、一夏もうつむくしかない。

「それにだ、まだシャルロットが撃たれ、私が彼女のマシンガンをつかみ損ねた理由がわかっていない」
「いったい何をしたというのか・・・。」

考えても考えてもわからないことだらけだ。

ラウラは、ローラ・サウスバードと戦うという、意味を今更ながらに理解した。

厄介かつ高い実力に裏打ちされた高度な戦術と技術。

自分に不利でも相手をそれ以上に、

不利な状況に追い込めるのならその不利を自ら進んでとりいれるストイックな姿勢。

そして何より、相手の心理を揺さぶる巧妙な話術と振る舞い。

ラウラはおそらく初めて戦っている最中にこう思った。

勝てないと。

結局その後もいくつか案は出たものの有効な作戦を具体的には決められないまま、

ラウラ達に作戦立案時間終了の合図と言わんばかりにローラの声が響いた。

「さてそれじゃあ、見せておらしまししょうかしら！」

ローラはスラスターに火を入れ一気に加速する。

その手にはさつきと同様にアサルトライフルとサブマシンガンが握られている。

「ぜらあああああああ！！！」

まず最初にローラに突っ込んできたのは一夏だった。

？雪片式型？を上段で構え真正面から突っ込んでくる。

「あら、まっすぐな男の子。あたしはタイプじゃないわね」

「だったら、せめて好かれるようにちょっと回り道でもしますよ！」
一夏はニヤツと笑うとそこで大きく進路を変えた。
そしてそこにいたのは。

「僕はまっすぐな、男の子のほうが好きですけどね」

両手にアサルトライフルを構えたシャルロットだった。

シャルロットは、両手のアサルトライフルを狙いかまわずに撃ちまくる。

「あらやだ!？」

ローラの動きが止まったところに、先ほど迂回した一夏が
？イグニツション・ブースト？で一気に飛び込んだ。

しかし、そんなことであわてるローラではない。

ローラはその？雪片式型？を左側のアンロックユニットのシールド
で受け止める。

だがいくら受け止めたとはいえ、

止まっていたローラに対して勢いをつけて鋭く振るわれた一夏の？
雪片式型？は

ローラのシールドの側面をスパツと切り取ってしまう。

だがローラはそのあとでも笑っていた。

ローラが行ったのは、言ってみれば防御。

そして一夏は切り取ったとはいえそれを？防がれた？のだ。

「あらあら、隙だらけね」

切断したという感触が一夏に一瞬のすきを作らせる。

「しまっ！」

「まず一機目は、あなたね。千冬によろしく」

ローラは微笑むと至近距離から両手の武装を弾切れになるまで撃ち
こんだ。

もともと二度の？イグニツション・ブースト？によってエネルギー
を消費していた？白式？は

その集中攻撃に耐えきれず、シールドエネルギーは簡単にゼロにな
ってしまった。

ガシャアアアン！

大きな砂煙とともにまず一夏が脱落する。

そこへ、一夏の確認もそこそこに、？ブレット・スライサー？を展開したシャルロットが飛び込んだ。

それをアサルトライフルの銃身で受け止め、シャルロットとローラがしばしにらみ合う。

「あらどうしましょうか、あたしには近接武器がないのに・・・」

「それも嘘ですか？」

「嘘を嘘という人間がいないように真実を真実という人間もいないわよ？」

ローラの意味深な発言に、首を少しかしげながらも

シャルロットは破損したスラスタを必死に修正しながらローラを抑え込む。

「そういえば、あたし忘れ物してきちゃった」

唐突に思い出したかのように全く関係のないことをいうローラ。

警戒しながらもシャルロットはそれに反応した。

「今度はなんですか！ また何かの作戦ですか？」

「やーねえ、シャルロットちゃん・・・後ろに気をつけなきゃ」

ローラの声とともに、シャルロットのハイパーセンサーが背後に機影をキャッチした。

「え！？」

思わずバツと振り返る。

そこには確かに、？ストライク・ミラージュ？の姿があつた。

その？ストライク・ミラージュ？はこちらにスナイパーライフルを向けて今にもトリガーを引こうとしている。

「しまった、こっちが本体か！？」

シャルロットはその機影に向かって素早く武装を切り替える。

そして自身もトリガーを引こうとしたその時。その影が掻き消えた。

「ウフフツ、だから言ったのに・・・後ろに気をつけなさいってね」

その声が聞こえたのは、また後ろ。

いやさつきまでシャルロットが、ローラを抑え込んでいた場所。シャルロットはサーツと血の気が引くのがわかる。

だがローラはいたってにこやかに、？リヴァイヴ？のスラスターのすべてを一瞬で？切り裂いた？

「やつぱり嘘だったあゝ！！」

変わった断末魔だと思いつながら、ローラは落ちていくシャルロットを眺める。

シャルロットのスラスターを切り裂いたのは、右腕に取り付けられた小型の近接ブレード？ランディング・スパイク？。

高機動時に空気の抵抗を受けづらくするために長さは小太刀程度しかないが、取り回しが非常によく

コンパクトに振るえるのが最大の魅力だ。

「ふん．．．久しぶりに使ったわねこんなの」

ローラはそれを格納すると、残った二機を見やる。

ラウラとセシリアは、まだ動こうとはせずに、こちらを警戒しながら距離をとっている。

当然だろう。

目の前でもとも簡単に二人を片づけてしまったのだから。しばしの沈黙のあとラウラが叫んだ。

「セシリア！ 援護しろ！」

「わかりましたわ！」

ラウラに連動してセシリアのビットが舞う。

ローラはそのビットにあえて誘導され、ラウラを正面から受け止めた。

「ドイツの量産機ね．．．」

「そちらこそ、なかなか面白い機能満載なようですね！」

ラウラはプラズマ手刀で、ローラを払うと続けざまにワイヤーブレードを射出する。

そしてその一本がローラの足に．．．絡まなかった。

ラウラはそれを見て、舌打ちをする。

「っちい、またか・・・！」

ローラはその顔を見て、微笑むとラウラのワイヤーブレードを切り裂いていく。

でもあの子、やっぱりさすがね。

？ミラージュ？の能力に気づき始めている・・・。

？ストライク・ミラージュ？にはほかのISとは違う特殊な装甲とシステムが備わっている。

一つは特殊偏光装甲？ステルスミラージュ？

そしてもう一つが光学投影システム？フェイク・シルエット？である。

この？ステルス・ミラージュ？は装甲表面を鏡面化し光の屈折反射によって、

焦点距離を狂わせ相手の距離感をずらすことができる。

ラウラがローラのサブマシンガンをつかみ損ねたり、ワイヤーブレードを絡み損ねたりしたのは

そのためである。

もう一つの、？フェイク・シルエット？は空中投影ディスプレイの応用のようなもので、

ウィングスラスタに取り付けられた特殊プロジェクターによってあたかもそこに

ローラがいるかのようなリアルなスリーディー映像を投影することができる。

先ほどシャルロットに行った攻撃がそれだ。

この二つにローラの話術と実力が合わされば、はっきり言ってほぼ無敵ともいえる性能を発揮する。

この二つのどちらかをラウラは感じている可能性が高い。

ネタバレする前に落としちゃったほうが賢明ね・・・。二人一緒に行きますか！

ローラはその手に同様にサブマシンガン、アサルトライフルを構え

ラウラを狙う。

ラウラは一度ワイヤーブレードをひっこめ、その弾丸をAICによって防いだ。

そのタイミングで、ローラは？フェイク・シルエット？を起動し？セシリアを背後から狙う？

一瞬セシリアの意識が背後の偽物に向いたところで片っ端からセシリアのビットを爆散させる。

周囲に浮かんでいたビットの爆発はラウラの視界を奪うには十分な爆発を生む。

「もらったわ！」

「つく、させん！」

ローラはラウラへ？ランディング・スパイク？で襲い掛かる。

ラウラはそれをAICで防ごうとして、とっさに腕を出す瞬間その機影が消えた。

「な、なに、これは！？」

ラウラが確認した時にはセシリアはすでにローラの銃によって刻まれ落下するところで

バツとその方向を向くとそこには笑顔で額に銃を突きつけるローラの姿があった。

ローラの最初の狙いは実はセシリアだったのだ。

そこでまず？フェイク・シルエット？でセシリアの注意をそらし

ラウラ周辺に漂うビットの動きを止めて爆発させ、一瞬視界を奪う。

その後本体と？フェイク・シルエット？の位置を入れ替えるように素早く移動してローラ本人はセシリアを撃墜。

その後フェイクの機影にラウラがとっさに反応するのを見て

自慢の強大な推進力で素早くラウラの背後に移動し、余裕で銃を構えればそれで一丁上がりである。

機体の特殊装備と強大な推進力という、もともと持つ？ストライク・ミラージユ？のポテンシャル。

そして自分の特技を高いレベルでまとめ上げた国家代表としての完

壁な作戦。

「あたしの勝ちかしらね？」

勝ち誇り余裕という名の自信に満ち溢れたローラにラウラは、
一瞬間をひきつらせそして静かにうなずいた。

「勝っちゃった」

オーブンチャネルで発せられたローラの明るい言葉は、
この試合を終わらせる終了のブザーだった。

ローラは敗北を認めたラウラと共に降下する。
するとふとラウラがローラに尋ねた。

「あの、一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「ええ、何なりと」

ローラはいつも通りの、気さくな態度でラウラに答える。

ラウラは返答を聞き、少しうつむいて何かを考えた後意を決したよ
うにバツとこちらを見やり口を開いた。

「ローラさんは・・・その、織斑先生に・・・勝ったことがあると
いうのは本当なのでしょうか？」

それを聞いた途端ローラの目つきが変わる。

ローラは声のトーンを低くしてラウラに質問で返した。

「それは、誰に聞いたの？」

急なことに戸惑うラウラだったが、そうなりながらも言葉を紡いだ。

「お、織斑先生です・・・」

「そう千冬が・・・」

それだけを言い残すと、ローラは急にスラスターを噴かし千冬へと
一直線に急降下する。

そして地上五センチという見事な完全停止を行い続けて“ストライ
ク・ミラージユ”を待機状態に戻すと、千冬へと詰め寄った。

「あなた、あの事を話したの!？」

胸ぐらを捕まれても、千冬は何食わぬ顔で淡々とそれに反論する。

「ああ言った。別に悪いことではあるまい。あれはお前の勝ちだったのだからな」

「ふざけないでッ!!」

ローラはものすごい剣幕で千冬を睨む。

今はこの千冬のいつも通りの淡々とした受け答えがローラを逆なでする。

千冬は胸ぐらを掴んでいるローラの手をふりほどくと、ローラに言った。

「ローラ、話は後にしろ。今は生徒の前だぞ?」

「あ」

ローラは今更に生徒全員が目を丸くしていることに気がついてばつの悪そうな表情を浮かべた。

千冬はそれを一瞥して、乱れたジャージを正すと授業終了の号令をかけた。

何が起きたのか、クラス全体がきょとんとしていたがただ一つローラにとって、初めての授業は

何とも後味の悪い物になってしまったと言う事は皆理解できたようだった。

あゝあゝあゝ。

なんで姉さんあんなことしちゃったんだろ……。

今は昼休みで、あれから三つもの授業を受けたと言うのに今朝の一件がまだ尾を引いていた。

おかげで、今日の授業全くとっていいほど頭に入っていない。

……いつも以上にね。

はあ……。

でもどうしてあんなに怒ったんだろう……。

それに姉さんが織斑先生に勝ったってという話も、聞いた事が無かった。

どうなってるんだろ……ねえ？

僕が机に突っ伏していると、そこへいつものメンバーが集まってきた。

「ねえ、一夏。アルディどうかしたの？」

「ああ、まあ。今朝の授業でちよつとな」

「ちよつと？」

語尾を濁す一夏に鈴は怪訝な顔をするが最終的には「ま、いいか」で終わるのが鈴らしい。

「にしても、まだ引きずっているのかお前は」

「そうは言ってもねえ、筭……」

そうそう簡単に忘れられることじゃない、それが身内ならなおさら

に。

「でも、本当に何も聞いてないの？」

「聞いてないよ、一度もね。それにさ、皆も知ってるんですよ。」

織斑先生が公式戦負けなしだったっていろいろのは「ん〜。でしたら非公式の試合だったのではなくて？」

それなら記録にも残りませんし、皆さんが知らないと言うのもうなずける話ですわ」

「でも、そうだとするなら今度は姉さんの態度に疑問が残るよ」

姉さんはあの時織斑先生に勝ったと言われた事に対して怒っていた。仮に姉さんが、非公式とはいえ？あの？織斑先生に勝ったと言うのであれば

あそこまで怒る必要があるだろうか。

多分何かあったんだ……。

姉さんと織斑先生が戦った時に。

でも、それを確かめるには、当事者に聞くしかない。

今はどうかわからないけど姉さんには聞きづらいいし、織斑先生には・

僕はチラツといつものメンバーをみる。

他の面々も、僕の視線に含まれる意味を理解したようで、全力で首を横に振った。

「……だよねえ。」

僕だって嫌だ。

「……とそう言えば、さっきから声が聞こえないけど。」

「ラウラはどうしたの？」

「え、居るよここに」

そう言っただけでシャルロットが一步ずれるとその後ろですっとうつぶいて難しい顔で何かを考えるラウラがいた。

「ラウラどうかしたのか？」

「ん、い、いや……何でもない少し考え事をしていただけだ」

「それって、ローラさんの事？」

「……まあ、な」

ラウラは、決まりの悪い顔だったが小さく頷く。

そう言えば、織斑先生はラウラには言ったんだがとか言ってたな。

「ねえラウラは姉さんの事、何か織斑先生から聞いてない？」

「私も、あの学年別トーナメントの後に

医務室で少し話したただだからな。詳しくは聞いていない」

ラウラもダメか。

こりゃいよいよ当事者に話を聞くしかなかったなあ……。

ん？ 当事者。

そう言えば何か大切な事を忘れてるような気がする。

「あのさ、セシリー。僕たち何か忘れてるような気がするんだけど」

「何か、ですか？」

セシリーはうんと首をかしげ腕を組む。

何だったかな。

確か、あの模擬戦の前あたりに何か僕たちは調べていたような。

うん……。

ああ！思い出したッ！

「セシリー、そうだ僕たち聡也の事を！」

「あ、そうでしたわッ！」

セシリーはポンと手を合わせ、何度もうなずく。

「そうだ、僕たちは聡也の事を調べてたんだ。」

あの、聡也が起こしたもめごとについて。

とりあえず、そっちを先に片しちゃうないと。

このまま問題を積んでいくのは、いささか面倒だしね。

「おい、アルディ、セシリア一体何の話をしてるんだ？」

「そーよ、聡也がどうかしたの？」

一夏や鈴が、いやここにいるメンバー全員が僕たちに疑問を投げかけてきているが

流石にこれだけの大所帯では、動きづらくなるというのは目に見えていた。

何か、ごまかせるような物は……ああそうだ。

「一夏達は、姉さんの事について調べてみてよ！」

僕たちは僕たちでちよつと調べなきゃいけない事があるからさ」

「え？ あ、おい！」

「そ、それじゃ！」

僕はセシリーの手を引いて足早に教室を後にする。

残された一夏達はただ茫然と、その後ろ姿を見送るだけしかできなかった。

「なあ鈴」

「何よ」

「あいつらどうしたんだ？」

「あたしが知るわけないでしょ！」

一夏が筭たちを見ても、さっきと同様に皆そろって首を横に振るだけだった。

千冬は、コトリと職員室の机にコーヒを置いて、椅子の背もたれに寄りかかる。

・・・あいつめ、まだ根に持っていたのか。

アレは・・・あの事はもう私の中では話がついたと思っていたのだがな。

まあ何にせよ、生徒の前であんな事になってしまった以上いずれ話さねばならん時が来るが・・・。

はたして、あいつがあゝの事を冷静に話せるかどうか・・・。

まあ無理だろうな・・・今日の様子を見る限りでは。

千冬は身体を起こしてコーヒを一口、口に含みながら目を細めた。アレは完璧に私の負けだった。

・・・誰が何と言おうとな。

千冬は心の中でそうつぶやくと、再びコーヒークップを机に置いて自分の仕事へと戻った。

はあ〜やっちゃったわあ・・・。

ローラは急遽用意された、部屋のソファにドサツと腰を下ろした。

その顔には明らかかな後悔が見て取れる。

でもあれは千冬が悪いのよ。

あんなのをあたしの勝ちだなんて言うから。

・・・はあ、全く。

馬鹿にしないでほしいわ・・・。

確かに、あたしは？モンド・グロツソ？で千冬に負けたけど・・・。

。

だからと言ってあんなものを勝ち星に勘定するほど腐ってもいない。
あたしにだってプライドはある。

アレはあたしの負け。

誰が何と言おうとね・・・。

ローラは、何も無い宙をにらみ、フンと鼻を鳴らした。

今はまだ、その真実は彼女たちのみぞ知る。

第23話〜姉の実力と憂鬱〜（後書き）

しまったか思ってももう遅い。

どうもしるくです。

ここだけの話ロツソの事をすっかり忘れていた僕は馬鹿ですね
も本当にはかばかw

なので、少しづつ両方の問題に触れていくという何とも難しい事を
しなければならなくなりました（汗）

ちいとまだまだ読みづらい文章ですが、お付き合いくださいな。

それでは24話でまたお会いしましょう！
さよならッ！

第24話 探偵アルディ・サウスバード

一夏達から逃げるように僕たちは二組へとやってきた。

今回はすぐにロツソと総也を見つける事が出来た。

これはラッキーだ。

前は二人ともいなかったばかりか、その後にはたいへんな事になっちゃったからね。

「ロツソ、聡也！」

「アルディ」

「……どうも」

セシリーも言葉は発しなかったが、ペコリと頭を下げる。

一通りの挨拶がすむと僕は単刀直入に総也に切りだした。

「ねえ、聡也。実はこの前の風紀委員とのもめ事について少し聞きたい事があるんだけど」

「え、ああ……あれは……」

急に顔が曇る聡也。

だがその質問はロツソも同様に思っていた事だったらしい。

「……そういえば……まだちゃんとした理由を……聞いてなかったわね」

「いやだから、あれは僕が風紀委員になりたかったからって言うただそれだけで……」

「ですけど、あなたはまだ風紀委員じゃありませんわよね？」

セシリーの一言にうツと言葉を詰まらせる聡也。
つていうかそうなの？

てつきり勝ったもんだから、風紀委員になったもんだとばかり。

「え？ 聡也つて風紀委員になつてなかったの？」

「……ええ、まあ」

「……担任に話したら……委員の選定期間以外での変更は……原則認められていないんだって」

なるほど。

まあ確かにそれは当然と言えば当然だろうね。

学校側もそんなのを認めていたら、コロコロと変わられた時の対処が大変だし。

ん、待てよ……。

確か、勝つたら風紀委員を変わってもらうって言う約束をしていたんだよね。

でもそういう規則の所為で、風紀委員が変わらなかつたっていう事は……。

僕はチラッとロツソの目をみる。

そしてロツソはコクリと頷くと、ボソリと言った。

「……完璧に私の戦い損」

「ううっ……」

流石にグサリと来たのか聡也が、うずくまる。

ははは、まあ自業自得ってことで……。

「で、まあその話は置いてさ。僕たちが気になっているのは

どうして君が上級生の風紀委員と揉めたかかって言う事なんだよね」

「何か、わけがあるのでしよう、話してくださいませんか？」

聡也は、また決まりの悪そうな顔で少し目を泳がせていたがやがて諦めたように息を吐くと、僕たちにゆっくりと背を向けた。

「分かりました……。ついてきてください」

聡也は僕たちの答えも聞かぬまま歩きはじめた。

僕たちもあわててそれに続く。

聡也は、階段を上がり一学年上の二年生のクラスへ僕たちを案内する。

その教室には二年一組の札が掛かっていた。

聡也は、後ろの空いている扉から遠巻きに中を除いて一人の女子を指さした。

「あれ、見えますか？」

「あれって・・・あの赤い髪の人？」

聡也が指さした人物は、丁度この扉からまっすぐ見える位置、つまり教室の一番前の窓側の席に足を組んで座っていた。

あれ、あの人・・・どこかで。

「まああの人が理由と言えば理由なんですけど」

「・・・あの人が？ 聡也・・・こつちおいで」

「いやいやいやいや、違いますからね！？ ロッソあなたが思っているのと」

僕が思っているのでは、マリアナ海溝ぐらいの差がありますよッ！？」

おいでなんてかわいらしい事言っているが、行けば間違いなくフルボッコは確定だろう。

もう少し仲良くしたら良いのにねえ。

「あなたはもう少し、鋭くなった方がよろしいですわよ」

なぜかセシリーにジト目で睨まれた。

ちなみに聡也は、既にロツソに首根っこ掴まれて退場。

今回は、聞こえてこなかったが一応手だけは合わせてあげよう。

と、そんな事を考えている場合じゃなかった。

もう一度僕たちは、聡也が指さした人物を見やる。

顔は見えないがあ髪の色や雰囲気はどこか引つかかる。

「・・・ねえ、セシリーあの人さ・・・僕どこかで会った気がするんだ」

「ええ、私もですわ・・・むしろ・・・戦った」

そう、その人物は無人数機を追って黒いISが襲撃してきた時にセシリーを狙ったあの？紫燕？の操縦者に非常に酷似している。

そしてそれは、ふと女子が振り返り顔が見えた時確信へと変わった。間違いはない、あの顔は！

でも、なんで・・・。

この学園の生徒だったとでも言うのか？

いやでも・・・。そんなバカな。

僕は、一度深呼吸して自分を落ち着かせるとセシリーを見て一回頷く。

セシリーも同様に、僕へ頷き返してくる。

そして僕たちは二年一組へと足を踏み入れたのだった。

踏み入れたと言っても、中に入ったわけではない。

まず手短な先輩にあの人の名前を聞かないとね。

「すみません、ちょっといいですかね？」

「うん、なんだい？」

「あの先輩の名前、教えてもらってもいいですか？」

尋ねた先輩は僕が指をさした方向を追う。

そして対象に気付いて、ハハツと笑いながら気さくに教えてくれた。

「ああ、彼女？ 彼女は鳥越 聡華って言っただけど・・・何か用？

何だったら呼んであげるけど・・・？」

おお、これはラッキー！。

流石に僕たちが呼んだんじゃ変に注目されてしまう。

僕はとりあえず廊下にいるからとその先輩に告げて、

鳥越先輩を呼んできてもらう事にした。

「にしても、あの方・・・似すぎですわよね」

「うん・・・そうだね。まさか本人では無いと思うけど・・・それにし
たつてねえ」

二人でそんな会話を交わしていると、荒い口調が僕たちを呼ぶ。

そこには、実に面倒くさそうに片目を閉じて口をとがらせる鳥越先輩がいた。

「お前らか？ あたしを呼んだのは」

「ええ、まあ・・・とりあえず僕はアルディ・サウスバードって言
います」

「私は、セシリア・オルコットですわ、よろしくお願いします」

「ああ、あたしは鳥越聡華ってんだが・・・で、一体何の用だよ。」

まさか自己紹介のためだけに呼んだんじゃねえだろうな」

「もちろん、違いますよ。流石にそれだけで呼びだすのは失礼ですよ？」

「フン、ま、いいけどよ」

鳥越先輩はそっぽを向いて不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「……って言うかなんで、こんなに機嫌悪いんだろう……。まだ僕たち、特に神経を逆なでするようなことは言っていないしやつても無いと思うんだけど……」

「気をつけなよ、君達」。聡華は呆れるぐらい気性が荒いから横槍を入れたのはさつき鳥越先輩を呼んでくれた同じクラスの先輩だった。

その人に向かって鳥越先輩は睨みを利かすと「うっせえよ」と吐き捨てる。

ひよつとしてこの先輩から聡也へ喧嘩ふっかけたのではないかと思っぐらいきつい性格のようだ。

鳥越先輩は腕を組んでまた、鼻をならすと再度苛立ちを含んだ声で尋ねる。

「で、その失礼に値しねえ用事ってのは？」

「ああ、えと。数日前に先輩と揉め事を起こした一条 聡也についてです」

ヒククつと鳥越先輩の顔が引きつり、その目のままこちらを睨む。

「知ってますよね？」

「……ああ」

鳥越先輩が静かに肯定するのを確認して、僕は言葉を続ける。

「何があったか、ちよつと話していただけませんか？」

僕はあえて、少し挑発的な声で先輩に言う。

するとそれに少々神経を逆なでされたのか目を細め更に鋭くこちらを見やる。

「うう……怖い。」

「……てめえ、中々良い度胸してやがんな」

「まあ、色々面白そうなことに首突っ込むのは嫌いじゃないんですよ?」
とかいいつつ、内心もう逃げたかった。
多分セシリー居なかつたら全速力でこの場を後にしていたことだろう。

鳥越先輩は僕の顔を見て少し考えた後、やれやれと笑うと腰に手を当て顎で僕達を促した。

「ついてこい」

鳥越先輩は僕達が、歩き出すことを確認すらせずに一人歩いていってしまう。

まあでも、これで話が聞けそうだぞ・・・。

「フフツ、アルやりましたわね」

「ハハハ。かなり怖かったけどね」

セシリーに小脇突かれながら僕は、苦笑いを返す。

「おい。ついてこいつての!」

「あ、はい! すいませんッ」

僕達は先輩の後を追いかける。

これから聞けるであろう話に少しの期待と不安を感じながら。

ローラはあの授業の後も他のクラスのIS実習を二つ程こなすうちに、

どうにか気持ちに整理がつきこの昼休みに千冬の元を訪れている。
二人は気分転換にと今は屋上にいた。

「はあ、にしてもダメねえ。あの事になるとついカッとなっちゃう・

・・・」

「まあ、良しさ。私は気にしていない」

本当に何も気にしていない風な口振りにまた少しカチンとしてしま
うが、

流石にローラもここはこらえた。

ここでまた怒ったなら、同じ事の繰り返しだからだ。

千冬は柵にもたれかかり腕を組み、ローラは腰に手を当て千冬の正
面に佇んでいる。

そんなローラをチラリと見て、千冬はゆっくり目を細める。

「それで、何をしにきた？」

「あら、どういう意味？」

「とぼけるな。お前がただ謝るだけでわざわざ私を訪ねるはずかな
いだろう？」

ローラはフツ笑うと、息を一つ吐いた。

「何でもかんでも、お見通しね」

「で、何だ？」

「あなた、アルディから“ストライク・バーデイ”を預かってるわ
ね？」

千冬は一瞬目を見開き、そして懐から真つ二つに切断された弾丸の
ネックレスを取り出した。

「お前こそ、お見通しというわけか……」

「さて、どうかしらね」

ローラは千冬から、？ストライク・バーデイ？を受け取ると
それを掌の上で転がしてまじまじと見る。

実際こうなってるからの？ストライク・バーデイ？を初めてみたと思
った以上に

これは酷そうだということには分かった。

「千冬、これの簡易検査の結果。もう出てるんでしょ。どうだった
の？」

「簡易検査……か。ああ……まあ出るには、出たが……」
千冬は、大きくはあっと息を吐く。

それだけでローラは、良い答えはないということを感じた。

「よく・・・わからなかった」

「わからない？ この学園の設備をもつてしても？」

案の定回答だったが、それでもわからないという答えは予想外だ。検査というものは、簡易であれ何であれそれなりに白黒がつくものはずである。

せめて壊れているのか壊れていないのか、それだけでもローラにとっては

大きな収穫だというのに答えは分からない。

正味、ローラはこの設備に期待していた部分があった。

一国の開発機関以上の設備を有するこの学園ならばと。

・・・まったく手間のかかるISである。

「ああ、基本的な情報は抽出できるんだがな。肝心なコアシステムへの

アクセスをすべて拒否しているんだ。今のところ手の打ちようがない」

「基本的な情報というのは？」

「簡単な、破損チェックなどだな。だがそれも装甲表面や武装といったコアシステムに

あまり関係しないところの情報だけで、一度そこからクラックを入れて入り込もうとしたんだがな

駄目だった」

なんてこと・・・。

これじゃ、現状自分が手伝えることなんてほとんどないじゃない。

ローラはため息を漏らすと、困り顔で千冬を見た。

まあ千冬も困り顔なのだが。

「・・・なあローラ。お前が使っていた時もこれほど面倒なISだったのか？」

「まあね・・・それでも半日調べりゃ反応があったわよ。アクセス拒否なんて聞いたこともないし」

「・・・そうか。まあ、うむ。・・・それはお前に預けておこう。お前からサウスバードに返してやってくれ」
千冬は言い残し、屋上を一人後にする。

残されたローラは、空を見上げて？ストライク・バーデイ？を掲げた。

「まーったく、世話のかかる子ねえっ！」

それは独り言なのか、はたまた？ストライク・バーデイ？へ向けられたものなのかは
わからないが、その大きな声はきれいな青空に響いていった。

鳥越先輩はドカッとラウンジの椅子に腰かけると、足を組み肘をついた。

「つていうかその。」

「そういう足の組み方だと・・・。」

「あん、何赤くなつてやがんだよ」

「あ、い、いや・・・その・・・」

「あ！？ ちよ、ちよつと先輩！ し、下着が見えてますわよ！？」
セシリーがなるだけ声を低くして、あわてて指摘するが鳥越先輩は
気にしない。

「あ？ 別にいいだろ減るもんじゃねえし・・・」
ま、つってもてめえが落ち着かねえか？」

「ハハツと笑って足をほぐくと、改めてこちらを見やる。」

「で、あの一年坊主のことについて聞いてえんだつてな」
一年坊主とは間違はなく聡也のことだが、僕は今それ以上に気にな
っていることがあった。

それは彼女の話し方から容姿に至るまでそのほとんどが、あの襲撃者に酷似していることだ。

確かに、よく芸能人や有名人に似た顔をもつ人はいる。だがこれはそのレベルではなかった。

まるつきり同じなのだ。性格まで。

何かやつぱり関係あるんだろうけど……。

「聞かせてくださいますの？」

セシリーが先輩の発言に反応する。

いわれてみれば、あれだけ人を睨んでいたのにいやにあっさり話す気になったよね。

「後で、ごちゃごちゃ聞きに来られていちいち相手するぐらいなら誰かに話して、それで終わりにしたほうがよくねえか？」

「はあ、まあ確かに」

「じゃあそういうことだ」

鳥越先輩は、背もたれに寄りかかって両手を頭の後ろで組み天井を見上げながら話し始めた。

「あの野郎と、初めてあったのはアリーナのピットだったかな。いきなり声かけられたんだよ」

「向こうからですか？」

「ああ、そうだけ。しかも何を思ったかあたしのことを？姉さん？って呼びやがってよ」

「「ええ！？」」

僕とセシリーは声が見事に重なった。

そして音量もまあ同じぐらいだったと思う。どうということなんだ……。

「あの、ちなみに先輩にご兄弟はおられますの？」

「うんにゃ、あたしは一人っ子だ」

と、いうことはつまりだ。

ええと……。

そこまで考えて、セシリーが僕の肩を引っ張り顔を近づけて声を潜めて話しかけてきた。

「ねえ、アル・・・どう思われます?」

「・・・まあ一つの仮説はあるけどね。ただ・・・まだ確証は持てないかな」

「ですけど、おそらくあの・・・」

「うん・・・そうだね」

僕たちはちらつと鳥越先輩を一瞥すると、偶然にも目があつて語気を強められた、

「おい、もういいならあたし教室に戻るぜ?」

「あああ、いやいや、少し質問の確認をしてただけですから・・・僕たちはあわてて離れると、再び鳥越先輩の話に耳を傾けた。

それからの話は、聡也と先輩の模擬戦やそれから聡也が訪ねてきて・・・といったような話。

聞く分には特にこれといった重要な情報はなかった。

むしろ、前半部分のほうに重要な要素が入りすぎていたのだ。

鳥越先輩は、てわけよと話を切り上げて息をついた。

僕たちは、いま話してくれたことを頭の中で整理しながらいろいろと考える。

だがさつきも言ったが、まだそうだと決めつけるには早すぎる。

だからこそ、僕はこう尋ねてみた。

「先輩、あのですね。紫燕?というISをご存知ですか?」

おそらくこれを知っていれば、この人は・・・。

「ああ、知ってるも何も?紫燕?はあたしのISだけど・・・」

これで決まりだ・・・。

この人は間違いなく、あの襲撃

「そういえば、あん時お

んなじISと戦ったな・・・」

え?

な、何?

「同じISと戦った!?!」

「ああ、間違いなく同じISだったぜ？」

ISのコアの絶対数が決まっている以上、同じISを二機作るメリツトはない。

そうなるか……。

ああもうわけわからなくなってきたぞ？

「それは、間違いなくISでしたの？」

「あのよお、人が乗ってて装甲がついてたんだぜ？」

これをISと呼ばずしてなんていうんだ？」

た、確かに……。

僕とセシリーは今間違いなく混乱の渦中にある。

えーとだから……どうということなんだよ……。

お互い顔を見合わせるしかない僕たちに向かって先輩は軽く息を吐くとガタリツと立ち上がる。

「とりあえず、あたしが話せるのはこんなもんだな。それじゃ、失礼するぜ？」

もうすぐ午後の授業なんでね」

軽く一瞥してから踵を返す先輩。

いまだによく内容を理解できていない僕たちが呆然と顔を見合わせる。

それからしばらくして、午後の授業開始のチャイムが高らかに鳴り響いた。

ちなみにこの後の授業の担当は織斑先生。

僕たちは、？特別？に情報端末の角で頭をたたかれた。

うう、ひどい目に会いました。

聡也は昼休みにロッソにポッコボコにされて痛む体をさすりながら、放課後の学園内を歩いていた。

本当に明日が土曜日で休みなのはよかったと思う。
ほんとにもう・・・。

大体何で僕がこんなことされなくちゃいけないんでしょう・・・。
聡也は心の中で愚痴りながら、角を曲がるとドンツと誰かにぶつか
つてしまった。

「あ、大丈夫ですか？」

「ええ、ごめんなさ・・・あら？」

それは背の高い女性だった。

ちなみん僕はこの人を知らない。

だがその女性は僕を見て、クスリと笑うといきなり名前を呼びあて
られた。

「あなた、一条 聡也君じゃないかしら？」

「え！？」

やっぱりと気さくに笑うその女性。

だが一方の僕は目を丸くして驚いた。

初対面で、あつたこともないのに・・・。

待てよ・・・。

まさか。

「あなた、まさかNの技術を・・・」

「N？ 何のことかしら？」

あれ？

・・・うん？

「あの、あなたは・・・その」

「多分聡也君、あたしのことを色々と誤解してないかしら」

「誤解・・・ですか？」

「ええ、あたしはね・・・こういうものよ！」

女性は聡也の腕をとるとそのまま背中でねじ上げ

後頭部には力チャリと冷たいものが押し付ける。

それは、冷たく黒光りする、トリガーを引くだけで簡単に人を殺せ
てしまう代物。

つく、軽率だったか!?

聡也は周囲を確認するが見計らったように誰もいない。

つまり大声を出しても誰も気が付かないということだ。

くそっ!・・・仕方ない。

? ホワイトアウル?で・・・。

とそこまで考えて、聡也は? ホワイトアウル?の

イクニッションキー起動キーを切らしている事に気が付く。

・・・最悪だ。

聡也はあきらめたように目を閉じる。

しかし、その直後聞こえてきたのはその女性の笑い声だった。

「アハハハハッ、あなた結構面白いわね」

女性は聡也から手を放す。

「面白いつて、あなたはいつたい!」

「やあねえ、ちよつとした冗談じゃない」

「冗談であなたは銃を取り出すんですか?」

聡也はまだその女性が手に持っている銃をにらみつけた。

しかし、言われた本人は実にあっけらかんとして言い返した。

「ああ、これ? フフッ、ライターよ。アメリカのちよつとしたお

土産なのよ?」

カチツとトリガーを引くと、銃口からボツと青白い炎が上がる。

それを見て今度こそ、警戒を解いた聡也が一つ大きなため息をつい

た。

「それで、あなたはいつたいどなたんですか?」

「・・・実は実弾も発射可能!」

「嘘っ!?!」

また身構える聡也を女性はうっそ〜と言いながら、明るく笑い飛ば

した。

なんなんだこの人・・・。

聡也はその女性に言われるままに、屋上へと連れてこられた。

そして女性は気さくな笑みはそのままに無言で聡也にメモリーカードと起動キーイグニッションキーを手渡した。

「……これ、博士の！」

「やっぱりねえ、あたしは間違つてなかつたみたい」

女性は聡也に笑いかける。

受け取ったメモリーカードは間違いなく一条 希が作ったものだ。

「でも……どうしてこれをあなたが？」

「渡されたのよ、彼女にね。ここに来る前に」

「渡された……って、博士に会ったんですか？」

「ええ、とても優しい人ねあの人」

女性はフツと笑うと策に寄りかかって向こうに見える海を見た。

聡也もそれにならつて、策へ寄りかかる。

それから少しの時間が流れただろうか。

聡也はもう一度女性に尋ねた。

「そろそろ、お名前聞かせてくれませんか？」

「あら、知らないの？ ……やっぱり千冬のほうが有名なのね……」

世界第二位なのにひどい扱い……」

女性はわざとらしく肩を落として悔しがるがすぐに表情を切り替え

こう答えた。

「あたしは、ローラ・サウスバード。アルデイがお世話になつてるわね」

「あ、アルデイのお姉さんでしたか……。なるほど……。納得しました」

もちろん納得とは、初対面で腕をねじ上げられて、銃型ライターを頭に押し付けられたことに対してである。

まったく、姉弟そろつて……。

いや、アルデイ以上かな。

聡也はそんなことを考えつつ、ちらつとローラを見やる。

するとローラが唐突に質問を投げかけてきた。

「ねえ、あなた・・・あの希の息子なのよね？」

「え、いきなりなんです？」

「いや、さつき希のことを博士と呼んでたから・・・」

ああ・・・と思う。

よく考えれば不自然ですよね。

そういえば、あの人を母さんと母親と呼んだことがあっただろうか。別に嫌いというわけではない。

むしろ色々サポートもしてくるし相談にも乗ってくれる。

ありがたい存在だ。

ただ・・・。

「僕は・・・その、養子ですから」

聡也の？本当の？両親はこのNの技術の開発にかかわっていた。

ちなみに旧姓は誉ほめたという。

しかし誉夫妻は、ある実験の際に起きた事故に巻き込まれて亡くなつてしまった。

もともと誉家は紫香楽家の分家的な立場であったこともあって、

幼いころからISの適正が高かった姉、つまり聡華が紫香楽の家に引き取られてしまっていた。

そのため聡也は家で、たった一人でその報告を聞いた。

報告といつてもただ電話がかかってきたただけだが。

？あなたの両親が亡くなりました？と。

冷たく淡々と言われたその言葉を、当時の聡也はよく理解ができなかった。

そしてそれを時間をかけて頭が理解していくにつれて、

聡也の中で何も無い無だけが広がっていった。

何もする気が起らない。

そんな日々を、しばらく過ごしていた。

その時だ、あ的一条希に出会ったのは。

それからのことを、実はあまりよく覚えていない。

気が付けば聡也は？ホワイトアウル？の操縦者になつていて。

で、あの人の養子になっていたというわけだ。

さつきも言ったが、別に博士のことは嫌いじゃない。

でも、だが。

なぜだか聡也はあの人を母さんと呼ぶことにためらいがあった。

あの人を母さんと呼んでしまったら、本当の母さんはどうなってしまうのだろうか。

あの人を母さんと呼ぶことで、じきに本当の母さんの存在を忘れて行ってしまわないだろうか。

そんなことを考えてしまうと、どうしても躊躇してしまう自分がいたのだ。

「……ふうん……養子ね」

「はい……」

聡也は視線を落とす。

今聡也の中で、色々複雑な感情がグルグルと渦を巻いていた。

自分でもどんな表情をしたらいいのかわからなかったのだ。

だがそんな聡也へローラは実にあっさりと自分の考えを述べた。

「そんなに気にするものかしらね。

少なくともあの人は今あなたのお母さんじゃない。

もしあなたに、希を母と呼んで本当の母親の存在が

どうにかなくなっちゃうとか思っているのなら、それは多分間違ってる

と思うわよ」

ローラはそこまで言い切ってから、ま、あたしの想像だけどねんと茶化していうと

踵を返して、屋上を後にする。

ただ一人残された聡也は、渡されたメモリーカードと
起動キーイクニッションキーにゆっくりと目を落として呟いた。

「……母さんが」

広大な海。

その中を進むのが潜水艦である。

そしてここにも、その海の中を突き進む黒い影があった。

色彩そのほとんどが？戦^{おののき}？に似ているが微妙に

艦橋の形と上部カタパルトハッチの形が異なっているそれは、

艦の側面に白く達筆な文字で？守^{もり}？と書かれている。

その内部では、これまた一人の若い白衣の女性が腕を組んで不敵に笑っている。

真っ黒い髪に、吸い込まれそうになるほど不敵に光る緑色の目が特徴的だ。

そこへ近づいてくる二つの影。

それはあの聡也と聡華姉弟だった。

「おや、もう帰ってきたのかい？」

「帰ってきたもクソも、何もなかったじゃねえかよ！」

「まあまあ、姉さん落ち着いて・・・」

「ふん」

聡華は鼻を鳴らすと腕を組んでそっぽを向く。

それを白衣の女性は笑って一瞥すると聡也に向き直った。

「で、帰ってきてすぐで悪いんだけど、今度はハワイに飛んでくれるかな？」

「ハワイイツ!？」

聡華は素っ頓狂な声を上げて、白衣の女性をにらむ。

だがそれに構わず女性は言葉をつづけた。

「アメリカの軍用ISの試験が行われるらしいんだけど
・・・それに？あの女？も噛んでいそうなんだ」

「あの女・・・篠ノ之束ですね・・・」

聡也が目を細め言う。

それに対して女性はニイツと口角を釣り上げた。

「ああ、そうさ。もともとのNの技術は？そのために開発されたのだから……」

「そのために使わないとだめだろう？」

女性はピツピとキーをたたきながら、踵を返すとモニターにデータを表示させる。

そこには米原子力空母？スタン・フレイリー？の現在の位置が表示されている。

またにやつと笑うと振り返って呟いた。

「やってくれるね？」

「……はい……もちろん」

「お、おい聡也……いくらなんでもさあ……」

渋る聡華にその白衣の女性は、目を細めて声のトーンを落とした。

「………やってくれるよね？」

「……わ、わあつたよ……やりゃあいんだろ……やりゃあよ……クソッ」

聡華は舌打ちすると女性に踵を返してその場を後にする。

聡也も女性に一礼してから、その場を後にした。

「そうだ……それでいい。」

女性は再びデータに目をやる。

「フフツンの技術は正しく使わなきゃね？」

「使ってあげるよ、この……」。

第24話〈探偵アルディ・サウスバード〉（後書き）

なんだか、解決したのかしてないのか。
いやしてないんだらうねえ。

どうもしるくです。

これもはや24話遠くへ来たものと思いつつも、いまだにセシリーとの買い物や何より？オーシャンズ・イレブン？に到達すらしていないありさまとはw

まあこうやって長々書いていくのも私の仕様だと思って大目に見てくださいね。

それではこの辺で。

25話でお会いしましょう！

さよならっ！

アルディ・セシリーの人物考察！（前書き）

これは、オリジナルキャラクターの設定をまとめた物です。

初期設定のため少し小説版では、異なっている部分があるかもしれません。

アルディ・セシリーの人物考察！

「アル！」

僕の名前を叫びながら、誰かが僕の部屋のドアをバンつとぶち開ける。

僕はあわててその人物を確認すると……。

「セシリー……？ どうしたの、そんなに息を切らして……」

「はあ、はあっ、た、大変ですわ……はあッ……これをご覧になって」

息も絶え絶えに、セシリーは僕に一枚の紙切れを見せた。

こ、これは……。

？今から、あなたの周りの人物について説明してください。そしてそれが終わったら

最低一人以上の人物にこの紙を回してください。さもなければ悪い事が起こります？

……紛れもないチェーンメール……。

「せ、セシリーこれチェーンめ……」

「アル急ぎませんと悪い事が起きますわよ……！」

僕はその事をセシリーに言おうとしたが、セシリーは

少々混乱しているのか冷静な判断を下せないようだった。

僕はもう一度チラッと、紙を見やる。

……ま、まあ自己紹介も兼ねて、一度整理しなきゃなあとは思ってたし……。

それにまあこう言うのは悪戯だから……まあ良いか。

「そ、そうだね。じゃあ早速始めようか」

きっかけはなんであれ、僕とセシリーの人物紹介の幕が切って落とされた。

「コホンツ、それでは改めて……アルデイ！」

「セシリアの！」

「「周辺人物紹介」」

「さて、ね……、まあきっかけはどうあれこう……始まったんですけど」

「はい！ はりきつてまいりましょう！」

「……はあ。じゃまとりあえず一人目」

アルデイ・サウスバード

一人称：僕

三人称：君

アメリカ、カリフォルニアはサクラメント出身の少年。

金髪蒼眼の持ち主で、色盲を患っている。

モンド・グロツソで千冬に次ぐ世界第二位に輝いた

ローラ・サウスバードを姉に持つ。

幼い事に両親を海難事故によって亡くし姉に育てられた。

姉の影響を多分に受けて育っているため、嘘を好み、

特に戦闘においては姉ほどではない物の

よく喋り、相手を惑わせる戦法を好む。

射撃は姉から手ほどきを受けたが、自身にあまり向上心が無く

ただなんとなくと言う理由で続けているため、

普通の人より旨く扱える程度にとどまっている。

仕様IS

ストライク・バーディ

ローラが、モンド・グロツソで使用していた同名のISがベースと
なっている。

コア自体は異なる物を使用しているようだがベースは完璧な第一世代である。

一応便宜上の分類としてアメリカでは第二世代ISに分類されている。

元が強大な推進力を武器にした強襲型のISだったのに対して、本機は、重装甲銃火力にお重きを置く？広域せん滅型？のISに生まれ変わっている。

その火力は相当なもので、背部火器内臓スラスタ？ウエポンスクエア？内部には

高圧荷電粒子砲？ヘヴィハンマー？小型バルカン砲？ファイアスピード？三連想ミサイルポット？トーネイド？そして出持ちの荷電粒子砲？ファイアーフライ？を合わせた全砲門射撃？アヴァランチ？はすべての攻撃が直撃したと仮定するならば、小型気化爆弾九つ分に相当するすさまじいものである。

（大抵の場合、高火力高反動の武器が多く非常に散布域が広いため、全弾が直撃する事はほとんどない）

尚ウエポンスクエアは、別名？フレキシブル・スラスタ？ともよばれ、三六〇度どの方向にも動くためこれを使用して、相手に狙いを定める？固定砲台？として運用するのが一般的。

また試作音響兵器？ハウリングエコー？と言う物を搭載しているが、現在はISのとある理由のため仕様が出来ない。

「ほえ〜・・・」

「セシリー顔顔・・・」

「はっ！」

「とまあ見てきたわけだけど・・・そう言えば最近嘘ついてないなあ・・・」

「良いじゃないませんか、それはそれで」

「・・・でもねえせっかくこう言う性格なんだから・・・」

「わ、私はその・・・そういうアルも・・・ゴニョゴニョ」

「？」

「な、何でもありませんわ！さあさ、次ですわよ！」

「う、うん・・・まあ、いいか」

ローラ・サウスバード

一人称：あたし

三人称：あなた

アメリカの国家代表で第1回モンドグロッソ準優勝で、射撃部門では優勝している実力者。

金髪のロングヘアーに、深緑の瞳を持つ。

だが性格が災いして、新聞各社？ R o l a o f b e t r a
y a l ？（裏切りのローラ）とまで酷評された。

弟以上に嘘をついて人を騙すことを好み、周囲の人間を手玉に取る詐欺師のような性格も持ち合わせる。

ひょうひょうとして居るが、弟同様明るくどこか人を食ったような癖つけのある性格。

近接戦闘はてんでダメだが、非常に高い射撃戦闘能力の实力を持ち、それによって圧倒する。

実は非公式でたったの一度だけ、織斑千冬に勝っている。
だがローラ曰く、？あれはあたしの負け？

口癖は？世界で2番目のお姉さん？

現在も引き続き国家代表をしながら研究開発局でアドバイザーとして働き

？ストライク・バーディ？の開発にも尽力した。

仕様IS

ストライク・ミラージュ

第1回モンドグロッソで万が一、ストライクバーディが

破損し次戦への参戦が難しくなる事に備え準備していたリザーブISで第2世代IS

当時は貴重なISを遊ばせておくのはという批判もあったため大会終了後に外部装甲を残してコアは別のISに移されていた。

その後アルディにISの適性がある事が判明。

新しい機体を急ぎよデータ取りのため用意することになったのだが、現状手一杯で、許可申請に時間がかかる事等からローラの？ストライクバーディ？にコアだけ新調する形で開発が進められ、必然的に専用機を失ったローラが倉庫の片隅で埃をかぶっていた本機を引っ張り出したのが本機とローラの馴れ初めである。

多少コア定着に時間はかかったものの、

現在では問題無く稼働しており、世界第2位の實力を遺憾なく発揮している。

背部の大型スラスターに比べ全体的にシャープであり非常に機動性に長けるISで

武装もストライクバーディに比べれば簡素なものだが、

動きながらも弾膜の驟雨を浴びせられるよう連射性に

優れた武装を持っている他、スナイパーライフルもバススロットに入っている。

また固定武装として特殊偏光装甲？ステルスミラージュ？と

そしてもう一つが光学投影システム？フェイク・シルエット？を搭載する。

この？ステルス・ミラージュ？は装甲表面を鏡面化し光の屈折反射によって、

焦点距離を狂わせ相手の距離感をずらすことができ、

？フェイク・シルエット？は空中投影ディスプレイの応用のようなもので、

ウィングスラスターに取り付けられた特殊プロジェクターによってあたかもそこに

ローラがいるかのようなリアルなスリーディー映像を投影すること

ができる。

この二つがこの機体の大きな特徴であり、これにローラの話術が加わる事でほぼ無敵の性能を發揮する。

「さすが姉さんだねえ・・・」

「まあ国家代表ですからね・・・と言ってもやはり悔しいですわ、負けると言うのは」

「セイシリちゃん危ない！」

「え!？」

「なぐんてね、うつそ〜。あわてるセシリアちゃん可愛かったわ〜」

「・・・姉さん・・・まあじゃ次・・・」

一条 聡也

一人称：僕

三人称：あなた・君

ISの似て非なる物である実験機IS-Nの操縦者で、黒髪に青色の目を持つ少年。

幼少時は誉ほまれという名字だったが、両親と死別。

IS-Nの開発者である一条 恵博士が養子として引き取った。

非常に物静かな性格だが、若干目的のためには回りを巻きこんでいく所がある。

しかし巻き込んだ責任はしっかりとる義理堅い一面も持つ。

アルデイを超える高い射撃センスを持ちISの操縦技術もかなりのものだがIS-Nの性能が

圧倒的にISに劣っているために勝てる戦いもあるがその場合もかなり

ギリギリの状態で勝利を物にする事が多い。

希の計らいでIS学園へ転校する。

仕様IS

使用IS 疑似IS ? IS N ホワイトアウル? (白き鷲)

一条 恵率いる技術者が完成させた、世界でたった2機のISでは無いIS。

通称? 似て非なる者? ISのコアを使用せずISに近い性能を保持している。

NとはnearのNで、そのまま訳すとISっぽいものと言つことになる。

シールドエネルギーに変えてバッテリー駆動で稼働し、基本男女だれでも使用が可能なISに近い代物であるが開発コストが高すぎで現在では二機のみで開発は中断している。

ISに比べて格段に劣る戦闘能力を火力で補っているため、総合火力は高い。

4門の砲を背負っており、二本は手に保持している。

2門が荷電粒子砲、2門が実弾武装のアサルトライフルである。

機動性能は、ストライクバーディーよりも若干高めだが、

ISの通常戦闘機動は行えるだけのスラスタ―余力は持ち合わせている。

起動には専用のキーが必要であり、1回起動することに1本のキーを消費し、

キーは一条 恵から定期的に送られてくる。

ISと近い能力を保有するがISでは無いので、国籍を持つ必要が無い。

「彼も、まあ謎っちゃあ謎だよな」

「そうですね・・・まあでもそれはこれから分かっていくのではなくて?」

「ま、それもそうだね、じゃあ次行こうか」
「はい」

紫香樂しからぎ 聡華そつか

一人称：あたし

三人称：お前・てめえ

聡也の姉。旧姓は誉。

濃いワインレッド長髪に、赤い目を持つ少女。

両親と死別後、紫香樂家という名家に養子として迎えられた。

彼女を引き取った紫香樂家は、彼女に紫香樂家製のISを与え、功績を上げることでIS界での地位を確立するのが狙いであり、彼女自身の意思はほとんど無視されており、非常に厳しく育てられた。

だがそれに反して、性格はその厳しさに反抗するようになり荒っぽくなってしまい、

おおよそ名家の人間とは思えない荒い言動が目につく。

幼いころから、ISへの適応能力は非常に高かったため実力は折り紙つきである。

現在はIS学園を襲撃した犯人として身柄を捜索中である。

使用IS 紫燕しえん

紫を基調とした、鋭角的なデザインを持ち、肩部に大型のスラスタ
ーと

背部そして腕部にも大型スラスターを持つ。

このスラスターは必要最低限しか動かないため、可動部への負荷が
少なくまた

瞬発力が絶大で一気に超高速の世界へとISを押しやり

特にその直線機動力は群を抜いている。

ISで近接戦闘型の武装を持ち機動力に富む、強襲型のISといえ

る。

メイン武装は、？大蛇？と呼ばれる大きな槍。

オプシヨン武装として中距離をカバーする小型のレールガン？瞬燕？があるが、

基本的な装備はこの大蛇と近接バルカンだけである。第2世代IS

バニッシング・ブースト

強大な紫燕の推力が可能にした、？消えるイグニッション・ブースト？

実際は消えていないのだが、ハイパーセンサーでさえ捉えきれないほどの速さを持ち

ほぼ人間が反応するのは不可能な速度である。

ちなみに射程距離はほぼ無いが約30m以上の直線距離を確保しなければ、使えないという弱点がある。

「この方・・・学園にも居られましたわね・・・」

「うん、話を聞いたけど同一人物じゃなさそうだし」

「はあ、こちら辺は結構複雑ですね」

「まあね。これからこちら辺がどうなるのかも楽しみだけど」

「では、次の方へ移りましょう」

一条 聡也（もう一人の聡也）

一人称三人称共に聡也と同じ

聡也に瓜二つの謎の少年。

初めてのIS学園襲撃の際は、無人のISを撃破後、一夏の白式と戦闘。

その後割って入った、ブルー・ティアーズと流れで戦闘に入る。

紫燕と共に、ブルー・ティアーズを落とそうと画策したが救援に入ったストライクバーディに阻止され、

その後この二機のコンビネーションによって撃退された。

使用IS・N ブラックアウル

IS・Nの技術を使用して、作られたもう一機のN。

ホワイトアウルと基本的には変わらないが、武装が充電式の荷電粒子砲4門になっている。

「そう言えば、彼も謎起き人物だけど・・・」

「もうここら辺を紹介するのがつかれてきましたわ・・・」

「せ、セシリーが壊れそうなので、さっさと次へ行くでしょうか・・・」

「

一条 希

一人称：私

三人称：あなた

少し小柄で黒髪ショートヘアに綺麗な緑眼を持つメガネをかけた白衣の女性。

IS・Nの開発者であり、定期的に送られてくる？ホワイトアウル？の研究開発を行っている。

非常に常識人であり、養子である聡也を第一に考える心やさしい人物だが、時々

悪戯をする茶目つけあふれる人物である。

今はIS・N専用運用艦？戦？^{おののき}の艦長としても活躍している。

IS N運用機動研究艦？戦？（おののき）

ホワイトアウルを運用・研究するための専用艦で大型の潜水艦研究空母。

船籍はアメリカ合衆国。

上部に一基のISカタパルトを持っている。

燃料電池式のAIPを持ち短時間モーターでの航行も可能なため大

きさの割に

隠密行動に長ける。

内部は、長期滞在が出来るように食堂や、風呂場寝室などが完備されてお

り。希をはじめとする技術スタッフは全員この船の中で寝泊まりしている。

「そう言えばこの人、聡也のお母さんなんだってね」

「誰から聞きましたの？」

「あたしよ、セシリアちゃん」

「きゅ、急に降って湧いて出ないでくださいな・・・」

「あたしを泡か何かと間違えてない？」

「・・・はぁ次行こう」

リリス・カールストン

一人称：私

三人称：あなた

？戦^{おのの}のクルー兼情報担当の研究员

アメリカ人ながら黒髪で、碧眼を持つ非常に明るい女性でローラの訓練校時代の後輩。

運動はてんでだめだが情報関係にはめっぽう強く高度なハッキング技術を有する。

「ねえ姉さん、この人は？」

「彼女はリリスね。まああたしの後輩かしら」

「と言う事はISの操縦も結構な腕前ですか？」

「・・・ええ・・・まあ・・・ね」

「セシリー世の中には聞いちゃいけない事もあるんだよ」

「・・・なんだかすみません」

ロツソ・ミオネッティ

IS非展開時

一人称：私

三人称：あなた

IS展開時

一人称：あたし

三人称：お前、てめえ

赤色のシヨトヘアに赤い目を持つイタリア人の代表候補生で

二組の風紀委員を務める。

普段は無口であり話さないが、ISを起動すると性格が一変し、苛烈で気性も激しくなる。

そのため力押しで闘うスタイルを好み接近戦を得意とする。

更に候補生の名に恥じない間合いを苦しめない実力も兼ね備えている。

代表候補生としてイタリアで政府監察下におかれて生活してきたため友人も少なく、また本国では自分より強い相手がいなかったため自分よりも強い相手に憧れをもつ。

使用IS

ペルフエッド・エスターテ（完璧な夏）

ロツソの専用機でイタリアの第三世代型で、ロツソの名にちなんで赤を基調とした鋭角的なデザイン。

リアスラスター部は、アルデイ程大型ではないが、

左右独立して動くようになっておりアルディの様にフレキシブルターンが可能となっている。

主な武装は蛇腹剣の？テンポラーレ（嵐）？と左腕には攻防複合兵装防盾

？パーチエ・ディフェーサ（平和の盾）？

この盾には、シールドバリアの発生装置に加え、二連装のバルカン砲と

威力は低いが小型の荷電粒子砲が内蔵されている。

機動力は、やや高いものの標準的なISとほとんど変わらないが、？イグニツション・ブースト？

の使用が可能となっている。

近中に非常に高い性能を発揮する他、中国の？甲龍？同様に長期戦にも耐えるために、パーチエ・ディフェーサの様に武装を1つにまとめるなどして高い燃費を実現している。

モード？スフィード？

ペルフェッド・エスダーテに搭載されている、緊急オーバードライブシステム。

本機には、肩と脚のユニットの内部に別系統のエネルギー回路を持ちそれを使用して駆動するため、

シールドエネルギーが零になっても発動可能な代物である。

一時的に機体の限界値を引き上げるといふ物で起動したら、各部冷却のため一部の装甲をパージさせる必要がある。

圧倒的な機動性能を得られる反面、使用時間は4分が限界である。

「ロツソかぁ・・・中々個性的だよねこの子」

「ISを起動させたら性格が変わる・・・よく運転したら変わるっ
て言いますわよね」

「あ、うちの姉さん変わるよ？」

「え？」

「……仕掛けるのはこの先の五連続ヘアピンカーブッ！」

「……ネタが……」

「セシリーそんな目で僕たち姉弟を見ないでッ！！」

「と、一通り済んだんじゃないの？」

僕は資料に目を落としてセシリーをみる。

セシリーも顎に手を当てて考えているが、どうやら思い当たる節も無いらしい。

「じゃあ、こんな感じで良いのかな？」

「あ、でもアルこの紙を他の人に送りませんと悪い事がって……セシリーは本気で心配そうな顔を浮かべ僕に詰め寄ってくる。

それを僕は、鼻で笑い飛ばした。

「アハハ、いやだなあセシリーこれはねチェーンメールだよ。要は悪戯悪戯」

僕は笑いながら、その紙をビリビリに屋アブいてゴミ箱へ捨てる。

「あー！！」

「だから悪戯なんだって、セシリーは心配しょ「おいサウスバード」……だな？」

背後にももの凄い殺気を感じ僕は思わず固まる。

多分振り返ってその目を見ただけで死ぬんじゃないかなろうか。つていうか、なんでこんなに怒ってるの？

「いまお前何を破いた？」

「何って……チェーンメールの……」

僕は質問の意図が分からずに、キョトンとした顔で織斑先生に言い返す。

しかし、セシリーの次の言葉を聞いた時僕は戦慄した。

「ああ、あのアル？ その紙はここにありませんけれど……え？」

僕は慌てて、ごみ箱を漁りさっきの紙を取り出す。

こ、これは……！

「良くもまあ、破いてくれたものだな。？重要機密書類？」

「あ、いや……これはその……」

「……ただで済むと思うな」

やっぱりこれって、本当に悪い事が起こるのかもネ……。

首根っこを掴まれて引きずられる僕をみるセシリーの呆れた顔がどうにも印象深く心に残っていた。

「……さて、まあアルは連れ去られてしまいましたか、

この物語はまだまだ続きますわ。

多分こう言った方々も更に増えてくことも考えられますが……。
どうぞ皆様、この私セシリア・オルコットに免じて、

そのあたりご理解いただけると嬉しいですね

それでは作者に変わります、またお会いしましょう！」

「ふふふっ？ これで終わりと思ったかい？」
白衣の女性が薄暗い空間で不気味に笑う。

「残念だなあ・・・まだ私がいるのにな」
女性はまるで何かを演じているかのように

大きく身ぶり手ぶりを加えてゆつくりと足を前に進めた。

小さな隙間から洩れる光で、彼女が

真っ黒い髪に、吸い込まれそうになるほど不敵に光る緑色の目を持つている事は確認できた。

そして静かに目を閉じ、ゆつくりとその目を開きながら名前を名乗る。

「初めまして私は五条 ごじょう 叶 かなえ。」

Nの技術を誰よりも正しく使おうとする者だよ」

叶は不気味に笑いながら、きびすを返すと目だけでとこちらを一瞥する

「まあ、見ていると良いよ・・・Nの技術は私が正しく使ってあげるから」

そう呟いてまた闇へと消えていく。

そしてその姿が完全に闇に包まれようとした時、最後の言葉を発した。

「・・・まだ物語は始まったばかりさ・・・じゃあ、またどこかでね」

それを言い残して無音になったその薄暗い空間には、しばらく叶の足音だけが響いていた。

アルディ・セシリーの人物考察！（後書き）

ご感想で「オリキャラが多すぎて名前が覚えられません」というコメントをいただきましたので、今回このような回をもつけさせていただきました。

皆さまがどう思われるかは、分かりませんが度のキャラクターも私が魂を込めて生み出した可愛い子供たちの様な存在です。
これからも、彼らをよろしくお願いしますね！

音はしてるのに……。

「ちよつと、姉さん！ 何してるのさ！」

「あなたこそ、何してるのさ」

「うわっ!？」

いきなり真横から声を掛けられて思わずのけぞってしまい、案の定そのまま尻もちをついた。

僕が腰をさすってゆっくりと顔を上げるとそこには、満面の笑みの姉さんがいた。

姉さんはドアを開けドアの内側から何かを剥がして悪戯っぽく笑う。あーそう、そう言う事……。

姉さんが手に持っていたのは、緩衝材のスポンジシートにくるまれたスピーカー。

そこからは確かに先ほどまで僕が耳にしていたドタドタやカタカタと言った生活音が鳴り続けていた。

その先にはICレコーダー。

これ、もはや嘘と言うよりは手の込んだ悪戯なんじゃ……。僕はため息をつきながら、姉さんに促されつつ部屋に入った。

「ま、そこらへんのソファに座って……飲み物は……」

「ああ、オレンジジュースで良いよ」

「オーケー。あたしはコーヒーでも淹れるわね」

姉さんは戸棚の中からインスタントコーヒーを取りだしてマグカップへと適量を落とす。

僕は姉さんを待ちながら、一体何の用事なのだろうかと考えを巡らせつつ

久しぶりに姉さんと二人きりで話ができる事にうれしさを覚えていた。

両親を亡くした僕にとって唯一の肉親だ。

僕は、チラッと姉さんの後ろ姿を見る。

スラつとしたボディラインは昔から変わらない。

一見どこにでもいそうなすこし茶目っ毛のある女性だが、その背中が、時折見せる鋭い眼光が、

数多くの死線や修羅場をくぐりぬけてきた事を感じさせる。

威厳があるっていうのかね。

いや・・・ちよつと違うかな？

全く日本語は難しい。

「あら、何笑つてるの？ はいオレンジジュースね」

「いや、何でも・・・」

姉さんはソファの前の机にオレンジジュースと自分のコーヒーを置いて隣に座る。

僕は姉さんの質問を、サラツとかわした。

本当の事言ったらまた弄られるに決まっている。

流石にその事で弄られるのは、僕でも恥ずかしい。

僕は、その事から話題をそらすように尋ねた。

「それで、なんで僕を呼んだの？」

「ああ、そうだったわね。まず・・・これ返しておくわ」

姉さんは服のポケットから？ストライク・バーディ？を取りだす。

？ストライク・バーディ？はこの前織斑先生に渡したときと同じく真つ二つだ。

「それ、千冬から渡されたのよ。簡易検査の結果報告と一緒にね」

「で・・・簡易検査はどうだったの？ 何か分かった？」

姉さんは静かに首を振る。

駄目だったか・・・。まあ、僕も薄々感じてはいたけどね。

あ、でも姉さんがいれば。

僕は少し期待のこもった目で姉さんを見たが、姉さんはまたも首を横に振った。

「どうもね、アクセスを拒否し続けてるらしいのその子。

そんな状態じゃ、流石のあたしでも手の出しようが無いわ

下手に弄って、根幹のデータでも消失しようものなら最悪コアが使

えなくなつちやうかもよ？」

「・・・それは困るね。」

でもこれで完全に詰んでしまった。

正直、姉さんがこの学園に来て驚いたのもあつたがこれで

？ストライク・バーディ？の事が何か分かるかもしれないと言う期待もあつた。

だがその期待はここでもろくも崩れ去る。

「まあまあ、そんな落ち込まないで。」

一応基本的なデータの抽出だけは出来たみたいだから

まあ、ほとんどダメ元だけあたしの方でも色々調べてみるから」

「そうは言うけどさ・・・流石にそろそろ本気で笑えない状況だよ？」

今日も見ただしよ、IS実習でほとんどやる事の無かつた僕の姿」

「ああ、見た見た。機材用のカート持つて走り回つてたわね」

姉さんは笑つて言うが、あれはあれで結構な重労働である。

何せ運んでいたのがIS用の銃器なのだからいくらカートでも重い者は重い。

タイヤが付いていれば物を動かす力は十分の一になるとはいえ、元が重たいのだ。

そんなのが十分の一になつたところで・・・。

「笑いごとじゃないよ・・・。僕には？打鋼？も

？ラファール・リヴァイヴ？も反応しないんだから・・・」

「・・・そういえばそうね」

「何が？」

急に声のトーンが変わる姉さんを不思議に思い

僕まで別の意味で声のトーンが変わる。

「何がって、だからその事よ」

「・・・その事って？」

「だから、あなたが？ストライク・バーディ？しか使えないって事」

「んん??？」

頭をひねる僕に、姉さんがため息交じりに言う。

「あなたね……。さつき自分で言った事に何の疑問も無いの？」

「さつき、言った事……。何が？」

「その前よ！」

「ううん!？」

「その前……」

「その前って言うと……」

「僕は頭の中で数話前の会話を思い出す。」

「僕には？打鋼？も？ラファール・リヴァイヴ？も反応しないんだから？」

「……ああ。」

「ポンッと手を叩く僕を見てより一層大きなため息をつく姉さんだった。」

「以前、流石に実習ができないのでは、授業に出ている意味が無いと織斑先生が射撃武器の使える？ラファール・リヴァイヴ？を僕に貸与してくれた事があった。」

「でも結果は……」

「動かなかった。」

「うんともすんとも。」

「ハイパーセンサーすら起動しない。」

「その後物は試しと？打鉄？にも搭乗してみたが結果は同様だった。」

「そう考えると確かに姉さんの言うとおり妙である。」

「どうして本来、ISを動かせるものなら誰でも扱えるはずである量産機の二機を動かせないのに」

「専用機とはいえ基本同じ仕組みであるはずのISコアを使用する？」

「ストライク・バーデイ？だけが」

「僕に反応するのか。」

「正直今までそんな事、難にも考えた事無かったな。」

「動くし良いかってぐらいの勢いでここまで来たから……」

細かい事考えるのは得意じゃないんだよね。

「まあ、あれじゃないの姉弟だからとかそういうのじゃないの?」

「と言うより、そもそも男のあなたがISを使えてる事実には疑問を持ちなさいよね」

「あははは・・・そうだね」

「全く、お気楽ね」

「・・・この性格は姉さんに似たと思うんだ。うん。」

子が親に似る様に、弟は姉に似るんだよきつと。

「まあ・・・この話は別に今じゃなくてもいいわね。さて本題に入りましょうか!」

姉さんはなぜか立ち上がると、グツと両手を胸の前で握る。

しかもその目は、今まで以上に輝いていた。

「・・・ていうか、本題?」

てつきり本題って、ISの事だと思ってたんだけど・・・?

不思議そうに見上げる僕に姉さんは、ニヤッと笑って前かがみに自分の顔を僕の顔に近づける。

その距離はもう少しで鼻と鼻が接触するぐらいに近かった。

「あなた・・・明後日セシリアちゃんとデートよね?」

「で、デート、デート!? ち、違うよ・・・全くただの買い物じゃないか!」

「女の子が、男の子と二人で買い物するのをデートって言わないのかしら?」

「・・・いや、買い物でしょ?」

「・・・わ、我が弟ながらどうしてこつも感性に乏しく成長してしまったのかしら・・・」

今度は僕に背を向け頭を抱えて、ボソボソとつぶやいている。

ほんとに小さい声で、聞き取れないが何を言ってるんだろうか。

「姉さん?」

「あ、いやいや、こつちの話・・・」

姉さんは僕に向き直るとコホンツと、声を整え人差し指をピンツと立てた。

「いい、アルディ。あなたが普通の買い物だと思っけていても、セシリアちゃんからすれば

それはただ単なる買い物じゃないかもしれない」

「はあ・・・うん？」

いまだ生返事な僕に、姉さんは少々顔をヒクつかせながら言っつ。

「と、とにかく。ただでさえあなたは鈍いんだから、

こっ言う時ぐらいビシツと決めていきなさいよ？」

「に、鈍いって・・・」

「違っの？」

姉さんの鋭い眼光と言葉に、言葉を詰まらせる。

でもねえ・・・。

いやだっつて、本当に買い物約束をしただけだし・・・。

「はあ、まあいいわ。とにかくあなたみたいなのは行き当たりばつたりが昔からのパターンなんだから

こっ言う時ぐらい計画をたてて

「計画なら、まあ立ててるけど」

「え？」

姉さんと二人きりで話すのも久しぶりだが、

ここまで抜けた表情の姉さんも久しぶりかもしれない。

「た、立ててるの？ 計画を、あなたが？」

姉さんは信じられないという目で僕を見て、「まさか」「いやそんな・・・」

といった事をブツブツとつぶやいている。

ちよつと酷くないかな。

僕っつてそこまで行き当たりばつたりでも・・・

頭の中でこれまでのことを思い返してみる。

少し前のことは何の計画もなく飛び出して、

結果セシリーを守れたのはいいけど怪我した自分。

最近では何の計画もなく聡也が揉め事を起こしたことを無計画に聞きまくったつけ。

一度そういうことが頭に浮かんでくると、出てくる出てくる。無計画行き当たりばったりの嵐。

「・・・あるな。僕そういうところ。」

よくよく考えれば、まともに計画を立てたのってこれが初めてかもしれない。

もちろん旅行の計画とか大きい行事は別だけど、一個人としてこうやって小さい行事計画を立てたの事は記憶になかった。

「あのちなみに言うけど、計画って言うのは思い付きとは違うのよ?」

「いや、そんなまじめな顔で言われなくてもわかってるよ!?!」

「あ、いやわかってないと思って・・・」

「まあ、計画を立てたって言うてもめぼしいところを

ガイドブックとか読みながらピックアップしたただけだけだよ・・・」
僕は結構簡単に言っているが基本あの駅前の?レゾナンス?

でまかなえると知ったとき地味に焦った。

せつかくいろいろ見て回りたいとセシリーに言ったのにあの建物だけで

行こうと思っていた喫茶店やお店などほぼすべての候補が消え去ったといっても過言ではない。

実際あのメモを作り上げるのに半日以上かかっているのだ。

途中何回挫折しかけたことか・・・。

姉さんは僕の話の聞いて、目を丸くして本当に驚いているようだった。

「そ、そうなの・・・意外とあなたにしてはしっかり考えてたのね・・・」

もう、ほんとに一回この人叩いていい?

むしろアメリカなら名誉毀損罪で訴えられるレベルだよな?

僕は姉さんをジト目でにらむとオレンジジュースを一気に口に流し

込む。

口に広がる風味豊かなオレンジの酸味・・・ではなく。

「けほけほっ!!! ね、姉さん!? これ何!!!」

な、なんか今ドロっとした苦味のある何かが口の中に入ったよ!? 姉さんを見ると、さっきの表情はどこへやら。

必死で笑いをこらえているように口元をてで隠しながら顔を伏せている。

「ちょ、ちょっと何入れたのさ!」

口の中がオレンジジュースの甘みとわけのわからない苦味ですごく気持ち悪いんだけど・・・。

姉さんは必死に笑いをこらえながら震える手で、懐からコトリと何かのビンを取り出す。

これは・・・。

そのビンのラベルにはこうあった。

? マーマレード?

しかも苦味の強いユズで作ったものだ。

そんなものをオレンジジュースの中に入れたのかあんたは!

「い、いや、まさか・・・くくうっ、一気に行くとは思わなくて・・・

・くふふふッ」

「あーもう、言いたいことたくさんあるけど、とりあえず水は、水はどこにあるの!?!?」

「そ、その・・・ふふふッ・・・テーブルの上にいつ朝買ってきたペットボトルがあるわよ・・・っ」

僕は姉さんが、言い終わる前にここから少し離れた場所においてあったペットボトルに

飛びつくとキャップを乱暴に開けて、口に含む。

「ブーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「あはははははははッ!!! ごめんなさい塩水だったわ!!!

もう、だめ・・・ふう・・・お腹痛いッ!!!」

・・・もう頭きた・・・。

僕は塩水の入ったペットボトルを持ったまま、ゆっくりと姉さんに近づく。

姉さんはまだそれに気がつかず、腹を抱えてバンバンとソファを叩いて笑い転げている。

僕は姉さんを見てにやあつと笑うと姉さんが息を吸おうと顔を上げたところを見計らってペットボトルの塩水をその口に流し込んだ。

「んむう!?!」

「ほらおいしいだろ、姉さん!」

声は明るいが、僕はぜんぜん笑っていない。

むしろ怒りに燃えている。

大体初めっから、スピーカー使って驚かされーの

入ってから散々ボロツカスに無計画だのをこれでもかといわれ

オレンジジュースにはマーマレードを入れられて口直しの水には塩

これはもう、キレて良いレベルでしょ?

だが姉さんも伊達に世界第二位、そしてアメリカの現役軍人をやっているわけではない。1

僕のペットボトルを持つ手を、グツと握力全開で握る。

いったいその細い腕からどうやってそんな力が出てくるのかわからないが、

とにもかくにも・・・

「痛ったあああつ!?!」

「ゴホツ、ゴホケホツ! よくもやってくれたわね!?

どうしてくれるのよ塩水でベツチャベチャじゃない!

あゝあゝああ・・・中のシャツまで・・・下着が透けちゃってるじゃない!」

「いいだろ、そのぐらい! そんなの見て欲情するのなんて猿かチンパンジーぐらいだよ!」

「なんですってえッ!?!」

そこからは、まあひどいものだった。

武器はペットボトルと塩水と、姉さんがどこからともなくスツと取り出した

ライター型の拳銃のグリップエンド。

それで、叩く殴るかける蹴る。

そして気がつけば、二人とも床に仰向けに床に寝転がっていた。

あたりにはものが散乱して、お互いに服ははだけたり、濡れたり。

ただ、なぜだかすごく・・・そう楽しかった。

「ハハツ・・・」

そしてどちらからともなく笑い声が上がる。

それを皮切りに、互いに笑いあった。

理由はきつとお互いに同じ。

楽しかったからだ。

僕は久しぶりに姉さんと話して、久しぶりに姉さんの抜けた顔を見て久しぶりにだまされて・・・そして久しぶりに姉弟喧嘩をした。

「それじゃ、また何かあったらいつでも来なさいな。授業以外だったら職員室よりも
こっちに戻ってきてるはずだから」

「うん・・・」

僕はうなずくと、改めて姉さんの顔を正面から見る。

姉さんはその意図がわからずに少し首をかしげた。

「ん、どうかした？」

「いや・・・なんでもないよ、それじゃ」

僕は、姉さんにきびすを返して自分の部屋に向かって歩く。

そして姉さんが自分の部屋のドアを閉めた音を確認して、

ゆっくりとその部屋を一瞥してつぶやいた。

「ありがとう、姉さん」

それは何に対するありがとうなのか・・・。

学園にきてくれてありがとう？

無計画な僕を心配してくれてありがとう？

いや、喧嘩してくれてありがとう？

それとも、単純に僕の近くに来てくれてありがとう？

・・・フツ、あながち全部間違いないかなかったりしてね。

僕は姉さんの部屋に向かって軽く頭を下げてから自分の部屋へ足を進めるのだった。

僕が、ちょうど自分の部屋の階の角を曲がったときだった。

どこからか、二人組みの話し声が聞こえる。

僕は、それが気になりあたりを見渡すが・・・。

声はすれど姿は見えず・・・か。

この寮にはそういう怪談でもあるんだろうかね。

ただこれが、夜や深夜で消灯されていたらそれなりに怖かったが

まだ放課後で日も落ちきっていないしなにより明かりは煌々とついている。

ふむ・・・怪談じゃないってなると・・・どこにいるのか・・・ん？

僕は階段の前で話し込む二人の影を見つけ、素早く物陰に身を隠す。

そこからそっと、のぞくとそれは結構意外な組合せだった。

・・・鳥越先輩と・・・聡也？

確か昼休みするとき先輩は後でいろいろ聞かれるのがいやだ

とか言ってたけど・・・。

なんだ、結局聞かれてるんじゃないか・・・。

でも・・・何の話をしてるんだ？

僕は二人の会話に耳を傾けた。

「・・・本当なんだな？」

「はい、うそなんてついてませんよ」

聡華は聡也の言葉を聞いて、納得いかない顔で頭をかいた。

聡華が聡也に聞いたのだしていたことそれは、他でもない。

あの襲撃者についてである。

聡華はアルディ達にああは言ったものの、やはり自分とそっくりな人物が全く同じISに乗っているという事は気分がいいものではなかった。

だから、聡也を呼び出したのだ。

あの襲撃者と同じ顔の自分を姉と呼んだのだ。

知らないとは言わせない。

しかし聡華が聡也から聞き出せた情報は期待していたほど多くはなかった。

特に聡華が聞きたかったのはあの“紫燕”の事だ。

絶対数が決まっているコア。

そんな貴重な物を使ってわざわざ同じ機体を作る意味がわからない。聡也に聞けば、そのあたりも分かるはずだと踏んでいた聡華は完全に当てが外れた格好だった。

「いや、でもよ・・・だったらおかしいじゃねえか。

あれは完璧に“紫燕”だったんだぜ？」

「そんなこと仰られても・・・僕だってもう何がな何やら・・・」

「なあ、ほんつとに何にもしらねえのか!？」

聡華は同じような返答に苛立ちながら語気を強めた。

そうして語気を強めても答えが返ってこないことぐらい分かっているが、それが余計に聡華を苛立たせる。

元々沸点の低い聡華は、何か一つきっかけでもあれば手を出しそうなほどだ。

だが今回は自分から呼び出している手前それもできない。

苛立ちが頂点に達しようというとき、背後から声がする。

「なるほど・・・珍しい組み合わせで

中々面白そうな事話してますね。先輩？」

物陰から現れた人物は昼間あったアメリカ人。

ん、待てよ。

コイツなら・・・。

聡華はとりあえず、完璧に八つ当たりと自分で理解しながら

先ほどまでの鬱憤を晴らすかのように思い切りアルディをぶん殴る。

ゴツ！！

「あいたツ！？」

殴った鈍い音とアルディの間抜けた声とその場に響いていた。

え、な、何！？

なんで登場しただけで殴られたの！

それにもものすごい音がした気がするんだけど！？

僕は涙目で鳥越先輩を見る。

鳥越先輩は、何かさわやかな顔でサラリと言う。

「いや、タイミングが良かったからだな」

「た、タイミング！？」

「あー、後は・・・そうだ、あれだあれ。盗み聞きした罰だ」

凄く取って付けたみたいない理由だな。

まあ盗み聞きしてたのは事実だけどさ。

「あの、アルディ。あなたどこら変から聞いていたんですか？」

「うーん、間違いないのか、あたりからだね」

「丁度、コイツがあたしに説明し終わったあたりからって事か。

・・・てめえマジだろうな、その話」

鳥越先輩は腕を組んで訝しげな目で僕を見る。

何時見ても、この鳥越先輩の目つきは慣れない。

特に正面は下手に目を合わせると何か飛んできそうで怖い。

僕は下手に話さず、コクコクとボブルヘッド人形のようにコクコクと頷いた。

「・・・ならいいけどさ」

ようやく納得してくれたようで、鳥越先輩は腕を組み直して聡也に向き直った。

聡也もその様子を見て少し笑った後、僕に尋ねる。

「そう言えばさっき、面白そうな事って言ってましたけど」

・途中からしかも、後半も終わりの部分しか聞いてないのに内容分かったんですか？」

「まあね、？紫燕？ってキーワード聞けば大体どんな話していたかは」

まあ十中八九あの襲撃者についてだろうね。

でも少々意外だったのは、何度も言うがこの組み合わせである。

「それより、この組み合わせは・・・何、また聡也から声をかけたのかい？」

「今回はあたしからだ」

顔を動かさずに、ぶつきらばうに答える鳥越先輩。

これはこれは、更に意外だった。

あんなに、聞きに来られるのを疎んでたのに。

「ピットで？ホワイトアウル？の調整をしてたら、先輩が来られて・・・」

「おい」

「・・・あ、姉さ・・・鳥越先輩」

「お前、ちよつと時間あるか？」

「まあ・・・もう少し時間がかかりますけどこれが終わってからなら・・・」

「じゃあ、ちよつと後で寮まで来てくれ」

「って感じで、呼びだされました」
うん．．．。

聞く人が聞けば、ちよつと怪しい妄想をかきたてちゃうかも．．．

「．．．それはねえだろ」

大丈夫、もう僕はあのポーカーフェイスのテキストは捨てたからね。さてちよつと予想外な事だったけど、いまはそれよりさっきの話だ。僕は、一度わざとらしく喉を鳴らして改めて切りだした。

「で、さっきの？紫燕？の話だけど．．．もう一度確認しますけど先輩。」

本当にアレは？紫燕？だったんですか？」

「ああ、間違いねえ。あの色、あの機動力．．．どこをとつてもありゃ？紫燕？だ」

「それは、僕も同じ意見ですよ」

「あれ？ 聡也ってあのISと戦ったことあつたっけ？」

「ここだけの話なんですか．．．ここに転校する前から僕は

あの二機と何回か戦った経験があるんですよ」
なんだって？

それは初耳だけど。

よくよく思い出してみれば、あの黒いISが襲撃してきた時まつ先に聡也を狙ってきた。

既にシールドエネルギーもゼロで簡単に倒せるロツソがそこに居たのに。

あの時はただの時間稼ぎかとも思ったが、ひよつとしてあわよくば聡也を落とす気で

黒いISはアリーナに飛び込んできたのかもしれない．．．。

と、いきなりどこからともなく声がした。

「……………何が、ここだけの話？」
へ？

今何か声が出たような……………？
他の三人も聞こえたらしく、辺りを見渡している。
すると鳥越先輩が何かを見つけたようで、顔を思い切りひきつらせた。

「うえッ！？」

「え、何かいました!？」

鳥越先輩は、顔をひきつらせたままゆっくりと指をさす。

その方向は……………ん？聡也の……………つて。

「うわッ！」

ああ……………ありや駄目だろう……………。

あの目は……………。

「え、あ、え？ な、何ですか!？ 何がいるんで……………」

まだ良く事態をつかめていない聡也だけが、キョトンとした顔で僕たちの顔を見ている。

だがすぐに聡也にもなにがあったのか理解した。

背後に目をギランと光らせた先ほどの声の主にガツと肩を掴まれたからだ。

「……………ねえ、何がここだけの話なの？」

「ろ、ロツソ……………な、何の事でしょうか。別に僕はそんな事一言も……………」

「……………そう。ならその身体に……………聞くしかねえなあ……………ああ……………」

ロツソが右腕を部分展開した事で、ISを起動した状態になり性格が豹変する。

その目はもう先ほどの非じゃないぐらいギラギラと光り右手に持つ蛇腹剣が

ジャランと鈍い鉄の擦れる音を奏でる。

「なんで、そうなるんですか!？ あなた最近、僕に対する暴力酷

「いですよ！」

「こらあな、暴力じゃねえんだよ・・・言うなりやアレだな愛の鞭だ」

「旨く言ってるつもりでしょうけど、その鞭は一度当たれば即死の代物ですからね!？」

あーあ。

これは、止められないと言うか止めたらこっちも殺されそうで怖い。だがそこへ、鳥越先輩が物おじせず間に入った。

「おい、ISの無断展開は寮の規則以前に学園の校則に大きく反する」

「おいおい、その程度であたしが止まると思ってたのか？ 部外者は引っこんでろって・・・」

「今から三秒数えてやる・・・それまでにISを閉じろよ・・・良いな？」

鳥越先輩は、反論するロツソを無視してカウントを開始する。

「三・・・」

「だから、関係ねえだろお前はよ、ああ!？」

「ゼロ」

「早ッ!？」

「へぶっ!！」

僕と聡也の声がかぶり、ロツソが鳥越先輩の顔面パンチで吹き飛ばす。三数えるとか行ってまさか残り二秒をすっ飛ばすとは思わなかったけど

まさか部分展開とはいえISを起動した相手を殴り飛ばすとは・・・。
風紀委員の名は伊達じゃないってことか・・・。

ロツソは殴り飛ばされた衝撃でISが待機状態に戻り、先とは打って変わって静かに、そして無表情にムクリと起きあがった。

「・・・ごめんなさい、ついカッとなった」

「・・・お前、ほんとその性格難儀だな」
「ハハハハ・・・」
僕と聡也は笑うしかなかった。

「・・・そう、あのISの話をしてたの・・・」
「ロツソに聡也が一から説明したおかげで、

僕も盗み聞きしはじめた時点よりも前の会話の事を聞く事が出来た。
まあと言っても、真新しい情報は無かったけどね。

「あ、そういえばさ。ロツソお前あの黒いヤツと戦ったんだよね？」

「・・・はい。戦いましたけど」

「そいつの顔見たか？」

そう言えば、あのISは僕のと同様にバイザーが装着されている。

確かそれをセシリーが、レーザーライフルで吹き飛ばしていたな。

「・・・あ、でも。」

「ちよつと待つてくださいいよ先輩。」

確かにロツソはあの黒いISと戦いましたけど

それを言うなら先輩だって救援にきた？紫燕？と戦ったんですよね。
その時に見なかつたんですか？」

「あたしの場合、相手がグツとあの野郎を抱えてやがったからな。
よく顔が見えなかつたんだよ。何よりまだバイザーはつけたままだ
つたしな」

「ああ、なるほど」

「で、見たのか？」

鳥越先輩は、片目を閉じてロツソへ質問を投げかける。

そしてそれを受け取ったロツソは少し考えて・・・
首を横に振った。

「・・・見てない」

え？

「・・・私はその顔を見てない。私も光の加減でよく見えなかった

から・・・」

「そうか・・・ふうん・・・一体誰なのかねありゃ」

鳥越先輩は、指を組んだ腕の上でトントンとしながら考えを巡らせている。

本来なら、僕も先輩と一緒に考えを巡らせたいところだけど。

僕はチラッとロツソをみる。

一瞬だったけどロツソは右上を見た。

アレは右脳を使っている証拠。

右脳は直感や想像力をつかさどる部分だから、彼女は恐らく嘘をついた。

これ、結構見ないようにするの難しかったんだ。

まあそれは良いとして。

ロツソが最後とどめを刺した時、敵のISはロツソに至近距離で腕を取られていたんだ。

それで顔が見えないっていうのも流石におかしい。

・・・まあ何にしても聡也、ロツソに救われたね。

「・・・先輩、そろそろ行っても良いですか？ 私・・・

聡也に用がある」

「ま、あたしも聞きたい事はあらかた聞いたしな。悪かったな、呼びだしちまってよ」

「あ、いえ」

「・・・じゃあ行く」

ロツソは言うが早いのか、聡也の手を引いて踵を返す。

と、そこで何か思い出したように鳥越先輩は、二人を呼びとめた。性格には聡也を。

「おい、悪い。最後に一個だけ聞かせてくれ」

「え？」

「・・・あの？紫燕？の操縦者・・・アレがお前の姉貴なのか？」

聡也は一瞬目を見開いたが、その後ゆっくりと頷いた。

「そうか・・・悪い引き止めちまって」

鳥越先輩もそう言い残してその場を後にする。

聡也達も消え、自然解散と言う形になったが……。

この問題、まだまだかなり複雑そうだな。

深まる謎。

それでも日は進んでいく。

明後日になればセシリーと買いものだしその先には臨海学校だつてあるのだ。

……まあ、いつも通り軽く行こうね、軽く。

大体この数日間出来事がありすぎて、普段あまりしない聞き込みやそこからのちまぢました考えの構築なんてしてしまったが、やっぱり性に合わない。

僕は楽しく生きたいんだからね。

そう思うとフツと、どこからか身体の力が抜ける。

それと同時に僕はひと際大きなため息をついた。

肩肘張らずにのんびりと、楽しくにこやかに。

これがモットーさ。

それに、姉さんも言ってたけど確かにせっかくのセシリーとの買い物なのだ。

変に考えたりしてピリピリしてたら、セシリーも面白くないだろう。ひとまず僕は、一度作った計画のメモを姉さんのところに持つていく事にした。

何言われるかわからないけど……。

これも失敗しないためだしね。

そして案の定……。

姉さんからももの凄いだめ出しを食らうのだった。

第25話〜深まる謎、それでも日は進んでく〜（後書き）

ああ、結局グダグダに・・・

どうもするくです。

まあ何にしてもようやく買い物編に突入します。

そして久しぶりにメンバーが出てこれそうです（爆ww

それでは26話でお会いしましょう。

サヨナラっ！

ふんふん〜ん

セシリアは朝から上機嫌に鼻歌混じりで支度をしていた。

机の上にある開きっぱなしのセシリアの手帳には今日の日付がこれでもかと言うほど

赤ペンで塗りつぶされており、その下にはアルとデートと書かれて
いる。

セシリアは、アルデイが今日の事をデートと思っていないだろうな
と言う事は予想できていたが

それでも自分にとっては誰が何と言おうと今日の買い物はデートで
ある。

服はこれで・・・いやこつちの方が・・・。

いくらセシリアがお嬢様と言っても、まだまだ十五歳の恋する乙女
やる事は普通の女の子と大して変わらない。先ほどからの服を着
て行こうかに迷い、

既にセシリアのベッドの上は何着もの服で埋め尽くされていた。

セシリアが、次の服へ手を伸ばした時その服が何者かによってスッ
と引かれ、

セシリアの手は宙をつかむ。

・・・？

不思議に思っ て振り返ると、そこにはまさにメイドという服を着た

セシリアの幼馴染兼専属メイドのチエルシー・ブランケットが

先ほどの服を手に静かに立っていた。

「チエルシーでしたの。もう驚かせないでくださいな」

「いえ、その様なつもりは。ただお嬢様があまりに

悩んでおられるご様子でしたので少々助言をと思ひまして」

「あら、そうでしたの、それは助かりますわ！」

セシリアはポンと両手を合わせて、目を輝かせた。

チエルシーは、セシリアにとって、大切な幼なじみと言うだけなく心の機微に鋭く、

また色々と助け舟を出してくれる頼れるお姉さんの存在だった。

「それで、お嬢様。既にこれだけの服をばらまかれておいですが……」

既に何着か候補はありますか？」

言われてセシリアは少しくんと唸ってから服の山の中へ手を突っ込み二着の服を引っ張り出した。

それは一番最初に着て行こうと思っていた大人しい目のロングワンピースと、

ついさつき姿見で身体に合わせていた、淡い紺色の色を使ったノースリーブジャケット。

そのノースリーブジャケットには、中に着る薄手の半袖と七分丈のデニムが中に掛けられている。

チエルシーはその候補の中から即ノースリーブジャケットを選ぶ。いつも大人し目大人し目と言っているチエルシーなだけに

このチョイスにはセシリアも少し驚いた。

「お嬢様、今日デートされる方は、サウスバード様でしたかね？」

「え、ええ」

「お嬢様こちらをご覧ください」

チエルシーはどこからともなく、小さなアルバムを取りだす。

セシリアはそれを受け取り、その中を見て目を丸くすると同時に顔が赤くなるのが分かった。

「ちえ、チエツ！？ こ、これは……！」

「はい、これはサウスバード様のアメリカでの服装を写したものです」

チエルシーは顔を赤くしながら、食い入るように見るセシリアに淡々と告げる。

ちなみにこの時のセシリアはと言うと……。

こ、これがアルのアメリカでの服装……！

結構ラフな格好が好きですね．．でもそれがまた良いですわ！
制服姿も、似合ってますけど．．ああ、この写真のアングルなどは
絶妙ですわね！

．．．と、こんな具合だ。

「この写真から分析するに、サウスバード様あはラフな格好を好んでおられるご様子。

とするならば今回はあのワンピースでは逆に大人し過ぎて不自然と判断します」

「なるほど．．流石チエルシーですわ！ では早速着替えるところましよう」

セシリアは服を抱えて、奥へと消える。

丁度今日、相部屋の女子は既に他の女子と買い物へ出かけていない。流石にいくらチエルシーが幼馴染といえど、着替える姿を見られるのは恥ずかしいようだ。

そして数分後、その服を見事に着こなしたセシリアが颯爽と登場する。

「よくお似合いですよ、お嬢様」

「フツ、ありがとうチエルシー」

そこまで言っふとセシリアの頭の中に疑問が浮かぶ。

その様子に敏感に反応したチエルシーが尋ねた。

「お嬢様、どうかされましたか？」

「．．．チエルシー、さっきの写真ですけど。あれは．．．」

「ローラ様から頂きました」

なる程ローラさんなら持つていて当然ですわねえ。

．．．これは、アルの写真を手に入れるまたとないチャンスでは
！？

よし今度、ローラさんの所に行ってみましょう！

グツと拳を握るセシリアにチエルシーが更に油を注いだ。

「．．．幼少期の物もあるそうです」

「．．．よし、忍び込んででも取ろう。」

セシリアの心のうちが手に取るように分かる専属メイドおきななしみはその様子を見て、実に楽しそうに笑うのだった。

さて・・・こんなもんでいいだろう。

ぼくは、時計を見て鞆を肩にかけると部屋を後にする。

今日は、別に学生服じゃない。

白い薄手のパーカーにジーパン。

そして入学前アメリカからずっとかけてきたスポーツタイプのサングラスをかける。

このサングラスはファッションじゃない。

まあ、僕の場合の色盲は別に要らないんだけどね、サングラス。

何が起きるかわからないしずっと愛用している。

一種の予防だよ予防。

・・・それはいいとして。

僕は部屋を出て鍵を閉めセシリーの部屋へと向かう。

確か時間は十時で、部屋に迎えに行く約束だったね。

僕は携帯の時計でもう一度時間を確認してから、セシリーの部屋へ急いだ。

コンコン

ドアをノックする音が、量の廊下に響く。

「セシリー、迎えに来たよ」

「あ、はい！ わかりましたわ、少しお待ちになって・・・」
中からセシリーの声がする。

当然だけど。

声がしてから少し中でパタパタとか生活音がしてからガチャツとドアが開く。

「やあ、セシリー行こう……か……」
僕は思わず息をのむ。

元々セシリーは、スレンダーだから細見でスタイルも良い。
よく私服を着るとイメージが変わるというけど本当だ。

今のセシリーは、代表候補生セシリア・オルコットではなく
一流モデルセシリア・オルコットといっても過言ではないぐらいに
……。

綺麗だった。

セシリーは、見惚れて言葉が出てこない僕を不思議に思っ
てラファイア生地の白い麦わら帽を軽く斜めにかぶり首を少し傾ける。

ああ、ダメだつて……。
それは反則だよ。

「あの、アル……どうかしまして？ ……
っは！ も、もしかして私、どこか変でしたかしら!？」

セシリーはあわてて部屋に引っこもつとする。
それを僕はとつさに手を引いて止めると、無意識に言葉が飛び出
ていた。

「綺麗だったから……」
「え？」

「……あ、あああ、ごめん変なこと言っちゃって!」
「い、いえ……!」

互いに互いの顔を正面から見る事ができない。
ああ、もう……迎えに来て何言ってるのさ僕は……。

それから少し無言の時間が流れて、セシリーがおずおずと口を開い
た。

「あ、あの……」
「そ、そうだね……時間ももつたないし……い、行こうか……」

僕は歩き出そうとすると、クイツとパーカーの袖をセシリーに引っ張られる。

「う、うん、 どうしたの？」

「その・・・ですから・・・手を・・・」

「手？」

「だ、男性が女性をエスコートするのは常識ですわ！　そう常識ですのよ！」

セシリーは、少し声高に言う勢いよく手を差し出す。

ふう・・・やれやれ・・・。

やっぱりお嬢様だなあ。

僕はその手をゆっくりと取る。

「はい、これでいい？」

「そ、そうですわねでは、まいりましょう！」

迎えに来て十数分後、僕はセシリーの手を引いてようやく僕たちは寮を後にした。

よし！いいわ、今のまあ・・・思わずって感じだったけど・・・
口に出ただけでも良しとしましょう。

ローラは、寮の物陰からアルデイ達を見て心の中で興奮していた。
目的はもちろん、あの鈍感な弟とセシリアの？デート？が旨く行くかを観察するためである。

鼻息荒く興奮気味に自分の弟を見やるローラの後ろから、半ば無理やり連れてこられたある人物が
腕を組んで呆れながら声をかける。

「・・・なあ、私はなぜこんなところに居るんだ？」

「あら、決まってるじゃない。あなたの生徒の恋路を見守るためよ」

「・・・ガキに興味は無いのだがな」

「何言ってるの、色々ガキっぽいのはなたもでしょ」

「・・・お前だけには言われたく無かったよ」

千冬は頭を抱えるがローラは気にしない。

ローラはアルデイ達が見えなくなると千冬を促してその後を追った。

「ほら行くわよ、千冬」

「だから・・・なんで私が・・・」

「どうせ休日返上で根暗な生活送るぐらいなら外に出なきゃ」

「根暗って・・・」

「あ、それとも一夏君の方へ行きたかったかしら？」

ローラはクスツと笑って、無言で振り下ろされる拳をヒョイツと避けると

先にアルデイ達を追いかけて行ってしまった。

それを見て千冬は、既に自分がローラに

巻き込まれて逃げ出せない現状にあるという事実を改めて感じるのだった。

セシリーの手を取ってモノレールの駅までやってくる。

まだモノレールは到着していなかったが、改札をくぐってホームへと出る。

「モノレールか・・・初めて乗った時はなんか不思議な感じだったよ」

「そうですね、アメリカやイギリスにはあまりない公共交通機関ですものね」

「なんかさ、レールが上にあるから足元がふわふわすると言つか・・・」

「ええ、分かりますわ。私も初めて乗った時そうでしたから」

二人でたわいもない話に花を咲かせる。
結構久しぶりかもね。

この一週間はとにかく大変だったから。
聡也が転校早々問題を起こしたり、襲撃があったり、そして姉さんが来たり・・・。

ああ、でも姉さんが来た事は確かに驚いたけど
結果的にISの事や、今日の事もアドバイスをくれたし良かったと思う。

ちなみに姉さんが僕に言った、アドバイス（と言う名のダメだし）は、

下手に色々なところを連れまわしてしまうぐらいなら何でもそろう？レゾナンス？で

楽しんだ方が良いというものだった。

だから僕は、これまで色々と挙げていた候補を削って

余った時間でゆっくりと？レゾナンス？内のショッピングや食事に当てる事にした。

話し始めて数分の後、モーター音と共にホームへモノレールが滑りこんでくる。

僕たちは乗り込んで、座席に座る。

そしてモノレールが走り出すと眼下に海が広がっていた。

もちろん見える景色に色など無いがそれでもなんとなく綺麗と言う事は分かる。

・・・海か。

まあ・・・今日はその事は考えないで行こう。

僕は海から視線を外して、セシリーの方へ向き直る。

モノレールは、僕たちを独特の浮遊感で包みながら？レゾナンス？へ向かって走り続けた。

良いわ良いわ！

自然よ、超自然！！

ローラはアルデイ達の乗った車両の一つ後ろの車両に乗り込んで遠巻きに様子を見ていた。

もちろんだが千冬も一緒に引っ張ってきたので隣に座っているがその顔はローラとは真逆で

お世辞にも楽しそうとはいえないムスツとしたものだった。

「もう・・・千冬・・・」

「あんな、無理やり引っ張り出されてどう楽しめと言っただお前は・・・」

「だから無理やりって発想がダメなのよ！ もっと前向きに、ポジティブにとらえないと」

「・・・もうい・・・ん？」

唐突に千冬が何かに気がついたように一点を凝視する。

それにつられてローラが目線を動かすと・・・。

「あら、一夏君にシャルロットちゃんじゃない・・・」

「・・・なるほど、あいつらも面白い物が」

フッフ・・・やっぱり気になるんじゃないの

千冬が目つきが少し変わったのを見てローラがニヤニヤと笑う。

「何、千冬。まさか実の弟に嫉妬でもしてるの？」

「ば、馬鹿な事を言うな！」

「ちよーっと！ 声が大きいわよ！！」

思わず取りみだした千冬をローラが慌てて制する。

ばれたかなと聞き耳を立てると、一夏とシャルロットの声がした。

「・・・」

「どうしたの？ 一夏」

「あ、いや・・・今、千冬姉の声がしたような・・・」

「いやいや、気のせいでしょ？・・・」

ってというか気のせいじゃなきゃ困るよ・・・」

ボソリと最後に言った言葉が少し引つかかるが、なんとかばれては
いないらしい。

ホツと胸をなでおろすと、ローラは千冬に詰め寄る。

「あなたね、ばれたいの!？」

「うっ・・・す、すまない・・・?」

千冬が謝ってしまうほどにローラの剣幕はすさまじかった。

い、今・・・確かに織斑先生の声が出たような・・・?

シャルロットは再度キョロキョロと辺りを見渡すがそれらしい人影
は無い。

気のせいかな・・・。

あ、でもよく考えてみれば、織斑先生がモノレールの中で馬鹿な事
をって叫ぶわけないよね。

シャルロットはうんうんと、自分を納得させると隣に座る一夏を見
た。

一夏は、シャルロットが女子として転校してきて皆が皆、

シャルロットと呼ぶようになったのでわざわざ呼び名を変えてくれ
た。

それは一夏にとっては、別に特別な意味は無いのだがシャルロット
にとっては、

他のメンバーがいわゆる愛称で呼ばれていない中（鈴は仕方ないが）
シャルという愛称で

呼んでくれる事は、かなりうれしい事だった。

「なあ、シャル」

「うん、なあに?」

「こっやってみると結構、同じ学園の子乗ってるよな」

「そうだね、臨海学校も近いし……皆考える事は同じかあ……」
「ボソツと最後、本音が混じるが気にしない。」

仮に考えている事が同じであってもこちらには、
愛称で呼ばれているというアドバンテージ（シャルロット主観）があるのだ。

そうそう簡単にその差をひっくり返される心配は無い。（これもシャルロット主観）

「あ、皆つて言えば箒たちも誘おうと思ったんだけど……皆部屋に居なかつたんだよな。」

「シャル何か知らないか？」
「ギツクウ!!!」

「へ、へえ〜み、皆居ないなんてほんとどうしたんだろっねえ〜」
シャルロットは冷や汗をかきながら言葉を詰まらせる。

実は……。

箒

「何!? 一夏が見知らぬ女と仲よさそうに歩いていただと!?」
場所を言え、成敗してくれる!!!」

鈴

「なんですつてえ!? 一夏がどこの誰だかわかんないヤツと朝ごはんを食べてたですつて!?!どこに居んの、教えなさいよ!」

ラウラ

「何だと? そうか……日本には水を浴びる修行と言う物があるのか……ふむ。」

最近少したるんできている精神を鍛え直すとしよう。何、良い場所を知っている?」

と、実はシャルロットがまんまと一夏を連れだせたのは綺麗に他の三人にデマを流して、ライバル達の目をそむけさせたから。

後が怖いけど、一日一夏を独り占めできるんだもん。

その後の地獄は、なんとか耐えて見せるさ！

シャルロットは心の中でグツと拳を握って何度もうなずく。

ちなみにこれは内なるシャルロットの話で、外のシャルロットはまだまだに冷や汗をかいている。

「おい、シャル？　どうかしたのか凄え汗だぞ？」

「い、いや大丈夫だよアハハ、こ、この車内少し空調が効いてないんじゃないかなあ〜」

「・・・ああ、シャルは汗つかきなんだな？」

「ま、まあ・・・そう言う事にしておくよ・・・」

下手に言い返して予想外の事が帰ってきてきても困るのでシャルロットはゴニョゴニョと語尾を濁してうつむいた。

いくら独り占めできても・・・振り向かせるまでの道のりはまだまだ険しいね・・・。

そう思わずにはいられないシャルロットだった。

「へえ〜ここが？レゾナンス？・・・初めてきたけどこりゃ凄いな・・・」

僕は？レゾナンス？に入つて一発目の感想がそれだった。

清潔感に満ち溢れた店内に綺麗に陳列される衣服。

そこで働く店員さんたちも、爽やかで対応も丁寧そうだ。

流石、ここ近辺最大級のショッピングモールの名は伊達じゃない。

「さて、ではまいりましょう」

「うん、そうだね・・・どこから回るのか？」

「どこって、決まっていますわ」

首をかしげる僕にセシリーは微笑みかける。

「水着売り場ですわよ」

あー、目のやり場に困る・・・。

正直言うと、アメリカでも水着売り場に行った事が無い。

理由は繰り返しになっちゃうけど、海には良い思い出が無いから。

って、今はそんな事関係なくて。

まあ目のやり場に困るっていうのは水着売り場に来た経験の無さも多少はあるんだろうけど

何よりここ一帯にある水着が、すべて女性物という事だった。

「ねえ、セシリー・・・なんだかすごい場違い感があるんだけど・

」

「あら、そうですか？ 私は女なのでですから別におかしくは無いと思いますわ」

「いや、そりゃセシリーはそうだけど、僕は男だよ？」

「分かっておりますわ、別におかしくないでしょう。どの水着が良いのか選んでいただくために

一緒に居るのですから、何も不自然な事は・・・」

今サラッと凄い事言った！

選ぶ！？

僕が！？

ちよ、ちよっと待って・・・。

「僕そう言うのは、良く分らないよ」

「分かってますわよ、だから候補を私が挙げますから底荒選んでいただければ結構ですわ」

ああ、なるほど・・・なら大丈夫かな。

セシリーはふんふん鼻歌交じりに、水着を選定していく。さて・・・セシリーが選ぶまで少し手持無沙汰だな。

キョロキョロと辺りを見回していると不意に声をかけられた。

「ちよつと、そのあなた」

「・・・え？ 僕ですか」

「そう、僕よ。これ戻しておいてちょうだい」

そう言っただけで知らぬ女性はポスツと自分が引つ張り出したのである。水着を僕に渡す。

まあ、昔は男性が女性に向かってそう言う事やってたんだよね・・・。

それがISの登場でこの逆転劇。ハハハ、笑えない。

とはいえ・・・。

うん。

まあ、変ないざござやもめごとなんて起こしたくもない。

「戻しておけばいいんですね？」

「あら、物分かりが良いじゃない、頼んだわよ」

言い残して女性は去っていく。

僕は渡された水着に目を落として、それを店員さんに手渡した。

店員さんは、気さくに対応してくれたがその一方で

先ほどの会話をセシリーが見ていたようでムスツとした顔でこちらを見ていた。

「アル、なぜ断らないのですか！」

「いや・・・その特に理由は・・・」

「そう言えば、アルがこの学園に来てからもう随分経ちますが、私アルが何かを断った所を見た事が無い気がするのですけど？」

「まあ、そうだね・・・あまり断らないね僕」

セシリーは、僕に半身の体勢で腕を組み、肩目で僕を一瞥する。

「全く、あなたも男でしょう？ プライドと言う物がありませんの
！」

「プライドかあ・・・」

僕は少し考えて……、ゆつくりと頷いた。

「そうだね、無い……のかもしれない」

「え？」

「良くわかんないんだけどさ……」。

プライドって、要はどれだけ自分に自信があるのかって事だよな。

僕は、自慢じゃないけど今の自分に到底自信なんて持ててないんだ」

僕は痛いのも、怖いのもそれにいざこざで問題を起こすのも基本的に大嫌いだ。

出来れば、そんな物とは無縁の場所で過ごしたい。

だけど、そんな事は不可能だ。

学生といえど、社会に出れば否応にもそういう事態に直面する。

そこで必要となるのが、その痛いもの怖いものへ立ち向かうだけの強さ、自分への自信。

残念ながら、今の僕にそれがあるのかと言えば……答えはノーだろう。

昔から、何一つ僕は変わっていない。

それが良いと言う人もいれば……悪いと言う人もいる。

姉さんの嘘も、真似てはいるけどまだまだ物に出来てないし。

銃の腕だって……そんなには。

「まあ、だから何だって話なんだけど……ね」

「……それでアルは良いんですの？」

「良いも悪いもないさ、それが今の僕だから……どうしようも無いよ……」

僕はバツが悪そうに頬を掻くと、半ば強引に笑顔を作った。

「ま、まあ、この話はこれで終わり！ さあ、せっかくの買い物なんだから楽しまないと！」

「ええ……そうですわね……」

そう言っ僕をみるセシリーの目はどこことなくさみしそうだった。

「……あいつは、昔からあなののか？」

千冬は腕を組んで壁に寄りかかり、壁越しに様子をうかがうローラを一瞥する。

「少なくとも、両親を失ってからだね」

「……そうか、まあ深くは聞かんが」

「まあアレよ。手にかかる弟よ……。行ってみれば正反対ね一夏君と」

「なんでそこで一夏出てくる？」

千冬は、訝しげに微笑を浮かべるローラに言う。

この話の流れで、なぜ一夏が出てくるのか。

まあ当然と言えば当然の疑問だろうとローラは思う。

「だから正反対だからよ、うちの子とね」

特に強さ……。という面においては。

まあ、それはそれだ。

いまだに、よくわからないと言った顔の千冬を尻目にローラは再びアルデイの様子をうかがう。

どうやらアルデイはセシリアの水着選びをするようだった。

「うーん……。青色のビキニにパレオ付きと……」

黒の少し大人びたワンピースタイプかあ。ねえ千冬はどっちがセシリアちゃんに似合うと思う？」

「はあ……。ガキの水着選びなど興味な……。む？」

千冬はローラの呼び掛けに、呆れながら答えていたが突然何かを見つけたようで目つきが鋭くなった。

ローラがその視線の先を追うと……。

一夏君と……。シャルロットちゃんね……。あ、二人一緒に試着室入っちゃった……。

な、中々大胆なのね……。一夏君も……。
つて

「うあっ!?!」

苦笑交じりにそれを見て、スッと目を移動させると

そこには一層鋭さの増した千冬がローラも一歩引くぐらいのオーラでそこにいた。

「ローラ・・・」

「はいッ!」

「・・・悪いな、ちょっと急用ができた」

「ご、ごゆっくり・・・」

ゆっくりと地を踏みしめる千冬の足取りが、ローラには地割れのエフェクト付きで見えた。

にしても、怒るとおっかないわねえ・・・。

まあ、怒らなくても怖いけどね、千冬は・・・っと!?!

いまだに少しさっきの千冬に気おされ気味で、また半歩後ずさった足に何かが引つかかる。

ちよ、なんでこんなところにコードが走ってんのよ!

ローラが引っかけたのは、どうやらそのわきにある自販機の物らしい。

ローラはなんとかバランスを取ろうとするが、一度崩れた体勢はいくら

ISの世界二位でも立て直す事は出来なかった。

あーもう・・・我ながら凡ミスね・・・。

ドッターン!!

そのまま盛大に仰向けに倒れた。

当然倒れた音は、周囲の注目を浴びるわけで・・・。

「ね。姉さん!?!」

「ローラさん、どうしてこちらに・・・ッ」

見つかるわよねえ。

そして・・・。

ジャラッ!!

「お前たち何をしている!」

「お、織斑先生!？」
「げえッ! 千冬姉え!？」
向こうは向こうで逆に見つかったようだ。
あーあ、静かに見守るはずだったのに。
多分あたしが転ばなくてもさっきの千冬ではれてたわね・・・。
あたしは、上下さかさまに弟たちを見ながら、頭の中で何と言いつ
するかを考え始めた。

ね、姉さん・・・。
なんでこんなところに。

あ、つてか向こうには織斑先生まで。

「あ、あら寄寓ねえ、こんなところではったり」

「姉さん・・・その嘘は、今日までで一番下手な嘘だよ」

とりあえず僕は姉さんを立たせる。

流石に寝転がられたままじゃ、弟として恥ずかしい。

「それにしてもローラさん、一体どうしてこんなところに・・・」

「大方、僕たちの後をつけてきたんでしょ」

「え!？ そ、そうなのですか」

「あはは・・・ま、まあそんな感じ・・・ね」

姉さんは笑ってごまかすと、パンパンとお尻を払って服の乱れを正
すと

急にセシリーに向かって言う。

「あら、セシリアちゃんちよつと髪、セットが崩れてるわよ?」

「え! ほ、ほんとですか!？」

「そ、そ、ホント。いくら鈍感なうちの弟でも・・・それぐらい
は気がつくかも・・・」

「な、直してきます！ アル少し失礼しますわ！！」
な、なんだ？

姉さんがボソツと何かを耳打ちしたと思ったらセシリーが弾丸の様な早さで。

「姉さん、あのセシリーが……って何その顔……」

「フフフン……ちよいとここいらでーっあなたに確かめたい事があるのよ」

僕はそのニヤついた顔を見て、どうも良い予感だけはしなかった。

第26話・Side Strike くデート？ お出かけ？ 尾行つきく

ようやくと、ショッピングまでこぎつけたぞ！

どうもしるくです。

最近虫歯が・・・

情けない事に歯医者が大の苦手で・・・

あーでも行かんともつとひどい目に・・・。
ふう。

さて題名ですがSideStrikeと少し変更させていただきました。
した。

これはアルデイ側を示すタイトルとなります。
急遽すいませんがショッピングを二つの視点に分ける事にしました。
面倒くさくてすいません・・・。

そんな感じでまた27話で会いましょう。

サヨナラッ！！

第27話：Side Strike く姉はいう、あなたは何をどうしたい？」

「全く、お前たちは何をやっている!」

千冬に見つかったシャルロットと一夏は、店の中にもかかわらず正座させられていた。

既に発見されてから数十分はこうして座っている。

「異性交遊するなどは言わん。だが時と場所をわきまえろ」

あゝあゝシャルロット足しびれてそうだなあ……。

一夏達は、正座したときに靴が自分のズボンや服を汚さないように一度靴を脱いでから座っていた。

そのため、シャルロットが何度も何度も足をモゾモゾさせているのがよく分かった。

実際シャルロットはと言うと……

ううう……まさか織斑先生がいたなんてえ……。

それもこんなところを見つかったちゃうし。

そ、それに何より、この座り方あ、足が痺れて……

つて駄目だ駄目だ!いま変な動きをしたら、それこそ鉄拳制裁が飛んでくるにきまつてる!

……それだけは絶対に避けないと。

と、とにかく、頑張って耐えてこの危機を乗り切らないと!

……といった感じで、足の痺れと織斑先生の説教の板挟み状態。

そのどちらもが、無視できないだけにシャルロットにとっては一夏以上の苦痛である。

そんなシャルロットの思いを知ってか知らずか一夏はふと、悪戯をしたくなった。

良く言う怖いもの見たさではないが、こうしたらどうなるんだろうかというごく素朴な疑問から生まれたものだ。

一夏はいまだ小言を続ける千冬の目を盗んでチラッとシャルロットの足をみる。

その足はさつき以上にモゾモゾさせており、かなり痺れているようだった。

一夏はその足にソーツと手を伸ばし……………。

っーん

「うわひゃあああつ！！！！」

一夏がその足を人差し指で突くと、シャルロットは素っ頓狂な声を上げて

天井に届きそうなくらい飛び上がる。

そしてすぐに……………。

「やかましい！！！」

ゴッ！！

千冬の鉄拳の餌食になった。

「……………うう……………酷いよお……………一夏あゝ」

「わ、わりいまさかそこまで、驚くとは……………！！？」

涙目で訴えるシャルロットに苦笑いで返す一夏だったが、

その笑いも長くは続かない。

今のシャルロットの？酷いよお……………一夏あゝ？は

シャルロットに余計な事をしたのは一夏だと千冬が理解するのに充分すぎる情報だった。

一夏は一気に顔が引きつるが、その頭に問答無用で？二発？の鉄拳制裁が下った。

「ああ、そう言うことか・・・そうだね・・・好きだよ」

「あら、ホントに!」

「う、うん・・・」

姉さんは僕の両手をグツと握ると顔を近づけてくる。

その表情は満面の笑みだった。

「だって、セシリーは大切な友達だからね。嫌いになる方がおかしいでしょ?」

「ん、友達?」

あれ、姉さんの顔が固まったけど・・・。

僕なにかおかしい事言っただかな?

「と、友達なの?」

「うん」

「でも好きなのよね?」

「好きだよ、大切な友達だからね・・・?」

小首をかしげる僕に姉さんは盛大にため息を吐いた。

だから何さ?

「あのね、アルディ。あたしが聞いていることはそうじゃなくて

セシリアちゃんが好きか嫌いかって聞いているのよ?」

「え? いやだから好きだって・・・」

「だから、そういう好きか嫌いじゃないのよ!」

姉さんは、僕の両肩をつかむと激しく前後に振る。

頭が激しくシエイクされクラクラする僕に姉さんは、はっきりと言った。

「あたしが言ってるのは、セシリアちゃんを

恋人として好き勝手事を言ってるの!」

恋・・・人?

・・・こいびと?

恋する人と書いて恋人・・・って。

ええええええええええええ!?

「ちよ、ちよつと姉さん! 何言ってるのさ!?」

「予想通りの反応ね・・・もう姉さんため息すら出ない」

姉さんは両手を肩から離して頭を抱えながらいう。

予想通りっていうのは・・・よくわからないけど

つまり、姉さんが聞きたいことは・・・その・・・

ぼ、僕がセシリーを好きか嫌いかっていうことらしい。

こ、恋人として。

いやでも・・・。

「あの姉さん、僕そんなの・・・」

「わかつてるわ・・・今までのあなたの反応を見てればね・・・。

自分でもよくわからないんでしょう？」

すべてを見抜いているような姉さんの言葉に僕は、うつむいてゆっくりとうなずく。

そんなことなんて一度も考えたことなかったし、仮にあったとしてもよくわからない。

心当たりはほんの数回あるが、それが好きだという気持ちかと聞かれればそれも違うような

違うような・・・そんな曖昧なものだった。

「まあ、あたしも人に言えるほど経験あるわけじゃないしそんな相手もないけれど、

身近にそういう人がいるっていうのは本当に素敵なことだと思わない？」

「それは確かに思うけど・・・。

でもあれだね。その言い方じゃ、まるで僕のすぐ身近に

僕のことを好きな人がいるみたいない方だね」

ガクッ！

姉さんが思い切りうなだれ、そしてどこからか何かが倒れる音もした。

へ？ 何かまたおかしいなことを・・・っていうか誰か見てる？

「あ、アルディ・・・だからあたしはさっきからそう言ってるじゃない・・・」

「え！？ そうなの」

「・・・と、とにかく・・・気を取り直して、もう一度聞くわよ
あなたはセシリアちゃんのことをどう思ってるの？」

「・・・待てよ。」

「・・・この話の流れからいくと・・・」。

「ま、まさか！」

「姉さん！ まさかその・・・ば、僕を好きな人ってセシリーのことなの！？」

「だからさっきから言ってるでしょうがっ！！」

「ゴッ！！！」

「いったあゝ・・・」。

「そんな何もグーで殴らなくてもいいじゃないか・・・」。

「それで、どうなの？ やっぱりよくわからないとか言っくんじゃないでしようね？」

「あ、いや・・・う、うん」

「正直そういうことを言われてもよくわからない。」

「そもそも、今日に至るまで恋人をつくるうとか、恋人ができたとか
そういう経験は皆無だ。」

「それに、僕自身そんな状態じゃなかったし・・・。
いや、それは言い訳になるかもね。」

「でもそういう色恋沙汰の経験がないのは事実だ。」

「人が人を好きになるというのは、意外に簡単らしい。」

「まあ、その簡単なのがイマイチ僕にはわからないんだけど。」

「まあ、初めてのことから戸惑うのは仕方ないと思うわよ。
でも・・・そうねあなた少し難しく考えすぎなんじゃないのかしら？」

「？」

「難しく？」

「そう、要は人を好きか嫌いか。そこにいろいろこの人の好きとあの人の好きがどう違うとか」

「こう違うとか面倒くさく考えようとしていない？」

それは、あると思う。

セシリーは好きだ。

でもそれと同じくらいみんなも好きである。

その好きという感情の違いなんてわからない。

ただ、好きである。

一緒にいると楽しいし、退屈しないから

すぐに時間が過ぎてしまう。

「そんなに難しく考えることなんてないのよ。乱暴に言っちゃうとね、あの人が好きだと

ただ一人に対してに好きという感情を向けるのがいわゆる恋なんじゃないかしら」

「ただ・・・一人に・・・」

「別にあなたが、誰を好きになろうときつと誰も責めないし責められないけど、

アルデイに一途な思いを持つ子がいるって言うのは事実で、あなたはいずれそれに答えなくちゃいけない日がやってくる。

そんな時でもあなたは、わからないって逃げちゃうの？」

「逃げる・・・？」

姉さんはゆつくりとうなずくと、微笑んだ。

「そう、わからないって言うのは一種の逃げでしょう？」

まあ、あなたは昔から逃げるのは得意だったけど、絶対に逃げちゃいけない

時つて必ず何度か訪れるものよ。それがどんな場合かはわからないけれどね」

さらっと人の痛いところを突いてくるあたりが、姉さんらしい。

・・・逃げちゃだめな時か。

それは、多分自分の思いを伝えるときなんだろう。

それがいつになるのかは、わからないけど・・・。

姉さんは、ま、がんばんなさいよと話を切り上げひとつ息をつき、きびすを返したが

ふと何かを思い出したように僕に再び向き直った。

「あと、もうひとつ……。あなたさつき自分に自信が持てないといってたけど」

「え？」

「それもまあ、好きって事と同じことよ。まずは何かに気づかなきゃ。

あなた自身が何をしたいのかどうしたいのかって事にね」

姉さんはそれだけを言い残してその場を去る。

何をしたいのか……。どうしたいのか……。

僕はセシリーが帰ってくるまで、ずっとそのことを自問自答していた。

な、何もあんな大きな声で二人とも叫ばなくとも!!

セシリアはアルデイ達から少し離れた場所にあるベンチに座りながらチラチラとその様子をつかがっていた。

実はセシリアはここにローラがいる事を知っていたのだ。

と言うのも、この買い物約束を取り付けた後の二人きりの会話で事前に打ち合わせをしていたのだ。目的はただ一つ。

アルデイの今の本音を聞き出すためである。

セシリア本人が聞くと言う案も一度浮上したが、良く考えてみるとその方法は流石に恥ずかしい。

そこで、こうしてローラがアルデイに聞くという形を取ったわけだ。取ったわけだが……。

それにしても、かなり目立ってますわね……。あの二人。

何せはたから見たら外人二人が、シヨツピングモールで言い争っているのだ。

同じ国の人でも言い争っていたら、若干引くと言つのにそれが外国人だったら余計にだ。

も、もう少しこう、聞き方と言う物があるでしょうに。

確かにアルデイのこう言つた事に対する物分かりの悪さや鈍感さは嫌と言つほど感じてきたし見てきた。

セシリア本人だって、何度頭を抱えたか分からない。

……はあ、まあいいですわ。

セシリアはパツと頭を切り替える。

いま重要なのは、あの二人が目立っていると言つ事ではなく話の内容だ。

やっぱリアルはよくわかつていませんでしたわね……。

それはおおよそセシリアが予想していた事だった。

実際だが、セシリア本人も誰かを好きになると言つ事に最初は戸惑つたのは事実だった。

この感情が一体何なのか、それが良く分からなかった。

その感情が、恋だと分かるまでには結構な時間を有したと思う。

だからセシリアはこのアルデイの言葉を聞いて内心ホツとしていた。

そりゃ一番は好きだつて言ってくれる事だったが、分からないというならそれは少なからず

昔の自分同様、アルデイがセシリアに対して抱いている感情が分からないとも取れる。

かなり都合のいい取り方ではあるが。

それでも嫌いと言われるよりは数倍……いや数十……数百倍マシである。

まだまだ、私も魅力が足りないのかもしれないわね。

セシリアはフツと笑ってから、髪をセットし直してきた風に装いアルデイの元へ足早に戻っていった。

「お待たせしましたわ！」

セシリーが髪を正しながら、こちらへ駆け寄ってくる。

「あ・・・」

ついさつき姉さんから、セシリーが僕の事を好きだと言っ事を聞いていたためか

顔をまともに見ることすらできなくて、僕は思わず下を向いた。

「アル、どうかしまして？」

「いや、べ、別に・・・何でもないよ・・・何でも・・・」

全く変に意識しちゃうじゃないか！

正直まだ好きとかそういう気持ちについては、まだ分からないし答えもまとまっていないが

少なくとも僕も男の子だと言っ事だろう。

分かっていなくても、心が無意識のうちに反応してしまう。

「それより、アル先ほどの水着結局どちらが良いんですの？」

と、丁度いい感じでセシリーが話題を変えてくれた。

これは、少し助かった。

僕はもう一度あの、水着二着を思い浮かべた。

うん・・・色のには・・・黒っ言うよりもセシリーは青かなあ。

それにその水着に、今日かぶっている白いラフィア生地帽子なんかをかぶったら・・・。

うん・・・良いかもしれないね。

「僕は青かな」

「やっぱり、そうですね。私もあの青いビキニは少々派手さもあつつ

その中に、大人な雰囲気を感じる中々良いデザインだと思っておりましたの！」

「そうなんだ、まあ、喜んでもらえたなら・・・少しは役に立ててるのかな」

「ソフツ、少しではありませんわよ。さてそれでは少しお待ちくださいな

お会計を済ませてまいりますので」
セシリーは言うと、嬉しそうに水着売り場の中へ走っていく。

僕はその後ろ姿を見ながら今度は姉さんが最後に言った事を考えていた。

「まずは何かに気づかなきゃ。あなた自身が何をしたいのかどうしたいのかって事にね？」

「何をしたいのか……。
どうしたいのか……。」

何をどうしたいのかと言うのは、人間で言う所の

一番簡単でそれでいて奥深く、人が生きている数だけその選択肢があると言ってもいい問題だ。

身近なところなら、例えばお菓子を食いたいから、大きなところなら例えばあの国と戦おうとか……。

そこには必ず明確な理由がある。

お菓子を食いたいのは小腹がすいたからとか、あの国と戦いたいならあの国には石油があるからとか。

その答えが出ないと言う事は、僕にその？明確な理由？とやらが無いからだろうか。

いや、実際無いのだ。

？明確な理由？が。

だから何をしたらいいのか分からない。

どうしたいのかも……。

本当に何もかも中途半端な自分。

ただどこれが自分だししょうがない。

仕方が無いんだよなあ……。

いざ、その答えを導き出さなきゃいけないとなったときに僕は一体何と答えるのか。

答えなんてすぐに出るものではないのにそれでも尚僕は

それを考えずにはいられなかった。

「そう言えばそろそろお昼ですわね・・・」
フードコートから漂ってきた、いい匂いに言葉が誘われたかのようにセシリーの口を突く。

僕は近くにあった時計に目をやると、時間は既に十二時を回るうと
していた。

言われてみれば僕のお腹もかなり減ってきたな・・・。

「何か食べる？・・・うん何が良いかな」

「私は、アルに合わせますわ」

そ、そう言われると困るなあ・・・。

セシリーって結構口が肥えてそうだし。

ファミレスっていうのもな・・・ん？

目に飛び込んできたのは、ファーストフード店。

ごく普通のハンバーガーやらポテトやらが売ってるんだけどその中に
アメリカのソウルフードと呼ばれるものがあつた。

要は、ジャンクフードなだけどね。

もとはアメリカの奴隷制度時代を問うして生まれたアフリカ系アメ
リカ料理の総称で、

これが？ソウルフード？と呼ばれるようになったのは六十年代半ば
らしい。

この料理の特徴としてはまず全体的に高カロリーで、味が濃い。

それにまあ、そのほとんどが結構見た目もインパクトがあつたりす
るんだこれが。

ふん・・・お、サコタツシユがある。

本来ソウルフードって言うのは単品でかじりつくものじゃないんだ
けど。

「セシリー、ここで良い？」

「ファーストフード店ですわね・・・まあよろしくてよ？」

「あれ？意外とすんなり・・・セシリーここはファーストフード店って言うってね

ハンバーガーとかポテトと夏が売ってる・・・」

「私そこまで箱入りではありませんのよ・・・」

と言うよりもイギリスにもこの様なファーストフード店はありません！」

・・・それはすいません・・・。

僕とセシリーはそれぞれ、注文した物をトレーに載せて席に座る。

セシリーはホットケーキにサラダとアイステイ。

僕はハンバーガーとポテトにサコタツシユ。飲み物はオレンジジュースをそれぞれ前に置いている。

「アル、それはなんですの？」

セシリーが僕の目の前にある小皿に入ったサコタツシユを指さした。ああ、こう言うのはあまりイギリスでは無いのかもね。

「これは、アメリカの・・・言ってみればソウルフードって言うやつだよ。

まあ今じゃどの国でも食べようと思えば食べれるけどね。

簡単に言うとウモロコシと豆のバター炒めかな」

アメリカの開拓者が先住民から教わったものらしいから、厳密に言えばこれは郷土料理なのかも。

まあ・・・なんでもいいや。

食べれるし。

「ふうん・・・そんなものもあるんですの・・・」

「あ、何だったら食べる？別に僕は構わないけど」

僕は一さじすくうと、セシリーの口元にスプーンを持っていく。

セシリーはその僕の行動に少し驚いているようだった。

ああ、サコタツシユって結構癖のある味と言えば味だからなあ。

場所によってはバター入ってもほんとか甘すぎるのもあるぐらいだ

から・・・。

セシリーは少し、戸惑いながらもそのスプーンにパクリと食いついた。

僕もそのスプーンでサコタツシユを口に含んだ。

ふむ・・・。

ほんのちよっぴり、酸っぱいね。

・トウモロコシの甘さ中和に入れたお酢の入れ過ぎかも。

だが不味くは無い。

「どう、セシリー 美味しい？」

僕は、セシリーに感想を尋ねるが当のセシリーはなぜか顔を少し赤らめて

ジツと僕が持つスプーンを見ている。

うん、スプーンに何か・・・。

「どうかした？」

「い、いえ・・・何でもありませんわ」

そう言つてそっぽを向くセシリーの顔はそっけなく言つた言葉とは裏腹に

凄くうれしそうな顔をしていた。

・・・一体、この短い間に何があつたんだろう。

僕たちは、昼食を終えて一度？レゾナンス？を出た。

セシリーがどこか静かな場所でゆっくりしたいと言つたからである。

僕は頭の中でこちら辺の大まかな地図を思い浮かべ近くに公園があった事を思い出したのだ。

そこで、僕はふと忘れものに気がついた。

「あ、しまった！ さっきのお店に携帯忘れたみたい」

「アル、何やってますの・・・」

「ご、ごめんちよっと取ってくるから待ってて」

僕はセシリーを入口付近に待たせて、先ほどのファーストフード店

に急いだ。

全くアルは……。

ま、そう言う所もまた良いのですけれど。

セシリアは走りゆく背中を見ながらそんな事を思っていると突然どこからか悲鳴が上がった。

「きゃあああああつ!! ひつたくりよッ!!」

ふう、食後にあまり激しく動きたくはありませんがつ!!

丁度その犯人はこちらに向かって走ってきていた。

セシリアは、素早く構える。

この程度の相手なら、代表候補生足るセシリアには朝飯前。

「おらおらあ、どげやあ!!」

怒鳴り散らしながら、走ってくるその男の腕をセシリアは掴もうとして……

不意に肩を捕まれ正面からどかさされる。

あら?

セシリアをどかせたのは、茶髪のよく言う所のチャラ男。

「な、何をしますの!？」

「いやいや、女の子にこんな暴漢の相手させらんねえでしょ？」

軽くチャラ男は答えると、そこへ更にチャラ男が合流し犯人に足を引っ掛ける。

「おらよ、行つたぜ!」

「おお、ナイス!」

体勢が崩れた犯人の腕からまたまた別のチャラ男が素早く鞆を奪い

取る。

そして盛大に転んだ犯人の前に、一人の男が立ちふさがる。

その男は、ディープブルーの髪に鋭くも優しさを内包した蒼眼の瞳を持つ少し小柄な男性だった。

服装は他のチャラ男たちと変わらない無地のシャツに薄手の上着を羽織って、

ジーパンをはくと言うラフなものだったが雰囲気はまるで他のチャラ男とは違っていた。

「くうっっ……いつてえな……何にしゃがる！ 邪魔しやがってよお！？」

なんて滅茶苦茶な言い分……。

セシリアは流石に口には出さなかったが、呆れて開いた口がふさがらなかった。

それはその男も同様だった様で大きいため息をついてから犯人の胸倉をつかむ。

「お前……自分が言ってる事のおかしさに気づけ」

「な、何だと!？」

「だから……頭冷やして考えろつたんだよ、このポケット!」
ゴッ!

鈍い音がして犯人の鳩尾を正確に拳がえぐる。

犯人は悲鳴らしい悲鳴も挙げないまま気を失った。

「ふん、クズめ」

どさりと乱暴に犯人を落とすと、カバンを女性に返した。

そしてチラッとセシリアの方を見る。

「大丈夫か？」

「ええ、まあ……」

「そうか……良かった」

男は静かに頷く。

そこへ丁度携帯を取り戻ってきたアルデイが合流した。

アルデイは、人ばかりと倒れている男性を交互に見て茫然とした顔

で尋ねてくる。

「あの、セシリー何があったの？ それにこちらさんは・・・」

「ああ、ちよつとした事件ですわよ。この方は・・・ええと」

そう言えばこの人、まだ名前すら知りませんわよね。

セシリアが言葉に詰まっていると、その男は気さくに自己紹介をしてくれた。

「俺は山科 やましな としが 兎束・まあ、あいつらのリーダー・・・らしい」

なんでもらしいのか良く分からないが、まあそう言うことらしい。

「で、その兎束が・・・何、どうしたの？」

「あの犯人を捕まえたんですわよ」

「へえ〜そりゃ凄いね・・・」

「まあ、日常茶飯事だしなこんな事」

あれ、日本って私が思っていた以上に治安が悪いのかしら・・・。

そんな事を思っているのと、どこからともなく警察官がやってくる。

「ありやいやあ〜、もう伸びちゃってるよ・・・うん、こりやあ・・・」

「ああ、すみません・・・俺です」

兎束はこれまた気さくに警察官に話しかける。

いや気さくと言うよりは、もう友人とかそこら辺に反仕掛けているような感じだった。

「ああ、ま、いいんだけどさ。捕まえてくれりゃなんでも。にしても毎度毎度すまんね君たちには」

「いえ、元々そう言う？お約束？でしたからね」

「さて・・・まあ犯人は連行するとしてだ・・・。

悪いね君たち、まあ分かりきってるから確かめるまでも無いんだけど・・・身分証か何か持ってる？」

そう言つて警察官は、胸ポケットから手帳を取り出す。

「身分証？」

「学生手帳でよろしいなら・・・」

二人はそれぞれ自分の鞆とポケットからIS学園の学生手帳を取り

出して警察官に手渡す。

そして何やらメモを取ると、その手帳を二人に返しながら言う。

「へえ、君たちあのIS学園の生徒さんかあ。こりゃ凄い」

「そ、そうですかね・・・あんまり自覚ないけど・・・」

「アル・・・」

はあ・・・もう少ししっかりしてくれないと困るのですが・・・色々々々。

・・・ん？

セシリアは視線を動かした先で、何やら考え込んでいる兎束を見つめる。

「兎束さんどうかされました？」

「・・・」

「兎束さん？」

兎束はセシリアの二度目の問いかけに、いまだ何かを考えてうつむきながら反応した。

「IS学園ってやっぱりISについて色々学ぶんだよな・・・？」

何を当たり前なと思いながらセシリアは頷いた。

「・・・そうか」

「どうかしたの？何か悩み事そうだねえ？」

警察官と話し終えたアルデイもニヤニヤ笑いながら話に加わってくる。

その顔には、面白そうな事見つけましたと書いてあるようだった。

彼は、アルデイとセシリアの二人を見てまた少し考えた後、パンツと目の前で両手を合わせたあと

勢いよく頭を下げてこう言った。

「頼む、ちよつと力を貸してくれないか!？」

セシリアはこれから起こるであろうことはまだよくわかっていなが
ったが、

少なくとも二人きりの楽しいデートはここで終わりだと言つ事はな
んとなく予想できた。

第27話：Side Strike く姉はいつ、あなたは何をどうしたい？

デートを引つ張って引つ張って。

でもこれは後々それなりに必要なフラグなのです。

.....多分(おい

どうもしるくです。

もう少しこの、グダグダにお付き合いくださいね(爆

ここでよつやくデートだろう・・・

で、多分・・・オーシャンズイレブンには・・・

.....30話後半を予定しております(核爆

まあ、それなりに展開も考えておりますからお楽しみに。

気長にお読みくださいね。

よろしく願います。

では28話でお会いしましょう

さよならッ！

僕たちは兎束に連れられて、とある小さな変電所へとやってきていた。

僕はセシリーの手を引きながら、兎束の後ろをついていく。

足元は砂利で所々に中ぐらいの石が転がっている。

「足元気をつけろよ」

「ねえ、ここに何があるの？」

「ついてこれば分かるさ」

「ですけど、頼んでおきながら行き先も教ええないと言うのは少々失礼ではありません事？」

セシリーは不機嫌そうに兎束に言う。

まあ確かに……。

行先ぐらいねえ。

しばらく細い道を進むと、そこにはプレハブ小屋が立っていた。

プレハブと言っても、中々大きく周囲にはさつき見たようなチャラ男が多いたむろしていた。

「お、兄貴お帰りっす……って、兄貴カップル連れこんで何する気っすか？」

「お、なになに？　兄貴が襲っちゃっう系!？」

僕たちを見た数人のチャラ男が、やんややんやと騒ぎ出す。

それを見た兎束は目を細めて、声を荒げた。

「馬鹿そんなじゃない。この二人は客だ。分かったら茶でも淹れてこいー!」

兎束がびしゃりと言うと、さっきまでの喧騒がスツと止みチャラ男たちが

テキパキと動き出す。

「すまん、まあ馬鹿だが悪い奴らじゃないんだ」

「はぁ……」

「さ、こつちだ」
兎東は僕たちに耳打ちすると、プレハブ小屋の中へ僕たちを招き入れた。

中に入ると更にそのプレハブ小屋が広いと言う事に驚かされる。
十数人のチャラ男や女性がいると言うのに、まだまだスペースには
余裕があった。

その中の一室に通された僕たちは、少しくたびれたソファに腰を下
ろす。

そこへさっきのチャラ男が、お茶を持って入ってくる。

その容姿はラフなパーカーにダボついたジーンズに金髪でピアスマ
で開けていたが

慣れた手つきで僕たちの前にお茶を置くと、気さくに笑ってから部
屋を出て行った。

「・・・あいつはまあ容姿はともかく、家事全般は中々優秀なんだ・
・まあ

容姿はともかくな・・・」

「よく、人は見かけによらないっていうけど」

「まさにそれですね」

セシリーも、この雰囲気気に気を許したようで兎東に向かって微笑ん
だ。

「・・・でだ。」

まさか彼も、わざわざ家庭的なチャラ男がいる事を

僕たちに見せるためにここへ連れてきたんじゃないだろう。

それにつれてくる時？ES学園？について聞いてたしね。

「さて・・・それで僕たちに一体何の用なんだい？」

「ああ、そうだな。ちよつと待つてくれ」

兎東は立ちあがると、出入り口付近にいたチャラ男達に声をかける。
そして二言三言話してしばらくすると、やけに裾の長いタンクトッ

ブを

一枚羽織って腰回りには黒いポーチを巻き、

そしてやや大きめの靴を履き茶色い髪をえんじ色バンドで束ねた少女が入ってきた。

目はやる気なく半眼で、なぜか口には金太郎飴をくわえている。

「ん〜・・・兄貴〜この人たちがそう?」

「ああ、そうだ。紹介するよコイツは千葉ちば 志穂音ね

ここで、情報処理を担当してるんだ。俺達の仕事やなんかもこいつが見つけてくる事が多いんだよ」

志穂音ちゃんね。

・・・って仕事?

「ねえ、ちよつと気になったんだけどさ仕事ってなにやってるの?」

「そう言えば言っただけな、俺たちはここら近辺の自警団なんだよ」

「自警団?」

「そう、自警団。周辺地域をパトロールする代わりにここを使わせてもらってるんだ。

ほらさつきあつた警察官いだら。

あの人の知り合いがこの変電所の職員と知り合いでな」
なるほど。

ギブアンドテイクってわけね。

兎束たちがこの辺りを自警団として見回る代わりにここを貸してもらっていると言うわけか。

「丁度さ、その時変電所周辺でたむろする不良どもに頭を悩ませてたらしめて。

それを追っ払う代わりに、ここを貸してくれて頼みこんだんだよ
そしたら、思いのほか評判になっちゃってさ。

これからも続けてくれるなら、長期間貸してくれるって話になったんだ」

「あの・・・兎束さん、あなた家は・・・」

セシリーの質問に一瞬顔を曇らせる兎束。

それをチラッと見ていた志穂音が、代わりにそっけなく答えた。

「ないよ、兄貴もウチも・・・ここに居るやつらぜーいん。」

「家も親もなーんもなし」

「え、それって・・・」

「まあ、俺たちは孤児だからな」

「あ・・・すみません」

セシリーと僕はうつむくが、兎束は僕らの沈みかけた空気を笑い飛ばした。

「ハハハツ、そんなに沈むもんかね。俺たちはこれが普通だし、

それはこれからも変わらないし・・・ま、下手に同情されるのは好きじゃないし

そんなの望んでもいない。それより今は、お前らを呼んだ理由を話さないとな」

「まあ、兄貴らしいね・・・えーっと所で兄貴」

「あん？」

「この人たちの名前は？」

そこでようやく僕たちは、自己紹介をしていない事に気がつく。もちろん兎束も。

「・・・あ」

「やっぱ、兄貴らしいわ」

僕たちはその後、かなり遅めの自己紹介を行った。

「アルディと・・・」

僕はかたずをのんで見守る。

「ピクロスだっけか？」

「違うよ兄貴・・・セロリだよね？」

もう定番化しつつあるけど・・・。

「ううう・・・アセロラと言われたりピクロスとかもう・・・アル・

私もうつかれましたわ・・・」

「ああ・・・セシリーほら・・・飴ちゃんあげるから・・・」

「私は子供ではありませんわ!」

と言いつつ・・・あ、食べるんだ。

セシリーは飴を口の中で転がしながら、二人に向き直ると

兎束と志穂音も悪い悪いと、頭をかいた。

「それで、そろそろ本題をお願いしたいんだけど・・・」

「・・・そうだな、千葉アレは持ってきたか?」

兎束は志穂音に耳打ちすると、志穂音はポーチから数枚の紙の束を取り出して

机の上に広げた。

それを覗き込むと、どうやらその紙は何かの設計図のようだった。

「これは・・・」

「数週間前、?きたるべき時に備えよ?って手紙と一緒にこの封筒に入れて送られてきたんだ」

僕はその封筒を受け取る。

差出人は・・・無しか。

切手も何もないことから、直接ここへ届けられたものだろう。

僕が封筒を調べている間セシリーは志穂音と一緒に設計図を手に談議をかわしていた。

「ふむ・・・これ・・・スナイパーライフルか何かでしょうか?」

「そうなんだよ、それ一見するとスナイパーライフルなんだけど・・・」

「その割には、スコープもありませんし・・・」

「でもこれだけ長砲身となると用途はやっぱり、狙撃でしょ?」

あっちもあっちで頭を悩ませているようだった。

ふむ・・・。

そもそも、誰が何の目的でこんなのを送ってきたのだろうか。

しかもだ。

僕もセシリーもあの設計図を一目見ただけで分かった。いやISと言う物に触れていなくても一目で分かる。

あの設計図の武装は明らかに人が扱うには大きすぎる。

つまりアレはIS用の武装と言う事になるわけだが。

それだと余計に不自然だ。

どうしてそんなものを、ISとほとんど関係のないこの場所へ届けたのか。

その理由が皆目見当がつかなかった。

「それで・・・その、これは作ってみたの？」

「アル、流石に無理ですわよ。ここじゃ設備も・・・」

「うん、作ってみたよ」

「「え!?!」」

セシリーが何を馬鹿な事をと笑い飛ばそうとするが、志穂音がまるでプラモデルを作ったみたいに軽く頷き、僕たちは目を丸くした。

「こ、ここでこれを作れたのですか!?!」

「まあ、完成してないんだけどね」

「それはどういう意味だい？」

「一応データとしてはね組み上がってるんだけど、ユーザー登録とかのソフト面もそうだし弾丸とかのハード面もまだ全然」

志穂音は、口にくわえていた金太郎飴をパキンと折って噛み砕く。

それに冷静に兎束が「飴は噛むもんじゃない」と突っ込みをいれている。

だがそんなのほんとした二人とは対照的に僕たちはさっきの志穂音が言った事を良く理解出来ずにいた。

組み上がってるって・・・。

ちよつと待つてよ。

ISの武装ってそんな簡単にできるものなのか？

だったら、国が莫大な予算を傾けて、または企業が大規模な工場を

持って

日夜研究しているのは何なんだろうか。

言っちゃ悪いが、ここはただのプレハブ小屋でISという物を研究できるような

開発できるような機材が揃っている様には見えないし。

・・・そんなところで・・・一体どうやって。

僕は彼女に怪訝なまなざしを送ると志穂音はムツとした顔をする。

「あー、信じてないんだー」

「だって、いくらなんでもこんなところで・・・」

「いーよじゃあ、証拠見せてあげるから！」

志穂音は勢いよく立ちあがると、僕たちをへやから連れだしどんどんと小屋の奥へ進んでいく。

「お、おい志穂音・・・良いのか？」

「だって、しょうがないでしょ。信じてないみたいなんだから・・・」

百聞は一見にしかず。見せた方が早いよ」

二人は声をひそめて、言葉を交わしながら僕たちを、

小屋の一角にあった階段の前まで僕らを案内した。

「ここを降りるんですの？」

「そうだよ、まあウチに合わせて掘ったから少し身長高いときついかもね」

確かにその階段は小柄な志穂音が丁度入れるサイズぐらいのサイズで僕もそれなりに低いけど、それでも身をかかめないと頭を打ってしまいそうだ。

身をかかめて階段を降りる事十数段。

そこは蛍光灯ではなく、上から配線やソケットがむき出しの電球が数個ぶら下がっているだけで

隅っこの方は薄暗いが、中はかなり蒸し暑かった。

シャツの首元をパタパタさせている僕を見て志穂音が、

金太郎飴をかじりながらこちらを振り返った。

「ごめんね、ここ電球むき出しでそれだけでも暑いのに

更にそこにサーバーとかPC繋いで動かしつつ破だから余計に暑いんだ」

「だから、そんなに薄着なのか・・・」

「まあね、さつき君たちに会うために上行ったらスースーしてかなわなかったよ」

「スースーってあなた・・・。もう少し女性なのですから・・・」

とセシリーが注意しようとして口を開いた傍から、志穂音はタンクトップの裾で自分を仰ぐ。

ハラリハラリと、裾が舞うたびにその奥の黒い布地が見え隠れして・・・。

鳥越先輩の時もそうだったけど、僕の周りって言うのは

どうも、僕を男と思っていないのかそれとも女性としての自覚が足りないのか　　って!?!?

ドゴンツ!!!

「アル?・・・何を見てますの?　事と次第によっては・・・ね?」

も、もう殴ったあとで・・・アレは・・・不可抗力・・・。

僕がうずくまりながら見たセシリーの顔には少なくとも三本は血管が浮いていたと思う。

「そ、それでこれが・・・さっきの・・・」
僕は気を取り直して(っっていうかなんで僕が・・・)志穂音が操作する

PCの画面を覗き込んでいた。

そこには確かに、データ上組み上がって量子化されたデータが表示されている。

「ですけど、おっしやられた通りパラメータが滅茶苦茶ですわねえ・・・。

実弾兵器ですから、出力調整はできませんけれど、所々にまだ無駄な情報があり過ぎて」

「それでも、結構減らした方なんだよ。ここでこう言う事出来るのって

ウチが兄貴ぐらいしかいないし・・・」

彼も出来るんだ。

それは意外だなあ・・・。

ISってその特性上どうして技術者の多くは女性だし。

「ま、その俺もここに籠ってもいられんしな。今日みたいにああいう事件も起きるし」

「けっつきよくウチがほとんど一人で組み上げたようなもんだしねえ・・・。

丸二日かかっちゃったよ・・・」

いや、これをしかも一人で二日で完成させた君は凄い・・・いやむしろ天才じゃないのかなこの子。

・・・と、ここまで話を聞いてまた一つ疑問が生まれる。

結局僕たちは何のために呼ばれたんだろうと言う事だ。

確かにここに、この武装の設計図が送られてきたと言う事は疑問だが、

既に武装もあらかじめ完成しているし、別に他にこれと言った問題は無いように思えるんだけど・・・。

「ねえ、僕たちは結局なんで呼ばれたのかな・・・？」

「あれ、兄貴話してないの？」

「え、そうだったか？」

「・・・兄貴・・・」

兎束はすまんと頭をかくと、それを志穂音がジト目で睨みながら僕たちに向かつて説明を始めた。

「ええとね、実はIS関係の誰かを連れてきてって頼んだのはウチなんだ」

「IS関係の誰かって・・・つまた大雑把ですわね・・・」

「ああいや、この近くにIS学園ってあるし結構簡単に見つかるかなあ〜なんて思ってたんだけど・・・」

「まさかそんな偶然に、僕たちが出くわすとは」

自分って今まで変な事に首を突っ込むタイプだと思っていたけど、ひよっとしたら巻き込まれる体質もあるのだろうか。

それに今回はセシリーが初めに兎東に出会ったのだから、

その効果範囲は周囲にも影響を与えるようだ。

だとするとそれは困るな・・・。

そのうち、動く迷惑発生機みたいなレツテルを貼られそうだな。

「で、IS関係者ならこの武装を展開できるんじゃないかと思っ
ね」

「それはつまり・・・」

「そう、これを使える状態にしておきたいんだよ。

せつかく作つたんだからさ。それに？きたるべき時に？っていうのもあつたし」

なるほどね・・・。

なんとなくだけど分かったぞ。

使える状態にしたいと言う事はつまり

備えもそうだけど、この子この武装の試射データが欲しいんだろう。

これを自力で組み上げられるだけの技術がある子だ。

データとちよつとのノウハウさえあれば、後は自分で構築できる。

要は僕たちキツカケ作りと呼ばれたんだな・・・。

「う〜ん・・・ちよつと、でも難しいかなあ」

「なんでだ？」

「私たちはIS学園などの指定区域内でのみISを自由に展開できますが、

学園外では国際条例にも抵触しますし・・・」

何よりこんなところで、展開なんてさせた日には国際法うんぬんの前に僕は織斑先生や

姉さんに殺されかねない。

どっちかと言えば、国際法で裁かれることよりそっちの方が僕には怖かった。

だってねえ、どうあがいても実刑は待逃れないわけだし。

「まあ、そんなことぐらいは知ってたけどね」

志穂音は残念なそぶりすら見せずに、新しい金太郎飴をくわえるとPCを操作して

データをメモリーカードへ落とす。

そしてそれを、僕に手渡した。

「だったら、持って帰って調べといてよ」

「はあ!？」

いやいや、さつき?きたるべき時に?って言ったばっかじゃない。

それをなんで渡しちゃうわけ!?

志穂音はポキポキと金太郎飴を器用にかじりながら、あっけらかんと言つ。

「いや、もう大体手順は分かったし・・・やれば徹夜で出来なくもないから」

「だけど・・・」

「それに、もう一回作るなら色々情報があった方が良いでしょう」

それは確かにそうだけれど・・・。

あ、でも。

「それじゃあ、そのきたるべき時って言うのは。それが急に來たらどうするの?」

「いや、急には來ないでしょ。きたるべき時について言うんだから・・・」

「凄判断基準だなあ・・・それ。」

「それにさ、きたるべき時が急に來るって言うなら、

なおさら早く調整してもらわないと。違う?」

「う、うん・・・まあそれは」

「だったらそう言うことじゃん」

「そうですわね?」

あれ、なんか上手く丸め込まれたような……。
僕たちはそのまま流されるような形で兎束と志穂音に、メモリーカードを押しつけられた。
ああ、あと金太郎飴も。
中々アレは美味しかったね。

そろそろ日も落ちかけてきて、僕たちはプレハブ小屋を後にしようとしていた。

「今日は悪かったな、でも色々聞けたし何よりそのメモリーカードを渡せてよかった」

「渡されたって言うには結構強引な気もするけど……」

「というか、強引以外の何物でもありませんわ」

セシリーは少々ご立腹な様子で腕を組んでつんと顔をそむけている。僕はセシリーをなだめつつ、兎束に言葉を返した。

「と、とにかく、あのデータは一度学園に戻ったら聞いておくよ」

「ああ、迷惑かけるが……すまん」

と、兎束が頭を下げて、いざきびすを返そうかという時だった。

ズズンッ!!

「……!?!?」「」

その場にいた誰もが、目を丸くする。

今のは……!

「衝撃音だな、一体何だ!」

兎束がガラツと入口の扉を開けて外に出ると、ボロボロで所々に出血もみられる

チャラ男が兎束に倒れ込むように抱きついた。

「あ、兄貴……ッ!」

「何だ、どうした」

「わかんねえけど・・・急に壁が崩れてがれきが上から・・・」
崩れた？吹き飛んだじゃなくて？

ただ崩れただけなら、あんな衝撃音は・・・。
それにさっきのは、音と同時ぐらいに地面が揺れた。

とすれば、壁は爆発的事象で破壊された可能性が高い。

爆発的事象にまでは流石の変電所のコンクリートウォールも想定外
だろうから

崩れても仕方ないが、それでもあの音でただ崩れただけと言うのが
気にかかる。

威力を調整したのか？

僕は怪我をしたチャラ男に尋ねる。

「ねえ、その崩れた壁の反対側って何があるの？」

「何がって・・・えーつとあっちは・・・ああそつだ車のよく通る大
通りがあるな

人通りもこの時間だと結構・・・」

ふむ・・・だとすると爆弾とか事前に火薬の量を調節できるものが
使われたという可能性も低くなる。

そんなものを壁にしかけていたら目立ってしょうがないし。
でもだつたら・・・。

僕が頭を悩ませている間に兎束はチャラ男をプレハブ小屋の奥へ寝
かせ

こちらへ戻ってくる。

「どうだつた？ 何か他に聞けたかい？」

「いや、聞くに聞けなかつたさ・・・流石にあれだけボロボロだと・・・
な」

結局何も聞き出せなかつたか・・・。

まあ、仕方が無いね。

「それにしても・・・一体何があったのでしょうか。自然に吹き飛
ぶはずありませんし」

「そつだね・・・」

爆弾の線が消え、いよいよ僕の頭の中に考えたくない可能性が浮上する。

威力を瞬時に調整できて、尚且つ頑丈なコンクリートを簡単に破壊できる。

「・・・セシリー」

「ええ、私も今丁度、同じ事を考えておりましたわ」

もしもこの考えが当たっていたら、事態は急を要する。

ここには兎束をはじめとして十数人の一般人。

更に真横に変電所まであるのだ。

・・・頼む・・・当たらないでくれ・・・。

僕はそう願いながら、グツと拳を握りしめる。

だが、そう願う僕らをあざ笑うかのように、

ゆっくりと世界最強の兵器？三機？が目の前に現れた。

あーもう・・・どこ行っちゃったのかしらあゝ・・・

確か、？レゾナンス？を出たところまでは覚えているんだけど・・・

ローラはアルデイを探して、街中をウロウロと徘徊していた。

・・・否。

「って言うかここどこよ！！」
迷っていた。

はあ・・・やっぱり千冬と分かれたのは失敗だったわねえ。

ローラは日本に来てまだ一週間もたっていない。

ましてや街中に出るのは初めてだ。

いくら案内板があるとは言っても、そのほとんどが日本語でローマ字でのルビなんてふっていない。

ローラは再び、大きくため息をつくと近くのベンチに腰を下ろす。日はまあだ落ちておらず、人々が目の前を行きかう。

その誰もがチラチラとローラを見て行った。整った容姿に加えてプロポーシヨンもよく、更に綺麗な金髪をなびかせているのだから

嫌でも注目を浴びてしまう。

だが見られる方は、それほど気分が良いものでもない。

ローラは少しジト目で返してやろうかとも思ったが、ふとどこからか数人の女子の声が聞こえた。

「ねえねえ、あの人どこかで見たことない？」

「えー、あの女の人？」

「そうそう、どっかで見たことあるんだよねえ」

「……あ、思い出した！ あの人モンド・グロツソで……」
あら、あたしの事知ってる日本人もいるのね。

まあ見られてると言っても、別に悪い意味で注目されてるわけじゃないし……。

と、微笑みかけて……

「織斑千冬にフルボッコにされたアメリカ人！」

「誰がフルボッコですってえええツ！！！！」

ローラは思わず声のする方向へ、周囲の目も気にせず叫んでいた。

まあ負けたのは事実だからいいとして、フルボッコでは自分が千冬に圧倒されたかのような言い方ではないか！

怒りの矛先を向けられた女子数名はビクツと身体が跳ねる。

ローラは、ゆっくりとその数名に近づいていきそれはそれは綺麗な、それでいて身の毛もよだつほどの笑みで語りかけた。

「ねえ……誰がフルボッコにされたの、ん、ん？ ねえ……誰が誰にフルボッコされたの？」

「あ、いや……だから……アメリカ人……が」

「だあれ？」

「その……」

はたから見れば、怪しい女性が女子達に詰めよっている、下手すれば警察を呼ばれかねない構図だ。

だが周囲のだれもがそれをしない・・・いや出来なかった。

・・・主にローラの出すオーラによって・・・。

「お姉さん少し話があるの・・・こっちへ来なさい・・・」
反対すれば殺される・・・。

そう女子達も思ったのだろう。

ローラに言われるがまま物陰に入っていく。

その後しばらくして、その物陰から見つかった少女たちはひたすら

「僅差僅差僅差僅差・・・」

と繰り返していたらしい。

事の顛末を知るとある通りがかりの男性は、こう思ったそうだ。

「負けた事や名前が出てこなかった事はいいんだ・・・」

ふうッ、全く最近の子は失礼ね！

にしても怒りにまかせて歩いてきちゃったけど・・・

いよいよ？レゾナンス？まで見えなくなっちゃったわ。

ローラは夕暮れに照らされる大通りを一人歩く。

この道は、大通りと言う事もあって交通量も多く人の往来も多い。

さてさて・・・どうしましょうね。

携帯で千冬に電話・・・しても無駄か。

場所が分からないんじゃないやどうしようもないわね。

ローラは一度開いた携帯電話を閉じようとして・・・やめた。

ジッと携帯電話の待ち受け画面を見やるローラ。

そこには、楽しげに笑う自分と弟の姿。

・・・。

ローラは近くのコンクリート製の壁に寄りかかる。

世話がかかるが、それがまた可愛い自分の弟。

自分で言うのも何だが、ローラにとってアルディは自慢の弟である。だからこそ……。

だからこそ。

負けてほしくない

ローラはそう思っています。

何に負けてほしくないかは言うまでもなく千冬の弟、織斑 一夏だ。と言っても別に、自分たちみたいに戦って白黒つけると言うわけではない。

精神的に、人間としてである。

もちろん技術的にも少しぐらい対抗してほしいところではあったが。今は何もかもが、アルディは負けている。

多分、今IS学園に在籍する一年生の専用機持ちの中でも一番底辺だろう。

そこから這い上がって、頂点をとるっていうのも中々ドラマチックよねえ。

だがそうなるには、まだまだアルディにはクリアしなければならぬ問題が山積みである。

特に、今日ローラがアルディに言った事はかなり重要なウェイトを占める。

……気づいてくれるかしらね。

いや……気が付いてもらわなければ困る。

それに気が付かなければ、アルディは小さな殻でまとまってしまいかねない。

世界第二位の弟なんだから……。

まあ世界第二位とまでは言わないが、せめてIS学園二位ぐらいまでには

なってもらいたいものだと思う。

ってそれじゃ、結局負けてるじゃないね。

ローラはフツと笑って、オレンジ色の空を見上げる。

綺麗な色ね……。

これで夕日でも見えたら・・・ッ!?

不意にローラは、バチバチと何かが放電しているような音を聞く。その音を聞いてローラは何かに気が付くとバツと弾かれたように壁から離れ声を張り上げた。

「みんな、壁から離れて!!!」

次の瞬間、ローラが寄りかかっていた高いコンクリートウォールが衝撃音と共に激しく崩落する。

崩落したがれきはそのほとんどが壁の内側へ飛ばされたが、一部のがれきは崩れた衝撃で

こちら側にも凶器となって降り注いだ。

ローラはかるうじてその餌食にならずに済んだが、ふと振り返った先に逃げ遅れた子供の姿があった。

こりゃ、あたし国際法廷に出廷かもね・・・。

ローラは心の中でごちると、?ストライク・ミラージュ?を起動しほぼ展開と同時にリアスラスターを全開で噴かす。

そしてがれきの落ちる前に子供を救いあげると、瞬時にISを待機状態に戻して

背中側から地面に着地した。

「ぐうっ!」

スピードに優れる、?ストライク・ミラージュ?なだけに子供を助けるのには

充分な速さを確保できたが着地するには速すぎたようで、ローラは激しく地面にたたきつけられた。

それでも子供はしっかりと抱え込んでいたおかげで、怪我ひとつなかった。

ローラは子供を離して、痛む身体でよろよろと立ち上がる。

「つたく、こんなところで?荷電粒子砲?ぶっ放すのはどこの馬鹿よ!?

ローラは、キツと攻撃のあった方面を睨む。

そこには、夕日を背に二機のISが慄然と佇んでいた。

第28話：Side Strike く少女は金太郎飴と共に、襲撃は轟音と井

さて一旦ここでSideStrikeは終了です。

この次はまた時間を戻して、今度は聡也とロツソのお話。

色々すっちゃんかめっちゃんかで、タイトルもつけにくいほどの散文とは呆れましたw

そんな感じで。

では次回Side Owlでお会いしましょう。

さよならッ！

第29話：Side Owl（商店街は思惑だらけ？）

僕は腕を組んでトントンと鳴らす。

チラツと腕時計を見やると、既に時刻は十時を回ろうとしていた。ほんとに・・・一体いつまで待たせるつもりでしょうか・・・。

僕が今いる場所は、IS学園の寮のロビー。

もうすでに一時間近くこうしてある人物を待っている。

ちなみに今日の僕の服装は制服ではなく、胸の右側に青のストライプが入った白いTシャツに

ジーパンを履き、靴も外用に買った某有名メーカーのスニーカーだ。どうしてそんな恰好で待っているかと言うと・・・。

それは僕が鳥越先輩に呼び出されたあの日までさかのぼる。

あの時、ロツソは僕に用事があると言って話が終わってから僕を寮のラウンジまで連れて行った。

そこで・・・。

ロツソは少しモジモジとしながら、何かを言いかけては辞めを何度も繰り返して、

そして何か、意を決したかのようにうなずくと、僕に向かっていつもより

少し大きな声で口を開いた。

「・・・か、買い物・・・に付き合って・・・ほしい」

「え、買い物ですか？」

「・・・・・・・・うん・・・」

「ええと、何を買うんです？」

「臨海学校の準備と・・・・・・・・あと色々・・・・・・・・」

そう言えば、もうすぐ臨海学校だったな、すっかり忘れていましたよ……。

でも、色々って……気になりますね。

「でも、臨海学校の準備なら僕がいらないほうが買いやすいんじゃないんですかね？」

「……?」

「い、いやですから……ねえ？」

「……よく言いたい意味が分からない……」
小首をかしげるロツソに僕は少し言葉を詰まらせながら言う。

「だから……ええと……み、水着とかそういうのは、僕がいらないほうが買いやすいんじゃないですかっことで……。ほ、ほら僕男ですし……」

「……そんなこと。それは大丈夫」

「へ? だ、大丈夫？」

僕はてつきり、臨海学校の準備って言ったから、水着とかを買うものだとばかり思っていたけど違ったんでしょか。

「……聡也に選んでもらうから」

「どうして大丈夫って言葉を使ったのか、日本人として小一時間問い詰めたいところですね!!」

「……とこんな感じで、日曜日の今日、僕はロツソと買い物に行くことになったわけで。」

若干押し切られた感是否めなかったけど、約束したときロツソは嬉しそうに笑っていたから

まあ、嫌な気はしなかったけど。

……けれど。

……にしても、ちょっと遅すぎやしませんかね。

ロツソさんよ?

「ねーロツソ、あんた今日？彼？と買い物に行くんじゃないの？」
ロツソはルームメイトの女子にそんな言葉を投げかけられる。

しかしそんな言葉をかけられてもロツソは慌てることなく、鞆に荷物を詰め込んでいる。

服装こそ、少し胸元の開いたシャツの上イメージカラーでもある赤色の上に着を羽織って

それにジーンズを合わせた比較的動きやすい服装と、迷うことなくそこそそ早く決まったのだが

その前後が遅かった。

内訳を書くなら、起きて洗顔、髪の設定に四十分、服選び五分、鞆への荷物の詰め込み二十分。

これだけですするのになんと一時間以上かかっているのだ。
いくら、遅くても三十分あればできそうなことである。

「ロツソ、もう十時だよ？ 確か集合時間って・・・」

「うん・・・九時ぐらいだったと思う」

「く、九時！？ もう一時間経つちゃうじゃん！ 急がなくていいの！？」

ロツソはどうしてルームメイトがそんなに焦っているのかわからず首をかしげる。

「・・・どうして？」

「どうして・・・って、だって集合時間が」

「こんなの、遅刻に入らない・・・」

ボソツと言ったロツソの一言はルームメイトの女子が頭を抱えるには十分な内容だった。

そのルームメイトも、それなりに欧州人の時間感覚の疎さは聞き及んでいたが

目の前でそれをさらっと言われてしまうと、愕然とするほかない。

大きくため息をついてルームメイトはポンツとロツソの肩に手を置く。

そして大きく息を吸い込み叫んだ。

「とつとと行けええっ!!!!」

ルームメイトは、？イグニッション・ブースト？も真つ青な速さでドアを開けるとポイツと

ロツソを廊下に放り出した。

「あ……」

「いい、あんたねそんなんじや愛想つかされるよ!」

ルームメイトはそう言い残して部屋のドアをパンツと締めた。

ロツソは、ゆっくりと立ち上がるとボソツとつぶやく。

「……愛想つかされる……」

確かそれは嫌われるとかそういう意味だった気がする。

「……それは、イヤ……うん、頑張る」

ロツソは、自分に言い聞かせるようにつぶやくとロビーへと急いだ。

うん、遅い……。

って言うか、忘れてるなんて事は……ありませんよね……？
だとしたら僕のこの一時間は……。

僕がうなだれていると、ロビーに誰かの足音が響く。
はぁ……ようやく来たようですね。

僕はその足音の方へ顔を向け声をかけた。

「ロツソ、何分遅刻」

「聡也、一夏見なかった!？」

「うえッ!？」

いきなり胸倉を掴まれる。

ちよちよと、なんで僕が怒られなきゃいけないんですか！？
また何か、僕癪に障るような………つて。

「鈴？」

「他に誰が居んのよ！！ で一夏見なかった!？」

「い、一夏？」

どうやら鈴は、一夏を探しているらしい。

しかもかなり血相を変えて。

そこへ同じく血相を変えて飛んでくる人物が一名。

「おい、聡也一夏を見なかった……む、鈴？」

「箒、あんたも一夏を？」

「うむ、一夏が見知らぬ女と歩いていると聞いてな、所在を探しているのだが見つからん」

箒は鼻をフンと鳴らして、全くどこに居るのだと腕を組む。

しかし鈴は、箒の発言に首をかしげた。

「あれ、あたしは一夏が見知らぬ女性とご飯食べてるって聞いて飛んできたんだけど……」

「何？ 御飯だと？」

「ええ、シャルロットから言われてね」

箒がピクリと反応する。

「お前もシャルロットから聞いたのか？」

「え、つてことはあんたも？」

「ああ、つい二十分ほど前にな」

「あたしも二十分ぐらい前よ聞いたの」

そこまで言つて二人の顔が、青ざめた。

そして徐々にそれが怒りの炎で真っ赤に染まっていく。

「ねえ、箒……あたしたちさあ……」

「ああ、そのようだな……ふ、ふふふ……シャルロットめ……
ふふふふ……」

鈴の拳はわなわなと震え、額には既におびただしい数の血管が浮き出ている。

幕に至つては、既に怒りの炎という表現など生ぬるい、たとえるなら……そうですね。

……マグマ！ そう怒りのボルケーノ状態！
うわぁ……話しかけたらとぼっちり食いそうですね……。
静観するのが正解なんですよけど……、実は僕一夏がどこへい言ったのか知ってるんですよ……。

ロツソを待っている時に目の前を通って行きましたから。
さて……言うべきかわざるべきか……。
と、うーんと考えたのが行けなかつたようだ。

気が付けば、目の前の二頭の獐猛な獣は僕の喉元に、鋭い爪を突き付けていた。

「ふーふーッ！！ あんた何か知ってるわね！！」

「吐け！！ 吐かぬならその首はねて、はらわたえぐり出してくれる！！」

なんで、寮にいて命の心配をしなくちゃならないんですか！？
二人に圧倒されて、上手く言葉が出てこないが、

このままだんまりは更に不味い事態を引き起こしかねない。

それだけは何としても避けたかつた僕は、半ば叫ぶように言い放つた。

「さ、さつき、目の前を手つないで一夏とシャルロットが歩いていました！」

「ほう……」

「やっぱりね……」

二人は僕から離れると、ゆらりゆらりとまるで抜け殻のように寮の奥へと歩いていく。

「シャルロット……オボエテオキナサイヨ……」

「ふ、ふふふ……ヒサシブリニ……チガミレルナア……」

あの二人……何かに取りつかれてるんじゃないだろうか。

僕はその後ろ姿を見てそう思わずには居られなかった。

「ん どうかしたのか？」

そこへ今度はなぜだか白装束に身を包んだラウラがやってきた。

「……今度は何……？」

「今から、水行と言う修行をするのだが一緒にどうだ？」

「……水行……？」

「ちなみに場所は、噴水だぞ」

もう……いやだ。

ロツソがロビーに来た時には聡也は、まだ買い物前だと言うのに疲れ切っていたと言う。

気を取り直して、僕たちはモノレールで駅前まで出る。

駅前には？レゾナンス？という大きなショッピングモールがあるのだが、

やっぱり皆考える事は同じなようで、IS学園の見覚えある顔が結構歩いていた。

「……皆……いるね」

「まあ、仕方ないですよ。こちらへんじゃ一番大きなショッピングモールですからね。」

で、えーっとどこから回りましょうか……」

僕が？レゾナンス？に入ろうと足を踏み出すと、クイツと手を引つ張られる。

「……そつちじゃない」

「え？ 買い物つてここでするんじゃないんですか？」

ロツソは僕の手を引つ張つたまま首を横に振つた。

そして？レゾナンス？とは真逆の方向へ歩き出した。

確か、ロツソが向かっている先には商店街があったはずだ。

商店街に行きたかったのかな……？

ロッソは、商店街の入り口までやってくるとピタッと立ち止まる。そして商店街をじっと物珍しそうに見ていた。

「ロッソ、ひよっとして商店街初めてですか？」

「……うん。この前雑誌で見て……行ってみたくなかったへえ……。まあ僕もこの街の商店街は初めてと言えば初めてだけだ。」

にしても、商店街と言う物はどこに行ってもあまり変わらない。もちろん良い意味でだ。

活気にあふれているからね。

僕たちはゆっくりと歩きながら、左右の店に並ぶ商品を見て回る。するとある店の前で元気のいいおじさんに声をかけられた。

おじさんは段ボールから、野菜を取り出して陳列している最中だった。

「ここは……八百屋か。」

「お、兄ちゃんデートかい？」

「え、いやいや違いますよ……そんなんじゃありませんって」

「ハツハツハ、まあ正直には言えねえわな」

全く、デートって……

そんなんじゃないのに、ねえ。

僕が同意を求めてロッソを振り返ると少し顔が赤らんでいる気がした。

「ん？ どうかしました？」

「……別に何でもない」

「兄ちゃん鈍感なのは嫌われるぜえ？」

「……余計なお世話……」

ロッソが若干不満げに言い返す。

「って言うか、鈍感？」

僕が？

鈍感なのは僕よりも一夏やアルディだと思っけどなあ。

ゴリユツ!!

「痛ったあ!!」

なぜかロツソに右足を踏みぬかれた。

「ハツハツハ、仲が良いねえ」

仲が良いと足を踏みぬかれるのか……。

覚えておこう。

「ま、とりあえずこれでも食べて仲直り!」

とおじさんは僕たちの前に、みずみずしくハリのあるミニトマトを差し出した。

「……別に喧嘩したわけじゃないけど……」

「まあ、確かに……。あ、でもいいんですかお金……」

「あーあー、いらねえよそんなん。ほら良いから気にせず食ってみろって」

そ、それじゃあ。お言葉に甘えて。

僕はミニトマトを、へタを残して一口で口の中に放り込む。

ロツソは、少しかじって味い、また少しかじって味わう。

……う、なんか可愛い。

思わず見惚れてしまったが、不意に目があつてとっさに視線をそらし結構強引ではあったがトマトの感想を述べた。

「こ、これ甘くておいしいですねえ〜!」

「つたりまえよ、うちには新鮮なものしか置いてねえからな。

自信のねえもんを、押し付けたりはしねえぜ、姉ちゃんはどうだ?」

「……美味しい。イタリアントマトよりは甘くないけど……」

「ハツハツハ、イタリアントマトは糖度が八以上もあるからなあ。

こころへんで手に入るのつていやあせいぜい糖度は六かそこらだからなあ。

まあそれでも、甘い部類なんだぜ?

塩トマトと夏になると普通に糖度十一とかそれ以上のもあるぐらい

だから」

「ロツソって、トマトは好きなの?」

ロツソは、ようやくミニトマトを食べ終えてポケットティッシュで手を拭きながら頷いた。

「・・・イタリアでは料理にトマトをよく使うから・・・」

「ほお、姉ちゃん日本人じゃないとは思ってたけどイタリア人だったのか。」

国際恋愛だねえコノコノ」

どうやらこのおじさんは、どうしても僕たちの買い物をデートにしたいようだ。

更に言うと、このおじさん。

面倒な事に年甲斐もなく茶目つけがある。

商売上は、いい性格なんだろうけどこの状況下では僕にとっては若干面倒だった。

僕は、これ以上変な事を言い出される前に、足早にその八百屋を後にした。

「ふう〜。変な事言うおじさんでしたね・・・」

「・・・変な事?」

「いや、だから僕たちの買い物をデートだとか言ってみたり・・・」

ロツソも迷惑ですよね」

「・・・あ・・・」

ロツソは何かを言いかけて、中断すると少し表情を曇らせた。

「あの、ロツソ?」

「・・・な、何でもない・・・大丈夫」

「そうですか?・・・ならいいですけど・・・」

その割には、どこかさみしそうな顔をしているけれど。

僕がもう一度声をかけようとする、ロツソは今度は笑って大丈夫
と言い、

一人先へ歩いていった。

・・・よくわからないけれど・・・まあ大丈夫でしょうね。本人もああいつてるし。

僕はその背中を追って商店街を更に奥へと進んでいった。

・・・やっぱり聡也は私と何かじゃつまらないのかな。

ロツソは歩きながらそんな事を思う。

そりゃ確かに、いきなり見知らぬ人間にデートかいと言われて頷けるわけがないが、

それでもあんなにあっさりとは否定しなくても思ってしまう。

・・・いや、まだ大丈夫だ。

まだまだ始まったばかり。

こんなところでめげてなどいられるものか。

ロツソは一度深く頷くと？デート？成功に向けて気持ちを切り替えるのだった。

きつと大丈夫、上手くいく。

この時はまだ、そう思っていた。

僕はロツソの横に並ぶと、ふと気になった事を尋ねた。

「日本の商店街はどうです？」

やっぱり、こう日本と海外じゃ商店街も色々違いそうですね。ロツソは少し考えてから、顔をこちらに向けた。

「・・・私はイタリアしか知らないけど、雰囲気は似てる。

「・・・ただ私が住んでた所はこんなアーケードじゃなかったけど・・・」

「へえ・・・。日本は基本こう言うアーケードがありますからね。全天候型というか・・・イタリアは違うんですか？」

「・・・私の住んでた地域は、みんなテントを張って、時間を区切ってたから・・・」

なるほど・・・。

時間を区切ってたねえ。

という事は、朝市の様なかんじなのかな。

「・・・それに・・・下も石畳でこんな区画整理も、舗装もしてない」

「なんとなく想像はできますよ。アツピア街道見たいな感じでしょうか」

「・・・アレよりは、まあ平らだけれど・・・そんな感じ。」

あと、陳列方法も

それからしばらくロッソはイタリアの市場や自分の住んでいた地域の事を色々と話してくれた。

その顔はどこか楽しそうで、懐かしそうで。

やっぱり母国を離れて、たった一人で他の国へ行くってことはいくら学園に友人がいると言っても

寂しいものなんだろうな。

まあ、僕は日本で生まれましたし地元も

・・・あ

れ？

地元も・・・。

あれれ、おかしいな。

思い出せない・・・。

そんな、確かに住んでた家は鮮明に思い出せるのに。

どこで生まれて育ってって言う情報だけが、上手く思い出せなかった。

ま、まあ両親と死別してからしばらく潜水艦ですつと行ったり来た

りしてたし、

忘れてしまっただけでしょ。．．そう、忘れて．．。

「．．．．聡也、どうかしたの？」

「え!？」

気が付くとロツソが不安そうな顔で僕を覗き込んでいた。

ああ、しまった。

まったく、楽しい買い物雰囲気なぶち壊してどうするんだ僕は!

僕は、パンツと一回自分の顔を叩くとロツソに笑いかけた。

「い、いえ、なんでもありませんよ。ちよつと考え事してただけですから」

「．．．．考え事．．．？」

う、な、なんでそんな微妙に寂しそうな目をするんですか。

何か、僕不味い事でも．．。

ああああもう!

僕はそのわけは分からなかったが、これ以上追及されるのは避けた
い。

「ほ、ほらとにかく、せつかくの買い物なんですから、楽しんでい
きましょうよ!」

僕は強引にロツソの肩を押しながら商店街を駆ける。

「．．．．ちよ、ちよつと．．!」

「ほらほら、行きますよ!」

ふう、細かい事は後回しで．．．今は買い物を楽しもう。

「……なあよ」

「うん？何でしょう？」

「……んであたしがこんなことしなきゃ何ねえんだ？」

「それはあなたが、風紀委員だからよ」

鳥越 聡華は、商店街のとある柱の陰からロツソと聡也の様子をうかがいながら

その後ろにいる人物に声をかけた。

その人物は長い黒髪をさらりと流し、優しそうな柔和な目元を持つ少女で

服装は至ってシンプルな無地シャツに上着、それにロングスカートだったが

どこか凜とした雰囲気を持っている。

「いや……それ理由になってねえからな、理^{ことわり}」

「あら、これほどシンプルな理由はないと思うけれど」

彼女は名を白鶴^{しろつる}理^{ことわり}という。

学年は二年で、聡華と同じ年だが上級生を差し置いて風紀委員の委員長を務める実力者である。

普通に黙っていれば、かなりの美人で良識人なのだがいかんせん性格が厄介で

面白いこと、楽しいことが大好きなのだ。

………たく……こいつに捕まったのがそもそもミスだったぜ……

聡華は頭を抱えるがもう遅い。

すでに巻き込まれているのだから。

ちなみに最近のマイブームは……。

「でも驚いたわ。この前あった委員会会議でロツソちゃんのおかしな様子がおかしいと思ったら

『……す、好きな人が……その……できた……』とかいうんですもの」

「だからって、わざわざ見に来るかよ……こんなストーリーカー紛い

なことしてまでよ」

「馬鹿ね、これはれっきとした尾行よ。私にはロツソちゃんの恋路を見届ける義務があるの。」

「風紀委員長としてね」

「……職権乱用ってやつだな」

「聡華はまたも頭を抱える。」

「そう最近のマイブームというのは、ロツソの恋路観察。」

「人の恋路なんざどうでもいい聡華にとっては本当にいい迷惑である。こんなのがあの生徒会長、更識 楯無と肩を並べるIS操縦者だとは到底思えねえ……。」

「大体だ。」

「何でこんなちゃらんぽらんにあたしがまったく勝てねんだよ！」

「その言葉のとおり、聡華はこの理に入学以来一度も勝ったことがない。」

「しかも聡華は専用機しえんなのに対して、理は一応自前でチューニングデータを持っているとはいえ専用機を持っていないため？打鉄？。普通に考えれば機体のスペックだけ見ても聡華が勝てる要素しかない。だが結果は、一方的で聡華は反撃らしい反撃をするまもなく敗北した。」

「はぁ……、まじでありえねえ。」

「ん？ 何よ、その顔は」

「……いや、何でお前にあたしが勝てねえのかをちよっと考えてただけだ」

「なんだ、そんなこと」

「そんなことつてなあ……」

「理は聡華に向かって首を傾けて満面の笑みを向けた。」

「実力不足よ」

「元も子もねえなっ！！」

「……つて、ちよつと声がでかいわよ！」

「ああ！ ほらロツソちゃんと聡也君見えなくなっちゃったじゃない」

「……………っ!？」

ハツと何かに気が付いたかのように、辺りを見渡すロツソ。

「どうかしました？」

「……………い、今……………」

気のせい？

……………。

いや、でも……………。

ロツソは、少し嫌な予感がした。

ズバリ白鶴 理の事だ。

そもそも、誰かを好きになること自体が初めてのロツソ。

その相談相手として選んだのが、理だった。

委員会でも上級生に物おじせずテキパキと、委員長として仕切っ

ている理は

ロツソの目に非常に頼りになる存在に写っていたのだ。

だがいざ相談してみれば、ロツソはその性格に頭を抱える事となっ

た。

これまでも何度か、後をつけられたりしているし……………。

確かに相談するとしつかりとした答えが返ってくるから、相手を間

違ったわけではないのだろうが性格だけがかなり難ありだから厄介

だ。

……………まさか今日も……………。

ロツソは再びしつかりと周辺を見回す。

……………居ない……………よね?……………。

いやむしろそれでいい。

いなければいけないで安心できる。

ロツソはもう二、三回辺りを念入りに見てから、聡也を連れてまた歩き出した。

邪魔されてなるものか、この時間は私だけのものなのだから。

「……そう私だけのもの。」

誰にも譲れない。

「……？自分自身にだって？」

あつぶな「……。」

あの子、あつちでも鋭いのねえ……。

理は、ポストの影に隠れながら思う。

でも、私を巻くにはまだまだだね。

さて、次はどこへ行くのかしら？

ニヤニヤしながら理はロツソと聡也を伺う。

そんな理の楽しい時間に水を差すように不機嫌な声が響いた。

「……おい……。」

「んもう、うるさいわね。静かにしてなさいよ。」

「うるせえってのはこっちの台詞だよッ！」

いくら隠れるためとはいえ人の頭押さえつける馬鹿がいるか！」

ちなみに今の状態は、背の低いポストに隠れるために理が聡華の頭を思い切り押し付け聡華は苦しい中腰状態。

なんとか、耐えて入るがその足はプルプルと震えている。

理はしばらく聡華をみると、フツツと笑い……。

「えいッ」

バゴッ！

思い切り地面にたたきつけた。

「……て、てめえ……!!」

「あら、委員長に逆らうともう一発行くわよ?」

「……はあ、すいませんね」

その声を聞いて、理はまたフツツと笑うのだった。

「……おい、あいつ……」

「どうやら、あの二人を見張っているのは僕たちだけでは無いようですね……」

理と聡華から少し離れた場所に人ごみに、紛れて二つの影が揺れる。それぞれ黒髪とワインレッドの髪を持つ二人は、黒髪の少年はサングラスをかけ目を隠し、ワインレッドの少女はキャップを目深にかぶってやや下を向いて顔全体を隠しているようだった。

「どうする、聡也……。流石にあいつの目の前じゃ無理だぜ」

「かといって、このまま帰っては博士に大目玉……ですよ?」

「ったく、あの女……。こないだ人にハワイ行けとか、ぬかしていやがったのに

いきなりその前に、一つ用事を頼むなんてよお?」

聡華は鼻を鳴らして、吐き捨てるように言う。

だが、それについては聡也も同感だった。

五条 ごしやう 叶は、かなえこっちにやってほしい事は伝えてくるがその内容の深くを語らない。

叶を信じてはいるが、今回のこの?用事?についてはいささか疑問が残る。

「……なにかこの用事にあの女が関与しているのか……それとも……」

「おい、聡也。あいつら動いたぜ」

考え込む聡也に聡華が声をかける。

・・・まあいいでしょう。とりあえず僕たちはやれと言われた事をしっかりとやるだけです。

聡也は頭を切り替えて二人の後を追う。

晴れ渡る初夏の日差しの下、楽しく幕を開けた聡也とロツソの買い物デートは、いつしかそれぞれの思惑が入り混じる奇妙な尾行劇へとその姿を変えようとしていた。

第29話・Side Owl（商店街は思惑だらけ？）（後書き）

さてようやく、聡也側デート変第一話が終わりました。

どうもしるくです。

こっちではシャルロットがだました三人を登場させてみました。

さいこの落ちはやはり天然のラウラ嬢に締めてもらうのが定番です

ね（お

それではこのあたりで。

お、いよいよ次は30話なんですなえ

頑張りますよ！

さよならッ！

第30話：Side Owl く失うものは唐突に

午前中ずっと、商店街を回っていた僕たち。

っていうか、いたるところでデートデートと騒がれたのは予想外でした……。

そんなんじゃないっていうのに……。

現在僕たちは、昼食をとるべく何かいいお店がないか探している最中だった。

にしても、この商店街は意外とすごい。

大きさもそうだが、入っている店。特にその品揃えの多さには驚かされる。

いわゆるB級グルメなのだが、地元はもとよりアジア、アメリカ、ヨーロッパとたいていの国の料理がこの商店街にいなから食べられる。

僕はロツソの意見を聞くべく後ろを少し離れてついてきていたロツソの方を振り返る。

「ロツソ、あなたは何か食べたいものとかありますか？」

「……」

「ロツソ？」

「……え！ な、何？……」

ロツソは何か考え事をしていたのかようやく、僕の声に気がつきハッと顔を上げた。

「ロツソ、聞いてましたか？」

「……ごめん……聞いていなかった」

「はぁ……だからどこで何を食べたいかってことですよ」

「……あぁ……別に何でもいいけど……」

その答えって意外に困る。

何でもいいってのは、僕が選んで良いつてことだから一見すると好きなものが食べられるっていうことだけど、裏を返せば僕のセンスが問われていることとほぼ同義。

下手なもの選べないというプレッシャーは少なからずあるのだが・

ふうむ……。

一番ベターなのはラーメンとかカレーだけどそれだとちょっと、無難すぎる気もしますし。

せっかくこれだけ世界の料理が集まっているのですからここは奇を衒^てつてみるのも……。

ロツソの困った返答に頭を悩ませていると、ふと目に一軒のカフェ風のおしゃれな店が飛び込んできた。

イタリア料理か……。

店の那覇イタリア語だったからなんて発音するのかまではわからなかったが、それなりに人気店なのか僕たち同様おなかを空かせた客たちが列を作っていた。

「ねえ、ロツソ。イタリア料理はどうですか？」

「……イタリア……うん、良いよ」

ロツソはほんの少し考えたが、うなずいてその列の最後尾に並ぶ。行列といつても僕たちの前には三人ほどしかない。

すぐに店内に入れるだろう。

「……そういえば、聡也はイタリア料理って何か知ってるものあるの？……」

「いわれてみれば、ピザとかスパゲティとか代表的なものしか知りませんねえ」

「……日本に伝わったピザはイタリアのとは少し違うよ……？」

「え、そうなんですか？」

基本円状のこんがり焼いたパンの上にスライスチーズやケチャップ、後はベーコンとかそういう具が乗ったものイコールピザってイメー

ジだったんですけど。

やっぱりイタリア人からすれば違うんでしょうか。

まあ、日本は仏教国と言いながらクリスマススを祝ったりしますしい意味で、いろんな文化が混在してますから。

今さら日本でこの文化の発祥は・・・なんて考えて食べる人なんていないし、その流れからピザも？そういう料理？がピザっていう風に固定化されてしまったんでしょね。

「・・・基本的に日本に伝わったピザは、イタリア本国から伝わったものじゃなくてアメリカから伝わったものなの。基本アメリカのピザって言うのはイタリア物よりも生地が厚くて、専用のパンに具を載せてオーブンを使うみたい・・・。」

「なるほど、じゃあ具はどうなんですか？」

「・・・具はイタリアでは大体基本的にトマトソースにチーズ、後はバジルなんかの野菜にハム、ソーセージ、ベーコンを使ったものがオードソックスなのかな。・・・でもアメリカの場合は具が色々あるしオードソックスなものがどれって言われてもよくわからない・・・。各州ごとに大きく違うらしいから・・・。」

へえ・・・。ロツソって失礼だけど意外と料理詳しいんですね。

それに比べて、あの博士は・・・。

ふと、僕の頭に一条 希が浮かぶ。

あの人、どうしてか機械を作ったり弄ったりするのは天才的なのに、料理だけは壊滅的だ。

何度戦おのきの中でボヤ騒さわぎが起きて緊急浮上うきあしたか・・・。

はあ・・・。

今考えても恐ろしいあの料理の数々・・・。

どうして袋から出すだけの料理までがああも豹変ひょうへんするのか、一度その過程を見てみたいです・・・。

「・・・あの、聡也・・・つまらなかつたかな・・・？」

博士の事を考えてため息をついた僕にロツソが不安そうな顔で覗き込む。

どうやらロツソは、僕が自分の話に飽きてしまったと思ったらしい。いやいや、違う違う。

逆に色々ためになる話が聞けて楽しかったですしね。

僕は、ロツソに笑いかけてその疑問を一蹴する。

「違いますよ、ロツソの話はとても面白かったですし、色々ためになりました」

「……でも、ため息ついてたよ……?」

「あれは、博士の事をちよっと……考えていて……」
ダメだ……。

博士って言ったらまた頭の中にあの料理の数々がフラッシュバックしてきて……苦笑いが止まらない。

だがロツソは苦笑いよりも博士という単語が気になったらしい。

「……博士って?……」

「ああ、そう言えばロツソは知らないんですね。博士って言うのは、まあそのまま博士なんですけど……僕のIS Nを作り上げた人で、僕の母親……になるのかな」

「お母さん……」

「そう、母さんだね。……それがさあ、ほんと料理がてんでダメでして。袋開けるだけの簡単な料理でさえよくわからない、奇跡のゲテモノに……」

あああ、もう……思い出したくもないのに……。

ちなみにボヤ騒ぎもそうだが、それを食べたクルーもまた倒れて寝込む人たちが続出したらしい。

でもなぜか博士だけは平然と立ってるんだよなあ……。

ひょっとしてあの人、わざとやっているんじゃない。

「……あ、なるほど。だからため息なんかついて……」

「そうですね、もうね。はっきりって思い出したくもありません」
僕はもうそれ以上、あのゲテモノ料理を思い出さないために話をパツと切り替える。

と言っても、急に別の話にも持って行きづらかったから、さっき少

し気になった事でも。

「そ、そういえばロツソは料理の知識結構豊富ですけど、得意なんですか？」

「……まあ、それなりに……」

お、否定しない。それどころかそれなりには。

「へえ。何か得意な料理とかあるんです？」

「……これと言って得意なものは無いけど……大体の物は作れるよ……」
そりゃ凄い。

僕も自慢じゃないけど料理は苦手な方ですからねえ。

料理を作る人って、なんだか尊敬してしまいます。

と、僕が感心していると、ロツソは何やらうつむいて考えた後こちらを向いた。

その顔は、少し赤らんでいる。

「……聡也は……その私が……料理作ったら……食べたい……？」

「え、料理ですか？ そりゃ食べたいですよ。だって自信あるんですよ？」

「……え、う、うん……」

「いいですねえ。その時は是非、いただきたいですね」

「……分かった、頑張るよ……」

ぱあつと笑顔が広がるロツソ。

そんなに、料理作るのが好きなんですねえ。

これは期待できそうです。

「えー、お次のお客様。お席が空きましたのでご案内いたします」
僕が、ロツソの料理に思いをさせていると店員さんの元気な声が耳に飛び込む。

おっと、結構話し込んでいたようですね。

僕たちは店員に促され、イタリア料理の美味しそうな匂いのする店内に足を踏み入れた。

「ねえねえ、今の聞いた!? ロツソちゃん凄く自然 自然すぎてこつちが不自然と思うぐらい自然だったわよ!!! ねえってば、聡華聞いてる、ねえ聞いてる聞いてる!?!」

「だああつ!!! もうるせえんだよ、そんな何度も確認しなくたって聞こえてんだ、ボケ!!!」

「だから声が大きいだよ、あなた尾行してるっていう自覚ないでしょ!!!」

「んなもん、初めつからねえんだよ!!!」

聡華は吐き捨てる、興奮気味の理を尻目しつめにそっぽを向く。

なかば強引に……いや訂正しよう。半ばではない完璧強引に何をするのかさえ聞かされずに引つ張ってきた挙句することは後輩のストーカー。

聡華はちらりと視線だけで、理を見やる。

……今ならやれんじゃねえかな。

ふとそんなことを思ってしまうのは、間違いなくこの女にストレスが溜まつているからだろうか。

とはいえ、この周りに何か凶器になるものも……ん?

聡華が視線を泳がせていると、理のすぐそばに? 丁度良い木片? が……

聡華はにやっと笑うと、その木片をゆっくりと拾い上げる。

理は、店内が気になるようでこちらの動きに全く気が付いていないようだった。

聡華は木片をゆっくりと振り上げて……

積年の恨み……ここで晴らさせてもらっぜ!!!!!!

思いっきり振り下ろした。

が、理はそれをこちらも見ずに？裏拳？でへし折ると折れた破片をもう片方の手でつかみ素早く木片を聡華の首元に突き付ける。

「う……ぐっ！」

「危ないじゃない……ね？」

「ね、じゃねえんだよ？ね？じゃ、あたしは……！」

「……ね？」

「……すみません」

聡華は毎回このパターンだと、また苛立ちを募らせながらも毎度毎度このパターンで負ける自分に嫌気がさしていた。

一方勝ち誇ったように満面の笑みを浮かべる理は、腰に手を当ててわざとらしいお怒りポーズをとる。

「全く、あのね時と場所を考えてよ。今は大事な仕事なんだから」

「ストーキングがかよ……」

「だから尾行って言ってるでしょ！」

パカンっ！

さっきの木片が聡華の頭にクリーンヒット。

「うおおお……！」

「ほんとにもう……ほらあ、ロッソちゃん見えなくなっちゃったじゃない」

「てめえは、その前にいろいろ酷えだろ！」

聡華は今日二回目の涙目でクツと理をにらむが、理は気にも留めない。

「……このやる……」

「それに酷いっていうなら、そっちが最初でしょうが。あたしは正当防衛よ！」

「あたしはただ積年の恨みを代表して晴らそうとただけだろ……」

理が滅茶苦茶なのは今に始まったことではない。

聡華と理が初めてであったのは、IS学園入学後の一年生の時だ。

クラス替えて二年ではクラスが離れたが一年の時はまあそれはそれ

は。

人間観察だのなんだのって理由をつけてはこつちをひっぱりまわしてくれるもんだからたまったものではない。むしろ、二年生になつてクラスが離れてから余計にひどくなつた気さえするぐらいだ。

「もう……。私は喜ばれこそすれ恨まれるような人間じゃないのに。」

「……一回風紀員会で信任投票やつてやろうか……」

どこからその自信がやってくるのかと呆れながら聡華は理を一瞥する。

理はその視線を感じながら、いつもどおり意味深な笑みを浮かべていた。

「……さて……。聡華ちよつとお金渡すからそのファストフード店で昼ごはん買ってきて」

「おい、ふざけんなよ。あたしをパシリに使おうつてか？」

「そうね……。ハンバーガーセットがいいわ。あ、マスタードは多めで飲み物は……。クーちゃん白ブドウでお願い」

「てめえな……。話聞いてんのか、こら!!」

「……ね？」

「……了解しました」

くそ、なんつうクソむかつく笑顔だ!

聡華はまたもあの?ね?に負けたことに心底腹を立てながら、理が差し出したお金をふんだくると仏頂面のままファストフード店へと足を進めた。

つたく……。

あいつら、何で見つかんねえのか甚だ疑問でなんねえ……。

理と聡華から少し離れた、オープンカフェ。

そこは商店街ながら、店の前に数脚のテーブルセットが置かれ紫香^{しが}樂^ら 聡華^{そうか}と一条聡也がサンドイッチ片手にコーヒーを啜^{すす}っていた。

「あれで尾行のつもりかよ・・・呆れて物も言えねえ」

「それを言うなら僕たちも、尾行しながらカフェで座ってますから人のこと言えませんけどね」

「あたしらはあんなにうるさくねえぞ？」

「ま、それはそうですが・・・」

総也はタマゴサンドを口の中に放り込むとそれをコーヒーで流し込む。

結構この食べ方喉に詰まりやすいからあまりお勧めはしないが、タマゴの甘みとコーヒーの程よい苦みがマッチして意外においしい。

聡華はこの食べ方は少し理解に苦しむが。

「まあ、彼女たちが出てくるまではたぶんそう遠くにはいかないでしょうし。腹が減っては戦は出来ぬといいますがね」

「武士は食わねど高楊枝とも言っただろ？」

「我慢したって意味ないでしょ、こんなところで」

「・・・まあ・・・な」

聡華はBLTサンドをポイントと口へ放り込んで手をパンパンと払いながら、ちらつと理を見やる。

「・・・あいつさつき・・・」

聡華は先ほどの一連の攻防を思い起こしていた。

鳥越 聡華はあの時完全に理の不意を突いていた。

少なくともここからはそう見えたのだ。

だが、理は逆にその状況からいとも簡単に逆転して見せた。

・・・話の内容からして、あの理って女は風紀委員の委員長か。

つたく、あの二人がIS学園の関係者だつてことはわかってたがまさかここまで厄介者だつたとは予想外だ。

あの聡華^{そうか}だけでも、いろいろ面倒だというのに・・・。

聡華は鼻を鳴らして視線を外すと、コーヒーを一気に飲み干して荒

くガンつと机の上に叩きつけるように置く。

それにだ、聡華にはいまだに釈然としないことがある。

それは聡也同様、五条 叶が自分たちによってほしいと欲していたひとつの用事。

これまで叶の出す任務の先には必ずと欲していいほど？あの女？の影があつた。

だが今回の任務にはその姿かたちどころか、影さえ見えてこない。

叶が、？あの女？の関わっていないことに首を突っ込むとも思えねえし……。

一体……。

……待てよ。

ひよつとして。

聡華は一つの可能性を考える。

それは、？自分の為？……。

叶があの子の影を追い続けるのは、ただ単純に自分の欲求を満たすためでそれイコール自分の為というわけではない。

叶が動くもう一つの理由があるとすれば、本当にただ自分^{わがまま}の為のためとしか考えられない。

その考えにいたつた聡華は、うんざりすると同時にさっきまで以上に苛立ちを募らせる。

あいつ……。あたし^{わがまま}をそんな理由のために使つてんだとしたらふざけんなよ……！

あたしらは……。あたしらはなあ……！！

グツと拳を握り締め、何も無い宙を睨み付ける聡華に聡也が諭すように話しかけた。

「姉さん、今はそんなことで腹を立てても仕方ありませんよ」

「え？」

「重要なのは、博士に言われたことを百パーセント完璧にこなす事でしょう。違いますか？」

「あ、ああ……」

「まったく、しっかりして下さいね。？僕の？姉さんなんですから？僕のことという言葉に意味深な響きを残して聡也は、サンドイッチを平らげ席を立つ。

円柱のテーブルにポツンと残された聡華は、今までの苛立ちが嘘のように気持ちが悪く落ちていくのがわかる。

そこには何故か、口にも出していない自分の考えが聡也にわかったのかという当たり前の疑問は存在していなかった。

わかるのはさつきまでの苛立ちがスツと収まっていく感覚だけ。

そっ、あたしは？聡也の？姉なんだ。

聡也の言つとおり、やれることを今はしっかりやる。

それでいい。

・・・それで、聡也が喜ぶなら・・・

それで・・・良い。

聡華は、少しうつろになった目でゆっくりと立ち上がるとテーブルの上のゴミを片付け聡也の後を追った。

ふう、少し食べ過ぎました・・・。

というよりもイタリア料理がただ単においしすぎただけなのですが。

「ロツソ、この店おいしかったですね」

「・・・うん・・・そっだね・・・」

「このミートソースは癖になりそうですよ、ところでロツソはあまり見たことない料理を食べていましたけれど・・・あれは・・・」

「・・・聡也はスパゲティ見たことないの・・・？」

信じられないという顔で僕を見上げるロツソ。

いやいや、そっちじゃなくてですね・・・。

って言うか僕、スパゲティ食べてましたし。

「僕が言ってるのは、もう一つの方ですよ！　なんかコロツとした

揚げ物食べてたじゃないですか」

「・・・ああ、あれはアラランチーニ・・・」

「アラランチーニ？」

「・・・イタリア風のライスコロツケの事だよ・・・」

「あれ、コロツケだったですね」

「・・・まあ、私が食べたのはナポリ風のだったけど・・・」

ロツソによるとアラランチーニとは日本語で小さなオレンジを意味するイタリア語。

本場のアラランチーニはシチリア風で他にもナポリ、ローマ風のがあって今回ロツソが食べたナポリ風のは中に何もいれなただおろしたチーズ、塩、ゴマ、トマトピューレを湯炊きした米と混ぜたものにパン粉をまぶして揚げる結構シンプルなものらしい。

まあ、元々がお米だから普通のコロツケに比べると幾分ヘルシーそうだし、そこら辺はしっかりカロリー計算して食べてるあたりが女の子だなと思う。

・・・でも、よく考えたらそれって？こっち？のロツソですよ。

？あっち？のロツソはそう言う事気にして食べるんでしょうか。

僕はちよつと想像してみる。

あの性格だから、きっと？こっち？のロツソよりはこんもり食べるはず。

「ロツソ、け、結構食べますね・・・」

「ああ、いや普通だろ？」

「普通って・・・それ大盛りどころか二人前で・・・うわぁ・・・カロリー高そう・・・」

「カロリーだあ？ んなもん気にして飯が食べつかよ！」

「いや・・・だけど一応女の子ですし・・・」

「女だからカロリーを気にしなきゃいけないなんて決まりあるかよ、さあさあ食べ食べ！」

「・・・いや、うん多分こんなのだ。」

フフ、いや間違いないですね。

あのロツソがだっていちいちカロリーとか細々計算するなんてありえませんかよ。

僕は？あっち？のロツソが細々と指を折りながらカロリーを計算する姿を思い浮かべると何だか無性に笑いがこみあげてきた。

「・・・聡也、どうかしたの？・・・」

そんな僕の想像など知る由もないロツソが不思議そうに尋ねてくる。確かに急に、相方が笑いだしたら不思議がるのは当然でしょう。

「いや、ちよつと考え事というか、何というか」

「・・・何を、考えていたの？・・・」

「ええ、まあ？あっち？のロツソの事をね」

「・・・え？」

一瞬だがビクツとロツソの身体が跳ねた気がした。

何か・・・不味い事でも・・・言ったかな。

ロツソは無言のまま下を向く。

そして、手はグツと固く握られており、よく見ると小刻みに震えているのが分かる。

「あ、あの・・・ロツソ？」

「ッー！？」

「え？」

僕がその肩に手を置こうとした時、ロツソがバツと反射的に身体をひるがえす。

一瞬の沈黙の後にロツソは小声で「あ」とつぶやくとばつの悪そう

に顔をそむけた。

い、一体どうしたっていうんですか・・・!?

僕はよく事態が飲み込めず、言い淀む。

だがそうは言っても何か声をかけなければという気持ちだけが、はやってしまう二も事実だった。

「ろ、ロツソ?」

そして出た言葉が、相手の名前だけとは。

我ながらとんでもなく情けない。

だが、もう言ってしまったのは仕方が無い。

僕はもう一度ロツソを呼ぶ。

「ロツソ・・・?」

「・・・」

「あ、あの・・・」

「・・・聡也は・・・」

「はい?」

ロツソがぼつりとつぶやく。だがそこには先ほどまでの明るさは無く声には不安の色が混じっている。

「・・・聡也は・・・やっぱり・・・私なんかじゃ・・・嫌なのかな・・・」

「私じゃ・・・こんな・・・私じゃ・・・」

その事なら確か以前の襲撃の時に・・・。

「・・・あれ?」

僕は、質問の意味もそうだったがなんと答えたらいいのか分からず言葉が上手く出てこない。

だがどうもロツソはそれを、僕の肯定と取ってしまったらしい。

ロツソはゆっくりと顔を上げる。

その顔に僕は驚いた。

なぜなら。

「…………泣いていたからだ。」

「…………ロツソ…………」

ロツソは僕の顔を見て、涙を流しながらも無理やり笑顔を作る。

「…………変な事聞いて…………ごめんね…………」

「あ！ ロツソ！！」

言い残してロツソはきびすを返して商店街を一人走って行ってしま
う。

僕はその背中を追いかける事が出来なかった。

追いかけても、かける言葉が見つからない。

僕はただ立ち尽くすことしかできなかった。

しまった！

理は心の中で盛大に叫んだ。

次いで辺りを見回す。

「…………ツ！？ やっぱりいない！」

急な理の態度の変化に聡華がキョトンとした顔で見つめる。

「おい、理。なんだ、何焦ってたんだ？」

「聡華、居ないのよ！」

「ああ、ロツソのやつか。にしてもよ、あの馬鹿もドジったよなあ。」

目の前であんな事言われりや

「そうじゃないわ！」

グイッと肩を捕み理は聡華に詰め寄る。

余りの剣幕に聡華は目を丸くした。

「お、おい理？」

「さっきまで居たのよ！ 私たちをずっとつけてきてた二人組が」
「な、何だと!？」

「その二人が居なくなつたの!」
理は、確かにロツソの恋路観察には超が付くほど興味がある。
しかし今日に限っては、少し意味合いが異なっていた。

今日はロツソの恋路観察ではなく、ある人物の命である二人を監視
していたのだ。

そして案の定二人を狙う紫香楽 聡華と一条 聡也の存在に気が付
いた。

理が聡華と色々騒いでいたのも、すべては相手の視線をこちら側に
出来る限り向ける事で相手の動きをある程度把握するためだ。

だが、ロツソの涙を見た時、理に一瞬の隙が出来た。
それが不味かつたのだ。

・・・つく、ロツソちゃんが消えてからまだそう時間は経っていな
いからそんなに離れてはいないだろうけど。

・・・この人ごみじゃあねえ。

今日は日曜日。

しかもピークは過ぎたとはいえまだ昼過ぎ。

人の量も半端では無い。

こんな中から、あの二人だけを見つけるなどほぼ不可能だ。
頭を抱えなくなる衝動を抑え理はため息を吐く。

・・・それにしても、あの二人。

あの人と言つてた見たいに確かに現れたけど・・・。

一体何が目的なのかしら。

理が、思考を巡らせていると聡華が焦つた口調でまくし立てる。

「なあ、二人組つてまさかあいつらなのか!？」

「ええ、そうよ・・・あの学園を襲撃した二人と見て間違いないわ」

「・・・だつたらロツソが!」

「だとしても、向こうの方が早く動いてるのよ!」

理はそんな事分かつてるとばかりに声を荒げる。

そう分かっているのだ。

「・・・後輩が危機にさらされようとしているかもしれないのに、一番近くですつと監視していたのに・・・。そして結局この危機を作ってしまったのが自分の所為であると言う事も。」

「・・・お前まさかと思うが、諦めようとしてんじゃねえだろうな？」

「・・・もちろん、そんな事思っても無いわ」

そう分かっているからこそ。

「だったら？」

「当然よ・・・」

今自分に出来る事をする！

「とにかくロツソを探しましょう！」

「ああ、行くぜ！」

理と聡華は、既に間にあわないかもしれないと言う若干の不安を抱えつつもロツソを探すために地を蹴りだした。

ハッ・・・ハアッ！

ロツソは、言い表せないような胸の痛みに耐えながら商店街を当ても無く走り続けた。

やっぱり・・・自分じゃだめだったんだ。

ロツソは思う。

あの時誰にもこの楽しい時間を譲りたくなかった。

・・・自分自身にさえ。

これは自分の物、？あっち？の自分の物じゃない。

そう強く願えば願うほど、思えば思うほど聡也が？あっち？の自分の事を考えてあんな笑顔を浮かべていたことが許せなかったし、何より悲しかった。

聡也は自分の事なんて見てなかったんだ。

やっぱり、明るくて気性は荒いけど冗談も言えて話しやすい。

？あっち？の自分のほうが・・・。

ロツソはふと見つけた細く薄暗い路地へ隠れるように滑り込んだ。ハア、ハアと上がった息を少しづつ整えながらロツソは下を向く。・・・やっぱり自分は・・・。

『ああ、そうだぜ？ 誰もお前の事なんか見ちゃいない』
ハツと顔を上げる。

あたりをきよろきよろと見回すが人影は無い。

だがその声は。耳をふさごうと、何をしようとも否応なしにロツソの頭に鮮明に響いてくる。

ロツソはその声に聞き覚えがあった。

いや、聞き覚えなどというレベルではない。

これは・・・この声は・・・。

私の声・・・！？

『大体よ、自分を見てくれなんて虫が良すぎると思わねえかよ』

「・・・そ、それは・・・」

『ただでさえこっちは、お前見たいのが出てきて迷惑してるってえのに？』

「・・・めい・・・わく」

『ああ、迷惑だね。ツーかはつきりって邪魔？』

「・・・でも・・・私は・・・私だって・・・」

『私だって・・・なんだよ・・・ああ、ひよっとしてあれか私だつて楽しむ権利ぐらいあるとかそういう事抜かそうとしてんのか？』

「ッ！？」

『ばっかじゃねえの？ そんなのあるわけねえじゃんか・・・。だつてお前は・・・』

「……嫌！ 聞きたくないッ！！……」
それを今言われてしまったら本当にもう立ち上がれなくなってしま
う。

今にも千切れそうな細い細い糸を必死につなぎとめようとするが、
その声は何の迷いも情もなく言い放った。

「誰にも必要とされちゃいないんだよ……
もちろん？ 聡也？ にもな」

「あ……」
耳に？ プツリ？ と何かが切れる音が聞こえる。

ロツソは膝から力なくペタンと座り込んでしまった。

立ち上がるうにも足に力が入らず、焦点は定まらない。

虚ろで輝きを失った瞳が最後に見たのは、座り込んだ自分を見下ろ
す二つの影だった。

「あ……僕たちが来る前にすでにこの状態では……」

「こいつ、壊れちまったのか？」

「本当は、僕たちが？ それ？ をするつもりだったんですけどね」

聡也はさらっと、言うときイツとロツソの顎を手で上げる。

ロツソに抵抗の意思などあるはずも無くただ虚ろな目に涙をためて
力ない肢体をダランと地に投げ出している。

聡也はロツソの状態を確認すると、少し考えた後ゆっくりと頷いた。
「……まあ、大丈夫でしょう。彼女はもう一人内包しているよ
うですし。むしろそちら側に用があるのでね」

「って言うと……」

「はい、そつちに働いてもらいます。ここは僕に任せて姉さんは向
こうをお願いしますね？」

「……ああ、ま、ちよりのだろ……」

聡也は聡華の方を振り返らずに言い返す。

聡華が路地を出て行ったことを一瞥して確認してからロツソの耳元に口を近づけた。

「ロツソ・・・大丈夫ですか？」

あたかもそれが、？あの？聡也であるように優しく、丁寧に。

聡也が二度三度ロツソの身体を揺らすと、ロツソは本当にゆっくりと瞳を動かした。

「・・・そう・・・や・・・？」

「・・・ええ、僕です」

「・・・私・・・ね・・・」

「・・・探しましたよ・・・急に走って行っちゃうんですから」

ロツソは少しだけ目を丸くした。

おそらく自分を追いかけてきてくれたことへの純粋な驚きなのだろう。

だが、聡也はそこで優しい言葉など続けはしない。

「ところで、何であなたがいるんでしょうか？」

「・・・え？」

「僕は確か、？あっち？のロツソと商店街でデートしていたはずですが・・・」

？あっち？という単語に、やや輝きを取り戻しつつあった瞳が失意の色へと変わる。

「困りますねえ・・・せっかく楽しいデートだったのに。勝手に変わらされては」

「・・・な、何を・・・」

「早く出て行ってくれませんか？ あなたがいると正直迷惑ですから」

「・・・あ・・・ああ・・・」

聡也はグイツとロツソの胸倉をつかんで顔を近づけ、鋭くにらみつけるのと止めの一言を発した。

「・・・出て行っていったんですよ。あなたは・・・邪魔だ」

第30話：Side Owl く失うものは唐突にく（後書き）

どうもお久しぶりです・・・。

しるくです

すいません更新が遅れまして・・・。

で、遅れた結果がこのグダグダ加減とかもう泣けてくるww

まあそんな感じで、Side Owl だったでしょうか。

急展開とかは仕方ないのですねw

さてこの先どうなるのか・・・。

次の話ではまた通常のSideに戻ると思いますので、よろしくです。

にしたって・・・（敵の）聡也君マジ鬼畜www

では31話でまたお会いしましょう。

さよならッ!!

第31話：Side OWI く揃う役者達・事件はこうして始まったく（前書

もしかしたら、後日少し一部内容を付け足すかもしれませんが、ご了承ください。

ストーリーの筋、流れとしてはあまり関係のない所です。

第31話：Side Owl く揃う役者達・事件はこうして始まった

ああ、もうなんであの時呼びとめられなかったんだ！

掛ける言葉なんて二の次でよかったじゃないか。

聡也は人ごみを縫うように走りロッソを探しながら、後悔の念にさいなまれていた。

・・・いまさらしたところでもう遅いんですがね。

とにかくロッソを見つけないと。

でも一体どこまで言ったんだ？

と、ふと見知った影を発見し足を止める。

向こうも僕に気が付いたようだった。

「姉さん!？」

僕は自然と身構えていた。

だが、相手はハアつとため息を漏らして頭をかく。

「・・・だから何度言ったら分かんたよ・・・あたしはお前の姉さんじゃねえ」

「あ、あれ？ ひよつとして・・・鳥越先輩？」

「ひよつとしなくても、そうだったっの」

聡華は鼻を鳴らすと、親指ですぐ横の路地を指さした。

「ロッソ探してんだろ？ この奥だよ」

「え！ 本当ですか!」

「嘘言つてどうする・・・」

聡也は、聡華を押しつけるように路地裏に飛び込む。

それほど聡也は焦っているのだ。

・・・そう。

本来なら、この状況が余りに不自然だと聡い聡也なら気づけたはずなのに。

「ロッソッ！ どこですかッ!？」

返事は無い。

いやむしろ・・・

「返事なんざ・・・あるわけねえんだっての!」

「ッ!?!」

聡也は寸での所で、相手の気配に気が付き飛びのく。

そして聡也がもといた場所には、鋭い木片が振り下ろされていた。

「あ、あなたは!」

「ああああそうだよそう、あたしは紫香楽 聡華様だよ!!!」

聡華は右腕を部分展開させると、聡也の胸倉をつかんで路地の壁に叩きつける。

「がはっ!」

こうなると、聡也は手も足も出ない。

くそッ!これが、だだっ広いアリーナみたいな場所なら展開して反撃できるのに・・・ッ!!

こうも狭所ではッ!!

好きな時に呼び出せるISと違いIS・Nは、一つのユニットをまとめて展開するシステムなので部分展開が行えないのだ。

そのためこう言ったスペースの限られる所での戦闘には全くと言っていいほど向いていない。

多分それも見越して僕をここに・・・!

ううッ!!・・・い、息が!

聡也が霞みはじめた視界で見ると聡華は、ISの腕で首を締めあげていた。

「ふん・・・殺しちまってもいいけどなあ。・・・それはちいと

約束違反なもんでな」

「や・・・くそく・・・ッ?」

「けどまあ、騒がれるのも厄介だから・・・ちよつと寝てる」

「ぐあッ!」

聡華はパツと喉を掴んでいた手を離すと同時に、素早く聡也の鳩尾に左拳を叩きこむ。

気を失った聡也は力なく冷たい地面に落ち、それを確認して聡華は

ISを待機状態に戻すと聡也の服を漁り始めた。

「ええつと・・・財布ん中じゃねえな・・・あ、こつちか」

聡華は聡也のジープンの内ポケットから、シリンドーカードと起動イクニッキーを取り出しニヤリと笑う。

「・・・コイツは預かつとくぜ、ちつと必要なもんなんぞな」

聡華は倒れた聡也を残し、路地を後にする。

事態はゆつくりと動き始めていた。

思った以上に事が早く動いてるみたいね。

理は心の中でごちりながら、商店街を走りまわっていた。

既にロツソが消えてからもうすぐで一時間になる。

この一時間・・・致命傷にならなきゃいいけど・・・なんて今さらか。

恐らく既にロツソとあの二人が接触している可能性は高い。

あの時のロツソは明らかに動揺していたし、更にその動揺していた理由が理由なだけに精神的にもかかなり追いつめられていそうだ。

何の理由かまでは分からないが、ターゲットがロツソである以上その弱っている所を敵が突かないわけがない。

・・・最悪の事態も想定した方がいいわね。

理は商店街の入り口付近で立ち止まり、考えを巡らせる。

・・・結局あの人の言ってた通りの筋書きになったわけか・・・
理はゆつくりと空を見上げる。

なんでもかんでもお見通しというのは、やっている方からすれば気持ちが良いのかもしれないが、やられている方からすれば気分が良いものではない。

ちなみに理は今日二人を監視するにあたってその人物に、「きつと、

聡也君とロツソちゃんを狙ってくるはずだからしつかり見張ってなさいよ？ 特にロツソちゃんの方をね」と言われた。そうまさにこの現状だ。

言われておきながら、このザマとは情けないが後悔しても始まらないのも事実。

「でも、どうしてロツソちゃんを・・・。」

あの二人は自分のISを持っているはずだし。

何かをしてくすのなら、別にロツソちゃんを使わなくなつて・・・。

「おい、理！」

「あ、聡華」

理は考えを中断して聡華の方へ身体を向ける。

聡華は理のすぐ横へやってくると、肩を上下させ息も整えないまま理に尋ねた。

「どうだつた？」

「・・・駄目ね、そつちは？」

「・・・はあ、はあ・・・同じくだ・・・はあ、はあ・・・もうこのアーゲードに居ないんじゃないか？」

「ええ・・・それは私も同意見よ」

「ど、同意見つてお前なあ・・・」

余りにサラリと言われ過ぎて、元々息が上がって少し苦しそつだつた顔が苦笑いで歪む。

「恐らく、もうこの商店街には・・・居ないでしょうね」

「・・・じゃあ、どこへ・・・」

「それは、分からないけど・・・」

「っち、頼りになんねえなあ」

「あなただつて少しは考えてよ！」

まったく・・・変な時はリードするくせに重要な時はこつち任せなんだから。

でも・・・一体どこに・・・。

どこにと言えば・・・聡也君は？

「ねえ、聡華、聡也君見た？」

「ああ、いやあいつも見なかったな・・・」

「・・・聡也君って、ロッソちゃん走り去ってからすぐに追いかけた？」

「え、ああええと・・・多分そんなにすぐじゃなかったと思うぜ？」

実は理は、あの時まつ先にロッソを追いかけたのだが見失ったと判断して、先に聡也を目の届く範囲に置いておこうとロッソと聡也が分かれた場所まで一度引き返したのだ。

結局その時には聡也はおらず、優先順位の高いロッソを再び捜索し始めたのだが・・・。

だとするなら、おかしいわ。

私が戻るまで時間にして精々三、四分程度。

聡也君が逆方向に走るとも考えにくいし・・・。

ま、まさか！

その時遠くから、一台の救急車の音が聞こえた。

頬を嫌な汗が流れて行く。

「・・・その間か・・・!!」

「え、どういう事だよ・・・おい」

「あの救急車・・・恐らく聡也君よ」

「なんだって!?!」

「多分、彼が居た場所と私が居た場所の間のせまい路地ね・・・そりゃ見つからないわけだわ」

「だから・・・どういう意味・・・」

「ひとまず行きましょう。聡也君が見つかっただけでもまだ良かった」

「・・・おいおい、自己完結すんなよ」

聡華は、救急車のサイレンの音のする方へ駆け出していく理をため息交じりに追いかけた。

場所はやはり理が思った通り、ロツソと聡也が分かれた場所からすぐの路地裏。

理と聡華は野次馬の人ごみを掻き分けて、その路地の中へ入る。

そこでは、今まさに聡也がストレッチャーに乗せられて病院へ搬送されるところだった。

「あの、すみません！ その子の関係者なんですけれど彼の容体は？」

言いながら理はIS学園の生徒手帳を見せる。

聡華もそれに続いて学生証を提示した。

救急隊員は一瞬目を見開いたが、すぐに聡也の容体について話し始めた。

「とりあえず目立った外傷は見られないけれど、何か大きなもので首を締めあげられてその後鳩尾を思い切り殴られたんでしょう……まあ命に別条はありません、安心してください」命に別条はない。その言葉を聞けて二人とも胸をなでおろした。

「それで、これから一応検査のために病院に搬送するのですが。関係者とおっしゃられるのでしたら……救急車にご同乗されますか？」

「……どうするよ、理？」

「……そうね、まあでも二人乗って行っても……ね」

「じゃあ……」

「あなた乗っていきなさい。私は少し調べ得たい事もあるから。何か分かったら私の携帯に電話してきて」

聡華は、頷くと救急隊員に連れられて救急車に乗り込む。

そして救急車は、聡也と聡華を乗せサイレンの音と共に走り去った。騒動も聡也が搬送された事で、次第に収まっていき野次馬の人ごみも自然と消滅していく。

・・・さて。

救急車を見送った理は再び路地裏へと入りしやがみ込む。

・・・何かないかしらね。

それはもちろん、現場検証のためだ。

と言ってもそんな大した事をするわけではないが。

・・・ん？ これは・・・あ、あの時の木片。

なるほどこれで、気絶させようとして失敗して・・・ISを・・・。

先ほど救急隊員の言っていた何か大きなもので首を・・・というの
はまあ、十中八九ISの部分展開だろう。

・・・けど妙ね。

ISを展開出来ない聡也君に対してISを部分展開して挑んだのは
確かに攻め方としては間違っていないけれど・・・。

そんな目立つ行動をしてしまったらわざわざ路地裏におびき寄せた
意味が。

別に自分の方が優位な立場なのだから、何もそこまで焦る必要も。

・・・焦る？

待てよ。

ひよつとして聡也君を気絶させるのは焦らなくちゃいけない程に重
要なファクターだった・・・？

いやでも、何のために？

相手はロツソちゃんを既に手中に収めているはずだ。

だったら別に聡也君なんて構う必要はない。

・・・何か引つかかるわね。

理は妙に引つかかる違和感の正体を考えながらゆっくりと立ち上がった。

チャリーンツ・・・

あら、お金でも落としたかしら・・・。

理は音の下あたりに視線を動かしていく。

するとそこには、お金は無かったが代わりに小さな鍵が落ちていた。

理はそれを拾い上げる。

・・・これ、何かしら？

自転車の鍵・・・にしては落ちてる場所が不自然よね。

理は、とりあえずその鍵をポケットへしまつて色々と整理をしながら商店街の通りに足を進めた。

時間は早いものでもうすぐ三時を回ろうとしており太陽もやや傾き始めている。

刻一刻とその時は近づいている。

「ほら、聡也」

聡華は聡也に、？聡也の？シリンダーカードを聡也に手渡す。

それは、もちろん？ホワイトアウル？のシリンダーカードである。

「ありがとうございます、姉さん」

「でも、なんか回りくどいやり方だよな」

「ま、それは仕方ありません。それだけ博士も慎重なんですよ」

「慎重も度が過ぎれば、ただ回りくどくて時間無駄にしてる気がするんだがなあ」

聡華は、自分達から離れて公園のベンチに座るロッソを一瞥する。

大体、何なんだよあいつ。前と全然雰囲気違うじゃねえか。

確か以前聡也と戦った時は、もっと荒っぽくてよく話す奴だったよな。

それが何の抵抗一つしねえってのはちと疑問だぜ。

聡華はそんなロッソに対して何の警戒もしない聡也に耳打ちした。

「なあ、あいつほんとに大丈夫なのか？　ここまでお前に付いて来てるんだからまあ大丈夫だとはおもいてえんだが・・・？戦えるのか？」

「何言ってるんですか？　むしろ今の彼女にはそれしかできませんよ」

「は？　そうなのか。あたしにやどうもそうは見えねえけど」

「姉さん、彼女が一体どういう人物か知ってますか？」

聡華はその質問の意味がよく分からず、首をかしげた。

「どうい人物？」

「・・・どうって。」

「気性が荒いとか、口が悪いとかか？」

「・・・まあそれは姉さんとあまり遜色ないところですけどね」

「相変わらずさらっと、きついこと言ってくれんな」

「まあ、それはいいとしていいですか姉さん。彼女はロツソ・ミオ

ネットイという人物のもととの人格なんですよ」

「・・・だったらなんだっていうんだよ」

聡也はまあとにかく聞いててくださいと、聡華を制して言葉をつづけていく

「ですが、今その人格はISを起動させた時にしか顔を出さないつまり良くも悪くも戦闘向きの人格と言えます」

「・・・ま、まあそうだな」

「まあ、普段はもう片方の人格が本来の人格のリミッターとして若干抑え込んでいたようですが今はそれありません。理性の無くなった人間はブレーキのない車と同じですよ。一つの方へ思いきり押してあげることさえできれば・・・後は・・・わかりますよね？」

「なるほど・・・ね」

聡華はうなずくともう一度ロツソを見やる。

にしても、ここまで人格っていうのは変わるもんかね。

片方の人格が無くなったからとはいえ・・・。

ま、いいか。

自分はやることをやるだけだしな。

「で、まああいつのことは分かったが、その先の連絡はあったのか

？ あたしらが聞いてたのはここまでだろ？」

「ええ、さつき博士からちようど返事もありませんね．．．ちよつとなかなか面白いものがあるみたいですよ」

そう言つて聡也は携帯電話の画面を聡華に見せる。

どうやら自分がここに来る前に叶に連絡をしていたみたいだな。

そこには一通のメールが表示されていた。

「え〜つと、何々．．．『やあ、首尾よくいつているみたいで良かったよ。さて．．．君たちにはこれからある場所であるものを取ってきてもらいたいんだ。反応が正しければ必ずあるはずだよ．．．Nの三箇目のコアがね．．．場所は添付しておいたからそれどおりに。じゃ、健闘を祈っているよ』
つて三箇目のコアだと!？」

おいおい、まじかよ．．．。

IS・Nのコアってのは？ホワイトアウル??ブラックアウル?の二つだけじゃねえのか？

Nの技術は、既に外部にもオープンにされて多くの研究機関がそのデータを持っている。

だがそのどこにもIS・Nのコアが三箇もあるなどという記載はないはずだ。

当然だ。

オープンにされた情報にそんな記載がなかったから。

だというのに三箇目のコアだつて？

．．．あのヤロウ．．．冗談にしちゃ性質が悪いな．．．。

「ええ、だから博士は僕たちをハワイに飛ばさず、わざわざこつちへ寄こしたんですね。Nのコア．．．ですか。まあ確かにこれは手の中に収めておいた方がいいかもしれないですね」

「まあな、その反応つてのが正しけりゃ．．．だろ？」

「正しいですよ．．．博士がおっしゃっているんですから」

「．．．どうも、あいつはなあ．．．」

聡華は好きになれない。

何を考えているのかよくわからないし、前も書いたが聡也に変な検査ばかりしやがる。

「まあ、いざとなりやあたしが守ってやるぞ。」

「ふふ、全く姉さんは……。ま、いいですよゆっくりでね。さて行き先も決まったことですし……。ぼちぼち行きましようか。日も傾いてきましたし」

「ああ、そうだな……。で、どうするんだ？」

「どう？」

「だからどう攻めるんだってことだよ、まさかあたしら三人で……」

「いいえ、その必要はありませんよ。作戦は前の無人機のコアの時と同じです。僕と彼女が派手に暴れて、姉さんはその混乱に乗じて潜入してもらおう。これがベストでしょう。それにこちらにはコレがありますからね」

聡也は言って？ ホワイトアウル？ のシリンダーカードを掲げる。

そのカードとこの作戦と一体何の関係があるのか……。

実は聡華は、？ ホワイトアウル？ のシリンダーカードを奪った時点ではそれを何に使うか聞かされていなかった。

とりあえず、取ってきてと言われたから取ってきただけなのだ。

小首を傾げる聡華に聡也は？ ホワイトアウル？ のシリンダーカードを揺らしながらフツツと笑う。

「わかりませんか？ この白い翼は赤き闘士の手綱としてはこの上なく有効なんですよ？」

「……。ああ？」

「はぁ……。姉さんはもう少しだけ色恋沙汰に興味を持つべきですね。いいですか、ロツソ・ミオネッティは一条 聡也のことが好きなんですよ？」

「……。あ、ああなるほどそういうことか！」

簡単なことだった。

要は好きな人の言うことには従う、少々乱暴な言い方だが聡也が言

わんとすることはこれだろう。

つまり聡也は自分自ら？ホワイトアウル？に搭乗して、ロッシン・ミオネットの行動を制御するつもりらしい。

使用者を限定しないIS Nだからこそとれた作戦だろう。

でも改めて考えると、少し・・・いやかなり内容的には鬼畜なきもするな・・・。

しかしなんにしてもようやく納得した聡華に聡也は、また溜息をひとつ漏らした後聡華に聞こえないぐらいぼそりと呟いた。

「・・・まあ、色々無知なおかげで扱いやすいというものでありますかね・・・」

作戦の概要をおおむね把握し、息巻く聡華を見る目は、いつになく冷たいものだった。

太陽は南中をとくに越えて、街は少しづつオレンジ色に染まり始める。

それは当然この街にある病院も例外ではなく、ブラインドを下ろし更にカーテンまで締めていると言うのにオレンジ色の光はそのわずかな隙間から部屋までもオレンジ色に染め始めていた。

その病室には、ベッドに横になる一人の少年とベッドのすぐわきにある椅子に座って腕を組む一人の少女がいた。

言うまでも無く、一条 聡也と鳥越 聡華である。

聡華は、時折いまだに目を覚まさない聡也を心配そうに見つめては、また目を閉じまた見ては閉じるを繰り返していた。

「・・・くっそ。姉さん姉さん呼ばれて鬱陶しい奴だがこうなっちゃうと何だかこっちも気分が良いもんじゃねえよな・・・」

そこには、いつもの荒っぽく聡也を遠ざけたり、お前の姉さんじゃないと呆れたりするいつもの聡華は居なかった。

ただ純粹に後輩の身を案じている。

……姉さんねえ……

聡華はふと、以前の事を思い出していた。

以前とは、要するに聡也と会ってからの事だ。

いきなり初対面で姉さん呼ばわりされて、ISで戦闘に発展。

まあ第一印象は最悪だわな。

だがそれは、まあこっちの話でよくよく考えてみるとコイツにとっては結構マジな話なんだよな。

コイツのいう姉ってうのはまあ間違いなくあの時あたしが戦ったあの？紫燕？の操縦者だろう。

あたしにクリソツだったしな。

……どんな気分なんだろうな。自分の姉……言ってみりゃ身内だよな。

そんな続柄のヤツと、剣を交えなきゃいけないっていうのは。

自分は一人っ子だし、別に親とは仲も悪くない。

やっぱ、良いもんじゃないよな。

つてか第一こいつらがなんで戦ってんのかさえよく分からねえし。

……姉さんねえ。

聡華はまた同じような事を頭の中でつぶやく。

それと同時に首をもたげる、変な考え。

姉さん……あたしが……姉さんねえ。

自分を姉と慕ってくる聡也に笑顔で返す自分の姿をほわわ〜んと想像する。

……結構良くね？

つて、馬鹿！

聡華はかぶりを振って、その考えを振り払う。

何考えてんだあたしは……！

うう、思い返すだけで何だが身震いして気だぜ……

。 . . . でも . . . もしマジでこいつがそう言って迫ってきたら . . .
自分の姉になつてくれって迫ってきたら . . . あたしはどうすんだ
ろうか？

それは決してない可能性。

ともすれば聡華の方から言うことだつて状況次第では考えられる事
だ。

ま、一番なのはそう言うのが来ない事だろうけどな。

聡華は、ゆっくりと目を開けて再び聡也を見ると微かに動いたよう
な気した。

ッ！

聡華はガバツと椅子から身体を起こすと聡也に向かって、はやる気
持ちを抑えながら静かに声をかけた。

「おい、おいッ、目え覚めたのか？」

「 うッ . . . ん . . . 」

「大丈夫か？」

「 ね、姉さん？」

「 誰がだコラ 」

寝ぼけてるんなら一発とも思ったが流石にココは病院で、コイツは
外傷こそなかったが気を失って救急車で運ばれた身だ。

とはいえ、既に拳を握りしめている辺りが自分らしいと思うが。

「とりあえず、先生呼んでくつから、勝手に起きあがったりはすん
じゃねえぞ！」

聡華は早口で聡也に向かってまくしたてると、病室を後にして近く
のナースステーションへ向かう。

走っている最中、聡華の胸の中はまるで実の弟が目を覚ましたかの
様なそんなうれしい気持ちで満たされていた。

もちろん本人は、それが何であるのかはよく分からなかったようだ
が。

「うん、脈拍も安定しているし少し起きたばかりで血圧が低いから多少くらくらするだろうけど・・・まあ心配はないだろう」

僕の隣で、中年のドクターが診察結果を簡潔に述べる。

ドクターの言うとおり、まだ頭はぼんやりとしているが聞こえた内容から別段異常が無いと言う事は分かった。

「まあ、今日一日は安静にしてもらう意味でも入院してもらって明日、再度検査して異常が見られないようなら退院という事にしようか。それにまだ殴打された個所は外傷こそ無いけどまだ痛むだろうしね」

「・・・・・・・・・・そうですか・・・分かりました」

「ありがとうございます、先生」

僕が静かにそう答え、鳥越先輩が頭を下げる。それを見たドクターは、何度か笑顔で頷いて病室を後にした。

「・・・・・・・・・・だ、そうだぞ？」

「・・・・・・・・・・ええ、そうらしいですね」

「ま、残念だけだな。今日はここでジツとしてやがれ」

「え？　残念？」

「お前、顔に？　今からでもロツソを探しに行きたい？　って書いてあるぞ」

「あ・・・・・・・・」

・・・・・・・・ふう・・・・・・・・。

流星風紀委員ですね。見抜くのがお上手で。

僕は気まずそうに笑うと、鳥越先輩はいつもの調子でフンッと鼻を鳴らして椅子に腰かける。

そして流れるしばしの沈黙。

僕はその沈黙が気まずくなって、特に理由もなく視線を色々と動か

す。

すると、ふと時計が目飛び込んでくる。

時刻はもうすぐ四時半を迎えようとしていた。

……四時半か……。

……つて四時半!?

「ちよちよつと、先輩！ 僕って言ったどれだけ長いあいだ……
いつつつツ!？」

バツと身体を一気に動かしたせいで、腹部を中心にして身体に痛み
が走る。

鋭い痛みした後、ジンジンと鈍痛が繰り返してきて、僕は顔をゆ
がめた。

「ああ、馬鹿！ お前一応怪我人なんだぞ？」

「で、でもロツソが！」

「ロツソは今あたしの同級生が探してつから大丈夫だよ！ 良いか
らあんま激しく動くなつての！」

鳥越先輩は、僕の両肩を持って制し僕をゆっくりベッドへ横たわら
せる。

抵抗したかったが、流石にこうまで痛みがあると抵抗どころか言い
返すので精一杯だった。

「つたく……怪我人なら怪我人らしくしろつてんだよ」

「……あ、あのそれで。先輩の同級生つて言うのは……」

「白鶴 理、風紀委員の委員長でなまあソコソコ強いし大丈夫だつ
て。それよか今はロツソもそうだが、お前の事だ」

え、僕の……？

鳥越先輩は、先ほど以上に真面目な顔つきで僕に尋ねた。

「お前、自分が気を失った時の状況覚えてるか？」

「ええ、それは……はつきりと」

「よし、ちよつとその事について話してもらいてえんだが……」

「……と、言うわけなんです」

「なるほどね……。ってことはお前を気絶させた時は紫燕あのの操縦者女だけだったんだな」

「はい、そうですね」

確かにあの時は姉さん一人だった。

……でも今考えてみると少し変な気もする。

そもそも姉さんはあんなところで何をしていたんだろうか。

そしてどうして僕を気絶させる必要が……？

しかし、何にせよ姉さんが単独で動くとは考えにくいから、多分その指示を出している人物……。？彼？が居るのは間違いないだろう。だとするならば、ますますこうしちやいられないと言っ気持ちは強くなる。

僕を襲ったと言う事は、ロッソにも手を伸ばしている可能性は充分に考えられる。

イグニッションキー

くそ、せっかく博士に起動キーを送ってもらったばかりなのに……
・ってあれ？

僕は、自分のポケットを横になりながらではあったが探る。

左右のポケット、そして尻ポケットも。

……。
……。
……。

な、無い！

そんな、まさか！？

みるみる青ざめていく僕の異変に鳥越先輩も気がついて、焦り気味に声をかけてくる。

「どうした？ おい、顔色が悪くなった見てえだけ……気分でも悪いのか！？」

「い、いえ……。そうではなくてですね……。その……。ええと……」

「だから何だよ!?!」

鳥越先輩が、早く言えと苛立ちを募らせた声を上げる。

いや、だって早く言えって言われても自分だって可成り混乱してて……ッ

僕は顔をひきつらせながらも息を整えると、その整った息がまた乱れぬうちに一気に言った。

「ほ、ホワイトアウルが……な、無い……」

「はぁ!?!」

鳥越先輩も顔が引きつりそして青ざめる。

当然だろう。

現代兵器の最先端。

性能にもよりけりだが単機で世界と戦えるだけの力を、?奪われた?のだから。

「お、おい! お前冗談だろ!?!」

「そんな性質の悪い冗談言いませんよ、事実です、事実!」

「……な、なんだとぉ……!」

「僕のズボンのポケットに入れておいたシリンダーカードと起動キ

ンキ全部……それが、まるっと無くなつて……」

「そ、そんなの……お前……」

もう鳥越先輩も予想がついている。

いや、むしろそれ以外に考えられない。

「お前を気絶させたヤツ意外に持っていくやついねえじゃねえか!」

そう、間違いなく?ホワイトアウル?は持ち去られたのだ……。

……姉さんに。

なんてことだ!

いくら相手がISを部分展開していたとはいえ、一番起こしてはいけない問題を起こしてしまった……。

IS-Nは基本操縦者を登録してしまえばだれでも扱う事の出来る代物。

ISのように女性しか・・・といった縛りが無い汎用性に富むが敵にわたってしまった時は簡単に自分たちに牙をむいてくる。それが兵器だと言ってしまえばそれまでなのだが。

「ああ、くそっ！」

僕は、ベッドを思い切り殴りつけると、再び身体を起こす。もう痛みなどどうでもいい。

頭の中はもう奴らを止め無ければいけないと言う思いでいっぱいだった。

しかし、それを許す鳥越先輩では無かった。

鳥越先輩は僕がベッドから降りたのを見るやガツとその肩をつかんだ。

「あ、コラ！ 馬鹿野郎が何やってやがる！」

「は、離してください！ い、行かないと！！！」

「馬鹿言っでんじゃねえ！ 何度も言うがめえは怪我人なんだぞ！」

「怪我人だろうとなんだろうと、僕にはIS-Nを奪われた責任も。」

「だから、そう言うのは今は置いとけて！ 第一お前行くにして

もあいつらの場所が分かって・・・」

と、鳥越先輩が言いかけた時だった。

スズーンッ！！

「！！！？？」

二人揃って窓を振り返る。

鳥越先輩は僕から手を離すと、カーテンとブラインドを素早く開いた。

「あれはッ！？」

僕たちが見た光景それは、オレンジ色の世界に浮かぶ二つの影と立ち上る爆煙。

あれは・・・あのシルエットは・・・！！

僕は窓の外の光景に目を凝らす。

そしてその二機のシルエツトを完璧に判別できた時、僕は血の気が引いていくのが分かった。

分かったからこそ僕はその光景から目を背ける。
いやだ、認めたくない。

きつと見間違いだ、聡に決まっている。

こんな遠気から見ているんだ。

そうさ、だってあれが・あれ・が・。

僕はもう一度、恐る恐るゆっくりと確かめる様に目を二機のシルエツトへと向ける。

はあ、はあッ・。息が荒くなっていく。

違う・。違う・。違う違う違う!!!!!!

だが、そうやって何度も否定しても目に入ってくる情報がその否定を更に否定する。

? ホワイトアウト? と・。? ペルフェツト・エスターテ? ・。・。

ぼ、僕の所為だ・。僕がロツソを泣かせてしまって・。そして僕が気絶させられて・。結果がこれだ。

一体、僕は何をやってるんだ・。!!!

と、とにかく、責任を取らなくちゃ・。

僕は息を整えることも忘れ、重たい身体を引きずり病室を出ようとする。

だがまたしても、鳥越先輩が僕をつかんだ。

振り返り鳥越先輩の顔を見る。

その顔は、さっきまでの焦った表情ではなく、真剣なまなざしだった。

「・・・離してください・・・」

「駄目だ・・・そんな状態のお前を行かせられるか」

さっきから聞いてれば、そんな状態そんな状態って!

僕は思わず声を荒げた。

「僕の状態！？ 分かってますよ、自分自身の事なんですから！でも行かなきゃいけないでしょう！ 僕の所為で・・・責任もあるし・・・何よりあそこには僕のIS-Nもそしてロツソも居るんですよ！！」

「馬鹿野郎が！！ あたしはんなこと言っただんじゃねえんだよ！！」

「・・・つく・・・！？」

鳥越先輩の凄い剣幕に推され、言葉が詰まる。でも、でも・・・

「あたしが今言っただんのは、お前の身体の事なんかじゃねえ。お前の気持ちの事だよ」

「き・・・も・・・ち？」

「お前・・・今、相当キてんだろ？」

「・・・ツ、そ、それは・・・」

「そんな自分を追い込んだ状態で、何ができる！ それに責任が、とかぬかしてやがったが自分を責めきつたヤツが取れる責任ってなんだよ？ 死ぬ気か？」

言い返せなかった。

鳥越先輩を言い負かすだけの言葉が出てこない。

だって・・・責任は取らなきゃいけないし・・・。

だが肝心のどうやって責任を取るのかが出てこない。

何を持って責任を取ったとするのか。

言い淀む僕に鳥越先輩が大きくため息をついた。

「・・・はあ、一回落ち着いて良く考えろ。確かに飛び出す事は悪い事じゃねえ。あたしだって熟考するタイプじゃねえからな。ただ、考えの一つや二つまとめてけ。飛び出すのはそれからだろ？」

「考えを・・・まとめる・・・」

「そうだ・・・お前は何かしてえんだ？ 行ってどう責任を取る

？ 何に対して、誰に対して？」

どう、取るか・・・。

誰に・・・

何を。

僕は、息を整えると頭をクールダウンさせる。

個人的に、かなり時間のかかる問題だと思っていたのだが頭を冷やして考え直してみると、意外に簡単な答えが浮かんだ。

ああ・・・そうか・・・。

それでいいんだ。

僕は・・・。

そうだ。

それでいい！

いや、それしかない！

僕はバツと鳥越先輩を見る。

鳥越先輩は、肩目を閉じニヤリと笑った。

「分かったか？」

「・・・はい」

力強く頷く僕に、鳥越先輩はまた大きいため息を漏らした。

「全く・・・先生にや後で言い訳考えとかねえとな」

「・・・そうですね・・・なんって言いましょうか・・・」

「んー、そうだな」

「え、う、うわちよ、ちよつと!」

鳥越先輩はいきなりの事で驚く僕を尻目にヒョイツと背中に背負う。俗に言うおんぶというやつだ。

「世話のかかる後輩が、散歩したいって言ったからって理由でいいだろ!」

鳥越先輩は、へへつと笑うと僕を背負ったまま病室を後にする。

ちよつと恥ずかしかつたけど、これはこれで何だか・・・心地いい。

それが、先輩が姉さんに似ているからなのか、普通に先輩がおんぶ言う事する事に慣れているだけなのかは分からないが僕は先輩の暖かい背中心地の良い揺れに身をまかせながら、現場へと急ぐ。

日は更に傾き更にオレンジ色の濃さを増す。

向かうはこの街の変電所。

そこを、襲撃した者達。

そこで、巻き込まれた者達。

そして、そこへ向かう者達

役者は今、完全に揃おうとしていた。

第31話：Side Owl く揃う役者達・事件はこうして始まったく（後書

何が、次回は普通ですだw

普通にSide Owlをお送りしました・・

すいません・・後が気なんて当てにしちゃダメですよ、どうもする
くです。

まあですが丁度StrikeとOwlで3話つっなので丁度いいと
言えば良いですよね??

次回こそ次回こそ普通に戻ります。

つてか、早くオーシャンズに行きたい自分（自分で書いといてww

まあまだ少し長くなるかもですが、それこそ長い目で見てやってく
ださい。

でも32話でお会いしましょう。

さよならッ！

第32話 二人、場所は違えど前を見て

そ、そんな馬鹿な!?

僕は目の前の光景をどうやってもすんなり受け入れる事が出来なかった。

理解できないわけではない。

むしろその逆で、すんなりとその影が何なのか理解できたからこそ、そしておおよそ予想できていたからこそ、今のこの現状を受け入れる事が出来なかったのだ。

こんな、街中でISそれも三機とは・・・!!

僕の隣に居るセシリーも、顔が完全にひきつっている。

「と、とにかく建物の中に!」

僕はまだ外にチラホラ残っていた数名のチャラ男と兎束、セシリーに向かってプレハブ小屋の中へ入るように叫ぶ。

全員が入った事を確認して、ドアを閉めるとそのドアの窓から外の様子をうかがう。

・・・アレは・・・

三機のISは一機のISが飛び上がるのを追いかける様に空へ上がり上空で睨みあっている。

そしてその三機のISはどれも見覚えのあるものであった。

「・・・あれは、ローラさんに、ロツソさんそれに聡也さんですね・・・」

「うん、姉さんは間違いなくあの二機を止めようとしてるみたいだけど・・・どうして二人がこんな事・・・」

その疑問はセシリーも同じだったようで、手を顎に首をかしげている。

そもそも、なんでここをISなんていうもので襲う必要があるんだろうか。

ISは確かに強力な兵器である。

ISには現存するどの兵器もかなわない。

戦闘機も、戦車も、軍艦も。

機関銃も、砲撃も、ミサイルだって。

いや、ひよつとしたら戦術核レベルの物を持ち出しても勝てないかもしれない。

それぐらいの代物だ。

そしてそれを扱う者は、少なからず訓練を受けているはずである。

……まあ、僕は……その……ね。

と、とにかくだ。

聡也やロツソは確実にそれなりの訓練を積んでいるはず。

並みの連中相手に、遅れを取るとも思えないし……。

情報が無くて相手が分からないにしても、だったらどうして初めからISを起動させる必要が……。

うくん……分からない事だらけだぞ……。

まあ……毎度の事でもあるけど。

「アル！ 考えるのも良いですけど今はそれよりも……ッ！」

「え、ああ。そうだねとにかくあの二人を止めないと！」

セシリーの一喝で、頭を切り替えると僕とセシリーは兎束達をなるだけプレハブ小屋の奥に居る様に促して外へ出る。

僕はセシリーを一瞥すると、セシリーはその視線にゆっくりと頷いて返した。

そして僕は真つ二つにされた愛機ストライク・バーディに目を落とす。

……アレ以来、まともに起動させてないけど。

でも、アクセスを拒否している以外は基本的なデータ抽出は出来たと言っていたし、特に起動させるなどは言われていない。

それに今は、そんな事を気にしている場合でもなかった。

視線を愛機ストライク・バーディから空を舞う三機に移す。

流星はモンド・グロツソで総合二位に輝いただけの事はあり、二機相手でも手いっぱいという事は無かったが、それでも向こうは自由に攻撃出来る。

しかし姉さんは周辺の被害の事も考えるとそうそう手荒く攻撃が出来ない。

更に言えば。相手が撃った流れ弾も出来る範囲で弾きながらの戦闘だ。

こんなの、いくら姉さんでも何時か絶対に限界が来てしまう。そう思うと、悠長に考えている時間なんて無かった。

僕達は同時に叫ぶ。

「行こう！ ストライク・バーディ！」

「まいりますわよ！ ブルー・ティアーズ！」

一瞬で光が僕たちを包み込む。

そして、空に？一機？の鮮やかな青色のISが舞いあがった。

つて………え？

「ちよ、ちよつとアル！ 何をしていますの！？」

セシリーが僕の方を振り返って叫ぶ。

その顔は驚きというよりは、疑問に近かった。

だがそれは僕も同じ事だった。

確かにISの起動に成功はした。

ハイパーセンサーも問題なく動いている。

だが……ただ身体が、一挙手一投足がとんでもなく重たかった。

別にパワーアシストの故障では無い。

「な、なんだコレ！？ こんなファーストシフト以前以下じゃないか！」

いくら重火砲・重装甲の鈍足ISと家でこれは異常である。

それに加えてスラスターの動きも緩慢で、フレキシブルスラスター

の名が泣いていた。

「ううッ、くそ一体何がどうなって……」

『……だ……の……じゃ……』

「……え!?!」

わけがわからずただ、焦る僕の耳に……、いや正確には頭の中にどこからともなく声が響く。

それは、優しくだがそれでいて裏がある事を匂わせる不思議な声色。初めは断片的にしか聞き取れなかったが次第に言葉が繋がって行く。

『まだ……の……じゃない……』

「さ、さつきから誰が……」

僕は居ないと分かっているながらも周囲をキョロキョロと見回す。

当然誰もそこには居らず、一番近くに居るのは少し焦りながら僕を見下ろすセシリーだけ。

繰り返し響いたその言葉は、ようやく意味のある言葉になった。

『まだ、?その時?じゃないよ』

「え!?!」

はつきりと聞こえた。

そして聞き取れたと同時に、ストライク・バーディの装甲が光となつて霧散する。

「なッ!?!」

「嘘!?!」

セシリーと僕の驚愕の音が重なる。

「アル! 本当に何をやってますの!?!」

「僕にもわからないよ! なんか頭に声が響いたと思ったら次にはISが消えてて……だからその……ああもう!?!」

僕は苛立って、自分の太もも辺りをパンツと叩き、セシリーにのまの勢いで言い返した。

「とにかく、セシリーは姉さんの援護に行つて!?!」

「でも!」

「今は、それどころじゃないでしょ! 僕もとりあえず出来る事を

するからッ」

なんでこうなつたのかは、今はどうでもいい。それを深く考えている暇なんて無いのだ。

僕はセシリーにピシャリと言う。

セシリーも、これ以上言い争いを続けるのは無駄だと判断し姉さんのもとへ一直線に飛ぶ。

僕はそれを確認すると、ふうっと息を吐き気持ちを落ち着かせて考える。

・・・セシリーには、ああ言っただけ。

今の僕に何ができる？

僕は悔しげに、オレンジ色の空を見上げる。

僕はまた、大事な時に誰の力にもなれないでいた。

「ツつう！」

ローラは？ ホワイトアウル？の荷電粒子砲を身を翻して避け、間髪いれずに遅い来る？ペルフェッド・エスダーテ？の蛇腹剣をアサルテンボラーレトライフルの銃身で弾き距離を置く。

ここまで、動きが制限されちゃうときついわね・・・！

ローラの持ち味は何と言っても、高い機動力にある。

機動力で他を圧倒してきたからこそその世界二位であり、射撃部門でのヴァルキリーなのだ。

だが今回その機動力は思わぬ形で制限されてしまった。

そう、それはここが市街地上空であると言う事。

自分が下手に動けば流れ弾が市街地に被害を及ぼす可能性もあるし、逆にだからこそ自分も下手に銃を撃てない。

既にローラは、この戦闘が始まった直後、千冬にこのエリア一帯の封鎖および住民に退避を打診したがそれもどこまで進んでいるのか。つて、泣き言言ってる暇があったら、なんとかしなさい自分って話ね！

ローラは距離を取りつつ二機の下にまわりこみサブマシンガンとアサルトライフルのトリガーを引く。

パツと二手に分かれる？ホワイトアウル？と？ペルフェッド・エスダーテ？。

大体、この二機がと言うよりこの二人がなぜこんな凶行に及んだのか分からない。

それにさっきから、得意のこの口で色々と言葉を投げかけているが一向に返事が返ってこないのも妙だった。

確かロツソと言う娘は、ISを起動させるとかなり気性の荒い性格に変貌すると聞いた。

それがこの戦闘では信じられないくらい静かなのだ。

まあ、ローラはロツソの事を話でしか聞いていないから詳しい事は分からないがそれでも何かおかしいと言う事は感じていた。

ローラは分かれた二機の間機体を割り込ませると、左右に銃を構えて乱射する。

その銃弾に当たるまいと、高度を上げる二機。

ローラがその二機を確認した直後、青白い閃光がその二機に直撃する。

「えッ!？」

ローラは声を漏らすと、閃光が飛んできた方向を振り返る。

するとそこには、スターライトMk-?を構えたセシリアの姿があった。

「セシリアちゃん!? どうしてここに……」

「丁度私たち、この近くに居りましたの。緊急の事でしたのでISの使用許可などは……その……アレですけど……」

「使用許可の件は今はどうでもいいけど、私たちってことは……あの子も？」

「ええ、アルも居ますわ。あの変電所のプレハブ小屋に」

ローラはハイパーセンサーで、その建物を拡大する。

外に人影は見えなかったが、まあセシリアが言うのだからあそこに弟は居るのだろう。

……って

「居るならなんであの子も来ないのよ？」

「いえ、一度はISを起動させたのですが……その何故だかすぐにISが霧散してしまつて……」

「なんですつて？」

エラーでも出たのか……。

いやでも、確かに？ ストライク・バーディ？ は現状色々問題はあったが起動してすぐに霧散するなんて問題は向こうでも聞いた事が無かった。
アメリカ

詳しくは分からないが、明らかにおかしい。

ああもう、どうしてこうわけわからない事が立て続けに、起こるのよッ。

ローラは心の中でひとりごちりつつ、頭を切り替えて視線を二機のISに戻す。

とりあえず今は、あの二機をしつかり押さえなきゃね……。

ローラはセシリアに目で合図を送り、それにゆっくりと頷いて返すセシリア。

そして？ ストライク・ミラージュ？ と？ ブルー・ティアーズ？ はほぼ同時に？ 敵？ に向かってスラスターを噴かした。

「あの、もう少しなんとかありませんか!？」

「お前、人に背負ってもらって文句いうんじゃないぞ!！」

聡華は走りながら背負っている聡也に厳しい口調で言い返す。

正直聡華がこれ以上ないペースで走ってくれていることは聡也にだつてわかる。

現にもう病院がはるか遠くに見えた。

しかし目的地はまだまだ先。

その目的地であろう場所から響く銃の乾いた音やスラスタの轟音だけが耳に届き聡也の焦りを加速させていた。

早く早くと思うが、聡華もさつきも言ったがかなりのハイペースで走っている。

だが、やはり分かっているももどかしいし何より自分の愛機を取られ、あまつさえロツソまで……本当に情けない。

「……下向くんじゃねえぞ」

「え?」

聡華はこちらを振り向かず独り言のように静かにでもこちらにはつきり聞こえるような声で言う。

「今お前が下を向いても何も変わらねえんだ……。同じ変わらねえなら上を向いてるよ」

「……上ですか」

「ああそうさ……。上を見ることは何事においても基本だぜ?それに大抵上にあるもんさ、逆転の鍵ってのはな!」

聡華はこちらをちらりと一瞥してニツと笑う。

その笑顔は、不思議と聡也を落ち着かせる。

顔が似ているからなのだろうか……。と聡也は思う。

だがなぜだかそれだけでは、説明できないような気もした。自分の心情を聡華は機敏に察して的確なアドバイスをくれた。不思議だな・・・本当に。

やっぱりこの人は・・・。

「姉さん・・・？」

「違うつての！！」

聡華は器用に背中の聡也を走りながらかかとで蹴りあげる。

太もみに軽い痛みを感じながら、一瞬目が合いお互いにフツと笑う。

そして二人ほぼ同時に視線を前に移動させると立ち入り禁止の札がついたバリケードがあった。

両脇にはこのエリアを管轄している警察官もいる。

「っへ悪いが通させてもらっぜ！VIP背負ってるもんでな！！」

聡華は啞然とする警察官を他所にそれを何の迷いも無く飛び越える。

ここを超えたということは、もう目的地は目と鼻の先・・・。
上空に？四機？のISも見える。

とにかく今は上を・・・前を向いて、やるべきことをできることを、するだけだ。

僕はついさつき姉さんから連絡をもらった。

それはあの？ホワイトアウル？の操縦者は聡也では無く、あの学園を襲撃した犯人だという内容だった。

それを踏まえて僕は再びプレハブ小屋の外へ出て四機を見上げて考える。

敵はどうして、ロツソを利用したのか、そしてなぜISという現代最強兵器を使ってこんなそれほど大きくも無い変電所を襲撃したのか・・・。

ここには確かにIS関係といえ、千葉 志穂音がいる。

彼女は確かに天才といってもいいレベルの人物ではあるが、わざわざその一人のためにISを使うとはいくらなんでも考えにくい。そういえば彼女たちは以前無人機のコアを、奪取するべく学園に二度目の襲撃をかけてきた。

まあままと、盗まれたわけだけど……。

でもあれは完璧に壊れていると織斑先生は言ってたし何よりそんな代物がここにあるとは到底思えない。

……じゃあ一体……何が。

僕は、兎束や志穂音と話した事をざっと思い返してみる。

おかしなところはなかったか、何か引つかかる所が無いか……。

うん……でも、やっぱりこれと言っておかしなところはないよなあ……。

それに大体、そんなものがあるのなら初めにそれを出す……は……

……ず？

……ちよつと待てよ。

僕はポケットからさつき受け取ったメモリーカードを取り出す。

そしてコレを受け取った時の会話を思い出してみる。

？けつきよくウチがほとんど一人で組み上げたようなもんだしねえ……。丸二日かかつちやったよ……？

あの時声色は確かにかなりサラツとしたものだったけど、意外に顔は本気だった。

本当に丸二日かけて苦労したんだってというのがその表情からも見て取れたし。

でも……。

？だったら、持って帰って調べといてよ？

ここだ。

そんなに苦労した物を、志穂音はやけにあっさりと僕たちに手渡した。

そしてそれを兎束も咎めも何もしていない。

使える状態にしておきたいって言ったのにもかかわらずだ……。

・・・どうして。

・・・いやどうしてじゃない。

そう、そうだよ。

そうなんだ！

そうだとしたら、まずい！

僕は、弾かれたようにプレハブ小屋の中へと急ぐ。

ドアを開けてまず飛び込んできたのは、完璧にのされたチャラ男たちだった。

それも一人二人じゃない。

この小屋に居たほぼ全員。しかも争った形跡が無いところを見ると、チャラ男たちはほとんど一発でのされた事は容易に想像できる。

いくらチャラ男と言ったって体格は決して華奢じゃない。

僕は倒れてうずくまるチャラ男達の間を縫うように地下への階段へと進む。

皆倒れてはいるが、特に命にかかわるような外傷を負っている人は居ない。

それよりもだ、今は恐らくこの先に居るであろう人物・・・それが一番の問題だ。

僕はもう一度、チラツとうずくまるチャラ男達を見やる。

正直、今の僕が正面切って喧嘩してもこの人たちには勝てない・・・。

そんな人たちを、一蹴した人物がこの下にいる。

一筋の汗が僕の頬を流れた。

正直言つて怖い。

何より痛い事は好きじゃない。

それは今も昔も変わらない。

でも僕はセシリーに言っちゃったもんなあ・・・。

出来る事をするって・・・。

僕はフウツと息をひとつ吐いて気持ちを落ち着かせると、身をかがめて一歩づつ階段を下りて行く。

十数段の階段がこの時ばかりはやけに長く感じた。

そして階段を下りあのムワツとした蒸し暑さが身体を包む。

僕は階段の降り口から部屋の中の様子を覗く。

するとそこには、？鳥越先輩のそっくりさん？と志穂音の姿があった。

僕は飛び出そうとも考えたが、少し様子が変わった。

とてもじゃないが、？そっくりさん？と志穂音が？敵対しているようには見えなかったからだ？

むしろ何か・・・話し合いというか・・・商談というか・・・交渉というか・・・

とにかくそんな感じなのだ。

僕は少し様子を見る事にした。

それと同時に何だか今すぐにでも闘うんだと意気込んできた自分が妙に馬鹿らしくもなっていた。

「・・・随分と荒っぽい手を使うんだね」

「知るか、これ考えたのは聡也だ。あたしゃ知らねえよ」

志穂音の不機嫌な発言に、聡華も同じく不機嫌で返した。

聡華はここへ、かなり乱暴に進入している。

ブレハブ小屋のチャラ男達を全員のしたのも彼女だ。

で、志穂音の所に来てみれば抵抗どころか逆に招き入れられてしまった。

肩すかしもいいところである。

更に詳しく聞いてみれば、あの女かなえから既に連絡が来ていると言っただからもう苛立たずには居られなかった。

何より毎度のことながらあの女に利用された自分に腹が立つ。

聡也もこの事を知っていたのだろうか・・・？

そう思うといくら聡也でも流石に腹を立てずには居られなかった。

「……どうでもいいけどさ、あの人礼儀をわきまえた人が来るって言うてたけど……君全然そんなじゃないね」

「……あの女の事はどうでもいいんだよ……。あたしはてめえと長話する気はさらさらねえ」

「ウチだつて無いさ。とつとと帰つてほしいぐらいなのにわざわざ招き入れてあげてるんだから感謝してほしいよね」

「もういい。あの女から聞いてんだろうが。ほれ、例の物出せよ」
聡華がせかすと志穂音は座っていた机の一番下の引き出しの鍵を開けて中から小さい白い球体を取り出した。

それは一見するとただの鉄球のようだったが、鈍く光るソレはどことなく神秘的な力に満ちている。

球体を見た聡華はほおっつと声を漏らした。

「確かにコアだな……。そこだけは事実かよ……。つたく」

「当たり前じゃん……。設計図送りつけといて何言つてんの？」

「だからあたしは知らねえんだつての……。まあいい……。とりあえずそれこつちに渡せ」

「ほい」

志穂音はコアをポイツと放り投げる。

それはまるで、ゴミをゴミ箱へ放り投げる様に雑なものだった。

聡華はコアを落とすまいと慌てながらも両手でしっかりと受け止める。

「馬鹿野郎！ 落つこちたらどうすんだよ！」

「別に」

悪びれる様子のない志穂音に苛立ちながらも聡華は受け取ったコアを改めて吟味する。

それと同時に、再び脱力感が身体を襲う。

つたく……。本当につまらねえ……。

こんなのだったら別に、あたし一人でもできた……。つて、あん？と、そのとき聡華はこちらを伺う一つの気配を察知する。

そして、聡華を襲っていたつまらなさからくる脱力感がスツと消えていくのがわかった。

チラッと、志穂音を見やる。

別段変わった様子がなく、きよとんとしていることから、これは別に志穂音が仕組んだとかそういう訳ではないらしい。

自然と笑みがこぼれてくる。

そして聡華はその人物に向かって叫んだ。

「・・・おい、出て来いよアメリカ力野郎・・・」

「・・・おい、出て来いよアメリカ力野郎・・・」

「・・・はあ・・・」

いつかは見つかるだろうなあとは、思っていたけど・・・予想外に早かったなあ。

僕は半歩横にずれて、自分の姿を敵にさらす。

「あ、アルデイ!？」

僕の登場に志穂音は驚き？そっくりさん？は僕を意味ありげな笑みで睨んでいた。

「おう、てめえとは久しぶりだな・・・」

「・・・そうだね・・・僕はできれば会いたくはなかったけど・・・」

表面上平静を装うが、内心は心臓バクバクものである。

以前彼女と面と向かって平然と話せたのは、少なくともISという一つの力があつたからだと今更ながら理解する。

今こつちには何のアドバンテージも、イコールになる要素もない。

言ってみればそれだけのことなのだが、それだけのことが今の僕にはたまらなく怖かった。

「そうか・・・？ そりゃ残念だなあ。あたしはよ・・・会いたかったぜ?」

「そっくりさん？は手に持っていたコアを近くの机の上に置き、ゆつくりとこつちに歩み寄ってきて・・・」

「がッ!？」

「あの時の借りは返させてもらわねえとな!！」

彼女の膝が、容赦なく僕の腹部を蹴り上げる。

息が出来なくなるほどの、強烈な一撃に僕はいと簡単に崩れ落ちる。

「ちょ、ちょっといきなり何をして・・・ッ!？」

駆け寄ろうとした志穂音に対して、？そっくりさん？は鋭い眼光だけで動きを制した。

そしてそれを確認すると、再び僕に向き直ると、未だに立ち上がれない僕の髪の毛をつかんで無理やり引き上げる。

「うう・・・」

「このぐらいで伸びてもらっちゃ困るな、まだまだあたしの気はおさまらねえんだからよ!！」

そのまま僕を志穂音の方へ投げ捨てる。

いくら僕が小柄だといっても志穂音はさらに小柄である。

受け止められるはずもなく一緒に吹き飛ばされてしまう。

「いつつつつ・・・む、無茶苦茶するね・・・彼女・・・」

「そんなことより・・・ケホケホツ・・・志穂音、大丈夫?」

「あはは・・・こんなのウチらじゃ日常茶飯事だから・・・ね・・・」
志穂音はケラケラと笑う。

どうやら本当に大丈夫なようだが、よく笑っていられる。

？そっくりさん?ここまでやらかしてもまだすつきりしないらしい。

本当に欲求不満だなあ・・・。

もちろんだがこれは皮肉だよ。

なんて皮肉言ってる場合でもない。

現状では彼女に勝てるような要素は何もないのだ。

体力や技術その他諸々・・・悔しいが何一つ勝っていない。

情けないけどね。

でも……どうしよう。

このままじゃ、二人ともなぶり殺しもいいところだった。

何か……何か……ないのか、逆転できる手立ては……。

ない知恵を振り絞って考えていると志穂音が、僕の袖をクイクイツと引っ張る。

その方向に顔を向けると、そこにはこの場とは不釣り合いなほど満面の笑みの志穂音が？コア？を手にしている。

……あれ？

だってコアは……。

僕は、振り返と机の上には確かにまだコアが置かれていた。

僕は声を潜めて志穂音に尋ねる。

「ど、どういうこと!?!」

「アレ、偽物。こつち、本物。フッフツ」

「え、偽物!? いやでも……」

「いいから、逆転したけりや力貸してよ。君、あのローラ・サウスバードの弟なんでしょ……」

「え、何でそれを!?!」

「いいからいいから、ちよっとそのお得意の口をあたしに貸してよ」

「……ああ、もう後でしっかり説明してもらっからね!」

「そりゃもちろん」

志穂音は、また笑うと僕に耳打ちする。

それを聞いて、僕は一瞬戸惑ったが、とにかく逆転の一手があるのならそれにかけるしかない。

僕は痛む身体で志穂音の前に立つと相手から志穂音が見えにくくなるように一、二歩前が出る。

恐れずに……今は志穂音を信じて彼女まへを見た。

そして、僕は怪訝な顔をする彼女に向かって言う。

「ねえいきなりで悪いんだけどさ、このままやっても君の勝ちだろ
うし……」
最後の思い出作りじゃないけどほんのちょっと僕の話に付き合っ
て
よ
」

逆転へ向けた針がゆっくりと動き出した瞬間だった。

第32話〜二人、場所は違えど前を見て〜（後書き）

かなりお久しぶりです・・・
本当にすいませんでした・・・。

ここしばらくずっと忙しくて更新のこの字も出来ませんでした・・・。

なので帰還が開きすぎて32話つてまずどんな内容だったっけから
始まって・・・（滝汗）

結局かなり強引な文章で帳尻合わせがかなり大変な感じに・・・。
とりあえずはなんとかホッと一息つける時間も出てきましたからま
た連載をさせていただこうかなと思ってますのでよろしく願いま
す。

で、本分なのですが、まだ少しこの変電所回が続くと思われま
す。気長に見てやってください・・・。

ではこの辺で33話でお会いしましょう。
さよならッ！

第33話 引かれた逆転への撃鉄

「……話だあ？」

「そつだよ、お話」

前にも増して怪訝な顔になる？そっくりさん？に僕は笑いかける。力比べじゃ僕たちの方が不利でも、話し合いならまだ僕達に分がある。

それにこちら側からのこういふ話し合いの提案は一見すると不利なようにも見えるがそれは命乞いとかさういふ助けを懇願する時の場合で、僕がやるうとしてるのはただ単なるお話だ。

時間を稼ぐためのね。

そつなつてくると、この？不利な立場が活きてくる？。

僕達が不利な立場である事を、出来る限り発する言葉の中に混ぜ込めば自分が絶対的に有利な立場であるとより強く意識して必ず乗ってくるはずだ。

相手が慎重な相手だと少し難しい手だけど、この？そっくりさん？だからね。

言っちゃ悪いが、口で負ける気はしない。

「なんであたしが、お前と話なんざしなくちゃなんらねえ？」

「良いじゃないか、別に。話ぐらいしたってこの状況がひっくり返るわけでもないしね……？」

「それは……そりゃそつだろうけどよ」

「だったら、ほんと少しいいんだよ。僕の話聞いてくれないかな？」

「……ちなみに聞くが何の話をするつもりなんだ？」

お、ちよつと乗ってきたかな。

でもここで安心しちゃ駄目だ。こう言うのは相手の乗り初めが一番肝心なのさ。

さて何の話をするかだけど……。

ここは無難に、彼女達に関する事にしよう。

こんなところで世間話もおかしいし、突拍子もない事に話題を切り替えるのも不自然だからね。

「そうだね……それじゃあ……僕の推理を聞くって言うのはどうだい？」

「推理だと？」

「そうさ、まあと言っても想像の範疇を出ない事なだけけどね……これまでの君たちの襲撃から色々考えていた事をさ……聞いてみないかい？　僕も興味があるんだ。僕の考えがどこまで当たってるのかにはね？」

その推理が自分たちの事だと分かると、彼女は眼を細めた。

当然だね。

自分達の事をどこまで相手が知っているのか、それが気にならない人間はまずいない。

ひよつとしたら自分たちの核心と呼べる所まで相手が知っているとしたら……？

そう考え始めるとまず、この申し出を断るという選択肢は出てこないはず。

そして案の定……。

「……いいぜ、まあお前の言うとおりこの状況が変わるわけでもねえし……あたしにとっちゃ特にデメリットもなさそうだしな」
彼女は近場の椅子を拾い上げて背もたれを前にしてドカツと腰を下ろすと乱暴に言った。

「じゃ、聞かせてもらおうか？」

「……じゃあ、始めるね。まず」

僕の時間稼ぎはどうやら今のところ上手く行っているようだ。

ローラはセシリアと協力しながら、二機を変電所近くから遠ざけようとしていた。

しかしいいところまでは行くのだが、やはり機動力の制限は思いのほか足かせになっている。

流れ弾などのことを考えると下手には撃てないし、かといって撃たなければ変電所や自分たちも危ない。

とくに厄介なのは、戦い始めてからも今も？ペルフエッド・エスダ―テ？駆る？ロツソ？だった。

いくらセシリアが来たとはいえ彼女も射撃型。

近接戦闘はローラ以上に実力は壊滅的だった。

世界第二位の操縦者と代表候補生。この二人をもつてしても均衡が崩せない理由はここにあった。

「セシリアちゃん！」

「つく！？」

そうやって考えているそばから、セシリアはロツソに組み付かれ、それをローラが？ホワイトアウル？をけん制しながら助けるという展開が続いている。

焦りを覚えながら機体を駆るローラへ向けて唐突に？ホワイトアウル？から通信が入った。

「！？」

「どうも・・・初めましてですね・・・。ローラ・サウスバードさん？」

「・・・そうね。まあ千冬から襲撃があっただってことは聞いていたけれど」

「そうですか、じゃあ僕たちのことはご存じなんですね」

バイザーで隠れた顔からは表情を読み取ることができなかったが、逆にそれが不気味さを演出していた。

彼が手を軽く動かすと、ロツソはそれに従うようにセシリアから距

離を置き制止する。

微動だにせずこちらを睨むロツソを一瞥しながらローラは尋ねた。

「あなた・・・ロツソちゃんに何をしたのかしら？」

「・・・別に何もしていませんが？」

「嘘はいただけませんわね、そんな答えで私たちが納得できるのもお思いですか？」

「けれど、僕は本当に何もしていないんですけれどね・・・特にこれと言っては・・・。」

強いて言うなら少し、？お話？はしましたけど」

「お話ですって？」

セシリアが？ホワイトアウル？を睨みつけローラは怪訝な顔を浮かべる。

・・・お話・・・。」

まあ、少なくとも楽しい内容じゃないことは確かよね・・・。

だがただ会話した程度で人格がここまで変わるとは考えにくい。

その？お話？というのが彼女を変えたのは事実だろうけど。

一体何をしたって言うの・・・？

「そうですね、ほんと二言三言会話を交わしただけです。嘘は言っていない・・・ですよね、ロツソ？」

彼の問いかけに、ロツソは静かに一度だけ首を縦に振る。

首を振ったロツソを見て満足げに口元を釣り上げる彼。

「ほらね、言ったとおりでしょう？」

「・・・みたいね・・・。」

「ふむまだ納得されていない様子ですが・・・なにぶんこちらもそこまで時間があるわけではありませんから・・・続きを始めましょうか・・・。世界第二位の実力をもう少し堪能させていたいただくことにしましょう！！！」

「つく！！！」

再び始まる彼とロツソの猛攻。

せめて考えぐらいまじめさせてくれと互いに思いながらローラとセ

シリアは自分の武装を構えた。

聡華はひたすらまっすぐに、聡也を背負って走り続けていた。

エリア封鎖のおかげで、普段ならそれなりに混みあうこの時間でも人っ子一人おらず最短ルートで聡華は駆ける。

「おっしやこの角曲がればもうすぐ　　っだ!？」

「うおあッ!？」

ゴツチーン!

まさに正面衝突。

人っ子ひとりいないと言う事は当然角から誰かが曲がってくるなんて思ってもいない。

だから聡華はほとんど減速せずに足のカットだけでコーナーをクリアしようとしたのだ。

そのため聡華は、ほぼトップスピードで相手とぶつかってしまった。　「いつてえええええッ!!!！」

聡華は聡也を背負っているから手が使えない。

頭を抱えたい衝動を必死に我慢しながら、聡華は相手に怒鳴る。

「てめえ、どこ見て走ってやがるッ!　いきなり角から飛び出してくियाああつて!!!！」

「それはこっちの台詞よ!!　角をなんてスピードで飛び出してくるわけ!!!！」

「やかましい!　大体ここは立ち入り禁止　　で……って理じゃねえか……!？」

「え、つてああ!　聡華!」

聡華は、理を確認するなりまずつたと顔をひきつらせる。

理由は言わずもがな……聡也だ。

「まあいいわ……。今はそれどころじゃないものね……。で、君が聡也君ね」

「ああ……。はい」

「私は白鶴理。聡華の同級生で風紀委員長をやっているの。よろしくね」

聡也はスツと差し出された手を、聡華の背中の上から握り返す。

握り返した時にフツツと笑った顔に聡也は、少し見惚れてしまった。

「……で、どんな具合なんだよアレは」

「一進一退つてところね、戦う場所や相性が悪過ぎてあのローラさんでも苦戦中つてところよ」

「……」

三人は変電所の近くまで近づき戦況を見守る。

恐らくこの場にいる誰もが、今にでも飛び出したい衝動を抑えているに違いない。

特に、本来ならあるべき力を奪われた聡也は、あの場にいるのが口ツソであるという事もあって気が気ではなかった。

多分今、手元にシリンダーカードとキーさえあれば、制止など振り切つて飛び出しているだろう。

だがそれが出来ない。

考えをまとめてきたはずなのに、いざ現実を突き付けられると何もできない自分という存在が余計に際立つて見えてしまう。

焦るな焦るなと自分に言い聞かせれば聞かせるほど、余計に焦りが顔をのぞかせる。

聡也は、戦況をジツと見つめながら自分に出来る事を必死で考えていた。

いまだに戦況はこう着状態だったが、一瞬のすきを突かれローラの駆る？ストライク・ミラージュ？に？ホワイトアウル？の射撃が命

中して大きくバランスを崩した。

ブルー・ティアーズはなんとかサポートに行きたいがロツソに貼りつかれて思うように行かない。

はつきり言っこの隙は致命的だ。

？ホワイトアウル？の総合火力はさして大したものでは無いが、だからと言って直撃しても大丈夫というわけでは無い。

そして彼もまた自分同様に瞬時多目的射撃マルチロックシユート？獅哮閃しじうせん？を使いこなせる操縦者。

体勢も整わぬままアレを受けたら最悪一撃で落とされる可能性だっであつた。

そして既に、彼は？獅哮閃しじうせん？の体勢に入ろうとしていた。

すると同じように戦況を見つめていた理が聡華に鋭く言い放った。

「聡華、行きなさい！！」

「ああ！？ や、でもよ・・・」

「良いからまだ間に合うわ、あなたの紫燕の速さならッ」

「でも許可は！？」

「行けっつんでしょ！！ あなたローラさんを殺したいの！！」

「ツチ、どうなつても知らねえぞ！！」

聡華は戸惑いながらも聡也を下すと紫燕を展開させ、？バニツシング・ブースト？で一気に舞いあがる。

聡也は、紫燕のいきなりの？バニツシング・ブースト？よりも最後の理の剣幕に推されしばらく呆気にとられてしまった。

「さあ、鉄クズになりましょう！」

「ローラさん！」

セシリアちゃんの切羽詰まった声が自分の置かれた状況を嫌でも理解させる。

だがそうは言っても、ローラはようやく体勢を整えたという所だった。

「……獅哮閃」

？ホワイトアウル？は両手の二門を背部ウェポンラックに戻してまた素早くロックを解除する。そうしてフリーになった四門の砲は？ホワイトアウル？の宙返りと共にラックから外れ宙を舞い……

そして目の前を閃光が横切った。

「え？」

「っ！？」

その声はほぼ同時。だが焦っているのは今までチャンスだった側。ピンチだった側は逆に場に似つかわしくない抜けた声を漏らしていた。

？ホワイトアウル？はとっさの判断で無造作に二門の砲だけは回収する事が出来たが、残りの二門は空中で爆散する。？ホワイトアウル？はその閃光の正体を見てほんの少し口元をゆがめた。

「予定じゃ、全部ぶっ壊すつもりだったんだけどよ」

「……そうですか、それは残念でしたね……」

「ま、いいや。どうせお前の後二門だしな……ってかそもそもそれお前のじゃねえだろ。ほんととことん節操がねえなIS-Nつてやつあ」

「Nを知ってるんですね」

「ああ、ちよつと前に聞いたんだよ……あいつにな」

「……あいつ？」

彼女は確か……ああそうだ鳥越 聡華という風紀委員の二年生だ。千冬に聞いた事がある。？気性は荒いが優秀なIS操縦者の風紀委員がいる？と。

なるほど確かに気性は荒いわね……。

そこまで考えてあたしも聡華が言ながら視線を向けた方向に顔を向ける。

「ツチ！」

「聡也君……病院へ運ばれたと聞いたけど……」

まあその情報があつたから、すぐさまこの子は偽物だと分かつたんだけど。ほんとこの情報をくれたあの黒髪の女の子……名前は確か理ちゃんって言ったかしら。あの子には感謝しないとね。

「なぜ彼が……！」

この戦闘で初めて、？ホワイトアウル？が見せた動揺。それを見て聡華ちゃんは口の端を釣り上げた。

「あたしがここまで背負ってきたんだよ……不味かったか？」

「……聡華ちゃん。それ長髪のもりだろうけどね、それはつきり言つて不味いわよ。」

「ん……？……いやあのローラさん……そんな目であたしを見ないでくれますか？」

「え、あらごめんなさい……」

おおつといけないいけない……つい冷めた目で見ちゃったようだね。

あたしは苦笑いをして謝る。すると何か忘れている事に気がつく。

「……何だったかしら。何か……そう……青色の……」

「あ、あの……ッできたらそちらだけで盛り上がるのをやめていただけませんか……ッ!？」

声のした方を振り返るとセシリアちゃんが必死に？スターライトmk-??で？テンポラーレ？を防いでいた。……一瞬よく耐えたと身勝手ながらに思ったがそこは口に出すとトラブルになるにきまっているから。

「あ！セシリアちゃん忘れてた！」

「……お、そう言えば」

「……口ッソ、まだ倒せて無かつたんですか？」

三人が三人一番無難な線で答えた。

「……味方はいませんの!!」

セシリアちゃんの叫び声は真面目に悲痛だった。少々リズムが崩されたが現状でようやく近接戦闘をこなせるISの登場には素直に喜ぶべきだろう。ローラは聡華にロツソを任せて、セシリアと二人がかりで手負いとなった白き翼に襲いかかって行く。逆襲は始まったばかりだ。

「……と、ここまでが君たちが学園を襲撃した理由と僕なりの考えだよ」

僕は出来るだけ話は引つ張れるだけ引つ張ろうと？そっくりさん達？が学園を初めて襲撃した所から話を始めていた。まだ志穂音からのアクションが無いところをみるともう少し話を引つ張る必要がありそうだね。。。

「……ふくん、まあ当たってるかどうかは言わねえけどそこそこ考えてるんだな・意外だったよ」

「まあ、僕には目に見える抵抗って中々出来ないからさ、せめてこう言うことぐらいは考えないとね……。さてそれじゃあ、次はこの件について話そうかな？」

「ま、待て待て！ まだ話す気かよ!？」

「むしろここからが本題なんだけどね……。ま、そんなに時間は取らせないからさ」

「……ふんツ、勝手にしろ!」

机を乱暴に叩いてかぶっていた帽子を投げ捨てる。

だがそれでも辞めると言いださなかったのは僕にとってはよかった。まあ、まだまだ自分が優位な立場ってことを意識してるんだろっね。

まあ事実だけどさ・・・今は。

「じゃあ、勝手にさせてもらっよ・・・。今回君達がここを襲撃した理由はそのIS・Nのコアだね？」

「ああ」

素直に頷く？そっくりさん？。まあこれは隠しても仕方ない事だしね。

「まず、ここで一つ引つかかるよね。どうしてコア一つ奪ったためだけの目的で君達がISなんてものを引っ張り出してきたかってこと。でもこれは恐らく前回、前々回と同じ理由・・・大きなもので小さなものを見えなくするため。今回で言えばISという大きなもので本当の目的であるIS・Nのコアという小さなものをカムフラージュしたんだ」

実際ここにどうしてIS・Nのコアがあるのかまでは分からない。

志穂音と彼女の関係も謎のままだ。

だが、ここに彼女が欲しているものがあると言う事だけはなんとなくわかった。

志穂音は、僕達に本当はアレを渡したかったんだと思う。でも何らかの理由でそれが出来なくなっただ。恐らくさっき連絡がどうこうって言うっていたからそれも関係しているんだろっ。

ここに置いておくのは危険だと判断して早めに渡すと言う方法も考えられるけれどそれじゃ駄目なんだ。

わざわざダミーまで用意していた所を見ても、恐らく今から彼女がやるうとしてる事はコアがこの場になくしてはならない事なんだろっ。

多分志穂音はこうなる事がある程度頭の中で想定してあっただろっと思う。

僕は気付かれないようにチラッと後ろでひそかに、それでいながら

素早くキーボードをタイピングしていく志穂音を見る。

もちろんこれは僕の想像だから、間違いもあるだろうけどそれでも彼女はやっぱり頭がいい。

それも人の何倍・・・いや何十倍も。

僕は視線を戻すと、再び話し始める。

話は、襲った理由から今度はロツソの事へと移っていた。

「・・・聡也君・・・あたしね、ずっと考えていた事があるのよ」

理は戦闘を見上げながら、表情を変えずに言う。

聡也はそれに呆けた顔で返した。

「どうして敵はあなたのIS-Nを奪っただけじゃなくてロツソちゃんまで奪ったのか・・・そして、あなたを路地裏に引っ張りこんでおいてIS部分展開させる派手な方法で気を奪ったのか」

「え？」

「あたしは聡也君を敵が襲った時それなりに急ぐ必要があったんじゃないかって思っていた」

「急ぐ・・・ですか？」

理は聡也を見やって頷く。

「ええ、焦っていたんじゃないかって。そう・・・焦らなきゃならないほどに？ホワイトアウル？を奪う事が重要なファクターだったって・・・ね」

「・・・その言い方だと、少し違うみたいですね？」

フツツと笑う理。名前に？聡？がついているだけあって流石に中々聡い子だと思う。

「ええ、恐らく敵は？ホワイトアウル？があればより上手く行く程度にしか考えていなかったんでしょね・・・。現に今の段階では？」

ホワイトアウル？と？ペルフェッド・エスターテ？の二機に連携する
意思はさほど見られないもの」

聡也は話を聞きながら、戦闘に目を向ける。

一機づつに分断されていてサポートがしづらい状況ではあるが、理
の言つとおりそれでもどうにか互いにカバーし合おうという意味が
ほとんど感じられない。

二機が全く別々に、連携も何もなく戦っている。

「恐らくこの件が妙に回りくどくて、面倒に感じるのはあそこであ
なたのISを使ってる彼と実動部隊で恐らくいま変電所のどこかに
潜んでいると思われるもう一人の仲間の思惑が微妙にズレてる事な
んでしょうね」

「・・・要するに・・・彼とねえさ・・・紫香楽聡華の考え方が違っ
つてことですか？」

「あたしが思うに、指示を出している側・・・つまり彼女が彼女に対し
て本来の思惑とはほんの少し違う指示を出してるんでしょうね。よ
く言うじゃない敵を騙すにはまず味方からって」

そこで一度話を区切ると、理は？ホワイトアウル？を覗む。

この推測が当たっていけば、あの少年はとんでもない人物だと思っ
聡也にはそこそこの言葉を濁して柔らかない表現で敵を騙すには・・・
と言ったが実際はそんなものじゃない。

騙すどころか彼は唯一の味方である彼女を信頼も信用もしていない
と言つ事になる。要はコマだ。

・・・厄介な子よね。本当に・・・それでいて頭も切れるんだから
やっつてらんないわ・・・。

だがそれでも、今回のこのやり方は余りに酷い。

一人の少女の思いを踏みにじる最低の行為だからだ。

・・・許せないわよね・・・やっぱり。

理は自分の心の奥の方からふつつつと熱いものが湧きあがってくる
のが分かった。

それは怒り。

だが、心のそんな動きに対して逆に頭は冷静であり、この件をかたずけなければならぬ、そして片付けられる人間が聡也である事もしつかりと分かっていた。

理は頭の中で考えを手早くまとめると総也に切り出した。

「ねえ、聡也君・・・どうして敵がロツソちゃんを利用したんだと思っ？」

「え？」

「・・・理由はいくつもあるわ。彼女が二重人格で不安定だったって言うのもあるでしょう。・・・でもね、それ以上に彼らは許されない事をしたの・・・それは一人の少女の気持ちを踏みにじるにも等しい行為・・・頭のいい聡也君ならここまで言えば分かるわよね」

「・・・」

聡也は無言だったが、険しい表情になって行っている事は分かった。彼にもそれなりに分かっているようで、理はちよつと安堵する。

そして彼の背中をポンつと押すようにこう言った。

「・・・ロツソちゃんを助けてあげて。それが出来るのはあなただけだから・・・ね」

理が次に見た聡也の顔は、強い決意に満ちた力強いもので理が言い終わるよりも先に痛いであろう身体を引きずりながら駆け出していた。

「・・・って感じかな？」

「・・・はあ・・・ようやく終わりかよ、ったく時間とらせやがって」

「悪かったね」

僕はもうこれ以上話せないぐらい話してフウツと思わず息を漏らした。

もうネタ切れ。これ以上時間を稼ぐのは不可能だ。

再びチラツと志穂音を見る。

志穂音は、片手でもうちよつととジエスチャーしている。

「・・・もうちよつとつて・・・！」

不味いな・・・。これ以上引き延ばすと流石に怪しまれるし・・・。

むしろここまで怪しまれなかったのが、奇跡なぐらいなのだ。

急に言い淀む僕を見て一瞬いぶかしげな顔を見せる？そっくりさん？。

熱い部屋で汗と一緒に冷や汗が頬を流れる。

そしてその本当に細かな僕の動揺を敵は見逃してはくれないようだ。

「お前・・・なんか変だな・・・？」

「へ、変？　どのあたりがかな？」

「急に言い淀んだり、さっきまでの饒舌さはどこ行ったんだよ」

「あ、いやそれは・・・」

ま、不味い。本当に不味いぞ！？

し、志穂音早く！

僕は志穂音をもう一度見る。だがそれがいけなかった。

「お前、何やってんだ！？」

彼女は勢いよく立ち上がると、僕の胸倉をつかんで壁に打ち付ける。

当然僕という壁を失った志穂音が、彼女の視界に飛び込んだ。

「ありや？」

「てめツ、そ、それは！！！」

「つく！　志穂音早く！！！」

僕は力を振り絞って、彼女の腕を振りほどくと体当たりで志穂音との距離を取らせた。

流石に反撃を予測できなかった？そっくりさん？はまとも体当たりを食らって数歩後退する。

渾身の体当たりでも数歩つて・・・僕はどんだけ弱いのだ・・・。

つて今は自分の脆弱さを嘆いている場合じゃなかった！

「ううッ。ケホケホッ・・・て、てめえら舐めた事してくれやがって・・・ッ！！」

？そっくりさん？は右手でダミーのコアを握りつぶす。

・・・嘘でしょ・・・あれって側は金属製っぽいけど。

「もう、許さねえ・・・てめえら・・・」

？そっくりさん？がISの腕を部分展開する。狭所なこの場所ではそれが精いっぱいだが僕達二人を始末するには充分だろう。

「ぶっ飛ばす！！！！」

飛びかかってくる、？そっくりさん？。

絶体絶命ってのは本当にこう言う事を言うんだろっね！！

だがそこへ、志穂音が待望の一言を叫んだ。

「よっしゃ、出来たよ！！」

投げられるIS・Nのコア。

僕はそれをしっかりと両手で受け取る。

それと同時に光に包まれる僕の腕と、そしてポケットのメモリーカード。

ははーん・・・なるほどね・・・そう言うことか！！

僕は瞬時に展開された装甲と大型のライフル。それらを見て何をすればいいかを瞬時に判断する。

「なッ、なんだとっ！？」

「どうやらぶっ飛ぶのはそっちの方みたいだね！！」

そして僕は迷わず・・・

トリガーを引いた。

第33話〜引かれた逆転への撃鉄〜（後書き）

どうもお久しぶりです。

暑いですねえほんと・・・。

で、今日は台風ですか・・・。

恐ろしいですね。本州がまるっと台風に覆われてしまってます。

各地で被害も出ているようですし、皆さんもお気を付けくださいネ。

さてようやくここまで来ました。

凄いgodgod感ですがまだ少しお願いします（汗

それではまた34話でお会いしましょう。

さよならっ！

第34話 叫ぶ思い・届く気持ち・目覚める情熱

僕は今までにないぐらい、腹が立っていた。

いやもうぶつつん状態で正直自分がここまで怒れた事に自分自身で驚いている。

僕には理先輩が何を言おうとしていたのかなんてすぐに分かった。前々から、とんでもない人だとは思ってましたがこれは度が過ぎていますよ・・・！

僕は戦闘エリアに更に近づきながら空を舞う白い翼を睨みつける。

・・・今の僕にはISが無い。でも・・・それでも声を、思いを届かせることはできるはずだ。

視線を動かすと、少し離れたところで鮮やかな赤と紫のISが激しく火花を散らしていた。

・・・先輩、ロツソ！！

絶対に下から叫んでも声なんて届かない。

何か・・・高い所はっ・・・！

僕は足を止め辺りを見渡す。

すると自分の今いる場所から数メートルの所に、建設中の鉄塔が見えた。

どうやら、もうすでに鉄塔としては完成しているがまだ完成してはいない様で、電線などは敷設されていなかった。

・・・あれなら・・・！

距離は少しあるが高さは充分・・・よし！

気がつけば僕は、鉄塔の梯子に手をかけていた。

「おらよッ!」

「っ!?!」

聡華はロツソの? テンポラーレ? を素早く回避して? 大蛇? の柄尻でロツソの腕部に一撃をお見舞いする。

「いつもの調子はどうしたんだよ!」

「・・・」

それと同時に。聡華は叫ぶ。

それはロツソのためそしていま下で見守っているであろう聡也あこじのためだ。

ロツソのこんな無表情で無口なのも嫌だが、あいつの病院で見せたあんな張りつめた苦しそうな顔はもつと見たくない。

ああ、もうイライラするぜッ!!!

そうイライラする。

あいつが下を向く姿を想像するだけで。

なぜなのかは分からないが、腹が立って仕方がない。

「くそつたれめ! なんて分からないえ、なんで届かねえんだ!」

聡華は、どこへ向ければいいのか分からないイライラをロツソに思いと共にぶつける。

ガギインッ! と鉄と鉄がぶつかり合う音が響き、ロツソは大きく弾き飛ばされてしまった。

体勢を立て直したロツソが見たのは、敵意とも殺意とも違う自分の敵であるはずなのに自分を思ってくれている考えてくれているようなそんな不思議な眼をした聡華の姿だった。

その目に思わず動きの止まるロツソ。

「・・・なあ、お前あたしの声が聞こえねえのか?」

聡華は静かに尋ねる。

「・・・なんでだよ? どうして自分から殻にこもっちゃうんだよ」
その声は厳しくもあり

「・・・違つだろ・・・それはさ。もつと周り見てみたらどうなんだよ」

そして優しくもあつた。

いまだに返答のないロツソだが構わず聡華は続けた。

「お前の事を心配してるヤツ、気にかけてくれているヤツが居るだろうがよ！」

一瞬だがロツソがピクリと反応する。

気にかけてくれているヤツ・・・それが誰なのか。

そんな事、言わなくなつていい。きつとロツソは分かつてる。

そして自分自身も、この件は自分が解決できない事も分かっている。だから自分はそのためのおせん立てをする。ロツソがあいつの話を聞けるように。

絶対にあいつの言葉が届くと信じているから。

聡華はゆっくりとロツソに近づき傷つけないように注意しながらそつとロツソの頬を撫でた。

「・・・だから、な。話・・・聞いてやって・・・ッ!!!」

バツと手を引き目の前を通過した一撃を避ける。

「んのやろっ!!!」

「ロツソ! 耳を貸してはいけませんよ! 彼女は敵です! 僕を傷つける敵ですよ!!!」

「何言つてやがる!! ってかセロリだっけか、お前ローラさんと組んでるんだつたらしっかり押さえるよ!!!」

「セロツ!? セシリアですわ!! それに仕方が無いでしょう、

私たちは下には撃てないんですのよ!!!」

「やかましい! 代表候補生たるでめえは、少しは踏ん張れこのボケ!」

聡華はピシヤリというとロツソへ向き直る。

くっそ、さつきまでいい感じだったのによ!

聡華はロツソの目に明らかな敵意を感じて武装を整え直す。

けど・・・ここで諦めるわけにやいかねえ・・・ッ!

「・・・敵は・・・倒さないと・・・」

「・・・あ？」

「なんだ、口調が・・・あの野郎ホワイトアウルの影響か？

いやそれにしても・・・。

「敵は、倒さなきゃ！ 聡也が傷ついて・・・ッ！！」

「お、おい！？」

「なんだよ、これじゃまるでIS展開してねえ時のロツソじゃねえか！
どうなってるんだ。」

「二重人格は不安定だとは思ってたがここまで人格形成が不安定になるもんなのかよ！？」

「ロツソはスラスターを全開に噴かしながら一気に聡華との距離を締め力任せに？テンポラーレ？を無茶苦茶に振るう。」

「聡也が傷ついて、嫌われちゃうからッ！・・・だからあたしが・・・敵を！！」

「お、おいッちよつと・・・落ちつけてえッ！！」

「聡華は必死に猛襲を防ぐものの、数回？紫燕？を撫で表面装甲を削り取っていく。」

「誰にも、渡さない！ あの子にだって！！ あたしが聡也と一緒に居たいの！」

「つく・・・ってあれは！？」

「聡華は左右に機体を振りながらロツソの剣をかわす。とふと視界の端に鉄塔に登っている人影を見つけた。」

「あれは聡也か！」

「よっし丁度いいタイミングだ！」

「聡華は左手一本破損覚悟で？テンポラーレ？を受け止め素早く後ろに回り込むとロツソを羽交い締めにする。」

「離して！ あたしは敵を、敵を！！」

「そんなにあいつと一緒に居たいなら、本当の気持ちをその耳かっ
ぽじて本人から聞いてみる！！」

「・・・え？」

聡華は大声で怒鳴りつける。少々錯乱気味のロツソも聡華の言った、
？本当の気持ち？という単語に反応して動きが止まった。
聡華はそれを確認して、？紫燕？の望遠カメラで鉄塔の上の聡也を
見る。

その視線を同様にロツソも追っていた。

多分、ロツソの眼にもしつかりと聡也が見えているはずだ。

・・・あたしが出来るのはここまでだぜ・・・。後はお前がバチツと
決めな！

鳥越先輩が言わんとする事は僕にも伝わっていた。

・・・ありがとうございます。

僕は心の中で鳥越先輩に頭を下げる。

ふう・・・。

僕は少し離れた所で鳥越先輩に掴まれているロツソを見やる。

僕からは表情は見えないけれど、恐らく向こうからは僕の表情は見
えている。

どんな表情をすればいいのかとか何を話せばいいのかとか、そんな
ものは関係ない。

言わなきゃだめだ。

いまこの場所で。

彼女に向かつて。

しつかりと・・・。

自分の言葉で。

僕は息を大きく吸い込むと、声を大にして叫んだ。

「ロツソ！ 多分僕は鈍感できつと今日も知らないうちにロツソを

傷つけていたんだと思います!」

言い回しなんて関係ない。

「それに誰かに言われなくちゃ、相手の気持ちにも気が付けない!」
間違っつていようとしまいとただ思うままに言葉を紡ぐ。

「だけど、今なら分かります、ロツソの気持ちが!」
それはまさに……

「ロツソ、僕は今のロツソも、そして普段のロツソもどっちも大切だから!」

聡也の心の底からの

「だから本当に……本当に……ッ」

叫び

「ごめんなさい!……!……!……!」

「なあッ!?!」

聡華は素っ頓狂な声を上げながら、抜けそうになる力を止めるのが大変だった。

いわゆる？ズッコケ？というやつだ。

あの馬鹿、途中までよかったのになんで最後それなんだよ！！

そこは、そうじゃねえだろお・・・。

思わず頭を抱えなくなる聡華だが、下手に力を抜くとロツソを逃してしまふ。

だが、聡華はふとおかしなことに気がついた。

ロツソが微動だにしないのだ。

「おい・・・」

聡華は試しに声をかけてみるが返事はない。

だが少し、ほんの少しだが小刻みに肩がふるえているのが見て取れた。

「・・・お前・・・」

「うう・・・つく・・・ふうッ・・・」

「・・・ふう・・・つくたく仕方ねえなあ・・・」

「わた・・・聡也のこと・・・」

聡華は、右腕の装甲を一旦待機状態に戻し素手でロツソの頭をクシヤクシヤと乱暴に撫でた。

「泣いてんじゃねえよ、ほら顔上げろって。今はそれどこじゃねえだろ？」

ロツソはその言葉に頷いて聡華と同じように腕の装甲を待機状態に戻して目元をぬぐう。

「あの・・・先輩・・・その・・・」

「その先はあいつに言っただけやんな。あたしが貰った言葉じゃ」

と聡華が言いかけた直後、すさまじい勢いで白い影が上空から接近する。

「まったく、やってくれますね！！」

「つく！」

「野郎！？」

その影は、ローラとセシリアの攻撃をかいくぐってきた？ホワイト

あ、死んだ。

僕はそのとき直感した。

だから僕は目を閉じてもう流れに身を任せていた。

人っていざ死ぬってことに直面すると、もっと泣き叫んだりわめいたりするのかなと思っていたが、どうやら自分はそうではないらしい。

さっきまでプツンしていた心はおかしいぐらいに穏やかだし、落下しているはずなのにどこかふわふわと浮いている感じがする。

でも・・・最期にちゃんと言葉を伝えられたのはよかったですね。

誤解したままだなんていやですから・・・。

・・・あれ？

・・・いつになったら僕は地面にたたきつけられるんでしょう・・・。

僕は不思議に思い、恐る恐る目を開ける。

「・・・よかった、無事で・・・」

「え!？」

目の前にあつたのは心のそこから安堵して、穏やかな顔を向けるロツソの顔だった。

「僕は・・・?」

「・・・うん、間に合ってよかった・・・」

「助かった・・・んですか・・・?」

いまいち状況がうまくつかめないがとりあえず僕はロツソに抱きかえられている、それだけは理解できた。

っていうか・・・あれ?ロツソはいまISを展開しているのに・・・。

口調が、いつもと・・・。

「ロツソ、その・・・今はISを・・・」

僕は首をかしげながらロツソにたずねるが、ロツソはそれに笑顔で答えた。

こんな笑顔、初めて見たかもしれない。

それは強気で勝気なあのロツソとは違う、年相応の屈託のない笑顔。

「・・・大丈夫・・・私はもう・・・大丈夫だよ」

そう言い放つ声はいつもどおり控えめで小さかったが確かな自信に満ち溢れていた。

「ロツソ・・・」

僕にはロツソの身に何が起きたのかはわからなかった。でもどこか吹っ切れたようなその顔がとても頼もしく思えた。

その時すぐ近くでまた大きな爆発が起こる。

「！！？」

ロツソは後ろを警戒しつつ、すばやくその方向へターンする。爆発した箇所はどうやらあのプレハブ小屋のようだった。

ものすごい量の砂煙の中から、一機のISが飛び出してくる。

「あれは！」

？紫燕？！ 姉さんやっぱりいたんですね・・・でも・・・どうしてあんなに・・・。

「・・・ボロボロ・・・だね・・・」

そう、右腕の装甲は吹き飛び同じように右側のスラスタも大破。

かろうじてPICのおかげでバランスは崩さず飛行はできているようだ。それでも？紫燕？最大の長所である高機動戦闘は確実に不可能だろう。

するとロツソが何かに気づいた様で、ISのカメラを爆発で大きく開いた穴へとズームさせる。

「聡也・・・あれ！」

「うん・・・？」

ロツソのISの映像を覗き込むとそこには、タンクトップの少女とアルデイがいた。

「……ねえ、これは誰の所為だと思っ？」

「……ウチじゃないよ」

目をそらすんじゃないよ、目を……

僕は、大きくぽっかりと開いた穴を見上げる。

まだ空の色はオレンジ色ではあったものもつそろそろ本気で日没のようだった。

ああ、日本の空つてきれい……じゃなくて!!

「こんなに威力が高いなんて僕聞いてないよ!!」

「しようがないじゃん！ むしろあの短時間でIS・Nのコアと武装の並列起動処理を構築できたことを褒めてよ!!」

「この有様で褒められたら相当な神経の持ち主でしょ!!」

「アメリカ人じゃん！」

「もう理由になってないよ!!」

僕は起動したIS・Nの白い腕部装甲を待機状態に戻して頭を抱える。

最悪だ……。本当に最悪だ……。。

そりゃ逆転の一手にはなつたけど、まさか？紫燕？に直撃したつて言うのにそれでも威力衰えず地層ごと吹き飛ばすほどの威力なんて誰が思うのさ……。

本当にこれとんでもないよ……。設計図見たときにそれなりにやばいなあとかは思っていたけれどさ……。

「まあまあ、やっちゃった事を後悔しても仕方ないってえ」

……。僕は無言でコアを志穂音に投げつけた。

「あいた！」

と、とにかく気を取り直してこんなところで頭抱えていても仕方ない。敵はすでに外へ逃げてしまったのだ。

僕たちは、壊れたサーバーやなんかを足場にその穴を登る。

そして登りきったところで、改めてその穴を振り返る。

「あっちゃあ・・・こりゃ思ったよりも酷いや・・・あくああ・・・

あのサーバーはもう使えないねえ・・・」

「ねえ、わざと言ってるのかい？」

「・・・そんなわけないじゃんかあ」

「今、変な間があった!？」

なんだよ、もう・・・でもあの場面じゃ撃つしかなかったわけだし・・・。

仕方ないじゃないか・・・。

ふくれっ面の僕を見て志穂音はいたずらっぽい笑みをたたえて、うそうそくと笑い飛ばす。

「あはは、そんなにむくれないですよ。あの状況じゃ仕方ないってのはわかってるんだからさ」

「別にむくれてなんかないけどさ・・・」

「ん、そう？ならいいけど」

志穂音って本当にアレだ・・・。そう・・・話すと疲れる人物の一人だと思う。

まあ、悪い子じゃないんだけど。イメージ的にはそうだな・・・姉さんタイプだ。

嘘はつかないけど、人をからかって遊ぶのが好きなタイプなんだろうな。

僕はそんな彼女の人柄と同時に、彼女の能力の高さについても考える。

能力というのはザックリしすぎているが、要は彼女のISのプログラムミングに関する能力のことである。

さつき志穂音と言い争ったとき、？しようがないじゃん！ むしろあの短時間でIS・Nのコアと武装の並列起動処理を構築できたことを褒めてよ！！？と言っていた。

あの時は僕もちよつと動転してたし、言い返して深く触れなかったけどこれは結構すごいことだ。

僕が稼いだ時間はせいぜい多く見積もっても二十数分余り。IS・Nのコアが一体どこまで完成していたのかはわからないが、起動プログラム自体をくみ上げるのだって専門の人間でも一時間弱はかかるといわれている。二十分余りしか時間がなかったことを考えると、起動プログラムを彼女はものの数分足らずで組み上げたことになる。さらに起動と同時に並行してまだ登録すらしていないライフルを自動展開させる並列起動処理パラレルリンクもそんな数分十分レベルでできるような代物ではない。

彼女だからなした奇跡といえるだろう。

やっぱり天才っているんだね。。。

さて。。。これからどうしよう。。。

うーんと考えているとふとひとつの疑問が浮かんだ。

「あのさ、志穂音。あのIS・Nのコアは使えないの？」

そつだ。さつき展開できたしもしかしたら！

しかし言葉を発するより先に志穂音の表情が僕のその考えを否定した。

「うーん。。。ちよつと無理かな。あの時展開できたのは展開部を腕のみに絞っていたから何とかなつたけど、トータルフィッティングとなるとさすがにね。。。ウチでも細かなパーソナルデータが無くちや」

「そうなんだ。。。」

それじゃあ、これから先は上にいるみんなに任せるしかないのか。。。

なんかすつきりしない。。。

ここまできて、自分だけ指をくわえてみてるしかできないなんて。

僕は最初感じたものよりは幾分か緩和された悔しさを胸に、薄暗くなり鮮やかなスラスタールと閃光舞う空を見上げた。

すると、志穂音が急に僕の肩に手をやって顔を近づけてくる。

「ねえ、アルディ〜」

「うえ！？ な、何いきなり・・・！？」

「・・・誰もいないねえ〜」

「う、うん、まあ・・・確かに居ないと言えば居ないけどおっ！？」

志穂音はそのまま僕をプレハブ小屋の壁に押しやる。

身体は密着して、顔は相手の吐息が感じられるほどに近づいていた。

「いや、本当に・・・ちよつと・・・何？」

「ん〜ふふ〜・・・あのさ。ひよつとして君ウチが味方だと思っ

てる？」

「・・・え？」

「そつだよねえ、だつて一緒に彼女撃退したら味方だつて思つちや

うよねえ〜」

「何を・・・言つて・・・」

含みのある笑みでスツと僕のポケットからメモリーカードを抜き去

る志穂音。

そしてもう片方の手には、IS・Nのコアが握られている。

「それ！」

「彼女とウチ・・・実は仲間だつたりして・・・？」

「ツ！？」

志穂音は僕からゆつくりと距離を置く。

僕はあまりに突然の事で動けずただそれを見送ることしかできな

つた。

仲間だつて・・・でも確かにそう言われればそうかもしれない。

その可能性が無いわけじゃなかったんだ。

大体彼女と志穂音はあの時も、初対面な感じじゃなかったし・・・

。

しまった・・・。

「これは・・・」

「さつき拾ったんだ。きつとね、あのお姉さんが落としてったんだよ」

僕は差し出された？ソレ？を受け取る。

これが彼の逆転聡也への力ギだね・・・。

僕はそれをしつかり握りしめて、空を見上げた。

「・・・つそつたれえ！！」

紫香楽聡華は、右装甲を大きく大破させた？紫燕？で地上にいる二人の影を憎々しく睨む。

聡華は？紫燕？のデータパネルを呼びだし損傷状況をチェックする。

「っち、思ったよりひでえな・・・。左側のスラスターにまで損傷が及んでやがる・・・」

右側は言わずもがなだったのだが、右側のスラスターのパーツが爆発の影響で左側のスラスターにめり込み稼働率は五割にも満たない。飛んでは居られるが戦闘なんて無理だ。

だが・・・聡華はチラツと振り返るとそこには味方である聡也のISとそれを取り囲む三機のISが居た。

毎度毎度・・・ピンチ大好きかつつうの・・・。

エネルギー残量は充分・・・か。

この残りスラスターで出来るかどうかは分からねえが・・・勝負は一発だな・・・。

聡華はその？一発？を待つためにあえて戦闘に加わらず様子をつかがう。

相手も攻撃の意図を感じなければ無理にこちらに構う事も無いはず

だ。
一か八かやるしかねえわな……。

「ロツソ……アルディ達は何をやってるんでしょうね？」
「……さあ、とりあえずさっきの映像はセシリアに送っておい
た……」

ロツソ君は今サラッと、後の修羅場を作り上げた気がするんですけど。

「……まあ僕に危害が無ければ良いと言えば良いのですが……。
チラツと視界の隅に青白いオーラをまとったイギリスのISが見え
たがあえて触れないでおこう……うん、それがいい。
さて……それよりも今は。」

「ところで聡也……あの人どうするの？」

「……彼女は……今のところ放っておいても大事ないと思いま
す。武装もあれじゃ充分に使えないでしょうし……。とにかく今
は彼を！」

「……うん、分かった！」

ロツソはスラスタ―に火を入れると一気に？ホワイトアウル？との
距離を詰めていく。

「はあああああッ！」

「ええい、そんな直線的な攻撃で！」

ロツソは？テンポラーレ？を伸ばさずそのまま剣として振るう。
それを？ホワイトアウル？は機体を宙返りさせて回避しながら、片
手のアサルトライフルで反撃する。

アサルトライフルの銃撃を？パーチェ・ディフェーサ？で防ぎ今度
は素早く？テンポラーレ？を伸ばした。

「ッ！」

「逃がさない！」

ロツソが振るった？テンポラーレ？は？ホワイトアウル？の腕部からみついて互いに動きが止まる。

こうなるとスラスター能力で勝る？ペルフエッド・エスダーテ？が断然有利だ。

それに相手は少なからず損傷を受けている。

一〇〇%の性能を出して切ってもまだISに及ばないのがIS-Nなのだ。徐々にロツソが？テンポラーレ？を巻きとって二機の間が狭くなつていく。

「くうッ！　あまり調子に……のらないことですね！！」

「えッ！？」

しまった、まだ向こうには荷電粒子砲がフリーな状態で！！

しかも相手はもうすぐ目の前。

避けるタイミングなんて無い。

すると、突然ロツソが僕を乱暴に鳥越先輩へ投げつける。

鳥越先輩もいきなりの事だったから？大蛇？を慌てて終い両手で僕を受け止めた。

「ちょ、ロツソオ！？」

「おめえ危ねえだろ！？」

その直後、ロツソが荷電粒子砲の直撃を受け辺りが爆発に包まれた。

「ロツソ！！！」

「おい、あの馬鹿！？」

ちよつとちよつと！

ロツソ！

避ける暇が無かったから、僕だけでもと先輩に放り投げたのか！？だが、爆煙がはれて行くとそこには依然として無傷の？ペルフエッド・エスダーテ？の姿があった。

「何！？」

驚きの声を上げる？ホワイトアウル？だが僕たちは別の事に驚いて

いた。

「なあ・・・あれ・・・」

「え、ええ・・・」

目じりは釣り上がり燃えるように赤い髪をまるで獣のように振り乱す。

そして声は、まさに野獣のごとき雄たけび。

「ハツハアツ!!! よくもまあやってくれやがったなあええ!!!」

たつぷりと借りは返させてもらうぜえ? 覚悟しやあれツ!!」

「あいつ・・・まさか」

鳥越先輩は何かを察した様だったが僕には何が起こったかは分からない。

でもとにかく? ロツソ・ミオネツティ? が完全復活したってことだけは確かに分かった。

「驚いたわね・・・」

理は地上から戦闘を見上げて思わず声を漏らす。

理には既にある程度、ロツソの身に起きた変化についての予想が立っていた。

彼がいればとは思っていたけれど、まさかここまで事態が好転するとは思わなかった。

理は、出来れば聡也にはこの場所へ来てほしくなかった。彼の身の安全が最優先だったからだ。

でも結局自分は彼を炊きつけてしまった。

ロツソを助けられるのはあなたただだけだと言って。

正直言って迷いが無かったわけではない。

だが結果はどうだ?

事態は最高の形になったではないか。

「フフフッ、愛って偉大ね」

理は笑うと、通信回線を開く。

「まだ分かってない様子のあの二人に、ちょっと説明してあげましょ
よ」

そういう理の手はいつにもまして軽やかだった。

第34話 叫ぶ思い・届く気持ち・目覚める情熱 (後書き)

たぶん次あたりで終わる予定しています。

というか何度も自分で言うのもなんですが、全然海に行けない！
イライラされてる方もおられるのかおられないのかわかりませんが、
ど、本当にもう少しお付き合いくださいネ・・・。

それはそうと昨日は土用の丑の日でしたね。

実は土用の丑つてうなぎを食べる日ではなくうなぎ屋がうなぎを供
養する日だそうですよ。

それを僕はアメリカ人から聞きました(え

日本人ってほんと呆れるぐらい日本のことを知りませんねw

それでは35話でお会いしましょう。

さよならっ！

第35話 受け取った自分だけの贈り物

「あの・・・先輩、ロツソに何が起きたのか・・・分かるんですか？」

正直僕には何が起きたのか分からなかった。

いくら二重人格とはいえ、それを一瞬で切り替えることなど出来るものなんだろうか・・・？

嫌そもそも制御できないから二重人格なわけで・・・あれ？

「・・・まあそれなりにはな・・・確認はねえけ・・・どお！？」
ん？先輩が驚いた・・・？

僕は先輩の方を見ると、先輩のすぐ目の前にモニターが開いてそこには理先輩の顔があった。

だがモニター越しの顔は、笑顔とは言い難く驚いた鳥越先輩をジト目で睨んでいる。

「・・・ちよつと、失礼じゃない？」

「馬鹿野郎・・・！？ 何の前触れもなくお前の顔なんか見たらだれでもそうなるっての・・・！」

『・・・へえ・・・』

「・・・あ」

しまったという顔をする鳥越先輩だったが、言った言葉は返ってはこない。

ここでもどうやら一つ修羅場が生まれたようだった。

とはいえ、いつまでもこの気まずい空気のまま放っておいても話の前に進まない。

理先輩の方から通信を入れて来たのだからそれは何か伝えたい事でもあるのだろうと思い、僕は恐る恐る口をはさむ事にした。

「あの・・・お取り込み中悪いんですけど・・・理先輩・・・どうかしたんですか？」

『え、ああそうだったわ。その馬鹿の所為で時間を無駄にするわけにもいかないものね』

「・・・てめえもか・・・？」

「お願いですから、火の粉を僕にまで降りかけないでくださいよ・・・」

『まあまあ』

クスリと笑う理先輩と、凄い目で睨む鳥越先輩に挟まれながらも僕は、その両者の視線を出来る限り意識しないようにしながら早く本題に排すよう急かした。

「とにかく、一体どんな要件なんですかつ」

『あらあらそんなに怒らなくてもいいのに。フフツ、まあいいわ。』

今連絡したのはロツソちゃんについてよ』

「ロツソ・・・まさか理先輩ロツソに何が起きたか分かってるんですか！？」

『ええ、そりやあもちろん』

「・・・じゃあ、やつぱり」

『あら、聡華は分かったたのね・・・。意外だったわ』

理先輩の言葉で確信したように頷く鳥越先輩。二人だけ分かって僕だけ・・・、なんだか疎外感・・・。

つていうか、どうして分かったんだらう。

近くで見えていた鳥越先輩は、まだ分からなくもないが理先輩は地上から見ていたんですよね。

どうして僕だけ分からないんだ・・・。

「あの、そこだけで納得されても・・・」

「納得つて言うか・・・なあ・・・本当に分からねえのか？」

『私たちはそんなに難しい事を考えているわけじゃないのよ』
い、いや・・・うん？

『あなた典型的に理屈で物を考えるタイプね』

「ええ・・・まあ」

「世の中にゃ、理屈じゃ推しはかれねえ事があるってことさ」

『そうね、その口の悪い女が女やってるのよ?』

「・・・どういう意味だよ・・・」

ま、まあ理先輩と鳥越先輩の掛け合いは良いとして・・・
理屈じゃない?

ますます分からなくなってきた・・・。

だって大体物事には理屈があつて。

それだから説明できるし理解も出来る。

でも・・・今回はそれは理屈じゃない・・・?

『あらら、ここまで言っても分からない・・・?』

「・・・お前あたしはスルーか・・・もういいや・・・」

「だから・・・その・・・」

『ま、これ以上焦らしても時間の無駄ね』

片目を閉じて意地悪な笑みを浮かべるモニター越しの理先輩。

それに鳥越先輩も、同調する。

「だな。ま、ちやつちやと言ってや」愛よ!」

「あい!?!」

思わず声が上がずる。

鳥越先輩も顔が引きつっている。

あい?

eye・・・眼

藍・・・藍ってという植物の色素に由来する色

曖・・・はつきりしない事

この中に答えはありますかって聞いてみたい。

多分・・・いやきつとありますよ。

ね、先輩!

僕は期待を込めた目で鳥越先輩を見やる。

だが返ってきたのは、凄くかわいそうなものをも見る目と冷たい一言だった。

「・・・お前、実は馬鹿だろ」

そんなにはつきり言わなくても・・・。

『そうよねえ、こんなチンチクリンに馬鹿って言われたらその場から飛び降り自殺よね』

「……もう突っ込むだけ時間の無駄だからやらねえ……」

「いや……あの……ええと……あいつて……だから」

『愛よ』

「あい……あの……」

『そう、うん……ああ！　そうLOVEよ』

「あい……あ……い……愛!?!?!?!?」

「いやいやいや……えッ!?!?」

「あ、いや……うえ!?!?」

「お前ただけテンパってた……」

間近で言っている鳥越先輩の突っ込みも耳に入らない。

いや、内心うん、想像はついていたんですよ。

理先輩がいった？　あい？　つてのが愛って言うのは……

だけど……え、なに愛って何？

誰が誰に？

愛って言うのは、いわゆるアレだ。

誰かと誰かを好きになるとかそう言ったやつだ。

この場合は……。

『多分頭の中ぐるぐる回ってるわね』

「……うん……???」

「おい、理……なんだかイライラして来たんだが……」

『いや、それを私に言われても……』

「ったく……やっぱこう言う事はなこう言う言い方するのが一番なんだって」

言うつと先輩は僕の顔をISの腕のままガツと掴む。

いきなり何事かと思っただが、鳥越先輩の目はいつになく真剣そのもので、僕もそんな目で見つめられては嫌でも我に返る。

僕の様子を見て、聞く体勢が出来たと判断するや鳥越先輩はサラッと言い放った。

「ロツソはお前の事が好きなの。これで分かったか？」

「……え？」

今日もうすでに何回目か分からない？え？と驚き。いやもう驚いたのかさえ自分じゃ分からなかった。

ロツソが……好き？

僕を？

「……でも、なんで？」

「だから言ってたじゃねえかよ。理屈じゃねえんだって」

「そうそう」

さっきの表情から一転二人の顔はニヤニヤしていて、口調もどこか僕を茶化している風だ。

そして一転と言えばそれを聞いてから僕の頭も、さっきまでの嵐のような思考の迷走から今は台風一過の様な穏やかな空気変わっていた。

それでもまだ考えは少しまとまってないんですけれどね……。

そんな僕を尻目に理先輩が鳥越先輩の発言にフォローを入れる。

「まあでも全然説明できないわけじゃないのよ。要はロツソちゃんはさっき聡也君に自分の気持ちを叫ばれて自分に自信が持てたんじゃない？　こんなになつた自分をそれでも叫んでくれる人がいるってことに。大切だってまだあなたが言ってくれた事に」

「……」

「いい、聡也君。二重人格ってね、考えているよりもとっても大変だしつらいことなの。実際私も以前色々相談に乗って上げた事もあったけれどね。そもそもどっちの人格が色濃く表れるかなんて成長過程で左右されるものだし、特にロツソちゃんは今のメイン人格は後から生まれた物だからなおさらね……」

「後から……」

じゃあ、今のあの荒っぽいのが本当のロツソだったんですか。

僕はそう自分で思って、すぐさまその考えを否定する。

本当ってなんだろう。

どっちもロツソなんだから本当もへつたくれも無いじゃないか。けどきつとそう言う事でも悩んでたんだろうと思う。

『だからこそ、自分に自信が持てない。どっちの自分が本当なのかってのが分からないから・・・』

そこで理先輩は言葉を区切ると、次に見せたのは見惚れてしまうほど優しい笑顔だった。

『でも、それをあなたはあんなに簡単に解決してしまったわ。自分の気持ちを叫ぶ。これだけの事だね。そんな人物を好きになるなんて言う方が無理な話でしょ？』

「・・・」

な、なんだかそうやって言われると急に恥ずかしくなってくる。

自分が理先輩の、笑顔に赤くなっているのかそれともロツソが自分の事を好きだからその事実を改めて実感して恥ずかしいのか分からない。

でも確かに自分の頬が高揚して赤くなっているって言う感覚は分かる。

『両方の自分に自信を持てたからこそ、ああやって自分の人格をコントロール出来る様になったって考えるのがまあ自然よね？』

「若干、ご都合主義っぽいけどな」

『良いじゃない、だって理屈じゃないんだしね』

「ちげえねえな」

はははと笑いあう二人を横に見ながら、僕は？ホワイトアウル？と戦うロツソを見やる。

押されてはいない。むしろ上手く二人の人格を使い分けながら有利に戦っている。

このままいけば絶対に負ける事なんて無いだろう。

・・・けど・・・

実感してしまっただからこそ、抑えられない衝動がこみ上げてくる。知ってしまったから。

ようやくだけど気付いてしまったからこそ止められない一つの思い。

それは

僕も行きたい。

あそこへ行つて、守つてみたい。
自分の責任も持つて。

でもそのための翼が今の僕にはなかった。

グツと握りしめる拳。だがそこで鳥越先輩のISモニターにまた別のウインドウが開く。

アルディ……？

そこに移っていたのはアルディとタンクトップの少女だった。

「お前……つてかそいつ誰だよ」

『先輩話は後で、聡也！ 君にプレゼントがあるんだよ』

「プレゼント？」

『フフツ、これだよ！』

アルディは言いながら黒いキーシリンダーのついたカードをかざす。

「それは！」

間違いない、僕と同じIS-Nのシリンダーカードだ！

これは……？ ブラックアウル？の……。

「どうしてそれを君が……!?」

『だから説明は後だって！ 今からそっちに投げるからね！』

「投げる!?」

飛ばすって結構な距離が……。

するとモニター向こうのアルディの両腕が光って無機質な白い装甲が展開される。

「・・・あれ？ アルディのISは青色だったはずじゃ・・・」
『行くよ！』

声と共にモニターが切れ、その直後もの凄い早さでシリンダーカードが飛んでくる。

「つと、あぶねえな・・・」

それを鳥越先輩がキャッチすると、僕はそれを手渡される。

黒光りするそれは、同じシリンダーカードでありながらやはりどこか感覚的な違いはあった。

だがこれだけあっても・・・。

僕は鳥越先輩にリダイヤルを要求してアルディに問う。

「あの、鍵は無いんですか？」

『鍵・・・あ、そう言えばそれしか・・・ねえ志穂音』

『うん、ウチが拾ったんだけど鍵は無かったなあ・・・』

無かったって・・・。

それじゃ使えないじゃないですか！

だがその時、会話を聞いていた理先輩がぼつりと言葉をこぼした。

『・・・ちよつと待って・・・その鍵って・・・こつ、自転車の口

ツクする様な小さな鍵？』

「ええ・・・そうですね・・・って持ってるんですか？」

『持ってるって言うか私も拾ったのよね、あなたが倒れてた路地裏で・・・』

あの時か・・・。偶然ポケットから落ちてしまったんですね。流石に姉さんでもそこまでは気がつかなかったのか。

だが一応二つのアイテムは揃ったが根本的な問題がある。

それは、イグニッションキーが？ホワイトアウル？の物という事だ。対してシリンダーカードは？ブラックアウル？用。

そんなの挿せても回せない。

「駄目ですよ・・・それじゃ・・・二つとも別々のものじゃないですか・

」

だが、理先輩は僕の不安を余所にあっけらかんとして言う。

『良いじゃない、試してみれば。減るもんじゃないんだし』

「いや、まあそれはそうですね・・・」

『あなたロツソちゃんを助けたくないの？』

「それは、助けたいですけど・・・」

「だったら迷う前にまず行動だろ」

言うと鳥越先輩は、理先輩のもとへ降下していく。

そこには、降下を見て近づいてきたのかアルディと少女の姿もあった。

「はい、これ」

僕は鳥越先輩のISの腕から降りると理先輩から鍵を受け取る。

鍵はいつも通りの白い鍵。

そしてそれを差し込むカードは黒。

・・・普通で考えたら入れたって何も起きるわけがない。

だってそれが普通だから。

それにIS-NはIS程ファンタジックな物じゃないはずだ。

機械なのだから、想像を超えられるはずなんて無い。

設定された能力までしか出せないそれが機械。

僕は二つのアイテムに視線を落とす。

僕がゆっくりとシリンダーにキーを差し込むと、鳥越先輩達がスッ

と僕の周りから離れた。

ふう・・・。

眼を閉じて大きく息を吐く。

・・・理屈じゃないか・・・。

本当に都合のいい言葉ですね。

そして僕は、イグニッションキーを一気に回した。

信じられなかった

キーを回した瞬間身体に力の奔流を感じ僕は光に包まれる。

その光景を僕だけじゃない、先輩たちもアルディたちも驚きのまなざしで見ていると思う。

？ホワイトアウル？の展開時以上に感じる高いフィット感。装甲に暖かく包まれる不思議な感覚。

すべてが一瞬の事だったが、僕はそれがかなりゆつくりと優しく行われたように感じていた。

？ホワイトアウル？や？ブラックアウル？に見られたバイザーは無くなり右腕に特殊な折りたたみ式のブレードが追加された以外は装甲の形状に大きな変化は見られない。武装は四門あつた砲が二門に減らされているがスラスタ出力はどうやら上がっているようだ。機体の色は？ブラックアウル？のシリンダーカードを使用したためか黒くそれが鏡面装甲仕上がりになって月の淡い光を鈍く反射している。

「・・・かつこいいね・・・」

誰かがボソツと言った言葉もこの機体のハイパーセンサーなら捕らえてくれる。

明らかに？ホワイトアウル？のそれとは感度も性能も違っていた。

僕は、戦闘を中断してこつちを見ている？ホワイトアウル？とロツソを見据える。

・・・やっも行けるこれで・・・。

僕は頭の中にどこからか響いてきた名前を口にする。

「行きますよ・・・ナイトシュライク！」

これにもっとも驚いたのは、間違いなく？ホワイトアウル？駆る一

条聡也だった。

こんなことがあってたまるものかと、必死に否定するも接近する漆黒の機体が消えるわけではない。

馬鹿な！　こんな・・こんなことが！

「ぐツ！？」

ナイトシュライクに気をとられていた聡也は、ロツソの背部からの一撃をまともに食らい体制を大きく崩すと同時に背部ウェイポイントを失う。

すでに聡華に武装の二つを破壊されていたのでさほど大きなダメージではないが、そこに荷電粒子砲のひとつでもあれば今頃誘爆で勝負は決まっていた。

「てめえの敵は、あたしだったよな？」

「・・・今は・・・卑怯・・・」

「う、うつせ！　攻撃なんだから当たりや何でもいいだろ！」

「・・・聡也はきつとそういうの・・・嫌い」

「なッ！？　そ、それは困るな・・・」

ロツソはもう一人の自分自身と短い掛け合いを行う。

これができるようになったのも、聡也のおかげだ。

どっちの自分にも自信がついた事で、可能になった二重人格の同時制御？　ハーモニクス？。

ロツソはこれによって瞬時の人格の入れ替えを可能としているのだがそんなことを知る由もない敵は、苛立ちを隠さずに反撃に転じる。

だがその構えた砲は、ロツソに向かって火を吹く前に手元で爆散した。

「撃たせませんよ！」

「君は、どこまで！！！」

？　ナイトシュライク？　駆る聡也は背中に背負う荷電粒子砲で？　ホワイトアウル？　の砲を撃ち抜くと、

？　ナイトシュライク？　の右腕にマウントされた、？　早贄^{はやにえ}？　を展開す

る。

「ロツソ！」

「っへ、言わなくてもわかってるって!!」

ロツソは？テンポラーレ？を最大長に伸ばし敵を？テンポラーレ？の刃で覆う。

聡也は？ナイトシユライク？の高い反応速度と機動性を生かして生き物のように動く？テンポラーレ？の

刃のわずかな隙間を縫うように飛び目にもとまらぬ速さで？ホワイ
トアウル？を切り刻んでいく。

絶え間なく続く刃と刃の猛襲。

？フェーロ・カステツロ？日本語で鉄の城を意味するイタリア語で元々ロツソが？テンポラーレ？を使って一人で行う中範囲攻撃用の技だが、それに聡也が？ナイトシユライク？で一味加えている。

やがて猛襲が終わるとそこには飛んでいるのも不思議なぐらいボロボロになった？ホワイトアウル？があった。

「はぁ・・・はぁ・・・くうッ」

「ここまでのようですね・・・」

銃口を突きつけられて、？ホワイトアウル？はハハッとあきらめたように乾いた笑いを漏らした。

「どうするつもりですか？・・・殺します？」

「・・・いえ、殺しはしませんよ・・・。ただあなたにはしかるべきところではしかるべき処置を受けていただきます」

「・・・しかるべき・・・処置？　おい、聡也そりゃ一体・・・？」

ロツソが、疑問を口にするが聡也には今それを説明するつもりはなかった。

聡也はロツソを「後で・・・」と制すると敵に向き直る。

「然るべき・・・処置・・・ですか。ふふ・・・どちらがでしょうね・

」

「どつという意味です？」

怪訝な顔を向ける聡也に敵は乾いた笑みから含みのある笑みへとそ

の表情を変える。

バイザーで口元しか見えないがその表情は聡也には手に取るようにわかる。

「・・・それはまた・・・後ですわね!!」

「うわッ!!」

「おい、聡也!」

? ホワイトアウル? は最後の足掻きとばかりに聡也の腹部を蹴り飛ばす。

そうして距離の開いたところに、静観を決め込んでいたこちらもロボロの? 紫燕? がこちらも最後の賭けといわんばかりに、? バニツシングブースト? を使い割り込んでくる。

「しまった!?!」

「・・・てめえら・・・覚えとけ!!」

? 紫燕? はすれ違いざまにそうはき捨て、? ホワイトアウル? を回収して戦線を離脱する。

「ああッ、くそッ!!」

ロツソは何も無い宙を蹴り悔しがり聡也は? 紫燕? の飛び去った後をただ険しい顔で見つめていた。

・・・ふむ・・・なるほど。

これだから、やはり面白い。

五条 叶は、潜水艦? 守? の自室モニターで聡也が送ってきた映像を見て口元を緩めていた。

黒と白の融合とは・・・ね。

まああり得ない話では無いさ・・・。

アレはそういう風な代物だったからね。

今回はこちらにも初めからかなりの手負い状態だったからあの？ナイトシユライク？は性能の半分も出していない。

もちろん？ハーモニクス？の彼女も、自分の力を一〇〇%出したとはいえないだろう。

・・・にしてもだ。

叶は珍しく少し残念そうな顔をする。

こちらの収穫がゼロでは・・・ね。

強いてあげるなら？ホワイトアウル？だけ。

それも相手の戦力を殺ぐまでには至らず、結果相手に更に大きい力を渡す結果になってしまった。

それに、なにより叶が残念に思っているのは三つ目のIS・Nコアの奪取失敗であった。

・・・アレぐらいは取ってきてもらいたかったものだが・・・。

実際コアを造ろうと思えば叶には造れるのだが、今は海のと真ん中で機材はあるが材料が無い。

そして時間も。

だからこそ、彼女に設計図を送ったのだがね・・・。

・・・設計図と言えば、あの聡華を吹き飛ばしたライフル。

アレも情報では、誰かからの贈り物だと言う事だったが・・・。
いや・・・。

誰かでは無いね。

おおよそ検討は付いている。

束・・・君はいつも私の邪魔をするね。

君は私に興味のかけらもないくせにね？

束という人物は興味が無い事には全くと言っていいほど関知しないくせに、自分が興味を持つと途端に鬱陶しいぐらいに構ってくる人物だ。

恐らく彼女・・・千葉 志穂音も束の触角に引っかけた人物だったのだろう。

そう、だった。

今は違うんだろっね。

束は、興味があれば一週間も経たないうちに何かしらまたアクションを起こすほどの行動力を持つ人物。

それが数週間も音沙汰なしらしいではないか。

これは完全に束の興味から外れた確かな証拠である。

「……まあ、そうだろうね。私もコアの製作を依頼したとはいえさほど興味があると言っただけではない。技術力の高さはまあ認めるがそれでも自分の思っていた以上の人物では無い。

まあどこかで会えば、挨拶ぐらいはしておこうかな。

叶は志穂音と束についての考えを切り上げるとデスクの椅子から立ち上がり、冷たく無機質な鉄の天井に視線を遊ばせる。

さて、彼らはいつごろ戻ってくるだろうね。

損傷具合から見ても、それほど高速で飛ぶ事は不可能だろう。

まあ……途中で落ちたら……その時はその時だね。

クルーがその考えを聞けば、驚きそうな事をさらりと頭の中で唱えて叶は着ていた白衣をなびかせながらゆっくりと扉へと身体を向ける。

「……ふう、やれやれ」

それが何についてのやれやれなのかは叶本人にもよくわからなかった。

「なんかさあ、散々な一日だったよね……」

僕はけだるくセシリーに言う。休日につかれると言えば大体遊び疲れとかそんなのだけど今日はもう本当に疲れた。

今僕たちは、志穂音やあの後数人のチャラ男をひきつれて周辺警戒を行っていたらしい兎束達と分かれて帰路についていた。姉さんは

合流した織斑先生と共に警察や消防の関係者と共に事後処理を行うらしくまだあの変電所近くに残っている。

だから今いるメンバーは、僕とセシリー、そして聡也とロッソに鳥越・白鶴両先輩と織斑先生と一緒に現場に来た一夏とシャルロットと言っ事になる。

結構な大所帯だね。

「まあ・確かに疲れたのは事実ですわね・」

「最後なんてセシリア、蚊帳の外だったしな！」

「それはあなたが、来るなど仰るからでしょう！」

「あゝ・ほらほらロッソ、疲れてる人を茶化しちゃダメですよ」

そう言えばロッソはIS降りてもあのままだね。

出来れば、あっち側になつてくれ方が今は凄く平和に収まる気がする。

「ハハッ、そう起こらなくてもいいじゃねえか。つたく日本人と言
いイギリス人といい冗談が通じねえなあ」

「・・・冗談だったんだ」

「アルデイ・変なところに食いつかないください。ややこしく
なりますから・・・。ほらロッソ変わって変わって」

「つち、うつせえなあ・・・」

言いながらロッソの表情やまとう雰囲気が一瞬で変わる。

さつき、白鶴先輩に聞いたがこれを二重人格ハーモニクスの同時制御と言っらしい。

「ハーモニクス？・聞くのと見るのとじゃやっぱり受ける印象も
だいぶ違うね。」

「・・・これでいい？・・・」

「ええ、やっつと平和になりました・・・」

「・・・聡也・・・あの子が馬鹿やるうって言った」

「・・・結局そつち経由で言われるんですね」

がつくりと肩を落とす聡也にシャルロットと一夏が声をかけた。

「良いんじゃないかな、なんかいつつも繋がってるって感じですか。」

僕は羨ましいなあって思うけど・・・」

そう言つてチラチラ一夏を見やるシャルロット。だが・・・

「確かに、いつでもどっちとも会話ができるんだから便利だよな」

・・・いい加減僕はこの唐変木は諦めた方がいいと思っただけどうだろうか。

それを提言してみようか・・・いややめとこ。僕はまだ朝日が見たい。

「けど、ちょっとややこしいよな」

「ややこしい・・・と言つと？」

「・・・ああ、名前だね一夏」

「そうそう、アルデイの言つとおり名前がさどっちもロッソだとなんか呼びにくくないか？」

「・・・でも、私はロッソだし・・・」

「うゝんそれはそうなんだが・・・」
と言つて考え込む一夏。

まあ一夏の言う事も一理ある。現状ロッソ・ミオネッティと言う人間は一人だが人格は二人いる。

よく同姓同名なんてのを聞くけど、要はそんな感じで名前を呼ぶと二人がいつぺんに反応する。

どちらかを独立して呼びたい時にはかなり不便だ。

確かに良案ではあるのだが・・・。

「でもさ、一夏。そのロッソはそれでいいのかな？」

どうやらシャルロットも僕と同じ疑問を持ったよつで一夏に問いかける。

「良いのかつて言つと？」

「うん、確かに一夏の言いたい事は分かるけど一夏の考えだどどちかのロッソはいきなり違う名前と呼ばれるってことだよな？」

「あ・・・」

そこでようやく気がついたようだ。

そう、ロッソはこれまでもロッソとして生きてきたしきつとこれか

らだつてそうだろう。

そうすると、いきなり違う名前と呼ばれると言う事は必然的に自分はロツソでは無いと突き付けられるようなものなのだ。

しかし、僕たちの心配をよそにロツソはいつも通り涼しげな口調で言う。

「・・・大丈夫・・・むしろ今はその方がいい・・・かな・・・」

「え、でも・・・」

それでもなおシャルロットは心配そうにロツソの顔を見つめる。

細かな気遣いの出来る彼女だからこそ、人一倍心配なのかもしれない。

しかしロツソはシャルロットに微笑みかける。微笑むと言っても元々こちらではそれほど表情の変化があるわけではないので、その変化は些細で言われなければ気がつかないかもしれないがその場にいる誰もがロツソは笑っていると言う事は伝わっていた。

「・・・気にしないで。私・・・気がついた。聡也の叫んだ事を聞いてね。・・・私今までどっちが本当の自分なんだろうってずっと考えてた・・・大切なのはきつとどちらか片方で・・・もう片方はいらぬ不必要な物なんだって・・・」

自分自身をいらぬって考える事はどんな気分なんだろうか。

少なくとも僕は、ちゃんぽらんだしそんな自分への問いかけなんてしたこともないしするタイミングも無い。自分自身という物を考える。これは中々に難しい事だろうし何よりつらい事だと思う。

「・・・でもね、今日聡也の言葉を聞いたら、自分はなんて馬鹿馬鹿しい事を考えていたんだって思えてきた・・・。どっちが大切かだなんて・・・そんな事考えるまでも無かったのに・・・」

この問題に答えなどない。でもだからこそそれが答えだと言う物を見つけた時人は大きく変わる。成長できる。

「・・・どっちも大切な自分だから・・・ここにるのがロツソ・ミオネッティだから・・・」

その顔からは、やはり表情は読みとれないが胸には伝わってくる。

ロツソの感情が。思いが。そして考えが。

「でも、だからこそ今・・・私は名前が欲しくなった・・・。ロツソ・ミオネットイって言う名前・・・嫌いじゃないしむしろ好きだけど・・・私がロツソだったら・・・ちよつと問題があるってことに気がついたから・・・」

「・・・問題？」

コクリと頷くロツソ。

そして、ロツソはやはり涼しい顔で爆弾を投下した。

「私がロツソだったら聡也を私として好きになれないから・・・」

「なァッ!？」

もちろんだがこの声は聡也のものだ。

一夏は今だ少しピンと来ていない様だったが、それ以外は後ろを歩いていた先輩方も含め全員がニヤニヤ顔で聡也を見ていた。

あー・・・なるほどね。

つまりどつちもロツソだったら一人の人格として聡也を愛せないとそう言うわけだな。

自分だけ呼んでほしいとそう言うわけだ。

そりゃ確かにそれぞれ名前があつた方がいいね。

「な、な、何を言つてッ!?!??」

「あらあら、聡也さん顔が真っ赤ですわ」

「そりゃなるだろ、こんな大勢の目の前で告られりゃあ」

「ウフフツ、ロツソちゃん大胆ね」

「良いなあ・・・ぼ、僕も一夏に言つて・・・ゴニョゴニョ」

「おい、シャルいま俺を呼ばなかったか？」

「ふえッ!?!? い、いや気のせいじゃないかな!?!?」

まあ・・・うん、その後なんてこうなるわな。

だが、この事について驚いたのは聡也だけではないようだ。

『お前何勝手な事言つてんだ!?!?!』

「・・・勝手じゃない・・・」

『い、いやお前それは・・・ず、ずりいだろ!?!?!』

「ずるくない・・・私は自分の気持ちを言っただけ・・・」
『だったらあたしも言っただけから変われ、今すぐ変われ!』
「やだ・・・」

う、うん・・・ほとんど一人漫才だねえ。

僕にはロツソの相槌しか聞こえないけど、きっと彼女の中で壮絶なバトルが繰り広げられているのだろう・・・文字通り。

と、このまま放っておいてもまとまる話もまとまらない。

僕は少し大きめの声で一夏に聞く。

「で、一夏。名前は決まってるのかい？」

「いや、まだだぞ」

「そんな力いっぱい言わなくても・・・」

「ってか、アルディおめえ聞く相手がちげえだろ？」

そこへ鳥越先輩と白鶴先輩が口をはさんだ。

「そうね、聡華の言うとおり確かに言いだしつぺは一夏君だったけど・・・」

「アル、それを決めるのは一夏さんではなく聡也さんですよ」

ああ、そう言われそうか・・・。

僕は聡也を一瞥する。

聡也は腕を組んでブツブツと考え事をしていた。

セシリー達に解放されてから考え始めたのだろう。と言う事はまだ考え始めて一分も経っていない。まあ人の名前を考えろって言われ一分もたたずに答えが出るはずもないか。

さてさて、どんな名前が出てくるのやら。

ロツソは当然のことながら、僕たちも固唾をのんで聡也の答えを待つ。

そして数分後聡也は一つの単語をつぶやいた。

「・・・ロゼオ・・・」

「え？」

「ロゼオ・ミオネッティ・・・はどうでしょう・・・？」

ロゼオって・・・確か・・・ロシア語じゃ・・・？」

「確かイタリア語でも、桃色ってロゼオでしたよね。ロツソは赤だからでもこっちの人格は赤って言うほど苛烈じゃない……。でも全く赤とかけ離れた色や物でもどうかと思いますし……。だから……。ロゼオ」

僕らは一斉に彼女を振り返る。

すると彼女は……

「ロゼオ……。ロゼオ・ミオネッティ……。それが……。私……。」
何度もゆっくりと頷きながら、名前を繰り返すロゼオ。

その顔は、初めて貰った自分だけの名前をとて喜んでいるような、それでいてどこかまだ慣れない違和感があるようなそんな不思議な顔をしていた。

だが、数回それを繰り返して聡也の顔を見る。

そして今度は誰が見ても分かるような笑顔で言った。

「……。ありがとう……」

聡也から始めて貰った自分だけの贈り物。

それは目には見えないけれど僕にはロツソがその名前をすっかり両手で丁寧に受け取った用に見えた。

臨海学校前に僕たちの友人が一人増えた瞬間だ。

日も完全に落ちて空に綺麗な満月が見える。

そして夜空にはベガ、アルタイル、デネブの夏の大三角形が美しく輝く。

季節は夏。

サクラメントの夏もそれなりに暑かったが、ここで迎える夏は更に暑くなりそうだ……。いや、なるに違いないと僕は直感していた。

第35話 受け取った自分だけの贈り物 (後書き)

ようやくこの長々と続いた買い物編が終了。

最後買い物してないじゃんって言うツツコミは無しでお願いします。

どうもお久しぶりですしるくです。

さて、次回はちょっと流石に今回がオリジナル展開過ぎたので路線を戻してちょっと、主人公を変えて短いストーリーを書くのかなと思っております。

ですので・・・まだまだ臨海学校は先です(爆

それでは、皆さまこれからもお付き合いください・・・

それでは

さよならッ！

Side Story シャルロットvs日独中三国同盟 (前書き)

シャルロットが箒・ラウラ・鈴を出し抜いてデート行った事の要は
後始末な何か・・・です。。。

ちよつと後々に繋がる部分も夏洛ットだけ。

「まちなさい、シャルロットッ!!」

「つく、回り込まれた!」

シャルロットは後ろを振り返る。

そこにはいつも部屋で顔を合わせる小さな白銀のルームメイトが自分を追いかけてきていた。

もちろん追いかけているので、目は全然笑っていない。

後ろにはラウラ、前には鈴……。どっちも強敵だけど……。

シャルロットはコンマ数秒で答えを弾きだすと前を向いて鈴に突進する。

「やけくそになったってわけ？ あんたにしちゃ随分と強引に来るじゃない!」

鈴の余裕たつぷりの声を聞いてシャルロットはにやりと笑い、やや挑発的に言葉を述べた。

「やけくそになったわけじゃないさ、ただどっちが簡単に抜けられるかを考えただけだよッ!」

「な、なんですってえッ」

「鈴、乗せられるな! それでは思いつぼだぞ!」

シャルロットが鈴に対して挑発的な言動を取ったのは、まさしくラウラがさつき言ったこと。

鈴は熱くなりやすい性格だから一度頭に血を登らせてしまえば代表候補生とてチヨロいもの。

そして鈴はシャルロットの狙い通りに熱くなり、普通に組みつけば簡単に捕まえられると言うのにわざわざかなり大きく振りかぶって両手でシャルロットを捕まえにくる。

そんなオーバーアクションに捕まるほどシャルロットの運動神経は悪くない。

シャルロットはタイミングをずらして鈴が前のめりになるのを見る

や、軽やかにその背中を蹴って鈴の上を通過する。

「それじゃ！」

「くうツ、ちよつと待ちな

！？」

「ば、馬鹿！　そこをどけ！！」

鈴はシャルロットに背中を踏み台にされてその場で立ち止まって振り返る。

・・それがいけなかった。

なぜなら後ろにはラウラがいたからだ。

いくらラウラとて走っている速度を一気に止める子なんて言う人間離れした行動は不可能だ。

そして案の定・・

「へぎゅッ！！！！」

正面衝突・・・

倒れる二人を尻目にスタツと綺麗に着地するシャルロット。

これが審査だったら審査員の誰もが○・○は確実だろう。ホツと一息つくシャルロットしかしまだ終わっていない。

「・・・ふん、その二人を倒したからと言っていい気になるなよ・・

。私はその二人ほど甘くはない！」

シャルロットが鈴をかわした先はちよつとしたホールのような感じに開けている。

そして丁度どの真中に、木刀を片手にやる気（殺る気）満々と言った表情でこちらを睨む剣の巫女がいた。

「・ほ・・・箒・・」

シャルロットの本能が告げる。

・・彼女は不味いと。

それにチラツと後ろを見やるとさつき正面衝突で倒れた二人も復活しようとしている。

・・・うわぁ・・・

これは・・・

「逃げるが勝ち！」

「……待てえッ！……」
シャルロットが再び廊下を駆け始めると、さっきまでふらつきながら起き始めた二人まで種でも弾けたのかと思うほどの超絶覚醒で立ち上がりシャルロットを追いかけてくる。

さて、どうしてシャルロットが追いかけてられているのか。

その理由は、簡単に先日この三人を出し抜いて一夏と買い物に出かけたからである。

実際シャルロットもこのぐらいの事は想像できなかったわけじゃない。

後が怖いなあとは思ったのだが、それ以上に一夏を独り占めできるという夢のような時間がシャルロットを動かしたのだ。

だからシャルロットは買い物から帰って、寮の自室に戻るまで周囲の警戒は怠らなかつたしルームメイトのラウラにも細心の注意を払っていた。

だが、シャルロットはその日誰にも何も言われなかつた。

ラウラはともかくとして、あの鈴や箒といった面々にも会ったが普通に二言三言会話を交わしただけで別に何もなかつた。

そして次の日も何事もなく実習や授業を終えて寮の自室に帰ってきて、いつもと変わらぬ日常を過ごした。

事が動いたのはそれから数日後のある放課後だった。

「ん……今日もアレだな。特にコレって面白いつてわけでもつまらないつてわけでもない授業だったな」

「一夏、それを普通つて言うんだよ。日本語知らないのかい？」

「・・・アメリカ人のお前にそれは言われたくねえな」

授業が終わって一夏とアルデイが談笑を始めるいつもの光景。

そしていつもならそこへ、セシリアや箒たちが自然に集まってくるのだが・・・。

この日は少し違っていた。

いつもなら集まらない女子が複数一夏とアルデイを連れて行ってしまったのだ。

もちろんセシリアはアルデイについていったが。

まあ、大方あの市街地戦の事をまた聞くつもりなのだろうと、特にそれは気に留めなかった。

と、そこへ静かに鈴が教室に入ってきた。

あれ、鈴だ。残念だったね、一夏はさっき他の子たちと一緒にどこかへ・・・。

と、そこまで考えてシャルロットは異変に気付く。

あれ？

・・・一夏が連れて行かれたって言うのに・・・
どうして箒やラウラは何も言わなかったんだ？

シャルロットは考えて行くにつれて、徐々に顔が青ざめてくのが自分でも分かった。

鈴は、ゆっくりと教壇に立つと・・・。

「その裏切り者を引ッ立てえいッッ！！！！」

「ッッッッッサイエッサー！！！！！！！！」

パンツと教卓を叩き、教室の女子全員が鈴の号令に敬礼で答える。

そして鈴が勢いよく指さす先に・・・シャルロットはいなかった。

「っち、流石シャルロットね！！ 者ども追ええッ！！」

「A班とB班は私に続け、残りは箒と共にターゲットを追いこむぞ
！」

一系乱れぬ素早い動きでバツと生徒が四つの班に分かれて教室を飛び出していく。

それを既に教室から逃げ出していたシャルロットは振り返りながら確認する。

そうか、このための準備期間だったのだとシャルロットはそこでようやく気がついた。

つまりはシャルロットが帰った後、他の生徒たちはあの三人が中心となつて作戦を練っていたのだ。

その間悟られまいとして、鈴も算もラウラもそして他の生徒も自分にいつもと変わらぬ態度で接していたに違いない。

にしてもまさか、クラス全体が敵になるとは思わなかった。

鈴達を舐めてたなあ・・・

シャルロットはそう思いながら、走り続けて行った。

実際代表候補生のシャルロットにとって、いくら教室全体が敵になったといえど個人個人の能力は知れている。だから兵士クラスのいわゆる？クラスメイトの女子？を巻くのは比較的簡単だった。

そして冒頭に戻るわけだ。

クラスメイトを巻いたと思っていたのだが、どうやらその班はラウラの小隊だったらしい。

軍人のラウラらしい鋭い読みでシャルロットを、とある廊下に誘導して鈴との挟み撃ち。

結局失敗に終わったが、それでもその先には算がいた。

で、現在だ。

「止まりなさい！ いま止まったら？ 龍砲？ 五十発で許してあげるから！」

「それって避けれるのッ？」

「馬鹿ね、的が動いてどうすんのよ！！」

「確実に死亡フラグじゃないかあ！！」

「当たり前だ！ 大体誰の所為でこんな事になっていると思ってるんだ！」

「引つかかる方も悪いよ！」

「引っかける方が何倍も悪いに決まっているだろう！ いい加減観念するんだシャルロット、今なら？ 真剣白刃取り連続三十回出来たらもれなく居合切り体験キャンペーン？ 実施中だぞ！」

「それは僕が居合切りを体験できるのかな!?」

「ああ、被験者としてな!!!」

「どつちも死ぬ!?!」

後ろから浴びせられる、さまざまな処刑方法の数々。そのどれもが即死か散々いたぶった後にトドメとかそう言ったよくまあそれだけの殺し方が十五歳の乙女の頭から出てくるなと思う物ばかり。

捕まったら確実に死ぬ。

これは確かだった。

・・・これが一夏の気持ちなのかな・・・。

シャルロットは少しだけ一夏に対する自分の行動を改めようと思った。

そう思うと同時に、一夏に対してやり過ぎているのかと思える自分がいた事に驚いた。

シャルロットは、廊下の角を鋭い足のカッティングだけでクリアするとその先に人影を見つけた。

・・・あれは!

チラッとこちらを見やる眠たそうな目に涼しげな雰囲気を持つ少女。ロゼオ!

そしてちょうどいいところにロゼオの後ろには掃除用具箱が。

シャルロットは後ろを見やる。

さっきのカッティングによるすばいコーナリングか効いているのかまだ鈴たちの姿は見えない。

よし!

「ロゼオ、ちょっと助けて!!!」

「・・・どうかしたの・・・」

「いや．．ああ、あの細かい話は後で話すからちよつと匿ってよ！」
ロゼオは少し考えてコクンと頷く。それを見たシャルロットはありがとうといって掃除用具箱の中に隠れた。

シャルロットは掃除用具箱の隙間から外の様子を伺うとそこにちよつと鈴が走ってきた。

どうやらラウラたちとは別れたようだ。

「あ、ちよつどいいところに！ ロツ．．じゃなかったロゼオあんたシャルロット見なかった!？」

よし、頼むよロゼオ．．うまくごまかして．．。

「．．．知らないよ．．」

「本当でしょうね．．？ 嘘ついてもいいことなんて一つもないわよっ。」

「．．．嘘じゃない．．」

そうそう、いい調子いい調子！

後は鈴がどこかへ言ってくれることを願うだけだ。

「．．．ふん．．まあいいわ。じゃあシャルロット見つけたらすぐに連絡すすんのよ!！」

そういつて遠ざかっていく足音。

その小さくなつていく音が、同時にシャルロットの危険信号の色をレッドからまあイエローぐらいまで下げる。そしてロゼオの声があった。

「．．．もう大丈夫だよ．．」

ロゼオから与えられた危険回避成功の合図でシャルロットはゆつくりと掃除用具箱の扉を開けて．．。

「そこにいたのね」

鈴を見つけた。

「えええええっ!!!????」

な、何で鈴がいるの!？」

さつき走っていたのは．．!？」

バツと音が小さくなつた方向を向くと、にやつと笑うクラスメイト

が一人・・・。

・・・だ、だまされた！！

いやって言うかロゼオ！

「さつき大丈夫って！！」

シャルロットがロゼオを向き直るとロゼオは、スツと一枚の写真を顔の前に掲げて見せた。

「・・・ごめんね・・・」

その写真に写っていたのは聡也の無防備な寝顔・・・。

っていうかそもそもロゼオはここで何を。

そこでシャルロットはピンと来た。

「ば、買収ッ！！」

「さあ、もう逃がさないわよ！！」

「つく、こんな事で！」

シャルロットは掃除用具箱の中にあつた塵取りと？箒？を取り出して？武装？する。

「あなた、武器は卑怯よ！」

「そつちだつて買収は卑怯だよ！」

「くう、ああいえばこういうわね！！」

「そつちだつて！！」

シャルロットは逃げることは困難と判断してここで鈴にある程度ダメージを与えておくべく？箒？をブレード代わりに、塵取りをシルド代わりに使い鈴に切りかかる。

だが鈴も軽い身のこなしでそれらを悠々とかわすと、攻勢に転じてきた。

「食らいなさい！！」

鈴は振るつた？箒？を前に飛んでかわすとそのまま前方宙返りをした勢いで脚をかかとかからシャルロットに叩き込む。

しかしそれをシャルロットは塵取りシルドで防ぐ。

だが威力が思っていた以上に高かったため塵取りシルドはそのたった一回の攻撃で大きくへしゃげてしまい同時に左手がかなりしび

れていた。

とっさに、左手をかばうシャルロットだがその隙は鈴にとって最大のチャンスとなる。

「もらったああ!!!!」

「しまった!!」

鈴の拳は完全にシャルロットの腹部を捕らえている。

今からガードしてもかなりのダメージは覚悟せねばならなかった。

「あたしを騙したこと、後悔なさい!!」

それでも、すばやくシャルロットは防御体制に入る

が。。。

その攻撃は届かなかった。

寸前で拳は止まり、鈴は何者かによって首根っこを掴まれていた。

「ちよつと何すんのよ、離しなさ。。。。い。。。。よ?」

振り返つてわめく鈴が固まるそれはシャルロットも同様だった。

だってそこにいたのは。。。。

「織斑。。。。先生。。。。」

前髪で隠れた目元の奥に見える、地上生物すべてをにらみ殺せるのではないかと思えるほどの眼光。

「鳳。。。。暴れるのは構わんが。。。。器物損壊は困るな。。。。」

「い、いや。だってアレはシャルロットが勝手に持ち出して。。。。」

「。。。。蹴り飛ばしたのは誰だ?」

「。。。。でも。。。。」

「。。。。誰だ。。。。?」

有無を言わさぬ厳しい口調と眼光で鈴に迫る千冬。

いつの間にかロゼオはいなくなっていた。

ここにいてはとばつちりを食らうと踏んで逃げたのだろう。

そしてそれは例に漏れることなくシャルロットも同じだ。

ここにいてはとばつちりを食らうし、何より鈴をあの手が押さえ
ていてくれるのはありがたい。

シャルロットは一步づつ徐々に後ずさって。。。。

「逃げるが勝ち！」

一目散に逃げ出した。

「ふ、不条理だ~~~~!!!!!!!!」

鈴の断末魔に少しだけ同情してしまった。

シャルロット・ディノア vs 鳳 鈴音

結果：判定勝ち

さて何気に陣頭指揮を取っていたであろう鈴が一番初めにリタイアした。

残りはラウラと箒……。

どっちも強敵だ。

箒は……うん？

？箒？……

そこで自分が？箒？を持ったまま逃げてきた事に今さら気がつく。右手にはしっかりと握られた掃除用具の？箒？。

うう〜ん……言っちゃだめだね、それでもなんか凄く……言いたくなって……。

……。

少しの間。もう一度？箒？に目をやって……。

「箒が持つ？箒？……なんちゃって……」

？箒？を高々と掲げてその禁句を言う自分。

そしてシャルロットは冷静に？箒？を床に置く事にした。

さ、さて気を取り直して……。

ええと……それで……ああそうだった。

鈴のリタイアで強敵が一人減ったとはいえ箒とラウラどちらも手こわい。

鈴は熱くすればよかったが、筈は熱くなればなるほど余計に攻撃力が倍増するタイプだしそもそもそんな安い挑発、ラウラには効かないだろう。

さて・・・どうしようか・・・。

「あ！ シャルロット発見！！」

「ええッ！？」

くうッ、これじゃおちおち考え事も出来ない！

しかも、見つかったのがタイミング悪くさつき警戒していたラウラのグループだった。

「見つけたぞ！」

一拍置いて、角から姿を現す小柄なルームメイト。

くう・・・！！

まだ有効な策も見つかっていないのに！

ひとまずシャルロットは、反対方向へ走りだす。

幸いにしてと言うべきか、そちらにもラウラは網を張っていたのが到着が遅れシャルロットは上の階への逃走を成功させた。

「っち！ 追うぞ！ B班、分かれて反対の階段からターゲットを追いこめ！」

遠くに聞こえるラウラの指示。

・・・さすが的確だ・・・。それに素早い。

でも内容が聞き取れたのはよかった。

無線でもない限り声を張り上げるしかないもんね。

さつき聞こえた通りなら、このまままっすぐ廊下を走っていくとラウラのグループが前後から自分を挟み撃ちにしてくるはずだ。

そうと分かれば、こっちも対策は立てやすい。

そうと分かれば！

シャルロットは、前方集団が自分を捕捉するギリギリの所でもと来た道を戻り始めた。

「ええ、戻るの！？」

とは、前方グループのクラスメートの声。

僕の考えが当たっているのなら……。

「何、戻ってきただと!？」

ラウラが驚きと同時に、メンバーを見て顔をゆがませる。

やっぱり!

人数が少ない!

シャルロットの考えは、結構単純な事だ。

挟み撃ちと言う作戦は分かっていた。だからシャルロットは班をどの人数でどれだけ分けたかに注目したのだ。反対側から……つまり自分を前から挟むグループは比較的後ろから追いかけるのよりも先が読んでいる分目標地点まで早く到達できる。だが後続集団が来るまで自分をその場にとどめておかなければならない分?人数は多めに割いてくるはずだ?と読んだのだ。

そして、その読みは的中する。思った通りラウラ側の人数は本当に少なかった。

「ごめんね、抜けさせてもらおうよ!」

「あ、待て!」

「待てと言われて待つ人は居な……ッ!？」

シャルロットはラウラをかわしたところで、ラウラのグループがスツと距離を取った事に気がつく。

更には一瞬見えたラウラの顔は

笑っていた。

そして、急に何も無いはずなのに身体の身動きが取れなくなる。

これは!

「……全く、てこずらせてくれる」

「つく、AIC!?!」

身動きの取れない僕を余裕の笑みで見やるラウラ。

「この程度の事、私が予測していないとでも思ったか」

「ううッ」

いや、シャルロットは常に最悪時の状況を予測していた。

だがこれは予想の斜め上を行きすぎた。

まさかISまで展開してくるとは・・・。

展開とは言っても腕の一部装甲のみだが、対生身を予想していたシャルロットに対しては充分すぎる。

「さて、シャルロット・・・お前には言わねばならない事があるな・・・」

「・・・」

しかし、ラウラがここまで怒っていたとは思わなかったなあ。

実質ラウラには鈴や篝のように、いわゆる一夏をダシに使うような引っかけをしたわけでは無い。

だがまあ彼女も一夏を嫁とまで言って唇まで誰よりも先に奪ってしまったほどの人物だ。

怒るのもよくよく考えてみれば自然なことか・・・。

シャルロットは、一つ息を吐くとラウラの？言いたい事？に耳を傾ける。

さてさて・・・何を言われるのかな。

「・・・シャルロット・・・」

「うん」

さっきまでと違う静かな口調に、周囲にも緊張が走る。

シャルロットの頬にも嫌な汗が一筋流れていた。

そして、ラウラはシャルロットをビシッと指さし大きく声を張り上げた。

「水行とは噴水ではなく滝で行う物ではないかッ！！！！！！！！！！」

「・・・・・・・・はい？」

「全くよくも騙してくれたな！！ 聡也に言われて気がついたからよかった物を・・・・・・・・あのままでは私はいい笑い物ではないかッ！！」

・・・・・・・・あ、あ・・・・・・・・ああ。

なるほど・・・・・・・・そ、そつちで怒っていたんだね・・・・・・・・。

ラウラの発言にグループの女子達も目が点になっている。

そんな中、なんとか我に返った女子の一人がラウラに尋ねた。

「あの……私達一夏君の……」

「む？ 一夏がどうかしたのか？」

「え、いや、だから……その……？」

「……む？」

ラウラが首をかしげた時、一瞬気が抜けたのかAICが解け身体に自由が戻る。

「あ……」

それは誰の声か。

ラウラのトンチンカンさに助けられたとはいえどの道、捕まってもいい事なんて無い！

「それじゃ！」

再び駆けだすシャルロット。しかし、あまりのラウラのズレっぷりに戦意喪失なのか誰も反応しない。

それでもラウラだけは、素早く思考を切り替えてシャルロットに迫って

「おい……」

腕を掴まれた。

ラウラは振り返って誰が自分の腕を取ったのを見やる。

そして次には、青ざめた。

「……学園内での無許可のIS展開は校則違反だ……分かってんだよな？」

「……鳥越……先輩……」

どうやらラウラも面識はなくともその人物や人となりはなんとなく知っていたらしい。

にしても、恐るべきだと思う。あのラウラが青ざめるなんて……

「……なあ？」

「あ、いやこれには、色々と理由があつて……」

「……その話はこれからたっぷり、委員会で聞いてやる」

「……はい……」

シャルロット・ディノアVSラウラ・ボーデヴィツヒ
結果：ラウラの反則負け（校則破り）

ふう・・・こうタイミングよくと言うか何と言うか・・・。
織斑先生も鳥越先輩もいいところで出てきてくれて助かった。
でも・・・もうそれは期待できない。

今頃鈴にしてもラウラにしてもこっぴり絞られているだろう。
つまり、最後の強敵・・・第3アリーナはガチンコ勝負で勝つしかない。
シャルロットは周囲を見渡す。

入口に見える三のディスプレイに、上空には不可視のシールドバリ
ア。

・・・第三アリーナか。

確かにそこは誰が見ても第三アリーナだったが、明らかにおかしい。
・・・誰もいないね・・・。

そう、誰もいない。

子に時間、放課後だというのに、自主練しているグループが一つも
いないと言うのはおかしい。

・・・いや・・・ううん・・・おかしくない。

おかしくないね。

シャルロットにはもうここへ誘い込んだ相手なんて想像がついてい
る。

ガシャン・・・

誰もいないアリーナに響く金属音。

誰かなんて言わなくても、見なくても分かる。

恐らくこの人物が、この時間のアリーナを抑えたんだろう。

「・・・待っていたぞ・・・」

その声にシャルロットはゆっくりと振り向いた。

そこには、黒き鎧をまとった剣士がいた。

凜とした空気をまとい、しゃんと立つその姿はまさに剣の巫女にふさわしい。

「……だが……一つ。」

その雰囲気をぶち壊す物があつた。

ええと、血管がひいふうみい……あ、一夏がよく僕たちの顔見て何かを指さしてたのって血管を数えていたんだね。一つ賢くなつたよ。

にしても……よくまあここまで怒りが持続するものだとしヤルロットは思う。

「……まあ……それは鈴やラウラにも言える事だけど。」

「箒……勝手にIS持ち出しちゃだめでしょ？」

「……安心しろ……今日使う許可は取っている……」

ユラリと？打鉄？のブレードを構える箒……。

そして神速の踏みこみでそれを一気に振り下ろした。

「つとと！ 危ないなあ！！」

シャルロットはブレードを、自らも？ラファール・リヴァイブ・カスタム??を起動してシールドで受け止める。

それを弾くとシャルロットは？レインオブサタデイ？で箒を牽制して距離を置く。

「もう、あんまり無茶しない……で……よ……ね？」

「ふーッふーッ！！」

「い、怒りで我を忘れるって言うのは……本当にあるみたいだね。」

「」

「……死ねえ！」

「うわわわあ！！」

目元が怖くて直視できない。

更に付け加えるなら、今の箒の機動は？打鉄？のそれを大きく上回っている。

日本のISは感情によって性能が上下するシステムでも発明したのだろうか。

だとすれば、今の筈の？打鉄？にはそれが搭載されていることになるだろうね・・・ッて！！

「ちよ、ちよっと！ 筈本当に危ない！ 僕死んじゃう！！」

「ええい、良いぞ良いぞ！！ 殺してやるうゝ！！」

「駄目だ、本当に我を忘れてるッ！！」

ラスボスが本当にいろんな意味でラスボスになっちゃったよ！

って言うかさつきまでの、これから最終決戦・・・みたいな空気どこ行ったの！？

ねえ！！

ラファールだから風に乗ってどつかいつちゃった！？

そんな冗談は全然笑えない。

ああももう、どうしようこのままじゃ本当に僕、殺される！！

「筈、とりあえず落ち着いて！！」

「うるさい！ 落ち着いていられるか！！！！」

「怒りにまかせた剣じゃ正しいものは切れないよ！」

「今さらありふれたセリフなど無意味だっ！」

駄目だ、何言っても通じない・・・。

この状況、どうにかするにはもう筈を正面から倒す以外道はないよ
うだ。

シャルロットは、気持ちを入れ替える。

正直に言うが、今の状態の筈はかなり強い。

それは、汎用機である？打鉄？で？ラファール・リヴァイヴ・カ
タム？？と保々互角にやりあっていることから分かる。

いくらシャルロットのラファールがカスタムされた物とはいえ専用
機は専用機。

普通ならば、専用機が汎用機に負けることなどあつてはならない。
専用機とは国家の未来を担う者が国から託される誇り高きものだ。
それが、ISとはいえ量産された言ってみれば？工業製品？に負け
たとあれば地に落ちるのは自分の名前だけでは無い。

・・・それに・・・よくよく考えてみると確かに怒りもあるけど・・・

箒自体も以前に比べればかなり成長している。

あの時・・・そう、自分が転校直後にあった学年別トーナメントの時。

あの時の箒に比べれ場まるで別人の動きだ。

箒もかなり努力したんだろう。

だが、それでも負けられない。

「悪いけれど、この戦いは僕も負けられないよ・・・。一夏の事もあ
るけど・・・僕一人としてもね！」

いくら頭に血が昇っていようと、空気の変わったシャルロットの言葉を聞き流すほど箒も馬鹿では無い。シャルロットの真剣な声に、箒の表情も強張っている。

「・・・それはつまり本気を出すと言う事でいいのか？」

「・・・出さなくても勝てるよ」

「っ!!！」

シャルロットは冷めた口調で言い放つ。それは別に箒を見下しているわけではない。

それが真実だからだ。

箒にもそれは分かっている。

だからこそ、言い返せず顔をゆがめたただけだったのだろう。

「行くよ？」

「っく!!！」

シャルロットは？ラピッド・スイッチ？でショットガンからサブマシンガンを呼びだし片手の？ブレードスライサー？を展開し中近距離を上手く使いながら箒を翻弄してゆく。

しかし箒も箒で、上手くサブマシンガンの銃撃をブレードで弾きながらシャルロットの攻撃に対応する。

そして、一瞬の間隙について反撃に出るなど善戦を見せている。

「ハアッ!!！」

「ッ、中々やるね！じゃあこれならどう？」

シャルロットは、小刻みに武装を変えながら変則的な射撃スタイル

にシフトし距離を完全に取り始める。

射撃武器のない？打鉄？にはこの戦法は有効だ。

しかし、箒はその戦法を驚くべき方法で対処する。

「甘い!!」

「なッ！」

箒は、？打鉄？のブレードをシャルロットに向かって投擲してきたのだ。

だがそれをまともに食らってやるほどシャルロットは甘くないし下手でもない。

シャルロットはブレードをヒョイツと最小限の動きで避ける。

だが……。

「えッ!?! 箒が居ない!?!」

「ここだ!!」

「えッ!?!」

シャルロットが振り向くと、そこには箒が？さっき投げたブレードを自分で受け取って今まさにふり下ろさんとしていた？。

これは箒自身が考えた対中遠距離戦での不意打ちの手段で？陽炎？と言っ。

別にシャルロット用に用意していた物ではなく、鈴と？打鉄？で戦った時に感じた射撃武器を持つ相手といかにして戦うかと言っ問いに対する箒の一つの答えである。

もちろん速度の速い機体……？紫燕？などなら難なく出来るし速度をコントロールする事で攻撃に幅を持たせる事が出来るが？打鉄？の速度は遅くはないがそれなりしかない。

だから箒はブレードを投げる速度や敵からの距離、機体を操るルートそして？打鉄？の速さなどを何度も何度も確認してギリギリのタイミングを導きだしたのだ。

「どこにそんな速さがッ」

「ふん、努力のたまものだ!!」

箒はブレードを振り下ろす。

とつさにシャルロットがシールドで防ぐが体勢が不十分で上手く弾ききれず逆に自分の体勢を更に崩す結果になってしまう。

「そこだ！」

鋭い突きが、？リヴァイヴ？の左側のスカート部を貫く。

ウェポンラックになっているそこには、各種武装のマガジンが収められている。

そのマガジンにブレードが装甲を切り裂いた際に火花が飛び、左側のスカートが完全に吹き飛んでしまった。

「ううッ！」

「どうした、本気を出さなくても勝てるのでないのかー！」

「そのつもりだったんだけどねー！」

「言い訳とは見苦しいぞ！」

更に追撃で四枚のマルチ・スラスターの内の一つを失ってしまふ。

だが逆に組みついての攻撃は箒自身もそれなりの代償を払っていた。一旦両者は離れて、自分の機体をチェックする。

「・・・マルチ・スラスターは・・・壊れてないけど巧く使えるのは片側の二つだけ・・・ラピッドスイッチで呼び出してもマガジンがない・・・か。幸い？ブレット・スライサー？は大丈夫みたいだね・・・シールドエネルギーも予想以上に減ったけどそれでもまだ心配するレベルじゃない・・・けど・・・僕もこれ以上長引かせたくないから・・・」

「・・・くう・・・やはり代表候補生だな・・・？陽炎？で削れたとはいえ確実にこちらに要所要所で当ててくる・・・。シールドエネルギーも効率的に削られたか・・・これ以上長引かせるのはどの道不利だな」

互いにチェックし終わり、相手を見据える。

そして偶然にも声が重なった。

「「これで決める！」」

箒はブレードを、下段で構えグツと体勢を低くする。

対するシャルロットも射撃武器をしまい、？ブレット・スライサー

?を展開した。

静寂のアリーナ。

ピンッと張りつめる空気。

お互いに構えたまま一向に動かない。

何かのきっかけで切れてしまいそうなほど脆い。しかしそれゆえに誰もそれを切る事が出来なかった。

そう、お互いに・・・。

だが、人の預かり知らぬ領域。

つまり自然はそんなものには縛られない。

そしてその瞬間は突然訪れた。

両者の間を・・・

一陣の風が吹き抜けた。

キンッ！！

アリーナに走る一閃。

直後、折れる？ブレード・スライサー？と完全にブレードが砕け片
膝を付く？打鉄？・・・。

その瞬間決着はついた。

シャルロットvs篠ノ之 箒

結果：今回の中で一番まともな勝利

「……シャルロット……」

箒は戦闘が終わり、アリーナを出て行くこととするシャルロットを呼びとめた。

シャルロットはそれに振り返る。

「……なあに、箒。まだ何か？」

「いや……その事は……もういい……私の負けだから……」「じゃあ、どうしたの？」

「……なあシャルロット……私は……いや……私にも専用機があればお前に勝てたんだろうか？」

「……え？」

シャルロットは思わず声を漏らした。

理由は言わずもがな、全く予想していなかった発言が飛び出したからだ。

専用機があれば……か。

箒……君は……。

シャルロットはさっきの戦闘を思い出す。

専用機があれば勝てると言うのは確かに甘い考えではあるが、？打鉄？のポテンシャルで？ラファール・リヴァイヴ・カスタム？？と互角にやり合った箒の實力は確かに高い。

これに専用機が加われれば確かにシャルロットでも危なかっただろう。だが逆に考えてみればシャルロットはダメージレベルB・つまり小破と中破の間ぐらいのダメージを受けている。？打鉄？相手にで

ある。

「あ．．いや．．いい。変な事を聞いてしまったな．．」

無言で考えるシャルロットの態度を困惑と受け取った箒が苦笑いで話題を切り上げようとする。

だがシャルロットがそれに待ったをかけた。

「ねえ、箒は．．その．．専用機が欲しいの？」

その問いに箒が一拍置いて静かに話し始める。

「．．私は．．いつも蚊帳の外だった．．。あの時．．クラス代表戦の時の襲撃の時もアルディは飛び出して言ったのに自分は指をくわえているしかなかった．．。一夏が危険に晒されていたと言うに．．」

「．．．ねえ、箒。僕思っただけど一夏を助けるのって一緒に一夏と戦うことなのかな．．？」

「え？」

「僕は、そりゃ専用機があるから戦っているけど．．．。僕が箒の立場だったら．．。僕は信じて待ってると思うな．．。まあ箒がどうかは分からないけどさ」

「．．．．．」

シャルロットは箒にきびすを返すと、独り言のように言った。

「まあ、何にしても．．。今日の箒は強かったよ、？打鉄？でもね」
それだけを言い残してシャルロットは歩き出した。

箒が何について悩んでどう考えるのかはシャルロットには分からなかったが、だがこればかりはどうしようもない。

箒の問題なのだ。まあでも箒なら大丈夫だろう。

シャルロットはフツツと笑うとアリーナを出て廊下の角を曲が．．
．．．．。

「らないッ！！！」

「逃がすか！！！」

「なんでここに鈴とラウラがいるの!?!」

「あんたよくも逃げたわね!?!　っていつか綺麗に終わらそうとしたでしょ今!?!」

「友を見捨てるとは、どーいうつもりだ!?!」

「あ~~~~もう、いい加減許してよ~~~~~!?!!?!!?!
!?!」

シャルロットの悲鳴にも近い声がIS学園にこだまする。
もう少し、シャルロットの逃走劇は続きそうだった。

S i d e S t o r y シャルロットvs日独中三国同盟〜(後書き)

ショートストーリーとはいえEISのアルディ女の子とは違う本編の要はフラグ回収用見たいなお話に・・・。

今回はまた少しオリジナルな展開ですがよろしくお願いします。

それでは

さよならッ！

Side Story 〵よみがえれ紫燕 前編 〵前書き

紫香樂聡華が実家へ帰るサイドストーリー。

完全オリジナルですので、その点はご了承くださいね。

Side Story? よみがえれ紫燕 前編

・・・あちい・・・。

紫香楽聡華。紫香楽家の養女で紫香楽製のIS?紫燕?の操縦者。その聡華は、猛暑日となった今日でいるつける夏の太陽に身体を焼かれながら郊外の小さな駅前で汗だくになりながらとある人物を待っていた。

服装は白のインナーに半袖の上着を羽織り下はほんの少し大きめのダメージーンズそして市街地戦の時かぶっていたキャップを今回も目深にかぶっている。

そして足元には、グレーのボストンバッグが置いてあった。

あの野郎・・・。あたしは昼過ぎには着くって言ったよな・・・。なんでいねんだよ！

知らない人が聞いたらなんて抽象的なのと思うだろう。

だが聡華はそんな細かいことなど気にしない。

そう夏にとって昼過ぎとは昼過ぎなのだ。

おまけにこの駅舎本当に小さくて、待合室はあるがエアコンも扇風機も無い。

中にいようがいまいが体感温度は変わらないのだ。

すると、そこへこの場には似合わない黒塗りの高級セダンがやってくる。

フロントマスクにはLのアルファベットをデザインしたエンブレムが誇らしげにグリルに埋め込まれている。

聡華は荷物を片手にその車の方へ歩み出す。

・・・ッたく、ようやく来やがった・・・。

聡華はその高級車を・・・?通り越して?その高級車の陰に隠れてしまっていたシルバーの三枚ドアのコンパクトカーの前で立ち止まった。

そのシルバーのコンパクトカーはボンネットにVをデザインしたエ

ンブレムをつけ全体的に丸みを帯びたフォルムを持っていた。その中からその車に似つかわしくない綺麗なプロンドのショートヘアに黒のスーツを来た男性が降りてくる。

「……おせえ」

「いや、だつてお嬢様昼過ぎだつて言うもんだから……」

「昼過ぎだろ！ あとお嬢様やめろ！」

「……まあいいや、お嬢様。ささ、乗って乗って」

コンパクトカーのドアを開けて少女とはいえ女性をエスコートする男性も中々はた目滑稽ではある。

だが仕方が無い。彼の名は？ 渥美・フォン・フェッセン？。フランスと日本人のハーフの彼は紫香楽家で聡華の身の回りの世話をしているいわゆる執事なのだから。

しかし、聡華をお嬢様と呼んではいるが渥美あつみにとって聡華は可愛い妹のような感じらしい。

「にしてもお前、いつものはどうした……？」

「いつもの……ああ、クライスラー300？……車検中……」

「だからってこれしかなかったのか？」

「文句言わない、言わない」

いや……つつてもよお。

聡華は、渥美の運転する車の内装をぐるっと見渡す。

当然シートは革張りではなく普通のファブリックにインパネも木目やメツキなどではなく第アルが横に三つ並んだ樹脂、メーターもスピード表示しかない。

別に車にそこまで、コダワリはないが運転してるのがスーツ着てる渥美……かなり違和感がある。

「……つてかよ、お前暑くねえの？」

「……暑いさ……クーラーかけててもね」

まあ当然かと聡華は思い。シートをガダンつと倒す。

そしてシートに身を預けながらここに着た経緯を思い出していた。

アレは、そう……市街地戦が終わって帰還した翌日半壊した？紫

燕？を叶に見せた時だ。
あんな

「ふむ・・・思っていた以上に損傷が酷いね・・・」

「まあ、至近距離でライフルぶっ放されたからな・・・そりゃそんな
るわ・・・」

「・・・それで、姉さんのISは直るんですか？」

「直るか直らないかと聞かれれば難しいところだね・・・ただどの
道今は直らない・・・と言った所かな」

「どつという意味だそりゃ・・・？」

聡華は苛立ちを含んだ声で言う。

だが叶はそんな事気にする様子もなく、いつも通りの語りかけるよ
うな口調で言葉をつづけた。

「そのままの意味なのだが・・・まあ、説明するとだね我々はし
ばらく補給を行っていないだろう？」

するとだね、元々IS-Nの運用を目的とした艦だからブラックア
ウルのスペアパーツを流用できるホワイトアウルは整備できるんだ
が、専用品の塊の聡華・・・君のは残念ながらスペアパーツが切れて
しまつてね・・・それに仮にスペアパーツがあつたとしても損傷が酷
過ぎてね・・・」

「・・・要するに、部品が足らねえつて事でいいのか？」

「まあ、最も簡潔に述べるならそうなるかな」

冷静に返したが冗談じゃない。

確かにぶっ壊したのは自分だからあまり強くは言えないにしても直
せない事態になるなど予想もしていなかった。

「そうなつてくるとつらいですね・・・。向こうにはナイトシユラ
イクもありますし・・・」

それは聡也も同じく、呟くように言うとうーんと唸った。

しかしここでも慌てもしなければ、焦りもしないのがこの五条 叶という人物で彼女はこの状況でも考え込むことなく、柔らかな表情を崩さない。

聡華にとつて叶の、この態度こそ信用しきれない大きな要因である。表情からほとんど何も読みとれないために相手が次に何を言うのかを予測できないのが気持ち悪い。

大抵そう言う場合はとんでもない事をサラツと言つてのけたりするのだ。

そしてそれは今回も例外では無かった。

「そうだね・・・ふむ、聡華・・・一度実家に行つてきなさい」

「はぁッ!？」

「仕方がないだろう・・・?紫燕?は紫香樂製のISなのだからね」

「・・・いや、いや・・・それは・・・そうなんだけどよ・・・」

あまりあの家には、良い思い出が無い。

だが決断を渋る聡華を聡也が押す。

「ですけど、このままだと?紫燕?は使えませんよ」

「そりゃ・・・困るのは困るんだが・・・」

「だったら、仕方ないじゃないですか・・・」

「いや・・・その・・・だから・・・ああ!そうだそう! あたしは

別に行きたくなえつてわけじゃないんだけどさ、その、アレだ実家

のあのジジイがなんて言うか・・・!!!!」

「ジジイ・・・ああ、紫香樂誠一郎しかりんさんの事だね・・・?」

「そうそう、あのジジイあたしの事嫌つてるし・・・」

まあ自分も大概あのジジイの事は嫌いだが。

「安心したまえ・・・既に連絡は入れてあるんだよ。向こうも君が実

家に帰る事を了承してくれている」

それを聞いて聡華はようやく気がついた。

これは初めからそのつもりだったんだなと・・・。

つまり自分のISが壊れていようがいまいがこの女は一度自分を実家に帰らせるつもりだったのだ。

そうとなれば、恐らく聡華がこれ以上何を言っても無駄だろう。
聡華にだって、この二人に口で勝てるとは思っていないし、ましてやもつすでに実家にまで連絡が入れられているとなればなおさらである。

と、まあこんな感じで聡華は実家に戻ることとなったのだ。

「・・・嬢・・・ま・・・お嬢・・・」

「ん、んん・・・んあ？」

誰かが自分の身体を揺する。

「お嬢様！ 到着したよ・・・ほら起きてって・・・」

次は揺すりながら頬を数回軽く叩かれた。

「んんんう・・・」

「・・・仕方が無いなあ・・・」

つていうか・・・なんだ・・・なんで揺さぶられてんだ・・・。

聡華はようやくゆっくりと目を開ける。

そして開眼一番目に飛び込んできたのは・・・

「タライッ！！」

「おっと！！！」

聡華は金ダライを左腕で受け止める。

そして右手でその金ダライを奪い取った。

「てめえ、殺す気か！！」

「へえ・・・お嬢様は金ダライで死ぬのか・・・」

「死なねえよ・・・いやそうじゃなくて、なんでお前にこんなもんで

叩かれなきゃいけないんだッ」

「いや、だってお嬢様寝てたから・・・」

「・・・まあ・・・寝てたけどもな・・・」

ほんと、どうしてあたしに周りは・・・。

・・・とそこまで考えて聡華は考えるのをやめた。これ以上考えていると頭が痛くなつてきそうだったからだ。

とりあえず聡華は金ダライを後部座席に放り投げるとポストンバツクをかついで車から降りる。

聡華は降り際に渥美に尋ねた。

「ジジイはどこにいるんだ？」

「御当主なら、多分一番奥の部屋に居られると思うよ。なんでだい？」

「ふん、どうせ後々呼びだされるぐらいなら、自分からまつ先に言つてやるうと思つてな」

聡華は言つと振り返る。

・・・紫香楽家・・・か。

聡華が車を降りると目の前には立派な御屋敷があつた。

日本の城を囲うような立派な白塗りの塀が屋敷全体を覆い彫刻の施された木造の堂々たる門構え。

一目でそれと分かる名家中の名家。

その門を聡華は何のためらいなく潜ると塀で隠されていた屋敷がその姿を晒す。

二階建てで、その敷地はかなり広く玄関へ続く道には白い綺麗な砂利に大理石が等間隔で並べられており両側には綺麗に造られた日本庭園も見える。

「・・・ふん・・・」

聡華は鼻を鳴らすと、乱暴な足取りで両側の美しい風景など目もくれず玄関の扉に手をかけて、この広い屋敷全体に聞こえるぐらい乱暴に開いた。

「・・・帰つたぜ・・・」

扉の音に掛けされ聡華のボソツと言つたその声をしっかりと聞いた人間は誰もいなかった。

紫香樂家。

元來武術、特に槍術で名をはせた名家であり今現在もこの近くに道場を開いている。

しかし、いくら武術の名家といえどそれだけで生きて行けるほど現代の社会は甘くない。

そこで手を出したのが今や一大産業になっているIS産業の世界である。

だがいくら名家とはいえ、IS業界での地位は皆無に等しくそんな所に貴重なISコアをご丁寧にまわしてくれる企業などあるわけが無かった。

そこで、紫香樂家が利用したのが政財界のコネである。元々名家で歴史も長い紫香樂家は各方面に強力なコネを持っている。

その中には歴代の総理大臣クラスまでもが名を連ねるほどに強力であり、更に言えばその影響力は少なからず世界にも及ぶと言われたほどだ。

その強力なコネによってようやく一つのISコアを手に入れると、次に行ったのはISの開発をする研究施設の整備だった。紫香樂家はその屋敷の地下に大規模な研究プラントを完成させる。

そこで試行錯誤の末、完成させたのが？紫燕？である。

その研究プラントの一室のモニタールームのデスクに黒い袴姿の老人が腰かける。

老人と言っても、存在感はすさまじく、その場にいるだけで空気を変えてしまえるほどの人物だ。そしてそのシワの一つ一つからはこれまで自らが歩んだ人生の記憶が刻まれているようにさえ感じられる。

彼の名前は紫香樂誠一郎^{しからせいいちろう}。この紫香樂家の現当主であり養女として

この家に貰われた聡華にとっては父に当たる人物だ。

誠一郎はモニタールームの一つに目を凝らすとボソツとつぶやいた。

「・・・騒がしいのが帰ってきおったわい・・・」

誠一郎は立ち上がると、モニター越しに聡華を一瞥して薄暗い廊下へと消えて行った。

聡華は出迎えすら待たずに家に行くと、持っていたポストンバックを玄関先にドガツと置いて一人家の奥に進んでいく。

長く続く廊下。途中数人のこの家の使用人達とすれ違ったが、その誰もが聡華となるべく目を合わせないように下を向いて足早にすれ違っていた。

それをみる度に聡華はイライラしてならなかった。

「・・・くそつたれめ・・・この家の連中はどいつもこいつも・・・」

聡華はわざと周りに聞こえるような声で言うと、再び廊下を歩きだす。

にしても・・・相変わらずくそ長え廊下だぜ・・・。

聡華はその後舌打ちを繰り返しながら廊下を歩いていった。

そして聡華は一つの部屋の前で立ち止まる。

何枚あるのか数えなければならぬほど多いふすまに仕切られたひと際大きな一室。

そのふすまを聡華はゆっくりとあけその部屋の一番真中の湯のみの置いてある座敷机に座する人物を睨みつける。

「・・・よう、ジジイ・・・」

「・・・彼女に預けてもうずいぶんになるが・・・彼女はどうかやら

聡華・・・お前に礼儀礼節を教えては居ないようだな・・・」

「・・・うるせえ・・・顔見せに来てやっただけでも立派な礼儀つてやつたる?」

「ふん・・・もういいわい。程度の違う人間と同士が話をしても何も前に進まんと言うのは政界の小僧どもを見ていれば嫌というほど理解できるが・・・まさかそんな人間が紫香樂家に居たとはな・・・」
「んだと・・・ジジイ・・・」

「だから、もういいと言っておるだろう・・・とつとつとふすまを閉めてこつちへ来い・・・」

誠一郎は聡華を一睨みすると聡華もそれに渋々従う。

口では乱暴に言えても、誠一郎と聡華では生きてきた時間も経験も何もかもが違う。

一睨みされれば、あの聡華でさえ口応えが出来ない。それほどの雰囲気を持つているのだ。

聡華は誠一郎の近くまで歩み寄ると、ゆっくりと横のふすまが開き使用人の女性が座布団を持ってやってくる。

聡華は使用人から座布団をふんだくるとそれをバンツと畳にたたきつけてその上に胡坐をかいて座った。

その使用人もまた聡華とは目を合わせようとはしない。

聡華は足早に部屋を後にした使用人を見て今日何度目かわからない舌打ちをした。

「胸くそ悪い・・・」

「わしはお前のその態度が胸くそ悪いわい・・・」

「ああ!??」

聡華は喰いかかるが、あの睨みを利かせた目で見られては黙り込むしかない。

誠一郎は話題を変えるぞと言わんばかりに咳払いをすると、座敷机に置いてあった緑茶をすすする。

そしてしばしの沈黙の後ため息と同時に話し始めた。

「・・・今日なぜ帰って来たのかは・・・お前自身が一番よく知って

いるだろうか？」

「……まあ……」

「やれやれ……悪びれる様子も無しとは……人間的に感情まで欠落しておつたとは……」

「てめえ……」

いちいち神経を逆なでしやがる！

このジジイまさかあたしが実家に戻る事を了承したのも嫌味言いたかったからだけじゃねえだろうか？

睨む聡華を尻目に誠一郎は、懐から情報端末を取り出す。空中投影タイプの最新型の端末だ。

そしてそこに表示されていたのは現在の？紫燕？のパラメーターだった。

「くそッ」

聡華はばつの悪い顔でうつむくと声を漏らした。

だが聡華に構わず誠一郎は続ける。

「全く……よくまあ、ここまで壊してくれるものだ。ISは優秀だと言うのに乗り手がやはりゴミだな……」

「……」

「聡華……紫燕を出せ」

聡華は求められた通り紫色の球体型のキーホルダーを誠一郎に差し出した。

誠一郎はそれをまじまじと見やると懐にしまう。

そして冷たく言い放った。

「ふむ……また用事があれば呼ぶとしよう……」

誠一郎はそれを残して部屋を去る。

その背中を見て聡華はまた舌打ちをするのだった。

紫香楽家には当然だが聡華の部屋がある。

養女として迎えられたその日に与えられた部屋だ。

だから聡華は誰に案内されるでもなく玄関に置いたバストンバッグを取り階段を上げる。

階段を上がって短い廊下を一番奥に行った所にある扉が聡華の部屋だ。

「……何年ぶりだっけな。」

聡華にとってこの家は確かにあまり良い思い出は無いがこの部屋はこの部屋だけは唯一聡華が一人になれる場所だった。

そこには、うっとおしく視線をそらす使用人共も、ISの研究者共もあの胸くそ悪いジジイもいない。

だから聡華にとってこの部屋だけは、嫌いになれなかった。

「……不思議なもんだよな。嫌いな場所の一角は好きな場所だなんてよ……。」

聡華は自分のそんな気持ちを自分で少し笑いながら扉を開いた。

「やあ、お嬢様。お帰り」

バタン。

聡華は扉を閉めた。

そして自分の目を数回こすってもう一度扉をあける。

「あれ、どうしたのかな？ お嬢さ……ばッ!!」

「なんでてめえがあたしより先に部屋に入ってたんだよ!!」

「だからってバストンバッグの一撃は不味い！ 僕が死んでもいいかい？」

「むしろ今からぶつ殺してやる!!」

聡華は、渥美を追い部屋に入ると正確なバストンバッグの一撃を腹に叩きこむ。

「うぐっ!!?」

「よっしや、とどめだ!!」

「そ、聡華！ マウントポジションは駄目だつて!!」

「うるせえ、大体お前には執事としての自覚が足らねえんだよッ」

「ぎゃー……ッ!!」

言うまでも無い事だがこの叫び声に誠一郎はまた大きなため息を吐いていた。

「はあ、はあ・・・」

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

互いに肩で息をする。聡華の服装は乱れ上着は脱げインナーはずれて片方の肩が露出していて、渥美の方もビシツと着こなしていたスーツはしわだらけで、綺麗なブロードの髪の毛もボサボサになっていた。

「なんで、自分の部屋でこんなに・・・はあッ・・・はあッ・・・疲れなきゃいけないんだ・・・」

「それは・・・お嬢様が・・・はあ・・・ッはあ・・・暴れるからだ・・・」

「な、何だとおゝ・・・って駄目だ・・・限界ッ」

「僕もだよ・・・」

互いに部屋に大の字になって床に転がった。

二人とも前方向に大の字であおむけになったので必然的に顔が自分の真横にくる形だ。

そこでふと聡華は思い出した。

「・・・よくアレだな・・・昔こんなことしてたな・・・」

「ああ、そう言えばそうだね・・・。養女としてこの家に来た初日から僕が付き添っていたけど初めは物静かで可憐な少女だったのに・・・今じゃ・・・」

「・・・悪かったな・・・」

「いや良いんだよ、別にそれが悪いっていうわけじゃないしね」

・・・そうだったなあ。こいつだけは違ったんだよ。

どいつもこいつも、あたしと目も合わせようとしねえのにこいつだけはな。

渥美と聡華の関係は聡華がこの家に養女として来たその初日からの

仲でかなり長い。

まだまだ自分が今よりもつとガキの頃にこの家に来てただその時はまだ自分で言うのも何だがどこにでもいる普通の少女だったんだよな。口調だつてこんなに荒っぽくなくて。

まあそんな頃の自分から見ても、この渥美はなんてナヨナヨした野郎なんだつて思った。

だけど渥美は、誰よりも自分に向き合つてくれた。

徐々に性格が荒っぽくなっていつて前以上に自分を避ける人間が多くなつても同じレベルで話をしてくれたしそれが今の自分なんだと受け入れてくれた。

多分・・・渥美がいなけりゃあたしはこの家なんてすぐにでも飛び出してただろうなあ・・・。

その点には本当に感謝している。

だが、何より嬉しかったのは・・・。

「それと、お前さつきあたしの事名前で呼んだろ？」

「・・・そうだつたっけ？」

「ああ呼んだね」

「全然気がつかなかったなあ。で、癪に障つたんならだつたら謝るけど？」

「いや・・・良いさ！」

コイツの呼ぶあたしの名前はあのクソジジイが呼ぶ時のあんな胸くそ悪い感情なんて無い。ただ純粹に自分を呼ぶ声だ。紫香樂聡華を何のしがらみも思惑も無く呼んでくれる人物。

だからこそ自分はこの渥美という男に心を許せるし自分のすべてをぶつけていける。

聡華はハハツと声を出して笑う。

死ぬほど嫌だつた帰省だが、こいつがいればなんとかかなりそうだ。

二人は互いに心を許せる人物同士の顔を見ながらしばらく笑顔で笑いあっていた。

「どうだね？」

「そうですね、紫燕本体のダメージはかなりのものです。コアブロック自体もフォーマツトする必要はありませんが一度じっくりと検査してみない事には。・何とも。・」

「・・・そうか」

誠一郎は、唸りながら技術者の報告に耳を傾けケーブルの繋がれた紫燕に目をやった。

まだ修理も始まっていない？紫燕？はあの当時のまま右側ほぼ全体の装甲が吹き飛び？バニツシングブースト？を可能にする大型のスラスタは左側は残っているが聡華が無理やりこの状態で？バニツシングブースト？を行ったためオーバーヒートを越して焼けただけていた。

まさに満身創痍。

「・・・ふう・・・しかし・・・本当によくもここまで・・・」

独り言のように呟いたつもりだったが思いのほか大きかったようで、技術者の一人が言葉を返してきた。

「ですねえ。どんなシチュエーションだったのかは分かりませんが、紫燕？をここまで大破させられるとは驚きです」

「・・・ふうむ・・・」

誠一郎はただそれに頷いて返す。

実は誠一郎がよくもここまで。・といったのは？紫燕？の損傷度合いでは無い。

？紫燕？の損傷を受けていない綺麗な部分を見てそうつぶやいたのだ。

その綺麗な部分には、大破した時に付いた傷以外目で確認できる傷は付いていない。

その傷が？紫燕？が大破した時の傷かそうでないかを見極めること

など誠一郎には造作もない事だ。

そしてその確かな目が、しっかりと？傷？の付いた意味を一つ一つを見抜いていく。

下手に攻撃を受ければ余計な場所にまで傷がつく。

だが逆に、いかに相手の攻撃が良かろうとも、それを旨くさばけば傷は付かない。

そして傷がついていないと言う事は聡華が旨く攻撃をさばけていると言うこの上ない証拠だった。

・・・まあ、ちょっとはマシな操縦者には成長しておるようだし・・・。

誠一郎は、心の中でつぶやくとプラントを出て自分の書齋へ向かう。書齋の椅子に腰かけると誠一郎は大きくため息をついてゆっくりと瞳を閉じた。

その脳裏にはついさっき目の当たりにしたまだ傷の癒えぬ紫色の翼の、痛々しい姿が浮かぶ。

・・・何としても・・・復活させねばならん・・・。

ここで・・・こんなところで折れて良い翼では無いのだ。

誠一郎は再びゆっくりと目を開けると、鋭い眼光で何も無い宙を睨んでいた。

「あゝ・・・にしてもやる事がねえなあ・・・」

「そう言えばお嬢様は向こうではどんな生活を？」

渥美が興味しんしんと言った風に聞いてくる。

・・・向こうねえ・・・。

向こうとは当然潜水艦？守？の艦内での暮らしの事だ。

聡華は、んゝと少し考えてから指を折って数える様に言う。

「そっちなあ・・・寝て、出撃して・・・戻ってきてまたゴロゴロし

て・・・暇があればジジインとこ送るレポート書いて・・・寝て・・・寝て・・・寝て・・・」

「・・・寝てばかりだな・・・」

「仕方ねえだろ・・・潜水艦中なんだから他にやれることもないし・・・」

「まあ・・・それはそうだけど・・・だからって他に何かやることはないのかい？」

「まあ・・・やる事って言うか・・・その・・・考え事みたいなの・・・何について・・・？」

「いや・・・うまくは・・・言えねえんだけど・・・時々何か引つかかる時があるんだ。」

それが気になりだすと、暇なときでも寝れなくなるしレポートも手につかなくなる。

何なのかは分からないのが・・・少し気持ち悪いけどな。

「ふうん・・・お嬢様にも悩み事があるのか・・・」

「てめえ、遠まわしに能天気って馬鹿にしてねえか？」

「やだなあ、お嬢様・・・いうときはストレートに言いま・・・ずッ！！」

渥美が気付いた時には、顔面にポストンバックがめり込んでいた。

「ところで、あーだこーだやってるうちにもうすぐ夕飯の時間だけど・・・」

「あれ、もうそんな時間かあ・・・どうすっかなあ」

「ああ・・・既にここで食べるって選択肢はないんだね・・・」

「当たり前えだろ・・・」

誰が好きこのんでこんな胸くそ悪い家で飯なんぞ食わねえといけねえんだ・・・考えただけで虫唾が走る。

とはいえ、聡華も子供の頃はずつとこの家に縛られていたためこの周辺の地理はそれほど詳しいわけでは無かった。

「にしても・・・うん・・・お前なんかこの近くでいい所知らねえのか？」

いきなり渥美に話題を振る聡華だったが渥美はそれを予測していたようで言葉に詰まることなく饒舌にその問いに答える。それはまさに阿吽の呼吸とも呼べるほど自然で違和感が無い。

互いがどんな反応をするのかがこの二人には分かるのだ。だから聡華はいきなり渥美に話題を振ったし渥美もその振りに難なく答える事が出来る。

「そうだね・・・好みが変わってないのなら最近いい中華のお店を見つけたよ」

「マジか！ 最近艦内食堂の冷凍食品ばっかであ、まともな食事食ってねえんだよ！」

そうこうやって、自分の期待通りの答えを返してくれる。

だから信頼できるし、心も許せる。

「じゃあ、そこでいい？」

「ああ、行こうぜ！」

「じゃあ、門の前で待っててね、車を回して来るから」

「・・・また、あのボロかよ・・・」

「あるだけましでしょ！」

聡華は、まあな、と笑うと渥美の背中を見送る。

そして少し遅れて階段を下りると、渥美を見ていたのだろうか誠一郎がそこにいた。

自然と二人の視線が合う。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

互いに睨みあって、無言のまま背を向ける。

互いの背中に思惑を背負って

。

Side Story? よみがえれ紫燕 前編 (後書き)

Side Storyとか言いながら前編とか笑えない。

でもお付き合いください(え

それではまた。

さよならッw

Side Story? よみがえれ紫燕 中編 (前書き)

紫香楽聡華の中編。

実はこの物語意外なところへ繋がっていくかも??

聡華が紫香樂の家に帰ってきて四日が過ぎたある日。

聡華は家を出て渥美と一緒に周辺を散策していた。

理由は、あまりにも自分が紫香樂家の周辺地理に疎かったから。

初日、渥美と外食した時自分が住んでいた所なのにここはどこって言うのが余りにも多かった。

拳句は渥美に「・・・ここ、この街の中心部なんだけどなあ・・・」と呆れられてしまう始末。

流石に渥美に本気で呆れられるのはと聡華のプライドが許さない。

というわけで、渥美に案内される形で聡華は地図片手に場所を風景と照らしあ合わせながら歩いている。

「・・・とこんなところかな」

「・・・やべえ・・・家から全然離れてないのに全然分かんねえ・・・」

「まあ・・・こっちに来てからほとんど家の中で過ごしてたもんねえ」

「思い出させんな」

聡華は頭を押さえながら言い返す。

ほんと、思い出したくもねえ・・・。

聡華がこの紫香樂の性を名乗る前は紫香樂の分家である？ほまれ誉？という名字だった。

幼いころから非常にIS適正の高かった聡華は早くから紫香樂家に養女として迎えられISの技術や理論を叩きこまれていた。

結果？理論？の方はご覧のあり様だが、技術という面では既になりのレベルに達していた。

だがその反面、聡華は多くの時間を外部との接触が無い閉鎖された空間で過ごした。

そのため友人もおらず基本的に他人との人づきあいも苦手。

性格は、誠一郎の方針で厳しくしつけられ過ぎた反動で品行方正・優美・清らかと言った一般的な？名家のお嬢様？というイメージの真逆に育ってしまいそう言う意味ではある意味誠一郎の方針から考えれば人格形成を大きく？失敗した？少女に育ってしまった。

だがまあ、それについては誠一郎も個性の一部として今は気にしていないにしても、聡華が遊びたい盛りの幼少期に非常に嫌な思いをした事に変わりはなく今でも思い出すと時々本当にヤバイぐらい頭が痛くなったりする事があった。

つまり聡華にとってこの帰省はそれほど嫌なものであり、今だつてこのままあの家には帰りたくないと思っっているほどだ。

「でもそうはいかねえよなあ・・・向こうにや？紫燕ひとじし？がいるんだから・・・。」

「うなだれるのは良いけど・・・道の真ん中はやめようね」

「・・・誰のせいでこんな事になってると思っつてんだよ・・・」
聡華は渥美を睨み返すと、ため息を吐きながら姿勢を正してどうにか考えを別方向に持つていこうと地図に視線を落とした。
するとふと、ある場所が目止まる。

「あん？・・・このマーク神社だよな？」

「そうだよ、鳥居のマークが神社、にががお寺だね」

「なことたどうでもいいんだよ。こんなところに神社なんてあったのか・・・」

「行ってみるか？　すぐそこだし」

「・・・ああ、そうだな」

聡華は渥美の後を追って歩き出した。

別に聡華はこの神社が気になつたわけではない。

ただなんとなく、そう言う所が家のすぐ近くにあつたのかつて言うただそれだけ。

強いて言うなら

・・・歩き疲れたしな・・・。神社だつたら木陰の一つや二つある

だろ・・・
というぐらいだった。

「さ、着いたよ。ここがさっきお嬢様が言ってた神社。白鶴神社って言ってるね道場も併設されてる結構大きな神社なんだよ」

数十段という長い石段を登りきり、聡華たちは鳥居をくぐる。

するとそこは、今まで聡華達に照りつけていた太陽を立派な木々の葉が遮り、更にそこへ神社という凜とした空気も相まって室内の空調の効いた空間と同じぐらいに涼しく感じられる。

そこに響くのは蝉の声と自分達が砂利の上を歩く音だけ。

ここは、間違いなく聡華のお気に入りスポットになるだろう。と、そこまで考えて聡華はさっき渥美が言った事を思い出す。

確か・・・

「・・・道場・・・っていったか？」

「うん言ったよ。道場はこの参道をちょっと言ったところだから、行ってみようか？」

よくよく耳を澄ませば、鍛錬を行う子供たちの声が聞こえてくる。

・・・あたしもやらされたなあ・・・。

聡華はそんな事を思いながら、渥美と共にその声のする方へ足を進めた。

「やってるね」

「・・・ああ」

聡華達は、換気のために少し開けられた道場の入り口から中の様子をつかがう。

中では数名の袴を来た子供たちが竹刀の薙刀を構えて基本の型を行っていた。

元々聡華が習った槍術は、薙刀術を追うようにして生まれた武術だ。というのも元々槍が主流となったのは室町時代の応仁の乱以降である。このころから戦術が次第に兵士の徒歩による戦、つまり徒戦かちいくさから足軽達が密集して戦闘を行う集団戦闘へとシフトしていった。

その際に振りまわして扱う薙刀は隊列を組む戦術には不向きであり、次第に槍に取って変わられたという経緯がある。

だが槍を主流に扱ういわゆる槍術は、薙刀が大正から戦後にかけて女性の武道としての地位を確立したのに対して槍術は明治時代にこの槍術を基礎とした銃剣術を制定されたもののその多くは失伝してしまっており、紫香楽しがいらく瞬神流しゅんじんりゅう槍術やうじゆつはそんな中でも失伝せずに槍術を主体に置く数少ない流派である。

「っていうか、あいつがこの道場の師範なのか？ 偉く若い・・・っていうか同じ年ぐらいじゃねえの？」

「僕もそこまでは・・・何せここに道場があるのは知ってたけど中をのぞくのは初めてだからね」

聡華は、子供たちの前で手本を見せながら型を行う少女をみる。

黒い髪を後ろで縛り凜とした雰囲気を持っているが柔和なやさしそうな眼もと。

・・・どっかで会ったような・・・。

聡華は自分の記憶を探るが、残念ながら該当する人物を探り当てる事は出来なかった。

と、ふとその少女と目があった。

「やべっ!?!?」

「え？」

聡華はとっさに道場の入り口から顔を話すと距離を取って身体を後ろに反転させる。

「……って何がやばいんだ、あたし。」

別にやばい事なんて無い。ただ練習風景を除いてただけだし迷惑はかけていない。

ただどこかで会った事あるかなと考えていたから、とっさにとっってしまった行動であった。

ほどなく、道場の中から先ほど目があった少女が顔を出す。

「何か用ですか？」

「ああ、いや別に僕は……」

「僕は……なんです？」

「その……だから……ねえ？」

渥美はどう対応していいものか分からずとりあえず苦笑いでその問いに答え聡華へ目で助けを求め。

後ろを向いていたとはいえその視線は聡華にもバツチリと伝わっていた。

聡華は、はあくツとため息をつきながら振り返る。

「いや、別にあたしらは怪しいもんじゃ。ただ道場が近くにあるからってんでちょっと見に來ただけで……な？」

これでいいかよと目で渥美に尋ね渥美が小刻みに首を縦に振った。

聡華はそれを見てこれ以上ここにおいても変なトラブルに発展するだろうと思ひ足早に立ち去ろうとする。

しかし……。

「あ、待って！」

少女に腕を掴まれた。

「・・・何か？」

「良かったらもつと近くで見えていかない？ 私、白鶴 理。師範代役をやってるの」

訂正しよう・・・既にもうトラブルに巻き込まれていたようだ。

「・・・で？」

「お嬢様、頑張つて！」

「さあ、行きましよう！」

「師範、そんな悪者やつつけちゃえ！」

いつの間にか袴姿に着替えさせられて茫然とする聡華とやる気満々の理、その周りにはやんややんやと理を応援する子供たち。そしてそれを壁に寄りかかって応援する渥美。

「ええ、任せなさい！ のぞきの犯人は私が懲らしめてあげる！」

「ためえ、ちよつと待て！ なんであたしが悪者なんだよ！ って

かのぞきじゃねえし！！！」

「だまれー！ 犯罪者！」

「そーだそーだ、言い訳なんて見苦しいよ！」

「胸に回す栄養をもつと頭に回せば？」

・・・子供は言う事に容赦がない。

だが聡華とて子供相手に切れるほど

「黙れ、このクソガキ共がッ。あたしはちゃんと頭に栄養は回ってんだよ！！！」

馬鹿であった。

その様子を見て理はクスリと笑って得物を構える。

いま二人が手に持っているのは先ほど子供たちが、使っていた竹の薙刀だが長さが長い成人用の物。

そしてその構えを見た瞬間聡華は相手の力量を瞬時に読みとった。

程良く脱力された構えからは一部の隙も見えず、こちらに？わざと？打ちこませるだけの意識化の隙を残す。すべてにおいて無理がなく、むしろしつかりと構えているのに余裕すら感じられる。

「……こいつ……滅茶苦茶なやつだけど………できる……」

聡華も理の空気に引きずられるように、得物を構えた。

「紫香樂瞬神流槍術？の構えは独特で刃先を下にむけ利き腕では無
い方の肘を大きく引いて利き腕はなるだけ柄に沿えるように構える。
利き腕は状況に応じて柄をつかんだりもするが基本は沿える程度で
上下の高さを合わせるためなどに使う。」

足は少しかがめて重心を低くし、いつでも素早い踏み込みができる
体勢。

この独特な型からは？紫香樂瞬神流槍術？が？一瞬の踏みこみで神
をも貫く一閃をもって穿つ？事、つまり？踏み込みと突き？に重点
を置いた槍の基本動作に忠実な流派であることが伺える。
まさに一撃必殺。

それ以外は必要ない流派。それがこの？紫香樂瞬神流？なのである。

「……紫香樂流か……」

「……まあこの構え見りゃ、武術やってるやつならすぐに分かる
わな」

言葉を交わし、訪れる沈黙。

流れる空気にさつきまで騒いでいた子供たちも静まり返り、聞こえてくるのは風が木々を揺らす音だけ。

互いに互いの実力を構えを見ただけで理解しただけにうかつに動けばその時点で負けが確定する。

そしてどこかで風に吹かれて木の葉が一枚

落ちた

「はあっ!!」

「ふっ!!」

先に動いたのは理だった。理は薙刀を一気に振り上げ聡華の刃先を弾き、開いた胴目掛けて一気に薙刀を突き出す。

聡華はそれを鋭いバックステップでかわし構えを整える。

ISの戦闘なら自分からどんどん突っ込んでいく聡華だが？紫香樂瞬神流？の本来の戦い方は？待ち？を必要とする応じ手である。

攻撃こそ最大の防御という言葉があるが、それと同時に攻撃は最大の際が生まれる瞬間でもあるのだ。

そこをつけるかどうか・・・。

聡華は再び相手の攻撃を待つ。

一瞬だ・・・その瞬間を待つんだ・・・。

実際独特の構えながら？紫香樂瞬神流？には流派固有の動きがあるわけではない。

基本的に槍の突くという基本的な型がベースであるため足さばきには少し違いは見られるものさばき等は他の流派とそんなに変わらない。

だが、だからこそ基本に忠実な分それを究めれば破たんが無く非常

に強さを発揮する。

だが、まだまだ未熟な物が使えば基礎はもろ刃の剣となって自分を危険に落としこむ。

そして聡華は、まだまだ？未熟？な部類だった。

「ねえ、知ってる？」

「・・・？」

「紫香楽龍が相手の攻撃を待つ応じての流派なら・・・白鶴流薙刀術はね・・・その？待ち？を与えない」

「　　ッ！」

「？しかけ？を基礎とした攻め手主体の流派なのよ！！」

理は素早く正確に薙刀の葉先で聡華の足を払う。

相手の動きに細心の注意を払っていた聡華もその素早すぎる動作に反応出来ず足元をすくわれ大きくバランスを崩す。そこへ大きく振り上げた薙刀の一閃が襲う。

「くっそ！！」

ガッ！！

聡華はそれを薙刀の柄で防ぐ。

だがまだ終わりでは無い。

理は素早く薙刀を戻すと立ち上がった聡華の首元目掛けて薙刀を振るう。

聡華はまたも突きをバックステップでかわすが今回の突きは一段では終わらなかつた。

「つえいッ！」

「うわっと！」

さっきよりも踏み込んでの一突き。

聡華はそれを自分の薙刀の細かな刃先のコントロールで反らす。

だがまたも素早く引かれた薙刀に聡華は反撃が出来ない。

「つあああいつ!!！」

「このツ!!！」

先ほどとは違い今度は踏み込みながら聡華の刃先を自分の刃先にか
らめ大きく上に跳ねあげる。

そして……。

「でえええええいッ!!!!!!！」

「ぐうっ!!！」

その流れからの振り下ろし。

聡華はかろうじて胴への直撃は防いだがそれをかばった右腕には激
痛が走っていた。

思わず顔をゆがめ薙刀を持ったまま、右腕をかばう。

くっそ……ッ!!！」

こいつ、思っていたより強ええッ……!

なんだよさっきのは!

すべてがまるで水でも流れるかのように一切無駄のない攻撃。

攻撃のテンポ、タイミングそのすべてがこちらが対応できない呼吸
で行われる。

はつきりって向こうの方が圧倒的に強い立場である事はこの場にい
る誰もが分かっていた。

……白鶴流……?しかけ?を基礎とした攻め手の流派ね……伊
達じゃねえ……。伊達じゃねえけど……!

聡華とて、未熟ながらに意地がある。

やられっぱなしは聡華の一番嫌いな事だ。

聡華は腕の痛みに耐えながら構えを正すと、再び相手の攻撃を?待
つ?。

聡華が相手の攻め手を?待っている?のにも関わらず、攻め込まれ
てる大きな理由……。それは相手が薙刀術そしてこっちが槍術と言

うそもそも使っている武器の形式が違う事にある。

薙刀術にはそもそも振りまわす等の要素が初めから含まれているのに対して槍術は基本的に突く動作が主になる。

突く直線的な動作に対して薙刀は？薙ぐ？？振りまわす？と言った円動作。直線的な攻撃は円運動によって？いなされ？？かわされ？そして上手くさばかれてしまう。

それに加えて術者がこれほどの腕前だ。

聡華自身持てるすべての突きを見せたとしても簡単に一本は取らせたくないだろう。

なら・・・その円動作が対応できないほどの突きを持っていたとしたら？

そして聡華にはその一突きがある。

・・・アレを出すためにはどうしてももう一度相手に突きを繰り出させねえといけない・・・。

でも・・・。

突き主体の攻撃は先ほどもあったが、アレは最後の振り下ろしへの布石。

聡華が欲しいのは完全に踏み込んだ一突きだ。

その瞬間にのみ聡華に、勝機は訪れる。

聡華はその時を静かに待つが、その静寂を理の聲が引き裂いた。

「やるわね、？三崩みくえ？にギリギリ対応するなんて。私は決めるに決まっただけだ？」

「・・・三崩みくえ？」

聞き慣れない言葉に警戒しながらも首をかしげる聡華。

「そう、三つ崩れると書いて三崩。白鶴流派の攻撃はまず相手の体勢を崩し、そして正確に相手に攻撃を加える事を信条としているわ。攻め手を基礎とする流派だから当然と言えば当然だけだ。」

その中の型の一つが？三崩？三段の攻撃で相手を崩す。ちなみに前

の数字は色々変わるわよ？」

「・・・ベラベラ喋っちまって良いのか？ 自分の手の打ち晒すよ
うなもんだぜ？」

「大丈夫よ？ あなたが次に欲しい攻撃が何なのかなんてわかって
るもの」

聡華は目を見開く。

まさか・・・そんな馬鹿など。

それが本当ならば聡華に残されていた一分の勝機が消し飛んでしま
う。

しかし理はそんな聡華の不安を余所にニヤリと笑うと

「それって・・・これでしょッ?!」

思い切り踏み込んでの突きを繰り出した。

驚きながらも聡華はこのあからさまな誘いに乗る。

どの道、この先突きを繰り出してくる保証はどこにもない。

畏であるうと、それに乗らない手はないと、とっさに聡華は判断し
たのだ。

「ああ、そうだよ！ それを待ってた！」

「見せてもらおうわよ？ 私を倒せると踏んだ必殺のひと突きを！」

聡華は、理が突きを繰り出して完全に身体が伸びきった状態になる
までグツと薙刀を我慢する。

そして完全に伸び切ったその一瞬、理の身体が制止するまさにその
時。一気に薙刀を後ろに引いて身を更にかがめ？瞬神流？の名にふ
さわしい踏み込みで肉薄すると、思い切り胴目掛けてほぼ零距离で
突きを繰り出す。

瞬突しゅんくつ

紫香楽瞬神流の代名詞ともいえる技で、？相手の

攻撃の隙をつき一瞬の踏み込みを持って最大の一撃を突きたてる？
一発逆転の秘策である。

「かはッ!!」

鈍い音と共に、理の身体が膝から崩れ落ちる。

その瞬間勝負はついた。

ついたのだが

聡華は、その姿を複雑な心境で見っていた。

「……勝てた……とは言えねえよな」

ボソツと聡華はつぶやくと一礼してその場に薙刀をゆっくりと置いた。

「いやあ、まさかこれほどとは思わなかったわ」

ものの数分後、理は道場の入り口で聡華と渥美の前に腰かけていた。口調はさつき、思いつきり胸を突かれた人間とは思えないほどピンピンしている。

「なあ渥美……あたし本気で自信喪失しそうだ……」

「……それを僕に言われてもね……」
「ごもつともで。」

「いやいや、あなたそんな気を落とす必要はないわよ。実際まとも
に食らってたらあたしここで笑ってられないわけだしね」

「それがどうも、マジには聞こえねえんだよ……」

「酷いわ、私は嘘をつかない事で有名なのよ？」
「そうですかい……」

聡華はため息を吐いて理の横にへナへナと座りこむ。
もう言い返す気力も無かった。

聡華は、ニコニコ顔で鼻歌を歌う理をちらりと見やる。
……はあく分からねえ。なんでこんな威厳もなくそもねえ様なやつ
がこんなに強いんだ？
あのジジイといい勝負だぜ全く……。

「……さて……」

理はこの話はこちらまでと切り上げる様に言葉を発して立ち上がる。
そして聡華に向き直ると、いきなりとんでもない事をのたまった。

「あなた、あの変電所襲った犯人さんでしょ？」
「なあッ!?!」

な、何!?!

……あ、そくだ……思い出したぞ。
こいつどこかであったかと思っていたけどそくだ……
この女……ずっと下で戦況を見守っていた。

「あらあら、そんなに睨まないで？」

既に聡華達が変電所を襲ったという事実は誠一郎を含む一部の人間
は知れわたっている。

しかしそれらは一般市民には公にされていない事実だった。

IS学園側からのマスコミ規制もそうだが、紫香楽家を筆頭とした
ISの関係各所が行った徹底した情夫統制のおかげで、あれだけの
騒ぎだったにも関わらずただの変電所事故として処理されていたの
だ。

聡華が焦っているのはそんな事では無い。

この場にいるのは自分と理と渥美だが、すぐ後ろの道場には子供たちがいる。

そんなところで自分が犯人だと言う話をされてみる。

話がややこしくなるにきまっている。

「・・・いやまあ、犯人であることには間違いないんだがそれでもこれ以上避けられるトラブルに突っ込んでいくのは勘弁願いたかった。」「ま、それじゃ場所を移しましょうか?」

理は聡華の鋭い睨みを華麗にスルーすると、付いてこいと遠まわしに聡華に言って歩き出した。

理が二人を連れて来たのは、先ほど聡華が居心地のいい場所だと思つた白鶴神社の参道だった。

その参道のベンチに腰かけると、理は聡華を一瞥する。

まだ聡華は理を睨んだままだった。

「だからそんなに睨まないでって」

「てめえ・・・いつからだ・・・いつから気付いてた・・・」

「一番最初からだけど?」

「・・・なんだと?」

じゃあ、こいつはあたしが初めから紫香楽聡華だと思って接していったってことなのか?

だけど・・・

「でもよ、あたしのそっくりさんなら学園にもいるんじゃないのか? そつちと間違えたんだろ?」

「いいえ、間違えるわけないわ。雰囲気が違うもの」

「それに私は最初にあなたに自己紹介したじゃない？」

「ああ……」

「それが何よりの証拠だと思うけど……」

「……確かに……なんて自分は迂闊なんだとあの時の自分をぶん殴ってやりたい。」

少し考えれば、分かる事だろうが。

後悔先に立たずとはよく言ったものだ。

「で？ あたしをどうすんだ？ 学園にでも突きだすか？」

「ん〜、それも良いけど……それじゃ面白くないじゃない？」

「面白くだと？」

「だから、私は何もしない。突き出しもしないしそもそもここであなたと会ったことも誰にも言わない。まあ子どもたちは仕方ないけど子供たちはあなたが誰かなんて知らないし大丈夫よね」

「お、おい……」

「それよりも、あなた構えがまだ少し荒いわね。もう少し力を抜いても良いんじゃない？ それとも紫香樂流ってあんなに足に力を入れたまま立ち会つのかしら？」

「あ、ああ……そりゃ……気をつける……あれ？」

「それじゃ、私子供たちを待たせてるから」

「……あ、そりゃ悪かったな……うん？」

あれ？ うまく丸め込まれたって言うか……なんて言うか……。聡華が気がついた時には、理の姿はそこになかった。

「お嬢様……」

「ああ……」

「……案外チヨロインですね」

「やめてくれ……情けなくなるから」

今の聡華にはそれが精いっぱい返答だった。

聡華達はその後元の服に着替えてから周辺をしばらく散策し、そして日が傾き始めたころ帰路についた。

夕日に照らされる道を渥美と共に歩く。

色々なところを歩き回ったが、やはり一番印象に残っているのはあの理との出会いだった。

「なあ……結局あいつ何がしたかったんだろうな」

「そうだねえ、初めからお嬢様を襲撃の犯人だと知ってて試合をして……」

「それを、別に言いふらすつもりも無いって言ってたな」

ふくむと聡華は腕を組む。

大体だ、まああたしを襲撃者と分かっていた事はまあ良いとしても、どうしてあいつはあたしと試合をしたんだろうか？その理由が分からない。あそこであたしを潰そうとした？いやだったら、そもそもあたしにわざと？瞬突？を使わせた理由が説明できない。

痛いのが好きだと言う理由ならあいつは相変態だろうがまあその線も無いだろう。

だったら何だ……。

何であたしを。

考え込み立ち止まってしまう聡華。

最近何かにつけて分からない事が多すぎる。

ジジイがどうして？紫燕？だけじゃなくあたしまで家に帰る事を了承したのかや、叶に事についてもそうだし、今日の事だってそうだから考え出すとキリが無い。

「ああ~~~~ツッ！ もう分けわかんねえ！」

聡華は帽子を取って片手で頭をわしゃわしゃと掻きまわす。

しかし一方の渥美は、聡華と対照的にあっけらかんとして言った。

「まあ、なるようになるんじゃない？」

「お前なあ・・・」

思わず聡華は渥美を睨む。

だが党の渥美は睨まれても楽観的な態度を崩さなかった。

「だってさ、考えても答えが出ないんだったら考えるだけ無駄ってもんでしょ？ それに紫感も無駄だしね」

「それは・・・そうかもしんねえけどさ・・・でもなんか気持ち悪いだろ、分からねえってのは」

「お嬢様の言いたい事も分かるよ。だけどだったら今考えて分かるの？」

「いや・・・分からねえけども！」

「でしよ、それに大体昔からお嬢様は頭を使う事は得意じゃないんだから、あんまり無理して色々考えない方が・・・あ」

渥美はそこまで言って、自然と嫌な汗が流れるのを感じた。

そして同時に、少し饒舌に語り過ぎたと後悔したがもう遅い。

「へ、へえ・・・それがいわゆるアレだな・・・てめえの本心って

やつだな・・・？」

「あ、いや・・・これはちょっとしたその・・・言葉のあやと言うか言い間違いと言うか言い過ぎたと言うか・・・だから・・・」

「・・・やっぱ、お前一度マジで死ぬッ!!」

「おうわッ!!」

聡華の瞬速の踏み込みにも負けず劣らずのダッシュで逃走を図る渥美を聡華は追いかける。

夕日に浮かぶ二人のシルエットは、執事とお嬢様と言う間柄ながらどこか年の近い親友の悪ふざけのようにも見えた。

すっかり日も落ち、辺りを闇が支配する。

生き物達は寝静まり静寂が広がる世界。

だが紫香楽家の地下では、お抱えの技術者達が夜通し？紫燕？の修復・改良作業に追われていた。

そしてそこには、急ピッチで組み上げられていく？紫燕？の新たな姿を見つめる誠一郎の姿もあった。

誠一郎の傍らには端末を片手に指示を送る現場主任の男性がいた。

「

例のシステム・・・どうかな？」

「ええ、大丈夫ですよ。まあ予定よりは少し遅れていますがおおむね修正できる範囲ですし」

「そうか・・・」

「にしても、コレ見れば見るほどんでもないシステムですね」

主任の男は、端末を操作して？例のシステム？について誠一郎に言

葉をかける。

誠一郎はちらりとその情報に目をやってから静かに答えた。

「まあ・・・そうだな。だがそのシステムがなければ今回のこの？紫燕？は成り立たん」

「そのための大幅改修ですか・・・」

「まあそれだけではないがね。おお、そうだ。もう一つの方はどうだ？ データはさつき渡したと思うが」

「ああ、あのデータなら確かにいただきましたよ。いまISの運動プログラムにインストールしている所です」

報告を聞いた誠一郎はゆっくりと首を縦に振ると、では頼むと残してモニタールームへ足を進めた。

モニタールームに着くと誠一郎はデスクに座りコンソールを操作する。

すると呼び出し音の後、少女の音がモニタールームに響いた。

声だけだ。モニターには？Sound only？と表示されている。

「はい、もしもし？」

「私だ・・・」

「・・・あら、紫香楽のおじさまですね、こんな時間にどうかしました？」

相手が誠一郎であるを知ってもなお相手の少女は声のトーンを落とさずごく普通に言葉を紡ぐ。

「ああ・・・一応礼をと思ってな」

「お礼・・・ですか？ はて私何かしましたっけ？」

「ハッハッハ、やはり面白いなお主は」

珍しく声を上げて誠一郎が笑う。
ちなみに「ここでの面白いのは誠一郎にとって相手が中々の曲者だと言
う意味だ。」

「とまあ冗談はさておき。アレで良かったんですか？」

「おお、充分だったとも。おかげで良いデータが取れた」

「それは良かったです。私もあの痛手を被った甲斐はあったってこ
とですね」

「ふん、聡華の突きなどお主の実力に比べれば蚊に刺された程度じ
やろつて」

「まあ、今のところはですけどね」

誠一郎は初めてこの人物にこうして話をした時から、この人物は只
者ではない事を瞬時に察していた。

だからこそ今回？聡華の戦闘スタイルのデータ取りをこの人物に一
任した？のだ。

そしてその目論見は見事に成功した。

この人物から送られてきた？聡華のデータ？は誠一郎が予想してい
たよりも遥かに正確で詳細なものだった。

やはり只者ではない。誠一郎の目に狂いはなかった。

「ところで、一つ聞いてもいいかの？」

「なんでしよう？」

「お主は聡華が、襲撃者だと知っておってなぜわしの申し出を受け
たのじゃ？」

「ああ、その事ですか・・・」

相手は一拍置いてからフツツと笑うとサラリと言った。

「面白そうだったからではご不満ですか？」

あまりにサラリと言われて誠一郎は思わず声を詰まらせた。
そしてその次にはハツハと笑う。

「やはり、お主は……只者では無いわい……のう？白鶴 理
??」

「お褒めにあずかり恐縮至極」
恐らく相手は、受話器の前で仰々しく頭を下げている事だろう。
それを思うと更に笑いがこみあげてくる。
だがそれを表には出さず、誠一郎は紫香楽の当主として理に礼を述べた。

「……まあ何にしてもだ……。今回は世話になった」

「紫香楽のご当主様が軽々しく私なんか軽々しく頭を下げても良
いんですか？」

「ふん、そんな気微塵も感じておらぬだろうに？」

「あら……ばれてました？」

「まあな……。さてまあ長話も何だな。夜遅く済まなかった」

「いえいえ、こちらこそ楽しい思いをありがとうございました」

そう言つて電話が切れる。

……ふう……。

誠一郎はため息を吐きながらモニターの一つを見やる。

そこには先ほどまで自分が間近で見ていた紫燕が写っている。

もうすぐで紫香楽の翼はよみがえる。

……後は……

誠一郎は懐から写真を一枚取り出した。

そこには笑顔で写る誠一郎と幼い少女が写っている。

・・・聡華・・・か。

これは中々に難しい問題を後回しにしてしまったと誠一郎は考えながらその写真を、実に複雑な心境でしばらくずっと見つめ続けた。

モニター越しに写る？紫燕？は？全て？が揃うその日を待ちながらその翼を癒す。

そして？その日？は、もう眼前にまで迫っていたのであった。

Side Story? よみがえれ紫燕 中編 (後書き)

よくよく考えたらサイドストーリーってアレですね。
短編では無いわけだから、長くても問題ないですね。

問題なのはオリジナル展開なので既に若干ISかコレ? 見たいな空
気があるところでしょうね。

色々しません。

Side Story? よみがえれ紫燕 後編

純紫香樂製近接特化型第二世代IS?紫燕?現状報告書

開発コード:XSAS-001/2G

段階:ファーストシフト

製造最高責任者:紫香樂誠一郎

搭乗者:紫香樂聡華

現状は以下のとおりである。

破損部位

右腕部:装甲板交換(同時に新システム追加により生じたユニットアッセンブリ搭載完了)

右メインスラスタ:左スラスタ同様に出力増強に伴ってユニット交換終了。現在出力値最適化中

右サブスラスタ:機動力増強により既存個所修復後増設予定

左腕部:シールドジェネレーター交換(出力増強のため)

コアブロックシステム変更:全体の出力増加に伴うエネルギー運値変更と新たなエネルギーバイパス構築による誤差修正

大蛇:新システム搭載完了。最終調整の後紫燕コアへのウェポーンインストール開始。

以上

「……………ふむ、ここまで来ると新しいISを組むようなもんじゃな」

「ええ、まあそれは。ですが作業も順調ですから今日あれば明日の朝ぐらいには試運転までは持っていけそうですね」

「明日か」

「ええ」

誠一郎は現場主任の話にかかるく相槌を打ちながら、？紫燕？を見る。既に上記の作業内容のほとんどを終え最終フェーズに移行した？紫燕？は新たな姿をこの場の皆に晒している。

「誠一郎様が基礎理論を構築された例のシステムも順調ですし、大丈夫ですよ」

ISの作業は順風満帆。

それは今日まで大きなトラブルなくやってきた事がその証明になっているだろう。

しかし、それは技術者達に取ってだ。

誠一郎にとっては、なんとかせねばならない問題が一つ残されている。

誠一郎はそれを表に出さずに主任に後を任せ研究プラントを出ると使用人に濃いめの緑茶を頼みあの大広間の座敷机にゆっくりと座る。そして同じくゆっくりと瞳を閉じた。

・・・そう言えばいつからであろうか、聡華があんなに？はねつかえり？になったのは。

思い出すのは聡華がまだ幼かった頃・・・。

自分が分家であった？誉？の家から聡華を養女として迎え入れた日の事。

・・・正しかったのか・・・。

ふとそんな事を思う。

養女として迎え入れた側である自分がおかしなことをと自分でも思うが。

その自問自答を繰り返しながら、誠一郎は一人静かに誰にも知られず誰にも言わず悩み続けた。

「ぬぬぬぬ．．．．．ツ」

「ほらほら、早く選ばないと?」

「うるせえ、別に時間制限なんて無いだろ!」

「ほらほら」

聡華が帰省した五日目の夕方、聡華は渥美と自室で思いのほか白熱した?ババ抜き?を行っていた。

現在聡華の手札は一枚、渥美は二枚。聡華がハートの六を引けばあがりだがジョーカーを引けばたちまちチャンスはピンチに変わる。実はここに至るまで既に五回以上同じ事を繰り返しており、イケイケな性格の聡華も流石に慎重になっていた。

聡華は渥美の二枚のカードの上で右手を不安そうに何度も左右に振る。

そんな聡華に対して渥美がヒョイツとカードの場所を入れ替える。

「あ、ちよ待て! お前選ばれる側は動くんじゃねツ!」

「そんなルールは無いよ? それにさ言っちゃ悪いけどたかがトランプじゃないか」

「うるせえ、何でもかんでも負けるのは好きじゃないんだツ!」

「．．．．この前良いように遊ばれたのに?」

「てめえ．．．トランプ終わったら覚えとけ．．．」

「それでもトランプは続けるのか．．．」

聡華の負けず嫌いも相当なものだなと渥美は思う。

まあ誰だって敗北の屈辱にまみれるよりは勝利の栄冠をつかむ方が良いに決まっているが、それにしたってこれはたかがトランプ勝つても別に何も商品も栄誉も手に入らない。

まあ．．．こう言う所が聡華らしいと言えはらしんだけどね。

何事にも呆れるぐらい真つすぐ真剣に。

向こうでどうかは知らないが、少なくとも渥美の知る聡華はそういう人物だった。

「ええとな……ん」と……よしッ！ こっちだ！」
「ああ！」

聡華は勢いよく渥美の手にしていた左側のカードを引きぬく。

「へっへっ、その顔は……てめえの……！」

「……なんてねっ残念でした」

「のわッ!!」

「はい、お嬢様僕の番……ってか僕はこっちのカードね。はい……あがりっ」

「ちょ、お前！ 待てまだあたしが良いって言ってねえだろ!!」

「そんなルールは無いよ！」

「てめえさつきと言いま今と言いま……もう切れた!!」

「うわッ!!」

渥美に飛びかかる聡華。

だが聡華も渥美も喧嘩していると云うよりは中のいい友人同士が兄妹がじゃれあっているようにも見える。

つまりはそういう事。

渥美にとって聡華はそういう人物でありまた逆もしかり。

ここには一つ変わった兄妹の姿があるのかもしれない。

また初日と同じようにくたくたになるまで、散々暴れまわった二人は部屋の床に転がっていた。

そこで不意に渥美が聡華にこんな事を尋ねた。

「……ねえお嬢……いや……聡華……」

「……あん？」

渥美が聡華をお嬢様以外で呼ぶのは本当に焦っている時か本当に真面目な話夏のどちらか。

そして今は後者である。

「聡華は……この家に帰ってくるのやっぱり嫌だった？」

「・・・なんだよ急に」

「いや・・・ちよつと気になつてね」

「・・・そうだな・・・やっぱ嫌だつたな」

「それは・・・やっぱり誠一郎様の・・・？」

渥美の問いにフツと表情を曇らせる聡華。

「まあ・・・確かにあのジジイの事は・・・あんまり好きじゃねえ」

「・・・嫌いとは言わないんだね」

「・・・う〜ん・・・なんかそう言うのとはまた少しなんか・・・そう

違つて言うのか」

「違つ？」

「ああ・・・なんて言えば良いのかわかんねえけどな」

聡華はそのまま天井を見つめて動かない。

考える事はあるのだろう。

と言つよりも聡華が言つた通りよく分からないのだろう。

今の自分の感情が。

自分を？ 誉？ から養女として引き取つたおかげで自分は両親や弟と

引き離された。

だが逆にそのおかげで、恐らく？ 誉？ の家では到底届きはしなかつ

た力を得たし経験もできた。両親が亡くなつた後も今と同様の生活

が出来ているのは間違はなくこの家のおかげだろうとも思う。

感謝すればいいのか怒ればいいのか、好めば良いのか嫌えば良いの

か、きつとどうしたらいいのか分からないだろう。

渥美がそう考えていると聡華が話題をこちらに振り返してきた。

「お前はどう思つんだよ。あたしの事やこの家の事とかあのジジイ

の事とかさ」

「え？・・・ま、まあ・・・その僕もなんて言つたらいいのかわから

ないけれど」

「・・・ああ」

「僕としては・・・出来れば聡華にはこの家を嫌いになつてほしくはないかな」

「……」

渥美は自分の本心を言う。

さつきふと感じた嘘偽りない思いを乗せて。

「聡華にとつてこの家がどんなに嫌だったかは分からないけどね。

でもここは聡華が今まで育ててきた家だから……さ。僕はそれだけは嫌いになつてほしくはないかな」

「……」

聡華は渥美の答えに無言と言う選択肢で返した。

その表情は、やはりさつきと同様に色々考えている事を思わせる複雑なものであった。

渥美と聡華はしばらく床に転がったまま、互いに思考を巡らせていた。

「今日からお前はわしの娘となつた」

前日までいつもと変わらない日常を過ごしていた少女はある日突然全く知らない家に連れてこられて、いきなりそんな事を告げられた。まだ幼いその少女は、小首をかしげながらその言葉を聞いた。

「今日からお嬢様のお世話をさせていただきます、渥美・フォン・フェッセンと申します以後、お見知りおきを」

今日から彼の言うとおり自分の周りの世話をしてくれる人がついた。幼い少女でもそれぐらいは理解できた。なんかナヨナヨしたやつだと思つた。

「この程度で根を上げるとは・・・お前はあの日紫香楽の性を与えられたのだ。立て！聡華！！」
この家に来てからしばらくして、？槍？の稽古をつけられた。相手はあのおじいさんだった。
何で自分がこんな事をしなきゃならないのか。凄くつらいし痛いし・・・逃げ出したいくらい嫌だった。

「あゝああ・・・もう誠一郎様は・・・ほら、大丈夫？お嬢様・・・ちよつと沁みるかもしれないけど我慢してね？」

ボロボロの自分を彼は優しく介抱してくれた。それから話も真剣に聞いてくれた。
ナヲナヲしたやつって印象は変わらないけど良いやつだと思った。多分こいつがいたから自分は逃げ出さなかつたんだろうと今になつて思う。

「そうではありません！ 良いですか？どのような経緯があるうとも紫香楽の性を与えられた者ならばこの程度の作法はしっかり身につけていただかないと困ります！」
どこぞの礼儀作法の先生らしい。だけど自分にはそんなの向いていないし何より、そんなの出来ても出来なくても関係ない。第一紫香楽の名を名をって言うが勝手に養女にしたのはそつちではないか。

なぜこんな事を？
どうして自分が？

少女には答えを出すには酷な問いが徐々に少女の中で大きくなっていく。

行き場のない怒り。容易く吐く事を許されない弱音。

そしていつも耳にタコが出来るぐらい聞かされた？紫香楽の名？。そんな不安定な環境が、次第に少女の性格を人柄を大きく変えてい

った。

自分がいつこんな性格になってしまったのか、それは自分自身でもはつきりと分らない。

だが、それでもそんな今にも壊れそうな自分を支えてくれた渥美。多分この男がいなければ自分んはこんなに苦しんでは居ないだろう。きっとこの男がいなければ簡単にこんな家、嫌いになれただろう。逃げ出していただろう。

そう考えてしまうからこそ、自分を支え続けてきてくれた渥美の言った言葉が引つかかってはなれない。

？僕としては・・・出来れば聡華にはこの家を嫌いになってほしくないかな？

自分だって、この家のすべてが嫌いでは無いのだ。

だけど好きでも無い。

分らない。

この答えはどこにあるのか・・・。

どうやったら出るのだろうか。

その答えはどこにあるのだろうか。

聡華にはそれが答えの見えない迷宮をさまよっているように感じられた。

「ん・・・んん・・・」

聡華はゆっくりと目を開ける。

「・・・あれ？」

いつの間に自分はベッドの上に・・・？

部屋の電気は落とされて、自分はベッドの上で布団を掛けられていた。

そして傍らには？用事があればご連絡下さい 渥美？と書かれ下に携帯番号が記されたメモ用紙があった。

「あたし・・・あの後寝ちまったのか・・・」

月明かりだけが照らす部屋でゆつくりと身体を起こす。

・・・じゃあさっきのは・・・夢か・・・。

思い起こされるのは答えの出ない問い。

・・・ほんと、どうしたらいいんだよあたしは・・・。

聡華が頭を抱えて髪の毛をクシヤリと掻き上げる。

静寂が支配する中どこからともなく話し声が聡華の耳に届いた。

・・・ん？・・・外か・・・でもこんな時間に一体誰が・・・。

聡華はゆつくりと起きあがると、窓際へと移動する。

声は確かに外から聞こえる。

聡華は気付かれないようにゆつくりと窓を開けると、声の主を探す。

するとしばらくしてから夏の少し蒸し暑い風と共に二つの声が入ってきた。

そしてその二つの声は聡華が最もよく知る人物の声だった。

・・・この声・・・ジジイと・・・渥美？

珍しい組み合わせだと思いながら聡華は、その会話に聞き耳を立てる事にした。

「・・・何？」

「ですから、誠一郎様はお嬢様の事をどう思っておられるのかとお聞きしたんです」

誠一郎は渥美を一睨みする。

そして不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「お前はそんな事を聞くために、わしをわざわざこんな時間に呼び出したのか・・・？」

「はい」

聡華でさえ睨まれれば何も言えなかった誠一郎の鋭い眼光にもひる

まずしつかりとはつきりと返答する。

その返答を聞いて誠一郎はため息と同時にやはりかという思いになった。

普通、使用人である渥美が当主である誠一郎を呼び出すなどあつてはならないことなのだ、誠一郎は渥美が自分を呼んでいるという事を聞いてすぐさまそれが聡華に関する事であるという事を予測していた。

渥美を聡華に付けてから、以前にもこう言う事が何度かあつた。

渥美は聡華の事になるとたとえ誠一郎相手だろうと構わず言葉をぶつけてくる。

そして今回もそうだつた。

「私はこれまでも、お嬢様について誠一郎様に何度かお話をした事がありました。ですがその事だけはこれまで全くと言っていいほど御答えが無かつた……」

「そんな事を言わねばならんか？ わしが……」

「ええ……」

「何故だ？」

渥美は誠一郎をジツと見据え誠一郎もまたその視線をしつかりと受ける。

しばらくの沈黙の後渥美は、言い放つた。

「父親だからです」

「ッ!？」

誠一郎にとつても予想外だつたようで目が大きく見開かれる。

渥美は構わず言葉をつづけた。

「お嬢様……いえ、聡華にとつてもう父親と呼べる人間はあなたしかいません。聡華にはもう同じ名前の肉親はあなたしかいないんです」

「……」

「だからこそ僕は聞きたい。あなたが聡華をどう思っているのかを！そりゃ僕はただの聡華の使用人かもしれないません。でも・・・僕はこれ以上聡華があんな複雑で戸惑ったような顔してるのを見たくないんです！」

それは渥美の本心であった。確かに渥美にとって聡華とは何の関係も無い。ただ御屋敷のご令嬢と使用人という間柄でしかない。

しかし、いつしか渥美の中には聡華が自分の妹の様に思えていたのかもしれない。

だからこそ、聡華には笑っていてほしかったし元気でいてほしい。何よりあんな顔は聡華には似合わない。

渥美の心情吐露が終わりまた沈黙が訪れる。

この場にもし第三者がいたら息苦しさでたまらない空気の中静かに誠一郎が口を開いた。

「・・・父か・・・」

「はい・・・」

感慨深げにそうこぼすとゆっくりと瞳を閉じる。

そしてしばらくしてゆっくりと瞳を開けると綺麗な満月を見上げて行った。

「わしは・・・聡華を月のように育てたかった・・・」

「月・・・ですか？」

「月は太陽の光を受けて夜空に輝くものだ。そしてその表情は幾重にも変化する。満月もあれば半月、三日月もあれば新月のように自分を隠してしまう。人もまたしかりじゃ。一つの身体に幾重もの表情を持っている。誰かが光を与えてやらねば輝けない・・・じゃが輝いた時・・・わしらに多くの物を見せてくれる・・・わしは聡華をそんな風に育てたかった」

目を細め、どこかさびしげに言う誠一郎の姿。

渥美はその姿に驚きながらも黙って耳を傾けた。

「わしらが言うなれば聡華の太陽にならねばならなかったのじゃよ・・・まあ似合わん言い回しじゃがな・・・しかし聡華にとってわし

らは旨い具合に太陽にはなれなかつたようじゃな．．．」
上手く自分達が聡華を輝かせる事が出来なかつた事。

その事に関する純粹な後悔の念が感じられる。

「だがそれは今言つたところで所詮理想論だ．．．あの頃のわしと言えは誉の家から聡華を引き取つてやつたことと言えはこの聡華に紫香樂の性を与えると言う事の意味を教える事ばかりに固執し、あの子をまともに見てやろうともしなかつた．．．いまその現状が結果じゃよ」

誠一郎は自分を嘲笑するように笑い渥美を見やる。

「のう、渥美．．．聡華の好物．．．知つておるか？」

「ええ．．．聡華は中華が大好きですから．．．初日も食べに行きまし
たし」

「ふふツ、そんなことすらわしは知らん．．．何も見えておらなんだ．．．」

誠一郎はまた月へ向き直ると、寂しそうな顔でその月を見やる。

どこでどう間違えたのかなど、今さら考えても無駄な事だ。

だがそれでも、たればを考えてしまふ。ああしていたら．．．あの時こうしていれば．．．。そんな事ばかり。

その心情を聞いていた渥美は確信した。

こんな事を考えるのはやはりこの人が父であるからだ。

さつき自分が言つたように。

だから後悔する。

だから考える。

だから寂しそうな顔をする。

すべては父だから。

そして父だからこそ．．．その自覚があるからこそ．．．。

「誠一郎様は．．．その．．．怖かつたではありませんか？」

「．．．怖い．．．か」

「ええ、父親として見れなかつた、見てあげられなかつたから．．．だから聡華という人物が分からない。どう思っているのか、どう考

えているのか・・・だから怖かった・・・」

これまで政財界の大物と呼ばれる連中と話をするにも何の恐怖さえ感じなかっただろうこの人物もそれは相手が赤の他人だから。両者ともに思惑を持っているから。腹を探り合っているからこそそこには恐怖などという感情は入り得ない。互いが互いを騙し合うのがそういう人間との会話だ。

でも聡華はそんな人間ではない。

思惑など無く呼ばねばならぬ人物。そこに騙し合いも何もない言われる言葉はすべて真実だけだ。

だからこそ怖かった。真実を言われるのが、聞くのか。

何と言いつ返してくるのか分からない。

それが怖い。

「そうなのかもしれん・・・いや、きつとそうなのだろうな・・・」

「・・・誠一郎様・・・僕がこのような事を言うのは差し出がましく厚かましいと思うのですが・・・。聡華はきつと呼んでほしいと思います。あなたに・・・思惑なく何の気の遣いも無く・・・名前を」

「・・・わしにその資格はあると思うか？」

「当たり前です。あなた以外に・・・誰が聡華を呼ぶんですか？」

この人が呼ばないとだめなのだ。

自分でも他の人間でもいけない。

この人物でなければならぬ。

「・・・フッフ・・・」

静かに笑うと誠一郎は渥美に背を向け、ゆっくりと歩き出す。

渥美はその背中をただ静かに見送るつもりだった。

しかし少し歩いたところで誠一郎が立ち止まった。

「・・・渥美よ・・・わしがなぜ聡華をこの家に引き取ったのか分かるか？」

「・・・え？」

突然の問いに渥美は声を詰まらせる。

しかし初めから答えを自分で言うつもりで問いかけたようで少し笑

うと口を開いた。

「わしはな、何もあの子をISの適性が高かったという理由だけで引き取ったわけではない……。聡華になら……。託せると思ったからじゃ……。？紫香樂の思い？を？紫燕ちから？をな。じゃが……。本当はただ空を駆ける姿を見たかっただけなのかもしれん……。聡華が笑い元氣よく空を駆ける姿をの……」

「あ……」

「それに……。子が嫌いな親はおらんさ……。まあ……。色々、失敗してしまっただがな」

そう言い残して完全に家の中に入ってしまった。

今度こそ渥美はその背中をジッと見送った。

二人の会話の一部始終を聞いた聡華は、壁に力なく寄りかかっていた。

あのジジイが……。そんな風に思っていたなんて知らなかった……。いや……。違う。

知ろうとしなかった。

ジジイはあたしの事なんて嫌いなんだと勝手に決め付けていたのかもしれない。

本心も聞かずに……。

「……。あたしも……。怖かったんだろつか……。」

一人そう呟いて薄暗い部屋の天井を見つめる。

そう……。怖かったんだ。

あのジジイの本心を聞くのが怖かった。

なんだかんだいって……。あんどき渥美が言ったのがすべてじゃないか……。

「 父親だからです」

あたしにはもう、本当の両親は居ない。
けど・・・紫香楽としての父親ならいる・・・。

そう呼べる人間がいる。

そう・・・呼べる人間から・・・嫌いだと言われる事が・・・自分を
嫌いだと知る事が・・・怖かったんだ。

だから一方的に突き離して、話も聞こうとしなかった。

何やってんだ・・・あたしは・・・。

まるつきり馬鹿ではないか。

わけがわからないのではない・・・。もう答えの出ている問題の答
えを新しく探したって出るわけがないんだ。

・・・もう、迷わねえ・・・。

迷っちゃいけねえんだ。

偶然とはいえジジイの本心を聞いた、いや聞けた。

だからもう、迷っちゃいけねえ・・・。

今度は・・・あたしの番なのだから・・・

翌日。

聡華が目覚ますと、その寄りかかった壁の前だった。

・・・今度はあのまま寝落ちかよ・・・

我ながらどこでも寝られるなと思いつながら、顔を上げると丁度部屋
にノック音が響き続いて見知った声がある。

「起きたかな、お嬢様？」

「・・・なんだ渥美か・・・ああ、起きたよ・・・ただ身体は痛えけど
な・・・」

「入るよ？」

ガチャリと音をたて扉が開くと次に見たのは渥美の呆れた顔だった。

「・・・どこまで寝相が悪いのか・・・」

「違えよ、馬鹿ッ！」

「つたくこっちの気も知らねえで・・・」

「まあいいや・・・」

「おい、シャワー浴びつからタオル持ってきてくれねえか？」

「タオルだけでいいの？」

「・・・ん？・・・あ、ああ・・・それと着替えも・・・だな・・・？」

「なんだどういう意味だ？」

「ふうん・・・下着はつけないと・・・」

「・・・そう言う意味かッ」

渥美の顔にまくがめり込む。

「・・・こいつは本当に・・・ッ」

きのうアレだけ真面目な事が言えてなんで今それしか言えねえんだ・・・。

「一晩だけでここまで、気分って変わるもんなのか？」

「つたく・・・」

聡華は顔を抑えてうずくまる渥美の横を通り過ぎる。

「とにかく、早く持ってこいよ。後な下着はあたしが持って行くからいらねえの」

「あ、お嬢様！」

「だあ、もう何だよ！」

「僕は黒の方が好・・・うベッ！！」

良いところに花瓶があつてよかった。

聡華はそう思いながら風呂場へと足を進めた。

紫香楽の家が大きいとはいえ、風呂場はごく普通の大きさである。

聡華は服をかごに放り込むと、レバーをシャワーに切り替えて蛇口をひねる。

・・・はあ、しゃあねえ・・・行くか。

聡華は足取り重く地下の研究プラントを目指した。

「お嬢様をお連れしました」

「うむ・・・」

渥美の声がプラントに響きそれに静かに誠一郎が頷く。

ここでいつもなら聡華の軽口が続くのだが今日はそれが無かった。ひたすらここに来るまで聡華は何を言えばいいのかをずっと考えていたからだ。

それを不思議に思った誠一郎が渥美に小声で問いかける。

「・・・今日はやけに大人しいな・・・」

「ええ、まあそれは・・・色々あるのでしょうか、お嬢様にも」

「なんじゃ、お前でも知らんのか？」

「僕だって常に付きつきりというわけでは・・・」

「・・・まあそうか・・・」

誠一郎は話を切り上げると、聡華に向き直り少し大きめの声で呼んだ。

「聡華！」

「うえッ!？」

一瞬ビクツとなって変な声を上げてしまった聡華は、苦笑いでその呼びかけに答えた。

誠一郎は一瞬訝しげな顔をしたが、すぐに表情を元に戻すと視線で聡華にある物を見る様に促す。

聡華はその視線にゆっくりと誘導されながら、その？ある物？に目をやった。

「・・・これは・・・」

そこには、新たな姿をまとった？紫の翼？の姿があった。

元々シャープだった腕部や足回りは出力強化などに伴って若干太くマッシブになっており背部の両スラストもまた、以前よりも大型

化している。そしてカラーリングも紫いろがベースなのは変わらな
いが縁どりに白いラインが走っていた。

「・・・形、結構変わったな・・・作り直したのか？」

「いや・・・これは？紫燕？の専用パッケージ・・・その名も？八岐
大蛇のおろち？という」
やまた

聡華の疑問に答えたのは誠一郎ではなく現場主任の男性だった。

「八岐・・・大蛇・・・」

「？紫燕・八岐大蛇？は通常の？紫燕？にとある新しいシステムを
追加するためのパッケージ、それが八岐大蛇だよ。まあ説明するよ
りも使ってもらった方が早いがね」

「・・・ま、遠まわしにお嬢様はオツムがちよつとつてことだね」

「分かってんだよ！ あえて言わなかつたんだから触れんな！」
つたく・・・。

渥美を一瞥してから、もう一度まじまじと？紫燕？に目を移す。

これがあたしの？紫燕？・・・。

今になって思うと、この機体をジジイに預けた時自分はとうだった
のだろうか。

これもきつとジジイのあの話を聞いてなかつたら考えなかつた事だ
ろうし、多分今も色々騒ぎたてていただろうと思う。

聡華は誠一郎を見やるとうつむいた。

多分言わなきゃいけない事はとても簡単な一言。

でもそれが、出てこない。

こんな近くにいるのに。

・・・言ってしまうが楽になれるのに。

今ま自分が誠一郎に取ってきた態度や発した言葉の数々が後悔と自
責の念となってその言葉を抑え込んでいる。

「・・・何をしておる・・・とつととフィッティングに入らんか」

「ええ！？ い、今からやんのか！？」

「状況が変わつたのだ・・・」

・・・状況？

ああ、いやでも・・・！

聡華は喉元まで出かかっている言葉を無理やりにも出そうとするが言葉にならない。

そんな聡華を見て誠一郎は聡華の腕を引っ張ると、？紫燕？の前まで連れて行く。

「な、何しやがッ・・・！」

「言っただろう、状況が変わったと」

「状況ってなんだよ！」

誠一郎は聡華に構わず、？紫燕？の最終チェックを行っていた技術者に告げる。

「始めてくれ」

「おい、ジジイ！」

ああ・・・くそッ！

本当はこんな事言いたいわけじゃねえのに・・・。
だがそう思っただけでも状況は変わらない。

聡華はひとまず、？紫燕？に身を預ける事にした。

いつもと同じように機体に背中を預ける様に、下手な力入れず気持ちを落ち着ける。

「では・・・始めます」

技術者が声を発し、手元のケーブルが繋がったコンソールを叩く。
すると開いていた装甲が聡華の身体に沿って閉じ始めた。

「・・・お？」

変化はすぐに分かった。

違和感がねえ・・・。むしろ前の？紫燕？よりもしっくりくる感じだ・・・。

「しっくりくるでしょう？ まあ来てもらわないと困りますけどね」

もう一人の技術者がデータとにらめっこしながら聡華に話しかけた。

「なあ、さつきもチヨロツと聞いたんだけどよ。？紫燕？ってただ直しただけじゃねえのか？」

「ええ、違いますよ。基本的には改修ですが、新システム搭載によ

るOSのアップデートやハイパーセンサーの調整などなど上げれば
きりがありませんよ」

「あ、でも驚いたよなあ。この？紫燕？のフィジカルフィードバッ
クのパラメータを構築したの誠一郎様なんだからさ」

「え？」

「ああ、そう言えばそうだったな。しかもそのまるで見たように数
値が正確だったしよ」

「・・・何？」

「そうそ、特にあのアタック・シーケンスの構築は見事だったよな。
まあ、誠一郎様だしお嬢様の？槍術？なんて何度も何度も見てるだ
ろうしさ」

・・・槍？

見たように正確？

聡華には少し思い当たる節があつた。

それはあの理との一戦だ。

あの一戦何で戦ったのか良く分からなかったが。

さっきの話を聞いて少しつじつまが合うような気がしてきて来た。

・・・まさか、あのジジイが？

聡華はチラッと誠一郎に目をやる。

誠一郎は聡華に背中を見せていたが、その背中を見ただけで聡華に
はなんとなく理解できた。

だからこそ、言わねばならない。

絶対に。

でも・・・タイミングがわかんねえ・・・。

ああ、くそここまで出てきてんのにな・・・！！

と、そうこうしているうちにフィッティング作業が終わる。

「最終フェーズ移行・・・。全ラインオフ。ハッチも解放しろ！」

「了解、上部ハッチ解放、ステルス処理終了確認、全ラインオフ」

主任の指示で？紫燕？に繋がれていたケーブルがすべて抜け落ち？
紫燕？が置かれていた台座も沈み起動したPICによってフワリと

？紫燕？は宙に浮かび上部ハッチが開き遠くに青空が見える。
システムはすべて正常値。

所々まだ、処理中の個所はあるがそれでも現状に支障をきたすレベルでは無かった。

聡華は、装着した自分のISを一つ一つ確かめる様に動かしてそしてぐるっと施設内を見渡す。

・・・この一挙手一投足にジジイヤ・・・多くの技術者が関わってる。もう、あんな無様な姿は晒せない・・・いや晒させねえ。

聡華は強く思うとさっきまでの迷いがスツと消える。

そのまま静かに目を閉じ、そして気がつけば同じように静かに口を開いた。

「なあ、ジジイ・・・一つ聞いてもいいか」

「・・・なんじゃ？」

「昔からずつと言われ続けてきた事なんだがな・・・紫香楽の性を名乗る事の意味っての・・・教えてくれねえか？」

誠一郎はため息交じりに答える。

「まだそんな事も、わかつとらんかったのか・・・」

ああそうさ・・・あたしは何も分かってなかった。

「全く情けない・・・」

そうだな、情けねえよ。

ただの一言も言えねえんだしな。

「まあいい、よく聞いておれ・・・」

ああ、だからこれから知っていかなきやならねえんだ。

「紫香楽の性を与えられる事の意味・・・それは・・・」
それは

「
だ」

ああ、期待していた通りの答えだったよ。

だから・・・だからあたしも言わないとな・・・。

「・・・ありがとよ・・・？親父？」

聡華は一気にスラスターを噴かすと、ハッチを飛び出し超超高度にまで上昇する。

速さは健在、更にそこに誠一郎の構築したフィジカルフィードバックによって機体の隅々までの感覚が手に取るように分かる。

しばらくしてから、モニターが開き誠一郎が言っていた？状況が変わった？の意味を理解する。

「・・・ハワイ沖ね・・・。ったく・・・何やってんだか！」

聡華はチラッと小さく見える紫香樂の家を振り返る。

そしてニヤツと笑う。

多分、こんな事言うの初めてかもしれない。

いや言った事はあったと思うが、こんなただ純粹な気持ちで言うのは間違いなく初めてだ。

「行つてきます」

「最後まで騒がしいヤツじゃったわい」

「・・・まあお嬢様らしいですけどね」

「ふん・・・」

鼻を鳴らして振り返り一人その場を立ち去る誠一郎。

・・・全く親子そろって不器用だなあ・・・。

渥美はそう思つて笑う。

いくら気丈にふるまおうとも・・・あなたも人間だ。

渥美は、今見た涙を誰にも言わずそつと胸にしまい聡華が飛び出したハツチをただずつと見上げているのだった。

ここに本当の意味での紫香楽聡華は生まれ、そして空に再び？紫燕
？がよみがえった。

くおまけく

「なあそう言えば、もう一個聞きてえ事があつただけだよ」

「なんじゃ」

「どうして使用人どもはあたしに目も合わせようとしなかったんだ
？」

「・・・お前の八つ当たりが嫌だったんじゃろ」

「マジで！？」

S i d e S t o r y ？ よみがえれ紫燕 後編（後書き）

もうggaggだぜ！

そして次回から本当に待ちに待った臨海学校編です。

ほんと・・・すみませんでしたw

第36話 動き出す歯車と臨海学校

四十人乗りの大型貸切バスが数台列をなして道を行く。
乗るのはIS学園の一学年の生徒達。

そして各バスのプレートには？IS学園臨海学校一年 組？と書か
れている。

その一番先頭を走る一組のバス。その前から五列目の席に僕とセシ
リーが座り、その後ろには一夏とシャルロットそしてその周りをい
つものメンバーが陣取っていた。

本来ならどんな所なのだろうかと思いをはせて期待を膨らませるの
が普通なのだろうけど……。

「……はあ……」

僕はあまり気乗りしてはいなかった。

「もう、アル……さつきからため息ばかりですわねえ……」

「ああ、いや……」

「そんなに私の隣はつまらないのですか？」

「そう言うことじゃないんだ……うん……」

そう言うことじゃなくて……。

僕が気乗りしないのは……。

……海……か。

海に良い思い出のない僕にとって、これから行くところにはまさに
不安しかない。

……でも、入らなければ良いわけだし……。

大丈夫……うん。

……多分……。

不安ばかりが近づくにつれて大きくなっていく。

バスはいつしかトンネルに入り、そして抜けたころには目の前に青
く雄大な海が広がっていた。

海の出現に湧きたつ車内。

他の生徒同様セシリーも目を輝かせていた。

それを見ていると、なんだか不安になっていた自分がどうにも馬鹿らしく思えてくる。

そうだ・・そう。不安になるぐらいなら馬鹿みたいに明るく行こう。それがいい。それが正解だ。きつと・・なんとかなるさ！

この時僕はこの臨海学校で、自分自身という物と正面から向き合い、考える事になるなんて想像もしていなかったんだ。

「よし、到着だ。忘れ物には注意しろ！」

バスが止まると、織斑先生の声が響く。

そして、後続のバスも止まり中から学園の生徒達がぞろぞろと降りてきた。

僕たちもバスを降りると、自分の荷物を持ってクラスごとに整列する。

「ここが、今日から三日間お世話になる花月荘だ。臨海学校だから騒ぐなどとは言わんが、従業員の仕事を増やさんように気をつける、いいな」

「・・・よろしくお願いします」・・と声上がり、頷いた織斑先生は次に一人の女性を紹介した。

その女性は年齢は三十代くらいだけど、笑顔の絶えない職業柄かそれよりも若く見えた。

「そしてこちらが、この旅館の女将の清州景子さんだ。旅館の事で何か分からない事があつたらこの方に聞くといい」

「先ほどご紹介にあがりまして、女将の清州景子です。よろしく」
流石は女将というだけあってすべての動きに品がある。

短い挨拶を終えていざ、移動しようという時、遠くから野太いエンジンサウンドが聞こえてくる。

「あれ？ この音どこかで・・・」
僕は耳をすませる。

明らかに日本の車では無い、太くお腹に響くエキゾーストノート。
その大きな音はトンネルに入ったのか更に反響して僕たちの耳に確かに響いてくる。

しばらくしてトンネルを抜け、ついにその姿を僕たちは捉えた。

・・・ブライトブルーにホワイトのストライプ・・・？

その車は鮮やかな青色のボディに真中に二本太く白いラインが走っているアメリカンマッスルカーの一つであるクーペ型のダッジ・バイパー。

八・四リッター V型十気筒OHVエンジンをその長いボンネットに押し込み六百馬力オーバーというとんでもないパワーを有するマシンを誰かさんは見事に操り、最後は派手なタイヤスモークを上げながらパワードリフトで向きを一回転させて駐車場の一角に車を止めた。

その派手な登場に皆総ポカーン状態だった・・・僕を除いては。

「な、何？ 今の・・・」

「さあ・・・あでもここって関係者以外は基本立ち入れないから学園の関係者じゃないの？」

「でもさあ・・・いくらなんでもあんな派手な普通するかなあ」

口々に憶測を立て始める女子達。

その声が聞こえる度に僕は頭が痛くなる。

そう、あの車僕には見覚えがある・・・いやあつたなんてもんじゃない。

・・・姉さん・・・まさか車までこっちに持ってきてたとは思わなかった。

そして僕の思った通り左側のドアが開いて姉さんが颯爽と降りてくる。

「ハイ、あたし遅刻ね」

「ローラ・生徒よりも先に教員が迷惑をかけるなッ」

「いいじゃない、せつかくの臨海学校なんだから楽しまなきゃ。こ
う言うのは何でもかんでも？入り？が肝心なのよ」

「フッフ、まあま賑やかな事で」

「・・・ああもう女将さん・・・色々とすいません」

と車から視線をそらそうとした時、いつの間にか隣にいたセシリーが首をかしげて姉さんの車を凝視していた。

「ん・・・どうしたの、セシリー？ そんなにアメ車が珍しい？」

「イギリスにもアメリカの車はありますわよ・・・って、そんな事よりアル・・・あれ」

セシリーは同時に指をさす。

僕もその指先を視線で追った。

「あれって・・・？」

「いえ、あのボンネットの影に・・・」

ボンネットの・・・影？

僕は目を凝らし車のボンネット付近を注視する。

するとスポーツカーならではの低いボンネットから、茶色い髪の毛が見える。

まさか車から毛が生えるわけもないから間違いなく何かしらの生物があそこにいる証拠だろうけど。

「ほんとだ・・・何かいる」

「なんででしょうね？」

「さあ・・・」

「ローラさん！ 車のボンネット付近に何かいますわよ〜！」

セシリーが大声で姉さんと呼ぶと、当然呼ばれた姉さんは振り返るが同時にまだ好奇心旺盛な他の女子達も振り返る。

「え、なににに!? 新生物!?」

「おお、確かに車から毛が生えている!!」

「UMA、UMAなら捕まえてNASAとの交渉材料に……!!」
「……何を交渉するんだろう最後の子は。」

変な盛り上がりを余所に、姉さんは苦笑いを浮かべると頭を掻いた。

「ああ……さつきのでちよつと酔っちゃったのかもね……」

「ん? 誰か連れて来たのか? うちの生徒は全員いたはずだが……」

織斑先生も怪訝な顔を浮かべて車を見やる。

それに姉さんは、笑って答えた。

「ええ、稀代の天才を連れて来たのよ。ちよつと待つてて」

そう言うと姉さんは自分の車の方へ足を進め、ボンネット付近の?
何か?と言葉を少しかわした後その?何か?を立たせる。

その瞬間……。

「あつ!」

「あら!?!」

「えッ!?!」

「マジかよ……!」

上から僕セシリー、シャルロットそして一夏の順に声を上げる。

あ、つてか一夏いつの間にそこに……シャルロットも。

まあそんな事より、なぜ立ち上がったただけで分かったかそれは服装
だった。

身長は僕より少し低めで、そして?長くて若干ダボついた黒のフア
ツシヨン重視のタンクトップ?

更に口に加えるは金太郎飴でやる気のなさそうな半眼。

そして肩からはやや大きめの鞆をかけている。

「し、志穂音!?!」

何で彼女がここに……。

「あはは……来ちゃった……」

「来ちゃったつて、お前なあ」

「ローラさん・・・これは一体」

「だから連れてきたんだけど・・・」

いや断じていまシャルロットが聞いたのはそんな答えを期待してでは無いはずだ。

いきなりの部外者登場に織斑先生は志穂音を連れてきた姉さんに声をひそめて詰め寄っていた。

「どういうつもりだ！」

「だからそう言うつもりよ」

「ここは部外者は立ち入り禁止だとお前も知っているだろう？」

「大丈夫よ、彼女は天才なんだから」

「答えになってないぞ・・・」

「うそうそ、ちゃんとした目的があるの。大丈夫だから信じてあげて、あたしに免じて」

「・・・しかしなあ・・・」

「ほらほら、この話はおしまい！」

姉さんは離し終えたのか織斑先生の肩をポンツと押して離すと僕達に向き直る。

姉さんが向き直った時には既に志穂音は女子にその周りを囲まれた後だった。

「ねえね、名前はなんていうの！」

「ああ、えっと・・・千葉志穂音・・・」

「じゃあ、千葉ちゃんだね。千葉ちゃんはなに編入とかするの!？」

「い、いやそう言うことじゃなくて・・・」

「じゃあ、どうしてここに？」

「それは・・・いろいろ・・・」

流石の志穂音も、圧倒的多数の女子に囲まれての質問攻めなぞ体験した事はないようで輪の外で眺めていた僕達に助けると視線でメッセージを送るが・・・。

「・・・・・・・・ごめん無理」「」「」

四人が四人そろって心の中で唱え首を振る。

いくら知り合いとはいっても、自分まで質問攻めにされる事を覚悟で飛び込んでいく勇氣はない。

「そんなあ〜」と涙目になる志穂音だが、どうする事も出来ないのだ。

「やっぱり、珍しいのかな。同じ女子でもいきなり部外者が入ってくる」と

「そりゃそうだろ。まあ聞けば、あの娘結構色々あったらしいじゃねえか」

「だから姉さんも連れてきたんだろうけどね」

確かに彼女には色々と聞きたい事があるのは事実だった。

恐らく姉さんもそして織斑先生にとつてもそれは同じなのだろう。

だから、織斑先生はあえて大声で姉さんに詰め寄らなかつたし、今じゃ渋々志穂音を受け入れている。

それはつまり、そういう事だった。

「まあいい、お前らこんなところで無駄に集まるな馬鹿が。引率の教員と一緒にとつと自分の部屋割を確認して荷物を置きに行け！」

パンパンと織斑先生が手を叩くと、志穂音を囲んでいた集団がスツと話を切り上げて各々クラスの教員と共に旅館へと入っていく。流石の統率力だった。

女子達が旅館へとはけて、駐車場には僕を含めた通常メンバーと志穂音そして織斑先生と姉さんが残される。

「・・・よくも見捨ててくれたじゃん・・・」

ズイツと志穂音が僕達に詰め寄ってくる。

「あ、いや・・・別に見捨てたわけじゃ・・・」

「そ、そうだが、なあシャル？」

「う、うんそうだねセシリア・・・」

「で、ですわねえ・・・」

「はあ〜ん・・・そう来るそう来るんだね・・・もう良いよ分かった」
分かってくれた？

・・・にしては結構な形相で睨んじゃいるけど。

と。

一瞬背筋が冷たくなる。
なんだ。

この背筋を刃物で撫でられているかのような嫌な感覚は……。
……後ろ!?

僕はバツと振り返ってそして戦慄した。

「あ、ああ……せ、セシリー」

「……うん? どうしましたの?」

「ぼ、僕たちも旅館へ行かないかい? ……その……とぼっちりを
受ける前に!!」

「ああッ、アル!?!」

「ちよつとおッ! まだウチの話終わってないんだけど!?!」

志穂音が吠えるが知ったこっちゃない。僕は旅館に来てまで死にた
くない!

僕が見たのは……そうなんていうのかな。悪魔に取り付かれた人
間って言うのきつとああいう顔になるんだよね。

「い〜ち〜か〜あ……ちよ〜つと聞きたい事がアルンダケドナア・
……」

「……え? ってうおあッ!?!」

「そうだな、……私も少し聞きたい事があるのだ……少し向こう
でお話シヨウジヤナイカ……」

「ま、さて鈴、箒! お前は何か色々勘違いというか妄想と言うか
なんていうか分からんがソレをしちやいないか!?!」

一夏は青ざめた顔で二人の説得を試みるもこうなってはもう何をし
ても無駄。

シャルロットも既に自己判断で退却。完全に孤立無援の一夏だがま
だ希望はある。

「ラウラ! お前なら分かってくれるだろ! こいつらになんとか
言っつけてやってくれ!!」

「……この状況で私が言える事が……アルトデモ……」

「ぎゃー、お前もか……ってそうだ志穂音お前から説明してくれ！」

最後の頼みの綱志穂音に必死に助けを請う一夏だったが……。

「……せ、説明も何も……ウチに……そのあ、あんな恥ずかしい事を言わせる気なの!？」

さつき見捨てた志穂音が助けしてくれるわけがない。わざとらしい演技感丸出しだが今の三人にはそれで充分だった。

「へえ……どんなハズカシイコトヲシチャッタノカシラ……」

「スゴクキニナルゾ」

「事と次第によっては……な？」

「あ……ああ……」

合掌。

ロビーに入つて、ふと気付く。

しよりの部屋割一覧に自分の名前が無いのだ。

一夏同様に。

はてさて。

まあ……多分僕は一夏と同じ部屋だろうね、普通に考えて。

男同士だし。

と、不意に裾を引っ張ってくる誰か。

「ん?」

「やつほお」

「……ああどうも……」

「ねえねえ、アル君とおりむくの名前が無いけどどこなの部屋は?」
そう言えば、いつもおんなじメンバーとだけ話をしてきたから話す機会が無かつたけど、異様に遅い移動速度の女子をクラス内で時

々みかける事があつたな。・・なるほど彼女だつたのか。

「あの部屋の前に一つ聞いてもいいかい？」

「うん？」

「名前はなんて言うの？」

「ああ、そう言えば離すのは初めてだつたねえ。私は布仏 本音
つて言うんだあ。で、そんな事よりも部屋はどこなの？」

「そんな事つて・・名前は結構重要・・まあいいや。」

「確かに、私も気になりますわね。お部屋はどこなんですか？」

「本音との会話に横にいたセシリーも参加してくる。
というか、よく見たら周囲の女子達が気がつかれないように注意し
ながらも聞き耳を立てている。」

「数が数だけに中々聞き耳つていう地味な行動だけど壮観だよ。
でも、悪いね。その期待には答えられない。」

「それが僕も知らないんだよ。まあ多分僕と一夏は同じ部屋になる
と思うんだけど・・。ほら男同士だし」

「ですが、聡也さんも男ですわよ？」

「そう言えば聡也はどうなつたんだろうね？」

「総也には失礼だがすっかり忘れてた。主に存在を。」

「まあこれだけ大きな旅館だから三人部屋なんてざらだろうし・・。
そうかそこに聡也も入ってくるのかもね。」

「ま、まあとにかく部屋は先生にでも聞くさ。それじゃあまた後で
僕は話を一旦切りセシリー達と分かれると、織斑先生のもとへ足を
進める。」

すると既にそこには、先客がいた。

「なあ頼みますって！」

「いくらなんでもそれは出来ん、お前もしつこいな」

「しつこいのがウリなもんっすからね！」

「いい加減にしる・・ったく」

「ロツソが織斑先生に詰め寄っている・・。なんて命知らずな。」

「流石は代表候補生だ。・・それは関係ないか。」

「ロツソ、織斑先生！」

「ん？」

「おお、アルデイ」

二人が同時に振り返る。

一方は不機嫌な顔を直そうともしない教員と、もう一方はさっきまでの真剣な表情から一転して気さくに笑うイタリアン。

「先生もロツソもどうしたんですか？」

「丁度いいところに来たな、聞いてくれよ。この先生頭固すぎだぜ」「固すぎじゃない。お前がゆるいだけだろう！」

「だから・・・何が？」

「部屋割だよ部屋割！」

ロツソはしおりを広げて自分のクラスの部屋割を僕に見せる。

そしてある部屋の枠内にロツソ・ミオネッティ／鳳 鈴音と書かれていた。

どうやらロツソは鈴と同じ部屋らしい。

・・・で、これが・・・何？

ピンと来ていない僕に、ロツソは声を荒げた。

「だからあな、この部屋割。あたしは気にくわねえんだって！」

「気に食わないって・・・そんな理由で詰め寄ってたの!？」

つくづくロツソは命知らずだと思う。・・・ロゼオちゃんと押さえなきや・・・。

というよりもロツソと鈴ってそんなに仲悪かったっけ・・・？

少なくとも喧嘩している所は見たことないけど。

「そんな理由って・・・お前こっちは大問題なんだよ！」

「つまり、鈴とじゃ嫌だって事？」

「だあッ、それも違え!!！」

「じゃあなんだって言うのさ!!！」

会話不成立にいら立つ双方を、織斑先生は片目で呆れ気味に見てため息を吐くとロツソの変わりに答えた。

「サウスバード、コイツはな一条の名前がお前達同様に部屋割に載

つていないだろう？ その事で一条と相部屋にしてくれと頼みに来たんだ。・・・まあもちろん却下だがな

「だからどうしてっすかぁッ!？」

「当たり前だ、そもそもお前仮に一条と同じ部屋にしたらどうするつもりなんだ」

「・・・どうとは・・・？」

ロツソは聞かれてキョトンとした顔で少し考え、そしてサラッと云った。

「色々と既成事実を作る・・・ですかね」

「ばかやろっ!!!!」

思わず織斑先生と声が重なった。なんて事をサラッと云うんだ君は!!!

「とにかくそんな魂胆だろうと思ったから却下なんだ馬鹿もの!

この話は終わりだ。とつとと自分の部屋に行つて海で溺れてこい!

「お、溺れ!？」

「いいから行け!!!!」

「あ、は、はいっ!!!!」

今まできつと手加減していたんだらうなあ。。。もの凄い剣幕でピシヤリと言われあのロツソが逃げる様にその場を去っていく。

その後ろ姿を見て鼻を鳴らすと、今度は僕に目をやる。

「それで、お前は何の用だ？ オルコツトと同じ部屋が良いとかお前もぬかすんじゃないだらうな？」

ピクッ!

どこかでロール髪の触角が動いた気がした。

にしても、どうしてセシリーの名前が?

「いえ、そう言うわけじゃなんですけど・・・」

シヨボーン・・・。

そしてorzになった気がした。

「・・・まあそうだらうな。言つてみただけだ」

疑問符を頭に浮かべる僕に構わず織斑先生は続ける。

「お前が来た理由は分かっている。丁度いいから一条と織斑を呼んで来てくれ。まとめて話すとしてどうか」

「はあ。まあ、確かに個別に話をするより一気にまとめて話した方がそりゃ効率的だよな。」

「僕は丁度ロツソと一緒にいた聡也を連れ（まだ騒いでいたから目だっただけ）、そして外でボロ雑巾になつて転がっていた一夏を引きずつて再び織斑先生を訪れた。」

「織斑先生は一夏を見てため息を吐いて無言で肩に担ぐ。」

「・・・え？」

「この馬鹿は貰つておこう・・・さて」

「貰つておこう」この先生の言葉に大半の女子の肩がガクツと下がった。

「まあ、そうだろうね・・・。一夏の部屋に遊びに行きたい女子は多いはず。」

「当然部屋の話には注目が集まるがその答えがさりげなくではあつたが？織斑先生のお部屋？？ではしゃれにならない。死に行くようなものだ。」

「お前たちはローラに付いていけ同じ部屋だ」

「そういうこと」

少し離れたところから笑顔でヒラヒラと手を振る。

そして傍らには志穂音の姿もあつた。

「まあ、順当だね。一夏も織斑先生だつたし。」

「・・・まあ志穂音がいる事に若干の不安は残るけど。」

「それに聡也も一緒の部屋か。」

「まあルームメイトが多いのは嫌じゃないし、むしろ人数が多ければ多いほどこう言うイベントというのは楽しいものだ。」

「よろしくお願ひしますね」

「うんうん・・・丁寧にどうも・・・あなたも何か言うことあるんじゃないの？」

「あ、そうだったね。日常の姉さんの体たらくを見せるのが甚だ不

安でッ！！」

「・・・余計な事は言わなくて良いの・・・分かった？」

「だったら口で言っつてよ・・・」

殴る前にさ・・・」

「じゃあ、行きましようか。時間ももつたないし・・・ね」

「ローラさんの部屋なら・・・大丈夫かも・・・」とどこからか声が聞こえたけど僕たちはあえてそれに構わず姉さんに付いて部屋へと向かった。

「さ、到着」

姉さんがバンツとドアを開けて部屋に入り僕たちもそれに続く。

「流石、国立ね。旅館一つとっても豪華豪華・・・」

「わあ、海が見えるんですねこの部屋からは」

「おお、早速海に繰り出してく女子がいるねえ」

志穂音がサラツと皮肉って聡也が感嘆して僕が見たまんまを述べる。そこは和風の畳敷きでかなり広い部屋だ。さつき聡也が言った通り海が見える東向きの部屋。

お風呂とトイレは別個になっていてそれもまた中々に広かった。

「さて、今日は終日自由時間だけど皆はどうするのかしら？」

姉さんが座敷机に座して僕達に尋ねた。

「僕は、海に出ようかなと思ってます。行かなかつたら・・・ロツソ

とロゼオに何言われるか分かりませんから・・・」

「ふふ、ラブラブね」

「そんなんじゃないですけどね」

聡也は苦笑すると自分の鞆の中から、小さめの鞆を取り出して早速部屋を出ようとすする。

そこでまだ座っていた僕に聡也は不思議そうな顔を向けた。

「あれ、アルディは行かないんですか？」

「ああ、僕は・・・そのちょ、ちょっと休憩してから行くよ」

「そうですか・・・分かりました。セシリア達にも伝えておきますね」
そう言い残して足早に部屋を後にする聡也。

僕はその背中を、さっきとは違いうつむいた不安げな顔で見送った。
そんな僕を見て、姉さんが複雑な表情で僕に声を駆ける。

「・・・アルディ・・・」

「うん・・・まだちょっとね・・・」

「そう・・・」

そこまで話して、志穂音の存在に気がついた姉さんはチラッと志穂音を見やる。

ジッと見ていた志穂音だったが、持ってきた鞆からPCを取りだすとわざとらしく声を張り上げた。

「大丈夫だよ、ウチは何も聞かないし言わないし」

窓際に移動して志穂音はネット回線をつなげ始めた。

ルームメイトのありがたい心遣いに感謝しながら僕たちは会話を続ける。

「やっぱり、怖い？」

「まあ・・・ね」

海難事故で両親を目の前で亡くしたあのトラウマは何年経ってもそう簡単に消えるものじゃない。

けどこれでも回復した方なのだ。現にIS学園は海にせり出したメガフロートの上に立つ言ってみれば海上学園で嫌でも海は目に入るが特にその時は何でもなかったしこんな気持ちにもならなかった。

初めなんてただの水だけでも怖かったぐらいなのだ。

「でも・・・そうは言ってられないよね・・・やっぱりさ。せっかく来たわけだし」

「そうね・・・出来ればあたしとしても、どんどん慣れて行ってもらいたいけど」

「だよ、うん。大丈夫だよ・・・きつと」

僕はゆっくりと立ち上がると、鞆の中から自分の水着とタオルその

他諸々が入ったバッグを取りだした。

「・・・じゃあ行つてくるから」

「・・・ええ、あたしも志穂音ちゃんとちょっと話してからそっちへ行くから」

「分かつたよ」

僕は出来る限り笑顔で姉さんに言つて、部屋を出た。

ああは言つたが他の生徒達が心を弾ませながら海へと向かう中、楽しもうと思えば思えば思うたびに逆に僕の心はどんどん沈んでいった。

ポツーン。

砂浜に刺さるビーチパラソルの下で体育座り。

その前を色鮮やかな水着を身にまとつた女子が踊る。

目の保養にはぴつたりなのだが、嫌でも海が目に入る。

青く澄んだ美しい海。市街地からは離れているため透明度も素晴らしい。

波も穏やかで、風も心地いい。

絶好の海日和だと言うのに、気持ちだけが晴れなかった。

やっぱり、こうして目の前で見ると、どうしても一歩が踏み出せない。

このビーチパラソルの下にくるのだからって少し戸惑つたぐらいだ。

・・・やっぱり駄目だ・・・。

こんなんじゃない・・・。残念だけど部屋に戻ろう・・・。

そう思つて海へ踵を返した時だった。

「あら、どこへ行かれますの？」

「え？」

セシリーとばつたり・・・。

セシリーはこないだの買い物時に買った青色のパレオ付きのビキ

二と着用していた。
普段制服の下に隠された部分があらわになっっている分普段よりも色っぽい。

そう言えば向こうではモデルの仕事もしてるんだっただね。

整った身体つきに思わず気恥しさから視線をそらすのが、鼓動が早くなっているのは自分でも分かった。

「まだ海にも入られてない様ですけど・・・どうかされました？」

「いや・・・別に・・・何でもないよ」

僕は足早にその場を去ろうとするがそれをセシリーが許さなかった。

「ならば、丁度良かったですわ。サンオイル・・・縫ってくださいませんこと？」

「え？」

「・・・嫌でしたか？」

「あ、いや・・・そうじゃないけど・・・」

上手く断る理由がこんな時に限って出てこない僕の脳みそに渾身の右ストレートをぶち込んでやりたいと思いつながら、僕は気付かれないうちに小さく息を吐くと首を縦に振った。

「では、お願いしますわ」

「ええと・・・背中だけでいいのかい？」

「そうですね、お願いしますわ」

セシリーはブラを解いた状態でシートにうつぶせに寝転がる。

むにゅっと形を変えた胸がセクシーで目のやり場に困るが今回はそれでよかったのかもしれない。

なぜならばこの体勢ならば見ているのはセシリーの色っぽい背中と砂浜。少なくとも海を見なくて済む。

サンオイルを手に落とし少し体温で温めてからセシリーの背中に塗っていく。

「あ、やってるじゃない」

そこになぜか一夏に肩車された鈴がやってきた。

いや正確には一夏がやってきたから鈴が来た・・・？

まあどっちでもいいか。

「あら、鈴さんそれに一夏さんも・・・ってどうして肩車なぞ・・・？」

「いや、勝手にこいつが乗ってきただけで深い意味はない・・・」

「意味ならあるわよ あんたの無駄に高い身長を行かせるチャンスじゃない！」

「俺の身長はそんなくだらない事にしか使えないのか!？」

「くだらないですって!？」

ああ・・・始まった。

まあここら辺は海に来てそんなに大差ないね。

僕は気にせずサンオイルをセシリーにまんべんなく塗布していく。

そして不意に顔を上げると・・・。

「・・・ツは!？」

ササツ

あ、隠れた。

僕と目のあったのであろうバスタオルモンスターがヤシの木の陰に隠れている。

そしてそれを見て苦笑いしているのは・・・シャルロット？

・・・ってことはあれラウラか!？

多分僕と目があったと言うよりは一夏が存在が大きいのだろうけど、今はそんな事よりなんでラウラがこの真夏の太陽の下あんなぐるぐる巻きで、一人我慢比べをしているのだろうか？

僕は一夏の足を肘でコツくと視線でバスタオルモンスターを指した。

「・・・なんだ、ありゃ・・・」

「多分一夏に用事があるんだろうけど・・・ね」

「・・・まあなんとなくだが誰かは分かった・・・」

「だろうね・・・」

「よし、鈴とりあえず降りろ。ちよっど行ってくる・・・」

いつもなら、自分以外の女子のところへ行こうとすると怒りだす鈴だが流石に鈴もあのバスタオルモンスターには若干引き気味だったようで、素直に一夏の上から降りてその後を付いていった。全く・・・こんな暑いのに・・・よくやるよ。

・・・そう言えば箒が見えないけど・・・それにロツソ達も・・・まあ、彼女たちにも色々やる事があるのがある。僕はそう思いこの考えをやめセシリーに尋ねる。

「ええっと。こんな感じで良いかな？」

僕はセシリーに塗布し終えたサンオイルを返すと、セシリーは笑顔でそれに答える。

「ええ、ありがとうございます」

セシリーはブラを結び直して僕の隣へ座り込む。

そしてしばらく無言が続き、セシリーから口を開いた。

「あの・・・遊びませんの？」

「うん・・・僕は・・・その・・・ね」

「そうですか・・・」

また流れる気まずい間。

どうしようかどうしようかと考えていた時不意に、誰かに手を引っ張られた。

「ねえねえ、アルデイ君もさせっかく海に来たんだから遊ばなきゃ！」

「そうやって！　ウチらと海で遊ぼうや！」

それはクラスメートの女子達。

「ええ、あ、ちよっと!？」

「なにになに〜セシリアと一緒にそんなに良かったか〜」

「まあセシリアには悪いけど、ちよう貸してもらっで〜」

「ああ！　な、何を勝手な事してますの!」

「だって、アルデイ君のどこにもセシリアの名前なんて書いてないしな〜」

そう言っでどんどん僕を海の方へ引っ張る二人。

そして波打ち際で立ち止まると。

「「セーのっ!!」」

「うわぁッ!?!」

勢いよく海に向かって放り投げられる。

思いのほか強く放り投げられて波打ち際とはいえ膝の高さまで海につかるぐらいの所まで放り投げられて気がつけば、尻もちを吐く格好で僕は海に浸かっていた。

「あ

」

海……。

波……。

「おい、大丈夫かい?」

「ちよつとやり過ぎたかなあ?」

遠くであの二人が何か言っているが、良く分からない。

「ああ……」

漏れた言葉。それと同時に、あの時の事が鮮明に頭にフラッシュバックする。

荒れ狂う波と、傾く床……。

窓を突き破り、そして。

僕の母さんと父さんが

。

「うあう……あ……」

海だ……。波だ……。

駄目だよ……。駄目だ……！

「駄目だ駄目なんだ……ッ」

海は……。波はッ!!!

失ってしまう！ 波にのまれて海にのみ込まれて！

次第に自分が何を言っているのかさえ分からなくなる。

何を考えて今どうしているのかも。

そして耳を突く、いまだ鮮明に覚えているあの言葉。

僕の名を必死に呼ぶあの両親叫び声。

アルデイ!!!

アルデイイイツ!!!

母さん……。父さん……。ッ!!!

次の瞬間には、頭が割れるほどの酷い頭痛が襲い僕は思わず声を上げた。

「ううッ……。うあああああああああああああッ!!!」

流石にその声にはビーチにいた誰もが振り返った。

バシャバシャと、一斉に皆が周りに集まってくるのがぼやけた視線と霞む聴覚ながら分かる。

しかし僕はそれに構ってられない。

とんでもなく痛い頭痛に悶絶し、浅瀬を転げまわる。

「海は・・・波もツ・・・くうツ駄目だ、駄目なんだッ！！また失う。僕はまたッ！！」

「アル大丈夫ですよ！　しっかりしてください！」

「おい、アルデイ！」

「どうした言っただけ!?」

皆が心配そうに見つめる中で、どうにか何でもないと手を上げようとするがそれすらも満足にできない。

身体を、心をそして全てを海という名の恐怖が食いつぶしていく。

「アルデイッ！！！！」

そこに、ひと際大きな声が響く。

ね、姉さん？

「うう・・・ツくううッ！！」

「ちよつと、通して、お願い！」

水着では無かった姉さんは、服やストッキングが濡れるのも構わずに群がる生徒たちの合間を縫って僕のところまでやってくると勢いよく抱き上げて強めの口調で言った。

「アルデイ！！　あたしを見なさい！！」

「ああ・・・海が・・・」

「大丈夫だから、あたしだけを見なさい！！　ほら！」

「だい・・・じょう・・・ぶ？」

姉さんは半ば強引に僕の顔を手でつかみ自分の顔の方へ固定し、次第に言い聞かせるような優しい口調で僕をゆっくりと抱きしめた。

「そう・・・大丈夫だから・・・あなたは何も失わない・・・皆大丈夫・・・ね」

「・・・大丈夫・・・失わ・・・な・・・い・・・」

「そうよ、大丈夫だから・・・」

姉さんが僕の頭を優しくポンポンと叩く。
その軽く走る衝撃を感じながら・・・

僕の意識は白い光に飲み込まれていった

。

第36話〈動き出す歯車と臨海学校〉（後書き）

ようやくと始められました臨海学校編。

ここで一夏君はパワーアップするわけですが、皆さん大事な何か忘れていませんか？

そう東さんが出てきてないんですよまだ。

何でここは原作と大きく異なる展開になっちゃいます。

・・・まあここまで色々崩してきた僕が言えた義理ではありませんけどねw

それでは次は37ですかね、そこでお会いしましょう！

さよならッ！

第37話くアルデイの真実と姉の嘘く

ローラは濡れた靴や服のまま、気を失ったアルデイを部屋の布団に寝かせる。

ローラが振り返ると、そこにはあのビーチにいたいつものメンバーである一夏・鈴・セシリア・ラウラ・シャルロットと千冬、部屋の奥にはPCを叩く志穂音とそしてさっきアルデイを放り投げた二人の女子がいた。全員水着の上に各々身体が冷房などで冷えないように薄手の上着などを羽織っていた。

全員心配そうな顔で黙りこくっているが特にその中でもアルデイがこうなった直接的原因を作ってしまった二人の女子は顔を下に伏せたままかなり落ち込んでいる様子だった。

その二人にローラは優しく言う。

「ま、こう言う事もあるわ。だから気にしないで・・・ね？」

「あの・・・」

「ウチ達・・・」

「いいから、いいから。アルデイは海はあんまり得意じゃないの。だからちよつと驚いちゃっただけよ。すぐに目を覚ますから・・・さ、行きなさい。臨海学校なんだから楽しまないと！」

「・・・はい・・・」

二人は絞り出すように返事をする和一礼してから部屋を後にした。それを残りのメンバーが見送ってから、ローラはふうと息を吐いた。「・・・実際はそんなに単純な事では無いのだろうか？」

「ええ、まあ・・・そうね」

「そんな！ ローラさん、アルは・・・」

「落ち着きなさいよ、セシリア騒いでもどうにもなんないじゃん！興奮して詰め寄ろうとしたセシリアを鈴が小柄な体で制する。

鈴の言った事はもつともで正論すぎてセシリアも反論できずに納得のいかない表情で黙りこんだ。

「・・・あのローラさん。アルデイの身に何が起こったんですか？」

「何が・・・まあ多分昔の事を色々と思いだしちゃったんでしょうね」
「昔？」

ローラの問いに答えたローラの発言に筭が首をかしげる。

この場にいる誰もが首をかしげている中一夏とシャルロットだけは何か心当たりのあるような顔でローラを見ていた。

「それって・・・海難事故の・・・」

「え？」

そしてポツリと一夏が言った。まさかローラもその事を知っているとは思わず驚きの声を上げた。

「僕達、前ちよつとその話をアルデイから聞いたんです・・・」

「あの子が・・・話したの・・・？」

「ええ、触りの部分だけでしたけれど・・・」

ローラはアルデイが自らその事を話した事に驚きつつも、うあはり触りだけかとも思った。

アルデイにとつて・・・まあ自分にとつてもだがあの海での出来事は非常に強いトラウマとなつて今でも心の中で生き続けている。

いくらカウンセリングや様々な治療でトラウマが和らいだと言つたつて、それは完全に取り除く事は難しい。その結果がこれである。

ローラはそう・・・と短く言つて口を閉ざす。

息苦しい静けさが支配する中、千冬が見かねて口をはさんだ。

「・・・ローラ・・・出来ればその話。話してくれないか。多分このままではここにいて誰も納得しない」

千冬の発言の後また少し沈黙が流れてローラは何度かゆっくりと頷くと仕方が無いという表情で大きくため息を吐いた。

「まあ、あたしもここまでやらかして、話さないで済むとは思ってないわよ」

ローラは言い、ひとまずこの大所帯を畳に座らせてゆっくりと話し始めた。

「話し始める前に・・・ねえ、シャルロットちゃん・・・一夏君。どこ

まで聞いたのかしら？」

シャルロットと一夏は二人顔を見合わせながら記憶を探っていく。そしておぼろげながらあの時の話を思い出した。

「確か・・・僕達が聞いたのは船旅で大波にのまれて・・・」

「アルデイの両親が波にさらわれて・・・って言う所ぐらいまでですな」

「触りつて言ってもそこそこ話していたのね・・・」

そこでふと同じように頷いていたセシリアが目止まる。

あら？ セシリアちゃんも・・・この事・・・。

それを疑問に思ったのはローラだけでは無かったらしく、隣に座っていた鈴がセシリアに尋ねた。

「あんた知ってたの？」

「ええ、まあ私も昔会った時に少し聞いた程度でしたけれど・・・」

「・・・そう言えばアルデイとセシリアは接点があったのだったな」

「その時にもちよつと話してたのね・・・」

ローラは三人がある程度知っていると云う子を踏まえたとうえで考えをまとめて話し始めた。

「そう・・・あの日は本当に穏やかな日だった・・・」

まだアルデイが十歳にも満たなかった頃の話。ようやくIS関係の仕事に目処が立った私は休暇を合わせて父さんと母さんそしてアルデイと一緒に旅行に出かけた。

ロサンゼルス発の六日間のカリフォルニア半島クルーズ。？サンラ

イン・オブ・マリソン？全長三三〇メートル。満載総排水量約十万吨を誇る世界最大級の豪華客船に幼かったアルディははしゃぎ、胸躍らせていた。

「こんな大きな船に乗るんだね！」

「ああ、そうだよ。これから六日間この船で家族そろって楽しむんだ」

「ローラもうまく休みが取れて本当に良かったわ」

「まあね、一週間分の仕事まとめるのは大変だったけど」

皆笑顔で、これからの楽しい未来に思いをはせていた。

この先に待っているのが絶望であることなどその時は知る由も無かった。

出港時刻が来て船は港を離れ大海原に行く。

あたしは仕事上いつも弟の面倒を両親に任せきりだったから子言う時ぐらいゆつくりしてもらったためにアルディと一緒にこの大きな客船の中を色々見て回っていた。

そして、甲板に出たあたし達は手すりに寄りかかって気持ちのいい潮風に髪をなびかせる。

「海って本当に綺麗だね、姉さん！青くて・・・どこまでも広くて。それにこの船もオレンジと赤のラインがきれいだし・・・」

「そうね、あたしもこんなにゆつくり海を見たの久しぶりかも。あ、ちなみにこの船ラインはの名前のサンラインに由来してオレンジと赤で太陽を現しているんだって」

「へえ〜そうなんだ　ねえ、今度はあっちに行ってみようよ！」

「ああ、はいはい、走っちゃだめよ」

「分かってるって」

と油断させておいて・・・

「うえ、姉さんが走るの!？」

「嘘にご用心〜」

「ああもう!〜!」

本当に・・・楽しかった。
でもそれが・・・あんな事になるなんて。

それは本当に唐突にやってきた。

夕食がすんで家族で船尾ロビーで椅子に座っていた時、いきなり船が横に大きく揺れた。

「ちょ、ちよつと・・・大丈夫なんでしょうね!?」「まあ船旅だから、こつ言つ事もあるさなあ母さん」

「ええ・・・まあ、心配じゃないと言えば嘘になるけれどねえ」

その時船内アナウンスが流れる。

「現在本船は、急発達した低気圧の中を進んでおります。そのためしばらく船体が大きく揺れる事がありますので、ご注意くださいませ。尚この低気圧を抜けるのに・・・」

一瞬不安になったが、正確なデータをもとに運航しているはずだからとかぶりを振ってその不安を振り払う。

それからも何分か大きな上下運動を繰り返しながら波を超えて行く船。

やけに長いなと思っていたその時、窓の外を見ていたアルデイが大きな声を上げた。

「あッ!!」

「え?」

その声に振り返った時には既にアルデイの目の前にこの船よりも大きな波が迫っていた。

どうやら波を乗り越えた直後にその先にあつた大きな波が真横から船を襲つたらしい。

「アルデイ!!」

「任せて!!」

父さんの声に短く答えるのよりも早くあたしの身体は動いていた。巨大な水の壁が、ロビーのガラスをいとも簡単に突き破る。

「あ、ああ・・・！」
「つく！！！」

あたしはアルデイを飛び込みながら素早く抱き上げると胸に抱え込む。

ロビー内には割れた窓ガラスから更に大量の海水が流れ込み船のバランスを崩していった。

大きく傾く船体。流れ込む海水はあつという間に高かったロビーの天井を低くしていく。

つまりそう浸水である。

既に船外に波にさらわれた乗客の姿が複数あった。

「アルデイ、ローラ！」

そこへ父さんと母さんが漂流物につかまりながらやってくる。

「良かった無事で！」

「アルデイ、大丈夫？」

「お母さん・・・うん」

「よかつ」

とアルデイを母さんに手渡そうとした時、さっきと同程度の波が再び船を襲う。もうすでに三〇〇メートルを超える豪華客船の船尾部分は完全に水につかっている。

そしてそこへの大きな波の襲来は、完全に船の天井を吹き飛ばして

「父さん、母さん！！！！」

「うあああああつ！！！」

「アルデイ・・・アルデイを！！！」

さっきまで目の前にいたはずの二人が声を残して消える。それは余りにも一瞬の出来事だった。

「え、ねえ、お母さんは、お父さんは！？」

アルデイの不安そうな声。辺りを見渡すも見えない二人。

どこにー！

どこへ行つたの!?

「アルデ・ロー・ラ!」

っは!

声のした方を振り返るとそこには、今にも折れそうな柱にしがみつ
く両親の姿。

「父さん、今 「来るんじゃない!」

え・・・」

今行くからという声を父さんの厳しい声が遮る。

そしてあたしはその時気がついた。

父さんの顔が、そして母さんの顔が・・・こんなにも命を落とす瀬
戸際的狀況でも穏やかに笑っていた事に。

「父さん・・・母さん・・・」

「お父さん・・・お母さん・・・」

二人はそれは穏やかに笑うと、今の狀況に全くに使わない明るい声
で言った。

「アルデイ、泣くな・・・大丈夫だから・・・な」

「ローラ・・・あなたもなんて顔してるの」

それはまるで言い聞かせるように優しく・・・

「アメリカの男は強くたくましくだぞ!」

「あなたも、アメリカを背負ってるんだからそんな顔はしないの」
そして全てを悟ったように穏やかで

「・・・強くなれアルデイ!」

「あなたも・・・ね」

こんな時に言う表現ではないが・・・力強かった。

「お母さん! お父さんツ!」

アルデイが短い手を必死に伸ばすも絶対に届かない。
見えているのに・・・助けられない。

あの時のアルデイはどんな事を思っていたのだろうか。

二人の声が聞こえた直後

三度押し寄せた波に二人の姿は完全に消えた

嵐が過ぎアメリカ海軍の救助艇に救出されるまであたしは必死に耐えていた。

アルデイは気を失っていたが、自分は絶対に失ってはならない。この子を・・・この子だけは絶対に。

あたしが助けられた時、アルデイとあたしは全身の凍傷で正直もう少し発見が遅れたら命まで危なかったらしい。

でも・・・何とか一命は取り留めて今ここにこうして生きている。

「・・・これが、事故の真相」

話し終えた場の空気はそれはそれは重たかった。

誰も何も話そうとしない。

いや話せなかった。

何を切り出せばいいのかあの千冬でさえ分からなかったのだ。

そこへ、志穂音がゆっくりとその輪に加わってPCの画面を皆に見せた。

普段あつげらんとしていた志穂音もどう切り出せばいいのか分からなかったが、それでもおずおずと口を開いた。

「・・・これがその当時の事故のニュース・・・」

一同はその画面に注目する。そのニュースの見出しには？ A l l o f C a l i f o r n i a o f f i n g ? S u n l i n e o f M a l i n ? s u b m e r g e n c e d e a d p e r s o n m i s s i n g p e o p l e ? (カリフォルニア沖で？サンライン オブ マリン号？沈没。死者行方不明者多数)とあった。

「・・・向こうでもニュースになっていたんだな」

「って、待ってください！・・・この年・・・ッ！？ この日付・・・」

急にそのニュースの年月日を見てセシリアが目丸くする。

「何？ セシリアこの日付がどうかしたの？」

「ええ、この丁度三年後ですわ・・・私がアルにであったのは・・・」

「ああ、そう言えばそのぐらいだったわね・・・」

「・・・三年か・・・ふむ」

互いに頷き合う三人に千冬が少し考えながら口をはさんだ。

「これだけの事故の後・・・よくまあたった三年でお前はともかくコイツは立ち直れたな？」

「言うほど簡単じゃなかったわよ・・・」

ローラは表情を更に曇らせて答えた。

セシリアが母親に連れられてサクラメントを訪れたのはセシリアの言うとおり事故から三年後の春先だったと思う。あの時はあたしもアルデイもなんとか立ち直れてはいたが自分自身にもそしてアルデイの幼心には深すぎるこの海難事故はあたし達を事故後しばらくずっと苦しめ続けた。

眠るたびによみがえるあの情景。両親のあの最期の笑顔。

自然と涙があふれて止まらない日もあった。

何度も姉弟ともどもカウンセリングや病院に通ったし精神安定剤まで服用したほどだ。

だがまだローラはよかった。

そうあたしには？仕事？という逃げ道があったからだ。

仕事に熱中していれば、集中していれば少なくともその間はそう言った事故の事を考えずに済む。

しかしアルデイは違う。

当時も学校には通っていたが、あんな事故の後だったし何よりアルデイ自身が学校へ行ける状態じゃなかった。

あんなに明るく笑っていたあの子が

「全く笑わなくなったわ……。分かる？ 結局あの事故があった年・

……。一度も笑わなかったのよ？」

「……。ちよつと……。想像できないですね」

シャルロットがボソリとつぶやくように言う。

多分それはこの場にいる誰もがそうだろう。

誰もそんなアルデイを想像できない。

「もう生きる気力さえもない、まさに抜け殻の様なあの子を見るのはつらかった……」

日がなずつと壁に力なく光のない目で寄りかかって座っているあの子をどうにかして立ち直らせたい。

前を向かせてあげたい。

けどどうすればいいかが分からなかった。

あの時ほど、自分の力が何の役にも立たないものだと思い知った事はなかった。

あの当時アメリカの代表確実とまで噂されていた自分。

だが結局一番身近な、大切な両親に励まされた拳句助けられず、そして実の弟一人満足に立ち直らせる事が出来ない。

無力だった。

ローラはそれを思い出して自虐的に笑う。笑うことしかできないではないか。

本当に馬鹿らしい……。本当に大層な？力？よね。

フツツと力なく笑い顔を上げると、これまで一言も声を発せず考え込むラウラの姿が目に残る。

話した事に嘘はないし、疑問に思う事があったかと思いいローラは聞

いた。

「ラウラちゃん・どうかした？」

「・・・いえ、ただ少し・・・先ほどの説明でどうしても分からない事があります・・・」

「分からない事、そんなのあったか？」

「ああ、一夏。もう一度ローラさんの話を思い出してみてくださいないか？」

「話を？」

「そうだ。丁度ローラさんとアルデイが甲板に出て海を眺めているくたり行を」

ラウラに言われ一夏が頭をひねる。一夏だけでは無いその話を聞いていた他の面々も次々に考え始めた。

そしてしばらくして鈴が「あッ！」と声を上げた。

「・・・ふむ、鈴は分かったようだな」

「ええ、分かったわ・・・そうおかし・・・」

「おい、鈴なんだよ、何がおかしいっていうんだ？」

「一夏、さっきの話の中でアルデイはローラさんになんて言った？」

「なんて・・・って・・・ええと確か・・・『海って本当に綺麗だね、姉さん！青くて・・・どこまでも広くて。それにこの船もオレンジと赤のラインがきれいだし・・・』・・・だったか？」

鈴は一夏の答えに頷くとラウラにも目配せで答え合わせをする。

そして鈴が言った個所はラウラの？分からない事？という問いの答えだった。

しかしいまだに一夏はピンと来ていない。そこへシャルロットが助け船を出した。

「どこがおかしいんだよ・・・だから・・・」

「いい、アルデイって生まれつきの色盲なんだよね？ だったらどうしてこの時アルデイは色が分かっているの？」

「うん・・・いやでも・・・生まれつきだから慣れて見分けられるようになっただけじゃないのか？」

「うっん、だつてアルデイ僕のリヴァイヴ見て、『赤色?』って聞いてきたんだよ? でもこの時はちゃんと色を見分けてるじゃない」「確かに・・・そうだな」

「・・・というわけで悩んでいたのですが」
なるほど・・・ラウラちゃん・・・流石鋭いわね。

出来ればこの話は、個人的にあまりしたくなかったのだが・・・。

「・・・ええ、そうよ。あの子の色盲は・・・生まれつきなんかじゃないわ」

「つまり・・・事故の後遺症・・・と?」

ラウラが一番あり得そうな無難な回答を言うがローラは首を振った。そして少し言葉を詰まらせながら手で顔を覆い静かに言った。

「これはあたしがあの子に吐いている中でも最大級の嘘・・・」

「・・・嘘?」

誰かがぼつりとつぶやいたが、構わずローラは勢いのままに言う。

ここで止めてしまえばきつともう言えなくなると思ったからだ。

「あの子の色を奪ったのは・・・あたしなの・・・」

「「「ええッ!?!?」「」」

「厳密に言えば、あたしが医師に頼んだの・・・」

「そんな、どうしてですの・・・」

「・・・あの子を立ち直らせるため・・・こんな方法しか思いつかなかった・・・」

「・・・いや、それは言い訳だと・・・今でもローラは思う。」

生きる気力を失い日に日に身も心もボロボロになっていく弟を見ていられなかった。直視できなかったから・・・。

立ち直らせてあげたいと言う建前を作って目をそむけただけ。

「海で両親を亡くしたあの子は、とにかく青い色に凄く敏感に反応したわ。だから家からも出れなくてずっと部屋の窓も閉めっぱなし。あたしは・・・まずあの子を家から連れだしたかった。あんな塞ぎきった空間にずっといたんじゃない・・・。だからそのために・・・色を奪ったの・・・」

「しかし・・・急に世界が白黒になったらいくらアルデイでも・・・」
「そのあたりも・・・ね・・・」

「・・・インプリンティングか」

千冬の言葉に頷くローラ。専門用語の出現に一夏はそのあたりに詳しくそうなラウラに小声で尋ねた。

「なあ・・・インプリンティングってなんだ？」

「一種の記憶操作・・・の様なものだ。本来はひよ子などが初め見た物を親だと思ふ事などの特定の行動を指して使う言葉のだが、この場合は要するに？記憶の擦りこみ？という事だろう。つまりアルデイは人の手によって色を失ったのにも関わらず、同時に行われたであろう記憶の擦りこみによって？自分は生まれつき色盲だった？と考えていたから、そこに違和感は生じないと言うわけだ」

「・・・なるほどな・・・けどアルデイは知らないし・・・それって」

「・・・言うな。それはローラさんが一番分かっている事だ」

ラウラに言われ一夏は口を紡ぎローラを一瞥した。

その視線を受け取り一夏が何を言いたいかは分かる。

けれど・・・どうしようもなかった。

そこにアルデイの意思はない。

ローラが勝手にやった事と言えばそれまでだし、自己満足だと言う事も分かっている。

しかし結果論を言ってしまうと、ローラの取った行動は正しかったと言える。

色という概念を失ったアルデイは、少しずつではあるが外に出て行くようになった。

外に出て行けば、それからは思っていたよりも早く、アルデイは明るくなっていきそして

笑うようになった。

やった事に後悔はないが責められれば謝っても済む問題では無い。でもそれでも、ローラはアルデイが、たった一人の血のつながった

家族が立ち直ってくれた事が純粹に嬉しかった。だからもう二度とこの子をこんな目に合わせるかと思い、心に誓っていた。誓ったはずだったのに……。

「それからしばらくしてあの子にISの適性がある事がわかったのけどその時はあたしもいるあつて騒ぎたてられなかつたんだけど。……でも、研究者間で専用機を作つてデータ採取をしようつて風潮が高まつて。そこであたしが……多分……償いの気持ちでも顔をのぞかせちゃつたのかしらね。？ストライク・バーディー？のバイザーに“ダイレクト・カラー・アジャスタメント？を組み込んで疑似的にだけどあの子に色を与えてしまった……。……今思えばそれもアルデイがこうなつた遠因かもね」

ローラは横たわるアルデイを見て肩を落としながらため息を吐く。それからは誰もまた口を開かなくなつた。

ただ部屋にかかつている時計の音だけが、時間の流れをその場の人間に伝えているのだった。

「あゝあゝあゝ……まあねえ」
真つ白い空間。

そこに横たわるはアルデイ。そしてその周りを、ブロンドの髪を後ろで束ねる青いパーカーにオレンジのラインの走つたジーパンを着てサングラスをかけたいつぞやの女の子がニコニコしながらゆつくりと歩く。

「ふゝん……にははゝ……こんな形で巡つてくるとはねえ」
女の子はアルデイの身体をペチペチと叩いたり突ついたりして笑

う。

なんだろう

うつすらと見えたその女の子。

「・・・むぐん・・・二回目がこんな形とはねえ。まあ良いけどボクとしてはネ」

二回目　　・・・そうだ。僕はこの声を聞いた事があるんだ。

考えようとしたが、急激な眠気と怠惰感が僕を襲いまともに考える事はおろか言葉を発する事も出来ない。女の子はそのまま僕の顔辺りに手をやって独り言をつぶやき続けた。

「まあ、何にせよ・・・これでようやく・・・」

ようやく・・・何？

「ボクが存在を彼女に示せちゃうね・・・」

彼女？　一体何の事を言ってるんだ・・・？

だが僕はそれを聞く事が出来ない。

しかし、ぼんやりとした視界でたった一つだけ、しかと見る事が出来たものがあった。

それは・・・。

「・・・今度こそ・・・認めさせちゃうよ・・・」

という言葉と同時に、サングラスを直しながら意味深な笑みを浮かべる女の子の表情だった。

何が・・・どうな・・・って・・・

僕はそれをよく理解する間もなく深い眠りに落ちて行った。

少なくともそれは、以前感じたような暖かさはなく冷たく・・・そして孤独なものだったと思う。

「……結局、サウスバードは目を覚まさなかったな。」

千冬はそんな事を考えながら旅館の高台にある岩場へと足を向けた。そこは丁度展望台のようになっていて、水平線の向こうに沈む夕日を正面から望む事が出来る。

正直サウスバードにあんな過去があつたとは伝え聞いていたが当事者から聞くのとは印象が全く違った。流石の千冬も、少々気持ち分らないがこの展望台へ行こうと思いつたのだった。

徐々に見えてくる夕日。だがそこには思いもよらぬ先客がいた。

「……篠ノ之……」

「……あ、織斑先生……」

そこにいたのは箒だった。箒は展望台にある小さなベンチに風呂はもう済ましたのか浴衣姿で座っていた。そして手には携帯電話を持っている。

その携帯電話を見て千冬は箒が誰に連絡を取ろうとしていたのか直感的に理解した。

「……束だな……」

稀代の大天才でありISを生み出した張本人。突然消えたと思つたらひよっこり現れる神出鬼没な箒の実姉。天真爛漫だがその明るさが時に本気で恐ろしい。怖いと思う時がある。

そんな人物。

「……まあ、あえて触れるまい……か。」

「篠ノ之……夕日でも見に来たか？」

「……はい……」

箒が束の事で声を荒げた事は千冬もその場にいたからよく知っている。

だからこそあえて触れず、たわいもない会話を切りだす。

「その……織斑先生も……夕日を？」

「ああ・・・サウスバードが倒れてな・・・それでちょっとあった」
「そうですね・・・」

この時点で千冬には当然だが箒がただ夕日を見に来ただけでは無いことぐらい分かっていた。

だがこちらからはそれを言わないのは、本当に聞きたいのならこちらから言わずとも箒自ら切りだすだろうと言う考えがあるからだっ
た。

二人で静かに沈みゆく夕陽を見送る。

流れる沈黙は気まずくも無くだからといって気持ちの良いものでもない不思議なものだった。

すると沈黙を破り箒が静かに千冬に聞いた。

「・・・あの・・・織斑先生・・・」

「・・・なんだ？」

「私は・・・どうすればいいのでしょうか・・・」

「・・・どうすれば・・・か」

「私は・・・いつもいっただ見守ってばかりだった・・・あの場に
駆けつけたい、皆と共に戦いたいとずっと今日まで思い続けてきま
した」

千冬は適当なところで相槌を入れながら箒の話に耳を傾ける。

「ですが・・・私にはそのための？力が無い・・・でも・・・私も
・皆と共に駆けたい・・・あの背中を少しでも守ってみたいのですッ
！」

背中・・・それが何を指すのかなと言わずもがな一夏である。

それが分かるからこそ千冬は箒に対してどうしても言いたい事があ
った。

「・・・篠ノ之・・・これが答えになるかは分からないが、お前
に・・・言っておく」

「・・・え？」

千冬は箒の目をしっかりと見据えていつも通りの口調で言った。

「どんな選択をしようとも、私はそれを責めも褒めもしない。だが・

それは軽やかで、それでいて力強く。

そして何より

。

恐ろしかった。

第37話〈アルデイの真実と姉の嘘〉（後書き）

凄い雨です。

どうもこんばんは、しるくです。

さて、臨海学校でのお楽しみは後に取っておくタイプのシナリオになってしまいましたが、それはもう仕様です。

どうしても一度書きたい内容があってそれをここらへんで挟ませていただきます（汗）

それではこの臨海学校編も長々と思うってますのでよろしく
お願いします（爆）

では38話で、お会いしましょう！

さよならッ！

第38話 悲しき月下の死闘

千冬と篤は、共に旅館の一角に設けられたオペレーションルームへ駆けこむ。

そこには既に、真耶が学園スタッフに指示を送っていた。

「あ、織斑先生ツ・・・と篠ノ之さん・・・？」

「展望台でお会いしたもので」

「今はそれはどうでもいい。状況はどうなっている？」

千冬が会話に割って入り厳しい口調で真耶に問う。

聞かれた真耶は少し慌てながら空中投影ディスプレイを千冬に手渡ししながら説明した。

「あああ、えつと・・・爆発後？ストライクバーディ？は浮上。現在は海上にて停止中」

「IS部隊の展開は・・・？」

「現在ステルスモードにて待機中です」

「・・・よし・・・それで何か通信はあったか？」

「いえ、何も」

千冬は手渡された情報に素早く目を通しながら、同時に旅館の被害状況も把握していく。

幸いにも爆発した時刻が丁度夕飯時という事もあり周囲の部屋に生徒はおらず負傷者はゼロ。

旅館へのダメージはまあそれなりのものだが修復できない規模では無い。

それらを確認すると千冬は？ストライク・バーディ？のデータに目を移す。

？ストライク・バーディ？の現状に変化は見られない・・・。暴走かとも思ったがパラメーターもさほど飛びぬけておかしいと言っわけではないし・・・では・・・一体なぜ・・・。

サウスバードがあんな事をするとは考えられんし。

千冬が考え込んでみると、そこへ勢いよく飛び込んできた人物がいた。

「千冬ッ！」

「ローラか・・・それと千葉・・・」

「どうも・・・」

「お、おい！」

志穂音はペコツと頭を下げるとそのまま金太郎飴をかじりながら、開いていたポートに自分のノートPCを繋げキーをタイピングしていく。

そして千冬を見て片手を上げる。

「あ、お構いなく」

本来なら叱責するところだが今は構ってられない。

千冬はひとまず志穂音を置いておいて、ローラに向き直った。

「ローラ、お前この状況がどういう状況分かるか？」

「まあ、まったく分からなくはないけど・・・今は説明している時間はないわ」

「どういう事だ？」

ローラはいつになく険しい表情で千冬を見て短く息を吐いた。

そして何度か頭を掻いたり視線を泳がせたりしながら考えをまとめ「要するに・・・」と口を開こうとしたまさにその時。真耶の声がオペレーターイングルームに響いた。

「通信！？ 織斑先生、？ストライク・バーディー？から通常回線に割り込む形で通信がッ」

「・・・繋げ」

「はいッ！」

真耶が通信担当に指示を出すと、千冬達の前にモニターが開きバイザーをつけたアルデイが表示される。

しかし、容姿はアルデイだったがモニター越しの人物から感じ取れる雰囲気はアルデイとは全く異なるものだった。

千冬は後ろからそのモニターを睨みつけるローラと共にそのアルデ

イに似て非なる者に対して静かに問いかけた。

「・・・お前は誰だ？」

ふっふっふー。まあそろそろと固めてくれたもんだね。

まあおかげで通信が出来たわけだけど。

現在？彼女？は六〇七機の？打鉄？そして？ラファール・リヴァイヴ？を確認していた。

しかもリーダーといった機器を使用せず、ステルスモードを起動しているISに対して頭に流れ込んでくる直感のみですべてを把握しているのだ。

そして？彼女？はその中の一機を選んで難なくコア・ネットワークに進入し通信回線へ割り込み千冬達に通信をいれたのだった。

？彼女？はこれだけの事をたった一瞬で行っていた。まさにあつという間と言うやつだ。

そして通信をしてからしばらくモニターに目つきの悪い女が写る。

『・・・お前は誰だ？』

「誰だろうね？ ね、ね、ね？」

『少なくともサウスバードではなさそうだな？』

「そうだね、ボクはボクだよ」

？彼女？は底抜けに明るい声で千冬に言葉を返す。

どンドン相手の顔が険しいものになっていくが？彼女？には関係のない事だった。

そもそも、？彼女？は話をしたい相手は千冬では無いからだ。

だから、？彼女？は千冬を軽くあしらう事にした。

「あのさ、あのさ。おばさんちよつと退いててくれない？」

『・・・なに？』

？彼女？の千冬に対する？おばさん？発言に向こうの空気が変わっ

た気がしたがどうでもいい。

「邪魔なんだよね〜・・・ボクが用事あるのは・・・そのパツキン姉ちゃんなんだからさ」

千冬がゆつくりとモニターの前から退く。

そして、扉に手をかけながらこちらを睨むローラの姿を？彼女？が捉え？彼女？の口角がつり上がる。

『変わるわ・・・』

『・・・ローラ・・・』

『説明は後でするから』

向こうでの短い会話を交わしローラがモニター前に立つ。

？彼女？は不敵に笑いローラはその笑みを睨む。

「やだなあ・・・そんなに睨まないでよね〜」

『・・・アルデイは？』

「ん〜〜寝てる」

『・・・そう・・・』

「嘘は言っていないからね」

『・・・・・・』

ローラは少し考え込む。恐らくこの状況をなんとかこれ以上、大事にしまいと考えているのだろう。

・・・はあ・・・考えることなんて無いのにね。

？彼女？はわざとらしく大きなため息を吐くとローラを待たず一方的に自分の要求を述べはじめた。

「こんなこと話しても時間の無駄だね。この通信をした理由だけちやつちやと伝えてあげるよ。」

・・・ローラ・サウスバード・・・ボクは君に用がある・・・」

？彼女？の笑みが不敵から冷酷に変わる。

その表情はこれから？彼女？がローラに対して何を何をするつもりなのかを最もよく表現していた。

しかし、用があると言われていくら弟がらみでものこのこと出て行くほどローラも馬鹿では無い。

「・・・そう言われて、あたしがホイホイと出て行くとでも？」
ここへきても、まだ尚穩便に済ませようと交渉を試みるローラ。
うん．．．。これは．．ちよつと思ひ知らせてあげる必要がある
ねん．．。

ボクがどれほど本気なのかって言うのをね。

彼女は適当に闇に潜む教師陣が乗るISを一機選ぶ。

まあ．．コイツでいつか。

別に判断基準などない。本当に文字通り適当に選んだ。

そして不思議な顔でこちらをみるローラを尻目に、？彼女？はおも
むろに？ウエポンズラック？を起動。

長方形の大きなスラスタ兼？武器庫？が前へとせり出しスラスタ
ーサポートがスライドしてからガシャンと音を立てて高圧荷電粒子
砲？へヴィハンマー？がその大きな砲口をのぞかせる。

「あなた．．何を！？」

「へっへ．．．．ドカーンッ」

ズダアアアッ！！

瞬間、マズルフラッシュと共に旅館の前のビーチが爆せる。

「なッ！？」

モニターの外から千冬の驚く声が聞こえる。

そして爆煙が晴れゆきそこには、？へヴィ・ハンマー？の直撃を受
け行動不能に陥った？打鉄？の姿があつた。防御力に定評のある？
打鉄？だがその自慢の防御力は一撃で粉碎されてしまった。

？へヴィハンマー？の灼熱の閃光によつて所々の装甲が焼けただけ、
圧倒的な火力は？打鉄？のグレーメタリックの装甲板のほぼ半数を
粉碎していた。

そして機体がその状態ならば、シールドバリアを貫通した攻撃は搭
乗者をも襲い学園の教師でもある？打鉄？の操縦者はなびけば美し
く艶やかであるう黒髪を血で赤く染めていた。

「あなたッ．．！！！」

「言つたよね、君に用があるって．．。すぐに出てこないのなら．．

・残りもやっただっていいんだよ？」

『ツ！？』

ロックさえもしない目視での完全な不意打ち。それも構えてから打つまでが異様なまでに早かった。

きつと吹き飛ばされた操縦者は、自分に向かって撃たれた事さえもよくわからぬまま吹き飛ばされたかもしれない。

彼女の言うとおり、放っておけば確実に学園側が展開させたIS全てが誰かの言葉を借りるわけではないが？鉄クズ？になってしまう。自分が出て行けばあの操縦者はあんな怪我を負わずに済んだかもしれない。

完全に自分の決断の遅れが招いた事態にローラは顔をゆがませながら憎々しげにつぶやいた。

『・・・分かったわ・・・行けばいいのね・・・その代わり、もうそこにいるISに手は出さないで・・・。良いわね？』

「にはは、分かればいいーんだよお」

『ツく！！』

ローラはモニターの向こうでギリツと奥歯をかみしめ満足げに笑う？彼女？に踵を返し入り口付近に座っていたタンクトップの少女に何かを話して部屋を後にした。

・・・ついにね・・・ようやくだよ・・・。

？ウエポンスクエア？を戻しながら？彼女？は再び不敵に笑っていた。

ローラはゆつくりとビーチを歩く。

見上げる先には、月をバックに自分を見下ろす？彼女？がいた。

「・・・あたしを脅すとはね」

「結果来てくれたからね、別に方法は何でもよかつたんだよ。君さえ来てくれればね」

ローラはチラツと担架で運ばれていく操縦者を見やる。

「・・・あたしが、もっと早く決断していたらこんなことには・・・。ローラは心の中でその女性に謝罪を述べると再び視線を？彼女？に戻した。

「・・・さて、時間も惜しいから・・・」

「そうね・・・あたしも早くあなたを倒して弟を返してほしいし・・・」

ローラは右手の人差指にはめた指輪に口づけをし、その直後光がローラを包み込む。

そしてローラを？ストライク・バーディ？と同様の色をした装甲が包み込んだ。

「「始めましょうかッ！」」

ローラはアサルトライフルとサブマシンガンを召喚し、撃ちまくりながら一直線に？彼女？へと突き進む。

「うっうっ・・・直撃警報はつれっい」

？彼女？は場に似つかわしくない声で宣言するとゴゴンっという音と共に素早く？へヴィハンマー？と？ファイアーフライ？を構え計四門の高火力砲撃を放つ。

「甘い！」

閃光に包まれた、ローラの姿が消え声は真後ろから聞こえた。

？フェイク・シルエット？によつて敵の目を欺くのはローラの常と手段である。

ローラは？スピードリーダー？を使用して瞬時に武装を切り替える。左手のサブマシンガンはそのままに小ぶりの試作型荷電粒子砲？フォックス E-66U？へと持ちかえ至近距離から一発をお見舞いした。いくら小型とはいってもその威力は？ストライク・ミラージユ？の中では一発あたりの威力が一番高い。

いくら重装甲の？ストライク・バーディ？も至近距離からの荷電粒

子砲にはひるむはず。そうローラは考えていた。

だが、それは大きな誤算であった。

「嘘でしょ!？」

「ざくんねん」

吹き飛ばどころか、まるで何か強固なもので固定されているかのごとく？ストライク・バーディ？はひるみもしなければ吹き飛びもしなかった。

？彼女？は片方の？ファイアーフライ？を待機状態に戻すとローラが構えた？フォックス E-66U？を掴み思い切り海へと投げ捨てる。

「おまけだよん」

ミサイルポッドが開き？トーンード？がその名のごとく嵐のように落下するローラへと向かう。

かなりの勢いで背面から海面に叩きつけられたすぐ後に上からサンドイツのようにミサイルの雨が降り注ぐ。

背面へのダメージで肺へ息を上手く送れずに苦しみながらもシールドでなんとか急所へのダメージは避けていたローラだったが、それでもみるみる装甲は削られシールドエネルギーもあつという間にイエローゾーンに突入してしまった。

「ぐううッ!！」

「にはは・・・海へ・・・沈めえ!！」

？ウエポンスクエア？が展開されるのを見てローラはとっさに海へと潜るがトドメと言わんばかりに撃たれた？ヘヴィハンマー？の一撃の方が若干早くローラを焼く。

それでもローラへの背面への衝撃は海の水深がいくばか和らげてくれた。

まあ、そうは言っても正面は早くもスタボロなのだが。

ザバァアァンッ!！」

ローラは？彼女？の位置を確認しながら少し離れた所へ離水した。向こうも、ファーストアクションを？圧勝？して満足げに武器を構える。

ローラは肩で息をしながら手早く損傷状況を把握して、パパッと頭の中でさまざまな数値を弾きだす。

シールドエネルギーは既にイエローゾーンの半ば、武装は全て使えるがここまで装甲表面に全体的な傷が付いてしまうと、？ステルス・ミラージュ？は使用できるかわからない。

にしても・・・？フォックス？を至近距離でぶっ放したのにびくともしないとと思わなかった。

そしてその後の反撃も、わざわざ荷電粒子砲を待機状態に戻して海へ投げ捨てて・・・。

全てがローラの想定外の攻撃だった。

？ストライク・バーデイ？は重装甲、重火砲の鈍重ISである。

基本的に近接戦闘には向かず近づかれれば攻撃の手は無い。

だからローラは近づいた。そしてその結果がこれだ。

確かにストライク・バーデイは鈍重ISであるがひとたび攻勢に転じればこれほどまでに恐ろしい物は無い。

何せ体中に火砲を搭載しているようなものだし、あの時とつさに潜らなければ荷電粒子砲の直撃でゲームセットだった。

基本的に実弾兵器は当然だがエネルギー系の武器も海等の水が構築する元素同士の結合を弱め威力を低減させる。

ほんと海様々ね・・・。

だがそれで助かっただけ。

状況は何一つ変わらない。

結局のところローラが当てた有効打は恐らく良くて？フォックス？の一撃だけだ。

けど・・・あんなに・・・。

ローラの頭に一つの疑問が生まれる。

確かに重装甲のISである？ストライク・バーデイ？だがやはりど

う考えても先ほどの一撃でびくともしないと云うのはちょっと考えにくかった。

そして同時にとある可能性が浮上する。

まさか……。いやでも……。

ローラはその可能性をかぶりを振って否定した。

そんな事はある得ないし、今の立場ならばそんなことあってもらうては困る。

そんなありもしない可能性よりも今はどう戦うかだ。

ああ……もっつ……

ローラは右腕に装備された一つの武装を見ながらごちった。

近づけばパワーで押し切られ近づかなくても、圧倒的火力が後に待つ……。

だが逆を言えばその圧倒的火力は距離が無ければ使いづらいと言う事でもある。

……。あんまり得意じゃないけれど……。

ガシャンッ！

……。そうも言ってられないわね。

折り畳まれていた刃が、一八〇度回転し刃の回転部がロックユニットで固定される。

「近接でやるかない……。か」

ローラは息を整えて、再び飛ぶ。……。弟を取り戻すために。

？彼女？はブレードを構え迫るローラを笑みと？ファイアーフライ？で迎え撃つ。

「また性懲りもなく正面から……。じゃないね!!」

「彼女？はいきなり機体を反転させ？ファイアーフライ？を前に突き出す。」

「その行動とローラが真後ろから？彼女？に切り込んだのは程同時だった。」

「ガギイイイインツ！！」

「つつうー！！」

「同じ手は何度も何度も通用しないよ！！」

「砲身でそのブレードを弾くともう片方の？ファイアーフライ？が火を噴く。」

「その程度でツー！！」

「ローラは素早いスラスタ操作でそれを回避する。」

「だがその一撃の威力はさまざまに避けたと思っただけでもローラの機体のスカート部を？かすめただけ？でもぎ取っていく。」

「そしてそれは同時に特殊偏光装甲？ステルス・ミラーージュ？の機能が完全には機能していない事を暗に示している。」

「本来この装甲が完璧に機能していれば、いくら威力の高い一撃でも砲撃は確実に前自分が居た場所へと飛ぶはずだ。そこに残像が残るからである。しかし先ほどの攻撃は打つ瞬間？彼女？が砲身を微調整出来た。」

「厳しいわねッ」

「ボクは余裕だけどね」

「もう一度追撃の閃光を放たんとする？ファイアーフライ？。」

「ローラはそれを宙返りしながら蹴り飛ばし回転ざまに片方を切り伏せた。」

「おおっと！？」

「撃たせない！！！！」

「続けてローラは左腕に召喚した、サブマシンガンをそのまま？ファイアーフライ？の砲身の中に突っ込んだ。」

「な！！！！」

「躊躇なく引かれたトリガー。砲身内で暴れた鉛の弾丸は内側から？」

ファイアーフライ？を爆散させる。

夜の海に大きな火球がはじけた。

「うあうツ！！」

「ああああツ！！」

両者の悲鳴がこだまする。

？彼女？は爆散した？ファイアーフライ？に、ローラは爆散に一番近いところにあつた左腕の激痛に。

ローラは爆風に飛ばされなんとかスラスターで体勢を立て直しながら爆発をみる。

負傷した左腕はいまだに爆発の直撃を受けた左腕は上手く動かない。ただでさえボロボロだった装甲は更に吹き飛び、シールドバリアを貫通するほどの爆風はローラの左腕から鮮血をまき散らし、左側は青色の装甲が所々赤くなっていた。

だがこれで手持ちの武装を殺ぐことはできた。？ストライク・バーデイ？の中で最も取り回しのいい武装を潰せた事は大きい。

煙がだんだんと晴れていき次第に敵のISが目視で確認できるようになった。

「め、滅茶苦茶するなあ」

「ツ！？ あの爆発でも・・・耐えるのね・・・ツ」

苦々しくつぶやき、改めてその異常なまでの防御力には驚かされる。確かに無傷では無い。ローラ以上に至近距離というよりも手元で爆発した？ファイアーフライ？はローラ同様に？ストライク・バーデイ？の左側腕部装甲板の一部を吹き飛ばしていた。

しかし、同じ吹き飛ばでもその程度は明らかに軽い。

こっちはファーストアクションそして先ほどの捨て身でほぼ中破と言つてもいいレベル、だが相手は小破・・・いや小破にも入るか分からないほどの軽微な傷。

このままでは弟を助けるどころか落とされて終わり。

自分が勝つてもどうなるかは分からないが負けたらそれこそ弟は・・・アルデイは帰ってこない。

こんな・・・事で・・・ッ

弟までも失うのか・・・？

嫌だ・・・そんな事・・・断じて認められないッ！

認められるものかッ！！

「あああああああああああああつッ！！！！！！」

その咆哮は自分を鼓舞するためかそれとも威圧か。

どちらにせよ、ローラは三度？ランディング・スパイク？を構えて？彼女？へ突っ込んでいく。

肉眼では消えたかのように見えるその突撃。

？彼女？が？ヘヴィハンマー？でローラを狙うが小刻みにスラストアを操作し機体を左右に振り、不完全ながら？ステルスミラージユ？は？ストライク・ミラージユ？の残像を残していく。

「厄介だねつと！」

機動を読み切れずローラの背後へと流れて行く閃光を見て？彼女？は？ヘヴィハンマー？での狙撃を諦め
変わりに？トーンード？で弾膜を張る。

「そんなもので、あたしは止められないわ！！」

今さら被弾の一つや二つ増えたところで、対して変わらない。

ローラは強引に弾膜の間に機体をねじ込んで更に加速する。

「ええい、イグニッションブーストか！！」

「はあああああああつ！！！！」

すれ違う瞬間ローラは刃を？ストライク・バーディ？の？ウェポンスクエア？の継ぎ目にねじ込む。

「何を！」

「装甲の継ぎ目はいくらあなたでも弱いでしょ！？」

「ぬなッ！？」

通常なら狙って出来るものではないが、今回は運動エネルギーがローラに味方した。

そのまま勢いで、ローラは？ヘヴィハンマー？の展開用のヒンジごと分厚い装甲板を？ランディングスパイク？ではぎとりそこへまだ

動かすたびに骨がきしみ満足に物もつかめない左腕で無理やりスナイパーライフルを呼び出し右手で銃身を支えながら装甲が吹き飛びあらわになった？武器庫？へと弾丸という火を撃ちこんだ。直後さつきとは比べ物にならないほどの爆発が辺りを包む。

？ストライク・バーデイ？は堅牢な装甲に守られてはいるがそれが表側からの攻撃に限られる。

アルデイが、セシリアと共に襲撃者を返り討ちにした時も、？ストライク・バーデイ？は内側からの衝撃でCを上回るダメージを負った。外からの衝撃には強いが中からの衝撃には弱い。

それが一見完全な要塞ともいえるこの機体の弱点でもあった。

だがこの爆風に巻かれながらもローラはもう片方の？ウエポンスクエア？にしがみつく。

「これで、決まり」

「このツ！！」

現在敵に残された武装は左側の？ウエポンスクエア？しかない。それを展開しなければ攻撃出来ないがそれをすればしがみついたローラによって破壊されてしまうだろう。

「ああ、もうしぶといなあッ！ いい加減・・・ボクを認めて、そして沈めええッ！！！」

？ウエポンスクエア？を自分の腕の届くところまで動かすとファーストアクション同様にローラの足を掴んで海へと放り投げる。

そして距離が離れたのを確認して残った？へヴィハンマー？を起動して

「ようやく終わる・・・これで君はボクを認めて
って！？」

「そうねこれで・・・終わりね！！！」

ローラの姿が海からかき消え、声が左肩の上から聞こえる。

？フェイクシルエツト？を起動したローラが驚愕の？彼女？を見て笑い、そして大きく右手を振り上げた。

「たああああああありやあッ！！！！」

した瞳がローラを射抜く。

「……あの目は……」

そこでローラは気がついた。

アルデイの目の色が右側だけ違う。

左目はアルデイの蒼い色をした目だったが右目は黄金色の瞳。

アルデイはオッドアイでは無いので、これはおかしい。

……まさか……、まだ？彼女？は全てを……。

だがたとえそうであっても、もうこの決着をつけるには？ああ？するしかない。

ローラは？ランディング・スパイク？を身体の前へ構え動かない左手で申し訳程度に沿えた。

エネルギーは底をつく寸前。向こうはどうか知らないが、こちらは最後の攻撃になるだろう。

ローラは深呼吸をして息を整える。

「……ごめんなさい……アルデイ」

そう呟きローラはスラスターを全開にして？ストライク・バーディ？へと飛んだ。

もう機動もくそも無い特攻。

向こうも落とそうと、砲身の短くなった？ファイアー・フライ？を撃ちまくる。

何発か貰い残りの装甲をはぎ取っていくが構わない。

「あたしの弟は……ッ……ッ……」

ローラは直前で一旦下へターンして直撃を回避するとそこからアルデイの身体の右側に刃を突きたてた。

「返してもらわッ……ッ……ッ……」

「か……は……ッ……ッ……」

シールドエネルギーが零だったが、残っていても紙レベルの脆弱さではこの刃は止められない。

？ランディング・スパイク？は易々とシールドバリアを突破して……。

アルデイの身体を貫いた

ローラの腕に肉を切り裂く鈍い感覚が走りそして滴る赤く生温かい命の源がローラを濡らす。

「つく……あ……ううツ……」

「はあ、っ……はあ……ツ……ボ、ク……は……ツ」

最後の力を振り絞り？彼女？はローラの肩を掴んでローラを睨む。

「あたしの……勝ち……ね……」

「……うあ……つくう……」

気を失うと同時にその手はローラの肩からずれ落ちた。

こつするしかなかった。

やりきれない思いがあふれてくる。

他に選択肢など無かった。

またも自分は、こんな方法でしか弟を救えなかった。

ローラはアルディを救援に来た学園の教師陣に任せてフラフラと宙を漂う。

「本当に……ごめんなさい……」

ローラはポツリとつぶやく。

それはアルディに対してか、それとも自分か。

それすらもよくわからない。

月下の死闘を終え称賛も歓喜もそして素直に喜べもしない勝利を得

たローラは、顔を伏せて旅館へと帰投する。
いつの間にかあふれて頬を伝う涙を隠すようにローラの顔が上を向く事は無かった。

ビーチへと降り立つローラを一夏達専用機持ちのメンバーが出迎える。

「ローラさ ツ!？」

その姿に皆の動きが止まる。

ローラの姿はそれは酷かった。

いつもの青色のスーツはボロボロに敗れ、左腕はひじ関節から先がだらんと力なく垂れ下がっておりその指先からは血が滴っていた。そして右腕にはまだ真新しいアルディの血痕。

綺麗な所などどこも無い。擦り傷や切り傷でいたるところから出血しており、自慢のブロンドの髪も前髪が血で赤く染まり額に貼りついていた。

「・・・ああ・・・一夏君・・・ちょっと無理しちゃったかしら・・・」
ローラは消え入りそうな声で言い笑みを作るが目にもそして表情も勢いが無い。

作り笑いの様なそれは一夏達にローラがかなり無理をして歩いていると言う事を暗に示していた。

身体を文字通り引きずるように旅館へと歩いていくローラ。

その後ろ姿を見ながらセシリアがようやく言葉を発した。

「・・・もう立っているだけでもおつらいでしょうに・・・」

「でも・・・倒れられないんだよ・・・。アルデイのお姉さんだから・・・
ローラさんは・・・」

「それに・・・ローラさんは自らの手で弟を刺さねばならなかった。
傷は・・・外見以上に深いだろうな・・・」

「・・・でしょうね」

実際弟を結果的に守ったのかもしれないが、ラウラの言った通りローラはアルデイを刺した。

ローラが今回やった事が、たとえ弟のためであってもその内容は一八〇度異なる。

弟を助ける行為が弟を傷つけた。

仕方が無かったと正当化するのも難しく、また正当化出来ても納得はできない。

ローラの気持ちはきつと自分達が思う以上につらいものなのだろう。アルデイはついさつき、救急車に乗せられて近くの病院に搬送されていった。

正直その場面をセシリアが目撃しなくて良かったと一夏は思う。

恐らくあんな姿のアルデイを見たらセシリアは卒倒してしまいかねない。

何が起こったのかさえ分からないし、どうしてこうなったかもわからない。

ただ、ローラが命がけでアルデイを刺して？助けた？という事実だけがそこにはあった。

ローラは一夏達とすれ違った後に駆けつけた救急隊によってストレッチャーに載せられていた。

するとそれを見ていた一夏達に向かってローラが手招きをする。

「なんですか？」

一夏達が駆け寄るとローラは、人差し指をクイクイツと動かして指輪を取るようにジェスチャーする。

一夏が指輪をはずすとさつきよりもさらに消え入りそうな声で言った。

「それ、志穂音ちゃんに渡しておいて・・・」

「志穂音にですか？」

「渡せば・・・わかるから・・・ね・・・」

「わかりました」

短い会話を交わして救急車のドアが閉まりサイレンが響く。

一夏は走り去る救急車を見送りながら、二人の無事を静かに祈り続けた。

そんな一夏達を遠巻きに見つめる影があった。

なぜ私はあの時、何も言えなかったのだ。

それはローラが出て行く時に一番近くにおいて何かしら力になれたかもしれない筈の姿だった。

あの時筈は自分の力のなさと場の空気にも少々圧倒されて口を挟む事が出来なかった。

私に力さえあれば・・・。共に行くと言えたかもしれない。

そう力があれば、ローラさんやアルディだってもっと他の方法で守れたかもしれないのに。

筈は、携帯電話をゆっくりと開き、アドレス帳を表示する。

もう・・・たくさんだ・・・ッ。こんな思いは。

そして一人の人物を選んで通話ボタンを押す。
画面に表示されたその名前は

。

篠ノ之束であった

。

第38話 悲しき月下の死闘（後書き）

書いてみたかったのは、ストライク・バーディとミラージユの対決でした。

この話見てるだけじゃなんのこっちゃですが、そこら辺は気長にお待ちくださいねえ。

にしても……。

主人公の一人がひん死の重傷ってどうよ？

聡也達も次回でできますのでまたよろしく願いします。

ではでは39話でお会いしましょう

さよならッ！

第39話 空から舞い降りるニンジン

どんなに声を上げようとも…誰にも気づいて貰えない気持ちがあるかな？

…分からないよね、多分。

そんなの…ボクにしか分からない。

ボクはただ気付いて認めてほしかっただけ。

…昔からずっとそれだけなのにね。

でも今回も…駄目だったみたいけど。

にしても今回はこれまでで一番酷いなあ。

いや、これまでで言うか実力行使したのはこれが初めてなんだけれど。

いつもはアレだからね。叫んでただけだから。

そう、叫んでただけ。

返事が返ってこない事は薄々分かっていたんだけどね。

…彼は…まだ寝てるっばいからネ。

身体は動きそうにないけど…もう少し借りる事にしようかな。

アルディとローラの運ばれた病院は距離的な事もあってか同じ所だ

った。

旅館から十分程走った所にある大きな救急病院だ。

ただアルデイの方は怪我が怪我なだけにすぐに集中治療室^{ICU}へ、ローラも外傷は酷かったが大きな怪我は頭部を二、三針縫ったの後は左腕の骨折だけ。

体中に包帯を巻いてはいるが立って歩けないほど重症では無かった。

そして今日の前にはICUでの治療を終え、個室のベッドに横たわる弟の姿があった。

医師達の懸命の治療によって一命は取り留めたが意識はまだ戻らない。
だがローラは、正直すぐに意識が戻らない事に少しだけホッとしていた。

なんて声をかければいいのかしらね

かける言葉が見つからない。

ひょっとしたらアルデイは自分の身に何が起こったのかさえ知らないかもしれないのだ。

そんな弟に、自分は何と言ってやればいい？

自分で刺し貫いておいて、今さら「大丈夫？」や「よかった…気が付いて」といった様な

耳触りのいい言葉などかけられるはずも無かった。

他にもっといい方法は無かったのかと、こう言う時に限って後からそんな事が頭に浮かぶ自分に心底呆れてしまう。

今回の事は、旅館といえど学園の管轄内で起きたという事と、あくまで？暴走ISの停止のために取られた止むを得ない行為？として法治国家ならば殺人罪で逮捕・起訴されようと文句は言えない事をしたにもかかわらず罰せられる事は無い。

いつそ誰か裁いてくれたらどれだけ楽だろうか。

それが間違いだったと一言、言ってくれさえすればこんなに悩まずに間違いだったのだとその意見に身を委ねられる。

本国にはまだ連絡は取っていないが、ISの稼働状況は逐一監視されているから

いずれ向こうから関係者が事情ぐらいは聴きにやってくるだろう。彼らなら、それは間違いだったと言ってくれるだろうか。

はあ……どうも駄目ね。

いまだ覚めぬ弟の前で、ローラは自問自答を繰り返していた。

「こんなもんかな」

二機の戦闘が終了し、キーを打つ音だけが響くオペレーションルーム。

その静まり返った中志穂音はケロツとした顔で言っとパターンとPCを閉じて立ち上がる。

部屋の戸に手をかけた時、志穂音は千冬に呼び止められた。

「…待て」

「……何ですかね？」

「千葉…お前今まで何をしていたんだ？　そこで」

「言う必要、ありますか？」

千冬の目が鋭くなる。

同じくして真耶の顔からサーツと血の気が引くのが分かった。

なんて命知らずな返答をするんだと、その場にいた誰もが思った事だろう。

「…私は、お前を正直ってあまり信頼はしていない」

「ウチもされようなんて思ってたませんから……では」

志穂音は千冬の鋭い視線にも臆することなく一方的に会話を切り上げて部屋を後にした。

さてこれでは…。

志穂音はその足でそのまま一夏達がまだ居るであろうビーチへと向かう。

いまだ学園関係者が多く事後処理に負われて走りまわっているその間を小柄な志穂音はすいすいと抜けて行く。

元々モニターであらかたの位置は確認していたが、それだけでなくも女性ばかりの中で

男性の一夏はやはり目立っておりすぐに発見できた。

「あら、志穂音さん？」

「ども」

志穂音はセシリアにかかるく会釈すると、目も合わせずいきなり一夏に手を突きだした。

「はい」

「ん？ あ、ひよっとしてコレか？」

一夏は握りしめていた拳をほどいて、ローラの指輪を手渡した。それを受け取ると志穂音は、短く？ありがと？と言つて踵を返す。だがそのあまりにそっけない態度にラウラが噛みついた。

「お前、この状況で他に聞く事は無いのか？」

「…無いね、じゃ」

「ま、待て！」

ラウラが志穂音の肩をガツと掴み語気を荒めた。

「お前は心配では無いのか！？ ローラさんもアルディモツ」

「ッ、ちょ、離してっつてッ 大体そんなの今考えたっつてどうにもならないじゃんか！」

「ちよつと、そんな言い方っつて無いよ！」

「あゝもう、うっさいなあ。今はそれどころじゃないんだっつて！」

「アルディ達の身を案じることに以上に優先せねばならん事とは何なのだ？」

「そっつだよ志穂音、何考えてるの！？ ちょっとセシリアも何か言っつてよ！」

「……………」

「セシリア？」

シャルロットがセシリアを覗き込む。

セシリアは他のメンバーとは違い何かを考えているようで顎に手を添えていた。

その様子に一夏も不思議そうに声をかける。

「どうかしたのか？」

「…ラウラさん、志穂音さんを行かせてあげてくださいな」

「うん…あたしもセシリアと同意見」

「な、なんだと!？」

てつきり同じように怒るものだと思っていたラウラがセシリアだけではなく鈴にまで同じ事を言われて思わず素っ頓狂な声を上げる。

それと同時にラウラの手から力が抜けて志穂音がラウラから逃れた。

鼻を鳴らして、足早に旅館へと引き上げて行く志穂音。

それでもまだ追いつがろうとするラウラを、今度はセシリアがその肩を掴んで制止した。

「良いのか!？ あいつのあんな態度を許してしまって」

「きつと志穂音さんには志穂音さんの考えがあるんですわ」

「どうして分かるのさ?」

「だってあの子、一言もローラさんもアルディの名前も口にしなければ
つたから」

「え?」

「一夏さんに指輪を求めた時、志穂音さん目も合わせませんでした
しね」

「だからそれはあの子が心配してないってことなんじゃ無いの？」
合点のいかないシャルロットが首をかしげラウラが説明に納得できず鼻を鳴らす。

鈴は昔から人の心の動きに敏感である。

それを知っている一夏は口を挟む前に鈴の説明に耳を傾ける事にした。

「きつと、口に出すと……気になっちゃうから……」

「え？」

「志穂音さんだって心配してないはずありませんわよ。」

きつと心配なはずです。変電所の時だって初対面ながら結構アルに懐いていましたし」

「だからこそ、あの子はあの子なりに今やるべきことやろつって自分に言い聞かせて、

押し殺してるんだと思う……セシリアみたいにね」

「わ、私はッ……まあ、そうですね」

セシリアが苦しそうに下を向く。

一夏はセシリアがアルデイの怪我を見なくて良かったと思っているが逆にセシリアはなぜ自分は

そこへ立ち会って声をかけられなかったのかと非常に悔やんでいた。だから志穂音がちょっとだけ羨ましかった。

今この瞬間何かしなければならぬ事がある彼女が。

恐らくローラに何か指示を受けての事だろう。

そしてそれは必ずアルデイへと繋がっている。

不謹慎とは思っ。

だが、アルデイのために何か出来る彼女が本当に羨ましかった。

志穂音の部屋周辺は残念ながら、？暴走事件？によって粉々。
立ち入り禁止の柵が立てられ近づく事も出来ない。

かといって志穂音一人のために新しい部屋が与えられるわけもなく、
志穂音は学園の生徒と同じ部屋に入れられることとなった。
で、肝心のルームメイトなのだが。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……何？」

「気まじいわッ！！」

ロツソ／ロゼオ・鈴の部屋だった。

鈴はともかくとしてロツソはかなり気まずい。

理由はあったとはいえ、志穂音の居た変電所を襲撃したのだ。
これを気まずいと言わなくて何と云うか。

しかも、志穂音は「臨海学校中はここになった」とだけ言った後は
ひたすら部屋の隅でキーボードを叩いている。

特に何を言っわけではないが、逆にその無言が息苦しい。

ロツソはもう一人の自分に小声で話しかけた。

「…なあ、やっぱしあの事怒ってるよな？」

『……十中八九間違いないと思うけど』

「だよな」

『私だったら、寝込みを襲ってる……』

「お前…何気に結構な事言うんだな……」

自分の人格の側面を見た気がして自分自身で自分に若干？引く？という器用な事をしながらロツソは片目でチラチラと志穂音をみる。志穂音はこちらに構わず作業を続けていた。見ると指輪にPC側から伸びた非常に小さいコネクタを取り付けキ―を目にもとまらぬ早さでタイプングしていく。

そして、少し間が開くとゴソゴソとポーチから金太郎飴を取り出してパキンとかじっていた。

つてか、あいつ。この部屋来てからずっとPCとにらめっこだけど何やってんだ？

ロツソはそれを確かめるべく、立ち上がるが一歩が出ない。やっぱ、気まじい。

うゝむ、なんて声をかけたらいいものか。

まあ、普通に気さくな感じでいいのかな。

「よお、何やってんだ？」

……軽すぎるな。

じゃあもつとこう、深刻な感じで。

「……………なあ…何やってるんだ……………？」

これはこれで、ちと重めえ。

つてか、この聞き方はうぜえ。

ならこれを織り交ぜればいいのか!?

よっしゃ、それじゃ気さく重い感じで……………って。

「なあ、気さく重いつてなんだ?」

『……………そんな言葉は多分本国にも無いと思う』

「そして、今の君の行動自体がウチにとったらうぜえよ……………」

「なんだとツ!?!」

サラッと入った志穂音の突っ込みに、いつもの癖でバツと反応してしまつたロツソ。

さぞ、面倒くさそうな顔で言ったのだらうと思つたが意外にも志穂音の顔は笑っていた。

それに少し驚きつつも、ロツソは意を決して志穂音に聞いた。

「なあ、お前……………やっぱ根に持つてるよな?」

「根に? ……………あぁ、変電所の事?」

「あぁ」

「ウチあんまり根に持つタイプじゃないし、別に気にしてないかな?」

「ほんとか!?!」

「うん、全然。ウチよく竹を割つたような性格だつて言われるんだ。まあ自分じゃ、竹を割つたつて言うよりはぶつ壊したつて言う方が好きなんだけどね。」

あ、爆発と言えは。最近海外の地下で爆発事故があつたんだつて。

ほんと治安が悪くて怖いよね?」

「……………ばっちし、根に持つてんじゃねえかツ……………」

そこでようやくロツソは気がついた。志穂音は笑っていたんじゃない。いと。

笑みは笑みでも志穂音の笑みは、ニコニコではなくニヤニヤだった
と言う事に。

なにはともあれ話すきっかけにはなったようでロツソは、志穂音の
後ろへと移動する。

画面には色々とよく分からない、数字の羅列やら設計図のようなも
のが引かれていた。

「なあ、なんだこれ？」

「見て分かんないかな？ 今、情報欠損部分の修復とシステム復旧。
それと、

異なるベースデータを持つ二機のISが互いにどこまで相互依存出
来るのかを考えてたの っと、

また駄目か。む、もう少し依存割合を減らさなきゃだめなのかな
あ……」

「……は？」

「……君、本当に代表候補生？」

「う、うるせえ、こつ言う事はしばらくやってねえんだよッ」

まだ人格が二つに分かれる前は、当然ロツソは自分自身で志穂音の
言ったようなISの理論やシステムなどの事を学んでいし、その成
績も中々に優秀だった。

しかし、実際二重人格の時間の方が長い今のロツソはそういう理論
的な事は全部ロゼオが受け持っていた。

今でこそ？^{ハイモテクス}人格の同時制御？によって自由に人格を切り替えられる
が、それが出来る前はIS担当がロツソ、それ以外がロゼオと分か
れていたためすっかり理論の知識など空の彼方へと素っ飛んでしま

っていた。

『…ちょっと変わって。多分私なら分かるから…』

「む、むむう…」

渋々といった表情だったが確かにロツソではこれが何なのか分からない。

手っ取り早いのはロゼオに変わって貰ってその説明を聞く事だろう。

「しかたねえか…」

ロツソはつぶやくと瞳を閉じる、そして自分の意識がゆっくりと沈んでいくのを感じながら次に目を開けた時には世界が感覚でとらえられるようになっていた。

これはロツソの人格が身体の深層意識下に取りこまれた事を意味し、ロツソとロゼオの？ハーモニクス？が成功した事を表している。

ちなみにだが、ロツソもロゼオも互いに感覚を共有し合っている。

そのためどちらか片方だけという事が基本できない。

見たくない事も聞きたくない話も、聞かなければならないし見なければならぬのだ。

まあそれは置いておいて。

ロゼオがゆっくりと瞳を開けると目の前には志穂音が居た。

ロゼオはもう一度画面に目を凝らして…

これは と驚いた。

「……………こんなこと…出来るの？」

「理論上は可能なはずだよ。失った情報を新しい情報で補ってそれでも修復できない所を別のISで補う。？プログラムリアクト？。確かどこかのサイトでこの論文が発表されてたのを…：ね」

基本ISの修理という物は、それ専用で作られたパーツでしか行う

事が出来ない。

コアがそのパーツを同じものと認識できないからである。だからパッケージ装備やオートクチュールといった物が使用可能なのはそれらの装備をISのコアが同一機体の物であると認識できるからである。

だが今回のそれは、少し異なる。まず大きく違うのは、欠損した部分を補うのが全く異なるISであると言っ点である。

「本来、コアブロックの異なるISはいくらそれが兄弟機として作られたとしても流用は不可能だよね？」

「だけどたった一つだけ、裏技的な方法が存在するんだよ。」

「まあ…裏技だから？ 褒められた方法じゃないってことは確かだけどね。」

志穂音は言うつと、携帯端末を操作して空中へ図解入りの説明をディスプレイする。

「修理つてのは新しく取り換えたパーツごとにコアブロックへ登録していくんだけど、」

「この段階で普通シリアルコードの違うパーツは弾かれちゃうんだ。」

志穂音は、でも…と続けてタッチパネルを操作する。

すると説明のアニメーションが動きそこへ再び説明を行う。

「この修理の時にウチが欠損した情報を補うでしょ？」

「それと同時にまとめて取り換えたパーツ類のデータも詰め込んでしょ？」

「ほらね、コアブロックが弾いちゃうパーツでもこの方法なら弾かれ」

ずに使えちゃうってわけ。おわかり？」

「……………ええと……………つまり、コアブロックにわざと誤認識させるって事……………」

「ま、言っちゃえばね。この方法なら専用の予備パーツが無くても簡単に修理が出来る。色々問題もあるけどね」

つまり、簡単に言えば一つ一つを単体で登録するのではなく、志穂音があらかじめ欠損した情報の中に補うに必要なパーツの情報を入れ込んで登録する事で、
？初めからその部位は壊れていなかった？とコア本体を騙すのである。

確かにこの方法ならば、志穂音の言うとおり専用のスペアパーツが無くても修理は可能である。

だが？問題もある？と志穂音が言った所をロゼオは聞き逃さない。

「…問題って？」

「まあ、色々あるけどやっぱり効率的にエネルギーを運用出来ない所だね、

そもそもコアに嘘の情報で誤認識させるわけだから…ね…。

そりゃしわ寄せがどこかにきちやうのは仕方ないよ。でも出来る事はしなくちゃね」

志穂音は苦笑すると、またモニターに目を戻して作業に戻っていく。

『…なあ、分かったのか？』

「…まあ…ね…」

ロゼオはもう一人の自分の問いに生返事で返しながら志穂音を見やる。

ロゼオは専門家ではないが言ったようにそれなりに理論派の人間だ。だからさっきの志穂音の話にもついていけたし理解も出来た。

「彼女……………紛れもなく天才だね……………」

「まあ、頭悪くねえよな……………」

？プログラムリアクト？。自分は詳しくは知り得ないが彼女の言うとおりそんな論文があるのだろう。

だが、いくら元のISデータがあるとは言ってもそれをたった一人で、このノートPCを使って構築し直すなどとんでもないことだ。いや、あつてはならない。

鼻歌交じりにキーを叩き、金太郎飴をかじる。

ネットサーフィンでもしているのかと聞きたくなるような

気軽さで彼女はISの欠損部分を補っている。

ローラさんは……………ひよつとして……………。

ロゼオはローラが千葉 志穂音という？金太郎飴の天才？をなぜここに連れて来たのかその理由が分かった気がした。

ただ彼女を連れて来たのはあの市街地戦でのあらしを千冬や学園関係者に話すためだけではない。

ロゼオは、ほぼ確信に近い予想を持ちながらしばらくジッと志穂音を見続けていた。

ガチャッ。

「ただいま……ってなんであんたが!？」

鈴の志穂音を見た時のリアクションもロゼオの予想通りだった。

翌日。

いくらあんな暴走事故があつたとはいえ事態が終息を迎えた今、世界各国のIS技術の一大実験施設とも呼べるIS学園のカリキュラムを中止するわけにはいかない。

もうすでに各国から届いた専用機のテスト装備が揚陸艇で送られてきているのだ。

「事故の影響で何もできませんでした」では、各国が納得するはずもない。

IS試験用のビーチに整列した生徒たちは織斑先生の話に耳を傾ける。

「よし、集まつたな。いいかそれではこれより各班振り分けられた装備の試験を

始めてもらうがなにぶん量がある、各人迅速に行うように。

専用機持ちはこの場に残れ。では速やかに行動しろ」

織斑先生がパンツと手を叩くとそれぞれが割り当てられたISの場

所へ移動して早速テストが始まった。

そして、その場に残ったのは専用機持ちの面々。

「にしても…今年が多いですね…」

「ざっと数えて…七人か…これにあいつを含めると八人…確かに少々多いな」

織斑先生は腕を組みながら、麻耶に返事を返すとそれぞれにチェックボードを配っていく。

「うげッ、こんなにあんの…」

「ドイツもやはりまだまだ第三世代兵器の開発に真新しさは無し…か」

鈴やラウラなど受け取った面々が口々に感想を述べ表情を変える。そんな中一人、ボーっとしていて織斑先生に頭をはたかれた人物がいた。

「全く…しっかりしろ。そらこれがお前のチェックボードだ、オルコット」

「あ、はい…すみません…」

セシリアは織斑先生からチェックボードを受け取りうつむきながら謝罪を口にする。

当然だがセシリアは、別に織斑先生に頭を叩かれたから落ち込んでいるわけではない。

そしてそれは当然聡也にも分かっていた。

そんなセシリアを見つめる聡也の小脇をロツソが突つつく。

「なあ、やっぱ…気になってるよな？」

「…でしょうね…まあ…でも今出来る事はほとんどありませんし…」
「でもま、あいつにや良かったかもな…今日、テストがあつてよ…」
「え？」
「少なからず、テスト中はそれに集中できんだろ…いくらあいつでも、代表候補生なんだからよ」
ロツソは若干強めに代表候補生を強調して言うと自分のチェックボードとにらめっこしながら
揚陸艇から下ろされた自国のテスト装備の前に歩いていつてしまった。

「よし、各自チェックボードは受け取ったな？ では専用機持ちも速やかにデータ取りに入れ！」
と、織斑先生の声が響くがそれに聡也が待ったをかけた。

「ちよつと待つてください、僕チェックボードいただいてないんですけど？」

「あれ？ ですけど配るチェックボードはもう……」

「いや…山田君それでいい」

織斑先生はあたかもその質問を予想していたかのように焦らず答えると、親指でとある方向を指さした。

「お前は、あつちだ」

「あつち…？」

織斑先生が指さす方向を視線で追うとそこには、ある人物の姿があった。

そしてそれは聡也が最もよく知る人物だった。

「は、博士!？」

「私もいますよ、聡也君」

「リリースさんまで……」

更に言うとその後ろでは多くの研究者や技術者がテキパキと簡易研究設備の設営に追われていた。

聡也は織斑先生に向き直るとキョトンとした顔で尋ねる。

「あの……これは？」

「そう言う事だ。一条博士からの申し出でな。」

お前の機体の事もあるから一度しっかりと整備も兼ねて調べたいと思うだ」

……ああ、なるほど。

確かにナイトシユライクの件もある。

アレが一体何なのか僕もどうなっているのか知りたいですしね……

……って……

「織斑先生。どうして博士と？」

「ふん、いくらお前が他クラスとはいえ生徒の保護者ぐらい知っていてもおかしくないだろう？」

「……はあ……そんなもんですか？」

「ああ、そんなものだ。ではしっかりな」

片手を軽く上げてそう言い残して織斑先生は去っていく。それを見届け、博士が口を開いた。

「さあて……それじゃあ始めましょうか。あらかた艦から持ってきてるしね」

「それじゃ、聡也君早速ですがNを展開しちゃってくださいね」

「あ、そう言えばキーが……」

「そう言えば、一本残して全部奪われたんだっけね……。はあ……まあこうなるだろうとは思ってたけど、ほらこれ、使いなさい」

そう言っつて、博士は僕にスペアで作っておいたと思われる？ホワイトアウル？のキーを手渡す。

それを受け取った瞬間に僕は博士が何をしたいのかがすぐに分かった。

まあ、それは僕自身も望んでいたことなのだが。

「早速ナイトシュライク…ですか…」

「ええ、はつきりってかなりのイレギュラーよ、あの機体…。何よりも先にこの目で見ておきたいわ？」

「……………分かりました、では…」

「リリス、モニターから目を離さないですよ？」

博士がすぐ横でPCをセッティングしていたリリスさんに声をかけ、彼女もそれに無言でうなずく。

リリスさんはこう……………一見するとノリの軽いアメリカ人なのだが、こう見えて技術者としては一流なのだから人間不思議なものだと思う。

……………それはいいか。

僕はシリンダーカードにキーを差し込みあの時と同じように一機に回す。

そして

「……………」
「…何も……………起きませんね？」
「どういう事？」
それは僕が一番聞きたいです…。
その後、仕方がいから強制的に？ブラックアウト？を機動させて残りプログラムを行った。
博士やリリスさんそして僕もだけど…その場の空気つたらもう…
ね。

「よつと。ここまでは順調か…ええと次は…」
『……………大丈夫？』
「まあな。身体はお前よりは頑丈さ」

ロツソはロゼオに見えるはずもないのだが自分の二の腕をポンポンと叩く。

『いや……………そつちじゃなくて……………文字読めるのになつて……………』
「あたしは母国語まで読めないほどお前に馬鹿だって思われてたんだな……………」
『言語学って知ってるのになつて…』
「母国語以前に文字の心配してやがった!！」

毎度のことなのだが、ロツソとロゼオ間では話が通じていても、は

たから見ればただの痛い人。

周りからはその声も存在も分からないし加えてここは、臨海学校で夏の日差しが照りつけている。

そりゃ、ちよつと暑さでおかしくなって、某友達の少ないヒロインが作り上げたエア友達か何かと盛り上がっているのかと真面目に心配する人もいるわけで……。

「あの… ロツソ… 大丈夫？」

「あん？」

「いや… 独り言にしちゃ大きいなあなんて…」

「ッ！？」

そこまで言われてロツソはバツと口を押さえる。

冷静になって見てみればロツソを注視している人物は多い。

あ、ああ……… やつべえ…

ちなみになぜこの事を知らない生徒がいるのか。

ハイモニクス

それは簡単にイタリア政府の申し出があったからだ。

というのも、ロツソとロゼオではISの使い方に大きな差がある。

当然だがISは一人で扱う物。

ISが蓄積できるパーソナルデータは一人分しかない。

だがこれが驚く事に？ ペルフェット・エスターテ？ にはロツソとロゼオ、二人分のパーソナルデータが

経験として蓄積されていた。

そしてそれに伴ってフラグメントマップもイタリア政府が想定していた物とは大きく異なるものが構築されている事も分かっている。

そうとなればこのレアケースをみすみすイタリア政府が逃すわけも

なく、この件を口外せぬようにと学園側に通達があった。

だから既にその存在を知っている一夏を初めとする専用機持ち以外にはロゼオ・ミオネッティという人物は存在しない事になっているのだ。

だから、周りから見れば？無口だったロツソが聡也のおかげで（これは色々憶測の末に後付けされた理由。まああまり間違っではないが）表情豊かで明るくなった？という認識なのだ。

『……………ほら……………大声出すから……………』

「誰のせいだ……………誰のツ!？」

ロゼオのあまりに白々しい台詞に小声でだが語尾を強める。

多分目の前にロゼオが居たら物陰に連れて行って半殺しだろうが今はそれどころじゃない。

「そういえば、時々元の無口なロツソ見かけるよね？」

「あ、そう言えばそうだね。まるで？別人格？みたいに……………」

ギクツ!

「そうそう、それあたしも思ったよ」

「こつ……………なんて言うの？雰囲気とかも全く違う？もんね」

ギクギクツ!!

「ねえ、そこらへんロツソはどうなの？」

何がどうなのなのか……………まあ聞き返さなくてもだけど、そこで振るのかあたしに……………ツ!？」

「い、いや……どうって言われてもよ………な？」

『………ほらほら………頑張って………』

「お前マジで覚えてろ………あぁ、いやいやいや何でもねえ何でもッ！？」

くっそ………なんで臨海学校にまで来てこんな変な修羅場を体験しなくちやいけんえんだよッ！（　ほぼ自分のせいです

冷や汗ダラダラのロツソにまわりも次第に不信感を抱きはじめる。

「………ねえ、ひよっとしてさ………」

「………うん………」

不味いこのままじゃあ………ッ。

自分のへマで仮にこの事がバレれば、本国からかん口令が敷かれて
いるだけに

下手をすれば今の候補生の地位もあぶない。

それだけは何としても回避しなければならぬ。

実力で這い上がりのし上がり認めさせて、そうして掴んだ候補生の
座を

こんな間抜けなミスで手放すわけにはいかない。

とはいえどうすりゃいいんだよ………！！

ひきつった笑いと困り果て泣き笑いのような顔で後ずさるロツソ。
向けられた不信感が、今にもロツソに襲いかかるうとしたまさにそ
の時。

「そこ、何をやっている!!」

鋭い声がビーチに響き、思わずその場にいた生徒が身をすくませ、ロツソは表情が固まったままその声のした方向を見た。

「お、織斑先生ッ!？」

「他のヤツと無駄口を叩くとは随分と余裕だな…。どれ私が直々にマンツーマンで付き合ってやるっ」

「あ、い…いえ…それは…」

言われた班の全員の顔が先ほどのロツソのようにひきつっていく。

織斑先生の声は、穏やかだったが目は完全に笑っちゃいなかった。

「そう遠慮する事は無いぞ。私が手取り足とり……………翌日身体が動かなくなるまでみっちり……………な?」

最後の言葉に合わせて目がギランと光る。

「それが嫌なら、とつとと各自持ち場に戻って作業を続けるッ!!」

「……………は、はいいい……………」

ああ、日本語の勉強で脱兎のごとく逃げるって言うのがあったけどきつとこんな感じなんだな。

ロツソは場違いながらそう思った。

だがホツとする間もなくロツソはパツカーンと頭を叩かれた。

「ッ……………!!」

「全く、お前ももう少し言動には気を使え。騒ぎを起こすのは織斑だけで充分だ、馬鹿ものが!」

「す、すみません…っで一夏? あいつなんかしたんです?」

「テストに付き合っとうと女子が殺到してな。全く存在自体が面倒なや

くなっていく。

『……………ねえ……………』

「なんだよ……………」

『……………あれ、こっちに向かってるね……………』

「ああ、そうだ

って!？」

織斑先生はゆっくりそしてロツソは飛びのくようにその場を離れる。そして次の瞬間にはロツソ達が居たところに大きなニンジンが突き刺さっていた。

そしてゆっくりとそのニンジンが割れて……………。

「やつほく、驚いた？ 驚いたかな？ 驚いたよね!？」

変な三段活用の……………ウサミミ？

ロツソは思わずラウラを見る。

確かあいつはドイツで？ シュヴァルツェ・ハーゼ？ っていう、ええとなんだっけか。

確か……………そう!？ クロウサ部隊？ とかに所属してるんだろ。だったらウサギとウサミミで……………って。

ラウラはロツソの視線を感じるや、猛烈な勢いで首を振る。まるで一緒にしてくれるなどいわんばかりに。

「あれ、違うのか？」

『……………まあドイツ人には見えないね……………』

「じゃあ誰なんだよ……」

『織斑先生知ってそうだね、さつき頭抱えてたし……』

ああ、そう言えばそうだな。なんだか知ってるそぶりだったな。

つてなわけで。

「織斑先生……この人は？」

話を振られて、とんでもなく嫌そうな顔を浮かべ大きくため息を吐く。

そして嫌々ながら、謎のウサミミ女の名前をつぶやいた。

「コイツは……篠ノ之 箒の姉で……篠ノ之 束だ……」

その後、このビーチが驚きの声で包まれたのは言つまでも無いことだが、

ロツソはそんな中一人険しい顔で束を見つめる箒の姿を見逃しては
いなかった。

第39話 空から舞い降りるニンジン (後書き)

今回から少し書き方を変えてみました。

見にくかった・・・を…にして少し間を開けてみました。
ご指摘ありがとうございます。

さて、ようやく束さんがご登場ですがこの先も色々もめるでしょうw
ただでは終わらずグダグダ行くのがこの小説のいいところ(？)で
すからね(爆)

ではまた40話でお会いしましょう

第40話 紅椿 その力強大につき

啞然とする周囲の目などお構いなしにニンジンから生まれた稀代の天才はビーチを所せましと駆けまわった後、千冬を見つけて再び走りだす。

悪路を走るラリーカーは砂を巻き上げ真後ろにすさまじい砂煙を上げるが、まさに今の束がその状態であった。

「おお、そんなところにいたのかい！ 今行くよ〜ッ 待ってて待ってて！！ ハグしようっていうかする、うん決定事項だからね、ちーちゃん！」

そんなところというが、勝手に束がニンジンから出てきて明後日の方向へ走っていただけで千冬はニンジンのすぐ真横にいた。

実際ニンジンと当方との距離は一メートルも無い。

千冬に向かって猛進する束。

その進路にいた生徒達が、恐れ次々に道を開けていくなか千冬は動じることなく腕を組んでため息を吐く。

「うんうん、いいねいいね、ちーちゃんいいね！ さあ、愛を確かッベツ！！??？」

そして、タイミングを合わせて一気に飛び束の顔面にローリングソバットを決めた。

「おお、ノー インパクトや!？」

「いや、あんたそれ超次元サッカー……」

千冬は盛大に吹き飛んで数回ゴロンゴロンと砂浜を転がる束を見ながら、どこからかそんな声を聞いた。

「あ、相変わらず、愛情表現が激しいね、ちーちゃん……」

「っち、浅かったか……」

「殺す気だったんですか!？」

真耶の突っ込みに千冬は少し、それでも良かったと思ってしまった。

ひとまず、千冬の一撃で落ち着いたのかパンパンと砂を払いながら束がゆっくりとこちらへやってくる。

そして千冬もようやく会話ができる雰囲気になった事を確信し口を開こうとしたのだが……。

「で、お前何をしにき……ええい、お前たちは自分の今するべきことに集中しろ! 時間までに出来なければ班全員終わるまで旅館には入れんからな!」

「あ、いや……でも……その人……」

「この馬鹿は放っておいても害はない。だがまあ……おい、束自己紹介ぐらいしておけ」

千冬は束の頭のウサミミをグツと掴んで持ち上げる。その姿はまさに捉えられた野兎そのものだった。

「え………なんで?」

「そもそもこの空気にしたのはお前だろう?」

「めんどくさいなあ……それよりも、私はちーちゃんの胸の方に興味……」

「やかましい。それに胸ならお前にも立派なのが付いているぞ」

「いや、でもでも自分のじゃあねえ…あ、私天才、束さん…いつとも見てるから見飽きちゃって…」

「だから、自己か…ってサラッと済ますなッ！」

そのままポイツと再び砂浜に放り投げられる束。

確かに千冬の言うとおりあまりにサラッと言ったもんだから自己紹介したのかしてないのか千冬が怒鳴るまで分からなかった生徒もいたぐらいだった。

だが何にしても、一番最初千冬が言ったのとさつき本人の口から？束？という名前を聞いた事でようやく目の前のこの、ふざけたウサギ女が稀代の天才でありISの生みの親？篠ノ之 束？であると言ふ事は理解できたようだった。

「……とにかくそういうことだ。こいつには構わずお前たちはいまやるべき事をしろ。いいな」

「……は、は……い……」

目の前に世界中が血眼になって探している重要人物がいると言つのにそれに構わずとは中々無理な話ではあるのだが、相手はあの千冬である。

重要人物見たさに命を投げ出す勇気をもった生徒などいるはずもなく、渋々といった様子ではあったが各自持ち場に戻ってデータ採取を再開した。

それを見届けてから千冬は改めて、束に尋ねる。

「それで、お前……一体何をしに来たんだ？」

「ああ、そう言えばちーちゃんは知らないんだね。えへへえへつとね今日はねある物を届けに来たんだよ」

「ある物…だと？」

「そ、我が妹…：… 篝ちゃんにね〜」

束が向いた方向に釣られて千冬もその方向を向く。

そこには、千冬と視線があつた時一瞬身体をこわばらせた篝の姿があつた。

「アレが、篠ノ之 束…：… ね。ま、天才なんて何考えてるか分からないって言うけどほんとだつたみたい」

「そうですね〜。まあ博士は色々考えてる事筒抜けですからそれもそれでどうかと思ういますけど
骨が陥没するほどの衝撃ッ!？」
って私の頭がい頭がい

「黙って記録続けなさい…：？」

「…：… はい、すみません…：…」

だからって端末の角は酷いでしょうに…。

涙目で記録を続けるリリスさんに少し同情しながら、僕は予定のプログラムの一つを終えてビーチへと降り立つ。

「どうでしたか、あんな感じで良かったですか？」

「ええ、大丈夫よ。やっぱり機動力も？ブラックアウル？そのもの…：…。何か変化があると思ってやったマニユールバテストも意味無かつたわね…：…」

はあっと大きくため息を吐いてパイプ椅子にドサツと座る。

僕は技術者の人にドリンクを貰い口に含んで辺りを見渡した。
東博士の登場で一時は騒然としたビーチも、織斑先生と東博士が何やら噂を交えて話をしはじめてからは向こうもこちらを気にしないし、こちらもあり向こうを気にしないようにしていたためか思いのほかその後混乱なくテストは続いていた。

僕はドリンクを飲みながら博士達が設営した簡易テント群へ向かう。夏らしい蒸し暑さだがそれでも簡易テントがあるのはありがたかった。

かなり大きめのテントで、他のクラスメイト達も余剰スペースを休憩所がわりに使用してる。

そしてそこには、ひと段落ついてうちわを仰ぐロツソの姿があった。

「ロツソ、お疲れさまです」

「おお、聡也か」

軽く挨拶を交わして近くにあったパイプ椅子に座る。

そう言えばロツソがISスーツ姿でいるのは初めてみた気がする。いつもIS展開と同時にスーツも展開していたからかな……。

実際ISスーツって形状だけ見れば一昔前のスクール水着だ。

まあその……身体に……まあ当然密着しているわけで……。

ロツソは他の女子達に比べればスレンダーだが、それでも女子として充分すぎるほどの体系をしている。

そしてそんな体系に密着するISスーツは正直言って裸よりも目のやり場に困ることだってあるわけだ。

「あゝ、聡也君がエロい目でロツソを見てる」

「おお、エロいエロい」

「な、ち違いますよ!? 僕は決してそんな目で…ッ」

「……………聡也……………あなたそれ墓穴掘ってるわよ」

「博士まで!?!」

いやいや…そりゃ…僕だつて男ですし? そいつ気が無いわけじゃ無いわけじゃなくて…だからあ…もう!

「へえ…なるほどねえ」

「え?」

顔を真っ赤にしてかぶりを振る僕が次に見たのは、何やら嫌な悪戯っぽい笑みをたたえたロツソの顔だった。

そしてロツソはおもむろに立ち上がるとゆっくり僕の背中に手をまわして胸をわざとらしく押し付ける。

「まゝあ…仕方がねえよなあ。ん?」

「ちよ、ろ、ロツソ!?!」

「なんだよ? 別にあたしの事、そう言う目で見ちゃいないんだろっ?」

エンジ色のISスーツに包まれた胸が僕の背中に押し付けられてゆつくりとその形を変えていく。

さっきも言ったがロツソはスレンダーな体系ではあるものの、それなりに出るところは出ているし女性としての魅力も充分だ。

そんな身体を押し付けられて平常心を保てるほど僕は人間出来ちゃいないし経験も無い。

僕は真っ赤になって、下を向くしかなかった。

そんな僕に更にロツソは身体をくっつけてくる。

胸はもちろんの事腰回りそして足も、ゆっくりとまるで押し付ける
感触自体をロツソも確かめる様に。

わわわわわッ!? い、いや、そんなところ!? 手なんか回しち
やだめですって!??

「急に黙っちまったなあ〜? ああん? ほれほれ〜どうだよあた
しのカ・ラ・ダ?」

「あ、い…………や…………そのお…………」
「なんだよお…………はつきり言えってえ…………?」

ロツソはわざとらしく色っぽい声色でささやくように言う。
正直に言うが、こんな場所でアレだが色々ヤバイ。

主に理性的な意味で。

多分これが密室なら…………いや、やめておこつ……。うん。
それを考えるとますますヤバくなりそうだ。

だけど、どっちにしたって僕もそろそろ限界だった。
さつきから頭はくらくらするし、目の前がなんかぼやけてきました
…。

しかし、僕がそんな状態になっていることなどロツソは知る由もな
く身体をくねらせながら更に更に更に密着していく。

「なあ、どうなんだよ?」

「あの…………だから…………ッ」

「おいってえ〜」

「いや…………ええつとお…………!??」

「ほらほら〜?」

「うっ…………」

「なんとか言えつてえ〜？……って……あれ？」

「……………」

「おい、聡也？」

「きゅ〜……………」

「ロツソやり過ぎ……………」

僕が最後に聞こえたのはその言葉だった。

「あ〜あ……………」

『……………それなんていう冗談……………？』

ロツソはロゼオの鋭い突っ込みに思わず顔に手をやる。

聡也は、まるで漫画のオチみたく目をぐるぐると、まさに？なるご模様？にして伸びてしまった。

とりあえずロツソは、聡也をゆっくりと下に横たわらせる。

そしてとりあえず、聡也をうちわであおぎ始めた。

「お〜い……………大丈夫かあ〜」

『いや、……………だからそれなんていう冗談？……………』

ロツソは内から来る声に耳を閉ざし、ひたすらあおぎ続ける。

内心ちよつとやり過ぎたと思いつつ後悔したが同時に少しロツソは嬉しくもあった。

へへッ、なんだかんだ言つて意識はしてくれてるみてえだな。

正直少し心配だったのだ。

聡也は別段それほど鈍感では無い。
だがそれほど恋愛ごとに気があるわけでもない。
あの市街地戦の時、聡也は自分に叫んでくれた。

まあ、何とかというか最後少し変な事になっていたと思うが大切だと言
つてくれた。

だが逆を言えばそう言う時にしか、聡也は自分の思いをあまり口に
出さない。

別にロツソは顔を合わすたびに好きだと言ってほしいわけではない
がそれでも恋する乙女にとっては、何かしらのアクションが無いと、
無性に心配になったりするものだ。

なので今回のこの反応は、ロツソにとっては聡也の気持ちを確認かめ
られたという意味でロツソにとっては大きな収穫でもあった。

「……まあ、やり方はともかくね……」

「考えに突っ込むのはやめてくれねえか」

ロゼオの冷たい突っ込みを軽く流しつつ、ロツソは聡也を見てへへ
ツとまた笑うのだった。

そうして少しの間青いしていると突然

ドゴオオオオン！！！！

ビーチの砂がもの凄い音と共に大量に宙へ舞い上がった。

「な、なんだ！？」

「何の音！？」

周囲の生徒たちも音のした方を振り返る。

丁度その音のした場所はさっきまで束や千冬、箒達がいた場所。

「ッ……一体何が……」

『……あ、あれ……』

「あん？」

ロゼオが何を見つけたのか、ロツソにはすぐに分かった。分かったのだが……。

「なんだありや……」

『……とりあえず行ってみよう……』

「あ、ああ。あの、聡也お願いします」

ロツソは聡也をリリスに預けて、？爆心地？へと足を進めた。

ロツソは生徒たちの間をすり抜けて最前列へ。

「こいつかあ……」

ロツソは改めて？ソレ？をまじまじと見やった。

黄色い筒状のボディと先端には高速回転するドリルに下にはこじんまりとしたキヤタピラが付いていた。

大きさは長さ約四メートル高さは約三・五メートルと小型トラック程の大きさだ。

そしてそのマシンの後ろには、このマシンが掘ったのであろうボディと同じぐらいの大きさの穴が開いていた。

「これ、どこに繋がってんだろうな」

「………お願いだから入らないでね……」

「入るかッ、冗談だよ冗談！」

ロゼオとの一人漫才を終えると今度は耳に織斑先生の声が飛び込んできた。

「………馬鹿ものが。ビーチにこんな大穴を開けてしまって……」

「えへへ〜見たかつ！　これが束さん特製地中輸送艦その名も？ドリモグジェット?!」

……あれ、どっかで聞いたことある名前。

某有名な人形特撮番組に似たようなマシンが登場したいたような気がする。

まあそれはいいや。

とりあえずロツソは？ドリモグジェット？の近くで同じようにまじまじとそれを見詰めていた専用機持ちメンバーの方へ近づき声をかけた。

「なあ、何の騒ぎなんだ？」

「ロツソか、まあ見ての通りなのだが…」

「そうだね、僕も何が起きたのかさっぱり」

流石のラウラやシャルロットもいまいち状況を飲み込めていないようで、そう答えるのが精いっぱいだった。

確かにこの状況ではそれも仕方ないのだろうか…。

「あたし達が振り返った時にはもうこんな状態だったしね…」

「あーまあ、束さんのやる事を理解しようとする方が無駄だと思うぞ…。俺でも、多分筭でさえ予測できねえから」

「なんだよそれ、身内でも無理って…」

「そう言うもんなんだ…」

「夏のどうしようもないといったような表情にロツソもそこで何が起こったかという質問を切り上げ、再び耳を当事者たちへ傾けた。

「で、その？ドリモグ？とやらでお前は何がしたかったんだ？」

「地底探検」

ゴスッ！！

束の頭に側が金属の端末が文字通りめり込む。
やっているのは織斑先生なのだから手加減など一切なかった。

「おおふ、ちーちゃんいつもながら鋭いツツコミだよ！！」

ゴスゴスゴスゴスゴスゴスバギョッ！！！！

まったくこたえも懲りもしていない束博士に織斑先生は無表情で端末の角で叩き続ける。

そして最終的に端末の角が砕けてしまった。

「おい、束。お前の頭が頑丈すぎて壊れたぞ」

なんて言いぐさだー！！！！

恐らくその場にいた生徒全員がロツソと同じ事を思ったに違いないだろう。

しかし稀代の天才束博士は違う。

「さっすが私！ 見事にちーちゃんの攻撃を防ぎきっちゃった」

バツガアアンツ！！！！

「うぎよッ！？」

織斑先生も流石に限界が来たようで、束博士の頭に思いっきり端末を叩きつける。

もう角が砕けたうんぬんの話では無い。
完全に端末が砕け散ってしまった。

すげ……あれ鉄じゃなかったか？

『……天才は一味違うんだね……』
それもちよつと何か違う気がするけど。

「はあ…全く。それでコイツは一体何なんだッ？」

織斑先生は東博士の胸倉をつかんで語尾を強めて束に問う。

束博士もその出席簿アタックならぬ端末インパクトは答えたらしく目をグルグルと回しフラフラの足取りでなんとか答える。

「はれえ〜……これには篝ちゃんのお〜……ISを乗っけてきたんだよオ〜……」

「何？」

篝のIS？

ロツソは篝を見やる。

丁度その目を無型のが織斑先生とタイミング的に重なり、篝は目じりを一瞬鋭く釣り上げる。

「どついつことだ？」

「この前え〜…篝ちゃんから電話があつてえ〜ねえ〜…」

「……そう言うことか」

何がそう言う事何かはロツソには分からなかったが、少なくとも持ってきたのが束であると言う事を考えると専用機である事は間違いない。

ロツソはその事に、腹がたつた。

だがまあ、今こんなところで怒ったとしても何にもならない。

ひとまずロツソはその怒りを収めつつ更に、耳を傾ける。

「それで、お前が持った来たと言う事だな？」

「そうそう…。？ドリモグジェット？はそのための無人輸送機なんだよぉ〜」

織斑先生はため息を吐くと、パツと束博士から手を離す。

未だダメージの回復しない束博士がドシヤツと砂浜に崩れ落ちる。それと同時に懐から転げ落ちた小さなリモコンを束博士が手をついた拍子に押ししてしまう。

するとさっきまで停止していた？ドリモグジェット？のハッチがゆつくりと開き始める。

そして、皆が注目する中その？束？が持ってきたという筈の専用ISがその姿を現した。

フィッティングもまだのその機体は折り畳まれた状態で？ドリモグジェット？からせり上がる。

ロツソの？ペルフエッド・エスターテ？よりも更に鮮やかな赤色を基調としたそのIS。

恐らく束博士はこれを大々的に皆に見せびらかすつもりだったのだろうか、ご丁寧には足元にはネームプレートまでおごられている。

？紅椿？それがこのISの名前か…。

『まんまのネーミングだね…』

「まあ良いんじゃないか？ ストレートでシンプルだし」

そんなたわいもない会話をしていると、いつの間にか復活した束が目にもとまらぬ早業で筈を担ぐと、装甲が割れて操縦者を受け入れる体勢の整った？紅椿？にまるでゲームにカセットをセットするかのように一気に突っ込んだ。

「ちよ、ちよつと！？」

「はいはい〜はい。筈ちゃんはお姉ちゃんに任せてねん。それじ

やフィッツティングを始めます」

箒の狼狽など気にもとめず、一方的に作業を開始した東博士。流れるような手つきでコンソールを叩き、次々に？紅椿？のフィッツティング作業が終了していく。

初めはあまりのインパクトに、驚き唾然としていた群衆もひとたび慣れてしまつと率直に目の前の事態を受け入れそして考えられるようになる。

そしてそれはロツソも同じ事だった。

さつき押し殺したはずの苛立ちが再びゆっくりと、首をもたげはじめたのだ。

「……なあ……専用機つてのは…あんなもんなのか……？」

『……ロツソ……』

「アレ見てお前許せるか？」

『それは』

ロツソが苛立つ理由は、別に箒が東にISを作ってもらった事では無い。

別にそれは良い。

箒にとつては、身内のコネを最大限使用したに過ぎず別に不公平だとか騒ぐつもりはない。

問題はアレが？専用機？であると言う事だ。

代表候補生にとって専用機とは特別な意味合いがある。

ISは絶対数の決まっている物だから、代表候補生全員に専用機を与えることは不可能だ。

ロツソはかなりの実力者でイタリアの代表候補生の中でも群を抜いている。

しかしそんな彼女でも一度は、二重人格の所為で？精神異常者？のレッテルを貼られ道を閉ざされた。

その後トーナメントで優勝してその座に返り咲いたと言っても、道を閉ざされた日からトーナメントまでの期間があまりに短かったためそれこそ血反吐を吐くほど努力に努力を重ねた結果でもあった。

だからこそ、腹が立つ。

そんなに簡単に？誰にも認められずに専用機に袖を通す事？が見ると筈の機体は既にフィッティングを終えて、試運転に入っていた。

束の放ったミサイル群を筈が全て叩き落とし大きな爆煙を空に咲かせる。

これは我がままなのかもしれない。

これは勝手な自分よがりの考えの押しつけなのかもしれない。でも…それでも。

このままあの力を受け取ってしまったら、きっと筈はデカイミスを犯す。

それだけはなぜか分かっていた。

「……………わり、ロゼオ……………後で一緒に怒られてくれ」

『……………はぁ……………また怒られるんだね……………』

その声を聞かずしてロツソは光に包まれていた。

束の放ったミサイルを？空裂？によって全て叩き落とした筈は高まる興奮を抑えきれずにいた。

「これが……専用機……私の力だ……ッ！」

全てが思いのまま、？打鉄？のような量産機にはつきものの感覚のズレも無い。

まるで自分の身体の一部のように動く。

「凄……い……やれる……やれるぞ！……この？紅椿？ならッ！」

そう言った直後だった。

筈を背後から強烈な衝撃が襲う。

「ぐあっ！？……な、何だ！？……つくまだミサイルを！？」

筈は慌てて、機体を立て直し束にオープンチャネルで通信を行う。

「撃つなら、撃つとお願いしてください……！」

『ほえ？……筈ちゃん私撃ってないよ？』

「またそう言う冗談を……！」

きつと束の事だあいつでどこか自分の見えない所から撃つたにきまっている。

しかしその考えは千冬の一言ですぐに覆された。

『いや、今回は束の言っている事は正しい。束は何もしていない』

『本当だぞ、筈。束さんは指一本動かしてなかった』

『わ～お、いっくんお姉さんは嬉しいよ！』

「わわ、だからと言って抱きつかなくてもいいでしょう……！」

いきなり一夏に抱きついた束に筈は顔を真っ赤にして叫ぶ。

ええい、全くあの人は……！！

。 箒は急いで束と一夏の間に入るべく降下をしようとして

ガンツ！

足に何かが巻きついていなのに気がついた。
む、なんだ？
巻き付いたそれ。

疑問符を浮かべる箒だったが次に気がついた時には箒は海へ叩きつけられていた。

「何だツ！？」

箒は今度こそ本当に、束では無いと確信し急いで海から空へ上がる。そして辺りを見渡すと、そこには？紅椿？同様赤をメインカラーとしたISが浮かんでいた。
箒はそれを見てすぐにそのISが自分を海に叩きこんだ犯人だと分かる。

「余所見たあ……余裕だな……ええ？」

「お前……どういっつもりだ？」

箒は目の前のIS？ペルフェッド・エスターテ？の操縦者ロツソ・ミオネツティに尋ねる。
ただ尋ねるとは言っても、完全にその言葉一つ一つには明らかな怒りの感情がこもっている。

「どづいつつもり…か」

「……」

「そうだな……てめえのその専用機。そいつの試運転に…ッ」

「ッ!？」

「付き合ってやるよッ!！」

ロツソは言うなり、?テンポラーレ?を箒に振るう。

箒はその攻撃を?雨月?で弾くと再びロツソに激しい口調で問うた。

「いい加減にしろ! 何がどうなっていると云う!？」

「いいからきやがれ!!! 手え抜くとマジで怪我するぞ!」

「ッ、聞く耳持たずか!」

箒は舌打ちしながら、?紅椿?を駆る。

まだ、組み上がったばかりの初稼働での戦闘だが流石というべきか束の調整はほぼ完璧だった。

更に言えばフィッティングの間?束特製要点だけまとめたノート?とかいうマニュアルを読んでいたため粗方この機体の事は理解できていたので、それなりに動かせる。

その事はロツソも少し予想外だったようで、感嘆の声を漏らした。

「へえ、初めてにしちゃ上手いもんだ…だけど!」

ロツソは再び?テンポラーレ?を振り上げ箒を襲う。

その刃は蛇のようにしなり、不規則な動きで箒へと迫る。

「そう何度も何度も同じ手が通用するものか!!」

箒は？テンポラーレ？を？雨月？を振るいエネルギー刃で？テンポラーレ？の機動をそらすと機動力にツ物を言わせて一気に懐へと飛び込んでいく。

それを今度は左腕の攻防複合盾？パーチエ・ディフェーザ？で防ぎ火花を散らす。

「く、こ……のツ!!」

「ハアアアアアアツ!!」

箒は？雨月？を右手でロツソへ押し込みながら左手の？空裂？を素早くコンパクトに振るった。

スツガアアアアアアアンツ!!!

至近距離でのエネルギー刃の直撃に爆発を起こす？パーチエ・ディフェーザ？。

箒はその黒煙の中をジツと見据える。

そして煙が晴れていくと同時に左腕部の吹きとんだ？ペルフェッド・エスターテ？が顔をのぞかせた。

「ケホケホツ、ええい…無茶苦茶しやがるツ」

ロツソは吐き捨てる様に良い、箒を睨んだ。

そこへ箒の、勝ち誇ったような声が届く。

「どうした！ 偉そうに割り込んできた割には齒ごたえが無いな！」

「…っせえ。これからだボケ」

ロツソは左腕に残っていた？パーチエ・ディフェーサ？の破片を無理やり引きちぎると再び？テンポラーレ？を？スパードモード？で構えるとスラストアーに火を入れる。

そして三度箒の？紅椿？と火花を散らしてぶつかっていく。

くっそ、ここまで威力がケタ違いだとは思わなかったぜ！

ロツソは心の中でごちりながら機体を駆る。

あの束が作った機体という事もあって、吹っかけながらも警戒はしていたつもりだったが威力が当初の予想を遥かに上回ったのは誤算だった。

まさか一撃で？パーチエ・ディフェーサ？を持って行かれるなど誰が予測できるだろうか。

こちらはシールドもしっかり展開していたと言うのに、あのエネルギー刃はこちらのシールドなど紙だと言わんばかりに容易く貫いて見せた。

それだけでは無い。

？ペルフェッド・エスターテ？の兵装のほぼ九割を搭載している？パーチエ・ディフェーサ？を失った事はかなり大きな痛手である。

今も？テンポラーレ？で防ぎながら戦っちゃいるがいつまでもつか分からねえッ。

何よりさっきの爆発でかなりのシールドエネルギーを持って行かれているのだ。

下手に受けたらそこで終わっちゃう！

箒の刃がロツソの刃をとらえ上に跳ねあげる。

束オリジナルの最新鋭機と第三世代とはいえ最初期の機体ではその

性能にかなりの開きがある。

そしてその性能差は、ロツソの技量を賭しても覆す事の出来るものでは無かった。

「さつきはよくも海に落としてくれたな！ 今度はこちらの……番だッ」

「うああああッ！」

箒はロツソを蹴りあげそして背中を？ 雨月？の柄尻で思い切り叩きぬいた。

それと同時に上がる水柱。

舞いあがった海水が？ 紅椿？を濡らす。

その水柱の中心をを箒はグツと睨む。

そしてその直後だった。

？セルペンテモード？となったロツソの？テンポラーレ？が箒の足刃の解放状態をからめ捕る。

そして一気に引つ張られると同時にロツソの姿が海面に上がる。

「くそッ」

箒は？ 雨月？をなんとか構えスラスターを噴射し強引に一回転させて？ 蛇の呪縛？から逃れるとロツソへ向かう。

？テンポラーレ？を使用している時点でロツソにもう武装は残されていないはずだからだ。

しかしロツソはそれを見てすぐに？ スパーダモード？に戻しその刃を受け止るべく構える。

そしてロツソは箒が振るった？ 雨月？を？ テンポラーレ？に当たるまさにその瞬間に？ セルペンテモード？に再び移行して刃を伸ばし、？ 受け止める？とその刃を左手でガツと掴んだ。

「むッ！？」

「本当はよ…。スフィードの時にしか使えねえんだけどなッ!!」
「まさかッ!」

「ぶっ飛ばせ! ?ウラガーノッ?!?!」

ロツソの左腕の装甲を内部から吹き飛ばしながら、?雨月?を持つ右手にすさまじい衝撃が走る。

あまりの衝撃に箒は思わず?雨月?を手放してしまう。

?ウラガーノ?は本来?モードスフィード?の使用時に排熱のために装甲が吹き飛ぶ事でようやく使用できる武装。

そんなものを通常状態で撃てば内部から装甲がはじけ飛んでしまう事など簡単に予想できる。

だからこれは?ペルフェッド・エスターテ?の禁則条項に盛り込まれている。

当然ダメージを受けるのは機体だけは無い。

ロツソ自身も苦痛に顔をゆがめながら、ただそれでも攻撃をやめるつもりは無かった。

「てめえ、さっきあたしにどういつもりかって聞いてたよなッ」
「くうッ」

「良いぜ答えてやる!! 今てめえが使ってるその力は……」

「……?」

「てめえ自身の本当の力なのかッ!!」

「ッ!」

箒の一瞬の動揺。ロツソはそれを見逃さない。

装甲が吹き飛ぶこともいとわず一撃また一撃と、箒に圧縮された空気の重たい一撃が放たれる。

「そのッ、力はッ、お前がッ、誰かにッ、認められてッ、得たッ、

「力かあッ！！！！！！」

経験で圧倒的に勝るロツソの腕でもカバーしきれないほどの性能差。それだけの能力を持った強大なISを扱うからこそ、こんな形で箒にこの力を与えてはいけない。それがロツソの思いだった。

最後の一撃で完全に左腕部装甲の吹きとんだロツソは苦痛に顔をゆがませながらも？テンポラーレ？を？スパイダモード？に移行して目の前でしつかりと構えそしてスラスタ―最大で突っ込んでいく。

「私は…私は　　ッ」

「わりいなッ……」

ドッ！！

その声の後、渾身の一振りがシールドバリアを貫いて箒の鳩尾に完璧に決まった。

直後箒は気を失い、？紅椿？が解除される。

その箒の身をロツソはしつかりと抱く。

そして箒が薄れゆく意識の中、消え入りそうな声でボソリとつぶやいたのを聞いた。

間違っ
たのか？

と。

第40話 紅椿 その力強大につき (後書き)

あ、また壊しちゃった(爆)

主人公機に続き、準主役でもあるエスダーテを壊し更に筭は戦闘不能させてどうしましょう(汗ww)

まあそんなこんなで紅椿登場回は初陣敗北という苦々しい戦績で終了。

これからどうなっていくのかな!?

ではまた41話でお会いしましょう

あ、ちなみに束さん特製の?ドリモグジェット?アレはサンダーバードのドリルモグラからアイデアを拝借しましたww

第41話 邂逅する白い翼 (前書き)

ようやくですがこの回、ハンバルさんが描かれた小説の主人公が登場します。

少し長めですがどうぞ。

第41話 邂逅する白い翼

「ふむ……こんなところで良いだろう。パラメータチェックはもういい。引き続き続けてくれたまえ」

「はいっ」

技術者が、一礼して叶の前から去っていく。

叶はそれを見送って艦橋の自分の椅子に腰を下ろした。そして叶えは顎をさすりながらコンソールを叩き、この周辺の海図をディスプレイに表示させる。

「……いやしかし……どこへ行ったというんだ……」

叶の珍しく困惑した声が艦橋内に響く。

叶達乗る機動研究潜水艦？守もり？は今、太平洋のど真ん中で停泊中。補給も済ませた後だったので特にやることと言えば、大破した？ホワイトアウル？の修復と改良ぐらいで今はクルーも交代で休養を与えている所で艦橋にも人はまばらだ。

叶は通常よりも静かなブリッジで少し考え込み、オペレーターの男性に声をかける。

「どうだろう、あの艦は見つかったかな？」

「いえ、反応が消えた海域がこの付近である事は事実なのですが、レーダーでもその反応を捉える事はできません……」

「しかし、手品でもあるまいし？空母一隻がまるまる消える？などあり得ないだろう？」

「ええ…それはそうですが……」

「……まあ分かった。引き続き情報収集にあたってくれたまえ？」

「分かりました」

叶はクルーにそう言い残すと端末片手にブリッジを後にする。そして足を向けたのは聡也のいる格納庫だった。

ISとIS-Nの両方をスムーズに発着艦させるため、艦橋よりも格納庫の高さは一回り大きく作られている。

通常ならば敵艦のソナー探知を極力避けるために凹凸は少ない方がよいのだが本艦は武装を搭載してはいるが、機動研究潜水空母であるためそう言った被探知の可能性増加よりも研究のしやすさIS-N運用のしやすさを念頭に置いて作られているためこれでいいのだ。

「あ、博士」

「やあ、どうかな。首尾の方は。一応さっきデータを持ってきてくれたから進捗状況は把握できてはいるのだがね。やはり目で見なければ納得できない性分らしいよ」

「……そうですか。まあご覧いただいている通りです。今日中にはなんとか仕上げられるらしいです」

聡也の言葉に二度ほど頷くと、作業クレーンにつり下げられた装甲板を組み上げる技術者達を見やる。

こうみると、破損したとはいえかなり形を変えてしまったなと思わざるを得ない。

「ホワイトアウル？と？ブラックアウル？は基本的には同系列の機体、つまり姉妹機のような関係である。」

武装の形式が若干異なる以外は、パーツの流用さえ容易なほどに二機構造は同じである。

だから叶は、市街地戦で機体が入れ替わっても焦らず何事も無かったかのようにスペアパーツを使用して新しく？ホワイトアウル？の改修改良に望んだわけだ。

その結果？ホワイトアウル？は以前のスペックと比べて、推力が二十五パーセント、装甲値も三十パーセント向上しバッテリー系統も見直されて稼働時間も少し伸ばすことに成功している。

だがその分形状は大きく変わっており、特に推力と機動力の向上を狙ってスラスターの形状が以前までの四角い工業的な形のものから、両面計六枚の白をメインカラーに黒で縁取りされたスラスターフィンの内部に左右二機ずつに増設されたかり大型の物に変更されている。

また近接戦闘にも対応できるように二門荷電粒子砲が下ろされ、そこに二本のバタフライブレード？ストレートフェザー？を搭載するなど武装の変更も行われており、改良というよりは背部に至っては新たに一から作り直されたと言っても過言ではないほどの作業が行われていた。

「あ、そう言えば姉さんはどうなんですか、連絡ありましたか？」
「ふうむ、まあ連絡は無いがね。だがあの紫香楽 誠一郎が変な事をやらかすとも思えない。大丈夫だろう」

とはいえ、既に一週間が過ぎようとしている。
過程の一つや二つ報告ぐらいしてもらいたいものだ。

こちらから一度だけ連絡を取ろうと試みたものの、結局繋がらず仕舞い。

回線に割り込もうにも、紫香楽家のファイアウォールは叶を持ってしても破る事が出来なかった。

そのため結局向こうのアクション待ち。

それでも艦だけは動かせたが不測の事態に陥る可能性もゼロではなく結果追尾行動もまともに取れず現状に至ると言っわけだ。

だからさつきクルーが言っていたように艦のレーダーにしか頼らざるを得ない。

引き続き情報収集をと言ってブリッジを後にしたものの、はっきりともう新しい情報をこの間だけで探すのは限界だろう。

全ては、？ホワイトアウル？が上がったからだな……。

叶はそう心の中で呟いてその場を聡也に任せると、甲板へとその足を進めた。

梯子をのぼり、ハッチを開ける。

見上げた空はどこまでも澄み渡っていた。

地上へと箒を連れ降り立ったロツソに待っていたのは、きつい千冬の一発だった。

鋭い平手打ちを、頬に食らい口の中を切ったのだらう血の味が広がる。

ロツソは無言で千冬を睨み返すと箒を千冬に預けて千冬に踵を返した。

そして千冬もまたそれを、無言で見送る。

そこへ、無然とした表情の束がやってきた。

「む、なんだいなんだいあの赤髪目つき悪女はあ！！ 箒ちゃんをこんな目にあわせてッ！！」

「束……いい。放っておけ」

「でもでも、今ならやれちゃうよん？　？ドリモグジェット？で肢体をバラバラに……」

「だから放っておけと言っているッ」

「うう~~~~っ」

千冬は箒を抱えてピシヤリという。まだ納得いかないような顔で束は千冬を見るが構わず千冬は踵を返すと箒を学園スタッフの担架に乗せられ搬送される。

見たところ外傷はない様子だったし、旅館の医務室にある設備で対応できるレベルだろう。

まったく……不器用なやつめ。

千冬はその背中を見ながら大きくため息を吐くのだった。

「あ、ロツソ」

「叩かれただけで済んでよかったってところね」

頬を赤くはらしたロツソをテントの下で出迎えた専用機持ちメンバ
ー。

てつきりロツソは、文句や批判の一つでも飛んでくるものだとばかり思っていたが開口一番彼女達が発した言葉はそんなたわいもない言葉だった。

「なんだよ、怒ってたりしねえのか？」

「ふん、貴様の考えなどお見通しだ」

「箒のためだよな？」

「……専用機持って浮かれてたのを正してやっただけさ」
ロツソはそっけなく返すとドカツと腰を下ろす。
そこへ、ロツソの飲んでいたドリンクを持って聡也と一夏がやってきた。

「はい、ロツソ。新しく買っておきました」

「おお、サンキュ」

「にしても見事なはたかれっぷりだったな」

一夏の言うとおり、平手打ちであそこまでのを食らった経験はほとんどなかった。

グツと足を踏ん張ってなかったら、今頃平手打ちで宙を舞っていたところだった。

しかしロツソはそんな事よりも気になった事があった。

筈とこの中では一番近いこいつが、何も言わねえってのもおかしな話だな。

一夏意外の面々はなんとなく感じてくれていたが、少なくともこいつだけにやなんか言われるだろうと確信していたからだ。

それが全く何も言わずニコニコしてやがる。

どうなってるんだ？

「なあ、お前。さつきもあいつ等にや聞いたんだがよ。怒ってねえのか？」

「筈の事か？ そりゃ最初は何してんだって思ったけどさ。ラウラ達に言われてな。お前が筈のためにやってくれた事で、筈がああなったんならそれはつまりそう言う事が一つの正解なんだろう？」

なるほどラウラ達が…。

あいつらにや、一つ貸しが出来ちまったなあ。

ロツソはドリンクを口に含みながらラウラ達を一瞥した後、ビーチをぐるりと見渡す。

色々問題は起こしちゃったけど、まあデータ取りも一通り終わっているし、このまま後は何事もなく終わるだろう。

そう、ロツソが一息ついた時だった。

「た、大変です~~~~ッ!!!!」

ビーチに山田先生の声が響き渡る。

その尋常じゃない焦りっぷりに、そして何より織斑先生の目つきの変わりようにその場にいた誰もが嫌な汗が流れるのを感じていた。

「全く、まさか見つかるとはな」

叶が甲板に出てデータに目を通していた時、不意にオペレーターから端末へ通信が入った。

そして叶それを聞き事態は急転した事を確信する。

叶は、艦橋へ駆け込めと艦内放送のスイッチを入れ口を開いた。

「目標を発見した。全クルーは速やかに持ち場に戻ってくれたまえ。これより？守？は潜航し指定ポイントへ移動する」

叶の号令で、全クルーが自分の持ち場に滑りこむ。

流石はプロといふべきか公私の区別はしっかりと出来ているようだ。

「各部駆動系統異常なし。気蓄機内充填完了。上部カタパルト耐水圧ハッチ封鎖確認」

「弁閉鎖。バラストタンク注水準備整いました」

「それでは行こうか……。前進微速……潜航！」

巨大な鋼鉄のクジラがゆっくりと動き出しそしてやがて海の中へと姿を消す。

叶は完全に艦が潜航したのをクルーの報告で確認すると巡航速度への速度変更を指示してブリッジのデスクに座りオペレーターに声をかけた。

「しかし……よく見つけれられたものだね……」

「ええ、本当にようやくでした。これをご覧ください」

「これは？」

「発見時のレーダー画像です」

端末に送られてきたそれには確かに、探していた艦らしき影が確認できる。

しかし。

「かなり遠いな」

「ええ……距離がここまであったとは思いませんでしたよ」

距離はあるがだがしかしようやく見つけた。

原子力空母スタン・フレイリー。

さて後は間にあうか……だな。

叶はその心配が徒勞出会ってほしいと二時間半という移動時間願
い続けていた。

「指定ポイントに到着。艦影一。本館前方です」

「よし機関停止。深度はこの場で固定だ。潜望鏡を上げようか」

クルーに指示を出し、潜望鏡をクルーがのぞく。

…さて間にあったかな？

叶はクルーの報告を待つ。

そして少ししてから、クルーの声が耳に飛び込んできた。

「前方に艦影あり……ですが……」

「ですが……なんだね？」

「燃えてます……目標炎上！」

「ええい……」

叶はがつくりと肩を落とし背もたれに深く身を預けた。

遅かったか…。

「いかながなされますか？」

「そうだな……とりあえず浮上しよう」

叶は指示を送った後今回だけは叶は珍しく、本当に残念そうな顔で
天を仰ぐのだった。

浮上し、カタパルトハッチを開いた？守？。そこから修理の完全に終了した？ホワイトアウル？が飛び立つ。だがその手にはいつもの荷電粒子砲ではなく発動機の付いた大型の高压ポンプの入ったコンテナを抱えていた。

浮上した僕は、炎上する艦よりも先に機体のチェックを行う。燃えている艦は気になるがそれよりも、愛機に支障が出ては元も子もないからだ。

「PIC再設定、飛行シークエンス機動力向上に伴って誤差修正。スラスターフイン正常稼働中………」
「どうやら各部問題は無いようですね。」

僕は改めて、燃え上がる艦を見つめる。

そこへ博士から通信が入った。

『どうだろうか、新しい？ホワイトアウル？は？』

「大丈夫です。問題ありません」

『そうか……まあ感触を確かめたい気持ちはあるだろうがまずはあの艦だ。聡也、ポンプは持っているね？ それでまず可能な限り艦の火を消化してくれたまえ』

「分かりましたけど……消火活動ですか……」

『まあ、万に一つも無いと思いたいがあの艦は原子力空母なのでね……。火災は不味いだろう？』

それもそうかと思いいながら僕は、？スタン・フレイリー？に降り立

つと、先に乗艦していた？守？のクルーの人たちの所にそれぞれ大型ポンプを設置していく。
そして大型ポンプのエンジンを始動させ給水ラインを海へと垂らした。

準備が整い順々にホースから水が放たれ、消火活動が始まった。

流石に甲板一枚が燃えていたので、時間はかかったがそれなり的人数と更に水は無制限。

ほどなく火は完全鎮火を迎えた。

僕はそれを確認すると、再び博士に連絡を入れる。

「博士」

『うむ……どうやら火は消えたようだね。聡也これから？守？を艦に接舷させる。他のクルーに先に調査を命じて、接舷するまで周辺警戒を頼むよ』

「分かりました」

僕は通信を切り、クルーに博士の指示を伝え艦を後にする。

まあ、とはいえハイパーセンサーにも反応は無い。

それにだ。着艦後に少し？ホワイトアウル？のセンサーで確認したが人の気配はほとんどなく、救命ボートも全て下ろされていた。

つまりこの艦には人っ子一人いるはずがないし、炎上していたという事はつい最近何かしらの襲撃に遭ったと言う事だろうから向かっているとしても僕たちがかち合う可能性は低いだろう。

僕はそんな軽い気持ちで周辺警戒に当たった。

海面すれすれを、白い影が駆け抜ける。

その影は一見すると戦闘機のようにだが、だがその速度は明らかに戦闘機の数倍では無い。

音速を超えたその？戦闘機のような物？は低空飛行も相まって文字通り空気で海面を切りながら突き進む。

「にしても、全く……。人使いが荒いッたりやありやしねえ……」

パイロットであろう金髪の少年が一人ごちる。

顔はバイザーで隠れているが顔立ちはかなり整っている。

超音速で飛行しながらもこの余裕。

普通ならGでそんな事は言っていられないはずである。

つまりこれは戦闘機では無い。

保護システムによってどのような負荷からも搭乗者を守り、音速を遙かに超えた領域でも正確な情報を搭乗者に与える事が出来る物。

そんな物はこの世界に一つしかない。

そうこの戦闘機に見える物はISである。

正確にはオートクチュール？ドッグ・ファイター？とあるISのために専用設計されたそれは、本来人型のISの形を完全に戦闘機のそれへと変化させてしまっている。

「大体オレは、絶賛南の島でバカンスの予定だったんだッ。それを空母が燃えたから調査に行けだつて？イーリ教官は用事でないしナターシャさんは演習。自分しか空いていなかったって言ったって、ポイントが分かっているなら自分たちで行けばいいのにッ」

まあそうは言っても少年はなぜ自分が行かされたのかは分かっている。

それは至極単純な事で少年のIS？ゴーストエース？に勝る速度を持った機体が存在しないからである。

速さがあると言う事はそれだけ速く現着出来ると言う事なわけで。

なんかこう言う時だけほんとコイツの速さが恨めしくなるぜ。

少年が心でつぶやくと同時にハイパーセンサーが目標とする艦を捉える。

「お、あれか　　って!？」

と同時にハイパーセンサーが、艦の他にも二つの大きな反応を感知し、少年は一瞬大きく目を見開いた。

「つち、まさか先にどっかの誰かさんに見つけられているとは…。」

それに……この片方の反応……おいおい、まさかISじゃないだろうなァッ。

とはいえ、このまま引き返すわけにもいかない。

任務は任務。

敵がいたからでは理由にならない。

だが幸いだっただのは、高度が低かった事だ。

高度五百フィート以下で飛行を続けていたため、通常のレーダーに引っ掛かる可能性は少ない。

しかしISが相手なら話は変わってくる。

頼むぜ……。こんなところでもめごとは嫌だからな……

そう心の中で念じながら彼は飛ぶ。
白昼の調査活動が戦闘に発展しない事を？レイル・スカイライン？
は切に願いながら。

「周辺異常ありませんね」

『まあ、あってもらっても困るがね？』

博士は接舷して上からたらされた縄梯子を登り？スタン・フレイリ
ー？の飛行甲板上に立ち、飛行甲板をぐるりと見渡している。

それにならって僕も？ホワイトアウル？のまま博士の隣へと降下す
る。

IS-NはISの様に自由に展開できないため完全に安全が確保で
きなれば待機状態に戻すわけにはいかない。

まあ、そんな事起きるはずもないのだからうけれど。

「しかし……………妙な壊れ方だね？」

「妙というと…？」

「飛行甲板があれほど炎上していたにも関わらず、こうもブリッジ
が綺麗なのが少し気になってね？」

僕は博士の言った事を聞いて、ブリッジに目をやる。

確かに…。

言われてみれば、ブリッジには火災で焦げたような後はある物の、ガラスにひびの一つも無い。

ブリッジの側面に描かれている？碇？をかたどったアメリカ海軍のエンブレムは綺麗に残っているし、よく飛行甲板を見てみると？一方向から強い力でめくられたような穴？が無数に空いていた。

更にその穴はそれは同じ向きでブリッジの陰になっている所にまで空いている。

これは、一方向から来た攻撃がブリッジを正確に？迂回して？装甲に突き刺さったと言う事。

こんな事？普通の兵器？では出来ない。

そう…つまりこれは…。

「んツ！？ 何だと!？」

僕が博士に向かって口を開こうと顔を上げた瞬間、博士がかなり慌てた様子で叫ぶ。

そして僕を見て、叫んだ。

「聡也、艦の左舷後方だツ！」

何が左舷後方か。僕は博士の焦り様を見ただけで理解した。

僕は丁度左舷側の甲板端にいたためそのまま体重を後ろに掛け甲板から自由落下する。

すると見えた。

海上に光る白い影が。

「あれかツ!!」

僕は左腕の荷電粒子砲のトリガーを引く。

高速機動でこちらに向かってきていたそれは、戦闘機のようにも見

えだが速度的にはISかもしれない。

だがどちらにしても、固定翼機が一瞬の判断で避けられるタイミングではないはずだ。
当たる、直撃だろう。

「ツフ……？ ホワイトアウル？ 初めての……… 鉄クズですねッ」

その事を確信し僕は口元を緩める。

しかしそのすぐ後に僕の顔は、驚愕に変わっていた。

その戦闘機は、本来の固定翼機には不可能な機動で急旋回すると気がついた時には空高く舞い上がっていた。

翼は可変翼だったらしく急旋回に合わせて翼の後退角もかなり浅くなっている。

いやそんな事よりも。

「まさか避けるとはッ!？」

僕は機体を立て直しスラスターフィン二枚を開く。

スラスターフィンは計六枚で構成されており、展開枚数に応じてスラスター開度や機体制御システムの介入度合などをコントロールする。

そこへオープンチャネルで博士から通信が届いた。

『かなりの高軌道型の様だね………』

「どうします？」

『先ほどオペレーターから連絡があつてね。機体の詳細は分からないがアメリカ国籍のISだと言う事が判明したよ』

やはりISだったかと舌打ちをし、上空を旋回しながらこちらを伺う機影を睨む。

「合衆国ですか……とすると飛来した目的は……」

『十中八九この艦の調査だろうね……ご苦労な事だ』

「それで？」

『ひとまずまだ調査は済んでいない。聡也悪いがあこのISをこの艦から遠ざけてくれたまえ』

「……分かりました」

通信が切れ僕はスラスターを噴かして相手と同じ高度まで上昇する。そして旋回機動の真ん中に、僕は堂々と機体を割り込ませた。

やっべ、やっちった。

オレは旋回しながら、白いISを見降ろしてごちる。
何があったかというと……。

よし、どうやらあの潜水艦はこちらにまだ気が付いていない。

多分、レーダーの最低感知高度以下をオレが飛んでいる証拠だな。

おっし、このまま

って!?

そう思ってレイルが少し速度を上げた次の瞬間目の前にあったのは大きな一枚の飛行甲板の残骸。

それがまあ、旨い具合に斜めになって浮かんでいたのだ。

「ちよ、お、わぁッ!?!」

オートクチュール？ドッグ・ファイター？は言ってみれば可変翼を
持った？ゴーストエース？の戦闘機バージョン。

戦闘機以上の速度を出せるが旋回性能はというと、航空自衛隊のT
プロペラ機

- 7 練習機にも劣る残念スペックなのだ。

避けられるはずがない。

後はご想像の通りだ。

ゴギャンツ！

その漂流していた飛行甲板の角度のまま機体は大きく跳ね、慌てて
高度を落とした時には時すでに遅し。

今考えるとA・F・Cがあつたのだからそれで回避すれば良かった
アクティブライドコントロール
のではないかと少し後悔…。

まあその後の攻撃はそれで避けられたんだけど。

ちなみにA・F・Cとは第三代兵器の一つで？ゴーストエース？
周辺の流体を操作することで空気抵抗すら無視できるシステムの事
だ。

つと、そんな事考えてる場合じゃねえか。

オレは上昇してきた、白いISを見やる。

そいつは堂々と旋回機動の真ん中に割り込んできた。

すると突然オープンチャネルが開く。

相手は…あの白いヤツか…。

『……………あなたは……………何者です？』

「悪いけど、それを言うわけにはいかな…んんツ…いきません」

あつぶねえ、男言葉出るところだった。

現在確認されているISを動かせる男は？公？には織斑 一夏ともう一人アメリカ人がいるとされている。

そう？公？にはね。

その後、もう一人ISを動かせる男子が見つかった事は軍や政府によつてその情報自体が嚴重に伏せられているのだ。

そのため、自分が？男？であるという事を事情を知る物以外には原則ふせねばならない。

かといって女言葉なんて言いにくいし言いたくもない。

そんな理由から、レイルは敬語を使うようにしていた。

これなら、話し方だけで男女の区別をつける事は難しい。

『そうですか……では聞き方を変えましょう。あなたの目的はなんですか？』

「それにも答えかねますね……」

『……はあ……そうですか』

「……？」

大きくため息を吐く白いIS。

オレが丁度相手の背面に回り込んでその様子に首をかしげた瞬間。

ドンッ！！

「うわッ!？」

『すみませんが……少しお相手願いましょう!』

くっそ撃つてきやがったッ。

しかも今こつちを見てなかったし。

まあハイパーセンサーを使えばその程度お手の物なのだろうが、いくらなんでも正確すぎる。

相手がかっこの速度を読み違えていなければ、直撃だっただろう。それだけでオレは相手の技量がかなり高い事を読みとっていた。

A・F・Cを使用しての旋回機動から、オレは一気に高度を下げ速度を増し海面すれすれを飛ぶ。

『速いッ』

「まだ全力の半分以下ですけどねッ！」

オレは充分に距離を取って旋回。

敵へと速度を生かして一気に突っ込んでいく。

そして？ドッグ・ファイター？に搭載されている十二発の短距離ミサイルが一斉に発射されそれと同時に自分も？ドッグ・ファイター？をパージする。

これ難点はパージしなきゃ肢体がまともに動かせない所だよな…。
ミサイルは、全て相手に撃ち落とされてしまったがこれでいい。
オレは、ガチャリとレールガン？メタルブレイカー？を構えてほくそ笑んだ。

ちいッ、速すぎるッ！

聡也の？ホワイトアウル？のスラスターフインは四枚展開。これだけでも充分高機動のISと互角程度の機動力は得ているはずなのに聡也はレイルに追いつくどころか、ハイパーセンサーを持ってしてもしっかりとえられない。

これでは遠ざけるうんぬんの話じゃないッ！？

するとレイルがISのオートクチュールをパージ。それと同時に十
二発ものミサイルがこちらへ向かってくる。

「流石にその程度ではッ」

いくら追えないと言ってもそれは相手のISの話。

IS武装とはいえミサイルごときにあたってやるわけにはいかない。

「 スラスター開度七五パーセント、機動制御システム介入に
よる機体誤差値修正 」

スラスターフィンと連動して、機動制御プログラムが介入を開始す
る。

推力増強に伴って大型化されたスラスターに完全に火が入り機体を
一気に押し上げる。

上昇しながら、半分は荷電粒子砲の太い閃光がまとめてミサイルを
落とし、残りの半分は新たに搭載されたバタフライブレード？スト
リートフェザー？を抜いて切り裂いく。

？ストリートフェザー？はIS Nがバッテリー駆動である事を鑑
みて実刃のみの近接ブレードとして造られたがその切れ味は中々に
良好なようだ。

左手に砲を右手にブレードを。

一見するとサムライガンマンの様な、格好で聡也は距離を置いて敵
ISの様子を伺う。

…しかし…あんなIS見たこともありませんね…。歩行機能す

ら削って、機動力に特化させるとは。

敵ISの姿は、明らかに従来の中のISにも似ても似つかないほど独特なフォルムをしている。

パワースーツという言葉がぴったりなほどに、無駄を極限まで減らした細身のフォルム。

恐らく、あれだけの薄さだ荷電粒子砲の一発で落ちる。

……問題はとう当てるか。

実際一つだけあの速さに対向する術はあるにはあるのだが、改良後の初起動でそれを行うのも気が引ける。

しかし残念ながら？ホワイトアウル？には連射性能の高い武装が備わってはいない。

つまりあのISの足を止める事が事実上できないのだ。

だがそれならそれなりにやり方という物もある。

聡也は左手の荷電粒子砲を構える。

……いくら速いとは言っても、そこに存在しているのなら……

「機動を制限する事は出来るッ!!」

聡也はレイルの機動の先を読み、トリガーを引く。

マズル内で収束されたエネルギーが一拍置いて、バチィッ!!というスパークの様な音を立てて放たれそして。

霧散した

「何ッ!？」

「悪いですけど、それは撃たせるわけにはいきませんか？」
通信から余裕たっぷりなレイルの声が響く。

ビーム拡散膜内臓弾頭だったのかッ！

聡也は顔をゆがませると、スラスターを噴かし移動する。

あのミサイル。

爆発自体はさほど大きなものでは無かったが、周辺一帯にまき散らされたのは粒子。

いくらハイパーセンサーでもそれを見極めるのは不可能だ。

「やってくれるッ」

聡也は砲をラックにもどし、片方の腕にも？ストレートフェザー？を構える。

粒子の滞留時間が正確に分からない今それを待っている余裕はない。

こうなったら仕方が無い。

もう気が引けるなどといっていられる状況ではない。

最大稼働はまだテストもしていないが、とにもかくにも砲撃が使えない以上格闘戦に持ち込むしかなくそのためには相手に追いつかなければならない。

「スラスターフィン、フルアクティブ全展開！ バイパスバルブ変更スラスター直結、システム介入オフ。OSスリープ解除」

モニターに映し出される機体のステータス画面で、先ほど聡也が指示した作業が素早く行われそして全てのシークエンスが終了するとピーっという電子音の後にモニターに大きく文字が躍った。

? Speed striking Organization
Interface Control Systems?

? High maneuver striking start.
The exclusive OS? Sonic? start
ted?

【 高機動格闘戦闘開始 専用OS? ソニック? 機動
】

その瞬間。

レイルの前から白い影が消えた。

第41話へ邂逅する白い翼（後書き）

この回は、？スタン・フレイリー？が炎上しているというシーンですがこの艦に乗っていたのが誰かという事を考えれば、何を言いたいのかはすぐにわかるでしょうw

炎上させたのがISだと言う事も含めればね？

さてこのレイル君はハンバルさんのISの二次創作？ブレイズセブン？の主人公です。

ようやくお約束通りコラボさせてあげられましたが彼はしばらく出てきます。

予定では福音戦辺りまではちょこつと出てくるかも…。

そんな感じですが、よろしくお願いします。

ではまた次回。

失礼します。

……にしても戦闘シーンって難しいですね

第42話 白の衝突 紫の乱入 銀色の暴走 (前書き)

福音戦第一回戦前の叶さんの言う前座の更に前のお話

第42話 白の衝突 紫の乱入 銀色の暴走

「嘘だろ？」

小声で呟きそして、見渡すも？ホワイトアウル？の姿は無い。
レイルは心底驚いていた。

この？ゴーストエース？の速度に付いてくるどころかこちらが見失
つてしまうなど初めての事だったからだ。

そして気がついた時には、？ホワイトアウル？は真上……にいた。

「捕まえましたよ！」

「なッ くッ！！」

聡也の二本の？ストレートフェザー？を前に突き出した？メタルブ
レイカー？で防いだとはいえ、ブレード、機体そして何より全展開フルアクティブ
された？ホワイトアウル？の推力がレイルを上から押し付ける。

「くっそッ」

「はあっ！！」

聡也は？メタルブレイカー？ごと？ゴーストエース？を弾くと、少
し距離を取り今度は相手と同じ高さから再び切りかかる。

速さが互角ならば、多少距離を離そうと支障はない。

聡也は右側の？ストレートフェザー？を振るう。

レイルはまたも、それを？メタルブレイカー？で防ぐが聡也はそれ
を確認するやすぐさま、もう片方の？ストレートフェザー？を横薙
ぎに払う。

「甘いッ」

しかしそれはレイルも予測済み。防いだ瞬間にわずかに機体を引き

それを難なくかわす。

「それはこっちの台詞ですッ」

だがそこからさらに聡也は一步踏み出して、追撃のソバットを叩きこむ。

推力は常にフル稼働状態の？ホワイトアウル？の踏み込みはレイルの予想をはるかに超え、レイルの腹部に思い切りめり込んだ。

更に一瞬のスラスターフレアを残し？ホワイトアウル？が消える。

「っ
」

レイルはとつさに腕部の？ハンドシールド？を展開するもすれ違いざまに振り抜かれた二本の？ストレートフェザー？の威力は機動力を限界まで高めた軽量な？ゴーストエース？を吹き飛ばす事など容易かった。

「ぐあッ！？」

今度こそ大きく吹き飛ばれレイル。

そこへ止めと言わんばかりに、決定的なダメージを入れるべく聡也が飛びこむ。

「貰いました！」

だがレイルとてそう何度も何度もあられっばなしというわけにもいかない。

「そう何度も何度もッ」

レイルは？メタルブレイカー？の狙いを定めずトリガーを引いた。

その形状から？釘？と呼称される？メタルブレイカー？の弾丸は武器の名が示す通り徹甲弾である。

放たれた弾丸はかなり至近距離であったという事を差し引いても、

？ホワイトアウル？の装甲を貫通するには十分な威力を持っていた。

「徹甲弾か！？」

ばらまかれた弾丸が？ホワイトアウル？の装甲をえぐる。

そして運の悪い事にその弾丸の一部が、スラスターフィンをかすめていた。

「な、しまった!？」

「 スラスターフィン二番四番翼異常検知

」

「くっそのの、もう少し耐て!!」

聡也は、ステータスマニターに叫びながら？ゴーストエース？に再び迫る。

流れる汗は、？ホワイトアウル？のフルドライブがそう長くは持たない事を示していた。

激しくぶつかり合う二機。

しかもかなりの高機動戦。

勝負は一瞬。

二人は戦いながら、その意味をよくかみしめていた。

時折、轟音が響く艦の上を叶は歩く。

「もう少し向こうでやってもらいたいものだが……文句は言えんな
N一機では、まだこの程度が限界か……」

叶はつぶやきながら歩みを進める。

彼女が向かっているのは、この艦のブリッジである。

鉄製の階段を上り、重い扉を開ける。

そして細い通路を通った先が操舵室だ。

「…………ふむ。慌てて避難したと見えるな」
叶は、パリりと床に落ち逃げるクルーに踏み荒らされボロボロになった海図を拾いあげそれを海図台に広げる。

…………これはこの海域の物では無いな…………。

しかしこの海図台には、他の海図もあつたが全て丸められており、広がっていたのはこの海図のみ。

「やはりこの艦は、あの我々がいた海域にいたようだね」

しかしだ。だとするならばこの艦はなぜこんなところまで…………。

叶は、考えを巡らせそして一つの結論へたどり着く。

…………海流か…………。

このハワイ沖合は黒潮の影響でかなり潮の流れは速い。

そしてこの艦は、アンカーを下ろしていなかった。

…………潮の流れといたのであれば方向性や距離そして現状証拠のどれをとつてもつじつまが合う。

やれやれ、まさか潮に振りまわされたただだったとは…………。

発見が遅れた事が本当に悔やまれる。

叶は頭を掻きながら、ゆっくりと視線を動かす。

すると、先ほど見ていた海図台の近くにもう一枚A4サイズの紙の束が落ちているのに気がつく。

ん？ ……これは…………。

そしてそれを拾い上げパラパラと目を通した叶は、意味深な笑みを浮かべその束を持ったままブリッジを後にした。

「ハアアアアッ!!!」
「オオオオオオッ!!!」

海上に火花を散らしながら二機が、高速の世界を駆け抜ける。

互いにこれといった決まり手も無いまま、時間だけが過ぎ互いにエネルギー残量も心もなくなってきた。

特に聡也の場合は、?ゴーストエース?に付いていくために?ホワイトアウル?の推力をほぼ全開で使い続けている。

?Speedstrickening Organization
Interface Control systems?

直訳すると?高機動格闘戦における機体の統合的操縦制御?。簡単に言えば高機動格闘戦専用OS。

この頭文字を取ってこのOSは?SONIC?と名付けられている。

だが結局はオーバードライブシステムによく似た原理のもので、まずスラスタ^{フルアクティブ}フィンを全展開状態にして、エネルギーバイパスバルブをスラスタに直結させる。

すると荷電粒子砲の再充電であったり余剰エネルギーから発生した熱量を回生してバッテリーに戻すといった事が出来なくなる代わりに、平時以上の圧倒的な機動力を得られるという仕組み。

そして?SONIC?はその高機動格闘のための専用OSである。

しかし元々そう言った回生システムを含めての最大稼働時間が定められているわけだから、このシステムを使い続けると言う事は必然的に最大稼働時間を極端に縮める結果に繋がってしまう。

そして例にもれず聡也には、なんとかスラスターフイン異常でのシステムの強制停止は待逃れたものの、活動限界というどうしようもない現実が目の前に迫りつつあった。

オーバードライブを使用して加速する？ホワイトアウル？とその速度域が常用の？ゴーストエース？ではいくらエネルギー残量が減ってきているとつてもどちらが効率的にそのエネルギーを使えるかという見方で見れば答えは火を見るより明らかだった。

もうこれ以上、フルアクティブ全展開を使い続けていたらシールドエネルギーまで食いはじめてしまうッ

実際、このISを倒す必要は聡也には無いが、やる以上負けたくはない。

それはレイルも同じ事を思っている。

聡也はレイルの？釘？をかわすと一気に肉薄素早くシャープに？スレートフェザー？を振り抜く。

「どうしたんです？ 少し鈍くなってきましたよッ！」

「減らず口を！！」

しかし、聡也がそこに到達した時は既にレイルはそこにはおらずブレードが宙を切るヒュンっという音だけがむなしく響く。

逆にレイルもレイルで、近接戦闘武器がほとんど無い上に？メタルブレイカー？の残弾も少なくなっていた。

何より？ゴーストエース？はこれほど肉薄されての戦闘を想定していない。

あくまで機動力に頼った、？ヒットアンドアウェイ？が基本戦法。それは他の追隨を許さない、圧倒的な速さがあるからだ。しかし今は違う。

現に聡也はレイルに追いつき、ブレードを振るってくる。

エネルギー残量で肝を冷やすのが聡也ならば、レイルは当たれば確実に一撃で終わるそんな瀬戸際のギリギリの状態で肝を冷やしていた。

レイルはブレードを避けると、接近を許さぬようパルスレーザーの？ラピッドレイ？で弾膜を張る。

これで若干時間は稼げた。

そう思った矢先だった。

「何!？」

「もうちまちま避ける時間が無くなりましてねッ!!」

聡也が無理やり弾膜の中を突っ切る。

予想外だったレイルはワントempo反応が遅れてしまった。

「ようやく決着ですねッ」

「しまっ!？」

聡也の口角が釣り上がる。

タイミング的には最悪。聡也にとっては最高だった。

物質はそんな物でも、動きだしからトップスピードに達するにやはそれなりの時間を必要とする。

それはISでも変わらない。

やばいッ!

そうレイルが思った刹那だった。

絶対的優位の聡也が再び焦りの声を上げたのだ。

「ッ！ まさかッ！！」

見ると？ホワイトアウル？はスラスターから火が消えかかり、バランスを大きく崩していた。

『Remainder Energy danger area.
OS ? SONIC? forced stop. system
energy-saving mode battery
recovery start. IS maintenance
has top priority』

【残りエネルギー危険域。 OS SONIC 強制停止。省エネルギーモードへ移行しバッテリー回生モード再開。 IS維持を最優先に。】

？ホワイトアウル？のモニターに踊る文字に笑みは消え顔がゆがむ。
「パワーダウンだとッ！！」

スラスターフィンが閉じ、エネルギーバイパスバルブが切り替わる。それと同時に一瞬でレイルを追いきれなくなってしまった。だがこれはレイルにとってはピンチがチャンスに変わった瞬間だった。

「よし、貰いましたッ！」

レイルはここぞとばかりに？メタルブレイカー？を放ち？ホワイトアウル？の装甲を切り刻む。

「ぐうッ！！」

そしてマガジン全部を撃ち尽くすと同時に？ホワイトアウル？がぐらりと傾いた。

その瞬間、勝敗は決定し

無かった。

「オオオオオオラアアアアアッ！！！！！！！！！！」

「ッ！？」

バツと振り返る。

そして太陽に照らされた紫の機影を、レイルのハイパーセンサーが捉えた。

ピピッとレイルのISにその機体の情報が送られてきた。

…紫燕！？ スタイルは…ッ！！ 高機動型かッ！！

正直この状態で、新たなISしかも超がつく高機動型となどやりあえるはずもない。

レイルは迫る？紫燕？の突き出し？大蛇？を一瞬のスラスタ操作で上に避け柄の上に脚部をのせ思い切り蹴った。

「あんだとッ！？」

「すいませんねッと！」

蹴られた柄ごと進行方向をずらされた聡華は舌打ち交じりに声を上げ聡也を回収して振り返るが、そのままレイルはそんな二人に構ってられないとばかりに機体の速度を上げる。

そして歯噛みする聡華を尻目に水平線のかなたへと消えた。

「くそッ！」

まだ追おうとする聡華をいさめたのは、通信の向こうの叶だった。

『聡華、あれはもう良い。深追いはせず聡也を曳航して帰艦したまえ』

「いやけどよ…ッ」

『言いたい事は分かるが、いまはそれどころでは無いのでね』

「ッく……っけ、わあっただよ」

聡華は不満そうに渋々といった感じで頷く。

「……ほんと、タイミングが良いのか悪いのか……」

聡也にしてみれば九死に一生を得たわけだからタイミングはよかつたのだが、聡華にしてみれば新型の？紫燕？の能力を一ミリも使えなかったのだからタイミングは悪かったと言える。

だから聡也のそんな一言が聡華には意外とグサリと来た。

帰艦した二人を叶は、格納庫で出迎える。

既に二人は、ISを降り私服に戻っていた。

「やあ、聡也、聡華…お疲れ様だったね。にしても聡華。久しぶりじゃないか？」

「ふんッ、まあな」

「こちらとしては、連絡の一つぐらい欲しかったものだが…まあいい」

叶は、視線を聡華からハンガーにラックされた紫燕へと移す。

……随分と形を変えてきたな……。パッケージ？八岐大蛇？とはまた何ともあの誠一郎らしいネーミングだと思うが。

叶はメカニック達が抽出したデータを端末上で確認する。

機動力に主眼を置いた機体である事は変わらずだが、パッケージ自

体の性能は中々に面白いものだ。
精々有効に使わせてもらおうとしよう。

「しっかしよ、本当に良かったのか？ 追わなくて」

「ええ、そうですね。合衆国の機体ならば逃がして得な事は無いと思いますが…」

「何！？ あれアメリカの機体だったのかッ」

「知らずに飛び込んできたのか… 聡華らしいがね」

「ほっとけ」

聡華はフンつとそっぽを向くが叶はそれに構わず、先ほどの疑問に答える。

「まあいいだろう。なぜ追わなかったかだがね。先ほど通信で言った通りだよ。それどころではなくなってしまったのでね」

「そう言えばそんな事仰ってましたが…あのISに交戦データを持ちかえられるよりも重要視すべき事がありだど？」

聡也の言いたい事はもつともだ。

こう見えて色々派手にやらかしてはいるが叶は実のところ色々と各国から目をつけられている人物でもある。

アメリカもその国の一つ。

国際指名手配とまで大げさなものではないがその動向に各国が若干神経をとがらせているのは事実なのだ。

しかし、叶は聡也の心配などどこ吹く風。

ゆっくりと頷くと小脇に抱えていたA4サイズの紙の束を渡しいつものようにひょうひょうと言葉を連ねた。

「ふむ…まあこれを見たまえ」

「なんだ、こりゃ？」

「表紙はISの運用許可証ですね。…そして演習項目やデータ採取

に関する基準数値のデータ録……」

「その後ろのデータはともかくとしてだ。その運用許可証を受けた機体名を見てくれたまえ？」

叶の言葉に促され二人は、その項目を探す。

そして二人はその項目をほぼ御同時に見つけ、そして同時につぶやいた。

「……シルバリオ・ゴスペル……」

それと時を同じくして叶の端末にオペレーターの声が響いた。

『高速移動中のアメリカ国籍ISをレーダーで捕捉。対象速度域スパークルーズにて航行中。レーダートレースのまま進路一九八に変更します』

「一九八……？」

「……まさかッ!？」

進路変更を聞き聡也が何かに気がつく。それを見て叶はニヤリと笑う。

「そついつ言うわけだ？ まあ、前座には間にあわないだろうが……」

……

そこまで言って叶は意味深な笑みを浮かべる。

そして一層声のトーンを落として、言葉をつづけた。

「本番までには間にあうだろう……ねえ？」

緊急事態を告げる織斑先生の声が響き、テストは中断。専用機持ち意外の生徒は旅館で待機を命じられ、旅館の宴会用の大広間？風花の間？には専用機持ちと教師陣そして博士達IS-Nの関係者が並んでいる。

もう既に、一通り織斑先生が説明を終え現在は対策案に追われている所だった。

「広域せん滅型の特殊射撃型IS……。全くめんどくせえ相手だぜ……。しかも暴走していやがるんだろ？」

「タイプのには、アルディの？ストライクバーディ？と似通う部分も多いな。まああれほど重装甲でもなさそうだが……。確かに暴走というのは気にかかる。このデータがどこまで役立つか……」

ロツソとラウラが議論を交わす中に鈴が、口を開く。

どうもこう言う時でさえ鈴は細々考えるのは苦手らしい。

「ってかぶっちゃけ、これこそアルディが適任の相手じゃんッ」

「ちよ、ちよっと鈴！」

「あっ！」

シャルロツトに言われ慌てて口をふさぐ鈴。なぜならすぐ隣にはセシリアがいたからだ。

しかしセシリアは、一拍置いてコホンと咳払いをすると毅然とした態度で言う。

「私とて代表候補生……。有事に私的な感情を挟むつもりはありません。……大丈夫ですわ」

最後の大丈夫という言葉が、僕にはどうも自分に言い聞かせているように聞こえて仕方が無かった。しかし確かにセシリアの言うとおり今は有事。言い方は悪いが今いない人物の事を考えても仕方が無い。

僕は、データとにらめっこして一言も口を開かない博士に意見を求めた。

「博士はどう思います？」

「そうね…。格闘戦闘は未知数だし…。しかも飛行速度も有に音速を超える相手…」

「速度域から見ても、IS-Nで太刀打ちできるレベルの相手じゃありませんねえ…。聡也君には悪いですけど」

悔しいが仕方が無い。

学園の専用機にさえ押し負けるNの性能では軍用ISなんて抑えきれぬはずもない。

……せめて、？ナイトシユライク？が使えれば……。

あの推力なら少なからず力になれると思っただのに……

あのビーチでの試験で一度たりともその姿を現さなかった？ナイトシユライク？。

どういうことなのか博士でも分からないらしい。

「まあどっちにしても、この速度域ならアプローチは一回が限界……ですよね？ 織斑先生？」

「ええ、そうなります。ワンアプローチワンダウン。攻撃する機体はそれなりの機動力を持ち尚且つ一撃必殺の武装を持った機体で決まりでしょう」

織斑先生の言葉に全員が全員ゆつくりと、とある一人の人物を見やる。

「それなりの…」

「機動力があつて…」

「一撃………」

「……必殺」

ちなみに上からシャルロット・鈴・ラウラそしてセシリアである。

「……あゝえと…俺がどうかしたのか？」

「……うん、まあ決まりだろうな」

最後にポンッと肩を叩かれるその人物、織斑一夏だったが未だによく状況を把握できていない様子だった。

そこに鈴が、ため息交じりに説明を沿える。

「だから、あんたの？零落白夜？で落とすのよ」

「ま、待ってくれよ。本気が皆！？」

一同が無言でうなづく。

しかし一夏の動揺は無理もないことだと思つた。

いきなりそんな大役をやれと言われてすぐに頷ける人間なんていない。

きつと僕だって尻ごみしてしまうでしょうね…。

しかし最大の攻撃力を持つ機体が一夏しかない事もまた事実。

やってもらうしかない。

その辺りの心境を織斑先生はくみ取つてか、一夏に問いを投げかけた。

「織斑……これはもう訓練じゃない。自信が無いのであれば辞退してもいい。たとえここでお前が辞退したとしても、誰も何も責めん

……どうする？」

口調はいつものように淡々としていたが、ニュアンスとしては出来れば行つてほしくないそんな気持ちが見えられているように感じられる問い。

一夏もそれは分かっている事だろう。

一夏は静かにうつむき考え、そして次に顔を上げた時には迷いは消えていた。

「……やって見せます」

「……そうか。分かった。では具体的なアプローチ方法に入ろう」

織斑先生は一瞬だけ複雑そうな顔を見せたが、すぐに表情を戻し腕を組む。

「問題は速さね……。音速飛行中の相手にどうやって接触するか」

「エネルギーは攻撃に全部回した方がいいよね。とすると理想としては何かに運んでもらうのが一番なんだけど……」

そう相手は高高度を高速で飛行している。

未知数な部分が多い相手なのだから、下手に長引かせるのも得策ではない。

シャルロットの言うとおり攻撃にエネルギーは全て使った方がいいだろう。

「ですわね……。何かこう垂直にドンッと射出出来るような装置があれば……」

「……え？ セシリアちゃん今なんて言ったのかしら？」

セシリアが何気なく言った一言に博士が食いつく。

「え、いやですから、垂直に射出できるような装置があれば良いなと……」

「それよ！」

いきなり大声を出して指を鳴らす博士。

何事かとその場の全員が、一斉に博士に注目していた。

「あの、博士？ 一体何がそれなんで……」

「要はランディングポイントに？ 白式？ が間に合えば良いんでしょう？？」

「そうですね、まあそれは……そうですね」

博士はニヤツと笑うと傍らで端末を操作していたリリスさんに声をかける。

「リリス！ ？ 戦？ はすぐに動かせる？」

「え、ええと……今丁度、駆動部周りの整備点検中ですから二十分あればなんとか」

「ま、まさかッ！？」

「ええ、そのまさかよ？」

勝手にその間だけで、納得している僕達にラウラが割って入った。

「すまないが……その……どういうことなのだ？」

「……うん……うん」「」「」

他のメンバーも同様だったようで、一斉に首を縦に振る。

彼女たちに指をピンと立てると博士は笑みを絶やさず言った。

「一夏君を、？ 戦？ のカタパルトから一気に射出するわ！」

「し、しかし、いくらカタパルトといえど推力を使う事に変わりは……」

「一条博士。ボーデヴィツヒの言う事も一理あります。出来れば推力は使わず織斑を現場に運びたい」

「うつ……じゃあ……駄目ね……」

一気に勢いを殺され、しばんでゆく博士。
あゝあ、格好悪い……。

また議論が振り出しに戻ったかに思えた時セシリアが意を決して立ち上がる。

「なんだ、オルコット？ 何か案でもあるのか？」

セシリアは頷くと、織斑先生に進言する。

「私は先ほど、一条博士がおっしゃられた作戦に賛同しますわ」

「何？」

「だがあの方法では一夏はエネルギーを使ってしまっぞ？」

「だったら……文字通り運べばいいのですわ！」

運ぶ？

いやだからそれを今どうするかで議論をしているんじゃない……。

「……あ、そうか」

ポンつとリリスさんが手を叩く。

「何が……そうか……？」

「つまりオルコットさんは、一夏君を……」

「文字通り運ぶと言っわけね……」

え……ええ！？

セシリアは、リリスさんと博士の言葉に頷くと視線を織斑先生に戻した。

「？ブルーティアーズ？の高機動仕様？ストライクガンナー？のインストールは三十分あればなんとかかなり「二十分で充分よ」……え？」

博士が腰に手を当て、言葉を遮る。

その目はもう、どこかの冗談交じりの科学者では無い。
Nの技術責任者として、そして一技術者としての自信に満ち溢れて
いる。

「私達のスタッフは、ISの技術者を引き抜いてきてる。全力でサ
ポートすれば？戦？の移動時間内でインストール・調整から戦闘行
動可能状態にまで持って行って見せる」

織斑先生は、博士の目を見てゆっくりと頷く。
それが合図だった。

「リリース、？戦？に連絡を入れて。整備点検中でも何でも動かせる
ようにするのよ！」

「は、はいッ！」

「よし、織斑、オルコット両名は準備を始める。他の者はサポート
にまわれ。尚現時点を持って対象はこれより対象を福音と呼称する」

「はいッ」

「分かりましたわ！」

それぞれが素早く持ち場に散っていく。

その顔つきは誰も真剣そのものだったが、どうにも僕にはセシリア
の顔だけが、切羽詰まったような焦りの表情にも見えて仕方が無か
った。

……あれ？そう言えば志穂音はどこへ行ったんでしよう？
当然来るものだと思いますけど……？

志穂音は緊急事態で召集がかかりロッソと鈴のいなくなった部屋でひたすらキーを叩き続けていた。

……ソフトウェアの方は揃ったけど。
ハードウェア
アルデイがまだ目覚めないんじゃないか……。

志穂音はタンツとエンターキーを押すとゴロンツと仰向けに転がる。

ローラさんの言われた通りにシステムの構築は終えた。

情報欠落部分も？^{あの時}暴走事件？に出来る限り取ったデータではほぼ完璧に補う事が出来たし足りない部分は？ストライクミラージユ？から調達済みだ。

作業が終わった事は既にローラに知らせてあるし、今何が起こっているのかも教師陣の端末へのハッキングで得た情報も添えてある。

志穂音は窓の外を見やる。

まだまだ日は高く、外では一夏達がせわしなく準備を行っていた。

……シルバリオ……ゴスペル……。

福音か……。

？誰がために鐘は鳴る？。

へミングウェイの小説の名が不意に頭をよぎる。

作戦変更を不備から知らされずに、無意味な作戦にひん死の重傷を負いながらも死に臨んでいく主人公。

もちろんこの作戦が無意味だとは言わない。

でもなぜか、志穂音には一夏がその主人公と重なって見えていた。志穂音は、はぁッと息を吐くとかぶりを振って考えを振り払う。

やめやめ……。

縁起でもない……。

そう………。

縁起でもない

。

第42話 白の衝突 紫の乱入 銀色の暴走 (後書き)

次回いよいよ福音戦が始まります。

主役登場はもう少し後ですね。

あと、全く関係ないですが、急に冷え込みましたからお身体にはお気を付けてくださいね。

では失礼します。

第43話？ 銀色？がもたらす絶望と？ 赤？がもたらす？ 紅き？希望？

『？白式？及び？ブルーティアーズ？射出ポイントまで距離約五千』

「分かったわ。千五百を切ったら前進微速まで落として。ポイントが下手にずれても厄介だから」

『了解です』

ブツと通信が切れ、恵は息を吐いて視線をへ動かす。

そこにはハンガーに固定された二機のISを調整するリリース達技術者、サブメンバーとして乗艦したラウラとシャルロットそして操縦者である一夏とセシリアがいた。

機体は主にエネルギー配分、セシリアはとにかく急ピッチで高機動パッケージ？ストライクガンナー？のコア着床作業が進められている。

ちなみにラウラは、軍人故の経験豊富さそしてシャルロットはオーラルラウンドにそつなくこなせる技量を持ち合わせているとの理由でサブメンバーに選出されている。

恵は何気なくその状景を見ていたが、やはり部下が気になるようで自然とその目はリリースを追っていた。

「ここは、まだちょっと削れますね」

「え？ でもここまでやっちゃうとシールド分が紙以下になっちゃいそうなんですけど…」

「だったらスラストに振り過ぎてるエネルギーの余剰分を回しちゃいましょう」

「あ、なるほどそうか…」

「もう少しスラスタの出力を上げられませんか？」

「？ストライクガンナー？の出力総計はかなりのものですよ？」

これ以上。上げることはできなくないですけどかなりピーキーになつちゃう可能性が有りますね」

「ですがスピードが命の作戦ではありませんか？」

「だからって扱いきれない速さはかえって足かせですよ」

「ですけどッ」

なんかこう……リリースがテキパキ動いていると違和感があるわね。

とても浮上の度に酔って目を回しているとは思えない。

まあそれだけ、真剣なのだから良い事だ。

自分もそう言う事を考えられていると言う事は、それほど変に緊張していないと言うことなのだろう。

しかし気になるのはセシリアで、先ほどのリリースの意見を聞いてもなお食い下がっている。

その姿は緊張といったものというよりはかなり切羽詰まって、自分を変に追いこんでいるようにも見えた。

恵はハンガーの傍に歩み寄ると？白式？のエネルギー配分をモニタリングしていたシャルロットに声をかけた。

「ねえ、シャルロットちゃん」

「はい？」

「セシリアちゃん……どう思う？」

その問いにシャルロットは、複雑な表情を浮かべセシリアを見る。当然と言えば当然だろうがやはり恵以上に、セシリアの今の姿が気になっていったようだ。

「かなり……無理はしていると思います…ね」

「やっぱり、そうよね」

「きつと、アルデイがあんな事になっちゃったし……それを気にしてて。」

で、多分旅館でのブリーフィングの時に鈴が思わず言っちゃったことでそれを抑えられなくなっちゃったんでしょうね」

「……そう……」

アルデイとセシリアの関係は聡也から聞いて知っていた。

あの暴走事件の事も。

そして、不意に口を吐いて出てしまった鈴の？これこそアルデイが適任の相手じゃんツ？という台詞がキカツケになって、アルデイが居ないのならば自分がその代わりをしなければと考えたのだろう。その気持ちはよく分かる。

分かるのだが……。

「でも……結構危険よね、そういう心理状況での出撃って……」

「それはそうですね。僕だって変われたら変わりたいですよ……。あんなセシリア見ててつらいですから。」

でも僕のリヴァイヴじゃどうやっても推力が足りないし、現状では専用のパッケージ装備も無い……。

物理的にそして作戦的にも、セシリア以上の適任が居ないのも事実。…なんだか歯がゆいですね」

選択肢無し……か。

恵は、再度セシリアを見やる。

一撃必殺の威力を秘めたISは燃費が極端に悪く、もう片方は心理的に不安定。

こりゃ、ちよつと……いや…かなり厳しくなりそうね。

嫌な予想ほど立ちやすいとは何とも情けない話だが恵は今、そんな事を考えることしかできなかった。

『ランデブーポイント予測地点到達。機関停止カタパルトスタンバイッ！』

艦内放送がセシリアの耳に届き、同時にそれが作戦開始を告げるものだと言つ事を理解する。

既に一夏は、？ブルーティーズ？の背部に増設された？^{テーブル}射出台？でスタンバイ済みだった。

「いい、セシリアちゃん、一夏君。会敵までは絶対に？白式？のラストーは開かないこと。セシリアちゃんは、分かっているとと思うけど一夏君が飛び出したら速やかに？^{テーブル}射出台？をパージして、分かっただ？」

モニター越しの一条博士の声に二人は同時に頷く。

それを見て、カタパルト付近から技術者達が退避する。

「頼むぜ、セシリア」

「お任せください。絶対に成功させてみせますわッ」

そう、そうだ。成功させなければならぬ。

アルデイが居ない今、自分がやらなければ。

『準備は良いわね？』

「いつでも大丈夫ですわ」

「俺も大丈夫です……」

『……気をつけてね……それじゃ始めて頂戴』

通信が切れガガンツという音と共にリニアカタパルトが稼働する。

そしてそれに伴って、ハッチ内に次々とオペレーターの声が響いた。

『リニアカタパルトオンライン。システムオールグリーン。磁場形リニ

アフーストステータス
成射出推力値クリア』

『ハッチ解放。射出進路本艦基軸に十二時・射出角+九十度』
トゥエルヴクロック トゥ・ハイ

ハッチが開き、雲ひとつない青空が目の前に開ける。

この先にいるのだ……。

絶対に止めて見せますッ！！

『進路クリア、発進どうぞッ！！』

「？ブルーティアーズ？セシリア・オルコット……行きますわッ
！！」

リニアレールの生み出すとつもない射出推力が一気に？ブルーティアーズ？を空高くまでに押し上げ、その速度を落とすまいとビットの攻撃システムさえも捨てスラスター分に回した高機動パツケージ？ストライクガンナー？の強大な推力が？白式？という荷物を乗せた状態にもかかわらず更に速度を増してゆく。

そして頭部に増設された？ブリリアント・クリアランス？が時速五〇〇キロを超える超高速の世界の情報をセシリアに伝える。

そしてそのバイザーセンサーが肉眼では米粒以下の大きさの機影をとらえた。

「見つけましたわッ！ 一夏さん準備をッ」

「ああ、一発で決めてやるッ！！」

そこに恵からの通信も入った。

『タイミングは正確にッ。一夏君、スラスター全開までマイナス八秒！』

「了解ッ！！」

七…六…五…四…三…二…一…

「今ッ！！」

「オオオオオオオッ！！！！」

一夏が？零落白夜？を発動と同時に？イグニッションブースト？で射出台？から飛び出す。

そしてセシリアも、？射出台？をパージし？ストライクガンナー？専用装備の大型レーザーライフル？スターダスト・シューター？で一夏の突撃を援護する。

（ 行きましたわ

ッ

そう思った次の瞬間、？福音？が一夏の方向を超高速で飛行しながらグリーンッと振り返る。

「何ッ！？」

「っく、まさかここまでの音速機動が取れるとはッ！」

『敵機二機確認…迎撃モードスタンバイ』

低く短い機械的な声が二人の耳に届く。

一夏は、一瞬迷ったがこの間合い。下手に引けば攻撃をもろに食らってしまう。

このまま押し切るッ

!!

一夏は？雪片？をそのまま振るッ。直撃はせずとも避けられはしない。

そう踏んでの事だったが、？福音？は数ミリ単位の絶妙なスラスタ
ー操作で一夏の刃を避けた。

その姿にスコープ越しのセシリアも驚愕する。

「アレを、避けるんですのねッ」

そしてセシリアは、驚愕と同時に苦虫をかみつぶしたような顔で福音を見ていた。

あれほどまでの、緻密なスラスター操作を受け付ける巨大な？フレキシブルスラスター？を搭載している機体をこの他にも知っていたからだ。

そしてその機体は、今最もセシリアがその身を案じている人物の搭乗機でもあった。

セシリアは、？スターダスト・シューター？で一夏と？福音？の間に割って入る。

福音はすぐさま距離を取るが、セシリアも正確に？スターダスト・シューター？でその動きを制限していく。

「いくら機動性が高いと言っても、避けながらではおつらいでしょうッ！　一夏さんッ」

「ああ任せろッ！」

再び一夏が？福音？に向かって飛ぶ。

しかし？福音？は、セシリアの閃光を避けながらも踊るように一夏

の斬撃を交わしていく。

そのスラスターの使い方は、？あの機体？とは大きく異なるものだったがしかし背部の大型スラスターというだけでセシリアを戸惑わせる。

いけませんわッ、今は集中…集中しなければッ。

今はそう、そんな事を考えてはいけないッ！

セシリアは小刻みにかぶりを振って考えを振り払い、一夏を援護する。

？福音？は回避に特化した飛行を続けていたが、セシリアの援護射撃によつて通常出来る回避行動が出来ないタイミングが出始める。そしてそれこそ一撃を叩きこむ最大級のチャンスだった。

スラスターを開く角度、噴射するタイミング…。

そこにはわずかながら任意の角度へとスラスターを持って行くための？稼働時間？という隙が生まれる。そしてその隙をセシリアは見逃さない。

「貰いましたッ！！」

セシリアの閃光が、？福音？の噴射直前のスラスターを直撃大きくバランスを崩した。

「よし、これで決まりだッ！！」

誰もがそう思った。

避けれる角度では無い。

そして何より、相手は攻撃できない。

終わった、作戦は成功したと…。

しかし

。

福音は、バランスを崩しながらもスラスタを大きくバツと左右に広げる。

そして次の瞬間、？福音？は装甲の一部を開いた。

「あ、アレはっ！！！！」

「砲口かッ！！！！」

一夏はすぐさま攻撃をやめその場を離れる。
そしてその直後、その場を幾重もの光の翼が襲っていた。

「なんて連射速度だッ！」

「広域せん滅は伊達では無いと言う事ですねッ！」

更に？福音？は体勢を立て直すと、その場で一回転してその翼をまき散らす。

高密度に圧縮された翼は、防御したシールドに突き刺さり爆散していく。

と、急に一夏が？福音？と真逆の海の方へ？イグニッションブースト？で飛んでいく。

「一夏さんッ！？」

「くそッ、海上封鎖はしたんじゃねえのかよ……………まさか密漁船かッ！！！！」

「なんですつて!?!」

『密漁船はこちらでカバーするわ。予測射線上に艦を回してッ、急いでッ!?!』

一夏はシールドで翼を防ぎ恵は、?戦?の陰に密漁船を隠し射線を塞いで密漁船を守る。

しかし状況はそれでも最悪だ。

この状況でもう一つ守らねばならぬものが出来るなど。

だが相手はそんな事お構いなしに更に翼をまき散らしてくる。

そしてそれが終わると今度は翼を前方に展開し、収束砲の体勢に入った。

その瞬間、その姿が彼の…?ストライク・バーディ?の?ヘヴィ・ハンマー?の攻撃態勢とダブる。

つく、この機体ッ!!

セシリアは、思わず?スターダスト・シューター?のグリップを握る手に力が入った。

あの機体に似ていたら気が済むのかッ!!

この場で冷静さを失う事が何を意味するのか、そんな事が分からないセシリアでは無い。

しかし…でももう限界だった。

あの翼をこれ以上見てなどいられなかった。

「あなたは、どこまでッ!?!」

セシリアは丁度開いた装甲目掛けて?スターダスト・シューター?

を連射する。

?スターダスト・シューター?の直撃を受けスラスターから火を噴く?福音?。

だが……この時すべきはそんな事では無い。

この時すべきはそう……。

?福音?の翼を破壊する事ではなく、?福音自体にダメージを与え機体全体を崩す?事。

「

あ

」

そして我に返ったセシリアが次の瞬間見た物は……………。

もう片方の翼から、放たれた収束砲の一撃によって機体をえぐられた一夏が海へと落ちその閃光が？戦？の船主部分に直撃し爆散する姿。

そして気がつけば？福音？も既にその場にはいなかった。

その事はセシリアに作戦の失敗という事実だけ突きつけていた。

「ラウラだ、？白式？を発見した。シャルロット手伝ってくれ」

『分かった！ 今そっちに行くよ』

ラウラとシャルロットは、福音が離脱した後帰還したセシリアと入れ替わるように？戦？を飛び出し一夏の捜索を行っていた。

サブメンバーとしては、こう言った行動自体は間違っていないのだが出来れば自分達が出ずに終わればそれが一番だ。

セシリア……一夏…。

シャルロットは心の中で二人の名前を唱える。

一夏はまだその姿を見ていないから、そしてセシリアはその姿を見たからこそ心配になる。

シャルロットはチラッと？戦？を一瞥してからラウラに合流すべく更にスラスターを噴かすのだった。

「……酷い……」

シャルロットはラウラが抱きかかえていた一夏を見てそう言葉を漏らした。

一夏は、直撃の瞬間に身体の前面よりは、致命的になりにくくそしてスラスターなど比較的障害物の多い背部で？福音？の攻撃を受けたようで、背中のISスーツは耐熱耐火性であるにもかかわらず大きく割け、露出した皮膚も火傷が酷い。

逆に言えばISの絶対防御を持つとしても防ぎきれないほどに？福音？の攻撃がすさまじかったと言う事だ。

「と、とにかく運ばっつッ」

「ああ…そうだな…」

ラウラは、沈んだ低い声で短く返し共に？戦？を目指した。

一夏を見るその目は、これまでシャルロットが見てきたどのラウラ

の目よりも勢いのない弱弱しいものだった。

？戦？の艦内に設けられた一室。

その部屋の扉を閉めた直後セシリアは膝から崩れ落ちた。

正直こんな状態でよくここまで歩いてこれたと思う。

……無様……ですわね……。

今回の作戦が失敗した原因の一つを作ってしまったセシリアは自嘲気味に笑うとその身を壁に預けた。

後頭部から、ひんやりとした鋼鉄の冷たさが伝わってくる。

それと同時にようやく頭が冷めてきたのか、一気に後悔と自責そして悔しさがこみ上げる。

自分がやらなければならなかったのに。

アルデイが出来ないのなら、それをするのは自分の役目なのに……

セシリアの中では、本来ならアルデイへの土産話にでもなるはずの事だった。

だが今思うとそれが自分の足かせとなってしまうていたのかもしれない。

彼のために……。その思いがいつしかセシリアの正常な思考を奪い、冷静な判断を阻害してしまっていた。

少しの心構えのズレが、結果としてこれほどの事態を引き起こしてしまった。

だがいくらたられればを言おうとも、一夏が落とされてしまった事實は覆りようが無い。

日本では後の祭りとか、後悔先に立たずとか言っただろうか。本当によく言っただものですね…。

そこまで考えてセシリアは、糸の切れた人形のように旅館に着くまでその場を一步も動かず静かに……ただ静かに、冷たい鋼鉄の壁に身を預けていた。

時刻は午後四時半を回ったところ。

いくら日照時間が長くなってきたとはいえ、まだ少し日が傾くのは早いようでビーチと海をオレンジ色に染め上げる。

沖合には船主部分に大穴を開けた？戦？が停泊しその周りを数隻の機材を積んだボートが囲んでいた。

それを低い塀の上に腰かけてロゼオと箒が眺めていた。

箒はロツソに思い切り鳩尾に決められ気を失っていたが、作戦中に

目を覚まし大方の説明を麻耶に聞かされ失敗の報告を受けた時は言葉
葉を失っていた。
そして帰還した？戦？から搬送されていく一夏を見た時、思わず崩
れ落ちそうになっていた。

その後少し時間をおいて、落ち着いたところでロゼオが箒をここへ
呼び出したのだ。

ザザアン・・・ザザアンと波が打ち寄せる音だけが響くビーチ。
そしてようやく、その静けさを打ち消すようにロゼオが意を決して
口を開いた。

「いきなり……呼び出してごめん」

「いや……別にそれは何とも思っていない。それに……」

「……それに……何？」

「私も一度、お前とは話さなければならぬと思っていたんだ」

「え？」

ロゼオは予想外の言葉に、目を丸くする。
そんなロゼオを見て箒はフツと笑った。

「そんなに驚く事か？」

「……もう少し怒っていると思ってたからね……」

「まあ、あの時は、少なからずは……な。だが最後ロツソに言われ
て目が覚めてから少し考えた……」

「……そうなんだ……」

箒はああと短くかえして視線を海の方へと向けそして風になびく髪
を手で押さえながら言った。

「私は……正直あの作戦にどんな形であれ選出されなくて良かった。きつと私が選ばれていたら……私が今度はセシリアになっていただろう……」

「……選出されると思っていたの？……」

「姉さんの性格を考えれば、あながちあり得ない話では無いさ。あの人は無理やり世界を自分に合わせてしまった人物だからな」

「……」

「きつとあの場に、私がいれば？紅椿？の性能を盾に無理やり私を作戦メンバーにねじ込んでいたさ」

篠ノ之 束。彼女はこんなところで紹介するまでも無いほどの人物だった。

ISを作り世界の常識を変え、自らの意思にそぐわないものでも無理やりそぐわせてしまう。

それでいて、後先考えず自分の欲求のままに動くのだから性質が悪い。

ロゼオは自分の考えを話し始めた幕に気付かれなくらい小さな声でロツソを呼んだ。

今ならばロツソが話をしても別段こじれるような事にはならないだろうと思っただからだ。

だがロツソの返事はそっけないものだった。

「……ねえロツソ変わる？」

『いや……いい。ここで聞いている』

「そう……」

『あたしのこたあどうだつていいから、幕の話聞いてやれって』

ロゼオは小さく頷くと幕の話に再び耳を傾けた。

「だから、そうだな……。感謝している……。という言い方はおかしいのかもしれないが、あの場に自分が居なかった事は個人的によかったと思っっているんだ……。前なら恐らくこんなふうに考えることなど出来なかったのだろうが…色々考えて…、今はそう思う」

妙に？今？という言葉を強調した様に聞こえたロゼオはそこまで聞いて口を挟む。

「ねえ……。今ってことは前までどう考えてたの？」

「……そうだな。ただがむしゃらに力を追っていただけなのかもしれないな」

「力を？」

「ああ……。そうだ。仲間を守りたい……。いや、違うなこれは口実だ。多分何もできなかった自分がただただ悔しくて、惨めで……。だから、それだけの理由で力を求めていたのかもしれない」

どうにも力を持つと筈は、それを抑えられない。その力を使ってみなくなる。

それまで漠然とだが考えていた理由が力を持つとどこかに素っ飛んで行ってしまつて…。

そこにいるのはただ力を使いたいと言う欲求のみが存在する抑えの効かなくなつた自分。

考えてみるとそれはとてつもなく危険で、脆いものだろう。

「だが、ロツソに言われて分かつたんだ。その力は誰かに認められて得たもの何かといわれて…。

答えはノーだ。誰にも認められてなどいない。ただ欲しかったから得ただけのそんな力。そんな力に何が守れる？ ……そう思うと本当に

……今まで変に焦っていた自分が馬鹿らしく思えてくる」

自嘲的な内容にもかかわらず箒の顔は、とても晴れやかだった。箒は塀からスタッと降りると、伸びをして座ったままで縮こまってしまっていた筋肉を伸ばす。

そして、ロゼオを振り返ると迷いのない目ではつきりと口にした。

「ロゼオ……私はお前の……いやお前たちのおかげで、自分がどうするべきか……どうあるべきかを考える事が出来た。そしてまだまだ正解には程遠いかもしれないがその答えも出せた。本当に……ありがとう」

「……………うん……………」

ロゼオもそれに力強く頷く。

そしてロツソも、ロゼオの深層意識下でその言葉を聞いてしつかりと頷き、口元を緩めた。

それを見た箒は、両方の腰に手を当てて仁王立ちすると、よしッ！と声を上げる。

その理由が分からず首をかしげるロゼオの手を箒は引いた。

「行くぞッ！」

「……………え？ あの……………ど、どこへ!？」

「ふんッ、あのズーンとマリアナ海溝よりも深く沈んだあいつらを叩き起こしにだッ!！」

「ええ!？ ……いや……でも彼ががああなったんじゃ……それも仕方ない……………」

「あの一夏はかめのがそう易々とくたばるものかッ!！」

さ、さつきボロボロ一夏の姿を見て崩れそうになった人物の言葉とは思えない……………ッ。

『良いんじゃないかねえか？ 心境の変化って大事だぜ?』

いや……もはや変化してレベルを超えているような……。

『或いは、これが成長ってやつかもな？』

成長……なのかな……。

そんな掛け合いをしていることなど知る由もない篤は、ロゼオの手を引き走る。

確かに最初一夏を見た時は、あまりの酷さに崩れ落ちそうになった。前までの自分ならばきつと、自分はここでも変に焦ったり喚き散らしている事だろう。

だが不思議と、心配はしていなかった。

どうやら私は、焦りのあまり一番大事な事さえ見落としてしまっていたらしい。そしてその一番大事な事こそ篤が導き出した答えでもあった。

それは

信じると言う事。

私は信じる。

ロツソが示してくれた道を。

自分自身が決めた答えを。

ボロボロで目も覚まさない一夏を。

そして

この？力？を。

皆を守るための力。

皆と共に闘う力を。

もう私は迷わない。

たとえ迷っても、自分に道を示してくれる者がいる事に気づけたから。

だから迷うぐらいなら進もう、前にッ。

一歩を踏み出さなければ何も変わらない。

その事を皆にも伝えるのだ。

鈴、ラウラ、シャルロット、そしてセシリア

下を向いている時間など私たちには無い！

今こそ上へと羽ばたかねばならないのだ、私たちはッ

グッと見据えたその目は一点の曇りの無く澄んでいる。

答えを見つけた、一人の剣士が本当の意味で空へ羽ばたこうと、その翼をゆっくりと広げ始めていた。

第43話？？銀色？がもたらす絶望と？赤？がもたらす？紅き？希望？（後書き

福音第一ラウンド終了。

そしてお気づきかと思いますが本編では殴られ鈴に叩きおこされる
篤さんが今回は皆を叩き起こす役。

正直篤さんほど人を叩き直せるのに適任は居ないと思うのですよ。

ではまた44話でお会いしましょう！

第44話 希望は舞いあがる

「ええ、暴走ツ？ それで……ええ、ええ……そう。分かったわ。うん連絡ありがとう……」
アメリカ合衆国立代表候補生選定委員会。

その一室で社長机のように立派なデスクに腰かける金髪黄金色の瞳をもった女性が受話器を下ろす。
服装は、ローラが着用していた物とよく似た青色を基調とした制服。首元にはエンジ色のネクタイを締め
セミタイトスカートを着る。
座っていても整ったプロポーションはモデルと言っても通用するレベルであった。

女性は、大きいため息を吐き手元にある資料に目を落とすと、いきなりその資料をぐちゃぐちゃと丸めてドアの腋にあるごみ箱へと放り投げる。

と、そこへ運悪く訪問者が。
更には放り投げた資料は大きく軌道が逸れて……。

「失礼します。お呼びですか？ 選議官ちよ って！」
パカンッ！

「あら、タイミングの悪……良い」
「それは……言い直す必要がありましたか？」
まあ勢いはあったとはいえ、所詮は紙。丸めて放ったがさして大きなダメージは受けまい。

腰かけ、まあまあと笑う女性の名はブラウニー・フェリックス。アメリカの国家代表および代表候補生を選出する専門委員会であるこの？合衆国立代表選定委員会？の議長を務める人物である。

ブラウニーは入ってきた男性を小さな机を囲むように置かれたソファへと促し、自分も相向かいのソファに腰掛ける。

男性はいわゆるアフリカ系アメリカンで少し前の言い方をするならば黒人である。

服装はこの関係者であることを現すように、青を基調としたスーツに首からは入館に必要なパスをぶら下げている。

「それで、一体どんな御用でしょうか？」

「あなたいつも思うけど、もう少し柔らかく話せない？」

「すいません。この話し方が長かった物で」

「とは言ったってね…あたし達夫婦よ？ ライオネル」

そうやってブラウニーは左手の薬指にはめられたエンゲージリングを見せる。

ライオネルは分かっていますよとだけ返し、この話を切り上げた。

ライオネルは別に女尊男卑の世界を皮肉って敬語で話しているわけではなく、彼の言うとおり本当にこの話し方で長くやってきたため結婚しているからという理由で、今さら変えるに変えられないだけなのだ。

だが結婚してから同じ時期に同じ部署に配置転換となったが、やはり昇進速度は、女性の方が早いようでブラウニーが議長にまで上り詰めているにもかかわらずライオネルは地方選定委員どまり。こう言う所では女尊男卑を感じざるをえなかった。

まあそのあたりはあまり気にしていないが。

「はあ……まあ良いわ。で、あなたを読んだ理由だけど」

「はい」

「あなた、今度日本へ行くらしいわね？」

「ええ、それが何か？」

しれっと返すライオネルにブラウニーは、自分の机の上に置かれていた一枚の書類掴む。

そしてそれをライオネルの前にあつた机にバンツと叩きつけた。

「何かじゃないわよッ！！ あなたこの決議に何の回答もしてないじゃないッ！」

「回答も何もありません。私はこの目で見た人物しかスカウトする気はありませんから」

「無いならないで返事を返さないよッ。一方的に自分の候補のパースナルデータ送られても処理に困るわ」

「その程度、出来ない議長でもありますまい？」

「へえ……言っじゃない。……まあ良いわ。そっちがそのつもりならこっちにだつて考えがあるわ」

「考え……？」

ライオネルが怪訝な顔をして首をかしげるとブラウニーはフフンツと鼻を鳴らした。

「そう考え。あなたが気になっているその候補者。見せてもらいましょ？」

「どつという意味です？」

「ついさつき、連絡があつてね。ハワイ沖で稼働実験を行っていた？シルバリオ・ゴスペル？が暴走。その付近で小規模な戦闘があつたみたいなの」

「ええ、それで？」

「あなたも知つての通り、この件に関しては本来軍部が対応する問題であたし達の出番は無いけれど。その操縦者の処遇に関してはあたし達の管轄よ？」

そこまで言うとライオネルも流石に何を言いたいのか分かったようで、苦笑いを浮かべはじめた。その表情を見てブラウニーは更に勢いを増す。

「どの道ナターシャを本国に呼び戻して調書を取るならこつちから出張つてくのも悪くないわよね？」

それにこの件を現在対応しているのはあのIS学園。丁度あなたが気にしてるつて言う候補がいる所じゃなくて？」

「選議…いや…ブラウニー…」

「良いわ、丁度デスクワークも飽き飽きしてた所だし……」

ブラウニーは言うつと立ち上がつて、電話の横にあるインターフォンのボタンを押し秘書につなげた。

「あたしよ、日本行き一便小型機をチャーターして」

『い、今からですか！？』

「当たり前じゃない。すぐやつていいわね」

『あ、あのちよつと議ちよッ』

「ちよッつて切るの流行つてるのね？」

一方的にインターフォンを切るとブラウニーはライオネルを見て笑う。

それを見てライオネルは、降参とばかりに肩をすくませるのだった。

夕日に染まる旅館の通路をラウラは歩いてきた。どこへ行くあてもなくただぶらぶらと。

一夏は今シャルロットが看病している。ラウラもしていたのだが看病とはいえずつと横たわったまま、声一つ発しない一夏と一夏の命の鼓動を伝える電子音だけの部屋の空気に耐える事が出来なかった。

ドイツに居たあのころは、そんな風景など数多く見てきたし耐えられなかったことなど一度も無かったのに。丸くなったのかこれも成長したと言うことなのか。

いずれにしても、一夏の事を考えると胸が締め付けられる思いだった。

目の前に彼は居るのに声をかけても返ってこない。

こんなに怖いことなのだな……。言葉が返ってこないと言うのは。

ISの致命領域対応。

ISのエネルギー全てを防御に回すことで操縦者の命を守る機能だが、それによって一夏はISに深く依存した状態になり、ISのエネルギーが回復するまでその目が覚める事は無い。

知識では知っていてもいざ目の前で、しかも好きな男がそうになってしまうのを見ると命に別条はないと分かってもなお？もしかしたら

…？という考えが首をもたげてしまう。

って何を考えているのだッ。大丈夫に決まっている。

そうだ、大丈夫に決まっている。

私の嫁がそう簡単にくたばってたまるものか…。

……きつと大丈夫……大丈夫だよな？

どうしても上げようとする顔が下を向く。

……一夏……。

自分はどこまでも、一夏やっの前ではただ一人の女の子なのだ改めて思うラウラだった。

とそこへ連絡が入る。

ISのオープンチャネルではなくとても普通に、携帯電話のメールだった。

そのメールには、とある場所へ来いとこの指示が書かれていた。

ラウラはその送信者を見て、目を一瞬細めたがラウラはこの気分がまぎれるのであればとその指示に従う事にした。

ピッ…ピッ…ピッ…

一定のリズムを電子音が刻む。

それが目を覚まさない一夏からの唯一の声。

その？声？に耳を傾けながら横になった一夏をシャルロットは見る。ラウラと交代する時、彼女は「そうか……では頼む……」と低い声でもはつきりと言った。

正直一夏のこんな姿を目の前にラウラはよく、あそこまではつきりと受け答え出来たと思う。

多分僕なら……声になんてならないよ……。

今だってその姿を見ているだけで涙が出てきてしまいそうになる。

大丈夫大丈夫という事は分かっている。

これがISの致命領域対応だと言う事も。だけど……。

見てられないよ……こんな一夏……ッ

シャルロットの知っている一夏は、明るくて優しくて頼りになっ……。

鈍感だけど真剣で……でも無茶して……傷ついて……ッ。

駄目だなあ……明るい事考えようとしてるのに……こう言う時に限って悪いことばかりしか思い出せないや……。

「ううッ……一夏あ……」

そして気がつけばその瞳からは、大粒の涙がこぼれおちていた。

「お願いだから目を開けて……」

「俺は大丈夫だぞって笑って僕に言ってよッ！」

せきを切ってあふれだした涙は、シャルロットの思いと共に外へあふれだす。

「大丈夫だよねッ　このままなんて嫌だからッ!！」

「一夏あッ!！」

返事の返ってこない一夏に向けて思いを叫ぶシャルロット。

そこにあっただのは一国の代表候補生ではなく年相応の少女が見せる好きな人を一心に思い心配する姿だった。

しばらく涙の止まらなかったシャルロットだが、突然携帯のバイブが鳴って慌てて涙をぬぐう。
電話だったら泣いている事を誰かに悟られて余計な心配をかけてしまいかもしれないからだ。

だがそれは電話でもなくメールだった。

「これ……」

シャルロットは、取るに足らないメールなら無視しようと思ったが送信者を見て泣きはらした目を丸くする。

そしてその文面から何かを感じ取ったシャルロットは一夏を振り返り優しく声をかける。

「……ごめん一夏……ちょっと大事な用みただから行ってくるね」

シャルロットはそう言い残して、旅館の一室を後にした。

全く……。

ああ〜イライラするわねえッ！

鈴は誰もいない自室で窓枠に寄りかかって夕日を見ていた。

志穂音がいたようだ。が帰ってくる。と同時に入れ違いで部屋を飛び出していった。

作戦メンバーに選ばれなかった鈴は、一夏が撃墜されたのを？風花の間？のモニターで見っていた。

その光景に誰もが言葉を失う中、鈴は誰よりも先にその場を後にしていた。

大体何やってんのよあいつはッ！！

あんな船一隻に構って、自分が落とされたら意味ないでしょうがッ

!!

あ~~~~イライラするッ!!!

と？風花の間？を後にしてからずっとイライラしっぱなしなのだ。

一夏を落としたあの？福音？に対して

あんなところにいる密漁船に対して。

そして何より……

何もできなかった自分に対して

鈴にだって分かっている、あの時一夏はああするしかなかったとい
うことぐらいい。

作戦とは最悪の事を想定して立てられるものだが、実際最悪という物はえてして想像の斜め上をカッとんで行くものだ。

海上封鎖それもISによる嚴重な体勢が敷かれていると聞けば、普通密漁船であつてもその海域にいるかもしれないという予想など立てられるはずもない。

だからあの時一夏は、自分に出来る最大限の事をしたにすぎなかつた。

そんな事は分かっている。

だから腹が立つ。

なぜ自分は誰よりも先にあの部屋を出てしまったのか。

一夏を発見したという報告だつて、帰還したラウラ達から聞いたのだ。

どうして、向き合えなかつたのか。

なぜ逃げてしまったのかッ!!

しかもあの中では千冬に次いで一夏との付き合いが長かつたこの自分ガッ

あたしは…卑怯だッ。

あの時何も見たくなかつた。

見るのが怖かつた。

だから逃げたのだ。

この苛立ちだって結局一夏の事を变に暗く考えないために自分に自分で八つ当たりしているだけかも知れない。

「ハハツ……我ながらサイテーね……」

乾いた笑いをもらし、窓際に置いてあつたソファに座る。

……一夏……。

苛立ちはまだ消えないが、その名前を繰り返すたびに鈴はズキンと胸が痛くなつた。

あの馬鹿……そのままくたばつたら承知しないんだからッ！

そう言いつつ、一夏の身を案じるその表情はいつも気丈な代表候補生、鳳・鈴音ではなく、恋する乙女鳳・鈴音だった。

鈴はふと時間を確かめようと、携帯を取り出す。

すると一通のメールが来ている事に気がついた。

……メール？ こんな時に誰よも……。

鈴は携帯をカタカタツと操作し受信ボックスを開く。

そして送信者を見て、眉をひそめる。

それはかなり……いや普通ならばほとんどメールのやり取りをした事のない相手だったからだ。

「ここに来いって……。あの子どついう……」

鈴はとりあえず、小首をかしげながらもその指示に従う事にした。普通ならばこんなメールに従う鈴では無いのだが本当にその送信者が意外な人物だったのだ。

だってそのメールの送信者が、？篠ノ之 箒？だったのだから。

「……………あの……………なんで道場……………？」

「ふん……………まあ黙って見ている」

ロゼオが首をかしげる前で箒は竹刀片手に旅館に併設される形で立っている剣道場の中で仁王立ちをしている。

制服であつたが道場なので靴は履けないため、靴下は脱いでいた。

はつきり言つて何がこれから怒るのかロゼオでもよく分からない。ただ手を引つ張られてここまで連れてこられた拳句、道場で正座させられているのだから。

確か箒は？ふんツ、あのズーンとマリアナ海溝よりも深く沈んだあいつらを叩き起こしにだツ！！？と言つて走りだしたはず。

それが携帯で三人を呼び出してそして何故道場なのか。

全く話が見えない。

箒はどこからともなく携帯を取り出して時間を確認する。

「ふむ……そろそろ来るはずだが……」

「だから……何が？」

「いいから黙って」

箒がそう言いかけた時、道場の玄関が開く音がする。

その音を聞いて箒がニヤリと笑った。

「来たか！」

「……まあ来たが……」

「一体……」

「何の用なのよッ！」

まあそりゃそうだろうとロゼオは三人に心の中で賛同する。

そんな三人に箒はスツと一本ずつ竹刀を手渡していく。

「む？ おい箒これは一体どういづもりなのだ？」

「そうだよ、今はこんな事している場合じゃないよ」

「あんた何？ 狂ったの？」

手渡された竹刀をまじまじと見ながら三人が口々に疑問を声に出す。

しかし箒はそんな三人に対し、姿勢を低くして居合の体勢を取ると有無を言わさぬ鋭い踏み込みから、すれ違いざまにラウラには小手、シャルロットは胴そして鈴には面を的確にそして素早く叩きこむ。

篠ノ之剣術流一刀型・居合？瞬罰神雷？。鋭い踏み込みからの抜き打ちによる一閃。

本来は、居合なので集団に使う技ではないが、相手が代表候補生だとしても完全に不意打ちである。油断しきっていた三人に対して動作の流れでの確に攻撃を加えることなど造作も無かった。

「貴様ツ!?!」

「どうした? ……剣を渡されたのだぞ?」

「何を言ってるのさ!」

「油断するなという事だツ!!!」

「あんた本当におかしくなっちゃったのツ!?!」

「いや私はいたって正常だツ!!!」

箒は再び、三人に迫る。

流石に一撃を入れられた事で、警戒していた三人はそれぞれ竹刀を構える。

いくら剣道を習っていない三人でも代表候補生、筋は良い。

だが箒も剣道で後れをとるわけにはいかない。

ラウラの竹刀を弾くと腹部へ竹刀の柄を叩きこむ。

「ぐうツ!!!」

「どうしたツ、ドイツ軍人はその程度かツ!!!」

「箒ツ!!!」

「甘いツ」

そこへシャルロットが、竹刀を横薙ぎに払い胸を狙う。だがそれをバックステップで躲すと箒は自分の竹刀をシャルロットの小手に決め竹刀ごと吹き飛ばした。

「うわあああツ!」

一瞬の攻防で二人を行動不能にした箒は、鈴をキツと睨む。

そしてまた鈴も箒をもの凄いで睨んでいた。

「……あんたね……」

「来い……鈴ッ」

鈴が弾かれたように、箒へと飛ぶ。

そして思い切り竹刀を上段から振り下ろした。

それを箒も真正面から受け止める。

「何がしたいの！！いきなり呼び出したと思えば竹刀でボコッて

ッ！何八つ当たり！？自分が寝てた間に一夏を勝手にメンバー

に選んであんな目にあわせたから！？」

「違うッ！！」

「じゃあなんだってのよッ！」

バシィインッ！！

箒は鈴の竹刀を諸手で弾くと、今度は箒が攻め手にまわる。

箒の鋭い一閃一閃が、鈴を襲い鈴はその一閃をなんとか防いでいく。

「確かに私は、寝ていたさッ！その間に一夏があんな事になって

いて確かに悔しい気持ちはあったッ！！」

「やっぱり八つ当たりじゃないのよッ！！いい加減にしてよねッ

！！」

「だが、私は……私はあああッ！！！」

「ッ！？」

箒は鈴の竹刀を剣先で絡め大きく上に弾く。

動きに吐いていけない鈴の手から、竹刀がはじけ飛び道場にカシャ

アアアンツという竹刀の落下音が響いた。

箒はそれを見て、竹刀をゆっくりと床に置いた。

そして腕や腹を押さえる三人に向かって、さっきまでの声とは違う静かなそれでいて決意のこもった声で言う。

「確かに私は、悔しかった……。一夏があんな風になって帰ってきた時倒れてしまいそうだったから……。だが私は同時に悲しかった……。ッ。情けなかったッ!!」
「何が情けなかったって言うのよッ」

鈴の苛立ちのこもった声にも動じず箒はジッと鈴の目を見返して言う。

「……お前たちが一夏に対して持っていた信頼度だ」
「……ッ!?」「」

「うわべだけ、一夏を好きだの嫁だのと言っておきながら、今の前たちは何だ? 全く一夏を信用も信頼もしていない。それでよく心配だと言えたものだなッ!!」

パッシーーンッ!!!

言いきった直後箒の右頬に鋭い痛みを感じる。

だが箒はそれにも臆せず、自分を叩いたシャルロットの手をグッと握る。

「そんな……そんな言い方ないよッ。いくら箒でもそんな言い方は許せないッ!!」

「許せない? 許せないのはこっちの方だッ!」

「えッ!?」

「シャルロット、お前は今そう言われて腹が立ったんだろう、私を叩きたくなるほど許せないのだろうッ!! ラウラもそして鈴も!

そう言われて引き下がれないほどに「夏あじの事が好きなのだろうッ」
「……」

箒は叫ぶ。心のままに。

胸の内をさらけ出すように。

「だったら、どうして下を向くッ！ 何故前を見ないッ！ どうして一夏を信じようとするのだッ！！」

あいつは大丈夫だと、胸を張って言えないッ！！」

箒の声に叫びに、そこに込められた思いに。

ラウラの、シャルロットの、そして鈴の目が大きく見開かれていく。

「今こそ、羽ばたかねばならないんだ私たちはッ。一夏のためにもッ」

「羽ばたく……」

「一夏は、今日まで私たちを守ってくれたッ！」

「僕たちを……」

「ならば、今度は私たちが一夏を守る番だろう！」

「あたし達の……番……」

そっだ……。

きつと。

きつと。

一夏なら……いや一夏だからこそ。
こんな時は絶対に前を向いているはずだ。

そして言うのだ、「お前たちは俺が守る」と。

だから……今度は私たちが言ってやるのだ。

「お前の事は私たちが守る」と

心の内を叫び息も絶え絶えになった箒の荒い吐息が響く道場で、フツと不意に誰かが笑う。

箒はまだ、鼻で笑うのかと言い返すべく顔を上げたがそこにいたのは、もう下など向かずただ上を見て前を見て意志のこもった目でこちらを見やる三人の代表候補生。
そして笑みをこぼしたのは鈴だった。

「フツツ……まさか……あんたに励まされるとはね……」
「全くだ」

「箒……そのごめんね本気で引つ叩いちゃった…」

その姿はもう暗く沈んだ迷いのある表情は見えない。

もうこの場にいる誰もが、自分達が今やるべきことを理解していた。

「皆ッ………」

「確かに、お前の言うとおりだ。嫁を信じる事が出来ていなかったとは……やれやれ私も夫としてはまだまだだな」

「あんたさ……いい加減日本のつてかこの世界の夫婦制度に付いて学べば？」

「そう言えばラウラ、お金の使い方方も知らないって言ってたもんね」
「はぁッ？ あんた良くそれで今日まで生きてこれたわね…」

何気ないこんな普通のやり取りが、今日はいつにもまして心地いい。そんなやり取りを見ていた箒達に、後ろからパチパチと一人拍手が聞こえる。

その拍手に、四人の視線が集まる。その先にいたのはいつの間にか？ハーモニクス？によって人格を入れ替えたロツソ・ミオネッティだった。

「やるじゃねえか、箒」

「なに……お前の助言あつてこそだ」

箒の言葉を聞いてロツソはニッと口角を釣り上げ、箒の傍に立つとパンツと箒の肩を叩き言った。

「これで後はあいつだけだな？」

皆の脳裏にブロンドの少女が思い出される。

きつと今も壊れたおもちゃのように部屋でへたり込んでいるに違いない。

「全く、面倒なの残したわね？」

「フツ…丁度お前たちをメールで読んだ時の私の気持ちこそそれだったな」

「なんですって!？」

「ま、まあまあ…ッ」

「……では行くかッ」

「ああッ！」

箒はラウラの問いにしつかりと答え共に道場を後にする。

正直今のセシリアを立ち直らせるのはかなり難しいと思う。
だが私は迷わない。

たとえそれがいかに困難であっても…。

私は信じた道を突き進むだけなのだから。

……。

セシリアは、たった一人でビーチを歩く。

歩くと言ってもその足取りはフラフラと千鳥足にも似た状態で逆に歩いている事が奇跡だと思っぐらい弱い。

もはや無様を通り越して滑稽である。

何度自分を自嘲したか、何度自分を蔑んだかッ！

もしあの時の自分に会えるのなら、殺してしまいたい。

いつそ、居なくなってしまうえば良い。

こんな自分など……どれほどの価値があるものか……。

セシリアはフラフラとそしてヨタヨタと砂に足を取られながらもビーチを歩いていく。

まるで何かから逃げる様に、ただあてもなくそれでも一心不乱に歩く。

と、急に体勢が大きく崩れるセシリア。

「あっ」

セシリアはドサリッと砂浜に倒れ込む。

受け身すらも取れず、顔から。

本当に……何をやっているのでしょうか私は……。

ジワツと視界がかすむ。

そして気がつけばセシリアは涙を流していた。

悔しくて。
寂しくて。

そして

情けなくて

「ふっ……ううッ……私は……くうッ……ふうッ」

セシリアのこれまで培ってきた自身やプライドが今ガラガラと音お立てて崩れていく。

こんな物……こんな程度なのですか……私はッ……。

……そう……この程度……なのですわね……。

そう考えると、自然ともう何もかもがどうでもよくなってきた。

……なんだかこんな気分……久しぶりですわね……。

あの時は、傍らにアルディが居てくれた。

でも今アルディは、病室で床に伏せている。

もう自分を助けてくれる物など誰もいない。

誰も……居ないのだ。

セシリアは輝きの消えた目で、水平線のかなたを見やる。

自爆でも何でも……道連れでも……アレを落としましょう……。もうそれぐらいしか自分には出来ないのだから。

セシリアはゆっくりと立ち上がり、そして待機状態となってセシリアの耳にピアスとして装着されている？ブルー・ティアーズ？に手を伸ばして。

「随分と、気が急いているようだな？」

その腕をパシッと掴まれた。

「!?!」

「それとも、何もかもどうでもよくなったか…?」

セシリアは驚いてその手の主を見やる。

そこには、自分とは違う強い意志のこもった瞳でこちらを見やる箒の姿があった。

「ほ、箒さん……それに……」

セシリアは箒の後ろに立つ四人の影に視線を移す。

腕を組み、こちらを真つすぐ見つめるラウラ。

心配そうな視線を送るシャルロット。

ため息交じりに頭を掻く鈴。

腰に手を当て、ニィッと笑うロツソ。

そのどれもが今のセシリアにはまぶしすぎた。

何故？

どうしてあなた達は、こんな状況でそんな顔が出来るのですか？

そんな……自信に満ち溢れた……そんな顔を…。

セシリアは箒の目をそして他の四人の目を正面から見返すことが出来なかった。

思わず視線をそらそうとするがその行為を箒の声が止める。

「目をそらすな」

「え……?」

「目をそらしては駄目だ。セシリア」

「…………… 箒さん……………?」

だが言われて出来るぐらいならば初めからしている。出来ないから……………もう……………自分にはそんな目は出来ない。だから目を合わせる事も、どうしてもできなかった。

一度は箒の声で止まった視線の動きも結局そのまま下を向いてしま
う。

箒はセシリアの手を離すと、再び口を開く。

「セシリア……………今あることから……………目をそらしてもそこには何もな
い」

「何も…?」

「そうだ、何も無い。あるのはただ全てから逃げ続ける惨めな自分
だけだ」

「ッ!」

それは……………。

箒の言葉がセシリアの心を射抜く。

箒が言っているのは、まさに今の自分自身だ。

逃げる様にただひたすらに歩き続けた……………この砂まみれで涙を流す
惨めな自分……………。

全てを打ち碎かれ、何もなくなっただちっばけな自分。

だが……………ならどうすればいい?

もう……………何をどう見ればいいのかさえ分からないと言つのに。
こんな無力な自分がどうすればそんな目をする事が出来る?

「ですが……私には……もう何もありません……」

「……何もない？」

「ええ……もう、良いのです……本当に私なん　　ッ!？」

私なんてどうでもいい、そう言おうとしたセシリアはハツとした時にはまた砂浜に倒されていた。

いや……。

砂浜へと殴り飛ばされていた。

ジンジンと鈍痛を繰り返す左頬をさすりながら、セシリアは箒を見上げた。

箒はそれまで以上に厳しい口調と険しい顔でセシリアを睨んでいた。

「それ以上言ってみろッ。今度は殴り飛ばすだけでは済まさんッ!

」!

「ほっ……き……さん？」

箒はセシリアの前に立つとその胸倉をつかんで無理やり立ち上げさせる。

「どうでも良いだと!?　何もないだと!?　よくそんな事がぬけ

ぬけと言えたなッ!」

セシリアの胸倉をつかんだまま大きく前後に揺さぶる箒。

それを見て流石にやり過ぎだと感じたシャルロットが箒を止めようと一歩前に出ようとしたがそれをラウラが首を振りながら制した。

「ラウラ……なんで？」

「アレを立ち直らせるにはこれぐらい必要なのだ……今は箒に任せよ

う

本音でぶつからなければ、分からない事がある。
伝わらない事がある。

それを自分達はついさつき身をもって体験した。

筭の一言一言、その全てが自分たちの中の？何か？を奮い立たせる。
その？何か？を動かす物。

それこそが本音だ。

だから筭は、躊躇しない。

自分が正しいと思つた事を全力でセシリアにぶつけていく。

「何も無い？ あるだろうここにッ！お前にはあるじゃないかッ、
お前をこんなにもしつかりと真剣に見てくれる者達がッ！！」

「しつかりと……見てくれる……？」

「どうでもよくも無いッ！ 本当にそうか？ そうなのか？ なら
お前はあいつが死のうがどうなるうが本当にその一言で片付けてし
まえるのかッ！？」

「片付けて……」

その時セシリアの脳裏に、見たわけでもないのに病院で未だ意識の
戻らない自分の大切な人が浮かぶ。

ちよつと嘘つきだけれど、優しくして。

優柔不断だけどいざという時には怪我也顧みず助けてくれる。

そんな彼が……死んでも……？

……嫌だ。

そんなの嫌…。

片付けられるわけがない。

仕方が無い。どうでもいいと割り切れるわけがないッ。

「まだ……私には……ある……。空っぽじゃないと……」

「ああ、そうだ。お前は空っぽじゃない。何も無いわけじゃない、
どうでもいいわけでもない。お前はまだ立ち上がる」

セシリアの胸倉から手を離し箒はセシリアの傍らに立ち、もう一度
四人の姿を、その目を見せる。

なんてまぶしい目なのだろう。

なんて勢いのある目のなのだろう。

なんて迷いのない目のなのだろう。

そして…。

なんて綺麗な目なだろう。

私にもまだあんな目が出るのだろうか。

「全く手間のかかる奴だ」

あんな目で上を向けるのだろうか。

「大丈夫。僕たちはここにいる」

あんな目で立ち上がれるのだろうか。

「で、あんたがそこに居て」

あんな目でこうして誰かに手を差し伸べられるだろうか。

「立ち止まりそうになったら誰かがきつと手を差し伸べてくれるさ」

そして……そんな目で……大切な物を守れるだろうか。

「ああ、そうだ。セシリア。お前は一人じゃない。私たちが居る。お前を待つ者もいる。だから大丈夫だ。何も迷うことなどないッ！」

今はまだ……しっかりとそんな目で前を見れないかも知れない。

でも……もう……下を向くのはやめよう。

そんな事しても時間の無駄だからッ！

セシリアは、静かに瞳を閉じ細く綺麗な指で流れる一筋の滴をぬぐう。

そしてゆっくりと瞳を開け、今度こそまっすぐ、箒たちのその目を見る。

そこにはもう……迷いの色など無かった。

いつもの自信に満ち溢れたイギリスの麗しきご令嬢がそこに立っていた。

「っ…疲れたッ」

ドサッとビーチのベンチに崩れる箒。

今にもその空いた口から魂が飛んでいきそうなそんな感じだった。

「まあ……そりゃそうだろうなあ……」

ビーチ前からロゼオを引つ張って道場まで走り、その道場では携帯を使って三人を呼び出したと思えば大立ち回り。

シャルロットには叩かれ自分もセシリアをぶん殴った。

これだけのことをほんの一时间そこらで行ったのだから逆に言えば疲れない方がおかしい。

「だが、それも言っていられん」

「どういう事ですか？」

「これを見る」

ラウラはそう言って？ シュヴァルツェア・レーゲン？のモニターを見せた。

そしてそこに写っていた物に一同は驚愕する。

「コレ……ッ……！」

「？福音？じゃねえか！？」

「偶然この付近を飛んでいたロシアの哨戒機A-50が感知した反応から予測地点を割り出してドイツの軍事衛星から光学兵器で捉えたものだ」

「普通の哨戒機が……ISを捉えられるもんなのか？」

ISには完璧なステルス性能がある。

A-50と言えばロシアの早期警戒管制機だが、いくら高性能なレーダーを積んでいたとして従来の兵器である事に変わりはない。

そのロツソの当然の疑問に鈴が答えた。

「いや……ロシア機ならあり得ない話じゃないわよ」

「え？ どういう意味だよ、それ」

「ま、その説明はあとで上げたげる。それよりも今は「うむ、そうだ？福音？だ」

鈴は変に話がそれるのを嫌い、話を区切る。

食い下がろうとしたロツソも間髪いれずにラウラが口を開いたため、追求を断念せざるを得なかった。

そして、今度はセシリアがやや前のめり気味にラウラのモニターを覗き込む

「このポイントは……ここからそこまで遠くはありませんわね……」

「そうだね、ここから大体四十五〜五十つてところかな」

「しかし飛べばすぐだ……な？」

箒がまるで皆に確認するように言う。

もう箒が何を言いたいのかなと言わなくても分かった。

「つたく、やつぱは行くのね」

「まあ、そのためにこのデータを見せたわけだしな。それに本国から専用のパッケージングも届いた」

「皆さんがいかないかと仰つても私は行くつもりでしたし……」

「これって僕たち立派な命令違反だね？」

「っは、今さらそんなの。大体あたし館内待機じゃなかったっけか？ ならもうあたしと箒は初めっから違反だろ」

「そうだな」

箒が立ちあがり、全員が海に向かって一列に並ぶ。そしてゆっくりと各々のISを構えた。

「私はもう下など向かない。そして信じ抜いて見せる」

「僕も、信じる……一夏を……そしてこの力をッ」

「もう私は迷いません……。ただひたすらに前を見て……ッ」

「一夏に笑われたくないしね……。一丁やったるうじゃないッ！」

「へへッ、派手にぶちかましてやるぜッ」

『……うん……』

「全ては……羽ばたくためにッ、前に行くためにッ！！」

ラウラが、シャルロットが、セシリアが、鈴が、ロツソが、そして箒が、一斉にISを起動させる。

少女^{きぼう}たちは夕暮れの空へ舞う。

前に進むために。

そして大切な物を守り抜くために。

「私は……私たちは戦うッ!! その首……洗って待っている!!」

福音ッ!!!

第44話〈希望は舞いあがる〉（後書き）

やっべww

篤さん超男前ww

でも僕はオルコツ党です。

いよいよ第二ラウンドに突入！

そしてようやく待ちに待った彼も帰ってくる！？

あ、それはもう少しだけ先の話ですねw

それでは次回45話でまたお会いしましょう！

では失礼します

第45話 絶望への挑戦

「見つけたッ！」

？リヴァイヴ？のセンサーが海上に浮かぶ銀色の翼を捉えシャルロツトが叫ぶ。

赤子のように膝を抱えその姿はまるで胎児の様であった。

「こちらでも補足したッ、これより？シュヴァルツエア・レーゲン？は砲撃シークエンスへ移行する！」

ラウラの掛け声とともに、バツと先行していた他の五機が散開する。

？シュヴァルツエア・レーゲン？のモニターにターゲットスコープが開き？福音？を長距離ロック。

ガコンツと肩に背負う左右二門の砲がセットされ同時に給弾される。更に、微妙なズレを左目の？ヴォーダン・オージエ？が修正していた。

「ファイアッ！！」

砲戦パッケージ？パンツァーカノーニア？によって増設された二門の八〇口径レールカノン？ブリッツ？がラウラの叫びをかき消し？福音？へ迫る。

そして？福音？がそれに気づき顔を上げた時には二発の鉄隗が直撃。日の落ちた世界に火球を輝かせた。

その瞬間、少女たちの絶望への挑戦が幕を開けた。

「敵機移動開始……距離は……ええい予想以上に早いかッ」

？福音？は超長距離射撃を行ったラウラを瞬時に発見。
強大な推力に物を言わせ一気に接近する。

？パンツァーカノーニア？は一発あたりの攻撃力に主眼を置いたパ
ツケージ。

連射能力に優れた武装は搭載されていない。
それに何よりも八〇口径というとんでもなく巨大な砲を二門も肩に
背負っている。

その反動は通常の？シュヴァルツェア・レーゲン？ではとてもでは
ないが相殺しれず、その分重量が増し機動力をかなり犠牲にしてい
た。

？福音？は加速しながらスラストー前部の砲門を開きラウラに？銀シル
の鐘バベル？の翼よりもさらに小型の？銀シルバール・エッジの欠片？を放つ。

小型といえど高密度に圧縮されたその？欠片？だけでも？シュヴァ
ルツェア・レーゲン？に追加された対砲撃用の物理装甲？強き盾シユタルク・ヴァント？
を削っていく。

ラウラは出来る限りの最大出力で、後退しながら？ブリッツ？を放
つがその全てを？福音？は躲し更に距離が三〇〇を切った辺りから
更に加速する。

？福音？の腕がラウラにもう後少しと迫った時。

？福音？は上空から降り注ぐ？四本のレーザー？に射抜かれた。

「よし、良いぞセシリアッ！」

「借りは返させてもらいますわ」

セシリアは、？ビット？を戻し？スターライトmk-??で動きを制する。

武装から見ても分かるように、今セシリアは高機動パッケージ？ストライクガンナー？を使用していない。

前回の戦闘で福音には高機動に無理やりついていくよりも手数で動きを制限した方が有効であると言う事が分かったからでる。

確かに？スターダスト・シューター？の威力は非常に高く？福音？のスラスターを破壊して見せたものの部類的にはかなり長いレーザーライフルであるし何より連射能力が？スターライトmk-??に比べると劣る。

動きを少しでも制限したいのならば威力が下がっても、連射の効く武装の方が良いに決まっている。

ラウラとセシリアのコンビネーションによって、足を止められる福音。

『敵機警戒度B以上に設定。せん滅兵器を持って対処』

動きを止められた？福音？が強引に翼を開こうとするがそこへ、背後から強い衝撃が襲う。

「それを待ってたんだッ！」

「てめえの翼ッ！ 貰ったぜッ！！」

ステルスモードで接近したシャルロットの援護射撃の陰から？ペルフェッド・エスターテ？が飛び出し？セルペンテモード？になった？テンポラーレ？が翼の左の付け根部分に絡まる。

「おらよッー！」

そしてロツソはスラスター全開で思い切り？テンポラーレ？を引く張る。

付け根の装甲板にギリギリと刃が食いこみ、そしてついに？福音？の片翼をもぎ取った。

更に片側の翼も、シャルロツトの射撃の驟雨によつて、上手くエネルギーをチャージ出来ず？福音？は止むなく砲門を閉じ片方のスラスターだけで器用に舞いあがった。

だが誰一人としてそれを追わない。

本来人が操縦していれば、これに少しでも疑問を持つだろう。しかし今この機体は操縦者を載せてはいるが完全に、機械が制御している。

精密な射撃、そして片翼を失つてもなおバランスを崩さずに飛行できる緻密なスラスター操作。だがそういった少しの事を疑問に思わないのが、機械の弱点でもあった。

「上空には誰も居ないと思つたか？」

「あんたの行動なんて、全て予測済みよッ！！」

月を背負い、そこには紅と黒の機体が待つ。

二人は、ぬけぬけと上空へ離脱してきた？福音？に飛びかかった。

「……全く勝手な事をしてくれるものだ……」

千冬は、モニターを見てため息を吐いた。

あまりの他人行儀な言い方に真耶が声を上げる。

「そんなのん気な……どうするんですか？」

「どうするもこうするも無い。今はただ見届けるしかあるまい」

「でも……」

「それに、覚悟を決めて出て行っただ。今ここで水を差すのも野暮だろう？」

千冬には分かっていた、大体こうなるだろうなという事は。

あのおてんば共が、一夏をやられて黙っているとは考えにくかったからだ。

重大な命令違反だが、だからと言って行くなといって行かぬ連中でもない。

それに……。

ツフ、まあ悪くない目をしている。

千冬は腕を組んでモニターに映る六機のISを見やる。

本当に良い目をしている。

もしかしたら、と……そんな根拠もない希望を千冬に抱かせるほどに。

しばらくモニタリングを続けていた千冬達そのオペレーティングルームへ一人＋一匹のウサギが飛び込んできた。

「織斑先生ツ、ロツソ達が出撃したって話はってうわあッ!？」

「ちーちゃ〜ん。篝ちゃんが戦ってるんだって!？」

束は襖をガラツと開けた聡也の上を、文字通りウサギのように飛び越してきた。

それを見て千冬は、別の意味で頭を抱えた。

「……はあ、お前たちここがどこだかわかってやってるんだろっなあ……」

「それよりロツソ達はッ!？」

「それよりも篝ちゃんだよ、篝ちゃん見せてッ!！」

「ああもう、ちよっと退いてくださいよ篠ノ之博士ッ!」

「うるさいなあ、ちよっとあっち行ってなよ!」

「うるさいってなんですかッ!！」

「本当の事を言っただまだよッッ、束さんはあッ!！」

「ええい、貴様ら少し静かにしろッ!! モニターに頭突っ込まれたいかッ!！」

千冬の一喝。

その威力は素晴らしく、あの束までもが黙りこんだ。

フンッと鼻を鳴らすと背を向けモニターの砲を振り返る千冬。

そして静かに二人に言った。

「一条は山田先生の所へ行け。そこでミオネッティらをモニターリングできる。束はこっちだ。少し聞きたい事があるからな」

「はい」

「分かったよ」

そう短く返事をして、聡也と束がそれぞれ動く。

隣で、興味深そうに篝の映像を見る束に、千冬は単刀直入に尋ねた。

「? 紅椿? といったか。篠ノ之ISは」

「うんそうだよ、篝ちゃんの専用機にしてオーバースペックそして? 白と並び立つ物?」

「一つ聞くが、あの機体は……？展開装甲？を持っているのか？」
「展開装甲？そのキーワードに束がニヤツと笑い、そして聡也がピクッと反応する。」

（展開……装甲？）

「よく分かったねちーちゃん。そうだよ、？雪片式型？の？零落白夜？に搭載されてるシステム。それをIS丸ごと一機、全身のアーマーを展開装甲にしちゃったんだよね。だから本来？紅椿？は、あの？程度？の機体に苦戦する機体じゃないんだ」

「なるほどな……。つまり、篠ノ之は展開装甲を搭載しているとは知らずに使用しているということか……」

束は千冬をつぶやきを聞きクスリと笑う。

「そうだね。まあそれでも、それなりに使いこなせてるのはセンスかな？それに第三世代ISが相手っていったって？紅椿？は第四世代機だからね。遅れを取るわけないよん」

「第四ツ！？」

その言葉に反応したのは、聞き耳を立てていた聡也。
その顔は信じられないと言つ感情に支配されていた。

だが千冬はそれ以上言うのを目で制す。

聡也にもそれは伝わったようで、それ以上の追及はせずモニターに目を落としたがその後でも明らかに動揺しているのはだれの目にも明らかだった。

「……束、またやり過ぎたな？」

「まあ、第四つて言ったって完全に使いこなしての事だからねん。すぐには無理だよ」ととと、篝ちゃんが若干ピクンチツ、ちよつとチャネル借りるよ」

束は千冬達のモニターの通信回線に難なく割り込むと、篝達に通信をつなぐ。

その姿を見て千冬はまた一つ大きいため息を吐くのだった。

「付きましたよ。運賃は……」

「あ、山科兎束あてで付けといてください。請求書はこの住所に送ってください大丈夫ですから」

「分かりました」

タクシードライバーとの短いやり取りを終え志穂音は病院へとやってくる。

目的は一つ、出来上がったデータと？ストライク・ミラージュ？をローラに手渡すためである。

受付で、アルデイが入院している部屋の番号を聞き、エレベーターに乗る。

三〇二二号室そこがアルデイの病室だった。

コンコンツと扉を叩くと、ローラの声がする。

「はい、どちら様？」

「ウチですけど…」

「ああ志穂音ちゃん……どうぞ」

ガララツと扉を開け、志穂音はベッドに近づく。そこにはISスーツから甚平型の病衣に着替えさせられたアルデイが横たわっている。

心電図の機械の音だけが響く部屋。

ローラはあれからまだ一日と経っていないのにとっても疲れた表情をしている。

「アルデイ…まだ目覚めないんですね…」

「まあね……でも命に別条はないから……大丈夫よ」

ローラは微笑もうとするが、上手く笑えない。

結果複雑な顔を志穂音に向ける事になってしまった。

そんなローラに掛ける言葉も見つからない志穂音は、無言でローラに？ストライク・ミラージユ？を手渡す。

ローラはそれをみて、自分がどれほど酷い表情をしているのかという事に気が付き改めて笑顔を作りなおした。

そしてローラは志穂音に右手の人差し指を差し出す。

「ごめんね、左手がこんだから…」

「あ、はい…」

志穂音はその右手にそつと指輪を通しその手にメモリーチップも一緒に置いた。

いくら右手は自由が効くと言っても、怪我が無いわけではない。

指は綺麗だったが手の甲には砲たいが巻かれているのだ。

姉弟そろって……ボロボロだなあ……。

志穂音は双方の姿を見て苦笑いするしかなかった。

病室の隅に置かれた小さなテーブルと椅子。

そこにローラはは腰かける。

志穂音は備え付けの、ポットを使いお茶を淹れてローラの前に置きローラの前に座る。

「それで、どう？」

「大分？ミラージユ？のパーツを使っちゃいましたけど……。あの暴走時とはいえオリジナルのデータが回収できていたのは大きかったです」

「と、言う事は？」

「欠損個所はほぼ完璧に補えたと言う事です」

「やっぱり、あなたに頼んで正解だったわね？」

ローラはお茶をすすり、片目を閉じフツツと笑う。

先ほどまでのぎこちないものと違って会話の中で出たごく自然な笑み。

どうやら自分がきて話し相手になっている事はローラにとっていい気分転換になっているようだった。

しかし、そうは言ってもこの話しに触れずにはいられない。

そう、アルディの事だ。

「だけど、アルデイ……」

「あれからまだ一回も目も覚まさない。心電図の音だけが生きている事を実感させてくれるわ」

「そうですか……」

こればかりはどうしようもない。

ハードが出来てもソフトが無ければシステムは動かない。

どちらが欠けても駄目なのだ。

志穂音はアルデイをチラツと見て席を立つ。

それに釣られてローラもほぼ同時に席を立った。

そのまま志穂音はゆっくりとドアへと歩いていく。

どうしよう……やっぱり言った方がいいんだろうか……。

実は志穂音がここに来た理由はもう一つあった。

それは？福音？の暴走事件の事を伝えるため。

あの織斑 千冬の事である。きつとローラにはその事を伝えていないはずだ。

現にローラはその事に付いて何も話さない。

しかし千冬が何故話さなかったのか連絡をしなかったかに付いてはそんなもの考えなくても分かる。

それを聞けばきつとローラは自分の怪我を推してまでも最前線に立ちとうとするだろう。

アルデイは目を覚まさないが、それでも命に別条はない。

優先すべきがどちらかなど素人でも分かる。

でもだからこそ、志穂音はためらった。

今でさえこうして話すのだって辛いはずのローラにその事を言っ
てこんな怪我をしたローラを結果引つ張り出してしまふのか？

でも……。
言わなかったら言わなかったで……。

取っ手をつかんだまま動かない志穂音にローラは不思議に思い尋ね
る。

「どうしたの、志穂音ちゃん？」

「あ、……いや、なんでも……」

その歯切れの悪さがあだとなりローラは更に追求する。

「本当にどうしたの？」

「その……だから……」

ローラは志穂音の肩を右手で優しく掴むと、視線を合わせる様にか
がみこむ。

そして落ち着かせるように静かに、ゆっくりと尋ねた。

「どうしたの？ 気になる事があるなら言ってくれなきゃ？ ね？」

「あ……」

声をかけられ志穂音は、これまで変に迷っていた自分を責めた。

何自分は、怪我人に気を使わせているのかと。

考え直し志穂音は、息を整えてローラに言った。

「アメリカのIS？シルバリオ・ゴスペル？が暴走して……一夏が……
今第二ラウンドで箒達が戦ってるんだ」

「……なんですって？」

ローラの目つきが変わる。

もはや弱い先ほどのローラでは無い。

それが緊急事態だと言う事とすぐに察し、頭で自分が取るべき行動を探す。

肩から手を離し、立ち上がるその姿はまさに大国アメリカ合衆国を背負って立つ軍人のそれだった。

「あの……ローラさん……」

「志穂音ちゃん……先に言っただけタクシー捕まえてきて、旅館に戻りましょう。私も用意してすぐに追うから」

「だけど怪我が……」

「大丈夫、指示するぐらいだからこんな怪我どうってことないわッ。

ほら、急いで」

「わっわっわッ」

ローラは志穂音の背中を押しながら急かす。

志穂音は何か言おうと、口を開けたがそれを遮るようにドアが閉まる。

……やっぱり言わない方が良かったかな……。

志穂音は少しそんな事を思いつつ、言われた通りタクシーを捕まえるに走った。

遠ざかる志穂音の足音をに耳を澄ませ、ローラはドアの前から離れるとベッドの傍まで移動する。

そしてローラは目覚めぬアルディの頭をそつと撫でながらつぶやく。

「……アルディ、姉さんちょっと用事で行かなきゃいけないから……」

……」

優しく、世界でたった一人の血のつながった弟に語りかける様に。

「あたしが帰って来るころには、きっと目覚めてるわよね？」

返事のない、大切な家族に向けてローラは話す。

「だからその時、ゆっくりと本当の事をお話しましょ」

ローラは名残惜しむようにアルディから手を離しベッドにメモリーチップを置いてドアへと向かう。

そしてドアの前に立ち、まさにドアを開けようとしたところでローラは最後に……と付け加えた。

「けど、もし……もし仮にあたしが帰ってくるずっと前に目が覚めちゃったら……。その時は……。あなた自身の判断で……。？禁断の果実？に手を伸ばすかどうかを決めなさい。そのための鍵はそこに置いておいたから……。それじゃあ……。ね」

そう言い残し今度こそ、ローラは部屋を後にする。

アルディの傍らにそっと置かれたメモリーチップは月の光に照らされて、まるでスポットライトを浴びているかのようにきらめいていた。

「ハアアアアツ!!!」

鈴は近接武器を持たない？福音？へ正面から仕掛けた。
振り下ろした？双天牙月？を？福音？は腕部の装甲で受け止める。

「へえ…結構装甲も固いのねツ、だけどツ!!!」

鈴はこの戦闘にあたって、？甲龍？に機能増幅用のパッケージをインストールしていた。

その名も？崩山？。

？甲龍？最大の特徴でもある？龍砲？をもつ二門増設し、更に不可視の弾丸は赤く熱を帯びたいわゆる？熱殻拡散衝撃砲？となり威力が格段に上がっている。

鈴はその増設された？龍砲？を全門開くと、？福音？に向け至近距離からぶつ放した。

鈴の？双天牙月？によって動きを止められていた？福音？がもろに直撃を受け吹き飛ばす。

「くらえツ!!!」

そこへ紅い影が飛び込んだ。

筈は吹き飛び仰向けとなった？福音？の腹部に？空裂？の一撃を振りおろす。

しかし？福音？は大型のリアスターそして脚部などのスラストーを使用して体勢を整えると筈の太刀を回避する。

ツク!? あそこから立て直すかツ!!!

にしても……この機体、攻撃面においてはスムーズだがかなりエネルギー効率が悪く……。

現在まだ箒は知らないが、？紅椿？の展開装甲は自発展開モードに設定されている。

いわゆる完全オートであり、箒の動きに合わせてISが次の行動を予測し装甲を展開しているため、戦闘行動の効率は良いがエネルギー面はかなりきつくなっていた。

と、箒が一瞬意識をそらしたのを見逃さず？福音？が翼の砲門を解放する。

それは拡散兵器ではなく、一夏を落としたあの？収束砲撃？。

まさか、この間に移動しながらチャージをッ！？

「ッ！？ しまった」

「あんの、馬鹿ッ！！」

「無理をするなシャルロット、鈴ッ！ くそッ！！」

一瞬の気の緩み。

それが真剣勝負において何を意味するかは箒自身が一番よく知っている。

既に光は砲身を離れこちらに迫っている。箒は少しでもダメージを減らそうと？雨月？・？空裂？を前に突き出して腕部装甲で頭部を守る。

とそこへ、いきなり通信で聞き覚えのある声が耳へ飛び込んだ。

『箒ちゃん、自分の前に壁があつてそれが自分を守ってくれるのをイメージしちゃって！』

声が束である事は瞬時に理解できたが、内容までしつかり頭で理解する事が出来無かった。

しかしそれを束が通信で言ったと言う事は少なくともこの現状では悪くは働かないだろう。

自分の前に壁があるのをイメージ!?

よく分らんが……ええい、こうでいいのかッ!!

箒は必死でその状況をイメージする。

すると?紅椿?の展開装甲がそれに反応。

瞬時に前面に強固なシールド装甲が出現し、一夏を一撃で落とした収束砲をいとも簡単に防ぎきる。

「これは……一体……」

『ふいゝ危なかつたあゝ……』

額の汗をぬぐうポーズで束が大げさにリアクションをする。

そしてその隣では、いつもと変わらぬ表情の千冬が立っている。

「あの…これは…」

『箒ちゃん、今のが?紅椿?最大の能力にして基本中の基本?展開装甲?だよん』

「展開……装甲……?」

箒は聞き慣れない言葉に首をかしげる。

そこへ千冬の補足説明が入った。

『第四世代機の目標でもある?パッケージ換装を必要としない万能機?それを可能にした可変装甲展開システム。それが展開装甲だ』

「第……四……？」

『展開装甲を使うには何にでもイメージが必要だからね、その辺は気を付けて』

今でさえ一番進んでいるとされるドイツの？シユヴァルツエア・レ
ーゲン？やこの？福音？でさえ第三世代だと言つのに、第四……。
この？紅椿？が！？

箒は驚きのあまり声が出なかつたが、千冬の声で我に返る。

『篠ノ之、驚くのは分かるが後にしろ。今は戦闘中だろう』

「あ……は、はいッ」

『箒ちゃん、？展開装甲？の制御プログラムOSをたつた今端末か
らそつちに送つちやつたからね。？展開装甲？をセミオートにして、
エネルギー効率優先に。これで少しは燃費は良くなるはずだよ。
まあ後は色々お楽しみ　　でッ！？』

「余計なことは言わんでいい！！」

ゴツと殴られた音がして、千冬が行つたのか通信が切れ、モニター
に？download？の文字が浮かび設定が変更されていく。

それを確認すると箒は再び二刀を構えて？福音？へと向かう。

？福音？は高度を下げ再び一番鈍重なラウラを狙っていた。

「ラウラッ！！」

箒は先ほどの束の言葉を思い出しながら、剣をふるった。

イメージ……イメージだッ！

私はこの相手を切るッ！！

そう強くイメージすると装甲が展開し腕部にスラスタが現れる。

「ふッ！！！！」

筈の鋭い振り抜きとスラスタによって加速された雷のごとき一振り、？福音？を弾き飛ばし弾き飛ばされた？福音？が海を跳ねる。

「ロツソッ！！」

「任せなッ！！」

ロツソは海の上を跳ねて行った福音の翼を掴むとまるでもう牛にまたがるかのようにその背に乗る。

「……マルチスラスタを破壊すればッ……」

「そんな機動も取れねえだろ！」

ロツソは、頭部に接続されたスラスタの装甲板を？パーチエ・デイフェーサ？のバルカン砲で引っぺがすと右手を力いっぱいむき出しになった内部へと叩きこむ。

バギバギッという配管やエネルギーラインが引きちぎれる音がしてロツソの右手が引き抜かれ、掴んだ物をロツソが海へ投げ捨て背中から離れる。

その直後頭部マルチスラスタが火を噴いた。

「ハッハアッ、どうよ！！」

重要なスラスタを一つ失った事で細かな制御が出来なくなり、回避行動を上手く取れない福音に最後と言わんばかりに、射撃の雨が降り注ぐ。

「ここまでみたいだね！」
シャルロットは？ラピッドスイッチ？で？リヴァイヴ？に搭載されている二十もの火器を撃ちまくっていく。

「私たちは止められませんわよッ」
更にそこへセシリアのビットが襲い、メインの背面スラスタも限界が来たのか火を吹き始めた。
「遠慮はいらさないわ、これも貰ったときなさいよッ！」

海面すれすれを飛ぶ福音の正面に躍り出た鈴が？龍砲？の一斉掃射を行う。

その全てが直撃し機体が爆風と衝撃で持ちあげられたその隙間に箒は機体を滑り込ませ二刀で思い切り上空へ切り上げた。

「ふんッ！！ 行ったぞラウラッ」
「ああ、後は任せてもらおう」

もはや生きていくスラスタなど存在せず、綺麗な銀色の装甲は穴だらけとなっていた。

打ち上げられた？福音？はろくに機動すら取れずボロ雑巾のような姿をその場に晒す。

そして上空では既に、ラウラが？ブリッツ？の砲撃体勢となり？福音？へのロツクオンも完了していた。

「私たちの勝ちだッ！！」

そして、最後。打ち上げられた？福音？に超音速で打ち出された大口径の弾丸が直撃し水しぶきをあげて海へと没した。

その姿を確認しながらトドメを受け持ったラウラの所に、一同が集

まってくる。

「ねえ、ちょっとあんたやり過ぎじゃない？」

「いや、そうでもあるまい？」

「まあアレだな、あたしのスラスター破壊が効果的だったな」

「違うよ、ロツソ何見てたの？ 僕の射撃だって」

「全くこれだから……。私の完璧なビットコントロールあつてのとですわ」

「何を言う、私の切り上げだッ」

「あんたらねえ、どう見たってあたしの？ 龍砲？ じゃん」

皆が口々に軽口を言いあう。

勝利を確信して。

後は搭乗者を海から引き揚げればそれで終了だ。
と誰もが思っていた。

しかし……突然

海面が爆せた

「何ッ!？」

ラウラが表情をこわばらせながら叫び一斉に、皆が爆せた海を見る。

「う、嘘でしょ、これってセカンドシフトじゃッ!？」

「冗談きついぜッ!？」

爆せた海は一部が半球上に蒸発し、その中心には綺麗な青白い雷を伴いながら浮かぶ？銀色の装甲をまとった一機のISの姿？

「これ、信じられないよ……」

「こんな…異常なまでの……エネルギー量…初めてみましたわッ!？」

セシリアが、悲鳴にも似た声で叫ぶ。

現に相手を補足している？ブルー・ティアーズ？のハイパーセンサーがあり得ない量のエネルギー量を検出していた。

「……………くそ、まだあるのかッ」

そう……………箒が歯をギリツとかみしめた直後。

『キアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！』

獣の咆哮ともとれるその叫びの後、福音が？消えた。？

「馬鹿なッ！？」

箒は驚愕し、ハイパーセンサーで行方を追う。

しかしハイパーセンサーを持ってしてもその姿を捉える事が出来ない。

「ぐうああああああッ！！」

「ッ！？」

箒はその声に振り返る。

するとそこには既にラウラを行動不能にし、強大なエネルギーの翼を携えた？福音？がこちらを見ていた。

箒にはその綺麗で見惚れそうになる翼が、禍々しく自分たちを絶望へといざなう漆黒の翼のように見えていた。

？福音？はラウラをまるでごみを捨てるかのように投げ捨て、すぐ近くでラウラを助けに入ろうとしたシャルロットをエネルギーの翼

で抱き、驟雨を零距离で浴びせた。

「うあああああッ！！！」

「シャルロットッ！！！」

「こんのおッ！！！」

「まだ落とされたりねえかつ！！！」

二人もの代表候補生を難なく片付けた？福音？に激高した鈴とロッソが向かう。

ロッソは？福音？の右腕に？テンポラーレ？を巻き付け正面を開ける。

そこへ鈴がスラスタ―全開で飛び込む。

「止められるもんならッ！！！」

しかし？福音？は鈴の突き出した？双天牙月？を左手一本で？掴む？と思い切り引き寄せ腹部に蹴りを入れぐるんツと機体を回転させてかかと落としの様な形で海へ叩き落とした。

更に右腕を抑えていたロッソを、単純なパワーで圧倒し？テンポラーレ？を一気に巻き取りその手でロッソの顔面を掴むとギリギリと締めあげながら、？シルバー・ベル？を一転収束モードで撃ち放つ。

悲鳴の一つも挙げられず鈴とロッソもまた、赤子の手をひねるように海に沈められてしまう。

「鈴ッ！！、ロッソ！！！」

「篝さんッ！！ 今自分たちの身の安全を最優先に考えましょう！！！」

「セシリア、だがッ！！！」

そうは言うが、？紅椿？のエネルギーもほとんど残されていない上に自分よりもISの操縦に長ける者たちをあんなに簡単に片づけてしまったのだ。

気を付けてどうにかなるレベルでは無い。

？福音？が次はお前たちだと言わんばかりにこちらを睨みそして次の瞬間には翼をはためかせ一気にこちらに飛んできていた。

終わるのかッ!？

私たちは……。こんなところでッ。
認められるものかッ。だがッ!!

それはセシリアとて同じ気持である。

こんなところで、汚名返上さえ出来ずに終わる？
そんな事認めたくありませんわ……。でもッ!!

目の前には既に絶望が待っている。

この距離だもつどうスラスターを噴かそうが、何をしようが間に合わない。

二人は思わず目を閉じる。

そこに思い出されるのは、互いが思い守りたい人物

。

一夏に

アルに

会いたい

こんなに強く願った事などこれまで一度も無かった…

それは死を覚悟しているからか、もう助からないと、無事では済まないと心が分かっていているからか。

こんな事になるならさっさと思いなど伝えておけばよかった…。

きつともう二度と会えなくなるかもしれない…。

一夏……私はどうやら……お前の敵を取れそうもない……

アル……私……あなたを守りたいといさつき決意を固めたばかり
ですのに……。

本当に……すまない……

本当に……すみません……

そう心で念じかけた時だった。

次の瞬間二人が感じた物、聞いた物は自分たちが砕け海へ落ちる音では無かった。

一つは何かが何かを切り裂く音。そしてもう一つは、一瞬だけ熱くそして大きな爆発音を残していた。

「……な、んだ？」
「……？」

二人はゆっくりと目を開ける。

そして二人は、目撃する。

あの圧倒的な強さを誇っていた？福音？が大きくのけぞり吹き飛ばすその様を。

そして

「ッ……あ……あぁ！」

「……う、うそッ！……こ、こんな……こんな事……ッ」

白き者は肩に剣を構え

青き者は全てを撃ち抜く銃を構える。

「？福音？てめえの相手はッ！！」

「僕たちだッ！！」

そして二人はしかと見た。

今さっき念じ会いたいと願った、強く思ったその人を

第45話 絶望への挑戦 (後書き)

福音戦第二ラウンドの半ば辺りまで話が進み、次は少し短めのを挟む予定ですが長くなるかもしれません (え

まあ重要な所なのでしっかり書きたいと思います。

では次回お会いしましょう

第46話〱似た者同士は白にて笑い蘇る〱（前書き）

アルデイの復活回。

久々に彼女が登場。

いまさらですが、オンリーオリジナル回。

これまで何回そんなのがあったかって呆れ突っ込みは無しで…。
ではどうぞ

第46話 似た者同士は白にて笑い蘇る

真っ白な空間だった。

「……………」

どこののか、説明は出来ないがそこには間違いなく一度来た事があった。

……………あの時の……………。

それは、ラウラとセシリーが闘った学年別トーナメント。

あのときに僕は、突然気を失って、気がつくところんな白い空間にい

た。

だが今いるこの空間はあの時と一つだけ大きく違っていた。

「……………冷えてるね、」

僕は辺りを見渡ししながら腕をクロスさせて両腕を軽く摩る。
凍えそというわけではなくどちらかと言えばひんやりとした冷たい
空気が漂っている。

僕もこの空気で目が覚めたようなものなのだ。

まあそれはいいとして。

そう言えばあの時、僕は一人の少女に会ったはずだ。

底抜けに明るい金髪ポニーテールの少女に…。

と、僕が彼女を探し再び辺りを見渡していると、不意に後ろから声
がした。

「……………やあ、目が覚めたんだね……………おめでと」
「え？」

その声はまさに、僕が探していた少女の声。

だがその声はあまりに不機嫌で、以前会った時とは服装も大きく異なっていた。

デザインは変わっていないが、パーカーも所々敗れ特に右側の服の破れが酷かった。

ジーパンもボロボロで、ダメージジーンズと言い張っても苦しいほど。

そしてスポーツタイプサングラスも上半身と同じように右側が大きく欠け彼女の黄金色の瞳が顔をのぞかせていた。

……っというか、あれ？

どうして僕は今色が…。

「今はね……。ここに居るからさ」

「ッ!？」

「そんな驚く事無いでしょ。ここは言うなればボクの世界なんだからね」

「君の、世界……?」

この何もない真っ白な世界が……君の……世界……。

「悪かったね、何にもなくて…」

彼女はクルッと僕に背を向けるとその場に胡坐を組んで座り込む。

背中もよく見ると服がボロボロで、時折破れたあなから見える素肌にもあざが多く残っていた。

僕は若干気が引けたが、それでも気になり遠慮がちに彼女に尋ねた。

「あ、あの……その怪我……」

「ん？」

またもかなり不機嫌な返答。

しかし彼女はそんな反応をしながらも返事を返してくれた。

「君のお姉さんにね……ったく、思いっきりやってくれちゃってえッ」

「姉さんに？」

「そうだよッ！　まああの時はボクも君の？半身？のみしかコントロールできなかったからね。そこを正確にブレードで一突き……」

「……そうなんだ」

それで服の右側があんなにボロッボロなのね。

僕は気を失っていたが、ぼんやりとだが何が起きたのかは分かっている。

それも多分僕が？ココ？にいるからなのだろう。

「それで、君は姉さんに認めてもらえた？」

「まだだよ……ってなんでそれをッ!？」

「あのね……僕にもあの時の記憶がうつすらあるの……。やたら叫んでたじゃないか認めるとかなんとかって……」

それを聞くと、彼女は驚いた顔から一転してうつむく。

う、ひょっとしてこれは聞いちゃならない事だったかな……。

しばらくの微妙に嫌な（僕的に）沈黙の後、彼女が静かに口を開く。

「……君は……さ。どれだけ叫んでも誰にも相手にされない。誰にも気が付いてもらえない寂しさがわかるかい？」

「え？」

「誰も何も返事してくれない。僕はここにいるのに、その存在すら確かめられないその寂しさ……つらさが分かるかい？」

……それは。

人は、誰かに気が付いてもらえる事で己という物を確認できる。

それが全く知らない相手でも、街中で叫べば？いきなり何だ!??と振り向いてくれる。

気が付いてくれる、見てくれる事で人は人としてそこに存在できる。

だけでもしそれが無ければ？

人は自分を確認できない。

それは言うなれば究極にして極限の？孤独？だ。

「ボクはね。ずっと叫んでたんだ。ここにいてよって。けどどこの誰にも相手にされずその存在すら誰にも気づいてもらえなかった。

……それは丁度……君のお姉さんだよ」

「気付いて……もらえなかった……」

「いや、正確には気付いていたんだろうけど、ボクが何なのかそれが分からなかったってことなんだと思う。人は窺知しがたいものを怖がるらしいからね……」

彼女は努めてサラリと言ったつもりだろうが、その声色には若干の悲しみが含まれている。

そして更にこの場の空気がひんやりとする。

なるほどね……。心が寒い暖かいのと同じような物なんだここは。彼女が楽しければ暖かく寂しければ冷たい。

そして僕がここにいるという事はどんな形であれ僕は彼女の心の中にでもいるということになるのだろうか。

「結局ボクは、君があの時来るまでずっとこの真っ白い空間で一人ぼっちさ。だからあ時は短かったけど……楽しかったな」

「あ……」
だからあの時あんなに暖かくて、彼女も少しはしゃぎ気味だったのか……。

そりゃ……そうだよな。

一人で寂しいって気持ちは……そりゃ深い浅いはあるかもだけど……。
誰だって辛い。

「……まあ、それを今行っても仕方ないんだけどね……多分僕のいつてる気持なんてそうそう分かるもんじゃないだ「分かるよ……わかる」……え？」

「僕……両親を海で亡くしてて。それからしばらくは君と同じ気持ちだったと思う……」

「……言わせてもらっけど、君にはお姉さんがいたじゃないか？」
「うん……けどあの際の僕は……きっと姉さんの事なんて見てなかった……」

僕は知らず知らずのうちに彼女の声を遮って口を開いていた。

思いだされるのはあの海難事故。

父さんと母さんを一度に亡くしたあの悪夢。

あの後僕は姉さんの声なんて届かないほどに自分の殻に閉じこもっていた。

僕にはもう、何も無いって……勝手にそう思ってた。

「……そうなんだね。……ハハッ、ボク達似た者同士だ」
「そうかも……ね」

再び流れる沈黙。

でもその沈黙はどこか、さっきの沈黙とは違っていて不思議と気持ちの良いものだった。
ひんやりとした空気も若干和らいだ気もする。

すると彼女はゆっくりとこっちにやってきて、静かにそしてそつと僕の背中に自分の背中をくっつける。

「ちょ、何ッ!？」

「いいから、じっとしてなよ……」

「いや……だけど……」

「……にはは……心臓の音が早くなってるゾ?」

「あ、当たり前でしょッ!いきなりこんなことされたらッ」

僕はそう言う耐性ってどうか……そのあれだ。

そう言う事の経験がほぼ無いんだからッ。

まあそれに、そもそもしてくるような人もいないしね。

「……………あの……？」

「暖かいね？」

「え？」

「暖かいんだやっぱり……。人の暖かさなんて……ボク初めてだからね」

ニツと笑うその表情は、この行動に深い意味も思惑も何もない事を如実に表していた。

同時に僕は彼女のその言葉を聞いて、本当に……辛かったんだなと思った。

人の暖かささえ知らず、この明るい性格も孤独を紛らわせるためなのかなと思っただら余計に胸が締め付けられる思いだった。

やっぱり僕たちはどうやら。初対面ながらに似た者同士らしい。

「……………さてと……………」

彼女はトンツと反動をつけて僕の背中から離れると、クルッとこっちを向く。

そしてスツと右手を差し出した。

「もう少しお話してたいけどね。ほら時間が無いじゃない？」

「時間？」

「そう、時間。君の大切な大切なお仲間が大ピンチだったさ」

「お仲間？」

「何でも、あの……一夏だっけ？ 彼を落とした相手らしいからね」

そう言つて彼女が握っていた手をゆつくりと開く。

そしてそこにあつたのは、鈍く光る弾丸のネックレス。

もちろんだが、弾丸は以前と同じく真つ二つだ。

「これ……？ ストライク・バーディ？……」

「そそ、君の力だよ？」

「……僕の手……」

僕はネックレスを受け取りそれをじっくりと見つめると、彼女がいきなり質問を投げかけてきた。

「ね、ね……君はさ、その力で何がしたいの？」

「何が？」

「そうさ……気になるじゃんそう言つての？」

何がしたい……。

そんな事、あんまり深く考えた事無かつたけれど……。

僕は左手で握っていたネックレスに目を落とす。

そして少し考えた後、これだと思つ一つの答えを口にした。

「……僕は……もう誰も……大切な人を失いたくないんだ……。力を
使うのならそのためかな？」

「大切な……人ね……。それはやっぱり……」

「うん……あの時の僕は泣くことしかできなくて。拳句の果てには僕よりも辛いはずの父さんと母さんに励まされる始末だった……。無力だったんだ」

思えば自分の殻にこもってしまった時だって、本当は自分の無力さがまた誰かを……姉さんを失ってしまっただけじゃないかって心配だったからなのかもしれない。

だから……何も聞こえないように……聞かないようにして……世界を遮断して……。

だけど……だけど今は違う。

僕にはコレちからがあるんだから。

力は所詮力でしかないのかもしれない。

だけどそれを正しく使う事が出来ればそれは強さになる。
これは僕の持論だけど、間違っていないと思う。

「僕は……だからそのために使うかな」
「……そなんだね。君の？ 答え？ しっかり聞かせてもらったよ」

彼女は笑って言う。しかし僕はそこにフツと寂しさを感じた。
ゆっくりと遠ざかっていく彼女。

またここで、一人孤独に過ごすのか？

人の暖かささえ今さっき知ったというのに？

そんなの……そんなの絶対に……駄目だッ！

僕は彼女を無視し続ける事なんて出来ない。
それがたとえ、間違っていたとしてもだ。
気付けば僕は彼女の手をグツと掴んでいた。

「え、ちょ、何！？ 君はもう行かないと」

「だったら一緒に行こう！」

「ええッ！？ 何言っちゃってんの君！？ あのね僕は君を使って
暴走したんだよ！？」

「だから何だっけ言うんだ！ だったらなおさらだろうッ」

彼女は腕を上下に振って振りほどこうとするが、僕はそれに必死に
しがみついた。

そして自分の思いを彼女にぶつける。

丁度聡也がロツソにしたみたいに。

「君は、姉さんに認められたくないの！？ 自分の存在を誰かに確
かめてほしくないのかいッ」

「……そりゃ確かめたいよッ、だけどそんな人いないッ。君だっけボ
クの事なんてすぐに忘れるッ。そうに決まってるんだ。だって人は
窺知しがたい物を」

「僕は君を認めてるッ！！！ 忘れもしないし無視もしないッ！！」

「ッ！？」

その声は自分が驚くほどに大きく、彼女が驚嘆するに値するほど迫力があつた。

だけどこれが本心。

僕は絶対声も姿も彼女という存在を忘れない。

だけど、それだけじゃつまらない。

そう人生は楽しくいかなきゃ意味が無いのだから。

「僕は君を忘れないし既に君の存在を認めてる……。でも……。そこで終わって良いの？」

君って言う存在が。こんな面白くて楽しい存在がこんなところで終わっても？」

「……」

「知ってもらおうよツ。皆にも世界中に君って存在をツ」

「世界……中に……？」

割れたサングラスからのぞく彼女の目にはうつすらと涙も見える。

「そうさ、そのためにも僕は力を使うツ。さっき言ったよね。僕は大切な人をもう失いたくないって……。それも君も入ってるから」

初対面で、話したのだってほんの少し。

だけどそこには、確かに本心で語り合ってたって言う自信があった。

本心で言いあえば必ず気持ちが届く。

これは僕の体験でもあった。

僕は彼女の手を離して、返答を待つ。

彼女は繋がっていた手を、まじまじと見詰めて考える。
きつと頭の中ではどうすればいいのかって言うのがグルグルと答えを求めて回っているに違いない。

そして一度大きく頷くと、顔を上げる。

サングラスを外しながら涙をぬぐい真つすぐ見据えるその顔にもう、迷いはなかった。

「……君も物好きだね？」

「嘘つきとはよく言われるけどね？」

「じゃあ今までのも嘘？」

「これは本当かな？」

フフツと二人で笑いあう。

そして僕は左手を、彼女は右手をそれぞれ重ね合わせる。

「さあて……時間も無いんだったね？」

「そうだね。急がないと送れちゃうぞ？」

「……オリジナルデータはどこまで？」

「そう言えばさっき、ちまっこいバンダナ少女がメモリーチップを持ってきてたなあ」

「志穂音だッ」

「そのデータを見ない事には何ともねん……」

「そう……」

「うん……」

ゆっくりとネックレスから光があふれだす。

「それじゃ……」

「行きますか？」

そして僕たちは、その光にゆっくりと包まれていった。

あれ、アメリカでも字幕付きでやってるのをネットで見た事があるね。

「だってそれはどうでもよくて。」

「痛がる僕（正確には彼女）を横眼で見ながらそりゃそうかと。」

「……右側ブツ刺されたんだもんね……痛くないわけないよね……。ってというかこの状態だと痛覚まで分断されるらしい。」

刺された痛みは完全に今彼女が感じてくれているおかげで、僕は痛みといっても小傷程度のヒリヒリ感しかなかった。

『と、とにかくIS IS起動しよう』

「あ、そ、そうだね」

僕はチップを手に、痛む身体を引きずって病院の屋上に立つ。そしてネットワークスを見やった。

「……ねえ、これ思っただけだよ。？ストライク・バーディ？ってぶっ壊れたんじゃないっけ？」

『完全破壊までは逝ってないよ。本体が壊れればボクもタダじゃ済まないからね』

「それってどういう事？」

『……まあぶっちゃけちゃうとね。ボク？ストライク・バーディ？の管制意識なんだ。だから本体が壊れればボクも一緒にパー。おわかり？』

「……とりあえず、僕がとんでもないのを引きこんじゃったって言

うのはよく分かったよ」

思わず頭を抱えなくなった。

もう二度と孤独そんなな思いをさせたくないと一緒に行くことと手を取った相手が、いわゆるISに存在すると言われる、意識そのものだったとは……。

僕がそんな事を考えていると彼女に急かされる。

『ホラホラ、急いでって。システムチェックとかもしなきゃいけないだからッ』

「あ、ああ……うん分かった」

僕は久しぶりにグツと、ネックレスに力を込め瞳を閉じる。そして心の中で強く念じる様に叫んだ。

? ……行くところ……バーディツ!?

あの時はここまで行って、結局解除された。

しかし今度は確かな力の奔流を感じながら僕はゆっくりと目を開ける。

機体は、従来の鮮やかな青色の装甲を持つ? ストライク・バーディ? だったが所々の意匠を? ミラージユ? から持ってきているようで腕部には無いはずの近接ブレード? ランディングスパイク? そして姉さんの機体の一部装甲を効果的に流用する事で限定的に? ステルス・ミラージユ? の使用も可能となっていた。

長方形の? ウエボンスクエア? は健在だが、姉さんの機体になかつ

たバイザーはオリジナルデータの欠損を埋め切れていなかったのか、右側の目の部分辺りが大きく割れたままだった。

そして早速チエックに入っていた彼女に意識を持って行く。

『うわっちゃんあ……確かによく直したけど色々つぎはぎだらけだなあ……』

「酷いの？」

『酷かないよ、酷かないんだけれど……ああ……やっぱりプログラムリアクトを使ったんだね』

リアクト？

僕は聞き慣れない言葉に首をかしげる。

それ見て、彼女はため息を吐くと呆れながら説明した。

『プログラムリアクト。正式には？ REACT : Recover
y Extra loss information Action
n Control for Tactics 直訳すると改修
機における重要欠損情報の戦術的運用？つまり失ったボクの情報を
他の機体で補ってるんだよ、今のコレは^{本体}』

「それって……やっぱり問題？」

『そうだね……あのバンダナ少女、かなり頑張ったみたいでね、機
動や通常行動はほとんど支障はないんだけど……』

「だけど？」

彼女は言いにくそうに言葉をそこで切ると、視線を泳がせる。

だが、時間も惜しい。

しばらく言い淀んでいたが、どうやら最終的には？惜しい？という
気持ちで勝ったようで彼女は、ため息交じりに言った。

『……エネルギーバイパスの構築が不安定だから……その……現状
じゃ？ストライク・バーディ？の半分の火力も使えないかも……』
つく、聞くんじゃなかった……。

？ストライク・バーディ？は一にも二にも火力で押し切るのがスタイルの一つ。

そのスタイルを潰してまで、一夏を落としたって言うあの機体と戦えるのか…。

一瞬暗い影が僕の心に忍びよる。
だが僕はその影を、慌てて追い払った。

駄目だ、こんなんじゃッ！
誰ももう矢わないために戦うんだッ！
そう決めたじゃないかッ！！

僕がかぶりを振って迷いを振り切ると、丁度彼女が叫んだ。

『よっし、ひとまずこれでエネルギー面以外はなんとかなるよッ！』
「……分かった、それじゃあ……」
『よし、出ば〜「名前決めようか」……はえ？……』

いや……まあ確かにそういう反応になるのも分かるけど。
……なんかこう……彼女彼女じゃあ……呼びにくいよね。
それにとっさに呼ぶには名前あった方がいいと思わない？

『名前？』

「そう、ふと思ったんだよね。あるのかなって」

『……無いね』

「そう……だったら、僕が君に気づけた記念に名前でも送ろうか」
『名前……』

「どっつ？」

『……ふふッ、まあ勝手にすれば』

彼女は笑ってそっけなく言うが、伝わってくる気持ちはまんざらでもない様子だった。

うーん……そうだなあ……。

ただ、機体名を縮めただけとかはかなり味気ないし……。

何よりも、彼女は今日がスタートライン。

……そう光り輝く太陽のように……きつといつか皆が彼女の名前と存在を知ってくれるように……。

「……よし、決めたッ」

『聞かせてもらおうか？』

「君は今日から……レイだ」

『レイ……レイかあ……ま、ありがたく受け取っておこうかな』

にははつと明るく笑うその姿はまさにレイだ。^光

一通り笑いあい、そして静かな時が行くばかり流れる。

そしてどちらからがともなく、つぶやいた。

「……さあ、行くじ」

洋上を、？福音？の姿を追って飛ぶ。

『反応はあるけど、やっぱり機動力はどっちみちアテになんて出来ないもんねえ』

「それでも出来る限りの速度で飛ばなきゃ」

僕は一旦武装へ回していたエネルギーを遮断し、スラスターにそのエネルギーを回す。

変換効率が極端に悪くちやこつでもしないと出力を上げられない。

焦り、奥歯を噛む。

と、ふと旅館の方向から一本の白い光が高速で飛行しているのを見つけた。

「あれは……」

『……？白式？……なぐる……？セカンドシフト？かあ……』

セカンド……シフトッ

向かう方向が同じならば次第に二機は接近していく。

そしてようやく向こうもこちらに気がついた。

一夏の？白式？はレイが言ったように？セカンドシフト？によって、背面のスラスタは更に大きくそして右手に？雪片？を構え左手は大きなクローに変化していた。

「アルデイ、お前！？」

「君こそ、落とされたんだってね。怪我は大丈夫なのかい？」

「ああ、もう怪我は大丈夫……治ったさ」

『……あゝそういう神秘的な力、ボクにもないかなあ……』

治った……って、そんなバカな！？

僕は一夏の身体を見やる。

一夏がどれほどの怪我をしたかは知らないが、どんなに治癒力の高い人でもこんなに早く傷は癒えたりしない。

………どういう事なんだ？

『ま、ご都合主義って言うかさそう言うやつなんでしょ？ ほんととことんボク達は主人公に向いてないね？』

「そう言う事は、言わない約束で……」

「？ お前どうかしたのか？ 本当に大丈夫なのかよ」

「怪我は痛いけどね……ま、後で説明するさ。それよりも今は……急がないと」

「ああ……だなッ……」

僕たちは再びスラスターに火を入れて暗闇を切り裂いていく。

『居たッ！』

「怪我!？」

『ちつがーうッ!! あそこッ!!』

「アレはッ!!」

遠目から見ても分かる、すさまじい量のエネルギーの翼。

それによって一つまた一つと、光が海に没していく。

そして最後に残った二つの光。

その二機が誰なのか？コア・ネットワーク？を通じてそれはすぐに分かった。

「篝ッ」

「セシリーツ!!」

距離はもうそんなに無いが、？ストライク・バーディ？の速度ではとてもじゃないが間にあわない。

「一夏は、イグニッションブーストで筈をッ。僕はここから狙い打つッ!!」

「どうやら迷ってる暇はねえ……アルディ……一発で決めるよ!？」
「はなからそのつもりさッ!!」

僕は左側の？ウェポンスクエア？を展開。スラスターサポートがスライドし長方形のスラスターの中から？ヘヴィハンマー？が顔をのぞかせる。

『ロックまで待ってッ』

「いいや、ロックなんて待っていられないッ」

僕はチャージの指示を飛ばし、マズルに光が集まり始める。
それにレイは、若干焦りを口にする。

『ちょ、いくら遠くないって言ったってこの距離だよ!？』
言いたい事は分かる。

一夏が吹き飛ばした方向を正確に予測して、その標的に目視で当てるなど普通に考えれば不可能に近い。

「ただ……大切な人を守れるなら、僕はその不可能さえも可能にして見せるッ！」

「大丈夫ッ、目視で……」

「当てるッ！！！！」

刹那大きな衝撃と共に、一筋の閃光が放たれる。

それと同時に僕は、一気に加速。

直撃を確認する必要なんて無い。

アレは当たる。

そう信じ貫いていたから。

そして一夏の斬撃と僕の攻撃によって吹きとんだ？福音？とセシリ
ー達の間には機体を割り込ませて、一夏とほぼ同時に叫んだ。

「？福音？てめえの相手はッ！！」

「？僕たち？だッ！！」

？福音？の姿を間近でまじまじとみたレイが嫌みたっぷり口を開

く。

『ハハンツ？なるほど……？福音コソ？もセカンドシフトかあ。やれやれ…羨ましい限りで…こちらら、ボロボロのつぎはぎなのにね』
「身体もボロボロなんだし……今の僕たちには丁度いいんじゃない？」

『……さあどうだろ』

「だけど、僕たちはこの力で…ッ！」

『うん、そうだねッ』

多分初めてこんな気持ちで、ISに乗っていると思う。

だけど……本当にもう誰も目の前で失いたくないから……。

僕はチラッとセシリーを見る。

セシリーは口元を手で押さえて必死に涙を我慢しているように見えた。

そして海面に視線を移すと、なんとか海面にまでは上がってこれた面々が驚愕の目で僕らを見上げている。

だが、一夏と言葉を交わす筈。

その言葉すらかわせないほど驚くセシリー。

そして傷だらけで僕たちを見上げる鈴、シャルロット、ラウラ、そしてロツソ。

僕は？福音？を改めて睨み直す。

相手もまた、こちらをジッと見据える。

そして僕は、ゆっくりと左手の荷電粒子砲？ファイアーフライ？を構えた。

つぎはぎだろつと何だろつと、その雄姿は今ここにいる誰もがしかと目に見ている。

「……？福音？、この代償は……高くつくよッ！……」

その啖呵が、開始のゴングだった。

第46話 似た者同士は白にて笑い蘇る (後書き)

一夏は割愛。

あくまでこの本編主役はアルディなのでね。

さて次回はアルディとレイ、一夏のほとんど初の本格戦闘シーンが始まります。

どうなる事やら。

ではまたよろしくお願いします。

第47話〜ピース〜

『くっそ、やっぱ直撃でも駄目かッ』

？ヘヴィハンマー？の直撃にも目だった外傷のない福音を見てレイが舌打ちをする。

そして僕もまた同じ事を考えていた。

？ヘヴィハンマー？は？ストライク・バーディ？搭載火砲の中では最高火力を誇る兵装。

それを距離による威力の衰退や？福音？の装甲などを差し引いても、直撃して吹きとんだだけとは……。

この？プロگرامリアクト？によるエネルギー効率の低下は自分が思う以上に悪かった。

顔をゆがませる僕に、突然ラウラから通信が入る。

『アルデイ、お前は後方からの支援に専念しろッ！』

「ラウラ！ 君…ッ」

『今は私よりも敵だッ。 その状態の機体では有効打撃は望めん！』

一夏にひとまず任せ裏方に回れ！！』

「では、私も…ッ！！」

『セシリアは一旦下がるんだ、お前もエネルギー残量がこころもとなかるうッ』

「ですけど……ッ………分かりましたわッ………。アル。お気をつけて……」

セシリーと箒が一旦戦列を離れる。

それにラウラの指摘は間違っていない。

セシリーも箒もエネルギー残量に不安があるだろうし僕だってまと

もにやりあえるような状態じゃない。
最大火力であれでは、落とすどころかダメージを与えられているの
かも怪しい。

出来ない事を嘆くよりも、今はやれる事を……やるしかないッ！

『一夏ッ！！』

「おっッ！」

一夏は返事と同時に？福音？を？雪片？で弾き距離を置く。
そこに僕は正確に攻撃を命中させていく。
すると福音がバツと、翼を広げる。

「まずいアレはッ！！！」

？福音？のデータは粗方レイが見せてくれた。
？ストライク・バーディ？同様に広域せん滅を目的とした特殊射撃
型。
ならばあの翼を広げたという事はッ！！

『？シルバーベル？拡散レベル修正。集束距離補正……』

『まずい、あいつ。あの光の翼を？白式？に集中させるつもりだッ
』！

「一夏ッ！？」

「ッて」

笑っている！？

僕は焦りながら、一夏の名を呼ぶが一夏はニヤツと笑っていた。

「いいぜ、かかってこいよッ!!」

その直後、翼の嵐が一夏日掛けて放たれる。

一夏はそれを確認すると、左手の多機能武装腕を構え叫んだ。

「?雪羅ッ?シールドモードッ!!」

雪羅と呼ばれたそのおおきなクロー部が変形し光の膜が広がると、福音?の翼が消滅してゆく。

『これは……滅茶苦茶だなあ……』

「エネルギーの……消滅…まさか?零落白夜?のシールドかッ!？」

僕とレイは目の前の光景にそれぞれ驚き呆れていた。

だが驚きながらも砲撃体勢で防御の取れない?福音?に射撃を行い弾雨を止める。

そこへ今度は?雪羅?をクローモードにした一夏が飛びこみ、?福音?と共に夜空に火花を散らす。

すると今度は?福音?が近距離に近づかれては厄介と、機動力を生かし距離を取り始める。

『戦術変更……狙撃に切り替え遠距離機動へ移こロングレンジマニューバ　　ッ!?

高速で思考中の?福音?を背後から?ヘヴィハンマー?の一撃が襲う。

「どこに行くつもりだい?」

『逃がさないよ』

「止まって余所見とは……余裕じゃねえかあッ!!!」

そこに一夏の？雪羅？が襲い、？福音？が再び吹きとんだ。

一夏の攻撃によって、？福音？の強大なエネルギーの象徴でもある翼が片翼もがれた。

「おっしや片方、貰いッ」

一夏がガッツポーズをするがそれもつかの間。

すぐにエネルギーの翼は再構築され下の姿をアルディ達に晒す。

その後も何度かチャンスはあったのだが、ことごとく再構築されるりと逃げられてしまう。

「くっそ、またかッ！」

『それよりも、その？雪羅？のクローモードとシールドモードってそんなに多様出来るわけ？』

ごちる、一夏にレイの鋭い声が飛ぶ。

一夏はその声に、苦笑いで返した。

『やっぱりね……そりゃそうか……』

「裏技には代償が付きものってことかな？」

『まあ、そうだろうね』

？白式？は元からかなり燃費の悪い機体だったが、？雪羅？の発現と大型化したスラスタは？白式？の機動性と攻撃力防御力をかなり底上げはしている様だがその分、更にエネルギーを食いつぶすようになってはいるはずである。

そして今回も例にもれず、既に？白式？のエネルギーはレッドゾーン手前まで落ち込んでいることだろう。

もう後撃てて一、二回が限界ってところか。

と、突然？福音？が全スラスタによる？イグニッションブースト

？を行う。

あつという間に両者にあつた距離を詰め一夏を回し蹴りで蹴り飛ばすと、スツと不気味にアルディを見て右腕をゆっくりと引く。

『こんにやるツ！』

だが一撃入れられる前に、レイが？福音？の突き出した右腕を防ぎカウンター気味に僕がガラ空きになった懐へ、至近距離から？ファイアーフライ？をお見舞いする。

威力が低いと言ってもこの距離。

大きく吹き飛ばないまでも、コイツも一緒ならツ！！

しかし

僕が？ヘヴィハンマー？を展開した時だった。

『ツくうツ！！　こんな時にツ』

「レイツ！？」

苦痛にゆがむレイの顔それを見て何が起きているのかはすぐに分かった。

傷口がツ！？

現在自分の身体をレイと綺麗に半分こしている僕は痛覚も分断されている。

そのため僕は、レイの傷口にまで意識が及んでおらず、かなり強引に？ヘヴィハンマー？を展開してしまっていた。

だが痛みには耐えかね思わずかがみこむ僕たちを、実戦福音？が待つてくれるはずもない。

「しまッ！！」

「アルッ！！」

声が届いた時には、？福音？の弾雨が僕たちを貫いていた。

「ああもう…ッ！！」

アルデイが、丁度レイと白い空間で話をしていたころローラたちは、一向に捕まらないタクシーに苛立ちを募らせていた。

「全然通らないじゃん…なんで？」

「仕方ないわよ…この時間帯はタクシーも多くが駅前で待機中でしょうからね…」

ツチと舌打ちしながら、ローラは左腕のギプスの上で指をトントンと鳴らす。

そして、こうなったら旅館まで歩くと言いだしそうになっていたその時、不意に二人に声をかける人物がいた。

「おやおや…これは珍しい組み合わせだね？」

「？」

「ッ　あ、あんたは！？」

声をかけた女性を見てローラは首をかしげ、志穂音が驚きの声を上げる。

その女性は、漆黒の髪の毛にエメラルドの瞳が光り、口元は意味深な笑みをたたえていた。

「初めましてだね、ローラ・サウスバード…。私は…五条 叶。色々子供たちが世話になっっているようだね」

世話になっっているという言葉と名前を聞きいてハツとしたローラが志穂音を振り返る。

志穂音は、今にも叶にとびかかりそうになる身体を必死で押さえこんでいるようで、小刻みに片が震えていた。

「あんたの……所為でッ！」

「私が……何か？」

「とぼけるなッ！！ あんたのせいで兄貴や大勢の人が傷ついたんだよッ！」

志穂音は声を荒げ、叶を厳しく糾弾する。

ローラにはこの会話だけで、彼女があこの市街地戦闘における一応の黒幕的な人物であるという事は理解していた。

志穂音の言い分も分らない。

しかし、ここで言い争っては後々大事に触ると判断したローラは、まだ何かを言いたそうにする志穂音を制し、単刀直入に尋ねた。

「あたし達に……何の用かしら？」

「おやおや、中々連れない返事だ」

「御託は良いわ、あたし達は急いでるの」

「ああ、分かっているとモ」

「え？」

ローラは怪訝な顔で叶を見つめる。

「どういう事？　なんで知ってるの……。」

叶はその顔を見て、笑うと両手をスツと開く。

それはこれから何かを提案しようとしているようにも見える。

「どの道、ここでタクシーを待ったところでそうすぐには来まい？」

「どういう意味かしら？」

「それに、いくらタクシーを捕まえても、どうするね？　？会場？」

は海の上だというのに……」

「あなた……何が言いたいの？」

叶はニヤリと笑う。

まるでその言葉を待っていたと言わんばかりに。

そして叶が次に言った言葉は、ローラと志穂音をかなり驚かせる物だった。

「君たちを、招待しようじゃないか。我が？艦？へね？」

「なッ！？」

「驚く事でもあるまい。困っている者を捨て置けない正確な物でね？」

「何がッ！……！」

志穂音が一言吐き捨てる。

だが叶はそれすらも笑顔で返して、言葉をつづけた。

まるで志穂音の話など聞いていないかのよう。

「さて……どうするかな？　なんならオペレーティングシートも一

つ確保しようじゃないか？」

「……何が目的？」

「それはまだ言えないがね？　ただ利害が一致しているとだけ言うておこつかな」

「利害……」

本当にどういふつもり……。

利害が一致って……彼女は一体何を……。

しかしそう考えている時間が今はかなりもつたいなかった。時は一刻一刻と動き続け状況も変わり続ける。

このまま彼女を信用して付いていくのはあまりにも危険で迂闊すぎる。

しかし、彼女の言うとおりのタクシーを捕まえて……などと悠長に構えている時間も無いのは事実だった。

そしてローラが選んだ道は……。

「さて、どうするかな？」

「……分かったわ……その代わり身の安全は保証しなさい？」

「それは当然だろうね……では行くのか？」

叶は、ゆっくりと振り返り歩き出す。

その後ろを、無言で付いていこうとするローラのスカートの裾を志穂音は引っ張った。

「なんで、あんな奴の！」

「大丈夫……少なくとも手荒な事をするのなら初めからあの二人を連れてきてるだろうし、わざわざ頭が出てくる必要なんて無い……。

それに少なくとも現状では一番マシな手だわ」

「だけど……」

志穂音はどうしてもそれが許せなかった。

自分たちの家をあんな風にした奴らの手を借りるなど。

その気持ちを察したローラが、少しきつめの口調で志穂音に言葉を投げる。

「今はもう、体裁やプライドなんてのを機にしている暇はない……。暴走したISを止めるためには……。一刻も早く現場に行つて調べるのが一番なの。だから……。お願いあたしの判断を信じて……。ね」

「……………」
志穂音はまだ納得していないようだったが、それでも渋々頭を盾に振る。

「どうかしたかな？」

立ち止まって話していた二人に、叶が振り返る。

それにローラは何でもないとサラリと返した。

それに何かあれば……。あたしの身に変えても、この子だけは助けを見せる。

覚悟があるからこそその決断。

ローラは、「そうか」と短く声を発し再び歩き続ける叶の後ろ姿をジッと見据えていた。

「外部対水圧殻、応急修理完了！ 潜航深度は半分程度ですがすぐにでも動かせますッ！」

リリスの声に希が、椅子から立ち上がる。

「よし、発進準備！ 聡也を旅館から呼び戻してッ！ 私たちもサポートに向かうわ」

「聡也君間にあいますかね？」

「無理なら、途中で合流よ。聡也を待つてる時間は無いわ」

希の声飛び、それがクルーを動かしていく。

「機開始動シークエンス開始」

「バラストタンクのバルブチェック遅れてるぞッ！」

「ハッチ閉……ちょっと待ってッ！ 艦長ッブラックアウル間にありましたッ！」

聡也はどうやら間にあつたようだ。

希はそれに頷いて返す。

「全身微速！ 湾外へ出たら最大船速でポイントへ向かうわッ！」

「ブラックアウル収容！ ハッチ完全閉鎖。水圧弁封鎖完了」

「各部チェック終了！ いけます」

そこまで聞いて希は、クルツと踵を返しリリスに短く指示をして格納庫へ向かう。

「リリス。潜航のタイミングはあなたに任せるわ。少しやる事があるから」

「分かりましたッ！」

リリスの返事を聞くか聞かないかの内に希は、格納庫へ走る。

そこには一つだけ？福音？以外にも危惧すべき対象が希の中に存在していたからだ。

叶がこの期を逃すわけがないという事

今回あの篠ノ之 束がこの旅館に顔を出した瞬間から、その考えはあった。

そして、その束完全オリジナルの？紅椿？が現れた時に更にその考えは強くなっていた。

恐らく叶の事である。

？福音？においてはこちらと共闘を申し込んでくるか一方的に介入してくるはずだ。

だが怖いのはその後である。

上手くいって福音を落とせても……その後にあの二機を出されてもしたら、いくら代表候補生たちが相手でもエネルギー切れや損傷でまともに闘えない機体では勝負は見えている。

聡也には悪いが、現着してもすぐに彼は出せない。

その事を、早い段階で伝えるために希は急いでいる。

聡也がギリギリに言われてすぐに聞くような子でない事はよく分かっている。

大事な一人息子である。

出来るならば、思うままに行かせてあげたい。

しかし叶の事を考えるとそれは出来ないのだ。

たとえ、目の前でロツソを撃ち抜かれようとも彼は？福音？戦の決着がつかぬ限り出撃させられない。

……まあそんな子に、闘えといって機体を与えているのだから心配しているというのはかなり矛盾しているのかもしれない。だが今はその矛盾さえも押し殺して、希は急ぐ。

その胸の内に、聡也に対しての矛盾した気持ちと叶に対するどこまでも底知れない不安を抱えて。

そしてそんな希を乗せた？戦？もまた暗き海を突き進む。

着々と、ステージは整いつつあった。

ぐうッ！！

僕は痛むレイをかばいながら、？福音？の攻撃を防ぎきると、落とせたと思い一瞬一夏へ意識を向けた？福音？に対して、左の？へヴイハンマー？を展開し？非目標設定機構射撃？で放つ。

これは初弾を？福音？に命中させた時に使用したテクで、元々姉さんが得意としていたもの。

更に元をただせばこれはいわゆる、銃の早撃ちである。目標物を素早かつ的確に、サイトに収めトリガーを引く。

そして僕も何度か、姉さんに言われて練習した事があった。

その経験がこんなところで役立つとは思わなかったけど……。

この？ノーモーション・スロー？を行うのにはちゃんとした理由がある。

その理由は二つ

まず一つ目は相手に自機がロックオンされているという情報を知られずに済むという事。

通常、ロックオンされた場合照準システムから発せられた赤外線などを相手側の機体が察知し、操縦者にロックされている事を知らせる。

しかしこの撃ち方だと、それが無いため一方にかかりきりにつまりこの場合？福音？が僕に有効なダメージを淹れられたと判断して一夏へとその意識を移したその一瞬のすきなどを突く事が出来るわけだ。

そしてもう一つは、何と言ってもセットからの砲撃が通常に比べて圧倒的に早いという事。

ロックオンシステムを使用してだと、セットしてからエネルギーの集束に入るが、？ストライクバーディ？に限っては、ロックオンシステムを立ち上げない場合は通常のファイアリングシステムによって砲身を展開し、肩に構えなくとも撃つ事が出来る。

広域せん滅型として作られた？ストライク・バーディ？が、武装をばらまく際に使用する？フリーアクティブモード？なのだが？ノーモーションスロー？というテクニクにとっては本来の使い方とは異なっただとしても相性は抜群である。

とはいえ、苦し紛れの一撃。

更には、？プログラムリアクト？でエネルギー効率のことん悪くなった一撃はまたも吹き飛ばす事には成功したが、その装甲を焼く

に至らない。

おまけに……

『つうッ……!!!』

レイがこんな状態だ。

はつきりってかなりまずい。

早く決めてしまわねば。

僕はもう一度、一夏に追撃を食らい火花を散らす福音に照準を合わせる。

と、その時だった。

？福音？が一夏の攻撃を防ぎながら、翼をこちらに向けて振るってきたのだ。

「何ッ!?!」

丁度次弾はロックオンサイトを用いての精密射撃を決め込んでいた僕は慌てて？へヴィハンマー？を戻す。しかしそれよりも先に光の驟雨が、眼前に迫っていた。

くそッ、間にあわないッ!!

「まだだッ!!」

「え!?!」

思わず目をつぶった僕だったが、その声に再び顔を上げた。そしてその直後僕の脇を黒い影が、すり抜ける。

「この程度の攻撃で、？シユヴァルツエア・レーゲン？を落とせるものかッ！！」

「ラウラ！」

ラウラはシールドを展開し、？福音？の攻撃を防ぐ。

「あたし達もいるわよッ　一夏、何押し負けちゃってるわけ！？」

そこへ上空から鈴が、一夏と共に？福音？を押し返し、大きく弾く。

「よくもやってくれたねッ！！　倍返しだッ！！」

弾かれた？福音？を高速飛来したシャルロットの？ブレッド・スラ

イサー？が更に薙ぎスラストー補正も間にあわず大きく体勢を崩す。

「これは……おまけだッ！！」

そしてロツソが、？テンポラーレ？を？セルペンテモード？で巻き付け引き寄せ回し蹴りを叩きこんだ。

？福音？はIS三機の攻撃をまともに受けて、近くに露出していた岩に激突して砂煙を巻きあげた。

「ふう……間にあつたか……」

「ラウラ……それに皆も……」

「なに、押し込まれてんのよ？　セカンドシフトは飾りなの？」

「う、うるせえな、これから怒涛の反撃が始まる場所だったんだよッ！」

一時話しあう時間が稼げ、一斉に皆がその場に集まってくる。

そして遅れて鈴も一夏と軽口をたたき合いながら合流した。

「それがセカンドシフトした……」

「ああ、なんかわかんねえけど怪我也治っちまったみたいだ」

「な、なんか、あんたとアルデイが並ぶと、アルデイのボロボロ加

滅が際立つわね……」

苦笑いをしながら鈴が、言つとその言葉にムツとしたレイが言い返した。

『悪かったね、チンチクリン』

「な、なんですって!？」

「ちょ、レイ!! 殴られるの僕の身体なんだからね!？」

『だったら何してもいいじゃん』

「鈴、殴るなら右側をどうぞ!」

「は!?! いや、殴って…右側?」

僕の言う事に疑問符を浮かべる鈴。

だがそれをシャルロットが制する。

「時間が無いからその話は後でね」

「う、ぐうッ」

鈴は怒りと疑問の混ざった複雑な表情で拳を下ろす。

僕は心の中でシャルロットに頭を下げた。

……と、ちよつと待てよ?

そう言えば普通に話してはいるが、どうしてラウラ達が助けにこれただんだ?

通信が来た時には戦闘なんて出来ないぐらいボロボロだったはずなのに……。

僕がその事を尋ねるとラウラはああと言って振り返ると海の一角、月明かりに照らされて漆黒に鈍く光る図体を晒している大きな潜水艦を指さした。

その潜水艦は上部に飛行甲板ハッチを持つ潜水空母だった。

「あの艦で応急処置をな」

「あれは？」

その問いにラウラは、少しだけ目じりを釣り上げる。

「あの……例の襲撃者が乗っている艦だ」

「ッ!? そんな艦に修理を？」

「ああ、普通なら危険すぎると申し出を断るところだがあの艦に口
ーラさんと志穂音が居てな……」

「姉さんと、志穂音が……」

「何故いたのかは定かでは無かったが、現状で最善の判断は戦闘可
能な領域までISを復活させる事。まあ……作業自体は志穂音が行っ
ている……。大丈夫だろう」

そんな、艦に……何故姉さんたちが……。

どういう事なんだ？

「それじゃあ、セシリー達も??」

「うん、セシリアと篤は比較的損傷が軽微だったからね……。僕たち
甚大組を先に修理したんだ。も数腰したら戻ってくると思うよ」

シャルロットの話しに耳を傾けつつ、僕はハイパーセンサーで潜水
艦を拡大表示させる。

すると確かにハッチの奥に姉さんと志穂音を確認した。

……まあこれも後でだな。

今はッ!!

僕がバツと？福音？を見やると丁度？福音？がダメージチェックを

終えまさに羽ばたこうとしている所だった。

「皆、来るぞツ！！ 奴の翼の動きには充分注意しろツ！！」

ラウラが大きな声で全員に伝える。

そして再び、戦況が動きだした。

動き出した戦況を箒は見つめ、志穂音をせかす。

「つくう、早く行かねばならんのに…… 志穂音まだ終わらんのか？」

「ちよつと待つてよ。流石に第四世代は専用品が多くてエネルギーラインの再設定も面倒だなあツ！！」

箒は志穂音の返答に、ますます焦燥を募らせた。

エネルギータンクから？ 紅椿？ エネルギーの外部給油を行おうとしているのだが、なぜか？ 紅椿？ は繋いだコネクターからのエネルギー供給を拒み続ける。

「くつそお…… なんで!？」

せわしなく手はキーを叩き続けるが一向にエラー表示が消えることはない。

だが一方で、セシリアもまた別のシステムエラーに頭を悩ませていた。

「そんな、先ほどまでは何ともなかったのに?!」

「？ブルーティアーズ？の遠隔システム不良……システムバツクアツプは？」

「こちらにッ」

セシリアの機体はローラが対処していた。

ローラは、アメリカ合衆国の代表ではあるが、本職は研究開発局のアドバイザー。

こう見えて、機械類は強いし整備も自分で行える腕がある。

ローラはセシリアに手渡された、システムを片っ端からチェックしていく。

それこそ、自分の機体を自分で整備してきたセシリア以上の早さでしかも右手一本でだ。

……凄いですわね……。やっぱりこれが国家代表……。

セシリアはその姿をみて、自覚する。

まだ自分はこの領域に到達すらしていない事を。

足元さえ見えていない事を。

こんな時だがエラー一つごときでうろたえてしまった、自分が少し恥ずかしくなった。

「仕方が無い……セシリアちゃん。レーザーライフル以外を撃った経験は？」

「え、あ、ああ、スナイパーライフルなら少々……」

「セシリアちゃん、これから？ブルーティアーズ？を下ろすわ」

「それはつまり……」

「その代わり、あたしのスナイパーライフルを貸してあげる。一発あたりの威力は？スターライト？のそれを超えるわよ？」

「……それしか……ありませんわね……」

ローラのウイंक混じりの、提案にセシリアは即決すると、すぐに作業を開始した。

「いやはや……凄いなだね？ 私たちの技術者でもあままで素早くいくものか…」

「……博士、どういっつもりなんですか？」

二人の作業を見て感嘆の言葉を漏らす叶に、聡也は尋ねた。

言うなれば聡也達の敵だ。

そんな相手を何故わざわざ艦に招いて修理までさせるのか聡也にはその考えが理解できなかった。

問いを投げかけた聡也をちらりと叶は見ると、軽く微笑んだ。

「なに……これといって特別な理由はないさ。言うなれば利害の一致……それぐらいの事だよ」

「……利害ですか」

「我々にとつても、あの？福音？は邪魔なものでしかないのね」

「つまり期を伺っている……と？」

「うん、まあ……そうだね。そうとも取れるね。まあいずれにしてもあの？福音？を？どうにかしてもらわねば？」

最後の言葉が、叶の考えの全てである事を察し聡也はそこで話を区切り視線を整備中の二機のISへと移す。

第三世代ISの？ブルーティアーズ？そして篠ノ之 東フルオリジナルのハイスペックIS？紅椿？。

聡也にはどちらとも興味深い機体だったが特にこの？紅椿？がこの程度とは思えなかった。

第四世代…この程度無訳はないでしょう。

これではただの欠陥機だ。

何か……あるのだろうか。

そしてゆっくりと視線を遠くに向ける。

光踊る戦場は、彼らの仲間が戻ったとはいえまだ決着にはもう少し……そう、何か？重要なピース？が必要だとそんな気がした。

そしてそのピースは間違いなくこの？紅椿？が握っているのだという事も同時に頭によぎる聡也だった。

第47話〜ピース〜（後書き）

次回？福音戦？を終わらせたいなあ〜と思う次第です（爆

改めて思うんですが、書き出しって一番難しいですね。

なので僕はいつも書き出しが台詞になってしまいますw

第48話 その名はガンホーク

「ちいッ!!」

ラウラは舌打ちしながら？福音？の猛攻に耐える。

？シュヴァルツェア・レーゲン？は応急修理の際、砲戦パッケージである？パンツァーカノーニア？を下ろしていた。

そのため機動力は大方回復しているのだが、今度は反面装甲が少なくなつたことで？福音？の攻撃に耐えうる防御力を失っていた。

僕はそれを見て、少なくとも装甲はこの中で一番厚い？ストライク・バーデイ？に攻撃の気をそらせるために威嚇射撃を行う。

「ハアアアアアッ!!」

「これでどうよッ!!」

そうして足の止まつた所へ、鈴と一夏のコンビネーション。

流石は幼馴染同士だ。

急造のコンビネーションでも息があっているのは凄い。

しかしそれでも落としかれない。

僕の？ハイパーセンサー？が一夏の焦る顔をズームで切り取る。

その顔を見る限り、エネルギーはほぼ底を尽きかけているのだろう。ちなみにだが？ストライク・バーデイ？のエネルギーはまだまだかなり余力がある。

というのも元々搭載されているエネルギー量が多いうえに、エネルギー変換効率が悪いというだけで別に兵装に馬鹿食いされているわ

けではない。

そのため、？ヘヴィ・ハンマー？を撃ちまくってはいるが、まだまだエネルギーゲージは安全に機で推移していた。

それでも攻めあぐねているの事実。

この中で現在？福音？を落とせる攻撃力を持つのは一夏か今補給修理作業中の筈の？紅椿？だろう。

セシリーは先ほどの通信で、？ブルーティアーズ？を下ろして姉さんのスナイパーライフルを準備しているらしいし。

だがこの状況をどうひっくり返せばいい？

…どう考えたってツ！？

と、一瞬気をそらした時だった。

『近接モードへ移行……』

短く機械的な声は、気がつけば目の前で聞こえた。

「ツ！？」

「アルディツ！！！」

「こっからじゃまにあわねえッ」

シャルロットが、背後からアサルトライフルと小型の無反動砲で援護するも全て高エネルギーの翼で防がれてしまう。

？福音？は展開していた？ヘヴィハンマー？を？ウエポンスクエア？ごと掴むとアンロックユニットのピンジごと無理やり引きちぎる。
「なッ！？」

馬鹿な、こんなパワーがあったのかッ！？

…いや、そうか！

そのために近接モードに…！

そうして大きく機体のバランスが崩れた僕に、今度は引きちぎった
ウエボンスクエア
それを僕に投げつける。

「このッ…！」

『でもなんで……引きちぎって……！！』

ま、まさかッ！？』

レイに嫌な汗が流れる。そしてその考えはおおよそ当たりだった。

？福音？は投げつけた？ウエボンスクエア？に？シルバーベル？を
浴びせまくる。

いくら装甲が厚いと言ったってそんな局部的な猛攻にいつまでも耐
えられるわけもなく、ついに？福音？の攻撃が？ウエボンスクエア
？内部のエネルギーや火砲に引火し
。

大爆発を起こした

「ぬうッ!！」

「うわあつと!?!」

空に割いた大火球は、海面で作業をしていた?守?にも大きな波が襲うほどの衝撃だった。

「なんて攻撃をッ!」

「……………アルッ……………」

それはローラでも想像していた以上の攻撃だった。

恐らく、確実に落とすにはどうすればいいのか。それを?福音?が考えた結果なのだろう。

人なら生まれる躊躇も機械ならばそんな感情なく無情にやり遂げる。とんでもないわね……………。

「ローラさんッ、まだですのッ!?!」

「え、あ、ああ待ってもう少しよ……………」

セシリアの声に自分の手が止まっていた事に気づきローラは端末のコンソールを叩いていく。

すると次々に？ブルーティアーズ？が消えていき変わりに防護用の物理シールとが付与されていく。

そして手にはローラのスナイパーライフル？ラインフィールドRO
-??が現れる。

チャキツとそれを構えるセシリア。

そしてローラは全てのコードを引き抜いた。

「準備完了よセシリアちゃんツ!!」

「まいりますツ!!」

そう言い残しセシリアが飛び立つ。

それを見て焦ったのは箒である。

「まだなのかツ!!」

「……駄目だエラーコードが消えない……」

志穂音の絶望的な返答に箒はグツと力を込めた。

何を……何をしているんだ？紅椿ツ?! 私……私は早くあそ

こへ行かねばならんのだツ!!

私は一夏と、そして皆と戦いたいツ!!少しでも力になりたいのだ
ツ!!

更に箒は握る手に力を込める。

するとまだ何も指示も動作もしていないというのに、？紅椿？から
黄金色の粒子があふれだす。

「これは……志穂音か？」

「違う、でもコレ凄いよ……一瞬で？紅椿？のエネルギーが回復してく……」

そして筈のモニターに踊るワンオフアビリティ？絢爛舞蹈？の文字。

「これは……そうか……そう言うことなのだな!!」

「あ、あのちよっと?」

いきなりの事に困惑する、志穂音に筈は笑って振り返る。

「大丈夫だ、行ってくる」

「え、あ、……うん……気を付けて……」

志穂音も理解が追いつかず思わずそう言うしかなかった。

「アルデイ!! くっそ、どこだ!!」

一夏はなんとか爆発から逃れられた事に安堵した後すぐに、アルデイを探した。

当たりを見渡すも、その姿はなく一夏は目視からコアネットワークによる位置情報の把握に搜索方法を変更する。

するとその時ラウラから通信が飛んだ。

『一夏ツツ、今は？福音？に集中するんだ！ 意識を晒して勝てる相手でもないだろうツツ!』

「だけどツ!」

『あいつは大丈夫だ！ 私の方でもしつかりとコアの反応はトレース出来ている！』

ほどなくして、？白式？にもアルディの者と思われる反応が帰ってきた。

その場所は…。

「海の中かッ！！」

ラウラの言いたい事が分からないわけじゃない。

コアネットワークで探し当てられたという事は、間違いなくISは展開している。

操縦者の周りを覆うシールドエネルギーやバリアによって窒息する事も無いだろう。

だがだからと言ってほおっておく事など一夏には出来なかった。

あいつは、俺たちの仲間なんだ！

一夏はそう強く念じるとスラスターを吹かそうとする。

そこへ見かねたラウラが正面に回り込んだ。

「いい加減にしろッ！！ 今私たちには落ちた奴にまで構っている

時間的余裕などない！」

「ぐっ、ラウラー！！」

「大丈夫だあいつはッ！！！！」

「ッ！？」

思いのほか大きな声に一夏はたじろぐ。

そしてハッとした。

ラウラの鋭い瞳の奥に悔しさがにじみ出ていたからだ。

無事だと分かっても、助けに行きたい。

仲間なのだから心配じゃないはずが無い。

だが今そつち方面に気をやって、？福音？を相手に出来るほど自分たちは強くはない。

だからこそ悔しいのだ。

一夏は、アルデイが居るであろう海の方角を見て一言吐き捨てた。

「くそっ」

「一夏ッ！」

「一夏さん！」

自分を呼ぶ声が二つ近づいてくるのに気付き一夏は顔を上げる。

見るとそれは、ビットの無くなった？ブルー・ティアーズ？と黄色の粒子を纏う？紅椿？の姿だった。

そして筈は一夏に近寄ると、スツと右手を差し出す。

「一夏……黙ってこれを受け取れ」

「え？」

一夏はその右手に、自分の左手を乗せる。

すると、驚いた事に？白式？のエネルギーが回復していく。

「これはッ！！」

「……だから言っただろう、黙って受け取れとな」

一夏は身体に満ち溢れる力を感じながら、筈を見返す。

そしてその目を見て筈も、しっかりと頷いて見せた。

そこへ今度はセシリアが、焦りを出来るだけ押し殺して一夏に問いかける。

「アルは？　一夏さん……アルはどうなったんですの！？」
「あいつは……ISを展開したまま……あそこだ」
「そんな」

一夏が海を指さし、セシリアから顔の色が消え声が上がする。
しかし、そんな仲間への憂慮さえ状況は許してくれない。

『お取り込み中悪いけど、煙が晴れるよ！　皆、注意して！！』
「ッ　！」

オープンチャネルで連絡が入り、シャルロットの声が皆の視線を爆煙の中心に向かわせる。

そして現れたのは、あの爆風でさえも無傷の姿を晒す？福音？の姿。

「あれでも、落ちねえのか…ッ！！」

「まだまだ、厳しくなりそうだな…」

「……むっッ」

「セシリア……頭を切り替える」

「……ッ、分かって…ますわ……ッ」

ラウラの静かな指摘にセシリアは、苦渋の表情を浮かべて返事を返す。

セシリアはアルディが落下したであろう場所を見てセシリアは心に改めて誓う。

さっさと片付けて……すぐに迎えにあがりますわ！

「まいりますッ!！」

そして皆のスラスターに、もう一度火が入る。

確かに、あの爆発を無傷で耐えきった？福音？はとんでもないを通り越してもはや異常だ。

それにアルデイがどうであれ落とされた…。
だがそれでも、今的に背を見せるわけにはいかない。
しかしこんな時だからこそ皆信じていた。

あいつは大丈夫だと。

まさに火の入ったスラスターのごとく、皆の心はまだ熱く燃えたぎっていた。

……海……か……。

爆発をもろに受けた？ ストライクバーディ？ は前面装甲が粉碎。

PIICにまで異常をきたし、自力で海面に上がることすら不可能なほどボロボロだった。

かろうじて残った右側の？ ウェポンスクエア？ も動作不可。

操縦者の生命維持装置だけは働いているようで、息苦しさは感じないがそれも長くは耐たないだろう。

しばらく沈んだところで、浮遊感が消える。

……底に着いたのか……。

きつと……父さんや母さんが死ぬ間際に見た世界もこんな感じだったのだろうか……。

なんて……

そう……なんて……

綺麗なんだろう

壊れかけたバイザーから送られてくる、乱れた色彩の世界でもそれが白黒の世界しか知らないアルディに撮ってはたまらなく綺麗に見えた。

月明かりが、海の底を淡く照らし目の前には幻想的な世界が広がっていた。

冷たい海の底なのに……。
孤独で、寂しいはずなのに……。

その世界を見ているだけで不思議と心が暖かくなる感じがする。

こんなふうに、海を見たのは初めてだった。

自分にとって海とは、もう二度と出来れば入りたくも行きたくもない所だった。

でも……今は……

こんな綺麗な場所だったんだ……。

僕の大切な人たちを奪った世界は……。

……ハハッ……ずるいよね。

人からかけがえない者奪っておいて、自分ばかり綺麗な顔するなんてさ…。

僕はパワーアシストの切れた機体を、無理やり動かそうとする。

こんなところで、むざむざ落ちてやるもんかッ！

海なんか……、殺されやしないッ…！

そうだ……こんなところで…ッ倒れてたまるもんかッ…！

くそう・・・無様だなあ・・・。

レイは海に落下した時からずっとそんな事をつぶやいていた。

何が、認められるだよ……。こんなんじゃ認められるどころかそんなんいたか？で終わっちゃうじゃんかッ！

けど……。

ISの？コントロールアクセサー？である彼女にはコンソールやモニターを見ずとも機体の状態は手に取るように分かった。

こんなボロボロで、何が出来る？

アンロックユニットで保持されていた？ウエポンスクエア？のメインスラスタは特に装甲に覆われているわけではないためバイパスはそのほとんどが使い物にならず、作動不可。

更にエネルギー自体もだいたい落下の衝撃で外部流出していたらしく、あれだけ余裕のあったエネルギーは既に底を尽いていて生命維持装置に優先的に回されている。

エネルギーが何ののではP I C再設定も無駄…。

浮かべたところで意味が無い。

何が……君の力だッ！

レイはアルディに？ストライク・バーディ？を手渡した時の事を思い出していた。

今思えば、全て自分が足を引っ張っている。

傷の所為でチャンスを逃したり、彼がうまく立ち回れなかったり。

このボクがッ……こんな……こんな傷程度で……負けたの？

……いや……まだだッ！

そうまだ終われないッ！！

ボクは……まだ終わるわけにはいかないッ！！

あの女に認めてもらうために……そして何より……。

？知ってもらおうよッ。皆にも世界中に君って存在をッ？

そう言って、自分の手を取ってくれた彼のために……。

そう……強く願った時。

ガガンツと、パワーアシストの切れた機体が持ち上がる。

見ると彼が、もがきあがき重たい鉄の塊と化した？ストライク・バ
ーディ？を立たせようとしていた。

こんなことで……こんなところで……

ボクはああああッ!!!!!!!!!!

その瞬間だった。

身体からあふれた光がボロボロの機体全てを包んでいった。

そしてモニターには、英語でこう綴られていた。

F i r s t S h i f t s t a r t e d
L i m i t e r a l l b r e a k

「今度は何ッ!？」

アルデイが落下して、再び上空で戦闘が始まったと思っただら今度は、海が光り海が荒れ始めた。大きく波に船体をあおられて、流石のローラも立って居られなかった。

「この光は……」
「まさか、彼もセカンドシフトを……!?」
「いや、それはあり得ないわッ!!」
聡也が予測した事をローラがすぐさま否定する。
そんな事あり得てたまるものか。
あの機体は……まだッ!!

しかし光りはだんだんと、その輝きを増し前まで艦の下は薄暗い夜の海であったのに居案では昼間よりも明るく照らされている。

そして様子は、海に接しているローラたちより上空で戦闘を繰り広げていた一夏達にも鮮明に見えていた。

「な、何が起こっているんだ!?!」
「何よコレ!?!」
「ISの暴走か?…いやだがこの光は…」
「ですが……」
「うん……綺麗……」
「……」

各々がその光を見て、口々に感想を口にする。

そしてあの?福音?までもが、その光に魅了される。

光はある範囲まで広がると、ゆっくりと集束していく。

そして光が、見えなくなった瞬間

。

ドゴオオオウツ！！！！！！

海が爆せ、まるで昼間かと思える程の閃光が？福音？を襲った。

「なんだッ！？」

その閃光は一番近くで切りあっていた一夏は当然だが、一番距離を取って援護射撃をしていたセシリアが感じるほど凄い熱量を持っていた。

そして、今度は一気に海が？割れる？。

文字通り、一機のISを中心に海が割れた。

「あれは……」

誰かがそれを見て言う。

鮮やかなスカイブルーの機体に走るオレンジ色のライン。

背部に背負う身の丈ほどに巨大化し、角ばっていたフォームは角の取れた流線形になった？ウエポンスクエア？。

元々大きかった、機体は更にその大きさを増し、装甲に走るスリッドにはエネルギーラインが走り全身にエネルギーの波動が駆け巡る。同時に筋肉質になった両腕部に握られる大型荷電粒子砲？ファイアーフライバー・S B？。

そして肩部アーマーにペイントされた星条旗が、月に照らされ輝く。

全てを守る堅牢な鎧と全てを焼きつくし、破壊し、蹂躪する圧倒的な搭載^剣火砲

ローラは口元を押さえ……そしてポツリとつぶやいた。

「ガン……ホーク……!!」

『くあぁッ……なんて反動だッ!!』

レイが再び右胸を抑え肩肘を突く。

だがアルデイには、この現状が信じられなかった。

一体何が起きたのか、それが分からない。

こんなところで倒れてたまるかと、無理やり機体を立たせようとしてそしたら急に光が広がってそしたら次にはこれだ。

「どうしちゃったんだ!? これ、まさかセカンドシフト!?」
『違うよッ……これが本当の? ストライクバーディ? なの』
「どづいう事?」

そこまでレイの説明を聞いて、急に姉さんから連絡が入った。

『アルディ! 大丈夫なのッ!?』

「姉さん…これはどづいう事なの?」

『あんだ、妙なりミッター付けてくれたじゃないかッ!』

『!? あ、あなたなんでッ!』

姉さんがレイの声を聞いて驚く。

あ。そうか姉さんはまだレイの事を知らないんだったね……。

『ま、まああなたの事はあとよ。アルディそれが? ストライクバーディ? の真のファーストシフト? ストライク・バーディ・ガンホーク?』

「ガン…ホーク」

姉さんの話によると、この機体は元々とあるアメリカの構想に則って造られた軍用のISだった。

その理由は、データの欲しい研究者側と姉さんの弟である僕に専用機を与える事を渋った上層部の両者の思惑をある部分でくみ取りある部分で相反した結果だという。

だが、いくらIS学園で運用すると言っても、軍用ISは単体での戦闘能力だけで一夏達一般企業運用されるISの能力を超える性能を保持している。

ISはセカンドシフトを予測するのはほぼ不可能だが、最適化終了

後の？ファーストシフト？を弄る事は簡単である。

そのため姉さんは何重ものプロテクトを掛け、更にファイアリングシステムにもリミッターをかけていたらしい。

そしてそのリミッターが外れた今、真の姿を現したというわけだ。そう軍用IS？ストライク・バーディ・ガンホーク？としてッ！

ちなみに姉さんが先ほど言った？ガンホーク？とは正式名称（GUN・HAWK Guardian for Heavy Attacking Weapons Keeper）【直訳：重火力兵装を保有する為のguardian（機動兵器）】という単語の頭文字などを取った造語だそうだ。

「でも……そのプロテクトはなんで解けたの？」

『さあ……それは何とも……。まあでも……その姿が発言したってことは……？福音？の未来は決まったわね』

姉さんは、最初の動揺はどこへやら。ウィンクすると通信を一方的に切ってしまった。

……。
僕は荷電粒子砲を握る手に力を込める。

身体にこれまで感じた事のないほど力がみなぎってくるのが分かった。

視線の先には先ほどの一撃をくらい、警戒態勢でこちらを睨む？福音？の姿。

「……よくもやってくれたね？」

『……ボク達を怒らせたこと……後悔しながら落ちて行けッ!』

僕はスラスターを吹かし空へ舞い上がる。
やっぱり重装甲だからこんなもんが限界か。

機動性では圧倒的に勝る相手。

『敵機装甲値一定水準値異常と判断。集束砲を持って対応』

?福音?の翼の砲門が開き光が集まり始める。

「ッ!? いかん避けるッ!! この砲撃は先ほどまでとケタが違
うッ!」

『シルバー・ブラスト
銀の暴風雨……発射』

ラウラの声が飛ぶが、僕たちは慌てない。
いや慌てる必要すらない。

「そんな攻撃は?ガンホーク?には届かないッ!」

僕たちはそのけた外れのエネルギー収束砲撃を真正面から受け止める。

もちろんシールドなど開かない。
その必要性も無い。

直撃の爆風で辺りに黒い煙が立ち込める。

バゴウウウウウウッ!!!

だがそんな立ちこめる爆風を切り裂き、？ストライクバーディ？の閃光がまたも？福音？を押し返していく。

『総エネルギー量、計測……純粹換算八〇〇〇……予備合計一七五〇〇と断定』

「な、何そのエネルギー量ッ！！」

シャルロットがそのエネルギー量に舌を巻き、その圧倒的な姿に言葉を失う。

もう戦術も何も無い、圧倒的な火力そして圧倒的な防御力で、今の今まで苦しめられていた？福音？がもてあそばれていく。

『近接武器未搭載、ブレード展開近接モード開始』

近接武器が無いと判断し、？福音？が僕の懐に飛び込んでくる。

「レイッ！」

『近接はッ、まかせてえッ！！』

右側の荷電粒子砲を量子変換で戻し、レイが構えるその腕にゆっくりと次の武装が展開されていく。

だがそれは銃でもなければ砲でもない。

ガツと握るは剣の柄。

そして現れたのは、巨大なエネルギーブレード。

つばの先にひし形上のエネルギー固定具を持ちそこからあふれだす有り余るエネルギー！

「ランディングホーンッ！！！！」

姉さんのランディングスパイクを取りこんで？ファーストシフト？
した事で発言したイレギュラー武装だがレイは初呼び出しながらに
気にいっているらしい。

レイはその長大なブレードを、横薙ぎに払う。

それを回避し、今度は下から狙う？福音？に僕が？ファイアーフラ
イver・SB？を放つ。

だがそれも回避されてしまう。

接近中は機動力で劣るこの機体では中々止めるのは難しかった。

だが僕は決して一人で闘っているわけじゃないッ！！

そこにはいる頼れる仲間たちがッ！！

「セシリー、鈴ッ！！」

「はいッ！！」

「まかせなさいッ！！」

僕は最大出力でリアスラスターに後進の指示を出し少しでも距離を
取る。

そして開いたわずかな間合いに、？双天牙月？を構えた鈴が機体を
滑り込ませる。

「これも持つてけ！！」

ブレードで相手を弾くと？福音？に最大出力の？龍砲？お見舞いす
る。

威力よりも空間圧兵器の影響で動きの鈍くなった？福音？にセシリ
ーの正確無比なスナイパーライフルの精密射撃ヒンポイントアタックが決まった。

しかしまだ驚異でもあるエネルギーの翼が健在だ。

その翼が、？福音？の機動力を支える屋台骨。

アレさえ折れれば、後は？福音？に直接一撃必殺を叩きこめばいい。
なかなか見えなかった勝利への道が開けた。

「一夏、最後の仕上げと行こう！」

「ああッ！ そろそろ終わらせねえとなッ！」

「皆はどう、行ける！？」

僕は皆にオープンチャネルで問う。

そして皆が一用に首を縦に振った。

「それじゃあ行くよッ！」

「これが？シユヴァルツエアレーゲン？の最大出力だッ！！」

まずラウラが先陣切って飛び出す。

ワイヤーブレードを巧みに使い、スルスルと逃げる？福音？を捕まえると自分側に引き寄せ翼以外のスラスタを破壊する。

「やるわね、流石ドイツ軍人ッ！！ こりゃあたしも負けてらんないわッ！」

次に鈴が入れ替わり福音を？双天牙月？で吹き飛ばした後更にそれを投げつけ、？福音？の吹き飛ばす方向をしっかりと調節する。

「もう手加減はねえッ！！」

「行くよロツソッ！」

ロツソは？モードスライダー？を開始。
？ウラガーノ？でゼロ距離から圧縮気砲を浴びせ装甲の飛び散った？福音？をシャルロットへ放り投げる。

『機体損傷度上昇。システム保護最優先』

だがその間に？福音？がむざむざやられるくらいならとエネルギー翼を使い離脱を試みる。

しかしそれをシャルロットは許さない。

「逃がすもんかッ！！」

シャルロットは回り込むと、シールドをパーズし真正面から六九口径パイルバンカー？グリースケール？を叩きこんだ。

その威力は近接武器限定ならば第二世代最高クラス。

それがたとえ相手が第三世代機であってもその威力に偽りはない。

翼以外をズタボロにされながらも飛行を試みる？福音？に警告音が響く。

『自機被ロツク警戒。ランダム回避行動開始』

？福音？が見つめる先には、？紅椿？を従えた？ストライク・バーデイ？の姿。

まだ射撃体勢に入っていない。まずはその動きを止めないとね。

僕は兵装ステータスからリミッターが解除されたある武装を展開する。

？ウエポンスクエア？が真横に展開して？ウエポンスクエア？の下部にある正方形ハッチが開く。

そしてそこから顔を出したのは巨大なスピーカー。

試作特殊音響兵器？ハウリングエコー？

「さあ、止まってもらおうよッ！！」

『起動！ ハウリングエコーッ！！』

レイの声と共に発せられた超高周波の音。

この兵器は互いのISの位置を知るためのコアネットワークに停止信号を含んだ特定の周波数帯の音波を無理やり流しこむこむことでコアに作用して一定範囲内のISの機動力を完全に削ぐ事が出来る。

ギギギツツと、かろうじて動く頭部がこちらを見る。

そして僕はその前で悠々と両方の？へヴィハンマー？を展開した。

だがあのエネルギー翼を完全に破壊するには、たとえ残りのエネルギー全てを？へヴィハンマー？に回してもギリギリ行けるかどうかだろう。

何せ量はこちらの方に分があるが密度が違いすぎる。

だからこそ僕は筈を連れている。

僕は筈へと？へヴィハンマー？のエネルギーラインを手渡す。そしてロツクと共にその翼に向けて一気にトリガーを引いた。

ドオウウウウウウウウウツ！！！！！

「ぐううううッ！！！！」

「まだかツツ、まだ切れんかツ!？」

やはり思った通りの密度……だけどツ!!

にあれだけあつた？ストライク・バーディ？のエネルギーは、疾うに？ヘヴィハンマー？の最大出力砲撃によって底を尽いているが後ろで筈がエネルギーラインに触れていてくれるおかげで、無限エネルギー生成サーキット？絢爛舞踏？によってほぼ無限にエネルギーは供給される。

「ああああああ落ちろおおおおツ!!!!!!!!!!!!!!」

「機……い……s……傷……限……破……」

ノイズ混じりの声が聞こえた直後、？福音？の翼が太い潜航に貫かれた。

「よし!! やったぞ!!」

「後は任せたよツ!! 一夏ツ!!」

「オオオオオオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!」

無防備となった墮天使に、騎士が制裁の剣を振り下ろす。

その瞬間、全てが終わった。

「やった、やったぞッ!!」

「ハハッ、やった…勝ったん…だ…」

そう思うとフツと力が抜ける。

緊張の糸は切れ、僕の身体を限界以上のところで支えていたものが無くなると同時に極度の疲労感と貧血が僕を襲う。

「アルディッ!!」

筈がとっさに手を伸ばすが、その手の先を僕が落ちていく。

そして僕が最後の最後に見たのは、黒い竜が僕を抱きとめている姿だった。

第48話 その名はガンホーク (後書き)

まさかのここでファーストシフトするお話w

まあなんにせよようやく、？福音戦？が終わってひと段落つけるかなという所です。

これからもオリキャラは多数登場しますよ。

その辺ご了承くださいね？

では次回お楽しみに！

第49話 終戦…そして

皆、アルディの落下に息をのんだ。

そして、次の瞬間アルディを抱き抱えた影に言葉を失った。

「……………何……………あれ……………」

鈴がぼつりとつぶやく。

視線の先にあつたのは、一機のIS。

黒いISスーツに身を包み、鋭いツインアイが搭載されたバイザーによって不敵に笑う口元のみが見える。

先ほどからゆっくりと左右に揺れる長く力強い尾は背中を背骨のように走り二対のスラスターが取り付けられていた。

そして、アンロックユニットによって固定されるまるで悪魔の翼のような鋭角的な大型スラスターを左右一基づつ背負う。

黒を基調とし、関節部などに赤が用いられている配色や鋭く大きい腕部の造詣も相まってその姿は邪悪な龍騎士のようにも見えた。

「気をつけなければね？ 戦闘は終わった時が一番危ない」

そう言っただけアルディをセシリアにゆっくりと預けセシリアは戸惑いながらもそれに従う。

「あ、あの……………」

「今は詮索しない方がいい……………そう、お互いのためにね？」

「……………そうは言ってもな」

セシリアの顔の前にスツと手を持って行き行動を制する？龍騎士？
だがそれにラウラが難色を示す。

当然と言えば当然だろう。

アルデイを助けたとはいえ、味方と決まったわけではない。
そしてそれである以上、警戒を解くわけにもいかず対応にも困る。
だが次に？龍騎士？の口にした言葉が一気にその結論の天秤を敵側
に動かした。

「……時には直感に頼ってみるのも悪くないと思うがね。遺伝子強
アトコトマ
シズド化素体君？」

「ツ！？」

「それってツ！」

「あんた……本当に何者……？」

一斉に警戒を強め、ボロボロの武器を構える。
それを見て龍騎士は、フツと笑う。

「……やめたまえ。？福音戦？で消耗しきった君たちでは……悪い
が戦いにすらならんよ……」

一夏はまだエネルギーは残っているが、それでも安心できる量では
なく、筈の？絢爛舞踏？も今は発動できない。

鈴やシャルロット、ロツソやラウラなどは処置を施したとはいえ応急的な物。

既に限界も近い。

この中では一番ダメージが軽微なセシリアでさえスナイパーライフルの残弾は○。

アルディは言わずもがなすぐに病院に連れていかなければならないほどの重症。

確かに？龍騎士？の言つとおり相手の力量は分からないが戦いにすらならないだろう。

「全く、それよりも早く彼を治療してあげたまえ」

「言われなくてもッ！！」

？龍騎士？はセシリアを言葉と視線で促すとセシリアは、チラツとラウラを見やる。

そしてラウラがゆっくりと頷くのを見てから、丁度現場に到着していた？戦？へと機体を飛ばした。

それを見て、再びフツと笑うと？龍騎士？はラウラ達に踵を返す。

「さて……私はそろそろお暇させてもらおう。どの道今日は顔見せ程度で来た様なものだからね」

「……顔見せだと？」

「彼を助けられたのはほとんど偶然だよ」

「……」

「まあ、そう睨まないでくれないか？アドヴァンスド君？」

「……つく、とつと失せる…ッ！」

ラウラはそう呼ばれるのが好きではない。

増してや誰かも分からないような奴に言われるなど腹が立つ。

だが？シユヴァルツエアレーゲン？も限界のこの状態ではたとえ飛び出したところで殴れもしない。

怒りを押し殺してラウラは声を絞り出すと、？龍騎士？は微笑を残しその場から消えた。

「なんて速さだ。？紅椿？でも追いつけるかどうか……」

「……逆に、それだけの速さがあったからアルディを助けられたってみるべきでしょうね……」

「そりゃそつさ」

「え？」

箒と鈴の話に割って入ったのはロツソだった。

ロツソは、見えなくなった？龍騎士？がさつきまでいた所を見ながら二人に続けた。

「あの機体は……イタリアのだからな」

「なに？」

「正確にや、本来あたしが乗るはずだった機体さ……イタリアの第

三世代……？イグナイト・スパイダ・ドウラゴネ？……機動力を重視した特殊近接格闘型ISだ」

「あんたが乗るはずだった……機体？ どういう事？」

鈴の疑問は恐らくこの場全員の疑問だろう。

しかしラウラが頭を切り替え、そこまでと言わんばかりに手を叩いた。

「それも気になるが、とにかく今は一夏、その操縦者の事もある。帰艦しよう」

有無を言わせずピシヤリといわれては流石の鈴たちも言い返すことはできなかった。

事後処理などもあり、結局皆が旅館へ戻った時には日付が変わってしまっていたがセシリアは先に？戦？でアルデイの応急処置を済ませその足で、病院へと飛んでいた。本来病院へISで乗り付けるなど規則違反以前に機密保護の観点からいっても許される事ではないのだが、そんな事を気にしている余裕などなかった。

病室のベッドで横たわるアルデイ。

あれだけの傷を受けたすぐ後に、癒えぬままで？福音？と戦った代償はあまりにも大きく、傷は完全に開き？福音戦？で受けたダメージも更に上乘せされ治療を行った先生も「この状態でよく動けたも

のだ」と驚きを隠せない様子だった。

ずっと、寝てばかりですわね……。まったく、これではせつかく色々
と用意してきたものが全部パーですわ。

セシリアは、クスツと笑うがその笑みには寂しさや哀しさがにじむ。
そして悔しさも。

彼がこんな状態のときでさえ自分はまた助けられてしまった。
今度は自分の番だと思っていたのに。

でも……そうはいつでも。

あの時、目の前に青色の影が現れた時……驚きもあった。
だがそれ以上に、嬉しかった。

偶然そうなったのかもめない。

あの時彼が取れるポジションはそれなりに多くあった。

でも彼は、自分の前に割って入ってくれたのだ。

これが嬉しさを感じずにいられようか？

セシリアはいつの間にか、頬を流れ落ちていた涙をぬぐう。
そしてそのために一瞬瞳を閉じた時だった。

「ん……ううッ……」

「ッ！？」

「セ、シリー……？」

「アルツ！ よかった気が付きましたのねッ」

アルディはまだうつろな目だったが、こちらをそれなりに捉えてい
る様だった。

そしてゆっくりと身体を起こそうとして。

「痛ッ……つゝゝッ」

「あ、まだ起きてはいけませんわッ！ あなた自分がどれほどの怪我をされたか分かってますの！？」

「ハハッ、そう言えばそうだったね……」

「もう少しご自分の身体を大切にしてください……」

心配というよりは、セシリアは少し呆れ気味だった。

セシリアはハアッと、ため息をつくとずれた掛け布団をソツと直す。

「ん、ありがと……」

「先生のお話では、本来なら一カ月弱は安静にしてなければとの話でしたが……経過を見るだけならば学園の設備でなんとかなるらしいですわ」

「つまり、僕は明後日一緒に帰るってわけだね」

「そうなりますわね」

それきり一旦話が途切れる。

その姿は互いに何と言えば良いのか言葉を模索している様にも見えた。

な、何を言えば良いのでしょうか……。

セシリアはアルディに背を向けて頭のなかで色々と思いを巡らせる。

お身体の事は聞きましたし……。

それにあの事も……。

あの事とは、あの？龍騎士？の事。

だがそんな事を今話して、変に戦闘の事まで思い出されるのも……。
こう言う時に鍵って話したい内容が浮かんでこない。

自分のボキャブラリーと発想の無さには呆れてしまう。

セシリアが頭を悩ませていると、不意にアルデイが声をあげる。

「アルツ!?!」

バツと振り返るセシリアだったが、なぜか彼はISのバイザーを起動させていて……?

な、何を言ったらいんだろう。

正直……言葉が見つからないよ……。

なんかこう、助けられてよかったとかそう言うのもいいのだけれどそれはそれでなんか恩着せがましいというか何と云うか……。

……って、ん?

なんで、光ってんの?

僕の首にかかる待機モードの二つに割れた弾丸のネックレス。

それが、僕の意志とは関係なく光っている。

それを見て不思議に思っているときいきなり……というか勝手にバイザーが起動して。

「うわぁッ!?!」

「アルツ!?!」

『ふいふ……やっと出られた……』

……あーーー。

そうか……そう言うことなのか…。
なんでこう……タイミンクの悪い。

もちろんなのだが、僕側からレイの行動をある程度抑制する事は出来る。

だが、それはあくまで最低限。
会話やその他の細かなところまで制するのは不可能だ。

「あ、あのアル？　どうかされまして？」

『おりよ、ああ……ですわ姉ちゃんだね。初めてみたけど』

「は、はい？」

当然セシリーにはなにがなんだか……。

目を丸くするどころか、目が点になっている。

本来なら止めたいところだけど、ここで僕が変に口を出すと本気で先生を呼ばれそうだ。

それも外科医や内科医じゃなく？精神科医？や？脳外科医？をね。

「本当に大丈夫ですよ！？」

『にはは、大丈夫だって。ボクは彼の身体を借りてるだけ
って、ナースコール持つのはやめよう』

「いえ……だって……」

レイはペシンと右手でセシリーの伸ばした手を払う。

あ、勝手に動いた。

やっぱり右側なんだ。

『まあまあとりあえず落ち着いて』

「ですけど……」

『ままままま……そこに座っちゃって〜』

促されるままにベッドわきにあった椅子へちょこんと腰かける。
そのセシリーを見てレイが一言……。

「ボクはもう少し、胸は大きい方がいいね」

「はあッ!?!」

思わず声でちゃったッ!!

でも気にしてられない。

何言ってるの自分ッ!?!

まあ本当に自分なだけどさッ!?!

「いきなり何言ってるの!?!」

『あ、いや……だって……ねえ』

「ねえじゃなくてッ、僕はセシリーぐらいのがちょうどいいと思ってるよッ!?!」

『いや、アレだとちょっと控えめすぎだよ。なんなら揉もうか?』

「だから、いい殴られるのは僕なんだ　　よ?」

そこまで言ってる気が付くとは、僕のセシリーリーダーもぼろくなっ
たもんだ。

そして直後、僕側の頬にビンタがストライク。

……怪我人は丁重に扱いますよ。

『うわあ……痛そう……』

「痛いよ……そりゃ痛いさッ!?!」

『まあでもその分、右側の痛みはないからお相子お相子』

なにがお相子だッ。

回避できる痛みをわざわざ受けるのは回避出来ない痛みを受けるのに比べたら数十倍馬鹿らしい。

そんな僕たちの、掛け合いを少しの間黙って見ていたセシリーが、わざとらしく咳払いをして改めて聞いてくる。

「それで、アル。これはどういう事ですか？ 独り芝居にしてはよく考えられていると思いますが？」

『だから……ボクは最初に言ったよね。彼の身体を借りてるだけだつて。つまりは……そう言う事なんだけど……？』

「ですから、それに意味が分からないのですわッ！」

「ごめん、セシリー。僕もどう説明したらいいものか分からないんだけど……一言で言っちゃえば……」

『ISの意味その物ってことだね』

「ッ!？」

そう言われて信じられるわけがないし、逆に素直に信じる気持ちにもなれない。

現に当事者たる僕だつてそうだったのだから。

だけどこれが事実。

僕が体験したあの白い空間での出来事。

アレを伝えるには言葉じゃ足りないけどね。

「ISの……意思……」

『そうさ、信じないのは勝手だけれどだったらこの状況を説明できるかい？』

そう言つてレイは、スッと両手を開く。

僕の状態をくまなく見てくれと言わんばかりに。

『どうして、ISを展開した途端話し方が変わったの？　なんで彼はこの大きな傷の痛みをまるで感じていないように接する事が？　それに何より、こんな芝居をする必要がこの状況であると思う？』

「そ、それは……」

『説明できないでしょ？　当たり前だよ。だってボクがISの意思その物だっという理由でしか説明がつけられないものね』

未だに半信半疑といったところだろうか。

しかし彼女が言った事その全てに説明をつけようと思えば、その答えしかない。

特に一番最後の、？　どうしてこの状況で芝居をする必要があるのか？　という問いに答えるには。

「……でも、そんなまさか……そんな事が……」

「僕も……それを聞いた時は頭を抱えたけど……」

『ま、でも出ちゃったもんは仕方ないさ』

そんなのん気な……。

こっちの気も知らないでえッ！？

僕は思わず寝ながらにして少しのけぞる。

なぜならセシリーが、グツとこちらに顔を近づけてきたから。

「な、何か？」

「アル…この事は……内密にした方がよろしいですわよ？」

『か、顔が近すぎるよ？』

いつもなら、そう言われて慌てて身を引くセシリーもその顔にそんな色は見られない。

むしろ更に真剣さを増して僕に迫る。

「考えてもみてください。ISはこうして実用化されているとはいえまだ謎の多い代物です。そんな中でISの意思なんていうブラックボックスの塊が表面化しているなんて事が世界に知れたらッ」

そこまで言われて、ようやく僕は事の重大さに気が付く。

そうだ……。

そんな事になれば……。

『ま、きつと世界は血眼だろうね。世界でたった二人ISを動かせる男子って言うだけじゃなく……このボクを強引な手段で手に入れようとする輩も出てくる……かも？』

ゆっくりと顔を離してから、レイの言葉にセシリーは頷く。

確かに……

それは厄介だ。

「そうなって……またアルが危険な目にあってこんなポロポロになるのは……私見ていただけませんか……」

心配そうな瞳で見つめるセシリーに僕は微笑みかける。

「大丈夫さ。そのためにセシリーが僕を鍛えてくれるんでしょ？」
「え？」

「もう、僕は……目の前で大切な人を失いたくないから……そのために戦うよ……」

『ま、ボクはボクなりにね。目標もあるし』

「アル……それに……ええと……」

『レイ……彼がくれた名前さ』

互いに笑顔で握手を交わす。

それを見て僕はまた笑う。

心に決めた物を抱いて、もっと強くなる。

自分を見つめ直して出したそれが僕の精いっぱいの答えだった。

叶は、近くの湾内に艦を隠し帽子を目深にかぶった聡也と聡華、そしてローラ、志穂音の四人を連れてとある場所へと向かう。

「おい、どこ行くんだよ」

聡華が表情を崩さずいつもの笑みで歩き続ける叶に苛立ちながら尋

ねた。

聡也を除く他の面々も同様に、怪訝な顔を叶に向ける。だが、叶は表情に考えを見せず静かにその問いに返す。

「ん？ まあ、付いてきたまえ」

「そう言いながら、ずっとけもの道みたいな所を歩いてるんだけれど？」

「アメリカ代表はこの程度で根を上げるのかな？」

「そう言う意味じゃくて……」

ローラの言うとおり、艦を降りてからしばらくずっと未整備の登山道のような所を歩き続けている。

体力は全然大丈夫だが、怪我をしているという事を少しは考えてもらいたい。

一向に見えない目的地への道を歩き続けるのは精神的に結構来るものがあつた。

そんな叶の変わり映えしない返答に、志穂音が眉をひそめる。

「まさかさ、あんた達。ウチらに何かするつもりじゃないよね？」

「……仮にそのつもりなら、艦で手を出しているだろう？」

「そうかしらね？ 案外あんたらって回りくどい手を使うし。何しでかすか分かつたもんじゃないのよね」

「安心したまえ。何もするつもりはないさ。……現時点ではね？」

含みのある言い方に一層警戒心を強めるも、歩みを止めない叶に付いていく。

結局あーだこーだ言つてこの先にある物を見たい。

要はローラも志穂音もそう言う事だつた。

歩き続ける事数十分。
いきなり視界が開け小さな岬が眼前に広がる。
そしてそこには高さ三〇メートルという断崖絶壁の手すりに腰かける一匹のうさぎ。

風に特徴的な耳や服が揺れ、その人物の顔を月明かりが照らす。
その姿はまるで現代に現れた魔法使いの様な、そんな雰囲気醸し出している。

「おや？」

「……会いたかったよ……篠ノ之 束……」

叶がこちらを振り向いた束に声をかける。

束は基本世界でたった三人にしか興味が無い。

織斑 千冬、織斑 一夏、そして妹の篠ノ之 箒。

この三人だけ。

後はどうでもいい。

死のうがどうなるうが興味が無い。

だから反応こそすれ、叶の問いかけをごく普通に無視をする。

叶は、束のそんな反応を見てフツツと笑ういながら近づき。

「……さようならだ」

トンツとその背中を何の躊躇なく押した。

「なッ!!!」

ローラたちが慌てて手すりから身を乗り出した時には既に束の姿はどこにも見えない。

あったのは、断崖絶壁に打ち寄せる海の白波だけ。

「ちよつと、あなたッ！」

「どうすんのさッ!？」

「落ち着いてください」

「落ちつけて、君ね」

聡也や聡華、叶のあまりの落ち着き払い様に思わず詰め寄るローラだったが、突如?上?から声がする。

「あつぶないね〜……背中押されるとは思ってたよん…まあ、良いけどねん」

「……ふむ、刺し殺した方が良かったかな？」

「あはは、君中々面白い、面白いいろいろい。ロイは外人？」

「アメリカ力性かな……まあ日本人ではないだろうね？」

確かに落下したはずの人間がなぜか上から現れる。

ローラたちは一瞬驚いたが、すぐに何故聡也が一ミリも焦らなかつたかを悟った。

理由は感嘆それが篠ノ之 束という人物だからだ。

不可能なことなどなく世界を自分に合わせる滅茶苦茶な人物。

目の前でたわいのない、本当に意味も無い会話を交わす束と叶を見てローラたちはそう思った。

「ん? 騒がしいな」

そこへ、もう一人ローラにとっては意外な人物が顔を出す。

「千冬ッ!？」

「お前もいたのか」

更にその後ろからは希も顔を出した。

「おやおや、これはこれは？」

「叶……」

「んだよ、雁首揃っちまったぜ」

聡華はボソリとしかし、それなりに周囲に聞こえる声で言う。

帽子は目深にかぶったままだが、千冬にはそれが襲撃者であるという事はすぐに分かった。

そしてその後ろで指示を出していた人物が叶であるという事も。

一瞬、千冬は目を細めたがすぐに視線を東へと移す。

「どうやら、皆お前に用があつてきたらしい。特にこの二人の研究者達はな」

「流石は、ブリュンヒルデ。お見通しというわけですか？」

「……」

「出来れば、その名はやめていただきたいのですが？」

「おっと、これは失礼……？ブリュンヒルデ君??」

叶は千冬の鋭い眼にも臆することなくいつも通りに返した。

そしてそれは、その呼び方を変えないという意志の表れでもある。

叶は、ゆっくりと瞳を閉じながら役者のように、手をスツと東に向けた。

「まあ……我々是用事はあるが、さほど休養というわけでもないくてね。？ブリュンヒルデ君？君から先に話を終えたまえ？」

「……どういふつもりですか？」

「言葉の通りじゃなくて？ 織斑先生。確かに叶の言うとおり私たちは東博士に用はありますが、旧知の間柄のお二人からどうぞ？」

千冬の問いに答えたのは希だった。

希は叶の近くに歩み寄りながら、互いに顔を見合わせる。

そして互いに、頷き合った。

その考えに付いては。両者とも同じというわけだ。

余りにも不自然。違和感のある会話の始め方。

しかし、世界に興味のある人物が三人しかいない東にとって頭の上を飛び交っていた先ほどまでの会話に何の意味も無い。

東は手すりに座り直すと顔は海を見たままで千冬に話しかけた。

「唐突ですが問題です！ ちーちゃんが乗りこなしたあの？白騎士？はどこへ行ったのでしょうか？」

「……それを今ここで言うのか？」

チラツと、千冬はローラ達を見やる。

ローラ達は聞き耳こそ立てているが、あくまで傍観者を決め込んでいる様子だった。

千冬はその様子を一瞥してから、少しの沈黙の後ゆっくりとその答えを発した。

「……？白式？…それをしろしきと読めば……答えはおのずとな」

「ピンポン大正解」

「でね、ここからはたとえ話なんだけど、そのコアを使っている？白式？。その元となった？白騎士？そしてモンドグロッソであるこのアメリカ人と戦った？暮桜？。この二機がコアネットワークで情報をやり取りしていたとしたら……？」

千冬には、束がなにを言いたいのかその答えを聞く前にわかって
いた。

「つまり、同じ？ワンオフ・アビリティー？が発言してもおかしく
ない……か」

「そうだね。そう言う事になるね」

そこまで言って二人は黙りこむ。

数分の長い沈黙。

風の音や流れだけがその場にいる者に時間の流れを感じさせる。

そして今度は千冬が、たとえ話を始める。

束は、珍しいねとだけ言ってその話に耳を傾けた。

「とある天才が居たでしょう。それこそ世界を相手に馬鹿げたマッ
チポンプを仕掛けるほどに。その天才が機体と妹を晴れ舞台でデビ
ューさせたいと考える。そこで用意するのは？」
「手っ取り早い方法だと、どこかのISかな？」

「そうだ。だが、いくら天才でもわざわざコアを造ってISを用意
するなんて面倒な事をしようとは思わない。だから既存のISを暴
走させて敵に仕立て上げる」

「ふむふむ」

「そして、他の専用機持ちと共に妹は華々しく専用機持ちとしてデ
ビューする……どうだ？面白いたとえ話だろう？」

「へえ……凄いな。天才だよ本当に。一度会ってみたいね」

「ああ、そうだな。かつて十二カ国の軍事コンピュータにハッキングを仕掛けるという大事件を引き起こした馬鹿にな……」

「フフッ」

束は笑うと手すりから身軽にピョンッと宙返りで降り立つと、空に浮かぶ満月を見あげた。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこな」

「そうなんだ……」

再び訪れる沈黙。

それは互いに話すべき事が終わった事を周囲にアピールしているようなものだった。

そしてそれを確認した葉がゆっくりと動く。

「話は、もう良いかな？」

千冬と束双方が、全く異なった視線を葉に送る。

「では……今度は私たちの番だね？」

そうやって叶は、まるで代表のように話し始める。

月光が照らす岬での密会はまだ続く

。

第49話〜終戦…そして〜（後書き）

千冬と束の会話のシーンで意外に割かれてしまったため叶達ターンは次回に持ち越しw

楽しんでいただければ幸いです。

それでは。

第50話〜月下にて〜

？白騎士事件？と名付けられた大事件は、今から十年ほど前に発生した。

十二カ国もの軍事コンピュータがハッキングされ二千発を超えるミサイルがこの日本という極東の島国目掛けて発射されたのだ。

誰もが、絶望し国の消滅を覚悟した。

だがその危機を救ったのは白銀のISをまとった一人の女性。

どこからともなく現れたそのISは半数をぶった切り、その半数を荷電粒子砲を呼び出して破壊した。

余りにも異常すぎる事態に、世界の反応は鋭かった。

当時最新鋭の機体まで投入されての偵察という名の？白騎士破壊任務？。

だが

結果は散々たるものだった。

当時の記録では、？ロシア空軍？に所属する戦闘機Su-33たった一機のみがかるうじて帰還しただけ。

それ以外は、全て人命を奪うことなく破壊されていた。

そしてその事實は、従来兵器とISの決定的でそして絶望的な戦力差の表れでしかなかった。

その結果を受けて急速にISは世界に広まっていく。

そして今やIS無くしては、軍備を語れずといわれるまでに浸透している。

しかし……。

「ISは、確かに世界を大きく変貌させた。女性にしか扱えぬという事を差し引いてもね。だが……それは所詮表の顔でしかない」

「表……か」

「織斑 千冬。そして篠ノ之 束……。君達は知っているかどうか分からないが……確かにあの事件で人は死んでいない……だが、君は間接的にはあるが人を殺している」

「……」

「君はあの事件の後、一体どれほどの技術者や軍人の血が流れたか分かっているかい？」

千冬は、間違いなく？白騎士事件？で人の命は奪っていない。そしていくら束でもマツチポンプ程度で人は殺さない。

だが、逆にそれが世界に与えた屈辱は計り知れない物があるだろう。

「これまで、培い養ってきた自信、プライド……それらを支えに生きてきた者達は、それを根底から破壊されてしまったら……一体何をよりどころにして生きていけばいい？」

「……プライドや自信……そんなもの。私でなくても何時かは壊されるものではありませんか？」

「世界は君ほど、強く考えられるものではないッ！」

珍しく葉が声を荒げる。

それだけ、この話は叶にとっても重要なものだという事が伝わってきた。

「私も知人の多くを失ったよ……。あの事件の所為でね……」

叶のその言葉に、希も思わず表情を曇らせる。

希もまた、同様に少なからずあの事件がきっかけで知人を亡くしていた。

気持ちは同じだ。

「あの時……君達はゲーム感覚でミサイルや戦闘機を落としていたのだろうね……。自分の身は一〇〇パーセント安全だからね……」

「けれど、私達は必死だった……当時私たちはロシアに居て。わけも分からないままあんな事件に巻き込まれて……。気がつけば全部終わってたわ。世界は……敗北して……。それを受け入れた……」

「だが……強くない世界にも……少なからず強くあるつととする者達が居る。それが私たちだよ」

「そうして造り上げたのが……Nか」

千冬の言葉に静かに頷く叶と希。

「Nは基本的には既存のシステムで組み上げられたものだ。つまり従来機代表というわけだね」

「試作と失敗を繰り返しながら、莫大な予算をつぎ込んで全部で七機製造されて。その完成型が？ホワイトアウル？と？ブラックアウル？の二機。この世に現存するたった二機のN……」

そこまで聞いて千冬に一つの疑問がわき上がる。

それは？ナイトシユライク？の発現だ。

アレが既存の兵器の枠を出ないものだとするれば、成長も変化もするはずがない。

設定された出力以上の力は出せない。それが機械であり既存の兵器のほずである。

千冬はその疑問を、叶に投げかける。

「ちょっと待っていたください。だったらあの？ナイトシユライク？はどう説明を付けるつもりですか？」

「どう…とは？」

「あれは成長では無いのですか？」

叶はフツと笑う。それは希も同様だった。

「確かに仰られる通り、私も今日の今日までその理由が分かりませんでした……。ですが昼間取ったデータを分析する事で……その理由が分かった気がします」

「と、言いますと？」

「Nは確かに、ISのコアのように成長はしません。なのでアレにはセカンドシフトなどといった段階が無い。しかし……アレは操縦者とISのコア以上に深くリンクする性質がある」

「感情の上下によつて、機体の性能が大きく変化する。言うなれば人と機械の純粋な融合です」

「感情……で？」

「君達を数回にわたつて襲撃した際……聡也の機体の攻撃にムラがあつただろう？ IS学園の候補生達があんなに苦しんだ無人機相手に圧倒したり、そうかと思えば、そんな代表候補生達のISに見るも無残にやられたり……とね？」

「……なるほど」

「ほえ〜……あんな木偶人形にそんな秘密がねえ〜」

「木偶人形ですつて……ッ!？」

「そう声荒げるな……落ち着きたまえ、希。彼女と言い争つてもね？」
束の何の遠慮も無い発言に険しい表情を見せる希を叶が制す。

希はそれに渋々といった形で従うが、束を目ではキツと睨んでいた。

「まあ……とにかく。我々はそう言う過程でNを造り上げた。ここま
で言えばうつすらと私が言いたい事が見えてくると思いますがね？」

「……つまり……」

「……私たち……いやこの場合は私のが正しいかな。その私の究極的な目的ですよ」

ISに対抗するためにNを造り、そして東や千冬に明らかな敵意を持つ。

希はともかくとしてこの人物が言いたい事それは……。

「世界を元に戻すこと……それが死んでしまった者たちへの立向けとなる……」

世界を元に戻す……。叶は努めてオブラートに包んで言っただけだろうか。真意はダダモレだった。

流石にその真意を知って静観していたローラが声を上げる。

「あなた、戦争を始めるつもりなのッ!？」

「……当たらずとも遠からずというやつだね……NにはISにない強みがあるそれが何だかわかるかい？」

「そんな事はどうでもいいわッ!! あなた……いや五条叶!! あなたどれほどの血が流れたかって言っておきながら、更に多くの人の血を流すつもり!？」

「だがそうしなければ、もはや止めらんよッ!! Nが完成した瞬間にその運命は決まったも同然だったのだからねッ」

「ッ!？」

ローラはあまりの言い草に絶句する。

そして変わりに志穂音が、叶の話に苦い顔をしていた希に詰め寄った。

「あなたも同じ思いなのッ!？」

「……私は……初めはそうだったのかもしれないわね……」

「初めは?」

「……けどそれが間違っていた事に……造ってから気が付いた……」

「どついつ事？」

「Nが完成した時……。ある事件が起きたのよ……」

IS・Nは、ロシアで造られたが環境などの問題もあってロシアでは満足にデータが取れないと判断して比較的兵器の稼働実験のおこないやすいアメリカへ完成品ごと使用権限を移譲する予定だった。しかし、その移譲前夜ある事件が発生した。

それが五条 叶らによるNの強奪事件である。

「確かに……アメリカの方が稼働実験データはロシアよりも遥かに取りやすい。だがね。なぜ仮想敵と称したISと訓練、テストといった場で定められたデータだけを取らねばならない？ 戦場があるのならそこで試すのが一番だというのに。何故？」

「戦場？」

「そう……戦場さ。世界各国からIS操縦者の集まる恰好の戦場……」

「IS学園……だからお前達は……」

「おかげで色々の良いデータが取れているよ」

希は若干反れた会話を戻しながら話を続ける。

「その事件で……叶は抵抗しなかった人にまで手を下した……」

「それって……」

「非戦闘員つてところかしらね……言うなれば研究者とか……技術者とか……」

「何を今さら驚く事があるかね？ 目的のための犠牲は手段と同じ

だよ。それに、Nを造っておきながら、何故抵抗するのか……それこそ私には理解できない」

「あんだ、自分の未来を奪われたような言い方をさつきしてたけど……だつたらあんだがあんだのために人の未来を潰すことは何とも思わないの!？」

「そうだが？」

「自己中心的なッ!!」

あつけらかんと言う叶に、志穂音は吐き捨てた。

こんな人物を相手にしていたのかと今さらになって少し腹立たしさがこみ上げてくる。

そりゃ希が、考えを改めたくもなる。

目的のために手段を選ばない。

味方に銃を向けてでも、自分の目的をやり遂げる。

これほどに自己中心的な人物だったとは…。

「自己中心的……私の一番嫌いな言葉だね。人はいつだって自己中心的なものだ。そこの彼女の様に」

「そ、それはッ……」

そう言われてしまうと志穂音も言い返せない。
事実だからだ。

世界を自分に合わせてしまう自己中心的な人物など篠ノ之 束以外に考えられない。

言い淀む、志穂音を尻目に叶は言葉を続けていく。

「先ほどローラ・サウスバードが言った事が全てだよ。君達がそこ

そこ楽しいと言ったこの世界……。濟まないが私にとっては、これっぽっちも楽しくないのでね……。時が来れば世界は君達に問いかける日も来るはずさ……。あの時の世界が本当に正しかったのか……正しくなかったのか……」

その台詞は、千冬や束にだけ向けられたものではない。

同じ道を歩みながらも、途中でそれに反発した希。

世界の流れの中で、今の立場や地位を得たローラや、その知識を持つ志穂音にも同じように向けられている。

「世界が……?」

「言っただろう。世界には強くあるうとする者達が居ると……。ゆつくりとだが確実に……。それはできつつあることだ」

叶は踵を返すと、片手をヒラヒラと振る。

そして、息をひとつ吐いた。

「私の話はこれぐらいで良い。さて……。先ほどから私に意見をぶつけ続けているローラ・サウスバードと……。千葉 志穂音。君たちもまた言いたい事や聞きたい事があるのではないのかな?」

「えッ!？」

「そ、それは……」

思わず顔を見合わせるローラと志穂音。

叶の言うとおり、二人にもまた確かに言いたい事というよりは聞きたい事はあった。

しかし、この会話の流れでどうそれを切りだすか……。

「さあ、どつしたね？」

「……………最後に一つ聞かせてもらえますか？」

「む？」

話しをローラ達に振ろうとしていた叶に千冬が声をかける。

叶はそれにどつぞ、と短く言葉を発した。

「ISを嫌っているのならば……………何故あなたはISを運用しているのです？」

「……………？紫燕？の事かな？」

「はい……………」

？紫燕？は間違いなく紫香楽製の純粋な？IS？である。

千冬にはどうもISを倒そうとしている叶が何故ISを運用するのか。

その繋がりが見えてこない。

「私は、基本的に自らの目的のために動く。その行動理念は変わらない。しかし時に相反する存在が利害を一致させる時もある」

「……………」

「紫香楽誠一郎もまた根底にあるものは同じ。そのアプローチの方法……………そして事情……………それら異なる要因が重なって……………今この状況がある。まあ、そう言う事だよ。さ、話しは終わりだ」

叶は微笑を浮かべると聡華と聡也をひきつれその場を後にする。

言いたい事だけを言いに来た。そのついでにローラと志穂音を返しに来た。

叶にとっては、恐らくそのぐらいの事だったのだろう。

「全く、付いてこいって言って強引に連れて来たと思えば勝手に帰ってくし……ほんつと腹立つヤツツ!!」

「まあでも……あたし達を艦に乗せてくれた事については、感謝しないかね」

「うッ……それは……そうだけど」

「で、お前たちも何か言いたい事があるのか？」

千冬の声に一瞬ビクツと身体を震わせる二人。

本当に、嫌な流れを残して言ってくれたと両者は思いつつも顔を千冬へと向け、ローラは苦笑を浮かべた。

「はぁッ……ちょっと向こう行きましょうか」

そう言つてローラは志穂音を連れて、岬の端へと移動する。

「むッ。ちーちゃんをどこへ連れてくの〜!!」

「……黙ってる」

千冬の遠慮のない物言いは、親友だからかなんなのか。

束はプクッツと頬を膨らませながらそっぽを向くと、また岬の手すりに腰かけた。

「……随分ストレートに物を言うのね」

「アレはあのぐらい言つても聞かんさ……で、話というのは？」

「……本当は一つだったんだけど……今の話聞いて少し増えちゃったみたい」

「構わんさ」

千冬は腕組みをしたまま手すりに身を預けこちらを見やる。

「……それじゃまず初めに決めた事から話すわ。……千冬この子をIS学園に特別編入させてほしいの」

「何？」

「この子、ISは使えないけど技術力そしてISに関する知識はそこから辺の学者や技術者よりも凄い物を持つてるわ。整備科は二年からだけど……なんとか……」

「ま、待ってくれ。いきなりそう言われてもな。大体何故だ？ 彼女が志望したのか？」

「……彼女の了解は得ているわ」

ローラの言葉に志穂音はコクンと頷く。それを見て千冬は改めて理由を聞いた。

「一体どういう事なんだ？」

「このまま、彼女を変電所に戻したら多分きつとまた襲われる」

そもそもあの変電所襲撃の目的は、志穂音が造ったある物が目的だった。

そしてまだそれが志穂音の手にある以上、叶が襲わないとは限らない。

それがローラの言い分である。

その説明を聞いた千冬はローラの説明の中に出てきた？ある物？という表現が気になった。

「……ある物？」

「これだよ」

志穂音は腰のポーチから、白い直径二十センチほどの鉄球を取り出

して千冬に手渡した。

「これは……コアか」

「そう、Nの三番目のコア」

「だが彼女は、現存するのは二機と言っていたが？」

「それ、あの五条 叶から造ってくれて頼まれた物なんだよ」

一瞬、目を丸くする千冬。

それも当然かと、思いながら志穂音は言葉を続ける。

「確かにおかしな話だよね。Nを造るにはそれこそ国家予算並みの
お金が必要だから……」

「そんな金があるのか？」

「ないよ、言っとくけどさウチは孤児だよ孤児。そんな蓄えあるわけ
がないじゃん」

「だったらこれはどうくみ上げた？」

「それは、確かにコアなんだけどコアとして使うには余りにもお粗
末な仕上がりでねえ」

志穂音はヒョイツと千冬の手からコアを取ると、それを起動させる。
だが起動したそれはいわゆるISの部分展開に近いものだった。

「あの時はさ。アルディにトータルフィッティングはパーソナルデ
ータが無いとって言ったんだけど……。どうやらこれが限界みたい」

アハハッと笑う志穂音は展開を解きコアを待機状態に戻す。
そして再びそれを千冬に預けた。

「そりゃそうだよね、彼女から送られてきた設計図にはちょっと街中の電器街をうるつけば手に入るような部品ばかりが記されてて。コアといってもそんな物の寄せ集めでNが完成しちゃったらそれこそ、技術者は自殺しちゃうよね」

「つまり、五条 叶は……市販の、しかもどこでも購入できるような物を使ってNのコアが出来るのかそれを試したかった。そう言うことか」

「付け加えるなら、ちょっとメカに詳しい素人に造れるかどうかも試したかったんだろうね」

「仮にそれが成功していたら……一気にISの包囲網は狭まる。まさしく戦争だな」

いやそれだけではない。戦争ならばまだいい。

それが暴徒化すれば、収集の付かない事にもなりかねない。

彼女はそれをも見越して、志穂音にそれを依頼したというのだろうか。

だが……。

「まあ、こいつが失敗か成功かは置いておくとして……なら何故襲撃した？」

無理やりそれを強奪したかったからか……。

いやそれでは志穂音の言う、依頼されたという部分が説明できなくなってしまう。

それにロツソを使ったわけも……。

「多分この件をややくしくしているのは、彼女の所為」

そう言ってローラは、クイツと顔を動かして手すりに腰かけ未だ頬

を膨らませつぱなしの束を指した。

「束？」

「五条 叶が襲撃した時の事覚えている？」

「ああ……それはな」

一回目が、無人機が襲撃した時。

そして二回目が、無人機のコアを奪いに来た時だ。

「まさか……あの女は……」

「というよりも、あなたも薄々感じてるんでしょ？」

「……………」

「五条 叶は篠ノ之 束が関係している所に必ず顔を出す。そして何かしらのアクションを起こす……」

「今回ウチはね、同時期に彼女から一丁ライフルのデータ構築を頼まれてね」

「ライフル？」

「そう、地下室を岩盤ごと地上まで撃ち抜けるほどに強力な」

確かに現場には、巨大な大穴が開いていた。

だが千冬はあの穴は、ISの戦闘で空いてしまったものだとばかり思っていたのだ。

「あ、もちろんIS用のだよ。あらかじめ」

いや……仮にIS用だとしてもその威力は異常……だが……。

「……………束なら……あり得るか……………」

「まあそれで叶も、色々と策を練った結果ああなった。ってわけで

「しよ」

どこか釈然としないが、一通りあの事件の説明は付いた。そして話しは再び、編入の話に戻っていく。

確かに、これまでの話しを聞く限り志穂音は相当な技術を持っている。

それこそ、さっきも言ったように波の技術者なら到底及ばないほどの技術を。

しかし、ISを使えない所がどうもネックだった。

いくら整備科の二年とはいってもそれなりにISを使えての事だ。

ちなみに基本的に高校教育課程に位置するIS学園だが、その実決まった年齢制限はあまり存在しない。

例えば、アメリカには飛び級制度が存在するが、日本にはそんな制度は存在しない。

つまり高校教育を受けるのは日本人ならば一律十七歳であるがアメリカではそれよりも早い段階で高校に入学する事が出来てしまう。そう言った各国の教育事情を考慮して、IS学園では編入に限り年齢制限を特に設けてはいなかった。

だが特にそこは千冬は、心配はしていない。

Nとはいえそれを造り上げる技術そして、何より…。

千冬は、しばらく沈黙を続け考えをまとめると志穂音に尋ねた。

「あの、サウスバードの機体を修理したのはお前だろうか？」

「え？…う、うん…」

「やはりな… オペレーティングルームから一部記録映像とデータが複製され持ちだされていた…。あれはお前の仕事だったんだな」

「仕方なかったんだ…。ローラさんに言われてて」

「まあ、そつだろつな」

やはり心配はない。

オリジナルデータを元にあそこまでISを復元できる技術と知識。だがそうはいつでも…。

「やはりISを使えん事にはな……二年にいきなり編入というわけにもいかんし…」

「でも、この技術放っておくにはあまりにもつたいないわよね？」

「それはそうだが…」

「けれど、ISの維持メンテも割ける人員は限られてくる。だったら優秀な人材は確保しなきゃ」

千冬はローラの顔をちらりと見て、そして大きくため息をついた。なぜならその向けられた笑顔が、悪戯っぽく笑っていたからだ。

そして次にローラが懐から見せた物を見てもはや苦笑いしかできなかった。

「……お前……」

「もうちゃんと学園長さんの許可は得てました」

ローラは学園長の？くつわぎ 轡木の印が押された編入許可証を千冬に見せて笑う。

「だったらなぜ、私に話しを持ちかけた」

「いきなり編入したら、あなた嫌でしょ？ 旅館じゃかなり訝しげな顔で見られたって志穂音ちゃん言ってたしね」

「……そりゃそうだろう。あんな事態になっても眉ひとつ動かさずキーを叩いていれば不審に思っさ」

「あの時は、映像データの抽出とか？ストライク・バーディ？のデータを引っ張り出すので大分疲れてたから………イライラしてたしね……」

「まあ、いいさ。だが、これからは学園の生徒になる身だ。言葉遣いだけは直しておけ。いいな？」

「ま、努力するよ」

「い・い・な？」

「ッ！ は、はい……」

語尾を強めた千冬の言葉に、慌てて返事をし直す志穂音。

これは少し、大変そうだとローラは志穂音を見て表情を緩ませた。

そしてローラは志穂音を、希達のいる所へ返し二人で手すりに寄りかかる。

「ちょっと長々話し過ぎたかしら？」

「さつきも言っただろう、構わんとな」

「そう……じゃあ、もう少し……いいかしら」

「ああ」

「……さつきね、あなたが篠ノ之博士と話しているのを聞いていて少し思ったの……」

「私が？白騎士？だという話か？」

千冬の答えにローラは首を横に振った。

「それはどうでもいいわ。あたしには、篠ノ之博士やあなたみたい
に世界を変えることはできない。言っつなればその大きな流れに流
される、ごく普通のIS操縦者……」

「だが世界第二位で今も飛び続けているじゃないか？ それを普通

とは言わんだらう」

「誰かさんが、辞めたおかげで永遠の世界第二位よ」

「ふん、私には私でやる事がある」

ローラは、そうねと返して話しを続けた。

「そんな普通の人間からすれば……さっきあなたが言ってた？世界はそこそこ楽しい？っていう言葉は普通出てこないと思ってね」

「楽しくないのか？」

「少なくとも、あたしは自分の身体をこんなにして楽しいとは言えないかしら」

「……」

ローラはフツと笑うと、海の方を振り返る。

「時々分からなくなるの……。やってる事、やってきた事…それが正しかったのかどうか……」

「後悔している？」

「そうじゃないわ。でも……いや…そうかも。あの暴走事故だって……もつと何か…良い方法はなかったのかとか……考えてしまった。アルデイのためって言いながら、あたしは間違いを正当化してるだけなんじゃないのかって……そう…思う時があるの」

ローラは言いたい事を、自分でもまとまっていな感じながらも言い続けそれを千冬は黙って聞く。

「どうにも……自信が持てなくなる……共に飛んでいれば守れると…思っただけを信じているのに」

「つまり……お前は信じ切れていないわけだ。弟を」

「え？」

「私は、あの馬鹿一夏を信じている。大丈夫だと」

「あたしだって……信じてるわよ……」

ローラは言い返すが、どうにも言葉が小さくなってしまふ。

それは千冬が、的確にローラの核心を突いた証拠に他ならなかった。

「いいや、違うな。お前は信じ切れていない」

「ッ……」

「お前は、多分……そうあの事故以来だ……あの海難事故以来。アルデイに対して迷っている」

「迷って……だけど」

「色を奪ったそれが、立ち直るきっかけになった。だが他に道はなかったのかと考えるそのこと自体が信じ切れていない証拠だ」

他に、他に、他に……確かに自分はそうやって考えている節はあった。だが、でもそれは

「それは、アルデイの事を思って……」

「思うなら……信じてやれ」

「……」

「迷うな。お前が迷えば……あいつは誰を目標としていけばいい。」

誰を信じればいい……。姉とは……そう言うものだ」

千冬は手すりに寄りかかる身を起こし、希達の所へと歩きはじめる。

恐らくそこにいた誰もが凜とした空気を纏い、黒いスーツを着こなす千冬と、ボロボロの青いスーツで傷だらけのローラが妙に対照的に写っていた事だろう。

世界第一位と第二位の間にある差もまた同時に映し出していたのかもしれない。

ローラはその後ろ姿を見つめながら、最後に尋ねた。

「……………どうして、あなたはそこまで信じ切れるの？」

「ん？……………そうだな……」

千冬は少し考えて、振り返らずに答えた。

「戦場に出れぬから……かもな。お前は出れるんだ……やるべき事があるとは言っても私からすればお前の方が少々羨ましい。近くでしっかり守って……そして信じてやれ」

「言われなくても……ね」

ローラのその返事が、千冬に届いたかどうかは分からなかったが、誰一人話さず風と波の音だけになった月明り照らす岬の空気が、全ての話しが終わったという事を皆に知らせている事だけはよく理解できた。

臨海学校はもう一日残されている。

明日こそは本当に少しゆっくりしたいと思いながら、ローラは千冬の後に続くのだった。

第50話〜月下にて〜（後書き）

一通り、それぞれの言い分をまとめた回で。

読めば分かるかもしれないし分からないかもしれないそんな感じの回にしてみました。

もちろんですが全ての答えを放り込んでいませんから謎は謎のままですよ。

ではまた51話でお会いしましょう。

お気づきかと思われませんが、アルデイの暴走事件が一日目の夜そして福音事件が二日目の夜で、臨海学校は三泊四日なので、おや一日余ってる〜

ってなわけでw

次回はようやく書ける臨海学校での日常回の予定です。

では失礼します〜

第51話 Side Strike アルディの後日談 (前書き)

超絶遅れてすいません。

更に遅れたうえに……

第51話 Side Strike アルディの後日談

臨海学校は三泊四日つまり今日が最終日という事になる。

本来ならば、？福音？の件で遅れたデータを取らねばならないが、流石に遊びたい盛りの生徒たちを初日そして先日とずっと旅館に拘束しっぱなしであった事を鑑みて最終日は、初日の穴埋めという形で自由日とされた。

今日もいい天気で、陽気も良い。

それだつていうのに……。

寝てなきゃいけないって言うのは実につまらない。

まあ怪我人だから仕方ないけど。

さつき、チヨロつとセシリーは顔を出しに来てくれたけどそれ以降は全く誰も来ない。

もはやつまらないじゃない、暇だ。

なにぶん、休みの日でもあまりゴロゴロして時間をつぶすタイプじゃないだけにこの時間がただただ苦痛であった。
な〜にかないかなあ……。

でも身体を起こそうにも傷が痛むし……。

はあ……痛まずになんか出来る事……ん？……痛まずに？

そこで僕はゆっくりとではあったが寝ながらポンっと手を打った。

ああ、そうだ。

アレがある。

僕は思うなり早速……。

『へ、呼んだ？　つて痛いッ！？』

「我ながら良い方法だと思わないかい？」

『君、ひよつとしてボクを痛み止め代わりに呼んだのかい？』

「それ以外に何か？」

『ああもうコイツ助けなきゃよかったッ！』

僕がやった事それは、ISを起動させる事。

起動といっても、ちよこつと、本当にちよこつとISのバイザーを起動させてレイを呼び出したのだ。

レイはISを展開すると勝手に僕の右側にアクセスするようになっていたらしい。

そして同時に痛覚などの感覚も、左右別々に分離する。

多少会話が一人芝居になって、頭を心配される以外は少なくとも僕にとっては痛みを止めるこれが手っ取り早い方法だった。

「さて……痛みも引いたところで」

『……押しつけたただけだよな？』

「……引いたところで？」

『押し付けたただけだろツ！！』

「あはは、まあまあそう怒らないで。別にそのためだけで起動したわけじゃないから」

『今、大筋で認めたよね？』

僕はレイの言葉を軽く流して天井を見つめる。

思い出すのは、昨日の一件。

あんな……。

あんな非現実的な事を経験したという実感が一日経って、そしてセシリーとも話した後だというのに湧いてこなかった。

でも、たった今適当に……本当にただ痛いからそれだけの理由でレイを呼んだその瞬間に、あの出来事が全て事実だったという事を僕に理解させる。

ぼんやりと天井を見つめ続ける僕の様子をしばらく無言で観察していたレイだったが、呼び出された側としては我慢できるのも意外と短かったようで、不機嫌に口を開いた。

『で、本当に何の用さ？』

「え、ああん……」

『ああん……って……君が呼んだんでしょ？』

「……いや……なんかさ……本当だったんだなって……」

『何が？』

「……昨日の事」

『ああ……そうだね。ま、やっぱり実感わかないかなあ？』

レイはいつもの調子で明るくそしてあっけらかんとして言う。
そのあっけらかん差が、逆にレイがやはり普通な存在じゃないとい
う事を僕に実感させた。

あんな事があっても、驚かずにそうだねで済んでしまふ。

まあ、最もレイの中でも僕と同じぐらい驚いているような何か別の
事はあるんだろうけれど。

「改めて考えると……とんでもないよね、やっぱり」

『そりゃあね、意識失いました、でISの意志に会って身体半分こ
で復活しました……で、戦ってみれば機体は真のファーストシフトで
？福音？を倒せました……なんて事、他の人のみならず自分自身で
も中々、「はいそうですか」って納得はできないよね』

言ってしまうば、たった二行で終わるのに。

余りにも内容が非現実的すぎるのだ。

「納得……とかじゃないんだけどね……素直に受け入れられないっ
ていうかさ」

『うん』

「……まあでも」

と僕が言いかけた時、パンツと襦が開いた。

僕は慌ててISを待機状態に戻して視線を動かす。

「な、何!？」

「……ふむ、驚かせてしまったか？」

「ら、ラウラ」

僕的には意外な、いや意外すぎる訪問者に目を丸くする。

ラウラは、制服姿で片手に端末を持っていた。

彼女は、そのまま僕の傍まで歩み寄り腰を下ろす。

「それで、何をしに来たの？」

「なに、セシリアに頼まれたのだ。お前を見ていてやってくれとな」

「セシリーが？」

「……というよりも、皆で決めた事だ。今日は一日自由時間だろう？　だがお前はそんな身体だ。だからと言って、一日中お前の面倒を誰かに見てもらうわけにもいかない。ローラさんだってやることはある。だから時間を区切って……、ま、そう言う事だ」

「気にしなくていいのに」

「そうもいかんさ。お前も大事な仲間なのだからな」

皆が少しでも気にかけてくれている事は正直有難かったし嬉しかった。

思わず僕は、顔がほくそ笑む。

「けど……僕はこんなだし動ける状態じゃないけどね」

「ゆっくりすればいい。今日ぐらいはな」

ゆっくりねえ。

ついさつきそれに耐えられなくてレイを呼んだ手前、微妙に気まずい。

ラウラは壁に身を預けると、小型端末を起動させると今日のニュースにザッと目を通し始めた。

そうして十数分、互いに会話のない時間が続いたが、不意にラウラがぼつりと端末を見ながら口を開いた。

「……そう言えば、さっきアメリカからローラさんを訪ねてきた二人組が居たな」

「え、姉さんを？」

「ああ、どうやらISの関係者だったようだが……」
「無理もないよね……あんな事があつたんだし……」
「まあな、こんなに大きく記事として取り上げられてしまったては無
理もないかもしれん」

そう言つてラウラは、端末の画面を僕に見せてくれる。
そこには？太平洋沖でIS謎の暴走 事故調査委員会組織し本格的
調査へ？と見出しが書かれていた。

流石にアメリカもここまで大々的に各国に取り上げられてしまつて
は……。
鹿もラウラが見せてくれた記事はアメリカの、ネット記事。
つまり本国でもそれだけ大きく取り上げられているという事だ。

今のご時世、いくら海域封鎖や情報規制を敷いたところでもどこから
だつて情報は漏れる。
大方、姉さんに会いに来たつて言う人達はISでもその関係の人た
ちなのだらう。

「それで、姉さんは？ 応じたの」

「それから先は何ともな。一応話しは聞いている風だったが」

「そうなんだ……」

「フツ、まあ気にしても仕方がないさ。それよりもお前は身体を治
す事に専念するんだな」

そう言つてラウラは笑い、再び視線を端末に戻す。

にしても……姉さんに……来訪者ねえ？

「全く、驚いたわ。連絡ぐらいよこせばいいのに」

「驚いたのはあたしの方よローラ、なんてザマなの？」

「……もう少し……言葉を選ばませんでしたか？」

「え？」

ローラはついさっき自分を訪ねてきた二人組　ブラウニーと

ライオネル　を旅館の応接間を借り、そこへ通した。

目の前の机には人数分のコーヒーも淹れられている。

「にしても……あれね。あなた達、どうして二人できたの？」

「いえ、元々私が一人で来るつもりだったのですが……彼女が……」

「散々、議決した案件に反対しまくった拳闘勝手に候補を選ばれたんじゃない立つ瀬ないでしょ？」

「つまりは……なに、ブラウニーの変な意地？」

「い、意地つて、あんたねえ……。それだけじゃないわよ。暴走事件の事も聞きに来たの。一タナターシャを本国に持って帰って呼び出して……なんて面倒な事出来るわけないでしょ」

「……面倒つてあんたね……」

自分の立場と責務をどう思っているのかとローラは少し頭を抱えなくなった。

とそこで、ローラの目にブラウニーとライオネルの薬指にそれぞれ指輪がはまっている事に気がついた。

「あれ？　おそろいの指輪なんてあなた達、どうかしたの？」

「は？」

「え？」

「い、いや…それに薬指って……まるで婚約者みたいね。まあ…冗談でも笑えないけど」

「……い、いや…」

「婚約者といえますか…」

「え？」

「夫婦ですけど」

「うん…」

「……うそ？」

もう本当にローラは頭を抱えた。

「と、とりあえず話を戻しましょう」

ローラはそう言ってズレにズレまくった話を元に戻すべく若干まだ戸惑いながらも場を仕切り直した。

「何もそんなに驚かなくてもねえ」

「久しぶりに会った人間が、知らせなく結婚してたら驚くでしょ！それに夫婦そろってならなおさらね……って、もうそれは良いの！本当にもう……で、何をしに来たわけ？」

ブラウニーは、フツツと笑うとライオネルに目配せをした。

そしてライオネルが傍らの鞆から一枚の書類をローラに手渡す。

そしてローラはそれを見て、顔をこわばらせた。

「これはッ……」

「ローラ……あなたを、その記してある日付をもってIS研究開発局へ？正式に？配属とするわ」

「そんな、急すぎるわッ！」

「辞令に急も何もないでしょう？」

「それでも……」

ローラはグツと歯噛みする。

実際ローラは今、アメリカの研究開発局に属してはいるが正式な配属ではなくあくまでアドバイザーとしてであった。

だから、思いのほか身軽にこうして日本にきたりしても、特に問題はなかった。

だが正式配属となれば話しは別である。

ローラは受け取った書類に記された日付を確認する。

そこに記されていたのは今日から二日後の日付。

今日帰ったとしても……いや、逆に今日帰らなければこの日付の日に研究開発局に戻る事は出来ない。

全く昨日の夜、千冬に近くで守って信じてやれと言われたばかりだ

というのに……。

物事には何事にもタイミングというものがある。

そしてこれはローラにとつて最悪と言わざるを得なかった。

まあ怪我をしている手前すぐに空にも上がれず、アルデイ自身も大げがではそれほどすぐに回復は不可能だろうがそれでも、日本とアメリカ。

余りに遠すぎる。

尚も食い下がろうとするローラにブラウニーはため息を吐きながら次なる書類をローラに手渡した。

その書類は束になっていて上をワニ口クリップで閉じられている。

「何よ、これは……」

「ねえ、ローラ。？ストライクバーディ？がアメリカ合衆国にもたらしたものはあまり多くはないわ。けれどその中身は………：かなり濃い」

「？」

パラパラと書類をめくっていくローラがある一枚の項で手を止める。そしてその内容を呼んだ時ローラが何故正式に配属になったのかその理由がなんとなくわかった気がした。

「こ、これは……」

「そしてその濃い情報や？技術？は使わなきゃ意味が無いの。言ってる意味はお分かりよね？」

……ブラウニーは語りかける様に言うと、フツツと笑う。

そして付け加える様に一言を添えた。

「世界は動いてるのよ……あなた達が想像も出来ないぐらいの速度でね……」

ローラはその言葉を聞いて、そしてもう一度書類の束に目を落とし、最後に大きく息を吐いた。

世界は動いている。

その事は確かあの五条 叶も言っていた事だった。

そしてその流れが今こうして自分の目の前にゆっくりとだが確実に提示されていく。

「大丈夫よ、あなたが帰ってもあたし達がこっちにしばらく用事で残るし、それに後日になっちゃうけどアメリカから有能な人材を一人呼んであるから」

ブラウニーは言うつとウィンクをしながらコーヒーをすすする。

……有能な人材ね……。

まあ、それは良い。

けれどまあ、確かにこれは自分が帰らなければならぬ事態なのかもしれない。

……それにだ。

ローラはこうも思う。

確かにタイミングは最悪だった。

近くで守れも信じれも出来ない。

でも、逆に遠く離れていてもアルディの弟の事をしっかりと信じきる事が出来れば、それはそれで大きな進歩では無いのかと。

ローラはそう思い、出来るだけ前向きに考える事にした。

まだ色々と納得はできていないが、それでもローラは渋々だが頭を縦に振った。

その様子を見るブラウニーの目が一瞬、冷たく光った事に気がつかぬまま。

「だあああッ!? また負けたッ!?」

「鈴はめくる位置が適当すぎるんだよ」

「それに、一度めくったカードの位置も適当に投げて戻すから分かるなくなるんだ」

「うううう~~~~ッ!」

「性格が災いしたな、鈴」

「……あなた達に任せた私が馬鹿でしたわ……」

頭を抱えるセシリーをベッドに横になりながら見つつ僕は苦笑する。まあ、こうなる事はほんの少しだが期待していた。けど実際なると、なんて言うか……傷に響く。今、一夏達がやっているのは神経衰弱第六回戦。

よくもまあ飽きずにといふか何と言つか。

僕自身は参加していないがそれを一歩引いたところから見ても中々面白かった。

主に、鈴の一人負けが。

さっきラウラの言ったように鈴は、めくったカードを乱雑に放り投げように戻す。

だからいざ自分の番となった時にこのカードどこだったっけって言うのが多く結果カードを得られず毎回指摘されているのに自滅していく。

そもそもなんでこうなったかだが、ラウラが来た後しばらくしてシャルロットがやってきた。

気の効くシャルロットは退屈しないようにとトランプを持ってきてくれたのだが、よく考えるとそれが発端だったのかもしれない。

本来ならば、シャルロットと交代で出ていくはずだったラウラがトランプに興味を示し初めは三人で軽くババ抜きなどのゲームを楽しんだ。

そうこうしているうちに、どんどん時間が過ぎ交代予定のメンバーが続々と入ってきて結果こうなったのだ。

ちなみにセシリーは、一度ビットを下ろしてしまったために再設定が必要とかで一番最後に部屋に入ってきてトランプを楽しむ皆に唾然としていた。

まあ、そんな感じでセシリーは今も頭を抱えているのだがそんなセシリーにラウラ達には言い返す言葉が見つからなかった鈴が丁度いいとばかりに噛みついてきた。

「何が馬鹿よ!?! 大体あんたが頼んだでしょうが。アルディの看

病をお願いしますわって！」

「さしもの私もこんなになるとは思ってたませんわッ！」

「予測しなさいよッ！」

「無茶苦茶!？」

まさかのセシリー押し負け。

まあ………相手が鈴だしね。

そこへセシリアを落ち着かせようとシャルロットがキラッならぬシヤルツと割り込む。

「まあまあ、鈴もセシリアも。あんまり騒いじゃうとアルディの傷に響くよ」

「そんなシヤルツと爽やかに言われても説得力ありませんわよ!？」

「全く………良いかセシリアこれはな。場を和ませるレクリエーションなのだ」

「ラウラさん………そんなトランプ片手に言われまして………」

「それに私たちはちゃんとアルディを見ていたしな」

「箒さん………視界にとらえる〃見ていたっていまそんな感じで言いましたわね………」

突っ込みどころ満載のメンバーに的確な突っ込みを入れていくセシリー。

おお凄い、セシリーが常識人に見えてきた。

「なんですのその目は………」

「………何でもありません」

言ったら殺されるね。

セシリーはやや突っ込みつかれた目で、ため息を吐いた。

「それにしても……本当に良かったの？　せつかくの自由時間なの……」

ひとまず落ち着いた面々に僕は、問いかける。

看病をしてくれるのは確かにありがたいし、話し相手も出来て退屈はしない。

けどそれは結局自分側の理屈で、一夏達が自分たちの時間を割いてくれている事には変わりはないのだ。

そう思うと申し訳ない。

だがそんな心配をよそにラウラが、しれっと返した。

「言っただろう、お前は大事な仲間なのだ。これぐらい当然だろう」

「ラウラの言うとおりでアルデイ。お前が怪我して寝てんに俺らだけ楽しめるかよ」

「……神経衰弱は随分とお楽しそうでしたけど……」

「いやッ……あれは……鈴がやってたから……」

「何！？　私もしていただろうッ！」

「筈、そりゃそうだけど」

「トランプなら僕もやってたよね？」

「私もだな………なのに……何故鈴だ？」

「……だから……や、だって鈴やってたろ……？」

一夏は向けられた視線にあれば失言だったという後悔を覚えつつチラッと鈴を見る。

しかし鈴がこんな時に一夏を助ける言葉を言うものか。

予想通り鈴はさっきのお返しとばかりに油を注ぐ。

「もー一夏つたら……そんなに？あたし？とトランプがしたいなら
そう言ってくればいいのに」

あたしを強調した発言に一瞬なんで鈴はそんなところを強調したの
かと一夏の頭は考え始めるがすぐさま背後に迫る殺気に振り返る。

「……………っはッ!？」

「「「一夏あッ!!!」「」」

「わ、わりいアルディッ!! 俺はまだ死にたくないッ!!」

「あ、逃げた!」

「ええい待て一夏ッ!!!」

「つく、流石嫁……素早いのだがッ!」

阿修羅のごとき形相で睨まれた一夏は部屋から逃走。

それを追って三人の阿修羅が解き放たれる。

しばらくは、旅館の中で壮絶なチェイスが行われる事だろう。

そうして部屋に残されたのは僕と鈴とセシリーの三人だけ。

鈴もその後を追いかけるんだろうなと思ったのだが鈴は、ふうつと
ため息をひとつ吐いた。

「ま、こんなもんでしょ。一夏には悪いけどしばらくあの三人を引
きつけてもらいましょ」

「あ、あの鈴さん? どういう……」

「ん? なにボケた事言ってるのよセシリアまで」

そう言っつて鈴がセシリーに近づき何やら耳打ちをする。
すると一瞬でボツとセシリーの顔が真っ赤に染まった。

「り、鈴さん!?! ななな何を言っつて!?!」

「何って……そのままの意味じゃん？ あ、アルディあたし行くとこあるからちよつと行ってくるわね」

「あ、ちよつと鈴さ」

そう言っただけの、そしてセシリーの言葉も聞かぬうちに部屋を後にする鈴。

…一体なんなんだ？

セシリーはまだ少し顔を赤く染めてブツブツと何かを言ってるみたいだし。

ほんと、鈴は何を言ったのやら。

このまま放っておいて観察もそれなりに時間はつぶせそうだったが流石にそれは可哀そうだと思いきやセシリーに声をかけた。

「ねえ、セシリー？」

「全く……鈴さん……なんて事を仰いますの……」

「セシリーって」

「それに大体どうしてこう言う時だけ……」

ああもう駄目だなあ……。

もう少し大きめの声で言ってみるか。

「セシリーってばッ！」

「ひゃいッ!？」

僕が少し語気を強めると、セシリーの身体がビクッと跳ねた。と同時に大きな声を出した僕の腹部も痛くなる。

思わず顔をしかめた僕にセシリーが、ハッとして心配そうにのぞきこむ。

「ア、アル!？」

「ちよつと大声出して響いたみたい…。大丈夫大丈夫」

「ふう……いきなり大声を出すからですわ」

「いや言うけどね、セシリー。僕二回も呼んだんだけど」

「……………コホンッ」

あ、咳払いで話題を無理やり終わらせた。

……………まあ良いけど。

「それで、なんですか?」

「え、何が?」

「ですから、私を呼んだじゃありませんか」

「ああ……………いや…まあ、セシリーが自分の世界に入っちゃってたみたいだから現実引き戻そうかと」

「……………その話はさつき終わりましたわ」

あゝだったね。咳払い一つで終わらせたね。

しかし、実際そうなのだからそれ以外説明しようがない。

だからと言ってこれでは、会話が堂々巡りするだけかとも思い何か話題を考えてみる。

何か話題話題……………。

うーん…。

……………やば、何も思いつかないぞ。

元からそれほど、想像力豊かじゃないと思っていたけどこれほどとは思わなかった。

それでも何かと話題を探す僕に、逆にセシリーがフツと微笑んで僕

に声をかけてくれた。

「アル……」

「うん？」

「私、正直…… ホツとしてますの」

「ホツとしている？」

声をかけてくれたおかげで話題探しをしなくて良いのはありがたいが、セシリーが言いたい事がいまいちつかめない。何が言いたいのかな？

「それは、どういう意味？」

「そのままの意味ですわ。こうやって普通に何気ない会話ができる事。それがこんなにもホツとするとは思いませんでしたから」

「あ……」

こうしてさっきまで皆とワイワイと話していたから、気が付きにくいけれど僕たちはつい先日まで一歩間違えれば命を落としかねない場所に居たのだ。

確かにそう思うのは当然だと思う。

それに僕に至っては……。

僕は自分で自分の腹部をさすった。

少し撫でただけでも痛みを感じる。

当然だが、死んでしまえばこの痛みすら感じることはないのだ。

変な言い方だが、さっきのセシリーの言葉を聞いた後だからだろうかこの痛みを感じる度に安心する自分がいた。

「あんな事になって……病院で生死の境をさまよって……そうしたら次には目の前に居ましたわ……」

ケロツとした顔で、本当に……どれだけ……こっちが心配したとツ
………思つて……ツ」
「セシリー………」

瞳にはうつすらと涙も見える。

その時の気持ちを考えると、何も言葉が出てこない。

僕だってそうだ。

あの時、？福音？に狙われているセシリーを遠目から見ている経
つても居られなかった。

結果助ける事が出来てよかったけれど、目の前であの心境ならそこ
に心配する人が居ないというのはどれほど不安だったか。

「本当に、勝手ですわね……。初めてお会いした時もそうでしたけ
ど………本当に自分勝手にツ。なのにそれでいて自由で………本当に……
………本当にツ！！」
「セシリー………」

僕は表情を緩めると、セシリーのグツと固く握られた手に左手をゆ
っくりと重ねた。

「………アル？」
「けど………僕は失わずに済んだ。皆を僕にとってかけがえのない人
たちを」

そう………確かに僕はセシリーや皆に心配をかけに掛けたかもしれない
いでもそれでも、僕は僕と？レイ？は確かに失わずに済んだのだ。
かけがえのない人達を。

僕は、痛みをこらえてゆっくりと身体を起こす。

それを見たセシリーが、素早く僕に肩を貸してくれた。

「アル？」

「セシリー……お願い聞いてくれるかな？」

「……はい？」

セシリーはその言葉にキョトンとした顔で首をかしげた。

「うっん……綺麗だね〜」

「いきなり海を見たいだなんて……なんなんですか？」

肩を貸してくれたセシリーが、呟く。

僕はセシリーに軽く礼を言いつつ近場のベンチに腰を下ろした。

セシリーもそれにつられるように隣に腰を下ろす。

目の前には水平線に今沈まんとしている夕日が見え、海をオレンジ色に染めていた。

「正直……こんな気持ちで海を見たのは初めてかもしれない……」

「……」

「海は僕にとつて、一番来たくない場所だったから……」

でも、あの時？福音？に海へ叩き落とされた時。

あの時見た海は……とても綺麗だった。

だからこんなに綺麗なところでもう誰も失痛くないと思ったんだ。

思えば、一度は全てを海に奪われて、でももう誰も失うなって自分の背中を押してくれたのも海かもしれない。

「けどまさか……海に背中押されるとは思わなかったなあ」
「……アル？ あの……一体何を？」
「いや……何でもないよ……ただ……守れたんだなって……」
「ええ、そうですね。皆無事ですわ」
「あ、いやそうじゃなくて」
「はい？」

今の返答にどこか問題か？というような顔でこちらを見やるセシリ
！。

そんなセシリーの顔を見て思わず笑いがこみあげてしまう。
その僕の反応に、セシリーがムツとした。

「なんですのいきなり、失礼ですわよ」
「ああ、ごめんごめん……でもやっぱり……守れてよかったよ」
「ですから……はい？」
「そう言う事」

僕はそう言って、ゆっくりと海へと視線を戻す。
未だ夕日に照らされた海は、動き始めた世界の事など全く知る由も
ない穏やか姿で僕たちの前に広がっていた。

第51話〈Side Strike アルデイの後日談〉（後書き）

遅れたうえにggdggdな内容ですいません。

色々忙しかったんです。

……はい、言い訳ですすいませんでした。

ようやく臨海学校も終わりですね。

次回にまだ聡也パートが残っているんですじえ……。。

次パートは完璧オリジナルなのでそのあたりお願いします……。

では、本当に遅れてしまいすいませんでした。

第52話 Side OWI 聡也の後日談 (前書き)

完全オリ。

やっぱり聡也版はどつやっても完全オリ物になっちゃうなあ…

第52話 Side Owl 聡也の後日談

「ほら、ちよつともう少しよく見せてくださいよッ！」

「う、うるせえよッ 大丈夫だって言ってるんだろ!？」

「駄目ですよッ！」

「……聡也まで……何やってるんだか」

希の白けた声にも全く動ぜず、聡也とロツソは、傍から見れば取っ組み合いの様な診察を続ける。

というのもロツソは旅館に帰るなり、他のメンバーが診察を受ける中事もあるうにそれをスルーした揚句そのまま自室に直行して翌日まで寝た上に、再三の呼び出しも全てすっぱかすという荒技をやったのけていた。

もはやここまで来ると、命知らずという言葉がぴったりだ。

まあ、あの千冬に殴られてもガン飛ばすのはロツソぐらいしかないないだろうが。

そんなロツソが今日、ひよっこり？戦？に顔を指したのだ。

丁度良かったから聡也が、なんで抜けだしたりして再三の呼び出しにも応じなかったのかその理由を聞いたところ。

単純に「面倒だったから」という答えが返ってきた。

これにはもう啞然として声すら出なかった一同だった。

ここまで自力で来たのだから身体の方は本当に大丈夫なのだろうが、一応分かる範囲で傷や身体の状態を確認しようとはまずはリリースを筆

頭に医療関連のクルーがロツソに接触を試みた。

しかし、ロツソは大丈夫の一点張り。最後はリリースの顔面に小型の消火器がめり込んでいた。

つまりは失敗である。

その後も数回別の方法を取ったのだが、結局どれも失敗してしまい希が取った最終手段が聡也である。

当然、男である聡也は反対した。それはもう凄く。

だが結局は押し切られ、外見上分かる範囲でという条件付きで渋々頭を縦に振ったのだ。

ロツソもまさか聡也が出てくるとは思っていなかったらしくかなり動揺していた。

ロツソは、上こそパーカーを羽織ってはいたが、そのしたは赤いビキニ。

聡也の登場で、変に意識したのか露出している太ももや足などは比較的簡単に診察する事が出来た。

立ち会ったクルーが、初めから聡也を立ち合わせればよかったと思うほどにスムーズだった。

問題はその後。

パーカーを脱いでくれと言った後だ。

ロツソはかたくなにそれを拒んで、で今がこれである。

「良いから、脱いでくださいよッ！」

「ばっか、お前何言ってるよッ！」

「変に赤くならないでくださいッ!！」

まあ、知らない人が見たら一発で捕まるだろう。

……聡也が。

「大体、なんでお前が脱がすんだよッ!？」

「ロツソがちゃんとしなからですッ」

「いや、そう言うことじゃなくてどうしてお前なんだってことッ!

「ロツソが怪我をしたのは、ある意味出撃を止められなかった僕にも責任があるからですッ」

「そんなところで、持ち前の責任感発揮!？」

ロツソそしてロゼオにとって、聡也のこの責任感の強さは彼を好きになった一つの要因でもあるがこんなところでそれを最大限発揮されても困る。

別にロツソは、異性に自分の裸体を見られようが何とも思わない。

相手が聡也（好きな人）だから、ここまで反対しているのだ。

乱暴な口調で荒っぽい性格のロツソもまた一人の恋する少女なのだ。

しかしさしものロツソも面と向かってしかも他のクルーの前で本当の事など言えるはずもなく聡也の行動に対する有効な反抗の手段が見つかからない。

だからと言ってこのままでは、本当に力づくでパーカーを脱がされかねない。

どんな事を言おうとも責任と言いだした聡也を止める事が出来ないのはロツソが一番よく分かっていた。

そしてついに……

「わ、分かった、黙って脱ぐからお前離れろってッ!！」

「そうやって、またッ」

「いやだからほんとだつての！！　ちゃんと見せるからッ」

「む……むむう………　そこまで言っんなら」

「はぁ………とりあえず、外で待っててくれよ」

ロツソが言うと聡也が、まだ訝しげな眼をロツソに向ける。

それにロツソは半ばやけくそ気味に言い返した。

「だから、ちゃんと見せるって言ってんだろッ！！　少しは信じろよッ……！」

「……分かりましたよ………じゃあ、僕は出て待ってますからね」

そう言つて踵を返す聡也だったが、最後の最後もう一度振り返ると念を押すように言った。

「ちゃんと、見せるんですよ？」

「良いから出てけ……！」

「はいはい………わかりましたよ………」

今度こそ聡也は部屋を後にする。

「………　まったく………　あたしはどんなけ信用されてないんだよッ」

『………　仕方ないと思うよ』

？このまま自分自身に突っ込まれ続ける様になったら自分もいよいよ終わりだな？とロツソは自嘲気味にそう思うのだった。

「全く………　手間取らせてくれましたね………」

ハッチが開かれた、？戦？の格納庫。

その日陰に聡也とロツソは二人座りこんで心地の良い潮風に吹かれていた。

聡也は、ジト目でロツソを見やるがロツソはその目に反応せず鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまった。

聡也はそれを見て、やれやれと肩をすくませる。

勝気で荒っぽいロツソと、大人しくあまり表情を表に出さないロゼオ。

その二人がこうして一つの身体を共有し合っているというのは、そのきっかけを作った自分が言うのも何だが不思議なものだ。

自分自身に何かを言われる感覚というものがどんなものなのか分からないが、きつとロゼオが外に出ている時は内側からそれはそれはさぞやかましく吠えたてられるのだろう。

「な、なに、人の顔見て笑ってやがんだよ、気味悪いな……」

「フフツ、いえ……何でもありませんよ」

「？」

怪訝な顔で首をかしげるロツソにまた笑って返すと、聡也はさりげなく問いかけた。

「なんで、診察……受けなかったんですか？」

「ああ？ だから面倒だったって……」

「違いますよね？」

「……え？」

ロツソは思わずキョトンとした顔で聡也を見返す。

聡也の言い方が、あまりにこちらの行動を決め付けたような言い方だったから、そして何よりそれが余りに凶星過ぎた（・・・・・・）からである。

「戦闘後の診察は、搭乗者として半ば義務の様なものですからね。いくらロツソでもそれを面倒だからと言って抜けだすはずもありませんしそれに何よりロゼオが止めるでしょ？」

「……………いや……………それは……………」

「いえ、別に僕は責めているわけでは……………やっぱり気になりますか？ 例の機体が」

「ッ！？ ……ハハッ、お見通しってやつか……………」

ロツソは苦笑いを浮かべて、頬を掻く。

聡也も、後に知った事だったがあの？福音戦？終了後に突如として現れたあの機体はイタリアの機体であった。

？イグナイト・スパイダ・ドウラゴーネ？

確かに、あの姿は龍騎士を名乗るにはふさわしい姿だったが、何より驚いたのはその早さだった。

離脱した時もそうだったが、アルディを助けた時艦の広域サーチにも引つかからなかった。

つまり敵は一万以上の彼方から、米粒ほどの小ささで落下するアルディを見つけ駆けつけたのだ。とんでもない推力である。

「あの機体は、元々あたしの機体と同時期に造られたもんなんだよ」

「同時期……………つまり第三世代機という事ですね」

「ああ」

ロツソはゆつくりとそれに肯定する。
そして同時に聡也は少し苦い顔をした。

実際、筈の？紅椿？そして一夏の？白式？を除けば第三世代のISは基本的に最新鋭の機体である。

そして、アルディを助けたとはいえオープンチャネルで発せられたあの口ぶりを聞く限り味方では無い。

という事は、いずれ聡也とも戦う事になるだろう。

いくら先日のデータどりで？ナイトシユライク？発動のきっかけがつかめたとはいっても未だに成功していない。

そんな状態でもし仮にあのISとかち合う事にでもなったら間違いなく負ける。

「アレは同時期に造られたって言うてもかなり実験的要素が強え機体だよ。ちよつと特殊な兵器を搭載してんだ」

「特殊な？ それはどんななんですか？」

「ええ……つと………確か………あれ、何だったけ？」

笑って頭を掻くロツソに聡也は思わず力が抜けた。

まあ、ロツソがそれを正確に覚えているとは聡也も思っていない。

少し抜けているぐらいがロツソらしいとも思えた。

すると多分、内面で色々の良いあったのだろう渋々と言った形でロツソが奥に引つ込み、一気に雰囲気物が静かになる。

「……彼女に説明を任せた……私が馬鹿だった……」

「成り行きで聞いた僕も悪かったですよ……」

互いに自分自身に呆れつつ、話を戻す。

「それで、特殊な兵装というのは？」

「……あの機体は、？微振動破碎？っていうシステムを使用する事が前提なの……」

「？微振動破碎？……超高速の震動波によって物質の内部元素結合そのものを破壊する……っていうやつですね」

「うん……私もそれほど詳しく知っているわけじゃないから、詳細なスペックまでは思いだせないけれど……確かそうだったはず……」

ロゼオは当時の記憶を探りながらポツポツとつぶやいていく。

それから少しは機体に付いての事は分かったが結局詳細なスペックや搭載火砲の事までは分からなかった。

粗方、そのISの事を聞き終わるとふと疑問が浮かぶ。

「そう言えば、どうしてあのISはロゼオ達の乗機にならなかったんですか？」

「……どうしてって？」

「ああ、いや素朴な疑問ってやつですよ。確かに？ペルフエッド・エスターテ？はバランスの取れた優秀な機体ですが、聞く限りあのお？スパイダー？もそれほど劣っているとは思えないですし……」

むしろ、？微振動破碎？なんていう他の国がどこもやっていないような技術を研究した方が有益な気もする。

加えてあの推力だ。

突き詰めて行けば、ISの強豪ひしめくヨーロッパ連合の中でもかなり上位に食い込む実力を秘めた機体になりうるはずだ。

そんな機体をどうして、代表候補生でもあるロツソに使わせなかったのが聡也にとっては疑問であった。

「……操作性がピーキーすぎた……」

「ピーキー？」

「要は、機体に対する推力が大きすぎたのね？」

急に背後から聞こえた声に僕たちは、振り返る。

そこには、メガネをクイツと直しながらこちらに歩み寄ってくる博士の姿があつた。

「博士」

「ついさっきまであのISの映像、チェックしててね。まあ、確かに大きいわよねあのスラスタ」

「けど、大きいからあれだけの推力な訳で、それが武器なんじゃないんですか？」

何度も言うがああ機体は一万以上の遠方から一瞬でアルデイを助けられたのだ。

プラスに働きこそすれマイナスになる事があるのだろうか？

「聡也は、基本的にバランスの良い機体しか使っていないからね。本当にバランスの崩れた機体がどれほど乗りにくいか……まあピンとこないのかもしれないわね」

まあ、バランスがいい悪いに限らず、聡也が使えるのはNの二機だけなのだから選択肢はおのずと限られてくるのだが。

未だにピンと来ていない聡也に希は、説明口調で言う。

「例えば、そうね。大きな車と小さな車があるとするじゃない。で、その大きな車のエンジンはその大きさに似合ったものが載っている。けど小さい車には、その大きな車用のエンジンが載っているとしましょう」

「はい」

「大きな車には大きさに似合った出力を出せるエンジンが載ってい

るから普通に走る事が出来るけど、小さい車にはその大きなエンジンが載っている、つまりその車を動かすには必要十分以上の出力を持っている。しかも度を超えたね」

そこまで言われてようやくハツとした。

今までその速さだけに目が行ってそれがウィークポイントだとは思わなかった。

そう言う事だったのか…。

「必要以上に大きな推力は、確かに機体を一瞬で超高速に持つていくことは可能かもしれないけれど、それを扱う者にはまさに神経をすり減らす作業を強いる……。まさに欠陥機ね」

「……でもじゃあ、なんでそんな欠陥機をあの人には……」

「それは分からないけど……けど、そんな？欠陥機？をあそこまですべて自由に動かせるって言うのは少なくとも、彼女はただものじゃないってことは分かるわね」

「それに……あの人、アルディを助けたけど一体何のために……」

そうだ、それもよく分からない。

間違いなく味方では無いのに、どうしてアルディを助ける必要があったのか。

あそこでアルディが死んだら困るような理由が彼女にもあったというのだろうか。

もちろん自分たちもアルディには死んでもらっては困るのだが。

「まあ、分からなけりゃ分からないで良いんだけどね。さてと……
聡也」

ポンと手を叩く博士。

うん……この先は大体予想できるんだ。

「取れなかったデータ、まとめてとっちゃいましょう」

……ですよね。うん分かってました。

どうやら僕には、今日自由という言葉はないようだ。

しかしその言葉を聞いてしゅんとしたのは僕だけでは無かったようだ。

「……私……」

「あ、うん……」

まいったな。

流石にこんなロゼオを放置してデータ取りに行けるほど人間出来ていません……。

困惑の目を博士に向けると、博士はフツツと笑うとわざとらしく大きな声で言う。

「あ……そういえば、リリスがさっきロツソちゃんのフィジカルデータを学園の方へ送るって言うて部屋にこもっちゃったから人手不足ねえ」

「……え？」

「あ……どうしましょうねえ？ どこかにソコソコメカに強くてデータも取れてかつ一緒にISで飛べる子がいれば良いんだけど……？」

「……あ、あの……私……」

「……フツツ、手伝ってくれる？」

ロゼオに博士が微笑みかけると、ロゼオは初め戸惑ったがすぐに事情を呑み込んで微笑み返し首を縦に振った。

『さて……えーっと……ここまででは前回の取れてるから……』
博士がチェックボード片手に、一人ごちる。

その様子を、僕は？ブラックアウル？のモニター越しに見る。

ロゼオもISを展開してはいるが、？戦？の周辺海上で待機している。

ロゼオの主な役目は、この周辺の海上封鎖および安全の確保。
そして博士のデータ採取の補助である。

『じゃあ、聡也。今から数パターンの異なるスペックシートを送るからそれを順番にインストールして、今からこのエリアに表示するターゲットを全部破壊しなさい。分かった？』

「はい、了解です」

『それじゃ……始めましょ』

「博士……年甲斐もなくウイंकはやめた方が……」

『 と思ったけど先に耐久テストを終わらせましょう。ロゼオちゃん。？スライダー？起動。零距离から？ウラガーノ？で聡也がどこまで耐えられるかデータを取りましょ』

「今、聡也がつて言いませんでした！？ 機体じゃなくて!？」

『……分かりました……』

「ロゼオも分かっちゃだめ!？」

ロは災いのもと……。

ひとまず僕は平謝りしてから、テストに移行した。

「五番六番ヒット。七番クリティカル 八番ヒット 九番スルー……」
聡也が打ち抜いた的のデータを読み上げまとめながら、艦に転送する。

それが今ロゼオに与えられた仕事だった。

ロゼオの前には複数のモニターが並びそこへ、次々とデータが送られてくる。

しかしその中に、一つだけ全くデータを取るうえでは関係のない物があった。

そこに写っていたのは、顔の表情が読みとれるぐらいに拡大表示された聡也の姿。

ロゼオはデータに目を通しながら、チラチラとそちらに目を向ける。

…… やつぱり…… 格好いいなあ……

自分でも少し頬が赤くなっているのが分かるが仕方が無い。

そもそも聡也がこうやって必死になっている顔を、まじまじと見る機会などほとんどない。

共にISに乗っている時というのは互いに授業か何かしらイベントか戦闘か……

とにかく相手の顔をよく見る時間など無い時ばかりなのだ。

……「つづ言つ時ぐらい…… 良いよね……」

ロゼオは聡心の中で呟きながら、作業を進める。
しかしまあ、当然なのだが？心の呟き？と言った物も？ハーモニクス？は共有し合ってしまう。
だから、この後お決まりで来るのは……

「なぐにが、良いよねだよ何が！」

「……黙ってて……今は私の番……」

「そうは言うがな、あたしだってお前って言うフィルター越しじゃなくこの目で聡也の顔が見てえんだよ！……ってことで変われ今すぐ変われ！！」

「……やだ……それにロツソに聡也の顔を見つつデータ整理なんて事が出来るとは思えない……」

「うっ……そ、そりゃ……まあ…………ってか、お前意外に器用な事してんのな……」

痛いところを自分に突かれるというのも、情けない話ではあるのだが仕方が無い。

言われて言い返せないのだからロツソも短くロゼオに言葉を返した後には黙りこむしかなかった。

だがさっきロツソが言ったように、ロゼオはかなり器用な事をして
いる。

送られてくるデータを読み上げながらまとめ、更に目ではデータ・聡也・データ・聡也・聡也・聡也・聡也・聡也・データ……と言った感じで、モニターを見ながら作業しているのだ。

志穂音程では無いにしても、ロゼオも流石に二重人格になってから長い間、座学側を担当してきただけの事はある様だった。

そうしてデータを送り続ける事数十分。

ピーっという電子音の後、希の声がオープンチャネルで響いてきた。
『はい、そこまで。後は……フンなるほど中々面白いのが残ったわね。それじゃ聡也もロゼオちゃんも一度艦に戻ってきて。休憩してから最後のテストに入りましょう』

ロゼオと聡也はモニター越しの希に、頷いて返すとそれを見た希も満足そうにうなずき返して、ウィンドウが他のデータを表示していたウィンドウと一緒に消える。

しかしロゼオが表示させていた、聡也のウィンドウだけは艦に戻ってISを待機状態に戻すまでずっと点いたままだった。

ふう…。

僕は一息つくくと博士からカップにストローの刺さった特製のドリンクを二本受け取り、そのうちの一本を隣にいたロゼオに手渡す。

博士いわく？医学的見地に基づいた超がつくほど特製のアイソトニック飲料？との事らしい。

ちなみに味は某大手飲料メーカーの、オリンピック公式サポート飲料のそれに近い物だ。

ロゼオはその？特製飲料？を受け取ると、？ちう？？という効果音

がぴったり合いそうな感じでストローで飲料を口の中へ運ぶ。それがどことなく小動物っぽくてかわいかった。

まあ、ロツソなら間違いなく、カップのふた開けてがぶ飲みだろう。それはいいとして。

「それで、データは取れたんですか？」

「ええ、もちろん。最後のフェイズを残して完璧にね」

「……そう言えば、さっき言ってた面白いのが残ったって言うのは……どういう意味ですか？」

僕の問いかけにロゼオも言葉を続ける。

うん？ 面白いのが残った？

……そんな事言ってたんですね……。

博士の面白いという言葉に少し僕は頭痛を感じた。

なぜなら博士の言う面白いとは、大抵の場合が僕にとって良い思い出が無い。

急な運用テストしかり、博士の？特製？料理しかり……

しかしその数十分後、僕のそんな考えは今回ばかりは外れだったという事に気づかされた。

なぜならそれは、僕にとってもそしてロゼオにとっても中々に興味深い内容だったからだ。

『それじゃ……準備は良いかしら？』
モニター越しの博士の声が僕とそしてロゼオに伝わる。

海上には一定の距離を取った僕の？ブラックアウル？と？ペルフェ
ッド・エスターテ？

そして少し離れた所にはハッチを解放して計測機器を並べる？戦？
の姿がある。

博士の言った面白い事とは実践データの総合取得いわゆる模擬戦だ
った。

基本的には学園での演習などで取られたデータが博士の下に稼働実
績という形で送られるのだが、それは？ホワイトアウル？の場合で
ある。

成り行きとはいえ搭乗機が入れ替わるという前代未聞の事象に加え
て恰好のデータ取りの場になるはずであった？福音戦？においても
僕自身は出撃していないため取れていない。

？福音戦？の事に関しては予想外のこととはいえそう言った事もあ
って博士は一度しっかりと戦闘データだけでも取っておきたいらし
く、このテストはだいぶ前から計画されていたものらしい。

と言っても相手は別段ロゼオを想定していたわけではないのだが。

……ただ正直ロゼオが模擬戦の相手を引きつけてくれたことには驚
いた。

まあ、彼女は彼女なりの考えあつてのことだろうけれど。

僕はそこまで考えて頭を切り替える。

相手はロゼオ。

これまで戦ってきたのがたとえロツソだとしてもその実力は折り紙

つきなのだ。

他ごとを考えて、たとえ模擬戦なれど戦える相手では無い。

『双方とも……良い眼ね……じゃあ…行くわよッ!』

?戦?から発せられるブザー音それがはじまりの合図。

その音と共に、僕は弾かれるように機体を躍らせた。

臨海学校最終日しかも完全フリーな一日がISのテストに忙殺されるとは何とも味気ないが、それはそれで僕らしいとも思えた。それになにより……。

僕は相手の攻撃をさばきながら、チラツと赤い機体を駆るその少女を見やる。

そしてフツと口元を緩ませた。

僕にとっては忙殺されているこの一日が、この上なく充実した物になっっているのは確かですしね。

穏やかな海の上で、繰り広げられる黒と赤の模擬戦闘。

その姿はまるで、二機が楽しそうにダンスを踊っている様だったと
後に一条 希は語っている。

こうして、聡也の臨海学校最終日は終わりを告げた。

第52話 Side OWI 聡也の後日談 (後書き)

……もう何もいいますまい……。

投稿日遅れてすいませんでした……。

第53話（世界は今……）

色々な事があつた臨海学校。

間違ひなく僕の人生の中で忘れられない事が数多く起こつた三日間だつた。

……まあ寝た所も含めてね。

当然だが僕は、旅館の中にいる人間の中では超が付くほどの重症。怪我は病院で手当してもらつたとはいえ、その後ISSで戦闘している。

その結果、傷口も開いて気がついた時には旅館の布団で寝かされていた。

そんな事もあり、もうこれ以上馬鹿な事をしないように誰かが監視する事になつただけだ。

僕は姉さんが来るとばかり思っていたんだけどね。急用とかで既に旅館にいなくて、その監視役を買つて出たのが……。

織斑先生だつた……。

まあ担任だし当然と言えば当然なんだけど、こうなんていうか少し離れたところに布団を敷いて寝ているだけなのにそれはもう寝にくくて仕方が無かつた。

もうなんていうか、寝ている時ぐらいその存在感をなんとかしてほしいものだ。

おかげでまだ眠い……。

時刻は朝の八時五〇分。僕は途中で合流したセシリーの肩を借りてバスの集合場所までやってきていた。ちなみに織斑先生は、色々と旅館の方と出立の手続きがあるようで、僕を起こしてから先に部屋を後にしていた。

まあ引率の先生って言うのは流石に、怪我人にばかり構ってはいられないってことかな。

集合場所には、続々と生徒が集まってくる。

集まった生徒たちは各クラスごとに点呼を取り、学年主任の織斑先生のところに名簿が集められている。

その様子を、見渡しながら観察しているとふと集合場所から見える駐車場に目がとまった。

……あれ？ 車が……。

姉さんの事だから、片腕が使えなくても自分の車に乗って移動するはずだ。

という事は本来駐車場に車はないはずである。

一瞬、旅館の人の車かとも思ったが、それは少し考えにくい。

なぜなら止まっていた車は、白に黒のストライプの走ったダッジ・

チャージャーだったからだ。

いくらなんでも、この車。

和風の旅館にとてもじやないがミスマッチ過ぎる。

……一体誰車だろうか。

「……全員そろったな。よし、静かにしてこちらを向け」とと、気にはなるが今は置いておこう。

こっちの方がとんでもなく大事だ。

「さて、諸連絡はあるがそれは追々バスの中で各担任から話がある。それよりも今この場で諸君らに行っておかなければならん事があるてな」

そう言うと織斑先生の傍らにアタッシュケースを持った一人の女性が現れた。

服装は姉さんの様な青を基調としたサマースーツに綺麗なロングヘアの金髪を後ろで軽く束ね、勢いのある黄金色の瞳をもつ女性だった。

「誰だろう？」

「ローラさん知り合いとか？」

「じゃあ、ローラさんどこよ」

「い、いやそれは分かんないけど……」

「けど、綺麗な人だよな」

突然の美女の登場に一気にざわつくも、織斑先生の咳払い一つで静けさを取り戻すのは流石だと思う。

学園に入学して数カ月、織斑千冬という名の恐怖心は着実に生徒を

蝕んでいた。

それはともかく、あの人……アメリカ人？

「突然だが、ローラ・サウスバードは諸事情により帰国する事となった」

「ええ！？ ローラさん帰っちゃったの!？」

「なんだろうね、事情って……」

「ねえ、アルディ君は何か聞いてない？」

「い、いや、何も……」

すぐ隣にいたクラスメイトの質問を、苦笑交じりに返しながら僕は肩を貸してくれているセシリーを見る。

その視線に気がついたセシリーが、僕に耳元で呟く。

「本当に何も聞いていませんの？」

「本当だって……まさか帰国までしてるとは思わなかった……」

「……あの方は？」

「それも分からない……名前ぐらい分かれば……姉さんとは結構行動を共にしていたからどこかで会っていれば頭の片隅に覚えていそうなものんだけど……」

セシリーとの会話の間織斑先生がその女性の学園での役割を離し終えて、気がつけばその女性の自己紹介に入っていた。

「今、紹介に挙がりました。まあ、見ての通りのアメリカ人。残念

ながらの既婚者で娘が一人」

……なんとなくだけこの人。
結構面倒な臭いがする。

「好きな物は、甘い物。嫌いな物は甘すぎる物。好きな事はドライ
ブで嫌いな事は遠出……そんなちよつとおちやめな私の名前はッ！
！」

女性は声を張り上げビシツと一学年の生徒達に指をさす。

「ブラウニー・フェリップスッ！！」

そして高らかに名乗りを上げると、力強く腕を組んだ。

効果音を付けるとするながら？ババーン？か？ドン！？だろう。
そしてもう一つ、訂正させてほしい。

この人は面倒な人だ。

「ちなみに、私こう見えても元国家代表だったのよ、モンド・グロ
ッソにだって出場してるんですからね」

モンド・グロッソに？

僕を含め、その単語を聞きそして国家代表だったという話を聞けば、
いかに滅茶苦茶な自己紹介をした相手でも凄い人に見えてしまう。

ん？……待てよ。

モンド・グロッソ……アメリカの国家代ひよ……

その時僕の頭にピンと来るものがあった。

そして思わずそれは口に出てしまう。

「ああ、姉さんに予選で負けたあの……」

「え？ アル？」

そうだ、初戦でそう言えばアメリカ同士でつぶし合ったんだ……。うんうんと頷き納得する僕だったがポロっと言った言葉は予想以上に広がっていくもので。

「ローラさんに負けちゃったんだあ……」

「けどまあローラさん世界第二位だし」

「予選落ちかあ……」

「なんか国家代表も……それ聞いちゃうとなあ……」

次々に浴びせられる、白けたコメントの数々。

当然大きな声で言っているわけではないが逆に小声の方が案外相手に与えるダメージは大きい。

「べ、別に……あれは……その……色々と国との掛け合いが……あつて……」

ズバンツと中々派手に名乗りを上げた矢先、思わぬ返答に冷や汗をかきながらブツブツと呟く。

そして最後に？アレがアルディ・サウスバードか？つとボソツと呟くとなんとかブラウニーさんは持ち直した。

まあそれでも終始、冷や汗と額に数本血管がにじみ出ていた事を考えると確実に切れてる事だけは予想できたし、何より僕の名前を呟いたってことは、人物の断定ももう済んでいる。

後で嫌な予感しかしない。

とりあえず僕は怪我人ですとだけは、伝えておく事にしよう。
と、そんな形でブラウニーさんは自己紹介を終えるといよいよそれ
ぞれのバスへ向かう。

「はぁ……なんでこう……」

「まあ、私からも一言添えてはみますが……」

「ひとまずバスに向かおうか」

「そうですね」

短く言葉を交わして、ゆっくりと僕たちはバスへと歩きはじめる。

そしてその時だった。

少し遠目から声をかけられたのは。

「アルデイ。あなたはこっち」

「え？」

声の方向を振り向くと、そこには……。

「うわぁ……意外に早かった……」

ブラウニーさんだった。

ブラウニーさんがチャージャーの横で滅茶苦茶笑顔でこっちに手を
振っていた。

駆けよるブラウニーさんに僕とセシリーは尋ねる。

「これから僕を海に捨てに行くんですか？」

「あ、あのアルはこう見えても怪我人です……」

「それとも、あれで人気のない所に連れて行つて……」
「ほ、骨も何本か……ですから余り手荒なことはああああの……」
「……ええと。とりあえず何が言いたいのかしら？」

キョトンとするブラウニーさんがなんだかとっても印象的だった。

「アツハハハハハツ、……つてそんな事しないわよ！」
「いやでも……あの時最後ボソツと呟いた時はそれはもう凄い目で……」
「……睨まれないと思った？」
「いやすいませんでした」
「……ん、結構」

ざわっ！！

ん？ なんだバスの方が……。

僕達がブラウニーさんと話をしていた時、突然一台のバスの中とその周辺がざわついた。

そしてバスの中から、一人の女性が降りてくる。

その人もブラウニーさんの様な鮮やかな金髪をたたえている。

服はカジュアル全開で胸元の大きく開いた、サマースーツを着ていた。

「……はあ、問題起こさないでって言ったわよね、ナータシャ」
「ナータシャって……ええッ!？」

ナータシャさん!？
どうしてここに……。

「別に、問題なんて起こしてないわ。ちょっと白い騎士ナイトに口づけを
ね」

「それが問題なのよッ!! 馬鹿やってないで乗んなさい!」

「……はいはいつて、アル」

「どうも……ご無沙汰してます……ナータシャさん」

「写真はローラに見せてもらってたけど……大きくなったわねえ」

「いえ、まあ……」

「あの……私がいる事を、お忘れではありませんわよね?」

突然の出来事に、対応しきれないセシリーだったがそろそろ乗り遅れてはと口を挟む。

当然目は安定のジト目だ。

「そうだったね、セシリーこの人は……」

「説明すると長くなるから……とりあえず後ろ乗んなさい……走りながら説明しましょ」

「え、でもバスが……」

「いいの、織斑には許可を取ってあるから。ほら早く」

言われるがままにチャージャーの後部座席にセシリーと一緒に押し込まれるとブラウニーさんは無造作にトランクへ僕たちの荷物を放り込み、バスよりも一足先に旅館を後にする。

そう言えば旅館の人に何も言っていないな……。
僕がその時思ったのそんな事だった。

道中ブラウニーさんは姉さんとの関係、ナターシャさんは僕との関係やそして驚いた事にあの？福音？の操縦者だったということなどを手短かに説明してくれた。

「それで、ブラウニーさん。その？福音？は、どうなるのでしょうか？」

「そうねえ、普通なら……まあコアを抜かれて凍結処理が一般的な流れだけど」

「もう回収は済んでいらっしやるので？」

「一応飛び散った装甲片とかの回収は開始しているみたいね」

暴走を起こしたISはたとえその後安定を取り戻したとしても凍結処理を施される。

具体的にはコアを初期化されて、装甲から取り外され最終的にはパーソナルデータやその他操縦者にかかわる全ての情報を完全にフォーマットされる。

凍結と言っただけはいるが、言っただけは解体のそれに近い。

ブラウニーさんの言葉を聞いてナターシャさんはわずかに組んだ腕をこわばらせる。

「ナターシャさん……」

「仕方ないわ…こればかりは……けど、あの子は私を守ってくれた……最後の最後まで」

「守ってくれた……」

その間隔は僕にも分かる。

いや僕ならなおさらだろう。

僕も？福音戦？ではレイにかなり救われたしね。

「でも……だからこそ私は許さないわ……あの子の好きな空を一番好きな所を奪った……その人物を私は許さない……」

許さない…そう語るナターシャさんの声は、僕が今の今まで聞いた事のないような低く、それでいて激情を押し殺したようなそんな声だった。

「……ナターシャ、あなたそれまさかと思うけどここ以外で誰かに行ってないでしょうね？」

「言ったわ。ブリュンヒルデにね」

「はぁ……全く」

ブラウニーさんはため息交じりに片手でポリポリと頭を搔く。

ブリュンヒルデ……つまり織斑先生に言ったってことか。

「それで、彼女はなんて？」

「無茶するなって言われたわ」

「でしようね。まあ少しは大人しくしてなさいな、悪いようにはしないから」

「……悪いようにはってどついう意味よ？」

「ま、そのままの意味よ、それにあなただつて怪我は大きくないとは言えしてるんでしょ、本国に帰ったら一応検査は受けなさいよ」

本国か…ん、そう言えば。

「ねえ、ブラウニーさん。本国つて言えば姉さんはどうして帰国したんですか？」

「あ、私もそれは気になっていましたわ。ローラさんが急いで帰らねばならないようとは一体…」

「悪いけど、それはちよつと言えないわ。色々あるのよ。アメリカもね」

「けど……」

「でもまあ、一つ言えるのは、世界は動き始めているってことよ…
…私たちが思いもよらないほどの速度でね…」

「……」

その問いにブラウニーさんはサラリと返す。

こつもあつさりとかわされてしまうと、後に続く言葉が無かつた。

一通り話し終えた僕らは、特に誰からも口を開くことなく終始無言だった。

響くのは信号などで止まると聞こえるダツジチャージャーの持つ六リッターという大排気量OHVエンジンの心地のいいロツカーアイムの音と、走り出すと聞こえるアメリカンマッスルカーらしい野太いサウンドだけ。

世界は動き始めている……か。

そんなまだ全然実感なんて無くて、それがどういう意味なのかさえ僕はよくわかっていなかった。

ただ今は、ようやく取り戻した平穩に身を任せて僕は車の後部座席でゆっくりと瞳を閉じる。

世界なんて僕が考えても仕方が無いし、どう動こうとも今の僕にはどうにもできない。

そう、今はただ平穩をただゆっくり抱きしめて僕は静かに眠るだけだった。

「寝ちゃったか……」

「そうみたいね……彼女も」

ナターシャは、後部座席をチラツと見ながら車の振動で自然と寄り添って眠るアルディとセシリアを見て笑う。しかしすぐに表情を険しい物に変え、後部座席の二人に聞こえないように声も落とす。

「それで、真面目にローラをどうしてアメリカに返したの？ もう言っちょ踏み込んで言わせてもらえるならどうしてあの子とローラを引き離すような事を……」

「……言っただでしょ。アメリカにも色々あるのよ……こればかりはね」

そんな事はナターシャにだって分かる。

ブラウニーは肩書こそ？合衆国立代表選定委員会議長？というものだがその実は候補生の選定だけにとどまらずISの技術や開発そしてIS部隊の運用や人事と言った事にまで影響力を持つ非常に重要なポストの人物である。

ナターシャは、このタイミングでブラウニーがローラを怪我人ながらに帰国させた理由を測りかねていた。

ローラは現在研究開発局でアドバイザーをやっている。

確かに怪我人でもアドバイザーは務まるが、だからと言って今別段研究開発局が人員不足だとかというった話を少なくともナターシャは聞いていない。

自分が暴走したISに乗っていた時間は精々一日かそこら。

たったそれだけの時間で急に人員不足に陥るような部署でもない。

更に言えば、ローラが今帰国すれば少なくとも事件にかかわった人物の一人として聴き取りの一つや二つはされるはずだ。

しかしだ。ブラウニーは本国で調査を取るのが面倒だからとわざわざ出張ってきたのだ。

ローラにただ調査を取らせるためだけに帰国させたとも考えにくいしまずあり得ないだろう。

そう考えると少なくともナターシャには、ブラウニーがローラを帰

国させる意図が全く分からなかった。

「ブラウニー……私はこれでも国家代表なのよ？」

「だから？」

「もつと言えばアメリカの国家代表。言ってる意味分かるでしょ」

「……国家代表は、禁則事項を除けば不当な隊の運用等不当と思われる一切の事柄に対して上官またはそれに準ずる者への意見・理由を求める事が出来る……合衆国におけるIS運用及びISに関する人事に関する基本条項第二条十一項……はあ……よく覚えてたわね」

「それはあなたもでしょう？」

「アメリカ合衆国IS運用人事規制法？これが先ほどブラウニーが長々と喋った条例文章の一般的な名称である。」

これは、簡単に言えば上層部の暴走を国家代表が抑えるために制定された法案で、基本条項と言っているものの議会で可決され合衆国憲法にもしっかりと記載されているれっきとした法律である。

この法に則って考えるのであれば、上官とはブラウニーであり国家代表はナターシャ。

そして不当な人事とはローラのアメリカ帰国という事になる。

ここはアメリカでは無いためその法が適応されるわけではないにしろ、その法を知る者としては正当すぎる権利を主張しているナターシャを無下に扱うわけにもいかない。

ブラウニーは、深いため息をつくくとバックミラーで二人がまだ眠っている事を注意深く確認する。

そして渋々と言った表情で口を開いた。

「……ナターシャ。アルデイがドイツの代表候補生に怪我をさせられたことは知ってる？」

「ドイツ……ええまあ。それが何？」

「あの事でアメリカは、騒ぎ立てはしなかったものの水面下でドイツに賠償を求めたのよ」

「賠償ねえ……けど、あの国がそう簡単に頭を縦に振るかしらね」

ドイツは何かとバックグラウンドに怪しい影が見え隠れしており欧州連合の中では、一番警戒されている国の一つでもある。

そんな国が水面下の交渉ごときで簡単に賠償に応じるとは思えない。

「まあね。初めはかなり強気だったわ。こつちが怪我をしたのは確かでも代表候補生じゃなかったって所まで突っ込んできたし」

「そんなところにまで……」

「でもねえ、流石に向こうさんも例のシステムの件の話を切り出したら態度が一変したわ」

例のシステムとはラウラの？ シュヴァルツェア・レーゲン？ に極秘に搭載されていたヴァルキリートレースシステムの事だ。

ラウラの機体に積まれていたそれによって、学園のイベントが中止になったことはナターシャの耳にも届いていた。

V Tシステムは確立されたシステムとは言い難く、搭乗者に尋常ではない負担をかけるシステムであり最悪命も落としかねない代物。

どのタイミングでアメリカがドイツとの賠償交渉に入ったのかは定かではないが、ドイツにとってはそれがしかも各国のスカウトや企業が目を光らせるIS学園のトーナメント会場で発動したことは最

悪のふた文字しかないだろう。

各方面への根回しや情報操作或いは買収……様々な手を使ってようやく沈静化したそのシステムの話をぶり返されてはたまったものではない。

しかも相手は、どこぞの弱小国家では無い。

その気になれば、何をしでかすか分かったもんじゃない大国アメリカである。

「そ、その事を話題にしてからは交渉は本当に円滑だったわ」

「でしょうね……それでドイツから何で賠償してもらったのかしら？」

少なくともアメリカがドイツに金で解決しろなんていうわけがない。それでは本当の意味で？得？にはなりえない。

賠償と言ってはいるがそこには当然損得勘定が入り混じる。

アメリカにとっての本当の得とはこの場合金銭的な物ではないはずだ。

ナターシャの問いに、フフツと笑うとブラウニーはニヤリと笑う。

「それは言えないわ。けど良い物よ」

「良い物……ねえ」

「そう、良い物。そしてそれが手に入ったからこそ、ローラを帰国させたの」

良い物とブラウニーははぐらかすが、ナターシャにはもう既に大体の検討は付いていた。

現アメリカがドイツから手に入れたものなどアレしかないではな

いか。

ナターシャはブラウニーの返答に、何度か小刻みに頷くと話をそこで切り上げ視線をスツと窓の外へ移す。

車はまだ、海岸線付近を走っており丁度反対車線を挟んだその向こうには澄みきった綺麗な海が見える。

気候も穏やかなため海では、レジャーを楽しむ小型船舶も見えた。

本当に穏やかで平和な時間だと思う。

そしてしばらく外を眺めた後ナターシャは、すやすやと眠る二人を見やった。

先ほどと変わらないこちらも穏やかな寝顔。

しかしアルディはもとよりセシリアも、制服で隠されているとはいえその細く白い身体には未だ癒えぬ多くの傷が隠されている。

そう考えると不意に、ナターシャの胸がチクリと痛みだす。

彼らにこれほどの傷や怪我を負わせたのは自分なのだ。

気がつけばナターシャは、グツと拳を握りしめていた。

そんな自分が、彼らの未来を案ずるなど……。

「……大丈夫よ、彼らはそんな事思っても無いし考えても居ない。だからあなたが責任を感じる必要はないわ」

「……ええ……」

「それに……これから彼らを待っているのは、これほど生易しい世

界でもない」

確かにブラウニーの言うとおり彼らはこの先、こんな物など比べ物にならないほど大きな物と対峙し戦い、そして更に選択を迫られていくことになるだろう。

アメリカをはじめとする列強国家はもちろんだが、そこにあのNの開発者五条 叶。そしてあの組織。

……動き出す世界は、余りにも速くそして大きな、うねりとなって彼らを飲み込んでいく。

「そうだった時に……今度はあなたが……ね？」

「けど私はISが」

「だから……悪いようにはしないって言ったでしょ？」

「でも」

「いい加減悪い方向に考えるのやめなさい。大体さつきまでローラの話しててどうしてそっち方面に言っちゃうのかなあ」

「そ、それは！」

思わず声を荒げたナータシヤは、慌てて口を塞ぐ。

そして、後ろの二人がまだ寝ている事を確認するとホッと胸を撫でおろした。

そんなナータシヤを見てブラウニーは、微笑んだ。

「ま、大丈夫よ 大丈夫」

それは寝ている二人のことなのか、はたまた世界のことなのか。

自分から不吉な事を言っておいてとブラウニーを睨みながら、ナタ
ーシャはため息を一つ吐いてシートに座り直す。

チラリと見えた外の景色は相変わらずの平穏な景色。

車はそんな平穏な時間の中をひた走っていくのだった。

「これより？バックスターランカー？点呼を取る！」

……アメリカ

「……この程度だと思っんですけど」

……中国

「フフフツ……アツハツハツハツハアツ……！」

……ドイツ

「アレを落とすまで……私はッ……！」

……ロシア

「さて……そろそろかな？」

今世界は大きく動き始めた

第53話 世界は今……（後書き）

この所不定期で申し訳ありませんでした。

一応ここまでが大きなくくりで一章扱いとなります。

次からは少し、世界の事を掻いたオリジナル物が展開されていってあの生徒カイチヨーやその妹の話などを掻いていく予定にしています。

まだまだ続くのでこれからもよろしくお願いします。
それでは次回お会いしましょう！

アルティ・セシリーの人物考察！その2（前書き）

第一段からの各主要人物の経緯と新キャラクターの紹介です。

アルディ・セシリーの人物考察！その2

「ふう……」

僕は寮の自室で課題をやり終えたため息をつくとき、椅子から立ち上がる。

休日ということもあって、寮に人はまばら。

課題なんて休日まで残しておくものじゃないなと思いつつもやらずに織斑先生の何かしらの？教育的指導？を受けるよりは数万倍マシだ。

そんな事を思いながら、僕は冷蔵庫からコーラを取り出し栓を開ける。

そしてそれを飲もうとしたまさにその時であった。

バンツ！！

「アルウツ！！！！！！」

……この行は前にも見たって……！！

と、言うわけで前回からの人物考察と色々新しく登場した人物をまた紹介していくよ……。

アルディ・サウスバード

一人称 僕

IS学園に所属するIS？ストライク・バーディー？の操縦者。
臨海学校で自分と向き合う機会に恵まれ、これまで自身に欠如気味であった向上心が生まれつつある。

世界で二人目のISを操れる男。

管制人格レイの発現によつてISを起動すると右半身にその人格がアクセスするため瞳の色が右目のみ黄金色に変わる。

誕生日は四月で早生まれのためアメリカカリフォルニア州の法の則りアメリカ国内での自動車の免許を有する。ただし限定免許のため深夜や早朝の運転にはローラが横に乗っていないと運転する事は出来ない。

現在右胸部及び腹部にかけて大けがを負っており、学園に戻っているがIS運用などの激しい運動は禁止されている。

「……生傷耐えませんわね」

「この場合は僕の所為なのかな」

「何とも言えない所がまた……ですわね」

使用IS

ストライク・バーディー・リアクト【REACT : Recover
y Extra loss information Action

n Control for Tactics】改修機における
重要欠損情報の戦術的運用

暴走事件によってローラに大破させられたストライクバーディを改修した機体。

製作、システム構築など大半を志穂音が行った。

志穂音が欠落した情報を再構成し、それでも足りなかった部分を？
ストライク・ミラージュ？の装備や装甲、武装で補っている。

そのため随所にミラージュの物と思われる個所が点在しており、イグニッションブーストや？フェイク・シルエット？などの装備が使用可能となる他ウエポンスクエアも新たに新調され角度調整や展開速度を速めた仕様に置き換えられている。

またオリジナルには無かった、近接武装？ランディング・ホーン？が使用可能である。

福音戦において、福音の攻撃を受け海中に没しガンホークにとりこまれる形で事実上消滅した。

ストライク・バーディ・GUN・HAWK

臨海学校での？暴走？によってローラ・サウスバード駆る？ストライク・ミラージュ？と戦闘。

交戦した結果、ウエポンスクエアの二度にわたる大爆散によって致命的なダメージを受け大破し最後はローラによって完全に破壊されてしまった従来のストライク・バーディは、ローラがあらかじめ設定しておいた仮のファーストシフトの姿であった。

暴走事件の際に外れたローラが施しておいたりミッターと更にギリギリの状態での強い意志の呼び掛けに応じて発言した真のファース

トシフトがこのGUN・HAWKである。

GUN・HAWKとは(Guardian for Heavy
attacking Weapons Keeper)の頭
文字を取った物でここで言うguardianとは機動兵器つまり
ISの事を指す。

本機は初めから軍用ISとして造られた(理由は後に記述する)本機はローラ・サウスバードの意向によつて疑似的なファーストシフトモードを搭載していた。

それは、いくら戦闘能力に長けるISと言つても学園で使用されるIS等是一般的に?モンドグロツソ?等で使用される機体に準じ競技用に分類され搭載火砲やシステムもそれに準拠した物になっている。しかし本機は軍用IS。

機動力を除けば、攻撃力防御力共に実際の作戦任務使用に耐えうる能力を保持している。

形状も大きく変わっており、ウエボンスクエアは身の丈ほどに巨大化し、角ばっていたフォルムは角の取れた流線形になった。

元々大きかった、機体は更にその大きさを増し、装甲に走るスリットにはエネルギーラインが走っている。

同時に筋肉質になった両腕部そして肩部アーマーには星条旗がペイントされている。

ストライク・バーディ・ガンホーク製造経緯

何故ローラ・サウスバードの弟とは言え専用に造られた機体が軍用だったのか。

それには現在のアメリカのIS事情が深くかかわっている。

アメリカは現在、ローラの専用機？ ストライク・ミラージユ？ 等一部の機体を除けば非常に堅牢で大柄なISを多く製造している。

これはアメリカのIS製造政策の一環である？ ヘビーガーディアン構想？ に則る物でそれに伴って？ シルバリオ・ゴスペル？ も造られている。

アメリカで見つかったISを使用できる男子は、本来かなり注目されるべき存在であったがアメリカ国家における最大の汚点（ことIS関係においては）ローラ・サウスバードの弟だったということもあり、アメリカもこの件にかなり慎重に対応した節があった。

だがそれでもISを使用できる男子のデータはこれからのIS開発にとってもそして何よりIS開発後進国であるアメリカにとっては有益なものとなるとの理由からアルデイ専用機を製作する事が決定した。

しかし、決定したとはいえ絶対数の決まっているコアを初期化して新調するのはいかなものかという意見が出され、結局装甲や武装の開発が先に行われコアは最終的にローラの使用していたIS？（元）ストライク・バーデイ？ の物を初期化することで対応している。更にローラは、既述のとおりこの機体をリミッターを付けることを前提で初めから軍用として製造する。

これには、上層部からの無駄なIS製造という意見やそれに伴うプロジェクト自体の消滅と言った圧力を？ 軍用ISとしての製造なのであくまでこれは国家のため？ という理由を付けて封じる狙いがあったと思われる。

「な、なんだかややこしいですわ……………」

「僕って中々に面倒な機体に乗っていたんだねえ……………」

まあいいや次……

ローラ・サウスバード

一人称 あたし

ストライク・バーディ暴走の件で重傷を負った物の福音戦の時には五条叶の助けを借りて前線で箒たちをサポートした。

現在はアメリカの研究開発局への正式配属が決まったためアメリカへ帰国した。

また、ISの操縦以外にもドライビングテクニックが非常に高く愛車であり600馬力オーバートルク77kgというスペックにFRレイアウトのモンスターマシンバイパーSRT-10・ACRをいとも簡単に手なずけている。

使用IS

ストライク・ミラージュ

千葉志穂音によってストライク・バーディ・リアクトの欠損部分を補うために大半が使用されてしまい現段階では使用できない。

「兄弟そろってボロボロ……」

「見る影なしとはこのことですね……」

「それはちよつと違うん出ないかい……？」

一条 聡也

一人称 僕

変電所の事件の際、搭乗機体が入れ替わり？ブラックアウル？に搭乗する。

また、変電所の事件をきっかけにロツソ・ロゼオ両名の思いを知り大きな心境の変化が見て取れる。

使用IS

ブラック・アウル/ナイトシュライク

臨海学校でのテストの際に分かった、搭乗者の感情の起伏やテンションに応じてその機体性能を大きく変化させる特性がある事が分かった。

ナイトシュライクへの発現もそれが関わっている可能性は極めて高い。

ブラックアウルに武装の変更点はないが、ナイトシュライクは大きくその装備が異なっている。

初陣では相手も既にかかりの損傷であったことからその性能の半分も出さずに戦闘が終了してしまった。

ベースはブラックアウルなので大まかなディテールは変わっていないが、バイザーが消え装甲表面が鏡面装甲となりスラスタ―出力の向上に加え4門あつた砲が2門に減らされたことでISに匹敵するほどの機動力を得ている。

また右腕には折りたたみ式のブレード？早贄？が装備される。

この鏡面装甲にはローラのミラージュに搭載されている？ステルスミラージュ？と同様の能力を有している。

「この機体も結局でた割にはその後の活躍がありませんでしたわね」

「こ、これからあるんだよきつと……」

「ですが、ここまで来てもまともにならないというのはいささか……」

「い、いやだから……ね……」

こ、このままだと聡也が自殺しそうだ……早く次に行かないと！

ロツソ・ミオネツテイ／ロゼオ・ミオネツテイ

一人称 あたし（ロゼオ時 私）

元々IS時をロツソがそして座学などの勉強麵をロゼオが担当していたが変電所の件を皮切りに二重人格の同時制御？ハーモニクス？が可能になった。

そのためロゼオの時でもISに搭乗する事が出来るほか搭乗ISのフラグメントマップが二機分構築されるなど、本国イタリヤでも予想していなかった事態が起きている。

またロツソが瞬発的なエネルギー運用に長けロゼオは、長時間安定したエネルギー運用にそれぞれ長けている。

使用IS

ペルフェッド・エスダーテ

機体に大きな変化はなし。

「ロツソか……良かったね」

「わ、私だって……その……」

「え？」

「な、何でもありませんわッ！」
「？」

五条 叶

一人称 私

ひょうひょうとそして掴みどころがなく、究極的な自己中心主義でそれでいて雄弁。

自らの思惑を基本的には外に漏らすことはないが、漏らす時は自分が思う事全てを話す。

利害で物事を考える側面を持ち、一致さえすれば敵ともいとも簡単に手を組むほどの節操のなさも持ち合わせている。

福音戦の後千冬、束らが集まった岬で自らの目指すべき所は世界を元に戻すこと。つまり自らが開発したIS-NでISに完全なる勝利を挙げることに語った。

しかし、それ以外にも何か思惑はあるようだ。

一条 聡也

一人称 僕

変電所の件で搭乗機が入れ替わり？ホワイトアウル？に乗る。

福音戦では、ローラ達を艦に招き入れた叶を静観しながら戦況を見守った。

使用IS-N

ホワイトアウル（強奪改良型）

市街地戦の際に交換の様な形で入れ替わった本機を五条叶がリファインした機体。

特にバツクパツクを大きく変更しており、武装は荷電粒子砲二門と

？ストリートフェザー？という実刃のバタフライブレードが二振り。スラスタは左右計六枚のスラスタフィン内に収められ、展開数に応じてスラスタ開度・機体制御プログラム・空圧制御等を自動で制御しどの機動でも

最も効率のよいエネルギー運用が可能となっている。

スラスタフィンを全展開しスラスタへのバイパスバルブをダイレクト、そして介入を完全にオフにすることで本機が持つ本来の最大機動稼働を行うことが可能であり

その場合は専用の高機動戦専用OS？Sonic (Speeds triking Organization Interface Control)【高機動格闘戦における機体の統合的操縦制御】？が起動する。

基本的に稼働使用限界等は定められていないが、バッテリー駆動の本機の稼働時間を著しく低下させるものであり、長時間使用できる代物では無い。

紫香楽聡華

一人称 あたし

紫香楽家との確執が若干あったが紫燕の改修作業の際に、執事の渥美が間に入ってくれたこともあって解消。

帰郷中には白鶴 理と槍を交えた。

福音戦の前に起きた小規模なアメリカ力所属のIS戦闘に最終盤で介入し聡也を助けている。

福音戦では、出番はなかったが艦内で戦況を見守っていた。

使用IS

紫燕・八岐大蛇

紫香楽誠一郎が造らせた紫煙の特装パッケージ。

基本理論の構築は誠一郎が行っている。

このパッケージの最大の特徴はリバイパスシステム（エネルギー回生システム）？八岐大蛇？にある。

これは紫煙の近接武装である大蛇に、外部エネルギー強制転換システムを組み込んだ物で展開時には大蛇の刃が上下に大きく開きまさしくその姿は蛇が大きく口をあけている姿にそっくりである。

この大蛇の展開した刃の奥にそのエネルギー回生システム通称？リバイパスシステム？が搭載されておりこの刃で相手を捕獲し対象物からシールドエネルギー等を強制的に吸収する。

このエネルギーは吸収した後一時的に大蛇の増設バッテリーに溜められ、中距離の荷電粒子砲としても使用できるほか、柄尻にスライド式のトリガーを持ち

相手を捕獲した状態で大蛇の口金部にあるコネクターに接続させると？リバイパスシステム？下部に取り付けられたパイルバンカーを射出できる。

そのため、大蛇自体は以前の大蛇に比べかなり大型化している。

また八岐大蛇搭載のためOSを大きく書き換えておりインターフェースシステムに新開発のフィジカルトレースを組み込むより細かな動きに対応できるようになっている他、

推力も高められており、バニッシングブーストの射程距離も大幅に伸びている。

「これだけの設定がありながら……」

「使いきれていないって言うか何とと言うか……」

「これは筆者の問題ですわね……」

千葉 志穂音

一人称 ウチ

三人称 あんた

兎束達のグループで、情報処理を担当していた少女。

彼女もまた兎束と同じく両親も身寄りもない孤児である。

裾の長いタンクトップを一枚羽織って腰辺りには黒いポーチを巻き、やや大きめの靴を履き茶色い髪をえんじ色バンドで束ね。

目はやる気なく半眼で、いつも口には金太郎飴をくわえている。

情報処理担当ながら、ISの知識も独学でそれなりに学んでいるようにうで

設計図があったとはいえ、IS用の武装をたった一人でデータ構築できるほどの技術を持っている。

普段は兎束達自警団の住まいであるプレハブ小屋の地下にある蒸し暑い部屋にこもりながら

日々PCをにらめっこしていた。

今後はIS学園に入学する事が内定している。

レイ

一人称 ボク

三人称 君

アルデイが真っ白い世界であった少し小さいブロンド髪の少女。

服装は青いパーカーにオレンジのラインが入ったジーパンを履きサングラスをかけている。

とにかく底抜けに明るい性格で、所々アルディに似たような性格を持ち合わせている。

アルディがトランスしたときに、彼の前に現れて彼に答えを問うた。臨海学校での模擬戦闘で初めてアルディの身体を使用して表面化アクセスし、旅館の一角を破壊して？暴走？ローラを名ざしで指名し、渋るローラに見せしめとして学園の教師乗るISを一機一瞬で吹き飛ばすなど目的のためなら手段を選ばないところもある。

昔から、声をかけ続けていたのに誰にも気づかれずようやく気が付いてくれたローラも彼女の事を心のどこかで気味悪がっていたことからずっと1人で、どうにかして自分の確固たる存在を手に入れたという彼女の内情をトランス状態で知ったアルディの手によって強制解放され、

以後はISの起動時のみアルディの右半身へ表面化アクセスして近接戦闘を受け持っている。

口癖は「〜するよ、〜ちゃうよ〜（行くよ〜、行っちゃちゃうよ〜!的な感じ）」

「ふむ、レイね……ってうわッ!?!」

「アル!?!」

「やっほ〜ですわ姉ちゃん」

「で、ですわ…姉ちゃんじゃないですわ!?!」

「ですわですわ?」

「ですわでは?」

「セシリーも混乱しない!」

白鶴理しらづり

一人称 私

三人称 あなた

IS学園風紀委員の委員長で、校則には聡華以上に厳しい。しかし性格は非常に温厚で、アルデイと同じく楽しいことには目が無い。

最近のマイブームはロツソの恋路観察である。

長い黒髪をさらりと流し、優しそうな柔和な目元を持つ。

IS学園最強の座が生徒会長ならば、無敵の座は風紀委員長と言われるほどの実力の持ち主であるが

代表候補生ではないため、専用機は持つておらず打鉄とラファール・リヴァイヴの専用セッティングデータを持ち起動するたびにそのISデータをインストールしている。

「あ、そう言えばさ。今度新しくレゾナンスにもう一個映画館が出来るらしいよ」

「え！？ それは……その私と……」

「セシリー映画に興味あるんだ。じゃあ今度行ったら話聞かせてよ」

「え、あ……いえそれは……はい……（シヨボーン）」

ガッ！！

「は〜い……アルデイ君、校則違反〜」

「え？ え！？ なんぞなんで!？」

「女の子の心をもてあそんではいけません」

「いやそりゃ駄目でしょうけど、そんな校則あったんですか!？」

ブラウニー・フェリップス

一人称 私

三人称 あなた

アメリカIS国家代表選定評議委員長。元アメリカ代表。既婚者で夫はアメリカIS国家代表選定評議員のライオネル。自身もモンド・グロツソに出場した事があるが結果は予選落ちだった。

ちなみにその予選落ちという成績は出場したアメリカ勢では唯一であったため不名誉という事で名前を思い出される事が多い。

とはいえ決して実力が低いというわけではなく、予選で闘った相手と同じアメリカのローラだったということも理由の1つ。

当然ながらローラとも面識がある。

IS委員会とは違いアメリカの独立した議会で、本部はカリフォルニアにある。

深青のロングヘアを後ろで束ねと綺麗な黄金色の瞳を持つ大人の雰囲気を持つ女性。

一見するとローラのように飄々とした喋り方だがその実非常に責任感の強い性格で、思慮深く慎重で自分の立場に責任を以って当たらねばならないと考えている。

愛車はダッジチャージャー。

ライオネル・フェリップス

一人称 私

三人称 あなた・君

アメリカIS国家代表選定評議員。ローラを見出した鋭い眼力を持つ男性でブラウニーの夫。

女尊男卑の世界で男の立場が弱まる中でも丁寧な口調だが臆することない物言いで妻であるブラウニーも認めている。

アフリカ系アメリカンでありアメリカ黒人。

議員とは言う物のローラやそのにも様に優秀な操縦者を選び出した

理由から次期代表候補生の選定を一任されている。

この筋では長くアメリカの現状をよく理解しており、擁立が急務であるということは分かっているのだが

ブラウニーら議会の決定にはことごとく反対しており、ケンカこそしないがブラウニーも理解しながら手を焼いている。

「この人たちがどう絡んでくるかだねえ」

「ですわね。注意するに越したことはありませんわ」

「やっぱりですわですわ言っただけじゃ……」

「ってまだいましたの！！」

……と今回はこんな感じ？

と僕はセシリーに目で確認する。

セシリーは手に持っていた、チェインメールに目を通す。

「ええと……そうですわね。後はこれを誰かに手渡すだけですわ！」

うん……悪戯なんだろうけど前回の事もあるしなあ……

僕はとりあえずセシリーからチェインメール文章を受け取るとドアを開ける。

そこには丁度上手い具合に通りがかった鈴がいた。

まあ通りかかったというか。

「ちょっとアルディ。いきなり呼び出して何の用よ、あたしだっ

て忙しんだからね!」

セシリーが部屋の扉をバンツと開けた瞬間に手早くPCから鈴にメールを送っただけなんだけど。

僕は持っていた髪を鈴に手渡す。

「はいこれ、あげる」

「ん? 何よこれ」

「読めばわかるよ。じゃねツ!」

バタンツ!!

「あ、ちょツちょっと……なんなのよもつ……」

ピラッ……

「ってこれ何よ本当にもう!」

グシャグシャポイツ!!

「ちょっとアルディ開けなさい!! どういうことこれ!」?

「おい……」

「呼び出しとしてチェーンメール渡すとか何、最近流行ってるのこつ言つ手法」

「おいッ……!」

「うっさいわねえ、今あたしが話しして……るん……じゃ……ないの……」

「教育的指導だ……ちょっと来い」

鈴……「」愁傷さま……。

当然この後僕は鈴にアリーナでタコ殴りに遭いましたとぞ。

チャンチャン

アルディ・セシリーの人物考察！その2（後書き）

一応各キャラクターごとにまとめておきました。

今後増える予定なのでその都度更新してまいります。

く動きだす世界 アメリカ合衆国：頂点に立つ者たち part1 (前書き)

オリジナルで語られる(今まで何回あったか分からない)アメリカ合衆国編。

登場人物のレイナは今後学園とも関わっていきます。

〈動きだす世界 アメリカ合衆国：頂点に立つ者たち part1〉

アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル島。

ここに、アメリカ軍が拠点と位置付ける重要な空軍基地が存在する。
ヒツカム空軍基地。

ホノルル国際空港と滑走路を共有しているこの空軍基地はアメリカ本土とアジアを結ぶ太平洋航空路の結節点に存在しており、アメリカ空軍にとっては非常に重要な空軍基地の一つである。

そしてその空軍基地に、アメリカIS軍最強と謳われる？アクロバットチーム？が配備されている事はホノルルのちょっとした観光名物になっている。

本来ターミナルビルの陰になって軍の施設は見えないのだが、そのチーム専用のハンガーがターミナルビルの相向かいに増設されたため、そのチームの訓練風景は存外簡単に見る事が出来る。

そのアメリカIS軍最強の？アクロバットチーム？の名前は、？第五五五戦技航空隊？
コールサイン？バックスターランカー？

専用スペックのアラクネを駆る世界でも類を見ないISのアクロバットチームである。

使用機体であるアラクネは、通称？スタースペック？と呼ばれる専用チューンを施した？バツクスターランカー？の専用機。

アラクネは本来八基の独立したPICによって複雑な機動を取る事が可能なISだがスタースペックでは、何より？速さ？を主眼に置いているため八基のPICはむしろ高速飛行時には邪魔になるため取り外されており代わりに、背面にある八本の脚部は大きな二対のスラスターフィンが覆っている。

あのドイツの？シュヴァルツエア・ハーゼ？をしのぐ六機のアラクネが配備されており、発足当初は戦力過多が疑問視されたが？通常時？は装備を外し丸腰で飛行する事を条件に配備が許されている。しかしアクロバットチームとしての露出度を考えると、エアショー等はその技術力を見せる格好の場であるためこの議論はほとんどあつてないようなものとなつているのが現状であつた。

このチームに配属されるのは、誰もが認める優秀なパイロット達。

しかしそのため曲者ぞろいで一筋縄ではいかない連中ばかりである。

そしてそれがメンバーならまだいいのだが……。

「……………」

ブラウンのセミロングヘヤーがホルルの太陽と風を受けてなびききらめく。

整ったプロポーションの上に着用するのは実技訓練用のための上下鮮やかな青色を基調としたトレーニングウェア。

遠目から見ても、見られる容姿を持っている彼女だが、顔だけは笑っていないかった。

立ち姿も腕を組み、足をいらつき気味にタンタンと鳴らしていた。

「……………」

そこへ、チームメンバーであろう一人の女子が駆けよる。

「あの……………」

「……………言いたい事はあるでしょうが、一つだけ聞かせてくれる？」

「はい……………」

「どうして誰も居ないのかしら？」

「お昼だからです」

「この私が、着替えてハンガー前にいるのにな？」

「いや……………それは」

厳しい口調で女性に責め立てられる女子。

しかしその女子は、萎縮するどころかむしろどこか返答に面倒くささを感じられる応対だった。

「ねえ、私スターでしょ？」

「……………ええはい……………」

「スターって言うのは、アレよね。無視できない存在よね？」

「……………それはまあ……………」

「じゃあ、なんで誰も居ないのかしら？」

「お昼だからです」

「それはさっきも聞いたわ。じゃあなぜ私はこうして着替えて立っているの？」

いい加減答えるのが面倒になってきたなど、女子が考えていた時ハンガーの横にあるコントロールセンターの窓が開き声が聞こえた。

「たいちよー……お昼食べないんですか？」

隊長などと言っているが、声や言い方は全く持って敬意が感じられない。

その声に女性は素早く反応すると、声の主を睨みつけた。

「もう食べたわ、あなた達が遅いんでしょう？」

「逆、たいちよーが早いですよ。あんまり早食いだと太っちゃいますよ」

「レイナッ！」

「そ、そんなにマジで怒らなくても良いじゃないですか」

レイナと呼ばれた少女は、綺麗なブロンドの髪を風に流しながら活発そうなオレンジ色の瞳をゆがませて思わずたじろぐ。

睨んだ女性の名はリスティ・バーデン。

？バックスターランカー？隊長にしてこのメンバーの中で一番の曲者である。

そして、先ほど睨まれた少女はレイナ・フェリップス。

あのブラウニー・フェリップスの娘であり、このメンバーの中ではそこそこまともな部類に入る。

……ちよつと上官に対する話し方や接し方に問題はあるだろうが。

「まあ、いいわ……十分だけ待ちましょう。私はスターなのだから

寛大であらねば」

「はいはい……」

「何よ」

「なんでもないですよ」

結局レイナ達がリスティの前に整列したのは三十分後だった。

二十分も遅れた挙句誰も悪びれる様子のないメンバーに対してリスティは青筋を浮かべながらも未だなんとかこらえていた。

「ま、まあ私は寛大ですから……に、二十分程度の遅れに腹を立てる……ほど……ッ」

「すれすれですね」

「誰のせいよッ……!」

「そもそも、隊長が早く準備し過ぎるからこんなことになってるんですよ……」

「なんッ……!」

「ああ、ほらほら……隊長もレイナもいい加減に……」

このままでは果てなく言いあいが続きそうだったので見かねて他のメンバーが仲介に入る。
リスティはフンッと鼻を鳴らすと、未だ苛立ちをはらんだ声ながら号令をかける。

「整列ッ!」

ザッ!!

号令と共に、先ほどまでのどこか和やかな空気が一変する。リステイを除く五名のメンバーが、横一列に並び敬礼。その後すぐに待機姿勢を取る。

レイナも命に従い、待機姿勢を取っている。

リステイはその様子を頷きながら見やると、頭を切り替え少し口調を改めた。

「さて、知つての通り。今度日本のIS学園で行われる学園祭にセレモニーフライトとして我々？バックスターランカー？が飛ぶ事になったわ」

「単独で……で、ありますか？」

メンバーの問いにリステイは静かに首を横に振る。

「いえ、アメリカ軍のアクロバットチーム？エアロスター？との共同演技になる予定よ」
シンクライト

ここで言うアクロバットチームとは、ISではなく戦闘機を使用した従来のアクロバットチームの事である。

従来と言っても、？エアロスター？は世界のアクロバットチームの中でも特に機体を密集させた演技を得意としており、完成度も高い。

「？エアロスター？かあ……戦闘機の後ろ飛ぶのどうも苦手なんだよなあ……」

レイナはボソツとごちる。

いくらISでも熱や風の影響を受けずに飛ぶというのは不可能だ。

特に戦闘機の真後ろともなれば、バーナーの熱は来るし、戦闘機が割きゆく風が容赦なくISの挙動を乱す。

「しかし、いくら共同と言っても見せ場を作れるかどうかは各チームの能力にかかっている事は明らか。ISだから戦闘機だからという考えは捨てなさい。何事にも全力で。それが私たちよ」

そこまで言うとりステイは、前にゆつくりと移動すると右から左へそして左から右へメンバーの顔を見てから声を張り上げた。

「What we should do?! (我々のなすべきことは?!)」

「Show the dignity as the opponent all sky!! (全ての空で頂点たる威厳を示す!!)」

「Okay, let's ……」

「Fly!!!」

これはチームの掛け声の様なもので、訓練前には必ず復唱される。そしてその復唱が終わるといよいよ訓練開始である。

ランニングストレッツチなどで身体をほぐし、ハンガー内に入って各人各々の機体のチェックに入る。

「はぁ、にしても……」

レイナは自分の機体の前でため息をつく。

機体は？バックスターランカー？の統一機？アラクネスタースペックver？？

本来の色は黄色と黒だがこの機体はアメリカ国旗をモチーフとしていて、メインカラーは白。

そこに赤と青のラインが背部スラスターフインに走っている。

更に腕部にはアメリカ軍所属であることと、バックスターランカー所属の二つを現すデフォルメされた星のキャラクターがマシンガンを構えているチームマークが描かれていた。

その、ため息に気がついた隣のチームメイトが機体をセッティングしながら話しかける。

「何ため息ついてるのレイナ？」

「いやね……また後で合流かと思うとさ。意外に難しいんだよね」

「あぁ、ギターソロの話ね」

レイナは、エレキギターをやっている。

趣味で始めたものだが思いのほか周囲の受けがよく続けていたところ、気がつけばエアショーなどでのBGM生演奏等に担ぎ出されるまでになっていた。

レイナの機体にはスラスターフインの翼端に黒で？6？とペイント

されている。

これはレイナの機体が？六番機？である事を示している。

バックスタランカーは基本的には、チームフライトで魅せるチームだが五番機と六番機だけはソロフライトを受け持っているため単独飛行が多い。

レイナはエアショーの前座や色々なイベントでギターセッションをする事があるため遅れてチームのショーに合流する事が多いためにソロフライトナンバーが割り当てられているのだ。

しかしこれが中々難しい物で、別段操縦技術に問題はないのだがいかんせんレイナと他のチームメンバーの温度差が思いのほか大きい時がある。

そのためにレイナは毎回演技がズレないようにテンションをコントロールする必要があるため実際のところ遅れて合流する事はあまり好きでは無かった。

「どうもなあ……」

「そんなんだつたらギターソロ辞めればいいじゃない？」

「それは嫌なんだよね」

「面倒な性格ね」

「隊長ほごじゃないと思うけど」

「それはまあ……」

隊長を引き合いに出せば大抵のメンバーの性格など面倒にもならない。

チームメイトの反応を横目で見つっレイナはもう一度深くため息を吐くと、レイナは懐から雑誌の切り抜きを取り出した。

そしてその雑誌の切り抜き二写されている人物をジッと見てから、先ほどよりいくばか良い表情で？スタースペック？を起動させた。

「どっぴいっことなの？」

「…そう言う事です」

ローラは機長の話を聞いて啞然とした。

ローラはブラウニー達がアメリカから乗ってきた小型チャーター機に搭乗していた。

そして給油も済ませ空港から飛び立ったはずなのに、何の手違いか。

「だいたい、ホノルル国際空港までが……ビンゴかと……」

ビンゴ航空機や戦闘機用語で、丁度その空港や基地までたどり着ける最低残量の事を指す。

つまり、この機は一度ホノルルで給油しないとカリフォルニアには到着できないという事である。

「計器は確認したんでしょう？」

「あーいや……実は……」

「給油出来なかった!？」

「その、空港のフューエルタンクやなんか全部出払ってまして…
…そしたらローラさんが来たもんですから待たせるわけにもいかず
…そのまま…」

この返答にはため息しか出なかったが、このまま墜落するよりはましである。

ローラは分かったわと頭を押さえながら操縦室から出ると、シートにドサツと腰を下ろした。

しかし余りに乱暴に座ったために折れた左腕に響いてしまう。

「いッ……」

鋭い痛みのお後に続く鈍痛が、ローラの顔をゆがませる。

いや左腕だけでは無い。今のローラはまさに満身創痍であった。

「全く、何やってんだか…」

ボソツと自嘲気味に言うと、ローラは窓の外を見やる。

何処までも続く青い空。

今日は雲も無く真下にはウルトラマリンの深い蒼色をした海が広がっていた。

ローラを乗せたチャーター機はもう間もなく、ホノルル国際空港に到着する。

「全機ターンスリーからの入りが甘いのと五番六番の？D・P・L
？が遅いわ…もう一度！」

大空にリスティの声が響き、他の五機が空を舞う。

この訓練もあえてさほど高い高度で行わない。

これは、？訓練も含めて全てを魅せる？というリスティの考えに基
づくもので？バックスターランカー？がホノルルの観光名物たるゆ
えんでもある。

リスティの指示通りにトリコロールカラーの機体が飛ぶ。

レイナは五番機とソロフライの目玉の一つでもある五番機との連携
飛行？D・P・L？正式名称？ダブル・ポイントド・ループ？の
最中であつた。

？D・P・L？は、その前の高速飛行の二機による背面交差？スラ
ストエッジ？からの連続技で二機の重なるポイントを合わせなけれ
ばならない。

ループとあるように、？スラストエッジ？の後？バーティカルピツ
チ？で機体を引き上げそこからループに入り半円を描いたところで
二機が重ならなければならないのだが、それがどうもうまくいかな
いのだ。

いや実際素人目から見れば完璧なのだがリスティは厳しかった。

しかしリスティもただ厳しいというわけではない。

このメンバーならば出来るはずであるという確信のものと厳しさで

あり指摘であった。

更にリステイは同時進行で他のメンバーたちにも指示を出していく。

「違う！ 本番じゃそこはカラスモークを焚くのよ！？ 綺麗な円じゃないと見つともないでしょう？」

「トレイルからデルタへの移行が逆に早すぎる。もう少し余裕を持つて！」

「？コークスクリュー？は終盤の肝になるからもつと自由にそして大胆に演技をしなさい！」

鋭くそれでいて澄んだ声が、風を切る轟音の中を飛ぶ各機体の操縦者達にしっかりと届き、そしてそれを各自しっかりと修正していく。そうして数時間の訓練で、どうにかリステイが及第点と思えるぐらいにはなつたらしく、ハンガーへの帰投指示を出した時には、何度か頭を縦に振っていた。

「全く……充分円だったでしょつての」

レイナは、ブツブツとつぶやきながら機体のチェックに入る。

？バックスターランカー？はただ飛ぶだけでは無い。

専属のメカニックはいるが、基本的に自分たちの機体は自分たちで

整備する。

「バックスターランカー？の機体は一度のショーで、一〜二か月分の^{ストレス}の負荷が機体にかかると言われている。

そしてそれは、訓練でも同様でむしろ同じマニューバを繰り返し集中して行うために訓練後の整備の方が重要なのだ。

何処の部分に負荷が掛かっているから次はこう言う飛び方をしなければいけないという事をパイロット自身整備しながら学ぶ。

飽くなき向上心が、チーム全体のレベルを引き上げそれが世界の頂点足る威厳に変わっていくのだ。

「まあ、厳しいのはいつものことだしね〜」

「ってかさ、何とも思わないわけ？」

隣で作業するチームメイトにレイナは機体のスラスタ―ハッチを開けて顔を突っ込みながら言う。

機体は番号順にハンガーに収められるため、隣は五番機。

「ついさつき空で、共に？D・P・L？の事で散々駄目だしを食らった人物である。」

「何ともって？」

「いやだから、あそこまでポロポロに言われてさあ…。」

「まあ、出来てないのは私たちじゃん？ 私は何とも思わないかな

あ

「うう〜…あなたのその気の長さすこし分けてほしいわ」

「文句ばかり言わないの、そんなんじゃ目標には届かないよ？」

レイナはチームメイトの言葉に、声を詰まらせる。
そしてゆっくりとハッチから顔を出すと、雑誌の切り抜きを取り出した。

「あ、まだ持ってたんだそれ」

「あんたが言ったんでしようが、目標に届かないってさ。……だから気になって…見てんじゃん」

そこに写っているのはレイナにとって、尊敬い目標としている偉大な一人の女性。

その人物は、アメリカではさほど評判は良くない。
しかしレイナにとってはそんな事は関係なかった。

……はあ〜一度でいいから会ってみたいなあ…

レイナが抱く思いはアイドルに憧れるファンの真理そのものである。
実際にレイナはその人物に一度も会った事が無い。
映像ではそれこそDVDがすりきれるほど見たが。

しかしいくら映像で何度も何度も見てもそれは映像でしかなく、そこから伝わってくるのはただ凄い人物だという事だけで全てでは無いのだ。

レイナは先ほどまでの小言は何処へやら。その写真の人物に思いを
はせ、ほうつと息を吐く。

出来るならばばらくずうつとこれを眺めていたい。

しかしレイナのそんな思いとは裏腹に、ハンガーをスクランブルアラートが駆け巡った。

スクランブルアラートの内容は

？燃料切れ小型ジェット機の緊急救助？

緊急事態なのだろうが、このタイミングでやらかしてくれた事にレイナはブチ切れ寸前のままハッチを閉め機体に乗りにこんだ。

「ホノルルまでは耐^もつって言わなかった？」

「言いました」

「なら何故この機体は今現在滑空を続けてるのかしら？」

「ちゃんとエンジンは動いてますよ？」

「ならとんでもなく静かなエンジンね、騒音問題もこれで解決するんじゃない？ 沖繩のアメリカ軍用機に搭載する事をお勧めするわ」

「……あの機長、ローラさん……そんな事言ってる場合じゃ……」

副操縦士だけがまともなこの状況。

明らかに機長の人選ミスと思っているのはローラだけではあるまい。良い方をすればこの状況下で焦り一つ見せないのだから、肝は座っているのだろうが悪く言えばただの大馬鹿物である。

「で、このまま滑空したら空港まで届くのかしら？」

「あともう一步ですね」

「あら、それは惜しい……って届かないのツ！？」

「ええ、多分あの……空港手前の海にポチャンかと」

「ぽ、ポチャ……あ、あなたねえツ！？ ポチャンじゃなくてバンツよバンツ……！」

いや、そこはどうでも良いだろうと突っ込みたくなつた副操縦士だったが、彼が声を挙げたのは別の事であった。

コックピットのフロントスクリーンからトリコロールカラーをまとつた機体を確認したからである。

「機長あれ！」

「ああ、良かった助かりますよ」

「何処までもものん気な……ってIS？」

「ええ、ヒツカム空軍基地所属のISですね、聞いたことありません？ バックスターランカー？って」

「あれが……」

実際に見るのは初めてだが、ローラもその名前ぐらいは聞いた事があつた。

機体の窓から確認できるのは全部で六機。

その中のリーダーと思われる機体の指示で残りの機体が動きしばらくすると、機体の落下感が無くなる。

そしてゆっくりと丁寧に、機体はホノルル空港のエプロンへと降ろ

されていった。

「つまり、十分な燃料補給をしないまま？」

「まあそう言う事になります」

「……墜落してたらどう責任を？」

「面目次第もございません……」

リステイは、機長にきつく灸を据えている。

それを横目で見ながらレイナは、一応機体の中を見て回る。

「乗ってたのは、あの機長と副操縦士、んでもって全身怪我だらけのお姉さんか……」

レイナは別段問題がない事を確認して機内から外に出ると、その全身怪我だらけの女性に声をかけた。

「ちょっと、すみませんね。いちお、身分証何か持ってます？」

「あら、身分証？……ええっと……」

「ないんですか？」

レイナは訝しげに尋ねると、女性は自由がきく右手で一通り服のポケットを漁る。

……はあ、全く……身分証ぐらい肌身離さず持ってたよ……。

ため息を吐くレイナに女性はようやく身分証のありかを思い出したように苦笑気味に言った。

「多分、機内の鞆の中だね。ほらシートに置いてあったでしょボストンバッグが。その外側のポケットの中ね。多分ウォレットに入ってると思うわ」

「外側のポケットですね……ちょっと待っててください」

もうッ！

レイナは一応体裁よく対応したが正直心の中は、腹が立ってしょうがない。

大体何なのだこの女性は。

どうせ碌でもない人物に決まっている。

変な事をして、あんな全身怪我だらけになったのだ。

きつとそつだ。

レイナは機内に入り、シートの上に置かれていたボストンバッグを探る。

そして、女性が言っていた通り外側のポケットから黒い落ち着いた感じのウォレットを見つけた。

さてさて。

どんな人物か。

おや、アメリカ軍の関係者？ ラッキー民間人よりは報告書も書き

やすいし話も進みやす

って………え？

レイナが手にしたその身分証そこにあつた名前は

ローラ・サウスバード

それはレイナが最も尊敬し憧れたIS操縦者の名前だった。

あら、どうしたのかしら。

あの子身分証取りに行くだけで随分時間掛かっているような気がするけど……。

それに……これが…

ローラは、近くで駐機されているトリコロールカラーのISに近づく。

その機体には英数字の六が翼に書かれている。
さつき、自分に質問をして来た少女の機体だ。

……ベースは？アラクネ？ね…。

背部は原形をとどめていないけど、前面装甲やなんかはそのままか。
脚部スラストも増設されてる随分と機動力の高い機体に仕上がっ

ているみたいね。

と、ローラがおもむろに機体に触れようとした時、鋭い声が飛んだ。

「そこ、何してるのツ！ 機体に勝手に触れないで！」

「おっと」

「物珍しいのは分かるわ、けれど民間人のあなたにそれに触れてもらうわけにはいきませんツ」

ローラはその声に驚いて、スツと手を引っ込める。

そして、声を荒げて自分の前に近づいてくる女性に目をやった。

「ごめんなさいね？」

「気を付けてください、ほらあちらで大人しく」

と女性がローラを誘導した時だった。

機内からあの少女が何かに弾かれたように飛び出して来た。

その手には自分に身分証が握られている。

「ちよ、ちよっと待って、隊長！！」

「あなたが隊長さん？」

「ああもう次から次へと、何よもうレイナツ！」

「そ、そそそそそツ」

「そ？」

少女は何か興奮しているみたいで上手く口が回らないらしい。

その事は少女も自覚しているらしく、震える手で？隊長？に身分証を手渡した。

「なツ！？本当に？」

(コクコクコクッ)

「そう言えば……あの顔どこかだと思っていたけど……」

小声で二、三言葉を交わし、？隊長？と少女がこちらに向き直る。事態を知るのはこの二名のみ。

先ほどの少女の慌て用に他のメンバーも、何かと集まってきた。

そして？隊長？が先ほどとは打って変わって少し緊張をはらんだ声で口を開いた。

「……ローラ・サウスバード？」

「ええ……まあそうだけど……」

「……ええッ！？」

？隊長？の自分を見る目が一瞬細まり、少女は言葉を失いそしてその周りが驚きの声を上げる。

そんな一同を、ただただローラはキョトンとした顔で見つめ返す。

そして、余りの出来事に思わず

「あの……何？」

と、こぼした。

明けましておめでとございます。

今更言う事でもないんですが、この小説はオリジナル成分を多分に含みます。

どんどんお気に入り数が減っているのもその所為なような気がしてなりません(汗)

まあですが、見てくださっている方々のためにも、頑張っ今年も書いていく所存でございます。

今年もよろしく願います。
では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7556r/>

IS インフィニット・ストラトス～偽りの翼～

2012年1月6日03時46分発行